下月隈C遺跡
Ⅳ

―福岡空港周辺整備工事に伴う
下月隈C遺跡第5次発掘調査報告―

福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第795集

―本文編―

2004
福岡市教育委員会

SHIMOTSUKIGUMA

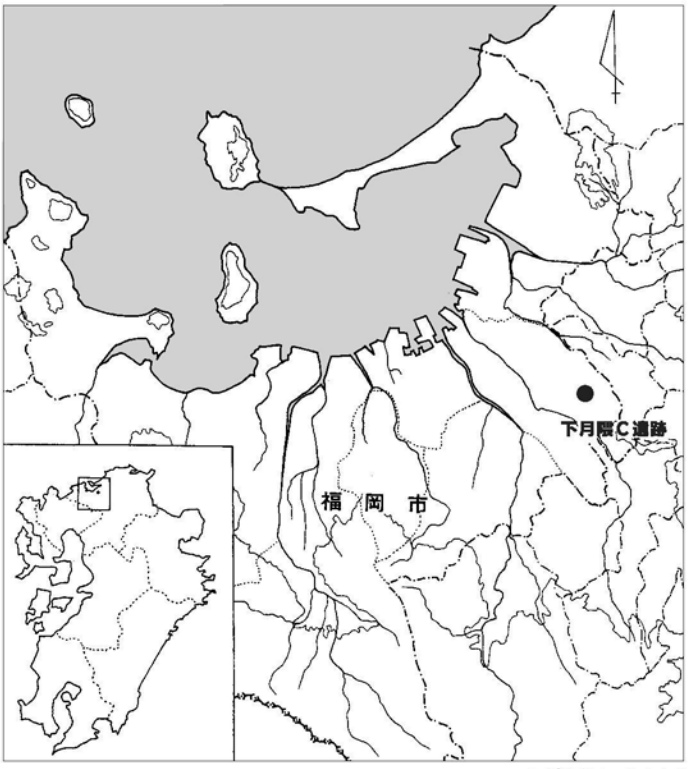
下月隈C遺跡

Ⅳ

― 福岡空港周辺整備工事に伴う 下月隈C遺跡第5次発掘調査報告―

福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第795集

―本 文 編―



調査番号　9922
調査略号　SHC-5

平成16年

福岡市教育委員会

序

福岡市は、まちづくりの目標のひとつに「海と歴史を抱いた文化の都市」を掲げ、実現を目指しております。本市は原始より大陸文化流入の門戸として栄え、市内に多くの埋蔵文化財が残っています。このため、先人たちの足跡である埋蔵文化財の保護に努めております。

今回報告いたしますのは、福岡空港南側に空港周辺整備施設である調節池を建設するのに先立って発掘調査を実施した2年度の調査記録です。

今後、本書および調査資料が学術研究だけにとどまらず、市民各位の埋蔵文化財に対する認識を深めるために寄与することを深く願うものです。

最後になりましたが、発掘調査にあたり全面的にご協力いただいた国土交通省九州地方整備局博多港湾・空港整備事務所および大阪航空局福岡空港事務所をはじめ、御支援と御指導をいただいた関係各位に対し深く感謝いたします。

平成16年3月31日

福岡市教育委員会
教育長　生田征生

凡　　例

1．本書は福岡市教育委員会が博多区月隈４丁目地内の月隈調節池工事予定地内において、1999年度（平成11年度）に実施した下月隈C遺跡第５次調査の発掘調査報告書である。

2．本書における調査の細目は次のとおりである。

3．遺構実測図に付した座標値は平面直角座標形第Ⅱ座標系による座標値である。方位は磁北で、真北に対して６°39′西偏する。

4．本書では遺構ごとに一連の遺構番号を付け、番号の前にＳＡ（柵・塀）、ＳＤ（溝・河川）、ＳＥ（井戸）、ＳＸ（その他）などの遺構の性格を示す分類記号を付した。

5．本書の執筆は下記のとおりである。

Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ－１・２－(1)・(3)，Ⅶ……瀧本正志
Ⅳ－２－(2)……吉留秀敏
Ⅳ－２－(4)……山口譲治
Ⅴ－１……株式会社 古環境研究所
Ⅴ－２……パリノ・サーベ 株式会社
Ⅴ－３……株式会社 パレヲ・ラボ
Ⅵ……宮本長二郎

6．遺物実測は大半を財団法人元興寺文化財研究所に委託し、成果品の一部を本書で使用した。

7．各種分析については、樹種同定を（株）古環境研究所、土壌分析・花粉・植物珪酸体をパリノ・サーベ（株）、放射性炭素年代測定を（株）パレヲ・ラボに委託し、分析結果については第Ⅴ章に収録した。

8．本書では、遺構・遺物の撮影は瀧本正志、遺構・遺物の実測は犬丸陽子、上野裕子、中村智子、高木誠、春田城二、山口穣治、山野祥子、瀧本、トレースは末次由紀恵、長浦芙美子、山口朱美、上野、中村、山野、拓影採拓は持原良子がおこなった。

9．本書編集は瀧本正志が担当し、中間千衣子の協力を受けた。

10．発掘調査に係る遺物・記録類のすべては、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵されている。

調査次数	調査番号	遺跡略号	調　査　地	面　積	調　査　期　間
５次	9922	SHC－5	博多区月隈４丁目	10,000㎡	1999.4.6～2000.3.25

本　文　目　次

第Ⅰ章　はじめに …… 1
1．調査に至る経過 …… 1
2．調査の組織 …… 2

第Ⅱ章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 4
1．遺跡の位置と立地 …… 4
2．遺跡の歴史的環境 …… 4

第Ⅲ章　調査の記録 …… 8
1．試掘調査と第４次調査の概要 …… 8
2．調査の概要と経過 …… 9

第Ⅳ章　遺構と遺物 …… 10
1．遺　構 …… 10
（1）第１遺構検出面 …… 10
（2）第２遺構検出面 …… 18
（3）第３遺構検出面 …… 20
（4）第４遺構検出面 …… 28
（5）第５遺構検出面 …… 34
2．遺　物 …… 42
（1）土器・陶磁器・土製品 …… 42
（2）石器・石製品 …… 86
（3）金属製品 …… 112
（4）木製品・建築部材 …… 113

第Ⅴ章　自然化学分析 …… 145
1．樹種同定 …… 145
2．土壌分析（花粉） …… 157
3．土壌分析（植物珪酸体） …… 168
4．土壌分析（大型植物化石・種実） …… 175
5．放射性炭素年代測定 …… 187

第Ⅵ章　付　論 …… 283
1．下月隈Ｃ遺跡出土鼠返材の建築 …… 283
2．下月隈Ｃ遺跡出土建築材 …… 286

第Ⅶ章　小　結 …… 292

Figures　　挿　図　目　次

Fig. 1　調査地位置図（1/200,000）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
Fig. 2　調査地と福岡空港 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
Fig. 3　調査地周辺遺跡分布図（1/30,000）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
Fig. 4　試掘・第４次調査による遺構想定図（1/2,000）・・・・・・・・・ 8
Fig. 5　第１遺構検出面遺構配置図（1/400）・・・・・・・・・・・・・・・折り込
Fig. 6　井戸SE166実測図（1/20）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
Fig. 7　井戸SE169実測図（1/20）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
Fig. 8　井戸SE173実測図（1/30）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
Fig. 9　土壙SK182実測図（1/20）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
Fig. 10　土壙墓SK170実測図（1/20）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
Fig. 11　第２遺構検出面遺構配置図（1/400）・・・・・・・・・・・・・・・折り込
Fig. 12　第３遺構検出面遺構配置図（1/400）・・・・・・・・・・・・・・・折り込
Fig. 13　堰SX202実測図（1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
Fig. 14　堰SX203実測図（1/60）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
Fig. 15　堰SX209実測図（1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24
Fig. 16　第４遺構検出面遺構配置図（1/400）・・・・・・・・・・・・・・・折り込
Fig. 17　溝SD104土層実測図（1/50）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29
Fig. 18　溝SD104断面実測図（1/50）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29
Fig. 19　土壙SK244実測図（1/100）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30
Fig. 20　第５遺構検出面遺構配置図（1/400）・・・・・・・・・・・・・・・折り込
Fig. 21　溝SD114断面実測図①（1/40）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36
Fig. 22　溝SD114断面実測図②（1/40）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36
Fig. 23　溝SD114断面実測図③（1/40）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36
Fig. 24　溝SD114溜断面実測図①（1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・37
Fig. 25　溝SD114溜断面実測図②（1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・37
Fig. 26　堰SX257実測図（1/40）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・38
Fig. 27　堰SX258実測図（1/40）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・39
Fig. 28　矢板杭列ＳＸ252実測図（1/40）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・40
Fig. 29　矢板杭列ＳＸ253実測図（1/40）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41
Fig. 30　井戸SE166出土遺物実測図（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・42
Fig. 31　土壙SK151出土遺物実測図（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43
Fig. 32　土壙SK182出土遺物実測図（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43
Fig. 33　土壙墓SK170出土遺物実測図（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・44
Fig. 34　水田SX183出土遺物実測図（1/3,1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・45
Fig. 35　溝SD190出土遺物実測図（1/3・1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49
Fig. 36　堰SX209出土遺物実測図（1/2・1/3・1/4）・・・・・・・・・・・・・・50
Fig. 37　溝SD191出土遺物実測図（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・50
Fig. 38　溝SD196出土遺物実測図（1/2・1/3・1/4）・・・・・・・・・・・・・・51
Fig. 39　溝SD197出土遺物実測図（1/3・1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・51
Fig. 40　溝SD198出土遺物実測図（1/2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・51
Fig. 41　溝SD199出土遺物実測図（1/2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・51
Fig. 42　溝SD215出土遺物実測図（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・51
Fig. 43　水田SX200出土遺物実測図（1/3・1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・52
Fig. 44　溝SD104出土遺物実測図1（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・57
Fig. 45　溝SD104出土遺物実測図2（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・58
Fig. 46　溝SD221出土遺物実測図（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・59
Fig. 47　溝SD223出土遺物実測図（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・59
Fig. 48　土壙SK226出土遺物実測図（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・59
Fig. 49　土壙SK244出土遺物実測図（1/3・1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・59
Fig. 50　土壙SK249出土遺物実測図（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・59
Fig. 51　第４遺構検出面出土遺物実測図1（1/2・1/3・1/4）・・・・・・63
Fig. 52　第４遺構検出面出土遺物実測図2（1/3・1/4）・・・・・・・・・・64
Fig. 53　溝SD114出土遺物実測図1（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・67
Fig. 54　溝SD114出土遺物実測図2（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・68
Fig. 55　溝SD114出土遺物実測図3（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・69
Fig. 56　溝SD114出土遺物実測図4（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・70
Fig. 57　溝SD114出土遺物実測図5（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 71
Fig. 58　溝SD114出土遺物実測図6（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 72
Fig. 59　溝SD114出土遺物実測図7（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 73
Fig. 60　溝SD114出土遺物実測図8（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 74
Fig. 61　溝SD114出土遺物実測図9（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 75
Fig. 62　溝SD114出土遺物実測図10（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 76
Fig. 63　溝SD114出土遺物実測図11（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 77
Fig. 64　溝SD247出土遺物実測図（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 83
Fig. 65　溝SD250出土遺物実測図（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 83
Fig. 66　溝SD256出土遺物実測図（1/3・1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・ 84
Fig. 67　暗灰色粘質土・暗灰色粘性砂質土出土遺物実測図（1/4）・・ 85
Fig. 68　第５遺構検出面出土遺物実測図（1/3・1/4）・・・・・・・・・・・・ 85
Fig. 69　土壙SK167出土石製品実測図（1/2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 90
Fig. 70　土壙SK182出土石製品実測図（1/2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 91
Fig. 71　水田SX183出土石製品実測図（1/2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 91
Fig. 72　溝SD190出土石製品実測図（1/2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 92
Fig. 73　溝SD191出土石製品実測図（1/2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 93
Fig. 74　溝SD194出土石製品実測図（1/2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 94
Fig. 75　水田SX200出土石製品実測図（1/2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 94
Fig. 76　暗灰色粘質土出土石製品実測図（1/2）・・・・・・・・・・・・・・・・ 95
Fig. 77　溝SD104出土石製品実測図1（1/1・1/2）・・・・・・・・・・・・・・ 96
Fig. 78　溝SD104出土石製品実測図2（1/2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 97
Fig. 79　溝SD221出土石製品実測図（1/2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 98
Fig. 80　溝SD232出土石製品実測図（1/2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 98
Fig. 81　溝SD235出土石製品実測図（1/1・1/2）・・・・・・・・・・・・・・・・ 98
Fig. 82　土壙SK245出土石製品実測図（1/2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 99
Fig. 83　土壙SK251出土石製品実測図（1/2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 99
Fig. 84　暗灰色粘質土出土石製品実測図（1/2）・・・・・・・・・・・・・・・・100
Fig. 85　第４遺構検出面出土石製品実測図1（1/1・1/2）・・・・・・・・・101
Fig. 86　第４遺構検出面出土石製品実測図2（1/2）・・・・・・・・・・・・・・102
Fig. 87　溝SD114出土石製品実測図1（1/1・1/2）・・・・・・・・・・・・・・・103
Fig. 88　溝SD114出土石製品実測図2（1/2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・104
Fig. 89　溝SD114出土石製品実測図3（1/2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・105
Fig. 90　溝SD114出土石製品実測図4（1/2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・106
Fig. 91　溝SD114出土石製品実測図5（1/2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・107
Fig. 92　溝SD250出土石製品実測図（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・108
Fig. 93　溝SD256出土石製品実測図1（1/2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・108
Fig. 94　溝SD256出土石製品実測図2（1/2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・109
Fig. 95　溝SD259出土石製品実測図（1/1）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・110
Fig. 96　土壙SK254出土石製品実測図（1/1）・・・・・・・・・・・・・・・・・・110
Fig. 97　第５遺構検出面出土石製品実測図（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・111
Fig. 98　暗灰色粘質土出土石製品実測図（1/2）・・・・・・・・・・・・・・・・111
Fig. 99　溝SD190出土貨泉X線透過写真（2/1）・拓影（1/1）・・・・・・・112
Fig.100　溝SD195～197出土木製品実測図（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・122
Fig.101　溝SD199出土木製品実測図（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・123
Fig.102　溝SD104出土木製品実測図1（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・124
Fig.103　溝SD104出土木製品実測図2（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・125
Fig.104　溝SD104出土木製品実測図3（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・126
Fig.105　溝SD104出土木製品実測図4（1/4・1/8）・・・・・・・・・・・・・・・127
Fig.106　溝SD104出土木製品実測図5（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・128
Fig.107　溝SD104出土木製品実測図6（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・129
Fig.108　溝SD104出土建築部材実測図7（1/4・1/8）・・・・・・・・・・・・・・130
Fig.109　溝SD104出土建築部材実測図8（1/4・1/8）・・・・・・・・・・・・・・131
Fig.110　溝SD104出土建築部材実測図9（1/8）・・・・・・・・・・・・・・・・・132
Fig.111　溝SD104，土壙SK245出土建築部材（1/10）・・・・・・・・・・・・・133
Fig.112　土壙SK251出土木製品実測図（1/2・1/5）・・・・・・・・・・・・・・134

Fig.113　第３遺構検出面出土木製品実測図（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・135
Fig.114　溝SD114出土木製品実測図1（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・136
Fig.115　溝SD114出土木製品実測図2（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・137
Fig.116　溝SD250出土木製品実測図（1/5）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・138
Fig.117　溝SD235，土壙SK243～245出土木製品実測図（1/4）・・・・・・139
Fig.118　溝SD114，土壙SK244出土建築部材実測図（1/4･1/8）・・・・・140
Fig.119　土壙SK254出土木製品実測図（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・141
Fig.120　溝SD256出土木製品実測図1（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・142
Fig.121　溝SD256出土木製品・建築部材実測図2（1/4･1/8）・・・・143
Fig.122　堰SX257出土木製品実測図（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・144
Fig.123　下月隈C遺跡第４・５次調査における遺構の変遷・・・・・293

表1　水田SX183計測表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19
表2　水田SX192計測表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26
表3　水田SX201計測表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26
表4　水田SX212計測表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26
表5　水田SX200計測表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27
表6　貨泉（80001）蛍光X線分析結果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・112

自然化学分析樹種同定

表１　下月隈Ｃ遺跡第５次調査における樹種同定結果・・・・・・・・・・・・153
表２　下月隈Ｃ遺跡第５次調査における樹種同定結果・・・・・・・・・・・・154
表３　下月隈Ｃ遺跡第５次調査における樹種同定結果 ・・・・・・・・155
表４　下月隈Ｃ遺跡第５次調査における樹種同定結果 ・・・・・・・・156

土 壌 分 析（花粉）

表１　産出花粉化石一覧表（その１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・160
表２　産出花粉化石一覧表（その２）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・161
図１　SD104，SE166，SD235，SK244，SK245の主要花粉化石分布図・・163
図２　SD114の主要花粉化石分布図　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・164
図版１　下月隈C遺跡の花粉化石・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・166
表３　産出花粉化石一覧表（その３）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・163
図３　SD256，SX183の主要花粉化石分布図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・165
図版２　下月隈C遺跡の花粉化石 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・167

土 壌 分 析（植物珪酸体）

表１　試料１g当たりのプラント・オパール個数 ・・・・・・・・・・・・・・・・170
図１　SE166，SD104・235，SK244・245の機動細胞珪酸体分布図・・171
図２　SD114の機動細胞珪酸体分布図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・172
図版　下月隈C遺跡の植物珪酸体・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・174
図３　SD256，SX183の機動細胞珪酸体分布図 ・・・・・・・・・・・・・・173

土 壌 分 析（大型植物化石・種実）

表１　大型植物化石一覧表（その１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・182
表２　大型植物化石一覧表（その２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・183
図版１　出土した大型植物化石・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・185
表３　大型植物化石一覧表（その３）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・184
図版２　出土した大型植物化石 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・186

放射性炭素年代測定

表１　放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果（その１）・・・・・・189
表２　放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果（その２）・・・・・・190
表３　放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果（その３）・・・・・・191
表４　放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果（その４）・・・・・・192
図１　放射性炭素年代測定試料暦年代較正値と1δ暦年代範囲 ・・・・・279
図２　放射性炭素年代測定試料暦年代較正値と1δ暦年代範囲 ・・・・・280
表５　放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果（その５）・・193
表６　放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果（その６）・・194
表７　放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果（その７）・・195
図３　放射性炭素年代測定試料暦年代較正値と1δ暦年代範囲・・281
図４　放射性炭素年代測定試料暦年代較正値と1δ暦年代範囲・・282

巻 頭 図 版 目 次

PL. 1　調査地と福岡空港（2003年 南から）
PL. 2　調査地と福岡空港周辺（1999年 南から）
PL. 3　調査地と福岡空港（1999年 南から）
PL. 4　第１・２遺構検出面全景
PL. 5　(1) 水田SX183全景（北から）
　(2) 水田SX183大畦畔と小畦畔（北から）
　(3) 水田SX183東半部（南から）
PL. 6　第３遺構検出面全景
PL. 7　(1) 水田SX200・212全景（南西から）
　(2) 水田SX192・200全景（北西から）
PL. 8　(1) 水田SX200全景（北東から）
　(2) 水田SX200ー22（北西から）
PL. 9　(1) 堰SX202（南から）
　(2) 堰SX203（西から）
　(3) 堰SX209（北から）
PL.10　第４・５遺構検出面全景
PL.11　(1) 溝SD104・ 壷(00001)出土状況
　(2) 溝SD104・平鋤（30117）出土状況
　(3) 溝SD104・えぶり（30123）出土状況
　(4) 溝SD104・曲柄又鍬（30111）出土状況
　(5) 溝SD104・杓子形木器（30118）出土状況
　(6) 溝SD104・火鑽臼（30129）出土状況
PL.12　溝SD104出土木製品
PL.13　(1) 溝SD114北半部木材出土状況（南から）
　(2) 溝SD114南半部木材出土状況（東から）
PL.14　(1) 溝SD114全景（南から）
　(2) 溝SD114・直柄横鍬（30164）出土状況
　(3) 溝SD114・直柄鍬（30163）出土状況
　(4) 溝SD114・坏状木製品（30188）出土状況
　(5) 溝SD114・彩文土器 壷(00285)出土状況
PL.15　溝SD114出土木製品
PL.16　(1) 土壙SK251・琴（30173）出土状況
　(2) 土壙SK251出土琴（30173）

調査地周辺地形図版目次

PL.17　1937年（昭和14年）の調査地と周辺
PL.18　1947年（昭和22年）の調査地と周辺
PL.19　1948年（昭和23年）の調査地と周辺
PL.20　1960年（昭和35年）の調査地と周辺
PL.21　1964年（昭和39年）の調査地と周辺
PL.22　1969年（昭和44年）の調査地と周辺
PL.23　1972年（昭和47年）の調査地と周辺
PL.24　1979年（昭和54年）の調査地と周辺
PL.25　1993年（平成5年）の調査地と周辺
PL.26　1995年（平成7年）の調査地と周辺
PL.27　1998年（平成10年）の調査地と周辺
PL.28　2003年（平成15年）の調査地と周辺

遺 構 図 版 目 次

PL.29　(1) 井戸SE166・土層状況（南から）
　(2) 井戸SE166（南から）
PL.30　(1) 井戸SE169・遺物出土状況（南から）
　(2) 井戸SE169（南から）
PL.31　(1) 井戸SE173（東から）
　(2) 井戸SE173・柄杓出土状況（東から）
PL.32　(1) 土壙SK151（南から）
　(2) 土壙SK153（南から）
PL.33　(1) 土壙SK154（南から）
　(2) 土壙SK160（南から）
PL.34　(1) 土壙SK162（南から）
　(2) 土壙SK167（南から）
PL.35　(1) 土壙SK182・遺物出土状況（東から）
　(2) 土壙SK182・遺物出土状況（南から）
PL.36　(1) 土壙墓SK170・遺物出土状況（東から）
　(2) 土壙墓SK170・遺物出土状況（北から）
PL.37　第２遺構検出面全景
PL.38　(1) 水田SX183・東半部（北から）
　(2) 水田SX183・大畦畔（北から）
PL.39　(1) 水田SX183・西半部（北から）
　(2) 水田SX183・全景（東から）
PL.40　(1) 水田SX183・中央部（東から）
　(2) 水田SX183・北半部（東から）
PL.41　第３遺構検出面全景
PL.42　(1) 溝SD190・196・215（北東から）
　(2) 溝SD196・215（南西から）
PL.43　(1) 溝SD190，堰SX209（北から）
　(2) 溝SD190，堰SX209（西から）
PL.44　(1) 堰SX209（西から）
　(2) 堰SX209（東から）
　(3) 堰SX209（南から）
　(4) 堰SX209（北から）
PL.45　(1) 溝SD191，水田SX212（南東から）
　(2) 溝SD191，水田SX212（北から）
PL.46　(1) 溝SD193，水田SX192・200（北から）
　(2) 溝SD193（南東から）
PL.47　(1) 溝SD194，水田SX200・212（南西から）
　(2) 溝SD194（南西から）
PL.48　(1) 溝SD195（南西から）
　(2) 溝SD195・板状木製品（30143）出土状況
PL.49　(1) 溝SD196（南から）
　(2) 溝SD196・横槌（30144）出土状況
PL.50　(1) 溝SD197，堰SX203，水田SX200・206（東から）
　(2) 溝SD197・直柄又鍬（30146），板状木製品（30147）出土状況
PL.51　(1) 溝SD196・197，堰SX203（南から）
　(2) 溝SD196・197，堰SX203（西から）

PL.52 (1) 溝SD195・198，水田SX200(北東から)
(2) 溝SD198(南西から)
PL.53 (1) 溝SD199(南から)
(2) 溝SD199・直柄又鍬(30151)出土状況
PL.54 (1) 水田SX192・200(北西から)
(2) 水田SX192・200(北東から)
PL.55 (1) 水田SX192・200・201(北西から)
(2) 水田SX192・200(北から)
PL.56 (1) 水田SX192(北から)
(2) 水田SX192(西から)
PL.57 (1) 水田SX192・200(北西から)
(2) 水田SX192・水口と大畦畔(南から)
PL.58 (1) 水田SX192，堰SX202(南から)
(2) 水田SX192，堰SX202(西から)
PL.59 (1) 水田SX200(南西から)
(2) 水田SX200(南西から)
PL.60 (1) 水田SX192・200(北東から)
(2) 水田SX200(北東から)
PL.61 (1) 水田SX200ー29(北西から)
(2) 水田SX200ー22(北西から)
PL.62 (1) 水田SX200ー15・水口(北東から)
(2) 水田SX200ー13・水口(北から)
PL.63 (1) 水田SX200・211(南西から)
(2) 水田SX200ー14・水口(南西から)
(3) 水田SX200ー11・水口(北西から)
PL.64 第４・５遺構検出面全景
PL.65 (1) 溝SD104(北から)
(2) 溝SD104(南から)
PL.66 (1) 溝SD104・壷(00001)出土状況
(2) 溝SD104・木製品(30169)出土状況
PL.67 (1) 溝SD104・曲柄又鍬(30111)出土状況
(2) 溝SD104・直柄又鍬(30105)出土状況
PL.68 (1) 溝SD104・曲柄又鍬(30110)出土状況
(2) 溝SD104・直柄広鍬(30114)出土状況
PL.69 (1) 溝SD104・平鋤(30117)建築部材出土状況
(2) 溝SD104・鋤柄(30119)出土状況
(3) 溝SD104・鋤柄(30120)出土状況
(4) 溝SD104・鋤柄(30121)出土状況
PL.70 (1) 溝SD104・直柄横鍬「えぶり」(30123)出土状況
(2) 溝SD104・杓子形木器(30118)出土状況
PL.71 (1) 溝SD104・沓(30124)出土状況
(2) 溝SD104・火鑽臼(30129)出土状況
PL.72 (1) 溝SD104・槽(30125)出土状況
(2) 溝SD104・鼠返し(30131)出土状況
PL.73 (1) 溝SD104・竪杵(30132)出土状況
(2) 溝SD104・梯子(30135)出土状況
PL.74 (1) 溝SD104・建築部材(30139)出土状況
(2) 溝SD104・建築部材(30139)出土状況
(3) 溝SD104・建築部材(30139)出土状況(拡大)
PL.75 (1) 溝SD104・建築部材(30194)出土状況
(2) 溝SD104・建築部材出土状況
PL.76 (1) 溝SD104・建築部材出土状況
(2) 溝SD104・建築部材出土状況
PL.77 (1) 溝SD104・建築部材出土状況
(2) 溝SD104・建築部材出土状況
PL.77 (3) 溝SD104・建築部材出土状況
(4) 溝SD104・建築部材出土状況
(5) 溝SD104・建築部材(30140)出土状況
(6) 溝SD104・建築部材出土状況
PL.78 (1) 溝SD235(西から)
(2) 溝SD235・板状木製品(30153)出土状況
PL.79 (1) 土壙SK244(東から)
(2) 土壙SK244・直柄平鍬(30156)出土状況
(3) 土壙SK244・石斧柄(30157)出土状況
PL.80 (1) 土壙SK245(南から)
(2) 土溝SK245・建築部材出土状況
PL.81 (1) 土壙SK251(南から)
(2) 土壙SK251・琴(30173)出土状況
PL.82 柵列SA247,溝SD114北半部(南西から)
PL.83 (1) 柵列SA247，溝SD114北半部(南から)
(2) 柵列SA247，溝SD114北半部(北から)
PL.84 (1) 溝SD114(北から)
(2) 溝SD114(南から)
PL.85 (1) 溝SD114(南から)
(2) 溝SD114・溜(東から)
PL.86 (1) 溝SD114南半部木材出土状況(東から)
(2) 溝SD114南半部木材出土状況(南から)
PL.87 (1) 溝SD114北半部木材出土状況(南から)
(2) 溝SD114木材検出作業風景(北から)
PL.88 (1) 溝SD114・彩文土器(00285)出土状況
(2) 溝SD114・坏状木製品(30188)出土状況
(3) 溝SD114・直柄三又鍬(30106)出土状況
(4) 溝SD114・直柄広鍬(30163)出土状況
(5) 溝SD114・直柄横鍬(30164)出土状況
(6) 溝SD114・泥除け (30165)出土状況
(7) 溝SD114・直柄広鍬(30162)出土状況
(8) 溝SD114・柱(30168) 出土状況
PL.89 (1) 溝SD114・加工木製品(30166) 出土状況
(2) 溝SD114・竪杵(30167)出土状況
PL.90 (1) 溝SD250(南から)
(2) 溝SD250・弓(30170)出土状況
(3) 溝SD250・木製品(30171)出土状況
PL.91 (1) 溝SD256，堰SX258(南から)
(2) 堰SX258(南から)
PL.92 (1) 溝SD256・直柄二又鍬(30174)出土状況
(2) 溝SD256・直柄広鍬(30175)出土状況
(3) 溝SD256・石斧柄(30180)出土状況
PL.93 (1) 溝SD256，堰SX257(北から)
(2) 溝SD256，堰SX257(西から)
PL.94 (1) 第5遺構検出面全景(南から)
(2) 溝SD259(南から)
PL.95 (1) 矢板杭列SX253(東から)
(2) 矢板杭列SX252・253(北から)
PL.96 (1) 杭列杭列SX252(南から)
(2) 矢板杭列SX252(北から)
PL.97 (1) 矢板杭列SX252・矢板出土状況(北から)
(2) 矢板杭列SX252・矢板出土状況(東から)
PL.98 (1) 矢板杭列SX252・253・矢板出土状況(東から)
(2) 矢板杭列SX253・矢板出土状況(北から)

遺物図版目次

PL. 99　井戸SE166，土壙SK151・170・182，SX183出土遺物
PL.100　溝SD190出土遺物
PL.101　第３遺構検出面溝，土壙，水田，堰，その他出土遺物
PL.102　溝SD104出土遺物
PL.103　第４遺構検出面溝，土壙，その他出土遺物
PL.104　溝SD114出土遺物(1)
PL.105　溝SD114出土遺物(2)
PL.106　溝SD114出土遺物(3)
PL.107　溝SD114出土遺物(4)
PL.108　溝SD114出土遺物(5)
PL.109　溝SD114出土遺物(6)
PL.110　溝SD114出土遺物(7)
PL.111　溝SD114出土遺物(8)
PL.112　溝SD250・256出土遺物
PL.113　矢板杭列SX253・堰SX257，第５遺構検出面出土遺物
PL.114　第４遺構検出面溝，土壙，その他出土土製品
PL.115　溝SD114出土土製品(1)
PL.116　溝SD114出土土製品(2)
PL.117　溝SD114出土土製品(3)
PL.118　堰SX257，黒色粘質土層，第５遺構検出面出土土製品
PL.119　土壙SK167・182，暗灰色粘質砂土層出土石製品
PL.120　水田SX183・200出土石製品
PL.121　溝SD190出土石製品
PL.122　溝SD190・194・212出土石製品
PL.123　溝SD104出土石製品
PL.124　溝SD220・221・232・235，土壙SK245出土石製品
PL.125　暗灰色粘質土層出土石製品
PL.126　第４遺構検出面出土石製品(1)
PL.127　第４遺構検出面出土石製品(2)
PL.128　第４遺構検出面出土石製品(3)
PL.129　第４遺構検出面出土石製品(4)
PL.130　溝SD114出土石製品(1)
PL.131　溝SD114出土石製品(2)
PL.132　溝SD114出土石製品(3)
PL.133　溝SD114出土石製品(4)
PL.134　溝SD114出土石製品(5)
PL.135　溝SD114出土石製品(6)
PL.136　溝SD114出土石製品(7)
PL.137　溝SD250・256出土石製品
PL.138　溝SD256，堰SX258出土石製品
PL.139　溝SD259，土壙SK254，その他出土石製品，溝SD190出土金属製品
PL.140　溝SD195・196・197・199出土木製品
PL.141　溝SD104出土木製品(1)
PL.142　溝SD104出土木製品(2)
PL.143　溝SD104出土木製品(3)
PL.144　溝SD104出土木製品(4)
PL.145　溝SD104出土木製品(5)
PL.146　溝SD104出土木製品(6)
PL.147　溝SD235，土壙SK243・244出土木製品
PL.148　土壙SK245，黒色粘質土層，その他出土木製品
PL.149　土壙SK251出土琴
PL.150　溝SD114出土木製品
PL.151　溝SD250，土壙SK251出土木製品
PL.152　溝SD256，堰SX257出土木製品

第Ⅰ章　はじめに

１．発掘調査に至る経緯

運輸省第四港湾建設局博多港工事事務所長（現・国土交通省九州地方整備局 博多港湾･空港整備事務所）から1994年（平成６年）３月31日、福岡市教育委員会へ月隈調節池建設事業計画地内（福岡市博多区月隈４丁目７地内）における埋蔵文化財事前審査願い（四港建博第159号）が提出された。当該地域は福岡空港に南接する約８万㎡の空地で、埋蔵文化財包蔵地域の「下月隈Ｃ遺跡」として登録されている地域であった。さらに当該地に北接する道路拡幅工事に伴う第１次調査においては弥生時代後期を中心とした集落関連遺構が、南接地の空港周辺整備に伴う同遺跡第２・３次調査でも中世の集落・水田、古墳時代～弥生時代の水田、河川などが発見されていることから、当該地域における遺跡の存在が十分に推定された。このため、埋蔵文化財課では試掘調査を当該地全域に63ヶ所の試掘坑を設定し、1994年５月19日～同年６月17日に行った。その結果、当該地全域において古代～中世と推定される水田跡や水路、さらにその下層でも舌状に南北に延びる微高地において弥生時代の柱穴や多量の土器を発見した。これらの調査成果から、当該地においては生産遺跡や集落遺跡などの複数の遺跡面の存在が推定され、開発事業が計画どおり実施された場合には遺跡に影響を与えると判断された。これら試掘調査結果を平成６年７月６日付（福市教埋第52号）文書で依頼者に回答するとともに、試掘結果を基に博多港湾空港事務所（現 博多港湾･空港整備事務所）と埋蔵文化財課とで協議を行った結果、建設工事に先立って発掘調査を実施することとし、第四港湾建設局長（当初は現九州地方整備局長、後に九州地方整備局副局長）を委託者、福岡市長を受託者とする契約が締結された。この中で、発掘調査、資料整理および報告書作成費用については第四港湾建設局（現九州地方整備局）が全額負担し、発掘調査、資料整理および報告書作成は福岡市（福岡市教育委員会埋蔵文化財課）が実施することとなった。

当初事業計画では、平成10年度から４年間で発掘調査を完了する計画であったが、初年度（平成10年度）の発掘調査において平安末～鎌倉時代の集落、奈良～平安時代の水田・水路、古墳時代の水田・水路、弥生時代後期～古墳時代初頭の堰・水路、弥生時代前期の水路が発見されるなど遺構密度が試掘調査で推定されていた以上に高いことが判明したため、発掘調査期間を５年間に変更することとなった。さらに後には調査成果などから、発掘調査期間を６年間に変更することとなった。

本報告は調査計画２年次目（平成11年度）に実施し、下月隈Ｃ遺跡では第５次にあたる発掘調査報告である。第５次調査の資料整理・報告書は、第４次調査の資料整理・報告書作成の重複問題から平成14～15年の２年間にわたって行なった。

2．調 査 の 組 織

(1) 委 託 者

運輸省　第四港湾建設局　博多港湾空港工事事務所
国土交通省　九州地方整備局　博多港湾･空港整備事務所

【平成 6 年度】

第四港湾建設局長　石 田 省 三　　博多港工事事務所長　　鹿 籠 雅 純

【平成11年度】

第四港湾建設局長　布施谷　寛　　博多港湾空港工事事務所長　久 保 省 吾

【平成14年度】

九州地方整備局長　渡 邊 茂 樹　　博多港湾空港工事事務所長　角　　浩 美

【平成15年度】

九州地方整備局長　岡 山 和 生　　博多港湾･空港整備事務所長　酒 井 洋 一

(2) 調 査 主 体

福 岡 市 教 育 委 員 会

【平成 6 年度】

	教　育　長	尾花　剛
	文 化 財 部 長	後藤　直
	埋蔵文化財課長	折尾　学
事 前 審 査	主任文化財主事	濱 石 哲 也
試 掘 調 査	文 化 財 主 事	長 家　伸
経 理 担 当	事 務 吏 員	内 野 保 基

【平成11年度】

	教　育　長	西　憲一郎
	文 化 財 部 長	柳 田 純 孝
	埋蔵文化財課長	山 崎 純 男
	調 査 第 2 係 長	力 武 卓 治
調 査 担 当	主任文化財主事	山 崎 龍 雄
	文 化 財 主 事	瀧 本 正 志
経 理 担 当	文化財整備課	河 野 淳 美

【平成14年度】

	教育長	生田征生
	文化財部長	堺　徹
	埋蔵文化財課長	山崎純男
	調査第2係長	田中壽夫
整理担当	文化財主事	瀧本正志
経理担当	文化財整備課	中岳　圭
		御手洗清

【平成15年度】

	教育長	生田征生
	文化財部長	堺　徹
	埋蔵文化財課長	山崎純男
	調査第2係長	田中壽夫
整理担当	文化財主事	瀧本正志(埋蔵文化財センター)
経理担当	文化財整備課	鈴木由喜

（調査･整理補助）

犬丸陽子　上野裕子　榊原俊行　末次由紀恵　高木 誠　長浦芙美子　中間千衣子　中村智子
春田城二　持原良子　山口朱美　山野祥子

（調査協力者）

阿部幸子　荒牧幸子　荒牧テルヲ　安藤峰正　石井雅之　井上英子　井上利弘　岩崎良隆　岩永崇史
植松雅子　内山和子　江嶋光子　大賀　一　大嶋健司　大橋由美子　小川光彦　奥田弘子　小野千佳
甲斐康完　柿沼智史　兼田ミヤ子　河野一一　黒瀬千鶴　栗原克志　小島キサエ　後藤タミ子
酒井次憲　佐藤アイ子　真田弘二　重松太平衛　篠崎伝三郎　渋谷留雄　下釜和也　須藤源明
世利陽子　副田澄子　園田 豊　大長正弘　高手與志子　高野瑛子　武田言示　武田潤子　立山清二
田中茂孝　田中フキ子　田上智雄　土橋初夫　堤 壮平　堤 正子　寺園恵美子　徳永栄彦　豊丸秀仁
永田律子　永田八重子　長田嘉彦　長野嘉一　夏秋弘子　西小路由美子　二宮白人　野口リュウ子
別府俊美　前田敬子　松井一美　松浦滋子　松永七郎　宮崎雅秀　宮本央雄　宗像正勝　室 英二
森本勇夫　安河内康矩　安高精一　安高久子　安本昭司　安元尚子　山下嘉人　脇坂サツキ

第Ⅱ章　遺跡の位置と歴史的環境

１．遺跡の位置と立地

本調査地周辺の地形は、北東側を三郡山地からのびる丘陵性山地に、南西側を背振山地から派生してのびる丘陵に挟まれ、北西から南東方向にほぼ直線的にのびる溝状地形が発達し、福岡～二日市～筑後地方へ通じる唯一の解析平地となっている。特に調査地周辺の低平地は北流する御笠川の沖積作用によって形成された標高８～12mほどの平野となり、福岡平野の東南部の一画を形成する。

下月隈Ｃ遺跡はこの底平地に点在する遺跡のひとつで、月隈・平尾丘陵と春日丘陵との間が扇状に広がる地形を呈する要の場所に位置する。現在の海岸線からは６㎞を測るが、当時としては数㎞程度と推定される。

２．遺跡の歴史的環境

これまでの発掘調査で、調査地の西側を南北にのびる笠川と月隈・平尾丘陵や東側を春日市から博多駅南側近くまで島状に高低を繰り返しながらのびる春日・那珂・比恵の各丘陵においては原始からの人々の暮らしの跡である遺跡が数多く存在していることが明らかとなっている。また、最近の発掘調査成果により、これまで遺跡の存在が想定されていなかった御笠川と月隈・平尾丘陵との間に位置する福岡空港などの低地においても遺跡が数多く発見され、微高地を中心とした底地において広範囲に遺跡が存在することが判明した。これまで弥生時代の集落は板付遺跡に代表される低丘陵上とその周辺から始まり、低湿地の開発はそれ以降とされてきたが、弥生時代の早い段階から微高地を中心とした底地においても人々が生活を営んでいたことが明らかになりつつある。

本章では、下月隈Ｃ遺跡と周辺の遺跡を取り上げてみる。

下月隈Ｃ遺跡

福岡空港に南接する遺跡で、東西0.5㎞、南北1㎞の範囲を呈する。これまでの４次にわたる調査が行われ、遺跡の北側では弥生時代後期を中心とした集落跡が発見された。遺跡の南側では、古墳時代～奈良時代の水田、9～10世紀、12～13世紀、14世紀の集落と水田の大きく4時期の遺構が発見されている。特に、２・３次調査では越州窯系青磁碗の精製品、蛇の目高台の白磁碗、緑釉陶器皿、滑石製の権、瓦等の一般集落からでは見られない遺物が出土していることから、9～10世紀における集落は特権階級もしくはそれらに関係する集落と考えられ、それ以降は溝や門で画された屋敷に代表される一般集落に変容している。

雀 居 遺 跡

本調査地から北方２㎞、福岡空港の西辺部中央に位置する遺跡で、東西0.4㎞、南北1㎞の範囲を呈する。国際空港ターミナル建設をはじめとする空港西側整備に伴い、これまでに13次にわたる調査が行われ、弥生時代早期（縄文時代晩期末）～古墳時代前期までの集落、古代からの水田などが発見されている。特に遺跡の南側に位置する第４・５次調査では、弥生時代後期に比定され、推定南北約130ｍ、東西約200ｍの楕円形状を呈する濠と梁行8.4ｍ、桁行12.18ｍを測る大規模掘立柱をはじめとした29棟もの建物からなる環濠集落が発見されている。また、直接的に竪穴住居などの遺構は発見されていなが、第7次調査の微高地では前期の土壙墓６基や甕棺墓８基および大量の土器、石器、木製農耕具などが出土していることから、弥生時代早期（縄文時代晩期末）の段階から集落が営まれていたことは明白である。

Fig.1　調査地位置図（200,000）

Fig.2　調査地と福岡空港

板付遺跡

本調査地から西方0.8㎞、北方へ島状に起伏に富みながらのびる春日丘陵の北頂端部に造営された環濠集落と丘陵裾部の低湿地に広がる水田からなる弥生時代前期の遺跡で、縄文時代晩期末（弥生時代早期）の水田も発見されている。環濠は内濠と外濠の二重の濠からなり、断面形が「V」字形を呈した内堀は、南北約115m、東西85mの楕円形状の平面形を測る。内堀の一画は、さらに直線溝で平面形が半月状に画し、食料倉庫である貯蔵穴群が築かれている。北側の内堀と外堀の間には小児甕棺墓群も確認されている。ただし、内堀の内側においては貯蔵穴の他には後生の削平により遺構は全く残存しておらず、集落の構成などは不明のままである。

天神森遺跡

本調査地の北東0.6㎞、月隈・平尾丘陵西斜面の裾部に位置する弥生時代前期前半から中期の甕棺墓、木棺墓の遺跡である。甕棺墓44基、木棺墓24基が確認されている。特に木棺墓は二列に埋葬され、棺外には小壷が副葬されていた。

上月隈遺跡

本調査地の東方0.35㎞、月隈・平尾丘陵の標高18m～21mを測る支丘の尾根線と斜面に位置する弥生時代中期後半期の遺跡である。これまでに３次にわたる調査が行われ甕棺墓29基、木棺墓2基、土壙墓15基が確認されている。特に、中期後半の大型墓壙を有する木蓋単棺甕棺墓のST007号は、棺内が朱（赤色硫化水銀）で塗布され、刃部を矢羽根状に研ぎ分けしている細形銅剣１口、ガラス製管玉20数点が棺内に副葬されていた。

久保園遺跡

本調査地の北方1.7㎞、月隈・平尾丘陵の標高20m前後を測る支丘の斜面に位置する弥生時代中期の遺跡である。これまでの調査で中期後半の梁行５間、桁行８間の大規模掘立柱建物が確認されている。

赤穂ノ浦遺跡（席田大谷遺跡）

本調査地の北方1.5㎞、月隈・平尾丘陵の標高30m前後を測る支丘の斜面に位置する弥生時代後半期の遺跡である。これまでの調査で横帯文銅鐸の鋳型が出土している。

宝満尾遺跡

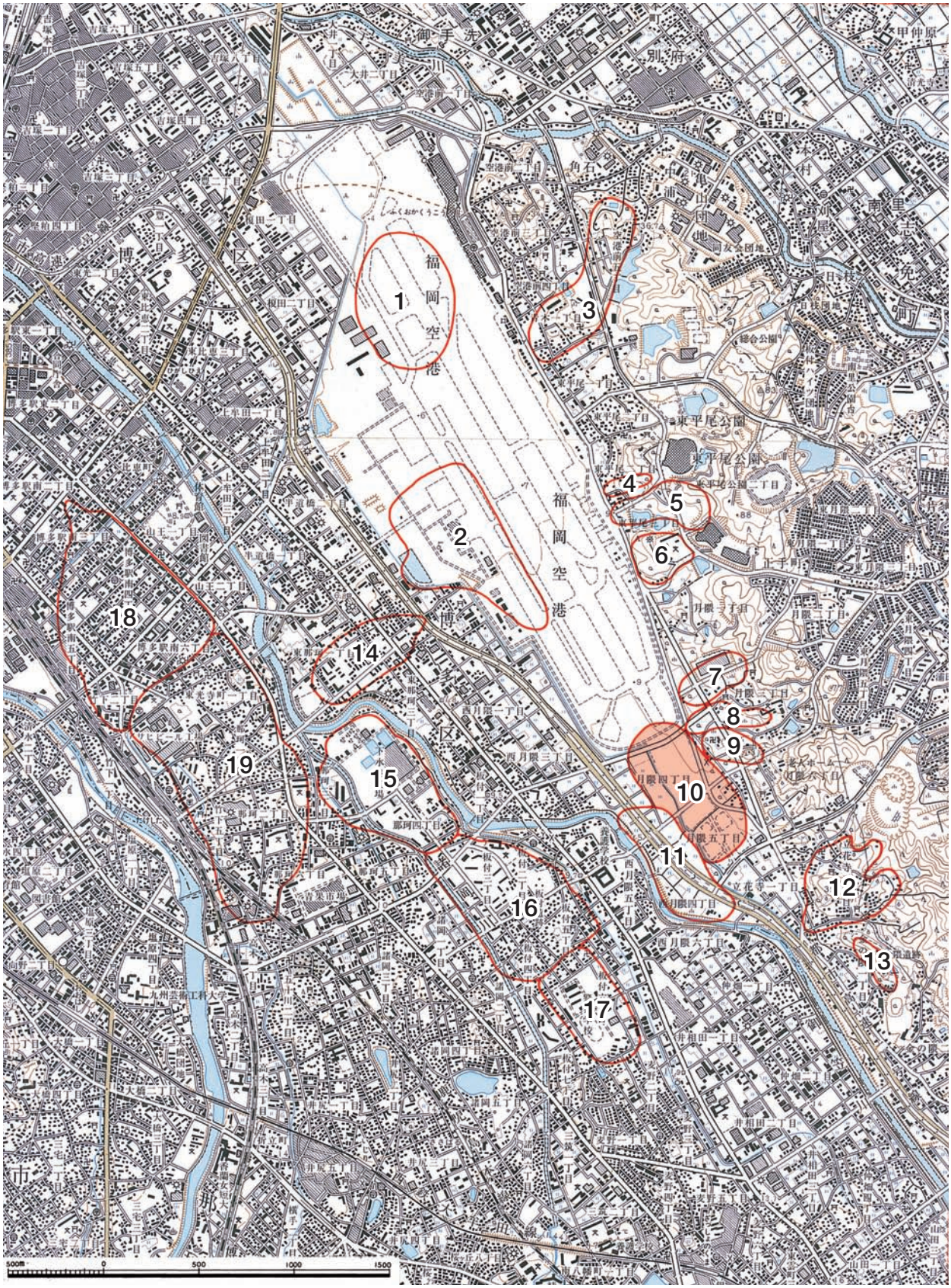
本調査地の北方1.3㎞、月隈・平尾丘陵の標高22m～30mを測る支丘の尾根線と斜面に位置する弥生時代後半期の遺跡である。これまでの調査で甕棺墓群、土壙墓群が確認され、その中の４号土壙墓からは内行花文明光鏡、鉄製品、ガラス製小玉が副葬されていた。

金隈遺跡

本調査地の南東方1.3㎞、月隈・平尾丘陵から派生した標高35m前後を測る独立丘陵の尾根上に立地する弥生時代前期後半～後期に営まれた共同墓地遺跡で、国史跡である。甕棺墓348基、土壙墓等119基が確認されている。副葬品を有する墓は少ないが、ゴホウラ貝製の腕輪を装飾しており同時期における南西諸島との関連を知ることができる。同遺跡でも中期後半期から後期における甕棺墓の造営数は他の時期に比べて突出する。

那珂君休遺跡

本調査地の北西方1.4㎞、南東から北西方向へ標高を下げながら島状にのび、板付遺跡の立地する春日丘陵の先端部に位置する遺跡である。これまでに8次にわたる調査が行われ、弥生時代後期の井堰、古墳時代前期の水田、河川、井堰、水溜状遺構等の遺構が確認されている。さらに、多くの木製農耕具や沓、楯等が発見されている。遺跡の中心は古墳時代前半期の３世紀後半～５世紀前半である。



1．上牟田遺跡　2．雀居遺跡　3．席田青木遺跡　4．久保園遺跡　5．席田遺跡
6．宝満尾遺跡　7．天神森遺跡　8．下月隈Ｂ遺跡　9．上月隈遺跡　**10．下月隈Ｃ遺跡**
11．立花寺Ｂ遺跡　12．立花寺遺跡　13．金隈遺跡　14．東那珂遺跡　15．那珂君休遺跡
16．板付遺跡　17．高畑遺跡　18．比恵遺跡　19．那珂遺跡

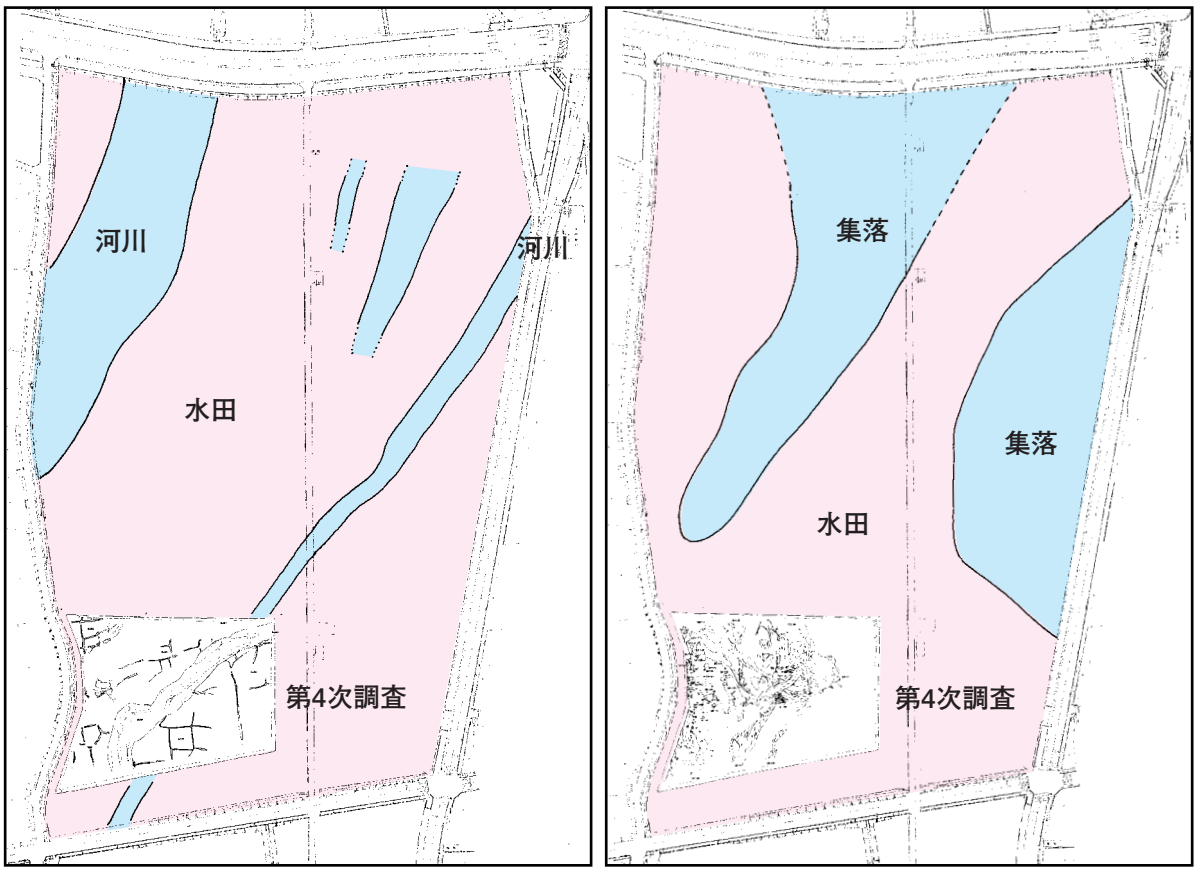
Fig.3　調査地周辺遺跡分布図（1/30,000）

第Ⅲ章　調査の記録

１．試掘調査と第4次調査の概要

試掘調査は、工事予定地全域の約80,000㎡に63ヶ所の試掘坑を設定し、平成6年（1994年）5月19日から同年6月17日に地表下2m～3mまバックフォーで掘り下げて実施した。試掘調査の結果、当該地には古代～中世と弥生時代の２時期の遺構面が少なくとも存在すると判断された。地表下約１mの古代～中世の層ではFig. 4 の左図に示すように、水田と大規模河川や複数の流路で占められていた。なお、水田は試掘調査の土層図では複数層存在することが、水田間に厚い砂層を挟んで存在することから知らされた。地表下約２mに位置する弥生時代の面ではFig. 4 の右図に示すように、南北に延びる細い微高地上に柱穴や多数の土器が出土していることから集落の存在が、微高地間の谷間においては護岸状の杭列が存在することなどから集落に直接結びつく水田が広がっていたと判断された。この水田層も複数が存在することが、水田間に厚い砂層を挟んで存在する土層状況から知ることとなった。

調査計画初年度である第４次調査地域は工事計画地の南西部に位置し、当該地においては試掘調査で古代～中世の水田・水路や弥生時代の水田の存在が推定されていた。ところが、発掘調査では上層から平安末～鎌倉時代の集落、奈良～平安時代の水田・水路、古墳時代の水田・水路、弥生時代後期～古墳時代初頭の集落・堰・水路、弥生時代前期の水路の遺構の他に土器・木製品・建築部材をはじめとする多量の遺物が出土した。特に、想定されていなかった弥生時代の集落の発見は、集落の中心が調査地の西方に展開していることと試掘調査の限界を我々に示してくれた。



古代～中世　　弥生時代

Fig.4　試堀・第4次調査による遺構想定図（1/2000）

2．調査の概要と経過

調査計画２年次目の下月隈Ｃ遺跡第５次調査は、1999年（平成11年）４月６日に発掘調査を着手し、2000年3月25日終了した。調査面積は10,000㎡であるが、４層の発掘調査となったために調査総面積は40,000㎡を測る。

遺構検出面は５面を数え、各遺構検出面における時代認識は第１遺構検出面が平安時代後期～鎌倉時代、第２遺構検出面は奈良時代～平安時代前半期、第３遺構検出面は古墳時代後期、第４遺構検出面は弥生時代後期～古墳時代初頭、第５遺構検出面は弥生時代早期～前期である。

1999年

5月　表土掘削をバックフォーを用いて開始。調査地が空港に近づいた分だけ昨年より近くに感じる頭上10mほどを飛行機が爆音とともに通過。朝夕はひっきりなしに離発着し機種も下から見ただけで分るようになってしまった。法令に従ってバックフォーに赤旗を装着させる。

6月　地表下１ｍ程で暗灰白色砂となり、水田畦畔が見事に顔を出してきた。調査区西北隅で平安時代後半期と考えられ、南北に流れる河川を検出したが大量の地下水が噴出したために安全確保のため位置を記録した後に埋め戻す。夜来の大雨で29日朝には調査区が水没、事務所も床下浸水。博多駅地下街にも流入して甚大な被害を与える。第１遺構面検出作業を人力によって始める。

7月　大小の畦畔で碁盤の目に区画された水田跡が調査区全域に広がる。地割りが崩れた様相を見せるが古代条理形を留めている。水田面の上層遺構が残存しており、これを第1遺構検出面とし、水田面を第２遺構検出面する。

8月　5日に第1遺構検出面と第２遺構検出面が重複する第1回空中写真撮影。

9月　第３遺構検出面における本格的遺構検出作業を開始、上層水田とは形状が完全に異なる水田と水路・堰を確認。

10月　22日に第３遺構検出面の第2回空中写真撮影。

11月　第３遺構検出面の測量を進める。

12月　第４遺構検出面における本格的遺構検出作業を開始。

2000年

1月　溝SD104から大量の木製品が出土。時期的には弥生時代後期～古墳時代初頭が中心である。

2月　22日に第3回目の空中写真撮影。溝SD114から弥生時代早期～前期の土器や木製品が出土。

3月　第５遺構検出面における本格的遺構検出作業を開始。 25日に発掘調査作業を終了。

①遺構検出状況

②調査地冠水状況

③水田SX183撮影用マーキング

④土壙SK251琴出土状況

⑤溝SD114木製品等出土状況

第Ⅳ章　遺構と遺物

１．遺　構

本調査で検出した遺構は、主に中世（平安時代後期～鎌倉時代）、古代（奈良時代～平安時代前期）、古墳時代後期、弥生時代後期～古墳時代初頭、弥生時代早期～前期の５時期である。

（１）第１遺構検出面

現地表を成す造成盛土下の旧耕作土直下0.5mで検出した。第５次調査予定地内においては、同地内における試掘調査では第４次調査で検出した中世の遺構が極めて希薄であるという試掘結果から溝21条、土壙22基、井戸４基を検出した。遺構の大半は調査区の西半部に認められる。近・現代の耕作による削平を受けている。以下、主な遺構の特徴と出土遺物を記す。

溝（SD）

SD63（Fig. 5　PL. 4）

調査区南西隅部に位置する直線的溝で、南西－北東方向に走行する。幅0.5～0.9m・深さ0.05m・全長24mを測る。溝の西端部は調査区外にのび、東端部は緩かに立ち上がる。溝の壁面は弧を描くように緩かに立ち上がる。

SD152（Fig. 5　PL. 4）

調査区南西隅部に位置する直線的溝で、南西－北東方向に走行する。幅1.0m・深さ0.15m・全長６mを測る。溝の西端部は調査区外にのび、東端部は緩かに立ち上がる。溝の壁面は弧を描くように緩かに立ち上がる。

SD165（Fig. 5　PL. 4）

調査区南辺部中央、ＳＤ１６８の北に位置す直線的溝で、南西－北東方向に走行する。幅0.7m・深さ0.08m・全長16.5mを測る。溝の東端部は試掘調査時に欠失したが、西端部の状況から両端部とも緩かに立ち上がっていたと想定される。溝の壁面は弧を描くように緩かに立ち上がる。遺物は、土師器台付椀が出土している。

SD168（Fig. 5　PL. 4）

調査区南辺部中央、SD152の東に位置する直線的溝で、南西－北東方向に走行する。幅0.8m・深さ0.1m・全長9.8mを測る。溝の東端部は試掘調査時に欠失したが、西端部の状況から両端部とも緩かに立ち上がっていたと想定される。溝の壁面は弧を描くように緩かに立ち上がる。遺物は、土師器坏が出土している。

SD174（Fig. 5　PL. 4）

調査区西辺部中央、SD175の南に位置する直線的溝で、南西－北東方向に走行する。幅1.0m・深さ0.2m・全長８mを測る。溝の両端部とも緩かに立ち上がり、壁面は弧を描くように緩かに立ち上がる。

SD175（Fig. 5　PL. 4）

調査区西辺部中央、SD174の北に位置する直線的溝で、北西－南東方向に走行する。幅0.9m・深さ0.1m・全長16mを測る。溝の北端部は試掘調査時に欠失したが、西端部の状況から両端部とも緩かに立ち上がっていたと想定される。溝の壁面は弧を描くように緩かに立ち上がる。遺物は、土師器椀

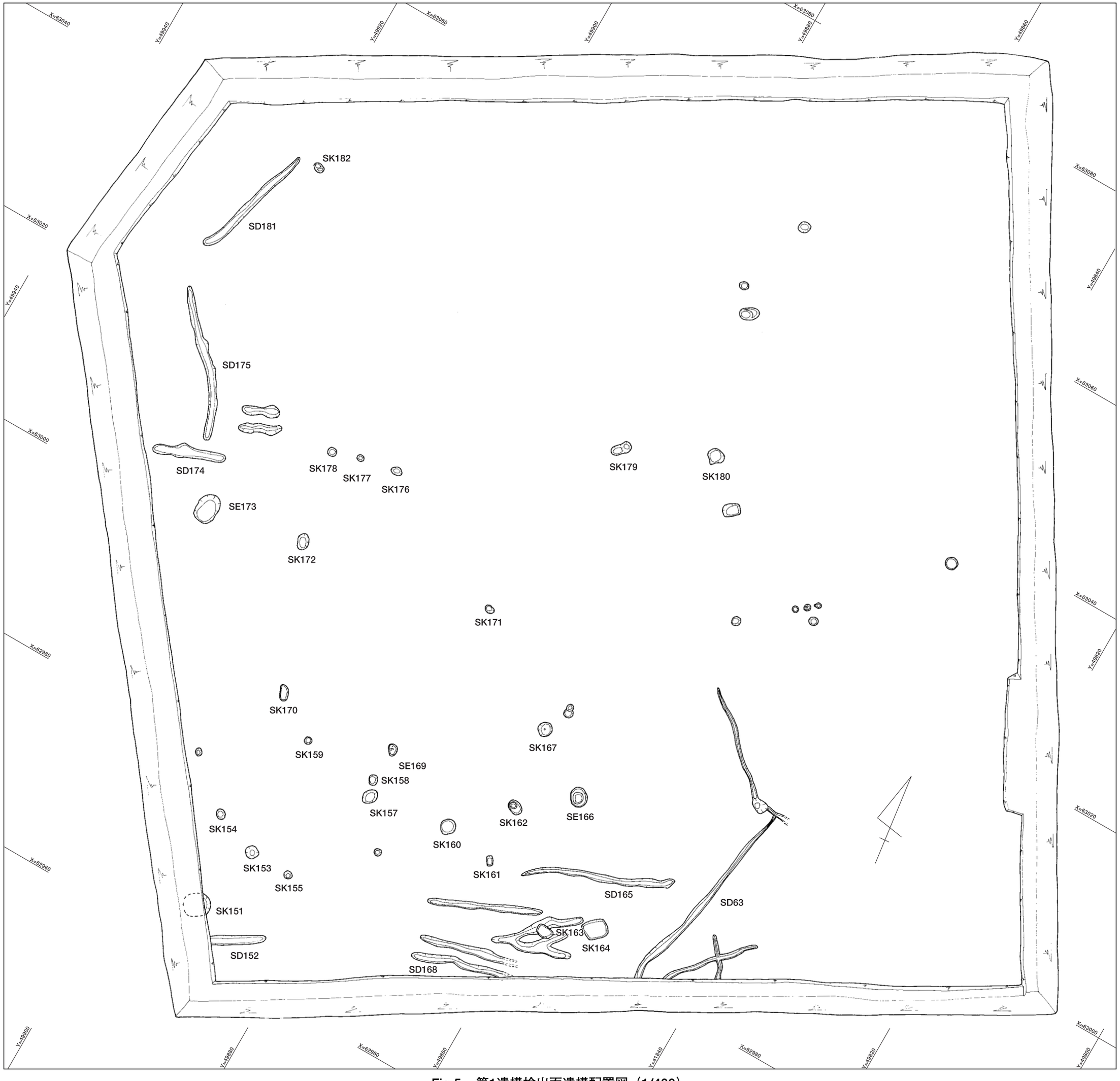


Fig.5　第1遺構検出面遺構配置図（1/400）

が出土している。

SD180（Fig. 5　PL. 4 ）

調査区北西隅部、SD175の北に位置する河川で、南－北方向に走行する。東岸は確認したが湧水が激しく調査安全面から東岸の位置を記録した後に埋め戻した。幅10m以上の規模を呈していると考えられる。龍泉窯産青磁碗が出土している。

SD181（Fig. 5　PL. 4 ）

調査区北西隅部、SD175の北に位置す直線的溝で、南－北方向に走行する。幅0.8～1.0m・深さ0.1m・全長14mを測る。溝の壁面は弧を描くように緩かに立ち上がる。

井　戸（SE）

SE166（Fig. 5 ,6　PL. 4 ,29）

調査区南半中央部、土壙SK162の東に位置する井戸である。掘形は、上部は楕円形、底部が円形の平面形を呈し、上部径1.6×2.1m、底部径1.0mを測る。底面は平坦で、壁面は底から0.5mほどは直に立ち上がり、上部は漏斗状に直線的な斜面を呈する。井戸底内には灰色砂が認められるものの、その上層には粘質土層が堆積していることから、意図的に埋め戻されていると考えられる。遺物は、黒色土器椀・土師器椀、須恵器甕、曲物が出土している。

SE169（Fig. 5 ,7　PL. 4 ,36）

調査区南西部、土壙SK158の北に位置する井戸である。掘形は楕円形を呈し、上部径0.9×1.1m、底部径0.7×0.9mを測る。底面は平坦であるが、北寄りで径0.4mを測る円形状に深くなっている。壁面は底から0.7mほどは直に立ち上がり、上部は漏斗状に直線的な斜面を呈する。井戸底近くには底枠として用いたと考えられる底板を取り除いた曲物桶が残る。遺物は、瓦質土器椀・須恵器甕が出土している。

SE173（Fig. 5 ,8　PL. 4 ,31）

調査区西辺部中央、溝SD174の南に位置する井戸である。掘形は、上部、底部とも楕円形の平面形を呈し、上部径2.1×2.9m、底部径1.8×2.5mを測る。底面は平坦で、壁面は底から0.4mほどは直に立ち上がり、上部は漏斗状に直線的な斜面を呈する。井戸内の底面から0.2m上部において瓢箪で製作した柄杓が出土している。遺物はそのほかに須恵器坏・弥生土器甕、曲物が出土している。

土　壙（SK）

SK151（Fig. 5　PL. 4 ,32）

調査区南西隅部、溝SD152の北に位置する。遺構の大半は排水溝により欠失しているが、残存する状況から円形の平面径が推定される。壙底面は平坦で、壁面は緩やかな弧を描きながら立ち上がる。規模は復原すると上面で径2.6m、壙底で1.8m、深さ0.6mを測る。遺物は、土師器椀・甕・台付椀、須恵器坏、石包丁が出土している。

SK153（Fig. 5　PL. 4 ）

調査区南西隅部、土壙SK154の南東に位置し、やや不整円形の平面径を呈する。壙底面は平坦で、壁面は緩やかな弧を描きながら立ち上がる。上面で径1.4m、壙底で0.6m、深さ0.5mを測る。

SK154（Fig. 5　PL. 4 ,33）

調査区南西部、土壙SK153の北西に位置する。楕円形の平面径を呈し長軸は北西－南東方向である。壙底面は平坦で、壁面は緩やかな弧を描きながら立ち上がる。上面で長径1.1m・短径0.9m、壙底で

長径0.6m・短径0.6m、深さ0.5mを測る。

SK155（Fig. 5　PL. 4）

調査区南西隅部、土壙SK153の南東に位置し、やや不整円形の平面径を呈する。壙底面は平坦で、壁面は緩やかな弧を描きながら立ち上がる。上面で径0.8m、壙底で0.5m、深さ0.15mを測る。

SK156（Fig. 5　PL. 4）

調査区南西部、土壙SK157の南に位置し、円形の平面径を呈する。壙底面は平坦で、壁面は緩やかな弧を描きながら立ち上がる。上面で径0.8m、壙底で0.4m、深さ0.4mを測る。

SK157（Fig. 5　PL. 4）

調査区南西部、土壙SK158の南に位置する。楕円形の平面径を呈し長軸は南西－北東方向である。壙底面は平坦で、壁面は緩やかな弧を描きながら立ち上がる。上面で長径1.7m・短径1.5m、壙底で長径1.1m・短径0.9m、深さ0.2mを測る。

SK158（Fig. 5　PL. 4）

調査区南西部、土壙SK157の北に位置する。楕円形の平面径を呈し長軸は南北方向である。壙底面は平坦で、壁面は緩やかな弧を描きながら立ち上がる。上面で長径1.0m・短径0.8m、壙底で長径0.8m・短径0.7m、深さ0.1mを測る。

SK159（Fig. 5　PL. 4）

調査区南西部、土壙SK170の南に位置し、円形の平面径を呈する。壙底面は平坦で、壁面は緩やかな弧を描きながら立ち上がる。上面で径0.8m、壙底で0.6m、深さ0.15mを測る。

SK160（Fig. 5　PL. 4）

調査区南西部、溝SD165の西に位置し、円形の平面径を呈する。壙底面は平坦で、壁面は緩やかな弧を描きながら立ち上がる。上面で径1.6m、壙底で1.3m、深さ0.4mを測る。

SK161（Fig. 5　PL. 4）

調査区南半部中央、土壙SK160と溝SD165の間に位置する。隅丸長方形の平面径を呈し長軸は南西－北東方向である。壙底面は平坦で、壁面は緩やかな弧を描きながら立ち上がる。上面で長辺1.0m・短辺0.7m、壙底で長辺0.8m・短辺0.6m、深さ0.3mを測る。

SK162（Fig. 5　PL. 4 ,34）

調査区南半部中央、土壙SK160の東に位置する。楕円形の平面径を呈し長軸は北西－南東方向である。壙底面は平坦で、壁面は緩やかな弧を描きながら立ち上がる。上面で長径1.6m・短径1.3m、壙底で長径1.5m・短径1.1m、深さ0.45mを測る。土壙としたが井戸の可能性が高い。

SK163（Fig. 5　PL. 4）

調査区南辺部中央、土壙SK164の西に位置する。楕円形の平面径を呈し長軸は東西方向である。壙底面は平坦で、壁面は緩やかな弧を描きながら立ち上がる。上面で長径1.8m・短径1.2m、壙底で長径1.6m・短径1.0m、深さ0.5mを測る。

SK164（Fig. 5　PL. 4）

調査区南辺部中央、土壙SK163の東に位置する。隅丸方形の平面径を呈し長軸は南西－北東方向である。壙底面は平坦で、壁面は緩やかな弧を描きながら立ち上がる。上面で長辺2.5m・短辺2.0m、壙底で長辺2.2m・短辺1.6m、深さ0.6mを測る。

SK167（Fig. 5　PL. 4 ,34）

調査区南半部中央、井戸SE166の北に位置し、円形の平面径を呈する。壙底面は平坦で、壁面は緩やかな弧を描きながら立ち上がる。上面で径1.5m、壙底で1.0m、深さ0.35mを測る。遺物は、凹み石

が出土している。

SK171（Fig. 5　PL. 4）

調査区中央、土壙SK167の北西に位置する。楕円形の平面径を呈し長軸は北西－南東方向である。壙底面は平坦で、壁面は緩やかな弧を描きながら立ち上がる。上面で長径1.1m・短径0.8m、壙底で長径0.8m・短径0.5m、深さ0.35mを測る。

SK172（Fig. 5　PL. 4）

調査区西半部中央、井戸ＳSE173の東に位置する。楕円形の平面径を呈し長軸は南北方向である。壙底面は平坦で、壁面は緩やかな弧を描きながら立ち上がる。上面で長径1.6m・短径1.2m、壙底で長径1.1m・短径0.7m、深さ0.5mを測る。

SK176（Fig. 5　PL. 4）

調査区西半部中央、土壙SK177の東に位置する。楕円形の平面径を呈し長軸は東西方向である。壙底面は平坦で、壁面は緩やかな弧を描きながら立ち上がる。上面で長径1.3m・短径0.8m、壙底で長径0.8m・短径0.5m、深さ0.2mを測る。

SK177（Fig. 5　PL. 4）

調査区西半部中央、土壙SK176の西に位置し、円形の平面径を呈する。壙底面は平坦で、壁面は緩やかな弧を描きながら立ち上がる。上面で径0.7m、壙底で0.4m、深さ0.2mを測る。

SK178（Fig. 5　PL. 4）

調査区西半部中央、土壙SK177の西に位置し、円形の平面径を呈する。壙底面は平坦で、壁面は緩やかな弧を描きながら立ち上がる。上面で径1.1m、壙底で0.6m、深さ0.35mを測る。

SK179（Fig. 5　PL. 4）

調査区中央、土壙SK180の西に位置する。楕円形の平面径を呈し長軸は南西－北東方向である。壙底面は２段で、壁面は緩やかな弧を描きながら立ち上がる。上面で長径2.3m・短径0.9m、壙底で長径0.6m・短径0.5m、深さ0.2mを測る。

SK180（Fig. 5　PL. 4）

調査区中央、土壙SK179の東に位置する。楕円形の平面径を呈し長軸は南西－北東方向である。壙底面は平坦で、壁面は緩やかな弧を描きながら立ち上がる。上面で長径1.8m・短径1.5m、壙底で長径1.2m・短径1.1m、深さ0.35mを測る。

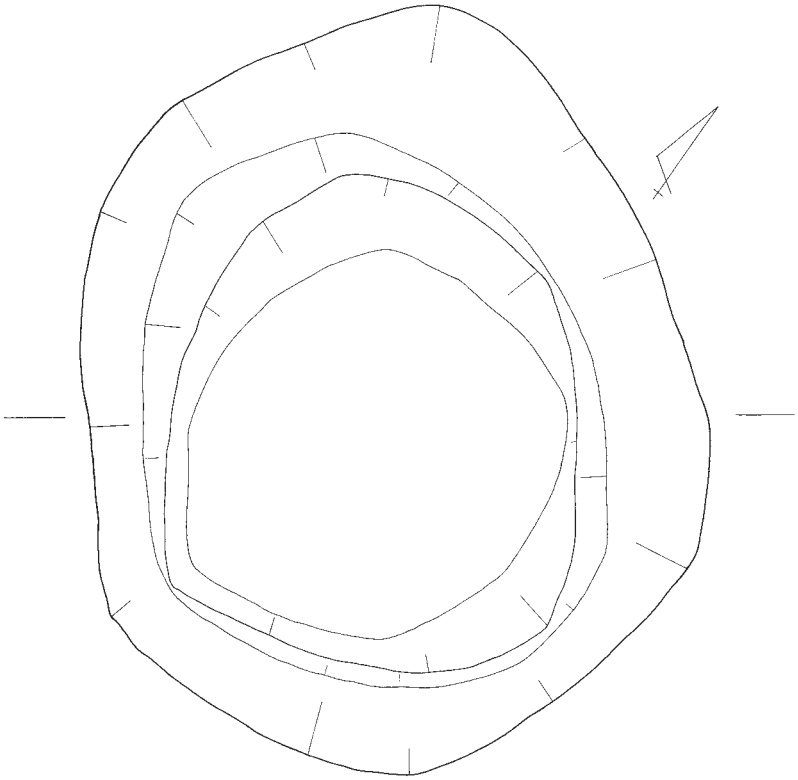
SK182（Fig. 5 ,9　PL. 4 ,35）

調査区北西部隅、溝SD181の東に位置する。楕円形の平面径を呈し長軸は北東－南西方向である。壙底面は平坦で、壁面は直に立ち上がる。上面で長径1.0m・短径0.8m、壙底で長径0.8m・短径0.6m、深さ0.7mを測る。土壙内からは土師器小皿・椀、瓦質土器椀、砥石、箸状木片が投棄されたような状態で出土している。井戸枠などの積極的根拠は認められないものの、遺構の形状から井戸の可能性が高い。

土　壙　墓（SK）

SK170（Fig. 5 ,10　PL. 4 ,36）

調査区西辺部中央、土壙SK159の北に位置する。楕円形の平面径を呈し長軸は北西－南東方向である。壙底面は平坦で、壁面は緩やかな弧を描きながら立ち上がる。上面で長辺1.7m・短辺0.7m、壙底で長辺1.6m・短辺0.6m、深さ0.1mを測る。墓壙底の中央には土師皿が出土しており、副葬品と思われる。遺物は、土師器小皿、黒色土器椀が出土している。



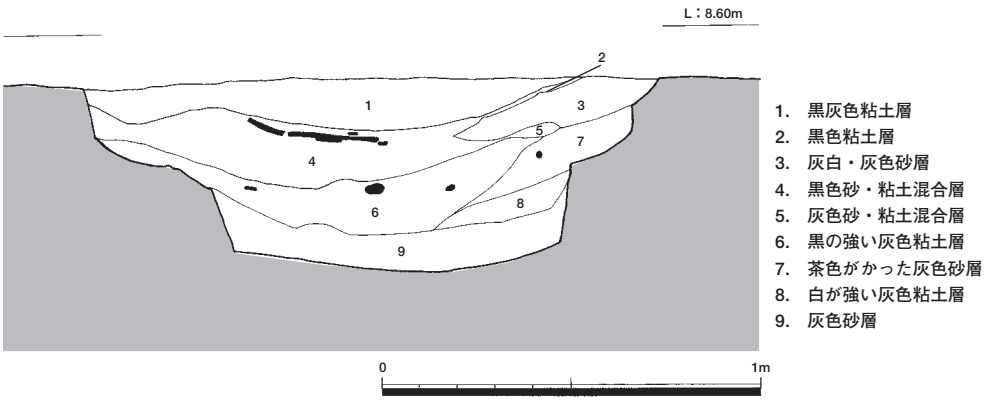


Fig.6　井戸SE166実測図（1/20）

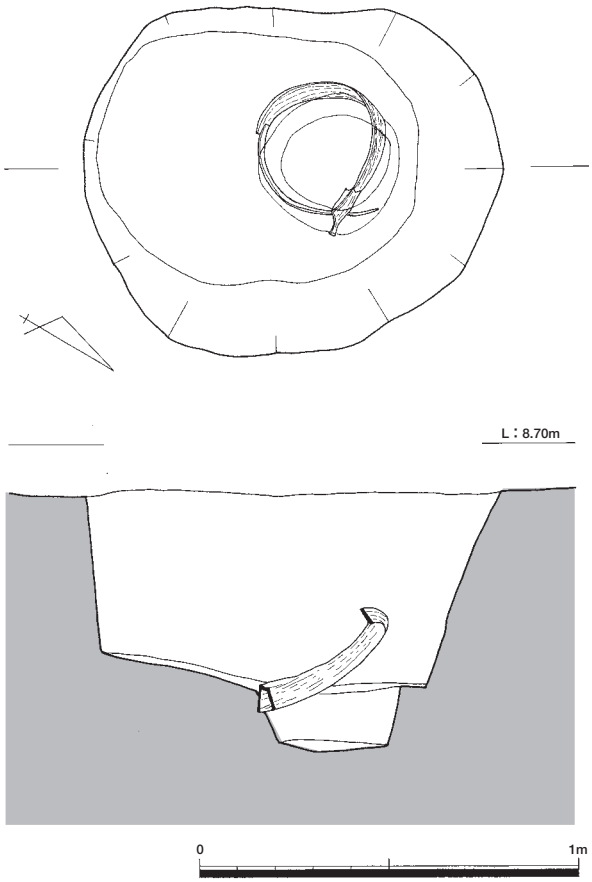


Fig.7　井戸SE169実測図（1/20）

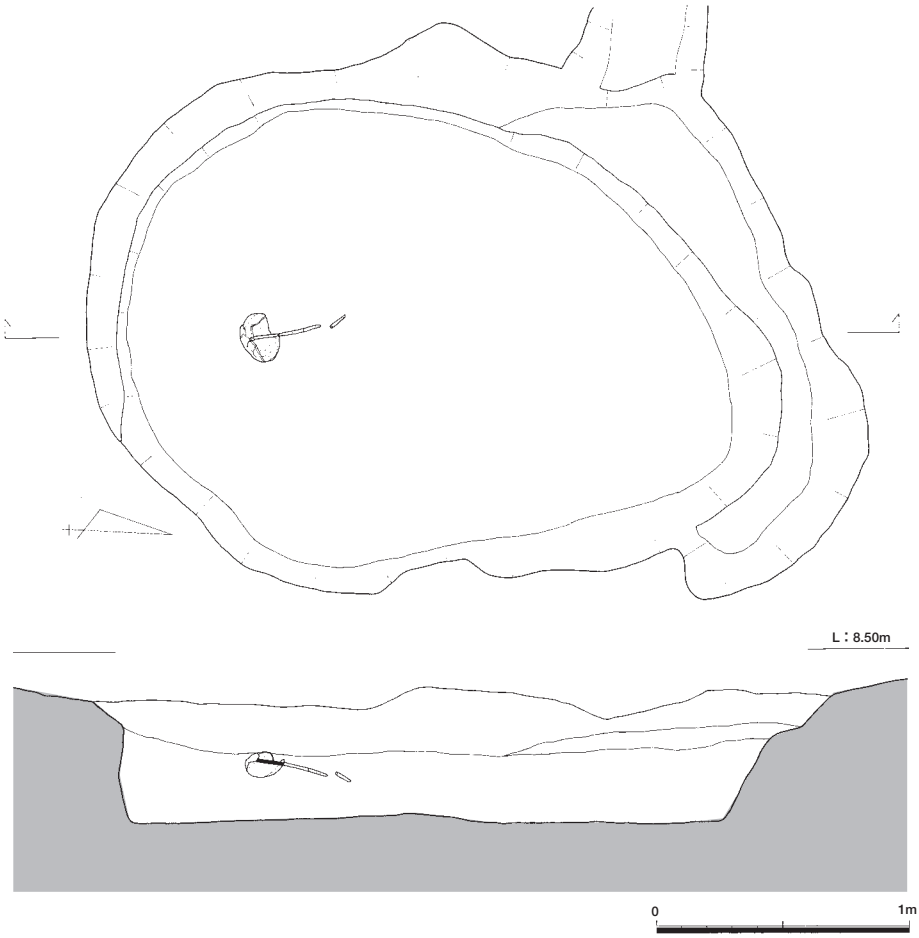


Fig.8　井戸SE173実測図（1/30）

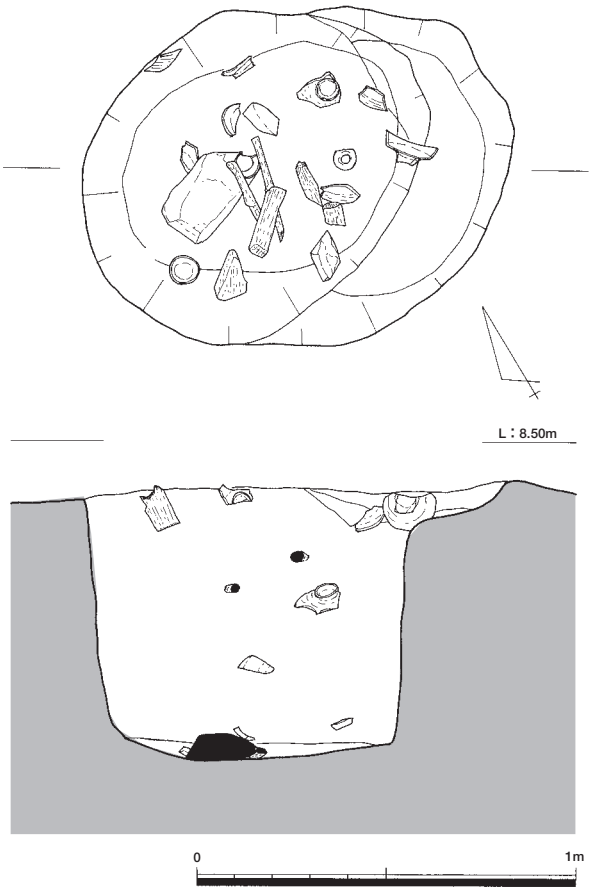


Fig.9　土壙SK182実測図（1/20）

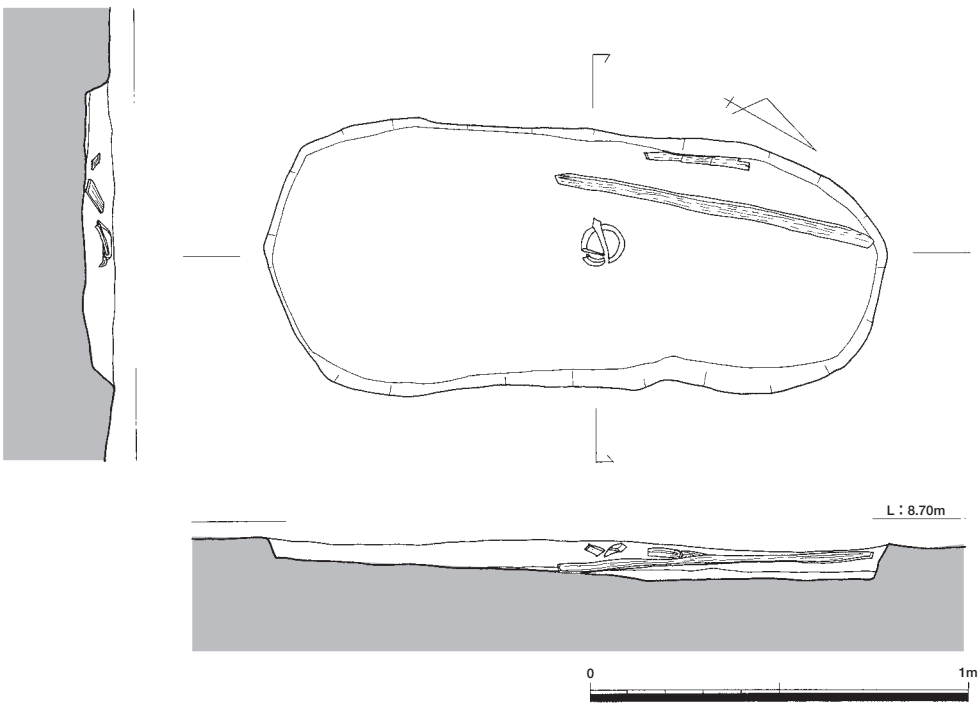


Fig.10　土壙墓SK170実測図（1/20）

（２）第２遺構検出面

水　田（SX）

SX183（Fig. 11　PL. 4 , 5 ,37～40）

水田は、洪水等の影響により畦畔の一部を流失しているものの、調査区全体的にはほぼ良好な状態で残存していた。水田は大規模な畦畔が南北と東西とに十字状に走行して大きく４区画に分割し、大畦畔で区画された水田をさらに小規模な畦畔で方形もしくは長方形に整然と区画している。

直線的に南北方向に走行する大畦畔は粘質土を盛り上げて形成しており、壁に杭などの補強的措置は認められない。肩幅0.8～1.3m、裾幅1.3～1.8m、高さ15～30cmを測り、真北より35°45´～36°00´西偏（磁北より29°06´～29°21´西偏）する。調査地に南接する第４次調査で検出した水田SX86畦畔と同じ方向に走行し、本調査地に北接する第６次調査においては延長部を検出している。さらに、第６次調査（平成12度調査）で検出している東西方向の大畦畔と本調査の東西方向の大畦畔との距離は約109mを呈していることは、この大畦畔が坪を区画する畦（坪境畦）とする考えを立証するひとつである。坪内を細分する小畦畔は、大畦畔と同じ構造で粘質土を盛り上げて形成し、断面形が蒲鉾形を呈している。直線的に走行し、畦畔規模や構造も坪の違いや水田による差異は認められない。肩幅0.2～0.4m、裾幅0.5～0.9m、高さ8～15cmを測る。

調査では便宜的に南北方向と東西方向に走行する大畦畔により区画された坪別に水田をSX183-A、SX183-B、SX183-C、SX183-Dとし、さらにそれぞれ個々の水田については枝番号を付した。

SX183-A-1

調査地南東に位置する坪の水田で、１枚の水田を確認した。平面形は方形を呈すると考えられが規模は不明。水口は水田の北辺西端部に位置し、開口した状態で検出した。水口が大畦畔に設けられていることは、水田の所在する坪に関係ないものと考えられる。

SX183-B-1～3

調査地南西に位置する坪の水田で、３枚の水田を確認した。いずれも平面形は方形を呈すると考えられが規模は不明。水口は水田の北辺畦畔においては認められない。

SX183-C-1～9

調査地北東に位置する坪の水田で、９枚の水田を確認した。全容を確認した水田は２枚で、長方形の平面形状を呈している。水田Ｃ－2・3・6・9においては水田を区画する畦畔が坪境畦畔に平行走行していないことから、水田の形状は方形もしくは長方形が大半を占めるが、必ずしも全ての水田の形状が方形ではないことは明かである。 水口は全ての水田に設けられてあり、開口した状態である。設置位置は必ずしも同じ箇所ではないものの、地形の高低に合致するように北側にある。水田Ｃ－4・5・7の東辺畦の方向は真北より35°30´西偏（磁北より28°51´西偏）する。

SX183-D-1～24

調査地南東に位置する坪の水田で、24枚の水田を確認した。全容を確認した水田は15枚で、長方形もしくは正方形の平面形状を呈しているが、畦の目が碁盤の目のようには通らない。水田Ｄ－3の東辺畦の方向は真北より35°45´西偏（磁北より29°06´西偏）し、水田Ｄ－4・8の東辺畦の方向は真北より36°30´西偏（磁北より29°51´西偏）している。水口は全ての水田で検出されていない。判明した水口から、坪内における用水の流れは南から北と東から西への二つのが存在しているものの、坪内への取り入れ口は不明である。

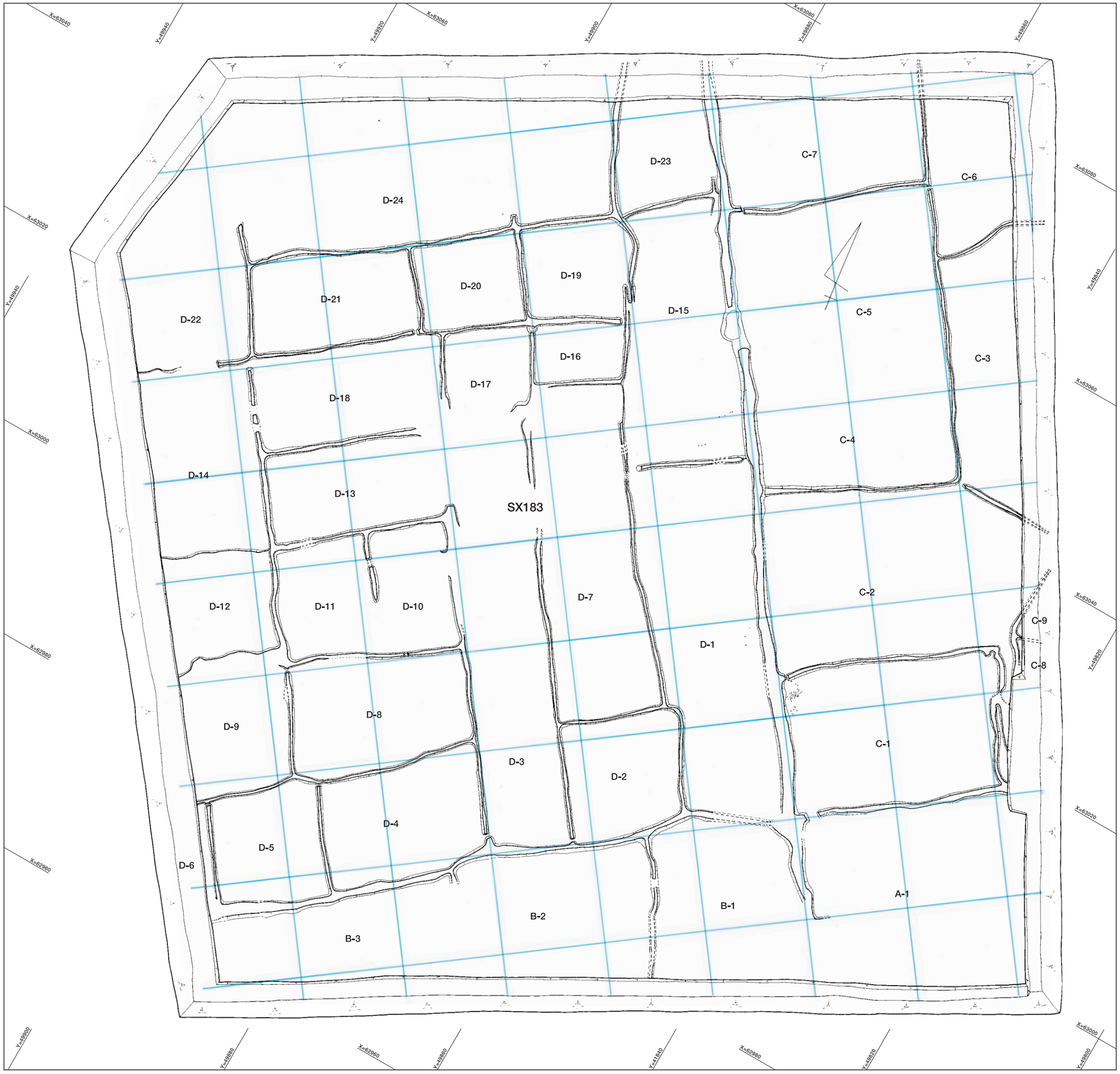


Fig.11　第2遺構検出面遺構配置図（1/400）

表1　水田SX183計測表

遺構No.	平面形	面積(㎡)	遺構No.	平面形	面積(㎡)
SX183−A−1	−	−	SX183−D− 7	縦長方形	358.76 (369.80)
SX183−B−1	−	−			
SX183−B−2	−	−	SX183−D− 8	縦長方形	213.43 (223.21)
SX183−B−3	−	−			
SX183−C−1	横長方形	333.40 (340.43)	SX183−D− 9	長方形	−
			SX183−D−10	縦長方形	104.61 (110.75)
SX183−C−2	【五角形】	−			
SX183−C−3	−	−	SX183−D−11	縦長方形	118.09 (122.48)
SX183−C−4	横長方形	240.73 (251.86)			
			SX183−D−12	横長方形	−
SX183−C−5	横長方形	396.88 (409.42)	SX183−D−13	横長方形	−
			SX183−D−14	−	−
SX183−C−6	−	−	SX183−D−15	縦長方形	301.87 (313.05)
SX183−C−7	【長方形】	−			
SX183−C−8	−	−	SX183−D−16	横長方形	57,13 (62.09)
SX183−C−9	−	−			
SX183−D−1	縦長方形	423.21 (443.05)	SX183−D−17	正方形	−
			SX183−D−18	横長方形	−
SX183−D−2	正方形	148.05 (156.60)	SX183−D−19	正方形	111.54 (119.67)
SX183−D−3	縦長方形	−	SX183−D−20	横長方形	97.56 (105.92)
SX183−D−4	横長方形	195.25 (205.03)			
			SX183−D−21	横長方形	162.55 (172.62)
SX183−D−5	正方形	134.00 (141.11)			
			SX183−D−22	−	−
SX183−D−6	−	−	SX183−D−23	縦長方形	−
			SX183−D−24	横長方形	−

※縦長方形:南北方向に長軸を呈する長方形水田　　横長方形:東西方向に長軸を呈する長方形水田

※面積は畦畔下肩で計測の数値。(　)内は畦畔上肩で計測の数値。

【　】は残存地形からの推定

（３）第３遺構検出面

第３遺構検出面は少なくとも二時期以上の複数の遺構面が混在している。遺構は大小の畦畔で区画された水田とその水田を流出させた河川・溝・流路からなる。

河　川（SD）

SD190（Fig. 12　PL. 6 ,41～43）

調査区南西隅～北東隅に位置し、南西隅から中央部までは直線的に流れるものの、途中で向きを北へ変える。流路変換点には堰SX209が設けられている。左岸には径３～５㎝前後の丸太を打ち込んだ杭列SX207が、右岸にも杭列の一部と考えられる杭列SX208、206、204が設けられていることから、本来は両岸全域において設けられていた可能性が高い。幅1.2～1.5m、深さ0.4m、全長83.5mを測る。遺物は、須恵器坏・蓋・甕、弥生土器甕・大型甕・高坏・器台・鉢・甑、石製紡錘車円盤・石包丁・石剣・扁平片刃石斧が出土している。

SD191（Fig. 12　PL. 6 ,41,45）

調査区南西隅に位置する直線的東西溝で、西端部でSD190と合流し、水田SX212の中央部を壊す。幅1.2～1.5m、深さ0.4m、全長83.5mを測る。遺物は、須恵器壺、弥生土器甕・高坏・器台・鉢・甑、石剣・扁平片刃石斧・凹み石が出土している。

SD193（Fig. 12　PL. 6 ,41,46）

調査区北西隅に位置する南北溝でやや蛇行し、水田SX192を壊す。幅1.2～1.5m、深さ0.4m、全長83.5mを測る。遺物は、弥生土器甕・高坏・土製柄杓が出土している。

SD194（Fig. 12　PL. 6 ,41,47）

調査区東辺部中央から北辺部中央に位置する蛇行溝で、水田SX200・212を壊す。幅1.2～1.5m、深さ0.4m、全長83.5mを測る。遺物は、土師器椀、弥生土器甕・壺・高坏、石剣が出土している。

SD195（Fig. 12　PL. 6 ,41,48,52）

調査区南西部～北東部に位置する南北溝で、水田SX200－19の西辺畦からSX200に流れ込み、途中で形跡がない。幅1.2～1.5m、深さ0.4m、全長83.5mを測る。板状木製品が出土している。

SD196（Fig. 12　PL. 6 ,41,42,49,51）

調査区南西部～北東部に位置する南北溝でやや蛇行する。幅1.2～1.5m、深さ0.4m、全長83.5mを測る。遺物は、土師器蛸壺、須恵器坏、弥生土器甕・鉢、杵の木製品が出土している。

SD197（Fig. 12　PL. 6 ,41,50,51）

調査区北東部に位置する南北溝で、水田の可能性がある。幅1.2～1.5m、深さ0.4m、全長83.5mを測る。遺物は、須恵器甕・高坏、弥生土器甕・鉢、鍬・板状木製品が出土している。

SD198（Fig. 12　PL. 6 ,41,52）

調査区北東部に位置する南北溝で、SD190が途中から分流したと考えられる。幅1.2～1.5m、深さ0.4m、全長83.5mを測る。遺物は、弥生土器甕・小型鉢が出土している。

SD199（Fig. 12　PL. 6 ,41,53）

調査区南部中央に位置する南北溝で、北端で溝SD196と合流する。幅1.2～1.5m、深さ0.4m、全長83.5mを測る。遺物は、弥生土器小型鉢、鍬・棒状木製品が出土している。

SD215（Fig. 12　PL. 6 ,41,42）

調査区北東部に位置する南北溝で、SD190途中から分流したと考えられる。幅1.2～1.5m、深さ0.4

Fig.12　第3遺構検出面遺構配置図（1/400）

m、全長83.5mを測る。遺物は、須恵器坏が出土している。

堰（SX）

SX202（Fig. 12,13　PL. 6 , 9 ,41,58）

水田SX192－１の南辺畦畔に位置し、水口も兼ねる。全長７m、幅0.5mにわたり丸太杭を打ち込み、割いた板を杭間に挟めて築いている。

SX203（Fig. 12,14　PL. 6 , 9 ,41,50,51）

溝SD196とSD197とを画す堰、もしくは溝SD196の護岸である。全長11m、幅1mにわたり径５㎝前後の丸太杭を２列に打ち込でいる。

SX209（Fig. 12,15　PL. 6 , 9 ,41,43,44）

調査区南半部中央、溝SD190が流れの方向を北へ変換する地点に位置し、溝SD190を横断するように設けている。全長９m、幅0.7mに径３～５㎝を測る丸太を弓なりに密に打ち込で築いている。頭部では植物を杭列間に積めている。

SX213（Fig. 12　PL. 6 ,41）

水田SX200－27の西辺畦畔に位置し、溝SD194・195に対応したものと考えられる。全長７m、幅0.5mにわたり径３～５㎝を測る丸太を打ち込み、割いた板を杭間に挟めて築いている。本来は自然流路であったSD197を水田化するために設けた土手の補強的性格を持つものかも知れない。

杭　列（SX）

SX95（Fig. 12　PL. 6 ,41）

調査区南辺部中央、水田SX214の西側に位置する。径３㎝前後を測る丸太杭を南北方向に走行する大畦畔に重なるように打ち込んでいる。第４次調査地において検出した杭列の延長部である。

SX204（Fig. 12,14　PL. 6 ,41）

調査区北東部、溝SD196の西岸に位置する。５mの長さで直線的に径３㎝前後を測る丸太を２列に打ち込んでいる。

SX205（Fig. 12　PL. 6 ,41）

調査区北東部、杭列SX204の西に位置する。全長約４mを測り、杭列SX204とは東端部で接合する。径３㎝程の丸太を打ち込んだ杭列である。

SX206（Fig. 12　PL. 6 ,41）

調査区北東部、溝SD196の西岸に位置する。13mの長さで直線的に径３㎝前後を測る丸太を２列に打ち込んでいる。

SX207（Fig. 12　PL. 6 ,41）

杭列は溝SD190の左岸に位置する。護岸的様相が強く、本来は溝SD190の両岸に沿って設けられていた可能性が高い。

SX208（Fig. 12　PL. 6 ,41）

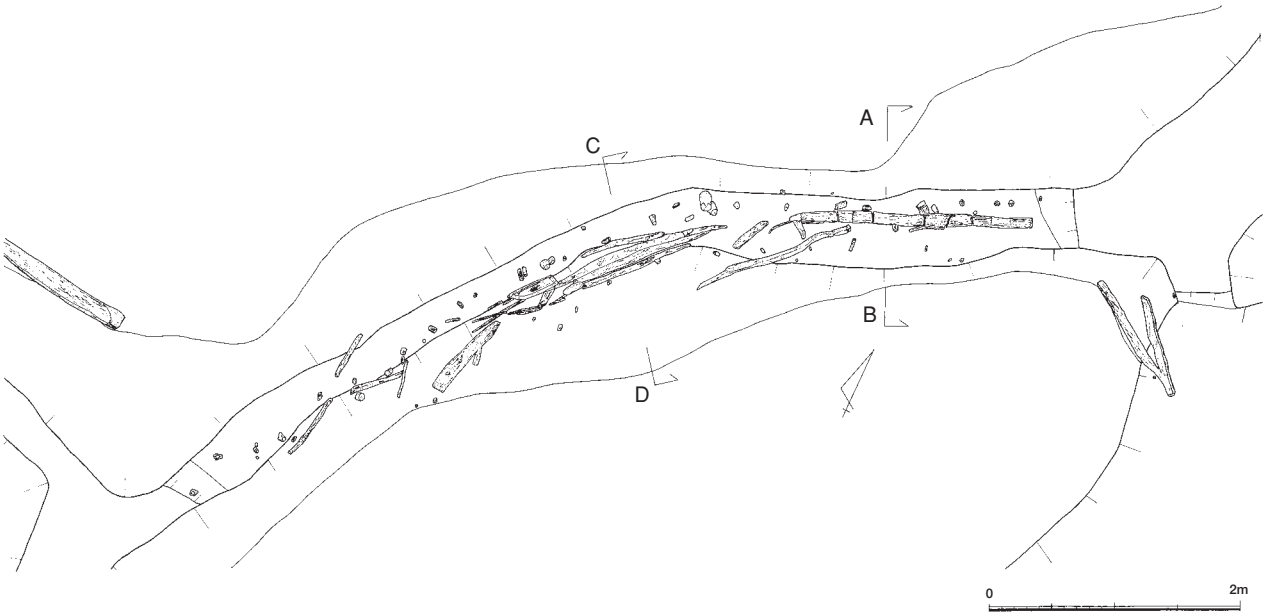
杭列は溝SD190の東岸に位置し、径３㎝前後の丸太を打ち込んだ杭列である。

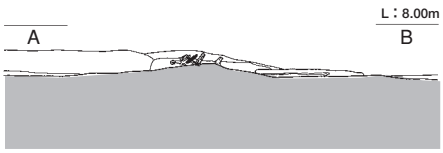
SX210（Fig. 12　PL. 6 ,41）

調査区東辺中央、溝SD197の南岸に位置する。径３㎝前後の丸太を打ち込んだ杭列である。

SX211（Fig. 12　PL. 6 ,41）

調査区西辺中央部、杭列SX207の北側３mに位置する。径３㎝程の丸太杭列である。杭列SX207に平行して定置することから同時期の可能性が高い。





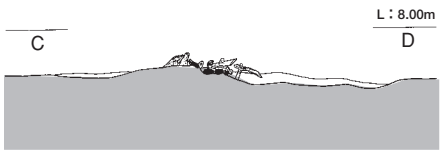


Fig.13　堰SX202実測図（1/60）

Fig.14　堰SX203実測図（1/60）

Fig.15　堰SX209実測図（1/60）

SX216（Fig. 12　PL. 6 ,41）

調査区西北部、水田SX200の西辺部を画す大畦畔と溝SD194の間に位置する。30mにわたり直線的に径３㎝程の丸太を打ち込んでいる。

水　田（SX）

調査区東辺部を除く全域で良好な状態で５群の水田を検出した。水田は断面形が台形を呈し、上面幅0.5～1.0m、裾幅0.8～1.4m、高さ15～20㎝を測る大畦畔で画された範囲を断面形が蒲鉾形を呈し、上面幅0.1～0.5m、裾幅0.5～0.9m、高さ6～15㎝を測る小畦畔でさらに区画している。

SX192（Fig.12　PL. 6 , 7 ,41,46,54～58,60）

調査区北西隅、水田SX200の西側に位置する水田群で、17枚の水田を検出した。小畦畔で不整形な四角形に区画し、面積、形状とも一定ではない。水田群の用水取り入れ口は、水田１の南辺畦に位置する堰SX202の構造が杭や横架材のみで築かれてはなく粘質土を蒲鉾状に盛り上げていることから、同所が妥当と考えられる。水田の水口の状態は水田群においては開放状態（1～9）と閉塞状態（10～17）とが混在しているが、水口が開放している水田は大畦畔に沿ってある。この混在は洪水による水田埋没の時期的なものなのか、耕作方法の違いなのかは不明である。一般的には南側の水田１から取り入れた水を大畦畔に沿った水田に入れ、さらに各水田から西側の水田へ入れると考えられる。水田の一部は溝SD193によって壊されている。

SX200（Fig.12　PL. 6 ～ 8 ,41,46,47,50,52,54,55,57,59～63）

調査区中央部から北半部中央に位置し、39枚の水田を検出した。小畦畔で不整形な四角形～六角形に区画し、面積、形状とも一定ではない。水口は全て開放した状態で、一部を除き東西方向に走行する畦に設けている。用水は水田群の南西隅で取り入れて南辺の水田列19→14→5を最初に満たした後、さらに27→28→29→36→38→39、27→28→29→30→31→32→33、27→28→29→30→31→38→39、19→20→21→22→23→24→25→26→32→33、14→15→16→17→18→25→26→32→33、14→15→16→17→8→9→10→26→32→33、11→12→13→17→18→25→26→32→33、11→12→13→17→8→9→10→26→32→33、5→6→7→8→9→10→26→32→33、1→2→3→4→10→26→32→33のように順に南から北方向へ直線的に流している。水田群の南東隅部から東辺部にかけては溝SD190によって壊されている。

SX201（Fig. 12　PL. 6 ,41,55）

調査区東半部中央、溝SD196の東側に位置する水田で、1枚の水田を検出した。形状は不整形な三角形で、水口は南東隅に開放状態で検出した。

SX212（Fig. 12　PL. 6 , 7 ,41,45,47）

調査区南西隅、水田SX200の南隣りに位置する水田群で、16枚の水田を検出した。小畦畔で不整形な方形に区画している。面積、形状とも一定ではない。水田群の中央部を溝SD190・191が流れて壊しているために水口および用水の流れは判明しない。

SX214（Fig. 12　PL. 6 ,41）

調査区南東隅に位置する水田群で、6枚の水田を検出した。小規模な畦畔で不整形な方形に区画し、面積、形状とも一定ではない。他の水田畦畔が全体的に南－北方向に走行するるのに対して、北西－南東方向に走行する違いを呈する。水口は大半の水田が解放状態で、用水の流れは基本的に南から北方向である。

表2　水田SX192計測表

遺構No.	平面形	面積(㎡)	遺構No.	平面形	面積(㎡)
SX192−1	変形四角形	127.51 (133.45)	SX192−9	四角形	85.06 (89.47)
SX192−2	四角形	49.96 (54.67)	SX192−10	四角形	65.02 (71.44)
SX192−3	四角形	59.35 (64.79)	SX192−11	変形四角形	−
			SX192−12	−	−
SX192−4	四角形	61.51 (66.19)	SX192−13	−	−
			SX192−14	−	−
SX192−5	四角形	−	SX192−15	−	−
SX192−7	−	−	SX192−17	−	−
SX192−8	四角形	108.42 (112.78)			

※面積は畦畔下肩で計測の数値。(　)内は畦畔上肩で計測の数値。

表3　水田SX201計測表

遺構No.	平面形	面積(㎡)	遺構No.	平面形	面積(㎡)
SX201−1	三角形	174.71 (180.79)			

※面積は畦畔下肩で計測の数値。(　)内は畦畔上肩で計測の数値。

表4　水田SX212計測表

遺構No.	平面形	面積(㎡)	遺構No.	平面形	面積(㎡)
SX212−1	【四角形】	−	SX212− 9	四角形	−
SX212−2	【四角形】	−	SX212−10	【四角形】	−
SX212−3	【四角形】	−	SX212−11	四角形	−
SX212−4	【四角形】	−	SX212−12	四角形	−
SX212−5	四角形	113.17 (118.09)	SX212−13	【四角形】	−
			SX212−14	四角形	87.62 (93.09)
SX212−6	四角形	−			
SX212−7	【四角形】	−	SX212−15	−	−
SX212−8	四角形	53.39 (55.13)	SX212−16	【五角形】	−

【　】は残存地形からの推定
※面積は畦畔下肩で計測の数値。(　)内は畦畔上肩で計測の数値。

表5 水田SX200計測表

遺構No.	平面形	面積(㎡)	遺構No.	平面形	面積(㎡)
SX200－1	【四角形】	－	SX200－21	四角形	58.32 (62.64)
SX200－2	【四角形】	－			
SX200－3	【四角形】	－	SX200－22	四角形	36.18 (40.01)
SX200－4	【四角形】	－			
SX200－5	【四角形】	－	SX200－23	六角形	55.11 (60.82)
SX200－6	四角形	87.50 (97.14)	SX200－24	五角形	42.65 (45.89)
SX200－7	長方形	100.90 (106.61)	SX200－25	七角形	79.65 (84.10)
SX200－8	長方形	71.53 (76,83)	SX200－26	五角形	107.82 (112.96)
SX200－9	五角形	37.15 (40,02)	SX200－27	四角形	169.73 (179.97)
SX200－10	【五角形】	－			
SX200－11	四角形	94.31 (99.74)	SX200－28	四角形	55.86 (61.13)
SX200－12	四角形	56.76 (61.42)	SX200－29	六角形	98.29 (103.09)
SX200－13	四角形	54.71 (58.44)	SX200－30	五角形	33.57 (36.88)
SX200－14	四角形	76.95 (83.05)	SX200－31	五角形	66.32 (70.56)
SX200－15	五角形	62.13 (66.84)	SX200－32	五角形	108.24 (115.91)
SX200－16	四角形	93.56 (98.10)	SX200－33	－	－
SX200－17	五角形	56.23 (60.76)	SX200－34	四角形	50.20 (55.24)
SX200－18	五角形	47.15 (43.54)	SX200－35	五角形	77.15 (78.84)
SX200－19	四角形	52.05 (56.18)	SX200－36	五角形	66.67 (77.35)
SX200－20	四角形	52.29 (55.96)	SX200－37	【四角形】	－
			SX200－38	－	－
			SX200－39	－	－

【　】は残存地形からの推定

※面積は畦畔下肩で計測の数値。(　)内は畦畔上肩で計測の数値。

（４）第４遺構検出面

第４遺構検出面では河川・溝・土壙・小穴などを検出したが、建物跡などの住居遺構などについては認められない。第４次調査における第４遺構検出面では、弥生時代前期、弥生時代後期～古墳時代初頭の遺物を出土した河川・溝・土壙等を確認したが、第５次調査では第４遺構検出面に第５遺構検出面が加わった。基本的な時代認識は第４遺構検出面が弥生時代後期～古墳時代初頭、第５遺構検出面は弥生時代前期を中心とする。

河川・溝（ＳＤ）

SD104（Fig. 16～18　PL. 10,64,77）

調査区東半部に位置する南北溝で、調査区南側の第４次調査で検出した溝の北側延長部にあたる。調査区南辺中央部から僅かに蛇行気味に北上し、北東部で溝底が立ち上がり北端となる。溝の断面形は半円形を呈し、壁面は直線的な斜面を呈する。溝底には溜り部分が認められ、底面は平坦ではなく大きな起伏がいくつか見られる。幅5.5～10.2m、深さ1.1m、全長75mを測る。遺物は、弥生土器甕・壺・高坏、石斧・石鏃・石包丁などの他に鍬・鋤・斧柄・沓・槽・杵・梯子・柱などの木製品・建築部材が多数出土している。

SD221（Fig. 16　PL. 10,64）

調査区北西部に位置する南北溝で、やや蛇行気味に北流する。北端は調査区外へ続き、溝の規模が北へ位置するにしたがって僅かに大きくなる。幅1.4～3.0m、深さ0.05～0.15m、全長23.3mを測る。溝底は若干の凸凹が認められるものの全体的には平坦を呈し、壁面は緩やかな弧を描きながら立ち上がる。遺物は、弥生土器甕・鉢、石斧が出土している。

SD222（Fig. 16　PL. 10,64）

調査区北半部中央に位置する東西溝で、僅かに弓なりの形状を呈する。断面形は半円径を呈し、底面は平坦で緩やかな流れであったことを示す。西端は溝SD221で壊され、東端は土壙SK249を中心とする大規模なくぼみへと繋がることから、河川からの用水路的性格を有していた可能性がある。さらに遺構の時期的前後関係から、溝SD221の先駆的溝であったことも考えられる。幅0.4～0.8m、深さ0.1～0.2m、全長51mを測る。

SD223（Fig. 16　PL. 10,64）

調査区東北部、溝SD222東端部の北に位置する小規模な南北溝で、僅かに弓なりの形状を呈する。幅0.3～0.8m・深さ0.08～0.11m・全長22mを測る。溝の北端部は調査区外へつづき、南端部は土壙SK249の北側付近で底面が立ち上がり消滅する。溝の底面は平坦で、壁面は弧を描くように緩かに立ち上がる。遺物は、弥生土器甕、投弾型土製品が出土している。

SD231（Fig. 16　PL. 10,64）

調査区東半部中央に位置する小規模な東西溝で、土壙SK230の北端部から西方向の土壙SK249へ向かって流れる。幅0.2～0.9m・深さ0.1～0.15m・全長6.2mを測る。溝の東端部は土壙SK249内で消滅し、西端部は土壙SK230と一体化している。溝の底面は平坦で、壁面は弧を描くように緩かに立ち上がる。遺物は弥生土器甕が出土している。

SD232（Fig. 16　PL. 10,64）

調査区北西部隅に位置する。東岸である落ち込み際を検出したが全容は不明である。大規模な凹み地の可能性も考えられる。底面は平坦で全体的に北西方向へ傾斜する。壁面は緩やかな弧を描きながら短く立ち上がる。遺物は、弥生土器甕、石包丁が出土している。

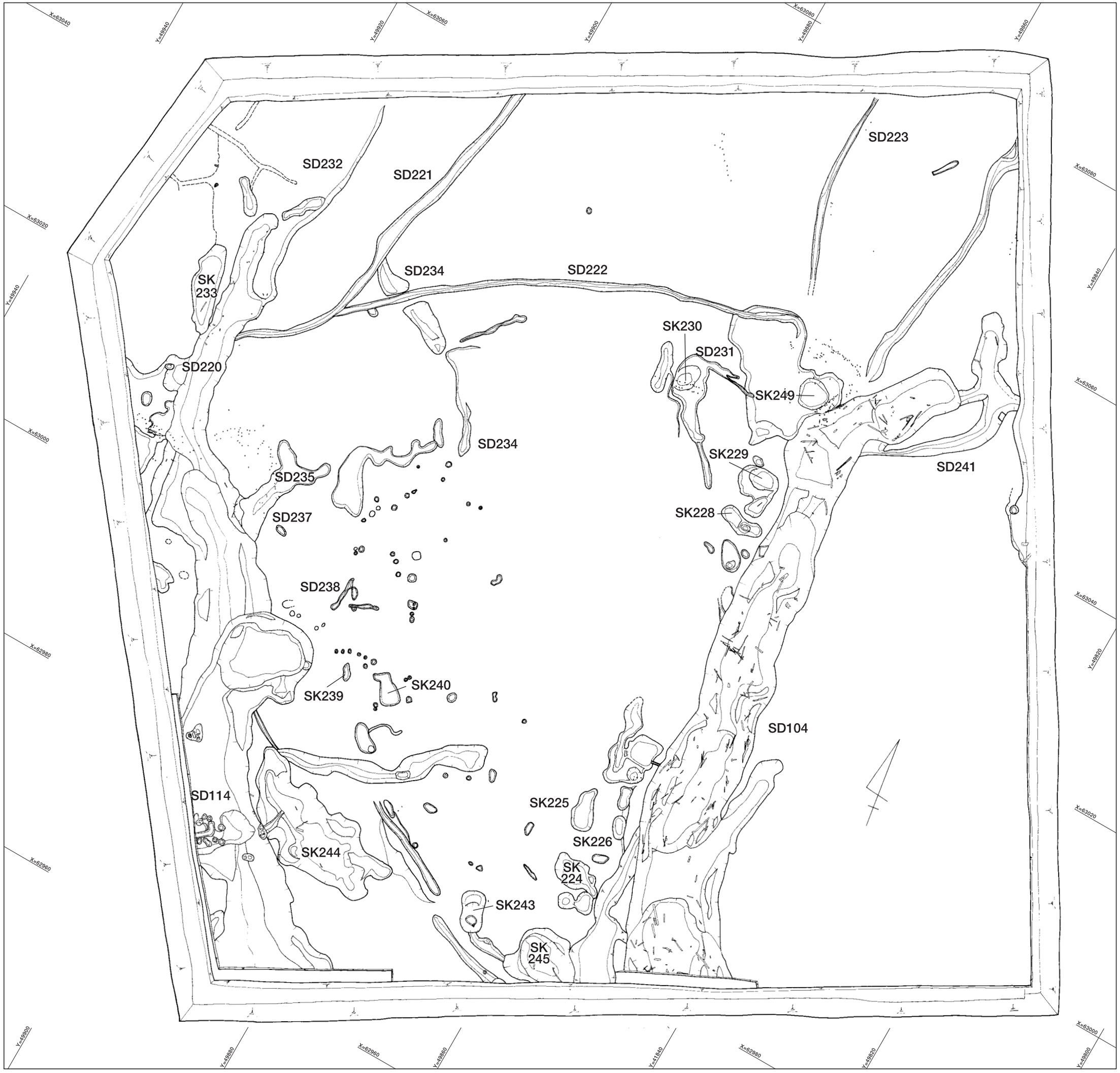
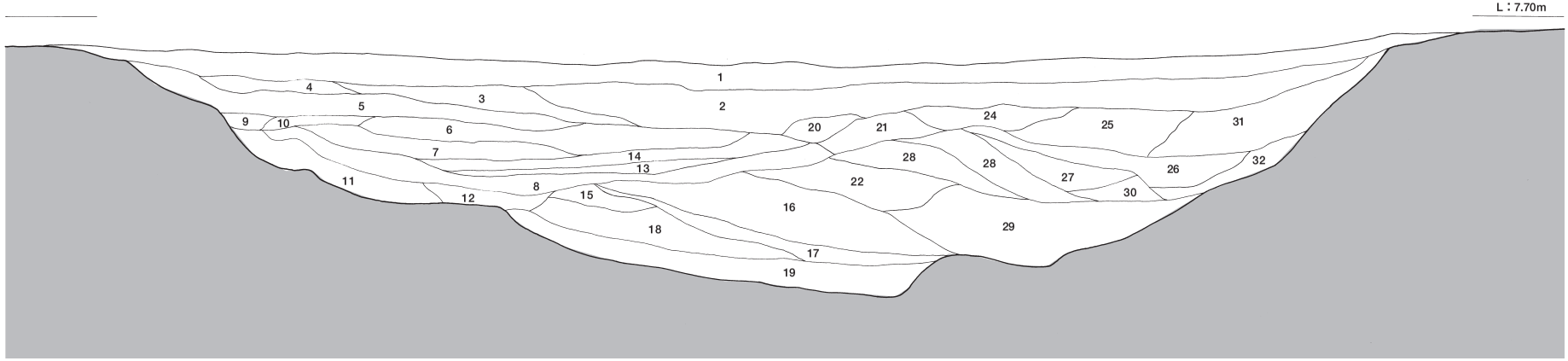


Fig.16　第4遺構検出面遺構配置図（1/400）



1. 茶灰色粘質土
2. 暗茶灰色粘質土（砂粒多く含む）
3. 暗茶灰色粘質土（②より粗砂多く含む）
4. 黄白色砂
5. 暗茶灰色粘質土
6. 暗黄灰色砂質土
7. 黄白色粗砂
8. 暗灰色粘土を含む暗黄灰色砂
9. 暗灰色粘性砂質土
10. 暗灰色砂質土
11. 暗灰色粘質土
12. 白色細砂
13. 暗灰色粘質土
14. 暗黄褐色粗砂
15. 暗灰色砂質土
16. 黄白色粗砂
17. 灰色粘質土
18. 白色砂（1～2mm砂粒含む）
19. 灰色粘質土
20. 暗黄灰色粘質土
21. 暗黄灰色砂
22. 黄白色粗砂
23. 暗灰色粘質土を含む黄白色砂
24. 暗灰色砂質土（3～5mmの粗砂多く含む）
25. 暗灰色砂質土（3～5mmの粗砂含む）
26. 暗灰色粘質土
27. 暗灰色砂質土（黄白色粗砂少し含む）
28. 暗灰色砂質土を含む黄白色粗砂
29. 暗灰色粘質土（3～5mmの粗砂少し含む）
30. 暗灰色粘質土（3～5mmの粗砂含む）
31. 暗灰色粘質土（3～5mmの粗砂少し含む）
32. 暗灰色砂質土（粗砂多く含む）

Fig.17　溝SD104土層実測図（1/50）

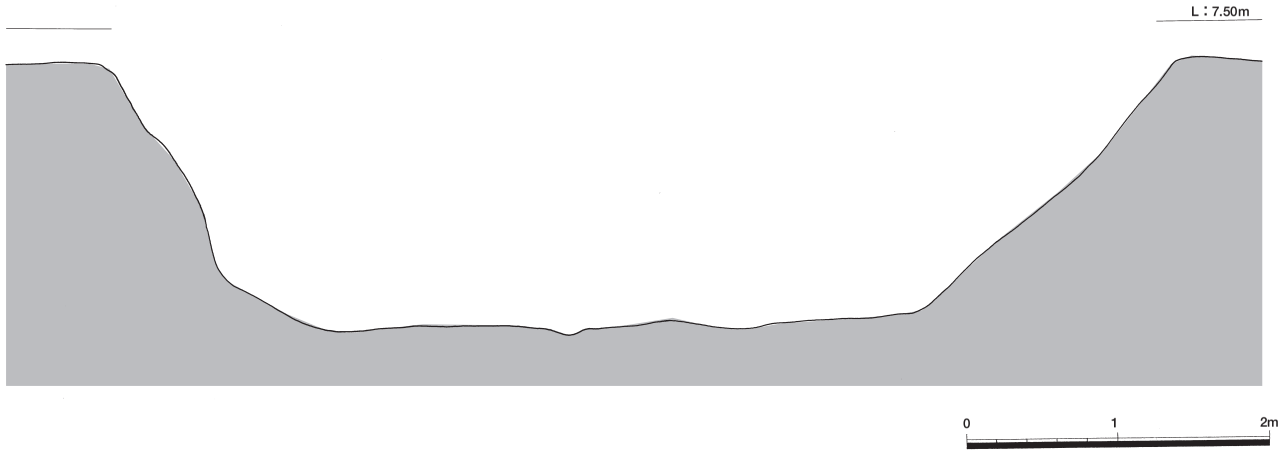


Fig.18　溝SD104断面実測図（1/50）

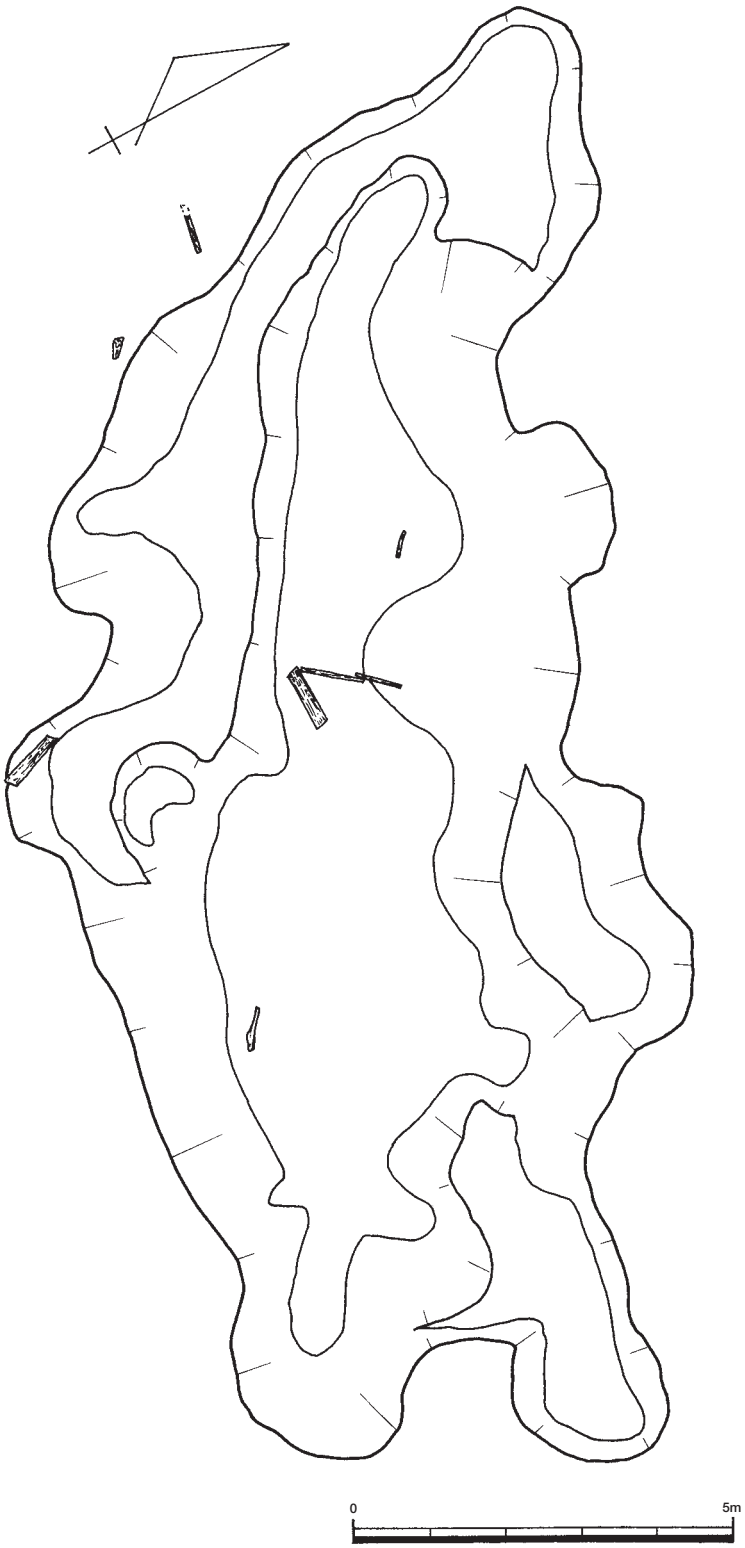


Fig.19　土壙SK244実測図（1/100）

SD234（Fig. 16　PL. 10,64）

調査区北半部中央、溝SD221と溝SD222との分岐点近くに位置し、溝SD222に壊されている。幅が広く土壙的な形状を示す。北端部は溝SD221によって壊されて不明、南端部は調査区中央部で溝底が立ち上がり消滅する。溝は0.08～0.1mと浅く、底面は起伏が激しくて溝の形状が途切れる部分も認められることから、溝の大半が削平を受けて本来の溝の底面だけが残存していたものと考えられる。壁面は弧を描くように緩かに立ち上がる。遺物は、弥生土器甕が出土している。

SD238（Fig. 16　PL. 10,64）

調査区西半部中央に位置する小規模な南北溝である。断面形は半円形を呈し、溝底は平坦である。溝の両端は底面から壁面へ向かって緩やかに立ち上がる。幅0.2～0.6m、深さ0.1m、全長4.2mを測る。遺物は、弥生土器壺が出土している。

SD241（Fig. 16　PL. 10,64）

調査区北西隅に位置する東西溝であるが蛇行する。西端部は溝SD104と結合し、東端部は調査区外へのびることから、溝SD104の支流的溝とも考えられるが、溝SD104の先駆的可能性も残る。幅0.6～2.6m、深さ0.2m、全長18mを測る。遺物は、弥生土器甕・高坏が出土している。

土　壙（SK）

土壙は調査区の中央部を中心に20基程を検出したが、検出した土壙の大多数が不整形な平面形を呈しており、河川・流路などの底が深くなった溜まりの残存的遺構も含まれる。

SK224（Fig. 16　PL. 10,64）

調査区南半部中央、土壙SK225の南５mに位置する。掘形は不整形な楕円形を呈し、長軸は東西方向である。上面で長径6.1m・短径3.1m・深さ0.25mを測る。底面平坦で、四角形平面形を呈し、東方向に細く延びる。長軸は東西方向で、長径4.8m・短径2.4mを測る。壁面は緩やかな直線的な斜面を呈する。遺物は弥生土器甕が出土している。

SK225（Fig. 16　PL. 10,64）

調査区南半部中央、溝SD104の西６mに位置する。楕円形の平面形を呈し上面の長軸は南北方向である。上面で長径4.7m・短径2.5m、壙底で長径4.3m・短径1.5m、深さ0.１mを測る。壙底面は平面形も上面とほぼ同様な形状を呈し、平坦である。壁面は緩やかな直線的な斜面を呈する。遺物は弥生土器甕が出土している。

SK226（Fig. 16　PL. 10,64）

調査区南半部中央、土壙SK225の東３mに位置する。楕円形の平面形を呈し上面の長軸は南北方向である。上面で長径2.5m・短径1.4m、壙底で長径1.6m・短径0.8m、深さ0.2mを測る。壙底面は平面形も上面とほぼ同様な形状を呈し、平坦である。壁面は緩やかな直線的な斜面を呈する。遺物は弥生土器甕が出土している。

SK227（Fig. 16　PL. 10,64）

調査区南半部中央、溝SD104の西２mに位置する。掘形は隅丸方形の平面形を呈する。上面で東西3.2m・南北3.1m・深さ0.3mを測る。底面も隅丸方形の平面形を呈し、東西2.5m・南北2.3mを測る。壙底面は平坦で、壁面は直線的な斜面を呈する。遺物は弥生土器甕が出土している。

SK228（Fig. 16　PL. 10,64）

調査区東半部中央、溝SD104の西１mに位置する。楕円形の平面形を呈し上面の長軸は東西方向である。底面は２段状を呈し、東半分が一段深く、下段の西端部には楕円形状を呈した一段深い穴があ

る。上面で長径4.8m・短径1.5m、中段で長径2.3m・短径1.2m、下段で長径2.2m・短径0.8m、深さ0.2mを測る。下段の小穴は長径1.0m・短径0.6m、深さ0.1mを測る。壙底面中段は平坦で、壁面は緩やかな直線的な斜面を呈する。遺物は弥生土器甕が出土している。

SK229（Fig. 16　PL. 10,64）

調査区東半部中央、土壙SK228の北１mに位置する。不整形な楕円形の平面形を呈し、南辺部が張り出す。壙底は三段を呈して北へ向かって深くなり、下段の壙底は楕円形の平面形を呈する。上面で南北5.2m・東西4.6m、深さ0.2mを測る。壙底面は格段とも平坦面を呈し、壁面は緩やかに直線的な斜面を呈する。遺物は弥生土器甕が出土している。

SK230（Fig. 16　PL. 10,64）

調査区東半部中央、土壙SK249の西４mに位置する。不整形な平面形を呈し、長軸は南北方向である。壙底面は中央部が一段深く、楕円形を呈している。溝などとの合体的遺構であろう。上面で長径14.3m・短径3.8m、壙底で長径3.1m・短径2.1m、深さ0.25mを測る。壙底面は平坦で、壁面は緩やかな直線的な斜面を呈する。遺物は弥生土器甕が出土している。

SK233（Fig. 16　PL. 10,64）

調査区北西部隅、溝SD221西端部の西２mに位置する。楕円形の平面形を呈し上面の長軸は南北方向である。溝SD221と一体化していた可能性がある。上面で長径8.9m・短径3.1m、壙底で長径8.1m・短径2.3m、深さ0.3mを測る。壙底面は平坦で、平面形は上面と同じ楕円形を呈する。壁面は緩やかな直線的な斜面を呈する。遺物は弥生土器甕が出土している。

SK236（Fig. 16　PL. 10,64）

調査区西辺部部中央、土壙SK237の西１mに位置する。上面および壙底面とも惰円形の平面形を呈し、長軸は東西方向である。上面で長径1.1m・短径0.7m、壙底で長径0.8m・短径0.5m、深さ0.1mを測る。壙底面は平坦面を呈し、壁面は緩やかに直線的な斜面を呈する。遺物は弥生土器甕が出土している。

SK237（Fig. 16　PL. 10,64）

調査区西辺部部中央、土壙SK236の東１mに位置する。上面および壙底面とも惰円形の平面形を呈し、長軸は東西方向である。上面で長径1.4m・短径0.5m、壙底で長径1.1m・短径0.3m、深さ0.05mを測る。壙底面は平坦面を呈し、壁面は緩やかに直線的な斜面を呈する。遺物は弥生土器甕が出土している。

SK239（Fig. 16　PL. 10,64）

調査区西辺部中央、土壙SK237の南15mに位置する。上面および壙底面とも両端部が尖った惰円形の平面形を呈し、長軸は南北方向である。上面で長径1.7m・短径0.7m、壙底で長径1.5m・短径0.5m、深さ0.05mを測る。壙底面は平坦面を呈し、壁面は緩やかに直線的な斜面を呈する。遺物は弥生土器甕が出土している。

SK240（Fig. 16　PL. 10,64）

調査区西辺部部中央、土壙SK239の東４mに位置する。不整形な楕円形の平面形を呈し、上面で南北3.6m・南北1.8m、壙底で南北3.2m・南北1.6m、深さ0.1mを測る。壙底面は平坦面を呈し、壁面は緩やかに直線的な斜面を呈する。遺物は弥生土器甕が出土している。

SK243（Fig. 16　PL. 10,64）

調査区南辺部中央、溝SD104の西16mに位置する。隅丸長方形の平面形を呈し上面の長軸は南北方向である。底面は２段状を呈する。北側1/3が中段で平坦。南側はロート状を呈し、中央部には楕円

形状を呈した一段深い穴がある。上面で南北4.6m・東西2.5m、中段で南北1.0m・東西1.8m、下段の穴は長径1.1m・短径0.9mを測る。下段の小穴は長径1.0m・短径0.6m、深さ0.8mを測る。壙底面中段は平坦で、壁面は緩やかな直線的な斜面を呈する。遺物は木製農耕具の鍬が出土している。

SK244（Fig. 16,19　PL. 10,64,79）

調査区南西部隅、土壙SK243の西５mに位置する。不整形な楕円形の平面形を呈し、上面の長軸は東西方向である。南側を除く三方の壁面はテラス状の狭い段がある。上面で東西18m・南北7.8m、壙底で東西15.3m・南北3.3m・深さ0.7mを測る。壙底面は西側が狭く平坦で、壁面は緩やかな直線的な斜面を呈する。遺物は弥生土器甕・鉢・壺、土製品などの他に木製農耕具の鍬・斧柄・建築部材が多く出土している。

SK245（Fig. 16　PL. 10,64,80）

調査区南辺部中央、土壙SK243の東５mに位置する。遺構の一部は調査区外に広がる。楕円形の平面形を呈し、上面の長軸は東西方向である。上面で南北7.6m・東西7.1m、壙底で南北5.2m・東西2.6m、深さ1.8mを測る。壙底面は平坦で、壁面は緩やかな直線的な斜面を呈する。遺物は弥生土器甕・壺、石製穿孔具などの他に円盤形木製品・建築部材の柱などの木製品が多く出土している。

SK249（Fig. 16　PL. 10,64）

調査区西辺部中央に位置し、土壙SK244の西７mに位置する。不整形な楕円形を呈し、長軸は南北方向である。溜り的な様相が見られる。上面で南北2.1m・東西1.6m、深さ0.4mを測る。壙底面は狭小で、壁面は直線的な斜面を呈する。遺物は土製紡錘車円盤が出土している。

SK251（Fig. 16　PL. 10,16,64,81）

調査区西辺部中央、溝SD104の西20mに位置する。遺構の平面形は大半が調査区外に広がるために不明であるが、楕円形が想定される。壁面は直線的な斜面を呈する。遺物は、弥生土器甕・壺・丹塗り彩色壺・琴が出土している。

集石遺構（SX）

SX242（Fig. 16　PL. 10,64）

調査区西辺部中央に位置し、握り拳大ほどの自然石が径1.3m程の楕円形状に集中している。焼いた痕跡などは認められない。

（5）第5遺構検出面

第5遺構検出面では柵列・河川・溝・土壙などを検出した。

柵（SA）

SA247（Fig. 20　PL. 10,64,82,83,94）

調査区北西部隅に位置する柵列で南北方向に直線的に走行する。柵は径15㎝～20㎝を測る丸太を打ち込んでいる。杭の間隔は一定しておらず、改作の可能性もある。南端部は調査区外へ延びる。検出長は35mを測る。本遺構を柵としたが、柵の東側および西側においても柵を必要とする遺構の検出には至っていない。

溝・河川（SD）

SD114（Fig. 20～25　PL. 10,13～15,64,82～89,94）

調査区南西隅から西半部に位置する南北溝で、やや蛇行する。第4次調査で検出した遺構の延長部である。溝の規模は北上するにしたがって縮小し、調査区北西隅で底面が立ち上がる。遺構の状況から流れの途中で西側からの流路と合流していることは明かである。溝の断面形は緩やかな弧を描き、壁面は緩斜面を斜面を呈する。底面は平坦で。幅2.5～10.2m、深さ0.3～0.5m、全長85mを測る。西半部中央においては平面形がやや不整形な楕円形状の深み（溜まり）がある。長軸を東西方向に呈し、南北8.5m・東西10.5m・深さ2.2mを測る。遺物は、弥生土器甕・高坏・壺・鉢・小型鉢・丹塗り磨研壺・黒色磨研壺・器台・甑、甕再加工円盤形土製品・土製紡錘車・有孔円盤型土製品、黒曜石製石鏃・サヌカイト製石鏃・太型蛤刃石斧・扁平片刃石斧・柱状片刃石斧・石包丁・たたき石・石剣・スクレイパー小玉石、木製農耕具鍬・杵・建築材柱・琴・槽が出土している。

SD235（Fig. 20　PL. 10,64,78）

調査区西半部中央、溝SD114の東岸に位置する南北溝である。溝の西端部は溝SD114と一体化し、東端部はする。溝の幅は一定しておらず、東端部では溝底が弧を描くように緩やかに立ち上がり消滅する。幅2.3m、深さ0.2～0.5m、全長11.5mを測る。遺物は、弥生土器甕・鉢、黒曜石製石鏃・石製紡錘車円盤・小玉石、板状木製品が出土している。

SD250（Fig. 20　PL. 10,64,90,94）

調査区東半部中央に位置する南北溝で、やや蛇行しながら北方向へ流れる。北端部は調査区東辺から調査区外へ続き、南端部は東半部中央で溝底が立ち上がる。さらに、溝の南端から北へ5mの位置で、SX252からの流れと合流する。溝底は小規模の深みがあり若干の凸凹が認められるもの、全体的には平坦を呈する。壁面は溝の断面形が半円形を呈することから、緩やかな弧を描きながら立ち上がる。幅1.4～4.2m、深さ0.3～0.9m、全長38mを測る。遺物は、弥生土器甕・壺・丹塗磨研壺、石皿、棒状木製品・弓が出土している。

SD256（Fig. 20　PL. 10,64,91～94）

調査区北東隅に位置する南北溝で、蛇行しながら北方向へ流れる。南端は溝SD104によって壊され、北端は調査区外へ続く。北端部には丸太杭と横木を組み合わせた堰SX257が設けられ、堰を境にして北側では溝の規模が拡大している。南端部には矢板などの木材が集積しているSX258がある。幅2.8m、深さ0.5m、全長32mを測る。溝底は若干の凸凹が認められるもの、全体的には平坦を呈し、壁面は直線的な緩斜面を呈する。遺物は、弥生土器甕・高坏・壺・小型壺・鉢・小型鉢・彩文土器、石製紡錘車円盤・玉石、木製農耕具鍬・槽・建築部材柱・盾・が出土している。

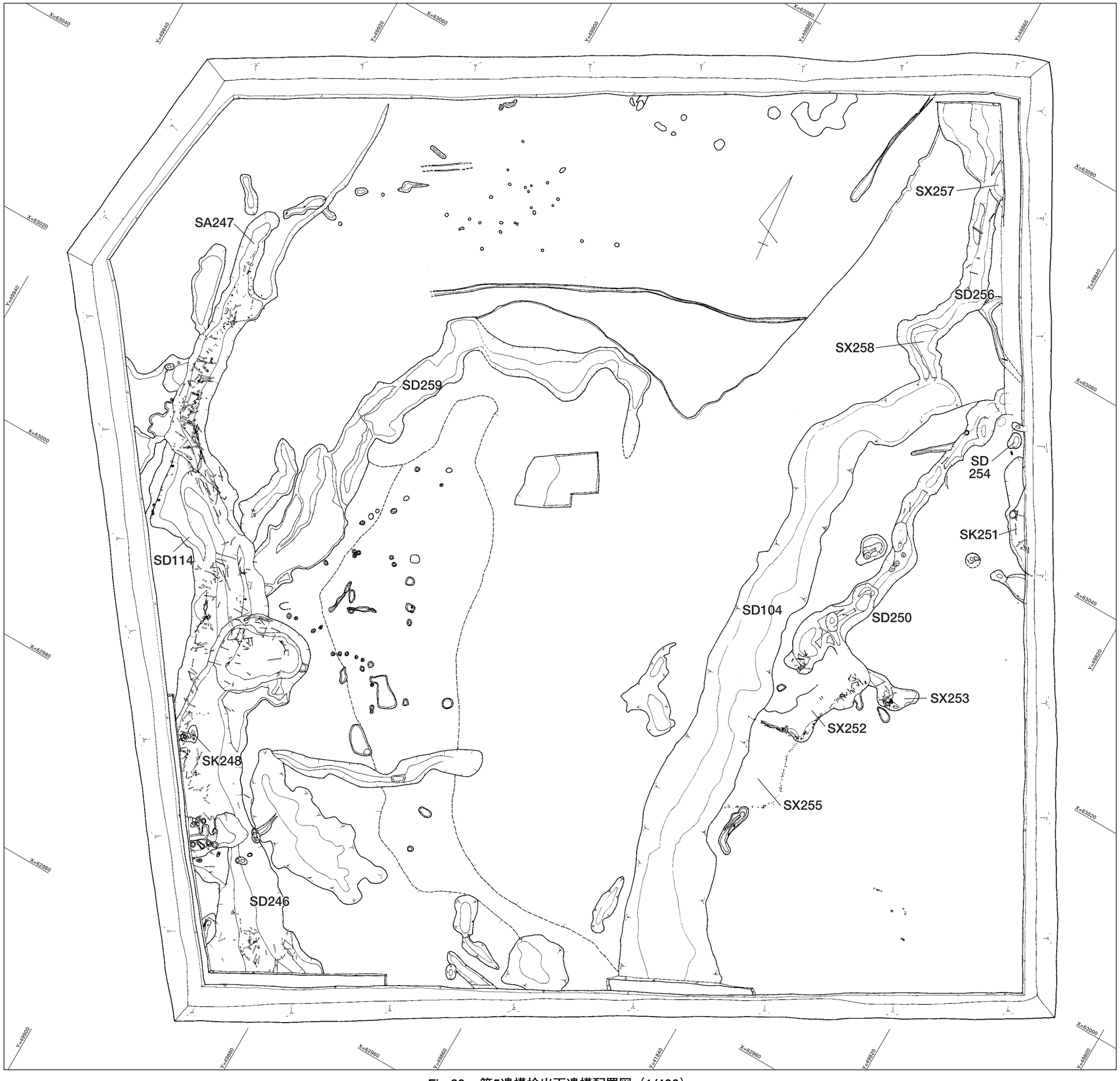


Fig.20　第5遺構検出面遺構配置図（1/400）

SD259（Fig. 20　PL. 10,64,94）

調査区西半部中央～北半部中央に位置する東西溝で、弓なりの弧を描く。西端部は溝SD114と合流し、東端部は調査区北半部中央で溝底が立ち上がり消滅する。溝底は中央よりやや西に位置するところで一段高くなり、底の平坦面を東西に分断する形となっている。全体的には平坦を呈し、壁面は直線的な緩斜面を呈する。幅2.0～6.2m、深さ0.3～0.5、全長53mを測る。遺物は黒曜石製石鏃が出土している。

土　壙（SK）

SK254（Fig. 20　PL. 10,64,93）

調査区東辺部中央、溝SD250北端部の東３mに位置する。楕円形の平面形を呈し、長軸は南北方向である。上面で長径1.8m・短径1.4m、壙底で長径1.2m・短径0.6m、深さ0.2mを測る。壙底面も平面形は楕円形を呈し、平坦である。壁面は直線的な緩斜面を呈する。遺物は、弥生土器・高坏・甕、サヌカイト製石鏃が出土している。

堰（SX）

SX257（Fig. 20,26　PL. 10,64,93,94）

調査区東北隅、溝SD256内に位置する。丸太を打ち込み、横材と絡ませ溝SD256を横断するように設けている。幅1.2m・長さ５m以上の規模を呈する。遺物は、建築部材柱が出土している。

木材集積（SX）

SX258（Fig. 20,27　PL. 10,64,91,94）

調査区東北隅、溝ＳＤ２５６の南端部近くの西岸斜面に位置する。矢板および棒材が集中して出土している。矢板は長さ1.0～1.8m・幅0.15～0.25m・厚１～2cmを測り、割板材を用いている。棒材も長さ1.0～1.8m・幅0.1mを測り、割材を加工したものである。溝岸斜面には径0.1～0.2mの丸太杭が打ち込まれていることから、これらの木材集積は溝岸の擁壁に打ち込まれていたものが倒壊した可能性もある。遺物は、弥生土器甕・壺・丹塗り磨研壺、石棒・小玉石が出土している。

矢板杭列（SX）

SX252（Fig. 20,28　PL. 10,64,94～98）

調査区東辺部中央に位置する矢板列である．南北11m・東西５m・深さ0.7mを測る方形状のくぼみの東側壁に沿って打ち込まれたものが倒壊している。遺物は、弥生土器甕・壺・丹塗り壺が出土している。

SX253（Fig. 20,29　PL. 10,64,94,95,98）

調査区東辺部中央、SX252の東３mに位置する。楕円形を呈する土壙の南壁に沿って矢板・棒材が出土した。 SX252とは木材の出土状況が異なり、やや乱雑である。

丸太杭列（SX）

SX255（Fig. 20　PL. 10,64,94）

調査区南東隅、SX252の南に位置する杭列で、径３～５cmの丸太杭を南北12m、東西５mにわたって打ち込んでいる。SX252と並びを同じくすることから一連のものと考えられる。

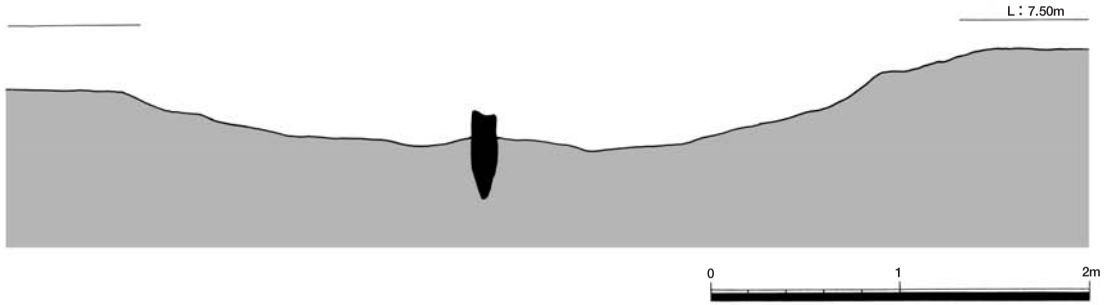


Fig.21　溝SD114断面実測図①（1/40）

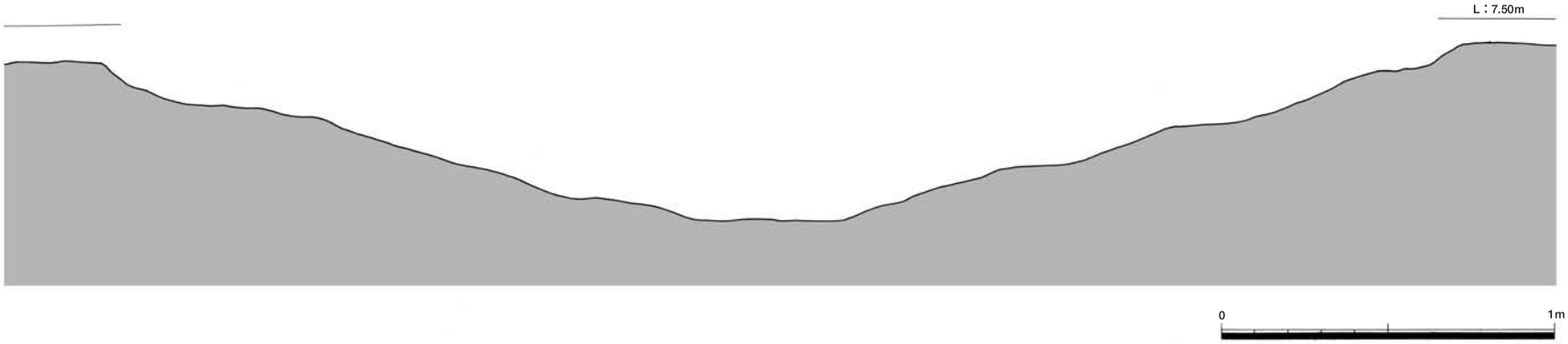


Fig.22　溝SD114断面実測図②（1/40）

Fig.23　溝SD114断面実測図③（1/40）

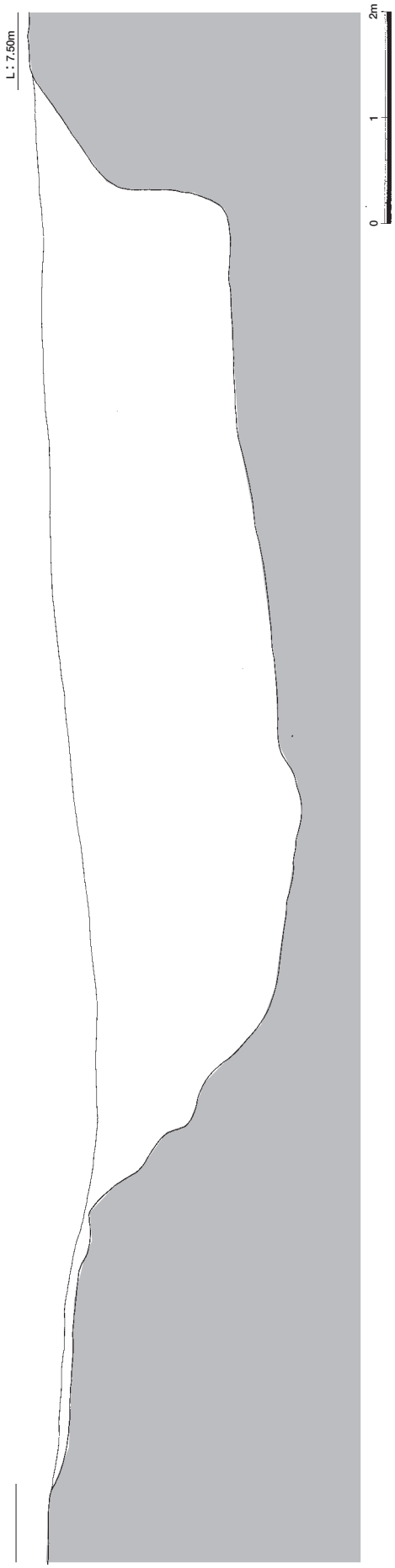


Fig.24　溝SD114溜断面実測図①（1/60）

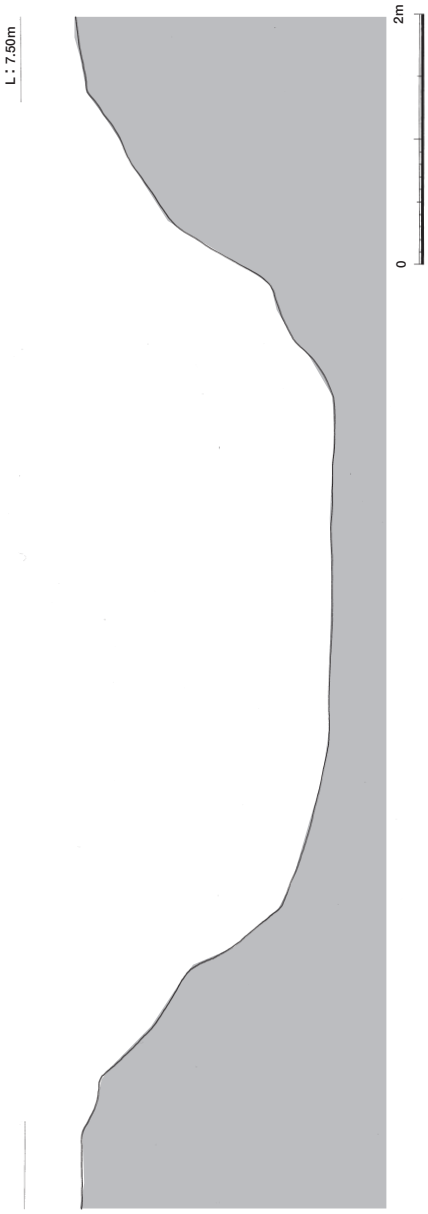
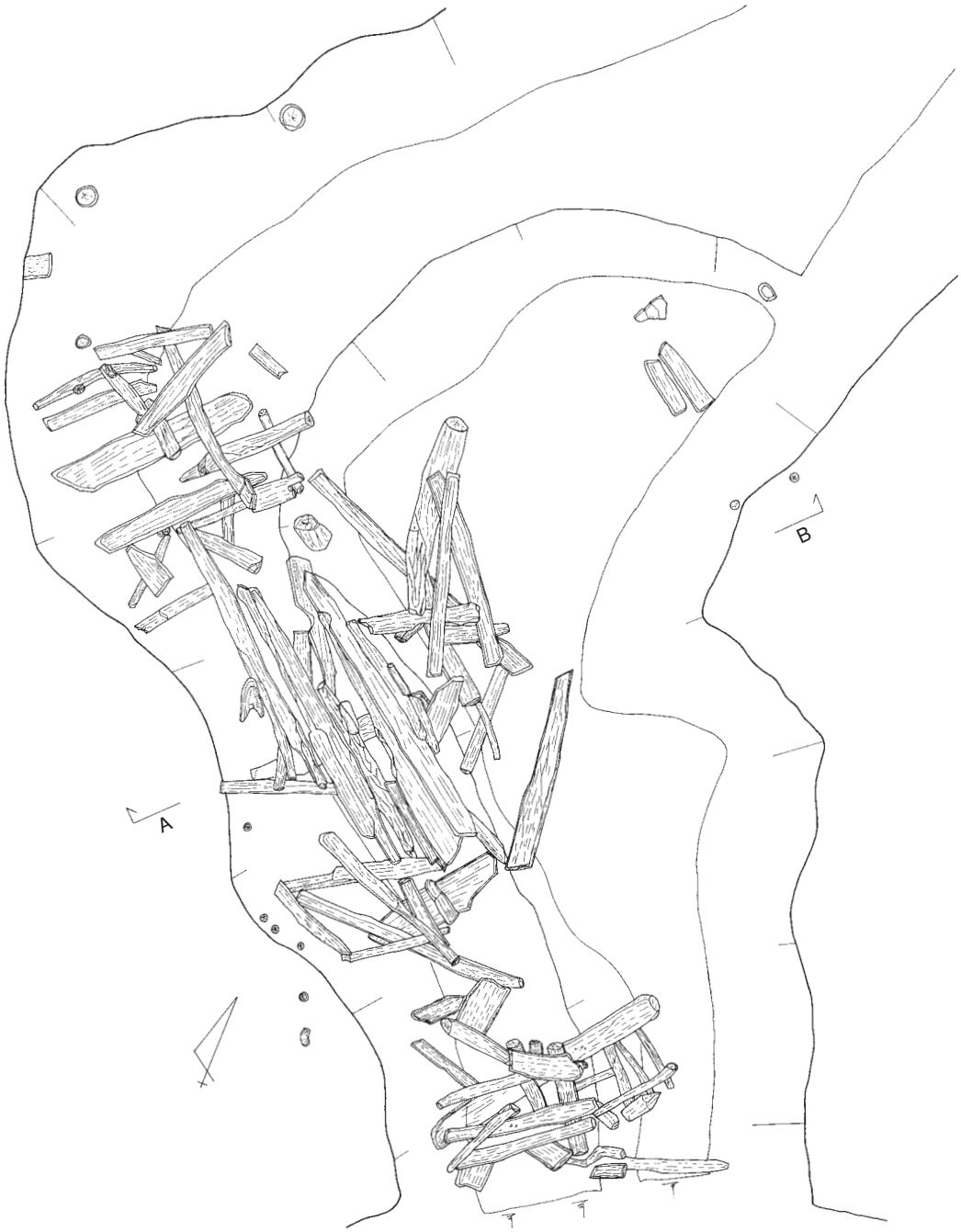


Fig.25　溝SD114溜断面実測図②（1/60）

Fig.26　堰SX257実測図（1/40）



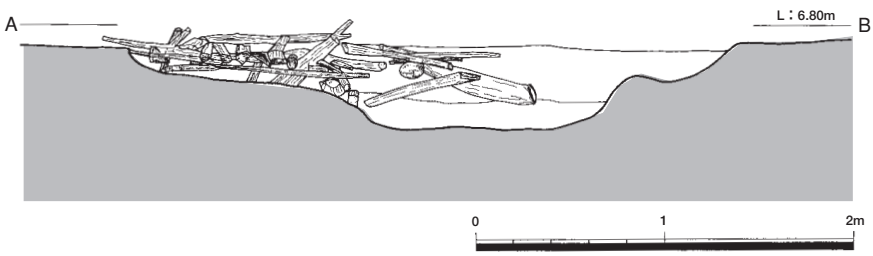


Fig.27　堰SX258実測図（1/40）

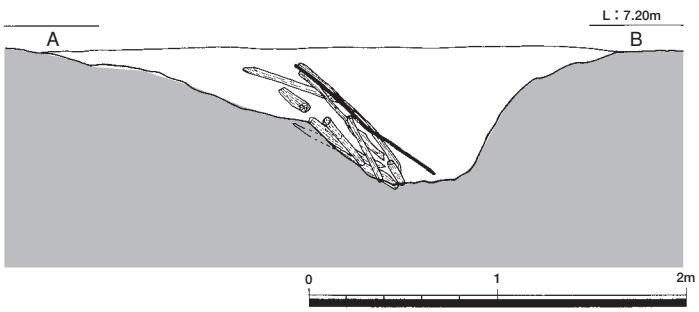


Fig.28　矢板杭列SX252実測図（1/40）

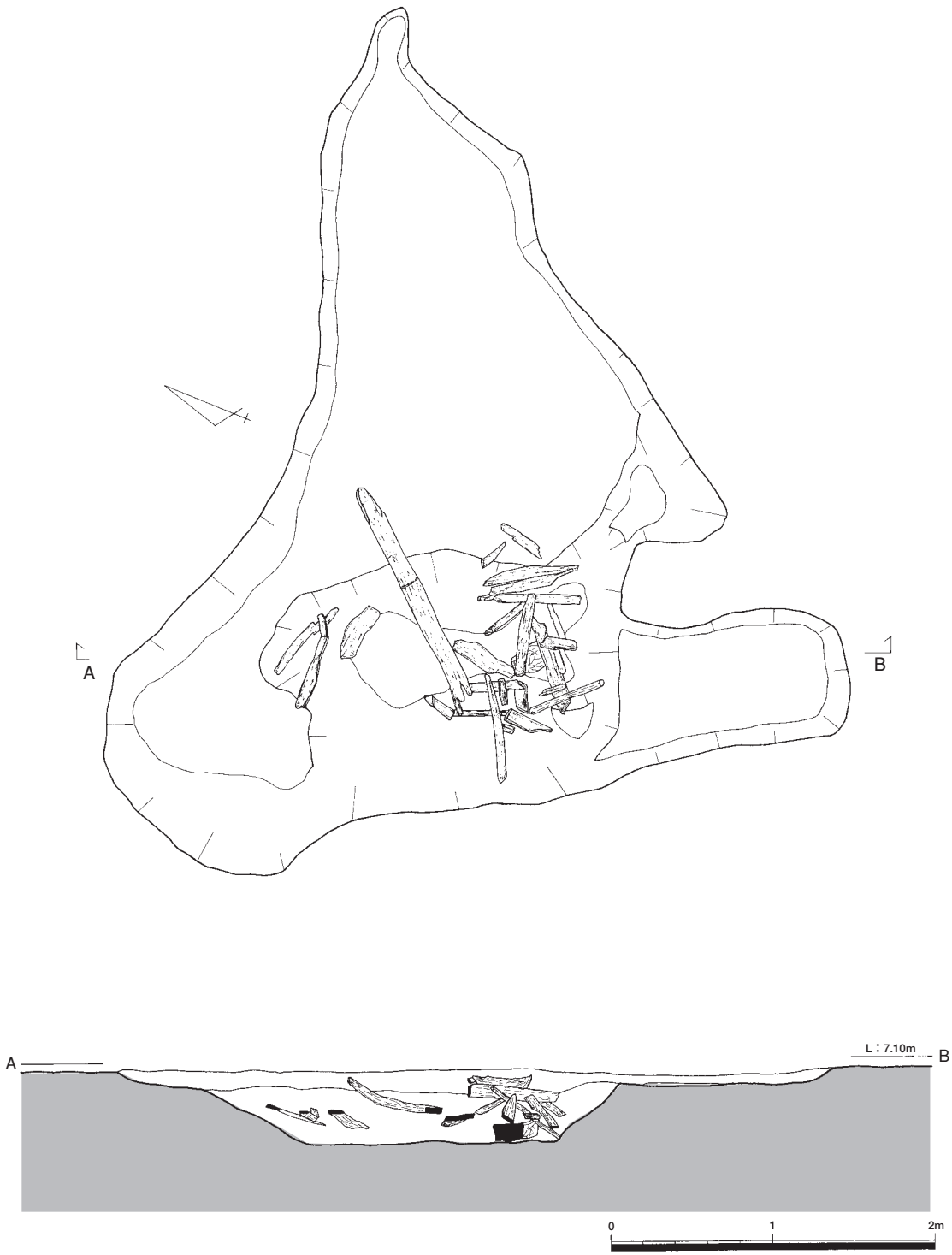


Fig.29　矢板杭列SX253実測図（1/40）

2．遺　物

（1）土器・陶磁器・土製品

1）第1遺構検出面

溝（SD）

SD165

遺物は、土師器台付椀が出土している。

SD168

遺物は、土師器坏が出土している。

SD175

遺物は、土師器椀が出土している。

SD180

遺物は、龍泉窯産青磁碗が出土している。

井　戸（SE）

SE166（Fig. 30　PL. 99）

遺物は、黒色土器椀・土師器椀、須恵器甕、曲物が出土している。

26は強く焼き締まった瓦質土師器の甕で胴央部以下を欠く。張りのある球状の胴部を想定させ、頸部は締まる。口縁は短く弱く外湾し、口縁端部は丸味を呈する。胴部外面には平行叩き目を頸部直下まで残す。内面にはヘラ削り調整を頸部屈曲部まで施している。口縁部は横ナデによる仕上げ。口径17.8㎝、器壁厚0.7㎝を測る。胎土は0.5～1㎜ほどの砂粒を多く含み、暗灰色を呈する。胴部内面には口縁部近くまで炭化物が付着している。この炭化物を放射性炭素年代測定したところ、暦年代較正値はＡＤ1,195、ＡＤ1,210、暦年代範囲はＡＤ1,160～1,245（96.1%）の結果を得た。

SE169

遺物は、瓦質土器椀・須恵器甕・曲物が出土している。

SE173（PL. 31）

遺物は須恵器坏・弥生土器甕、曲物が出土している。

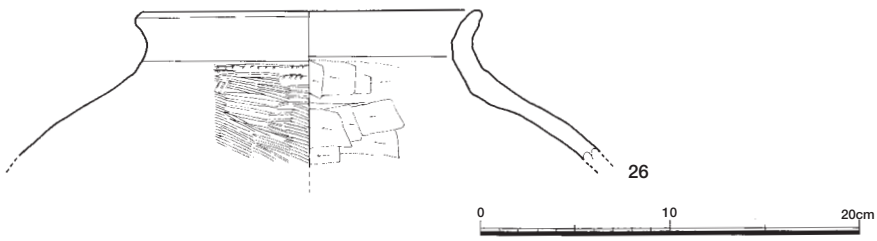


Fig.30　井戸SE166出土遺物実測図（1/4）

土　坑（SK）

SK151（Fig. 31　PL. 99）

遺物は、土師器椀・甕・台付椀、須恵器坏、石包丁が出土している。

25は須恵器坏の高台部で、口縁を欠く。高台径7.0cm、器壁厚0.5cmを測る。高台は貼り付け高台で、粘土紐を横ナデで密着させている。胎土は精選され僅かに砂粒を含み、淡青灰色を呈する。

24は土師器の椀である。狭小な底部から口縁はやや反りを呈しながら直線的に外反し、口縁端部は横ナデで丸く仕上げている。内外面とも細かいヘラ磨きを施している。高台は粘土紐の貼り付けにより、端部は丸味を呈する。胎土は精選され僅かに0.5mmほどの砂粒を含み、淡茶灰色を呈する。器面内面には全面に黒色を呈するものが付着する。口径14.5cm、器高5.8cm、高台径5.8cmを測る。

SK182（Fig. 32　PL. 35,99）

土壙内からは土師器小皿・椀、瓦質土器椀、砥石、箸状木片が出土している。

28・30は土師器の小皿である。**28**は口径10.3cm、器高1.7cmを測る。底部はやや丸味を呈し、口縁は直線的に外反する。口縁端部は横ナデにより丸く仕上げている。底部にはヘラ切り離し痕跡を明瞭に残す。胎土は精選され僅かに0.5mmほどの砂粒を含み、淡灰褐色を呈する。**30**は口径10.1cm、器高1.8cmを測る。底部はやや丸味を呈し、口縁は直線的に外反する。口縁端部は横ナデにより丸く仕上げている。底部にはヘラ切り離し痕跡を明瞭に残す。胎土は精選され僅かに0.5mmほどの砂粒を含み、淡灰褐色を呈する。

31・35は坏部が丸味を呈する深い土師器の高台坏の椀である。**31**は底部を欠く。口縁はやや内湾気味に立ち上がり、端部は横ナデにより丸く仕上げている。坏部内面は黒色を呈し、幅の狭いヘラ磨きが施されている。口径14.5cm、器壁厚0.4cmを測る。胎土は1～2mmの砂粒を含み、淡灰褐色を呈する。

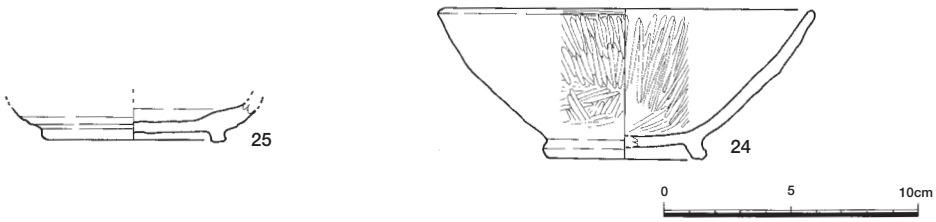


Fig.31　土壙SK151出土遺物実測図（1/3）

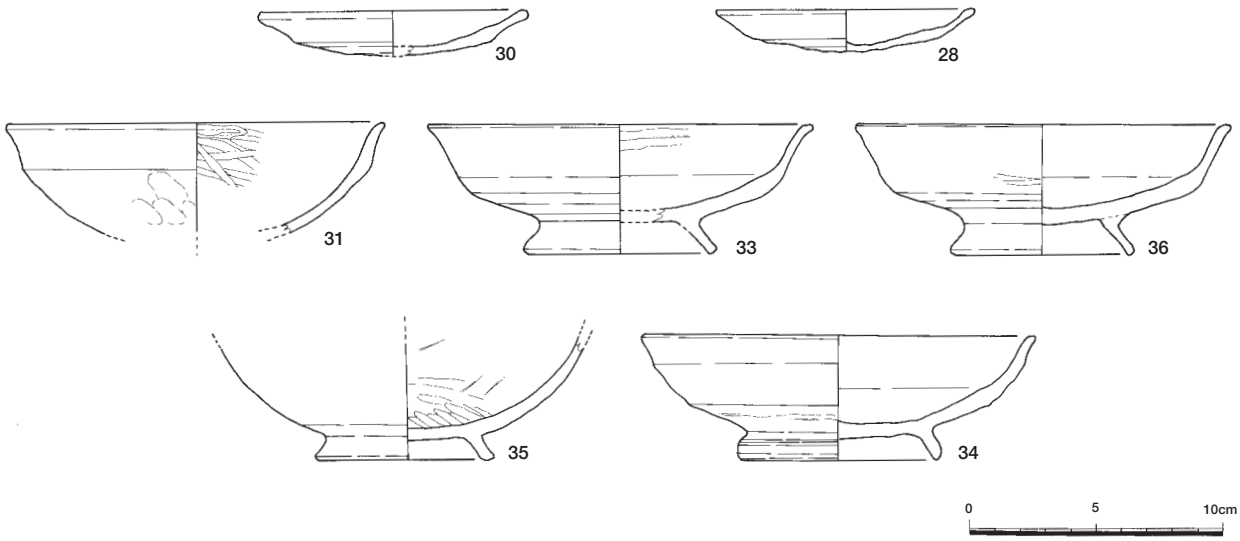


Fig.32　土壙SK182出土遺物実測図（1/3）

35は口縁端部を欠く。口縁は丸味を呈する底部からやや内湾気味に立ち上がる。坏部内面には幅の狭いヘラ磨きが緻密に施されている。高台は外方に直線的に広がるように貼り付け、口径6.8cmを測る。胎土は胎土は1～2mmの砂粒を含み、淡灰褐色を呈する。

33・34・36は坏部が浅い土師器の高台坏椀である。**33**は口縁が平坦な底部からやや反りを呈しながら外反する。端部は横ナデにより外方に僅かにつまみ出し、丸く仕上げている。器面内面には粗いヘラ磨きを施している。高台は高さ1.3cmと高く、外方に直線的に広がるように貼り付け、端部は丸く仕上げている。口径14.7cm、器高5.1cm、高台径7.1cmを測る。胎土は1～2mmの砂粒を多く含み、淡灰褐色を呈する。**34**は口縁が平坦な底部からやや反りを呈しながら外反する。端部は横ナデにより外方に僅かにつまみ出し、丸く仕上げている。器面内面には粗いヘラ磨きを施している。高台は他の2点と比べて低く、0.8cmを測る。外方に直線的に広がるように貼り付け、端部は丸く仕上げている。口径15.2cm、器高5.0cm、高台径7.7cmを測る。胎土は2～3mmの砂粒を多く含み、淡灰褐色を呈する。**36**は口縁が平坦な底部からやや反りを呈しながら外反する。端部は横ナデにより外方に僅かにつまみ出し、丸く仕上げている。器面内面には粗いヘラ磨きを施している。高台は高さ1.3cmと高く、外方に直線的に広がるように貼り付け、端部は丸く仕上げている。口径14.5cm、器高5.2cm、高台径6.7cmを測る。胎土は1～2mmの砂粒を含み、灰褐色を呈する。

土 壙 墓（SK）

SK170（Fig. 33　PL. 36,99）

遺物は、土師器小皿、黒色土器椀が出土している。

27は土師器の小皿である。口径10.7cm、器高1.3cm、底径8.3cmを測る。底部は平坦で、口縁は直線的に外反する。口縁端部は横ナデにより丸く仕上げている。底部にはヘラ切り離し痕跡と乾燥時の板目圧痕を明瞭に残す。胎土は精選され僅かに0.5mmほどの砂粒を含み、淡灰褐色を呈する。

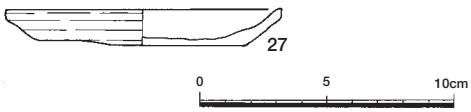


Fig.33　土壙墓SK170出土遺物実測図（1/3）

2）第2遺構検出面

水　田（SX）

SX183（Fig. 34　PL. 99）

遺物は、須恵器坏・蓋・甕、土師器碗・小皿・高坏、白磁碗、弥生土器甕、移動式竈が水田覆土の灰色～白色砂中から出土している。

329は須恵器の坏である。僅かに丸味を呈するもののほぼ平坦な底部を持ち、口縁は直線的に外反しながら立ち上がる。口縁端部は横ナデにより丸く仕上げていう。底部外面はヘラ切り離しの後に簡単にナデて仕上げている。口径13.3cm、器高4.0cm、底径8.1cmを測る。胎土は精選され僅かに1㎜ほどの砂粒を含み、淡茶灰色を呈する。

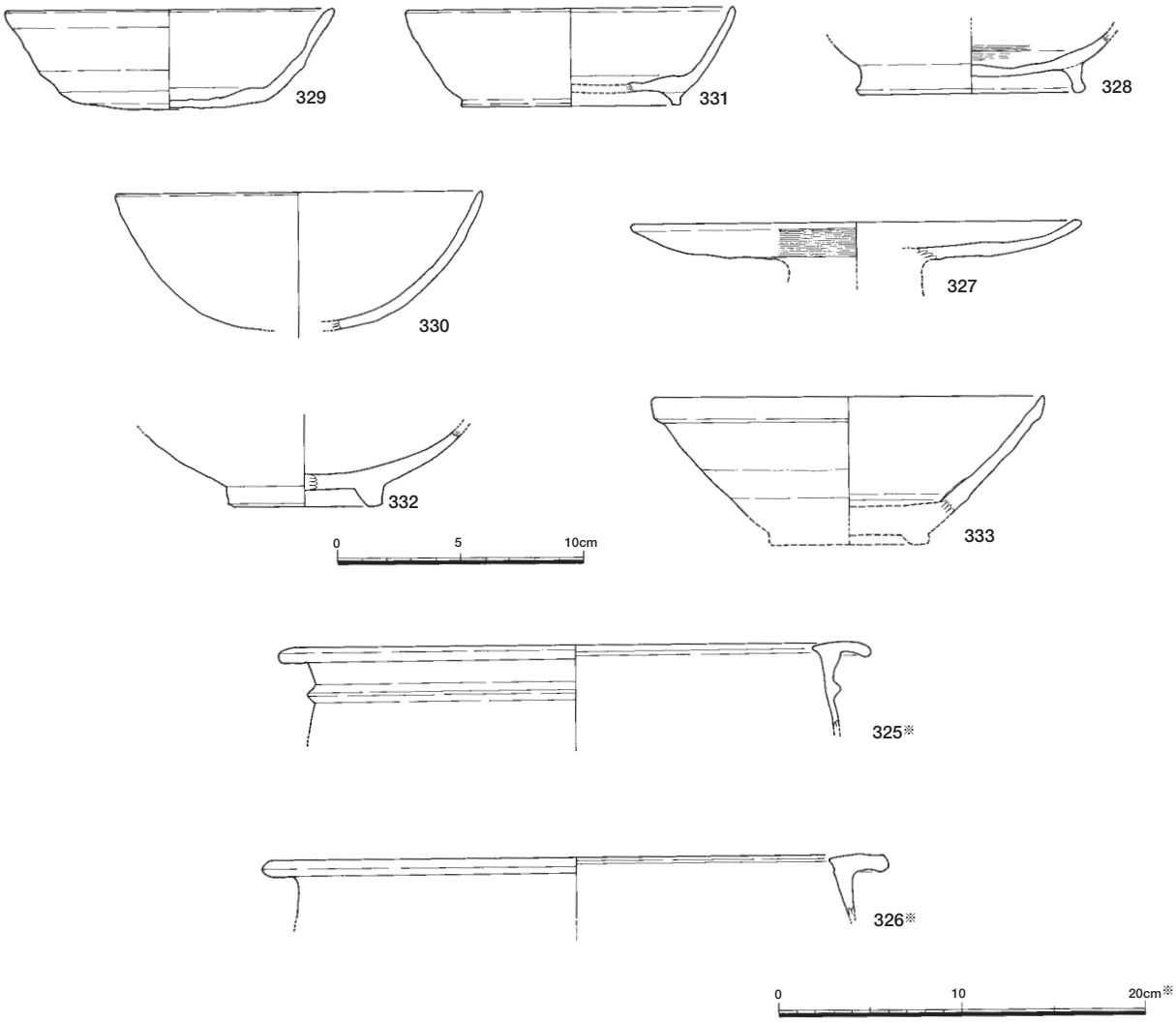


Fig.34　水田SX183出土遺物実測図（1/3,1/4※）

331は須恵器の高台付きの坏である。口縁は平坦な底部から直線的に外反しながら立ち上がる。端部は横ナデにより丸く仕上げている。高台は粘土紐貼り付けの高台で低く、底部縁に位置する。口径13.2㎝、器高3.9㎝、底径8.9㎝を測る。胎土は1～2㎜ほどの砂粒を含み、青灰色を呈する。**330**は高台坏の土師器椀で、底部を欠く。口径14.9㎝、器壁厚0.4～0.5㎝を測る。半球状を呈し、口縁は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は横ナデで丸く仕上げている。器面内外面にはヘラ磨きが施されているが、内面の方が丁寧に磨いている。胎土は精選され、0.5㎜以上の砂粒を含まない。やや軟質で、淡橙灰色を呈する。

328は大型の椀もしくは盤の底部である。高台は粘土紐を底部に貼り付け、横ナデにより調整している。底径9.2㎝、器壁厚0.5㎝を測る。胎土は精選され僅かに１㎜ほどの砂粒を含み、淡橙褐色を呈する。

327は高坏の坏部で、脚部を欠く。蓋の可能性も考えられる。坏部の底部は平坦で、口縁は僅かに上方へ立ち上がる。口縁端部は横ナデにより丸く仕上げている。口径18.2、器壁厚0.5～0.6㎝を測る。胎土は精選されており、僅かに１㎜程の砂粒を含む。淡橙灰色を呈し、やや軟質である。

332は白磁の碗である。口縁部を欠くが玉縁のない碗であろう。口縁はやや丸味を呈しながら立ち上がる。高台は削り出しにより、ほぼ直下にのび、露胎である。底径6.2㎝、器壁厚0.3～0.4㎝を測る。胎土は乳白色を呈し、釉は僅かにオリーブ色を示す濁白色である。**333**は白磁の玉縁付の碗で、底部を欠く。口縁は直線的に外傾しながら立ち上がる。口縁端部外面直下には断面形が三角形を呈し低い玉縁が施されている。口縁端部は尖る。外面は削りによる整形で、口縁部下半は露胎である。口径は15.6㎝を測る。胎土は乳白色を呈し、釉は僅かにオリーブ色を示す濁白色である。

325・326は弥生土器の甕で胴央部下を欠く。**325**は口縁が鍔状口縁の甕類中で、口縁断面形が逆「Ｌ」字状を呈する。口縁は端部を外方水平方向に極端にのばし、内方へは僅かにのばす。上端は平坦である。このため口縁屈曲部内面には強い稜線を呈する。口縁下には断面形が三角形の凸帯が巡る。胴部は胴央下を欠くが胴長を推定させる。器面は刷毛目調整の後にナデて仕上げている。口径34.3㎝を測る。胎土は1～2㎜程の白色砂粒を多く含み、暗橙灰色を呈する。**326**は口縁が鍔状口縁の甕で、口縁断面形が逆「Ｌ」字状を呈する。口縁は端部を外方水平方向に極端にのばし、内方へは僅かにのばす。上端は平坦である。このため口縁屈曲部内面には強い稜線を呈する。胴部は胴央下を欠くが胴長を推定させる。器面は刷毛目調整の後にナデて仕上げている。口径32.6㎝を測る。胎土は1～2㎜程の白色砂粒を多く含み、暗橙灰色を呈する。

3）第3遺構検出面

河　川（SD）

SD190（Fig. 35,99　PL. 100,101）

遺物は、須恵器坏・蓋・甕、製塩土器、弥生土器甕・大型甕・高坏・蓋・器台・鉢・甑、石製紡錘車円盤・石包丁・石剣・扁平片刃石斧が出土している。**300**は須恵器の蓋で、天井部中央に摘みが付くものと推定される。天井部は平坦で、口縁部は下方に短く伸びる。端部は横ナデにより丸く仕上げている。天井部内面の仕上げは粗いナデを施している。口径14.3㎝、器壁厚0.9㎝を測る。胎土は精選されているものの、僅かに1～2㎜程の白色砂粒を含み、淡青灰色を呈する。

321・322・324は須恵器の坏である。**321**は小型の坏で底部の大半を欠くが、残存部は底の浅い器形を想定させる。受部は水平にのび、端部は丸く仕上げている。口縁は内傾しながら直線的に短く立ち上がる。受部との接合調整はやや雑で、外面に粘土紐の貼付け痕を残す。口縁端部は横ナデにより丸く仕上げている。十分な還元焼成ではなかったために硬質な土師器の色である茶灰色を呈する。口径9.2㎝、器壁厚0.5㎝を測る。胎土は精選されているものの、僅かに1～2㎜程の白色砂粒を含む。**322**は受部が外方に水平に延びる。口縁部はやや内傾しながら直線的に立ち上がり、端部近くで僅かに外反する。口縁端部は傾斜面を呈する。底部は大半を欠くものの、丸味のある平坦を想定させる残存状況を呈する。口径11.2㎝、器壁厚0.5㎝を測る。胎土は精選されているものの、僅かに1～2㎜程の白色砂粒を含み、暗青灰色を呈する。**324**も受部は外方に水平に延びる。口縁部はやや内傾しながら直線的に立ち上がり、端部は傾斜面を呈する。底部は大半を欠くものの、丸底を想定させる残存状況を呈する。口径10.2㎝、器壁厚0.4㎝を測る。胎土は精選されているものの、僅かに1～2㎜程の白色砂粒を含み、青灰色を呈する。

313は支脚で上部を欠く。円柱状の器形を呈し、底部は平坦である。口径6.4㎝、器壁厚0.3㎝を測る。胎土は1～3㎜程の砂粒を多く含み、淡橙灰色を呈する。

311・312は製塩土器である。**311**は坏部を欠く。やや中央部が盛り上がり肉厚の円盤形の中央部に太く短い円筒形が付く、ワイングラス状の器形を呈する。器面全体にナデて仕上げている。脚部口径は8.1㎝、脚部高は4.6㎝を測る。胎土は1～3㎜程の砂粒を多く含み、淡橙灰色を呈する。**312**も坏部を欠く。脚部の器形はワイングラス状を呈し、やや不整形な円盤中央部に有芯の円筒形を貼り付け、粗い縦方向のナデ押さえで仕上げている。脚部口径は7.1㎝、脚部高は4.8㎝を測る。胎土は1～3㎜程の砂粒を多く含み、淡橙灰色を呈する。

302・308は弥生土器の蓋で、いずれも口縁部を欠く。**302**の外面は目の細かい刷毛目による整形の後、ナデて仕上げている。摘みの上端面は削りにより凹み、径6.9～7.1㎝、器壁厚0.8㎝を測る。胎土は1～2㎜程の砂粒を多く含み、淡橙灰色を呈する。**308**の外面は目の細かい刷毛目による整形の後、ナデて仕上げている。摘みの径6.4～6.8㎝、器壁厚0.7㎝を測る。胎土は1～2㎜程の砂粒を多く含み、橙灰色を呈する。

316は二重口縁を持つ壷形土器で、頸部下を欠く。頸部は短く外湾しながら立ち上がり、口縁は僅かに外反するものの直立する。このため口縁屈曲部には明瞭な稜線があり、刷毛目工具の小口を用いたキザミ目を巡らしている。口縁端部上面は狭小ではあるが平坦面を呈している。外面頸部下にも断面形が三角形を呈し、刷毛目工具の小口を用いたキザミ目が施された高い凸帯が巡る。外面はハケ目整形の後、口縁部だけ横ナデ調整している。口径17.2㎝、器壁厚0.6㎝を測る。胎土は1～2㎜ほどの砂粒を多く含み、淡灰褐色を呈する。

319は甕で底部を欠く。口縁部は外方に逆「L」字形状に短く折れ曲がり、上端は平坦である。口縁端部は丸く仕上げているが、キザミ目の痕跡は摩滅が激しく不明である。口縁下には断面形が三角形を呈する低い凸帯が巡る。キザミ目の有無は不明。口径33.4cm、器壁厚0.7cmを測る。外面の整形は不明、内面はナデ調整している。胎土は1～2mmほどの砂粒を多く含み、淡橙灰色を呈する。**298**は甕形土器で胴央部下を欠く。頸部の締まり弱く、口縁は短く外湾する。このため頸部内外面ともに屈曲部は丸味を呈し、稜線は極めて弱い。外面頸部下にはヘラ先による一条の沈線を刷毛目整形の後に施している。器面外面は目の細かい刷毛目による整形、内面は刷毛目整形の後にナデて仕上げている。器面外面には煤が口縁端部まで全体的に付着している。口径19.6cm、器壁厚0.7cmを測る。胎土は1～3mmほどの砂粒を多く含み、淡茶褐色を呈する。**304**は甕で胴部が底部直上で一旦締まる。底面は平坦ではなく、窪んでいる。内面は刷毛目整形の後に丁寧なナデが施されている。外面は刷毛目整形。底部径6.1cm、器壁厚0.8cmを測る。胎土は1～2mmほどの砂粒を多く含み、淡茶褐色を呈する。**318**は 第・様式系の甕で、胴央部下を欠く。球形の張りのある胴部を呈し、頸部は僅かに締まる。口縁は「く」の字状に直線的に外反する。胴部外面は平行板目による叩き整形で、部分的に目の細かい刷毛目調整を施している。内面は刷毛目調整しているが粘土紐重ね目を残す。口縁は刷毛目整形の後にヨコナデ調整している。口径16.8cm、器壁厚0.6～0.8cmを測る。胎土は1～2mmほどの砂粒を多く含み、淡橙灰色を呈する。**297**は甕形土器で、胴央部下を欠く。胴部は張りある球状を想定させ、頸部の締まりは弱い。口縁は短く、外反するものの弱い。このため頸部内外面ともに屈曲部は丸味を呈し、稜線は極めて弱い。口縁端部は丸く仕上げている。粘土紐重ねによる成形である。外面は目の粗い刷毛目による整形で、煤と暗褐色の付着物が残る。内面はナデを全面に施しているものの粘土紐重ね目を明瞭に残す。口径13.6cm、器壁厚0.6cmを測る。胎土は1～2mmほどの砂粒を多く含み、茶灰色を呈する。**296**は甕で、胴央部下を欠くが、胴部は球状を想定させる。口縁は「く」の字状に折れ曲がる。頸部屈曲部は丸味を呈し、稜線は弱い。口縁端部は丸く仕上げている。外面は刷毛目整形の後にナデて仕上げている。内面は粗いヘラ削り調整を頸部屈曲部まで施しているが、一部に粘土紐合わせ目を残す。口径15.6cm、器壁厚0.7cmを測る。胎土は1～2mmほどの砂粒を多く含み、橙灰色を呈する。**317**は頸部の締まりの弱い広口の甕形土器で胴部を欠く。口縁は「く」の字状に外反し、端部は丸く仕上げている。内面の頸部屈曲部は丸味を呈し、稜線は弱い。口縁部は横ナデ調整している。胴部内面は頸部下までヘラ削りしている。外面は刷毛目整形の後にナデ調整している。口径15.0cm、器壁厚0.5～0.6cmを測る。胎土は1～3mmほどの白色砂粒を含み、暗褐色の砂粒を含む特徴を持ち、暗茶褐色～淡灰褐色を呈している。**320**は甕で頸部下を欠き、頸部は締まっている。口縁は「く」の字状に折れ曲がるが内面の頸部屈曲部は丸味を持ち、稜線は弱い。口縁部は横ナデで丸く仕上げている。口径15.2cm、器壁厚0.5～0.6cmを測る。胎土は1～2mmほどの砂粒を含み、淡灰褐色を呈している。**309・310**は甕形土器の底部を円形に穿孔した甑である。**309**は残存部から胴部が狭小平坦な底部から張りを呈する器形を想定させる。器面内外面とも刷毛目整形。底径6.4cm、器壁厚0.8～0.9cmを測る。底部の孔は径0.8cmを測り、焼成後に穿孔している。胎土は1～3mmほどの砂粒を多く含み、淡灰褐色を呈している。**310**は残存部から胴部が狭小平坦な底部から張りを呈する器形を想定させる。器面内外面とも刷毛目整形。底径6.9cm、器壁厚0.6～0.7cmを測る。底部の孔は楕円形で径1.2×1.4cmを測り、焼成後に穿孔している。胎土は1～3mmほどの白色砂粒を多く含み、淡灰褐色を呈している。

SX209（Fig. 36　PL. 101）

67は手捏ねによる小型鉢形土器の完形品である。丸底で半球形の胴部を呈し、頸部は僅かに締まる。口縁は広口で指つまみにより薄く短く直立する。調整は内外面ともナデて仕上げている。口径3.5cm、

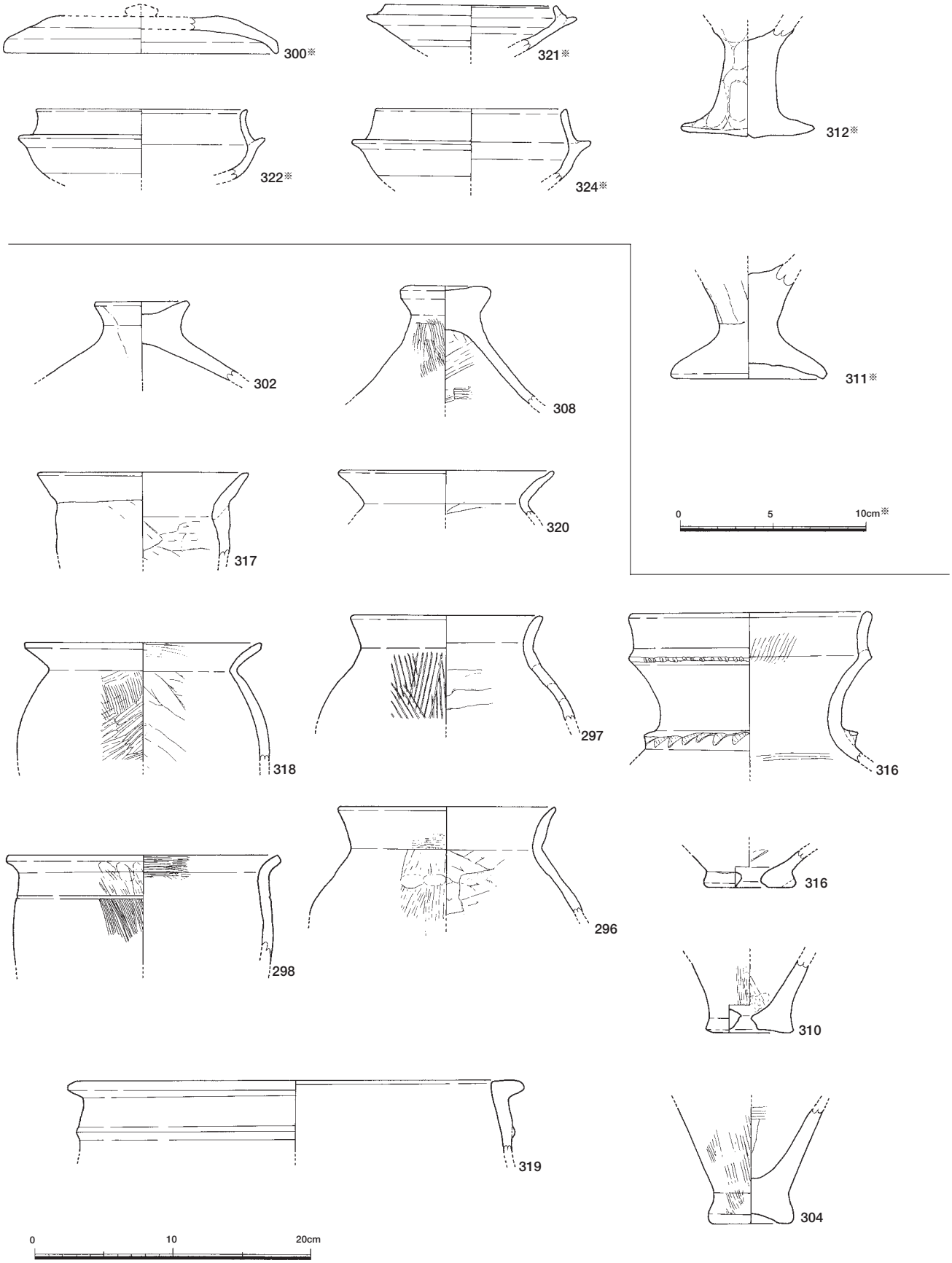


Fig.35 溝SD190出土遺物実測図（1/3※,1/4）

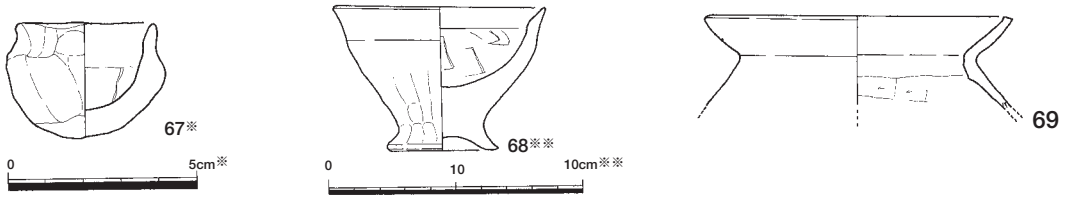


Fig.36　堰SX209出土遺物実測図（1/2※・1/3※※・1/4）

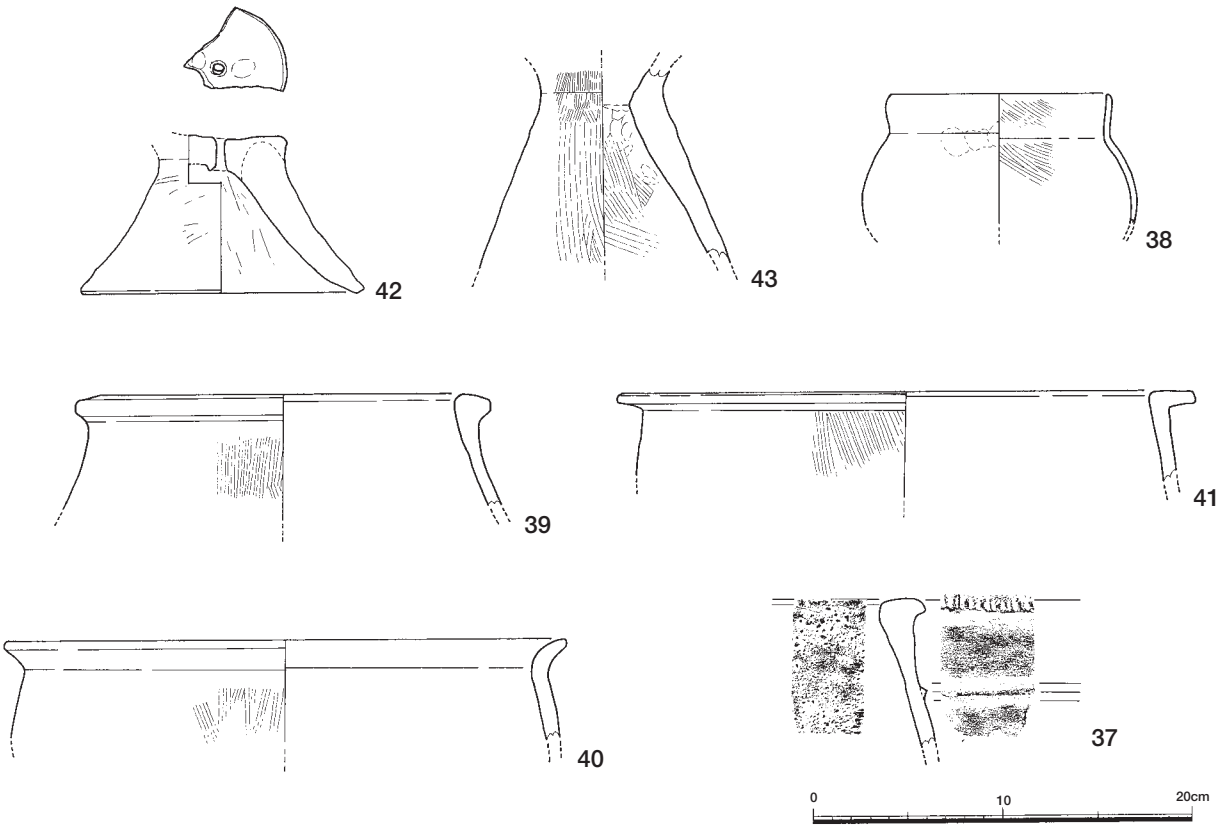


Fig.37　溝SD191出土遺物実測図（1/4）

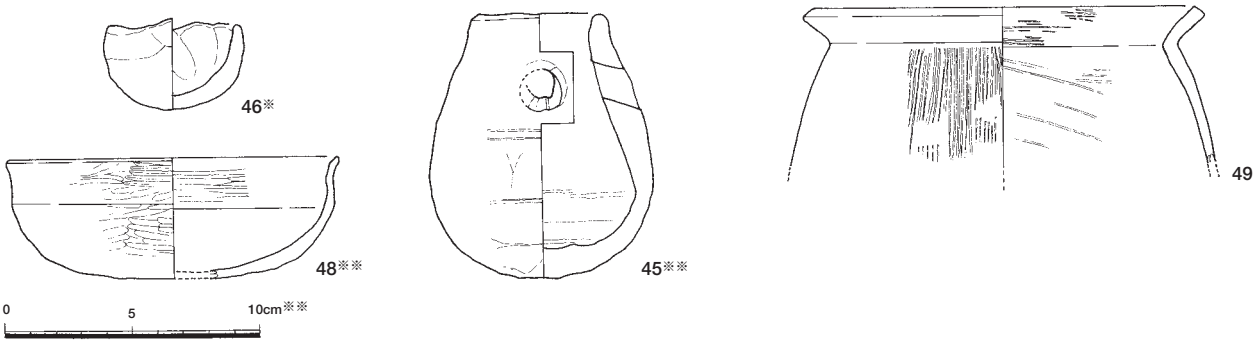


Fig.38　溝SD196出土遺物実測図（1/2※・1/3※※・1/4）

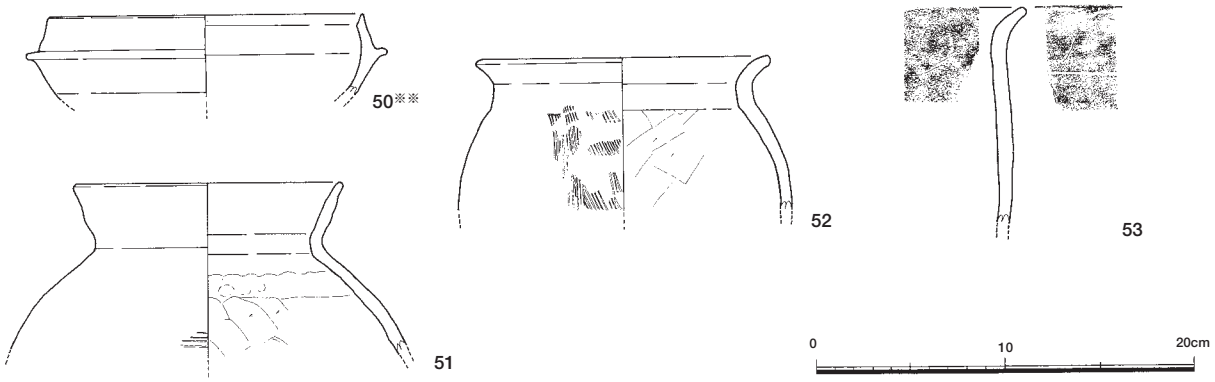


Fig.39　溝SD197出土遺物実測図（1/3※※・1/4）

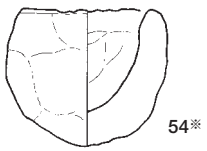


Fig.40　溝SD198出土遺物実測図（1/2※）

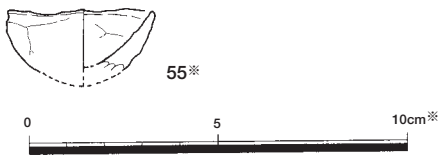


Fig.41　溝SD199出土遺物実測図（1/2※）

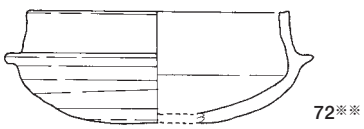


Fig.42　溝SD215出土遺物実測図（1/3※※）

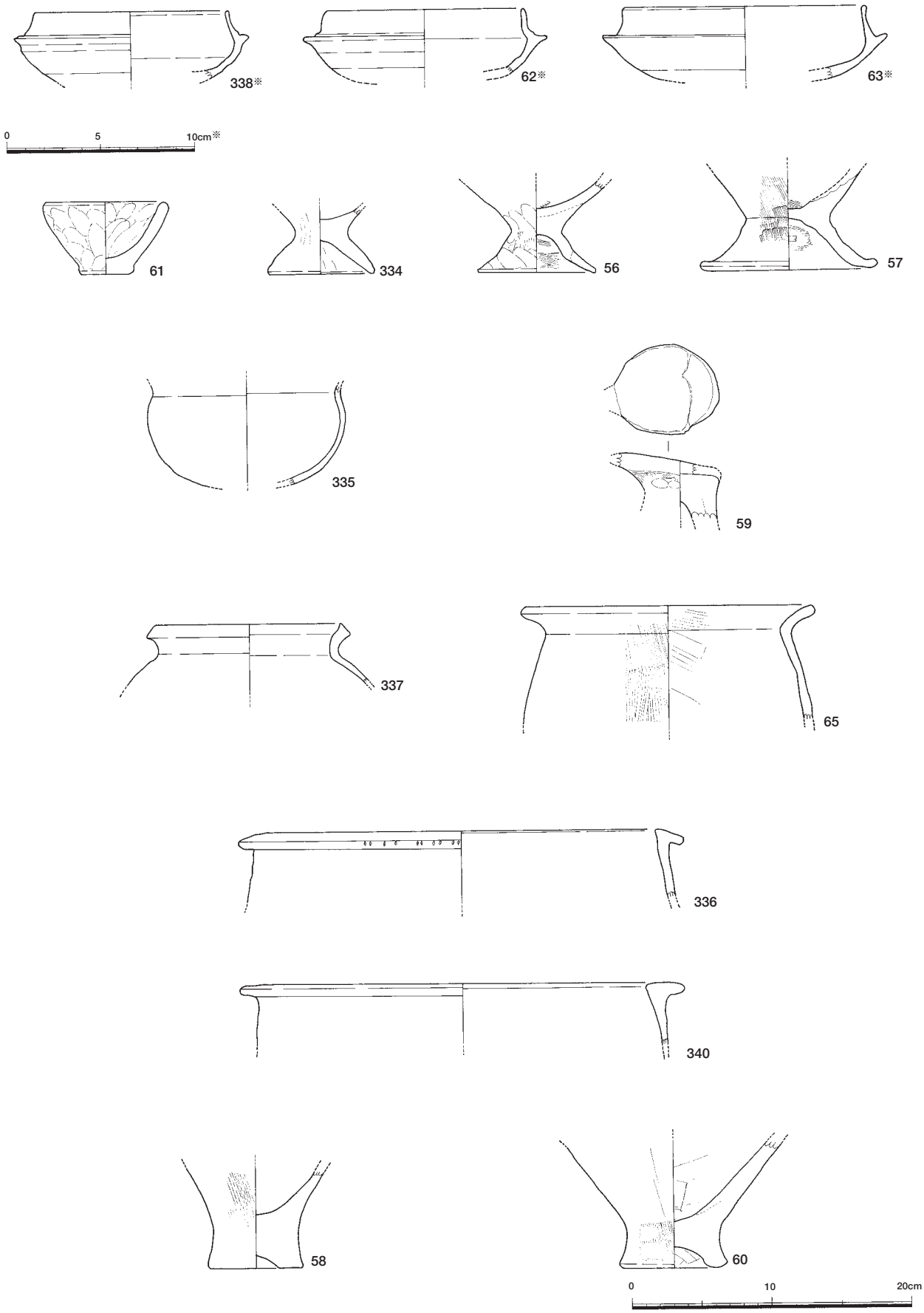


Fig.43　水田SX200出土遺物実測図（1/3※・1/4）

器高3.1cmを測る。胎土は1～2mmほどの砂粒を含み、淡灰褐色を呈している。**68**は小型の台付き鉢である。丸底の底部に台が付く。口縁は横ナデにより僅かに外反し、端部は尖り気味である。ナデて仕上げている。口径8.1cm、器高5.6cmを測る。胎土は1mmほどの砂粒を含み、橙灰色を呈している。

69は頸部の締まる甕形土器で頸部下を欠く。口縁は「く」の字状に外反し、端部は丸く仕上げている。口縁部は横ナデ調整し、端部上端は僅かに上方に立ち上がる。内面の頸部屈曲部は丸く弱い稜線を呈する。胴部内面は頸部下までヘラ削りしている。外面は刷毛目整形の後にナデ調整している。口径15.8cm、器壁厚0.3～0.4cmを測る。胎土は1mmほどの白色砂粒を多く含み、淡茶灰色を呈している。

SD191（Fig. 37）

遺物は、須恵器壺、弥生土器甕・高坏・器台・鉢・甑、石剣・扁平片刃石斧・凹み石が出土している。**38**は丸底の鉢で、底部を欠く。残存部は球状の胴部を想定させる。頸部は僅かに締まるものの広く、口縁は短く直立する。刷毛目整形の後、外面はナデ、口縁部は横ナデで仕上げている。口径6.4cm、器壁厚0.3cmを測る。胎土は0.5～1mmほどの白色砂粒を含み、茶灰色を呈している。

37は甕で胴部下を欠く。やや内傾しながら直立する口縁の上部を肥厚させている。端部は外方へ水平にのばし平坦で、キザミ目のある凸帯が巡る。外面の口縁部下には断面形が三角形の低い凸帯が巡る。内外面とも刷毛目整形の後に丁寧なナデで仕上げている。器壁厚0.7cmを測る。胎土は1～3mmほどの白色砂粒を多く含み、淡茶灰色を呈している。**40**は甕形土器で胴央部下を欠く。頸部の締まり弱く、口縁は短く外湾する。このため頸部内外面ともに屈曲部は丸味を呈し、稜線は極めて弱い。器面外面は刷毛目による整形、内面は刷毛目整形の後にナデて仕上げている。口径29.6cm、器壁厚0.7cmを測る。胎土は1mmほどの砂粒を多く含み、淡橙灰色を呈する。**41**は弥生土器の甕形土器で胴央部下を欠く。口縁が「く」の字状に外反し、鍔状の短い口縁部を有する。上端部は平坦である。内外面とも細かい刷毛目整形の後、内面はナデて仕上げている。口径29.6cm、器壁厚0.7cmを測る。胎土は1mmほどの砂粒を多く含み、淡茶灰色を呈する。**39**は甕で胴部下を欠く。やや内傾しながら直立する口縁の上部を肥厚させ、端部は外方へ水平にのばし平坦である。このため口縁端部に凸帯が巡っているように見える。内外面とも目の細かい刷毛目整形の後、内面は丁寧なナデで仕上げている。口径22.1cm、器壁厚0.5cmを測る。胎土は1～3mmほどの白色砂粒を多く含み、橙灰色～淡茶灰色を呈している。

42は中空の裁頭円錐形を呈する支脚である。上端は平坦狭小で、中央部に径0.6cmを測る穿孔を焼成前に施している。器面はナデで仕上げている。上端径6.8cm、器高8.8cmを測る。胎土は1～3mmほどの白色砂粒を多く含む特徴を持ち、淡褐色を呈する。

43は器台で、上端・下端部を欠く。口縁は「く」の字状に外反するものの短い。このため受部は狭小を推定させる。口縁屈曲部は内外面ともに弱い稜線を呈する。脚部は直線的に裾広がりである。器面整形は目の粗いハケ目による。胎土は1～2mmほどの砂粒を多く含み、淡茶灰色を呈する。

SD196（Fig. 38　PL. 49,101）

遺物は、土師器蛸壺、須恵器坏、弥生土器甕・鉢、杵の木製品が出土している。**46**は手捏ねによる小型鉢形土器である。半球形の器形を呈し、口縁は広口で指つまみにより直立する。調整は内外面ともナデて仕上げている。口径3.8cm、器高2.5cmを測る。胎土は精選され僅かに1mmほどの砂粒を含み、黒灰色を呈している。**48**は鉢形土器で、底部はやや丸味を呈する。口縁は直立気味に立ち上がり、端部近くで僅かに外反する。端部は横ナデにより丸く仕上げている。器面内外面とも丁寧なヘラ磨きが施されている。口径12.8cm、器高4.7cmを測る。胎土は精選され僅かに1mmほどの白色砂粒を含み、橙灰色を呈している。

45はいわゆる蛸壺形土器で、滴の頂部を除いたような器形を呈する。器壁は厚く重厚である。丸底

で、口縁は内傾しながら直線的に立ち上がる。端部は丸く仕上げている。器面はナデによる丁寧な仕上げである。口縁部下には径1.3cmを測る円孔が内壁から外壁に向かって傾斜するように1個設けている。口径6.0cm、器高10.6cm、器壁厚0.8～1.5cmを測る。胎土は精選され僅かに1mmほどの砂粒を含み、橙灰色を呈している。

49は甕形土器で、胴央部下を欠く。胴部はやや張りを呈し、頸部の締まりは弱い。口縁は「く」の字状に強く外反する。このため、頸部屈曲部は内外面とも強い稜線を呈する。口縁端部は面を呈し、横ナデによる。胴部器面外面は目の細かい刷毛目整形の後にナデて仕上げている。口径20.3cm、器壁厚0.5～0.6cmを測る。胎土は1～2mmほどの白色砂粒を多く含み、暗茶灰色を呈する。

SD197（Fig. 39　PL. 50）

遺物は、須恵器甕・高坏、弥生土器甕・鉢、鍬・板状木製品が出土している。**50**は須恵器の坏で底部を欠く。受部は外方に水平に延び、口縁はやや内傾しながら直線的に立ち上がる。口縁端部は傾斜面を呈する。底部は大半を欠くものの、丸底を想定させる。底部外面は回転ヘラ削り調整。口径12.2cm、器壁厚0.4～0.5cmを測る。胎土は、僅かに1mm程の白色砂粒を含み、淡青灰色を呈する。

51は甕形土器で胴央部下を欠く。胴部は球状を呈し、頸部は締まる。口縁は短く、「く」の字状に折れ曲がる。頸部内外面ともに屈曲部には稜線を呈する。器面外面は刷毛目による整形の後にナデて仕上げている。内面は頸部屈曲部下までヘラ削り調整している。口径10.3cm、器壁厚0.7～0.8cmを測る。胎土は1mmほどの暗褐色を含む特徴を呈し、淡橙灰色を呈する。**52**は甕形土器で胴央部下を欠く。胴部は球状を呈し、頸部の締まりは弱い。口縁は短く、「く」の字状に外湾し、端部は横ナデにより丸く仕上げている。頸部内外面ともに屈曲部は丸味を呈し、稜線は極めて弱い。器面外面は目の細かい刷毛目による整形の後にナデて仕上げている。内面は頸部屈曲部までヘラ削り調整している。胴央部には煤が付着している。口径11.3cm、器壁厚0.6cmを測る。胎土は1～2mmほどの砂粒を多く含み、茶灰色を呈する。**53**は甕形土器で胴央部下半を欠く。頸部の締まり弱く、口縁は短く外湾する。頸部内外面ともに屈曲部は丸味を呈し、稜線は極めて弱い。外面頸部下にはヘラ先による一条の沈線を刷毛目整形の後に施している。器面は内外面とも刷毛目による整形の後にナデて仕上げている。胴央部には煤が付着している。器壁厚0.7cmを測る。胎土は1～2mmほどの砂粒を多く含み、茶灰色を呈する。

SD198（Fig. 40　PL. 101）

遺物は、弥生土器甕・小型鉢が出土している。**54**は手捏ねによる小型鉢形土器で、半球形の器形を呈する。肉厚で口縁は広口で指つまみにより直立し、端部は丸く仕上げている。調整は内外面ともナデて仕上げている。口径3.4cm、器高3.5cmを測る。胎土は精選され僅かに1mmほどの砂粒を含み、淡橙灰色を呈している。

SD199（Fig. 41　PL. 53）

遺物は、弥生土器小型鉢、鍬・棒状木製品が出土している。**55**は手捏ねによる小型鉢形土器で、底部を欠く。残部は半球形の器形を推定させる。口縁は広口で指つまみにより直立し、端部は薄い。調整は内外面ともナデて仕上げている。口径3.6～3.9cmを測る。胎土は精選され僅かに1mmcmほどの砂粒を含み、淡橙灰色を呈している。

SD215（Fig. 42　PL. 101）

遺物は、須恵器坏が出土している。72は須恵器の坏である。底は浅く平坦な器形を呈する。受部は外方に水平に延びる。口縁部は僅かに内傾しながら直線的に立ち上がり、端部は平坦面を呈する。底部は全面に回転ヘラ削り。口径10.1cm、器高4.3cmを測る。胎土は精選されているものの、僅かに1～2mm程の白色砂粒を含み、暗青灰色を呈する。

水　田（SX）

SX200（Fig. 43　PL. 101）

遺物は、水田覆土（砂）から弥生土器甕・高坏・壺・鉢、須恵器甕・坏・蓋、砥石が出土している。

62・63・338は須恵器の坏で、いずれも底部を欠くが、残存状況から丸底を推定させる。受部は水平にのび、口縁はやや内傾しながら直線的に立ち上がる。底部外面は回転ヘラ削り。**62**は口径10.3㎝、器壁厚0.4㎝を測る。胎土は僅かに1㎜程の白色砂粒を含み、暗青灰色を呈する。**63**は口径12.5㎝、器壁厚0.5㎝を測る。胎土は僅かに1㎜程の白色砂粒を含む。還元焼成が不十分で淡灰白色を呈する。**338**は口径10.2㎝、器壁厚0.5㎝を測る。胎土は僅かに1㎜程の白色砂粒を含み、暗青灰色を呈する。

61は手捏ねの小型鉢形土器である。底部は狭小で、口縁は外反しながら直線的に立ち上がる。肉厚な口縁は広口で、端部は丸く仕上げている。器面は内外面ともナデて仕上げている。口径6.1㎝、器高5.4㎝、器壁厚0.7～0.9㎝を測る。胎土は1～3㎜ほどの白色砂粒を多く含み、淡橙灰色を呈する。

334は脚付きの小型鉢で上部を欠く。脚部は椀を伏せた器形を呈する。脚部口径は7.2㎝を測る。胎土は1～2㎜程の白色砂粒を多く含み、淡橙灰色～淡茶灰色を呈する。**56**は台付き小型鉢で上部を欠く。器面は刷毛目整形の後にナデて仕上げている。脚部口径は8.1㎝を測る。胎土は精選され1～2㎜程の白色砂粒を僅かに含み、橙灰色を呈する。**57**は台付きの鉢で上部を欠く。台は鼓状を呈する。器面は刷毛目整形の後にナデて仕上げている。脚部口径は13.2㎝を測る。胎土は1～2㎜程の暗褐色砂粒を含む特徴を呈し、淡茶灰色である。

335は丸底の鉢で口縁端部と底部とを欠く。胴部は張りのある球形状を呈し、頸部は僅かに締まる。口縁は直線的に外反するものの弱く、頸部屈曲部の稜線も弱い。調整は底部内面をヘラ削りした後に粗いヘラ磨きを施している。外面はナデて仕上げている。器壁厚0.3～0.4㎝を測る。胎土は1㎜ほどの白色砂粒を多く含み、淡茶灰色を呈している。

59は支脚で、脚部を欠く。頂部は脚部上端部に楕円形の円盤を貼付け、端部一端を嘴状にのばしている。平坦面を呈するが僅かに傾斜する。器面はナデて仕上げている。胎土は1～3㎜ほどの砂粒を多く含み、淡灰褐色を呈する。

337は口縁の上下両端部を発達させた瀬戸内系甕である。口縁は外反するものの弱く、頸部屈曲部は丸味を持つ。ハケ目整形の後にナデ調整。口径13.2㎝、器壁厚0.3㎝を測る。胎土は1～2㎜ほどの白色砂粒を多く含み、暗茶灰色を呈する。**65**は甕形土器で、胴部はやや張りを呈し、頸部の締まりは弱い。口縁は「く」の字状に強く外反する。頸部屈曲部は内外面とも稜線を呈する。口縁端部は面を呈し、横ナデで仕上げている。胴部器面外面は目の細かい刷毛目整形の後にナデて仕上げている。口径20.8㎝、器壁厚0.7㎝を測る。胎土は1～2㎜ほどの白色砂粒を多く含み、暗茶灰色を呈する。**336**は弥生土器の甕形土器で胴央部下を欠く。口縁はいわゆる鍔口縁で、逆「L」の字状を呈する。上端部は平坦で端部にはキザミ目を施している。内外面とも細かい刷毛目整形の後、ナデて仕上げている。口径28.2㎝、器壁厚0.6㎝を測る。胎土は1～2㎜ほどの砂粒を多く含み、淡橙灰色を呈する。**340**は甕形土器で底部を欠く。口縁部は逆「L」字形状に短く折れ曲がり、上端は平坦である。端部は丸く仕上げている。口径27.6㎝、器壁厚0.4㎝を測る。内面はナデ調整している。胎土は1㎜ほどの暗褐色砂粒を含む特徴を持ち、淡橙灰色を呈する。**58**は甕の脚部で、胴部下半はすぼまり、底部は円筒形状の底上げ。外面は刷毛目整形の後にナデて仕上げている。底径8.6㎝、器壁厚0.9㎝を測る。胎土は1～2㎜ほどの白色砂粒を多く含み、暗橙灰色を呈する。**60**も甕形土器の脚部である。胴部下半はすぼまり、底部は円筒形状の底上げで縁がやや広がる。外面は刷毛目整形の後にナデて仕上げている。底径7.6㎝、器壁厚1.1㎝を測る。胎土は1～2㎜ほどの白色砂粒を多く含み、暗橙灰色を呈する。

4）第4遺構検出面

溝・河川（SD）

SD104（Fig. 44,45　PL. 11,12,66～77,102）

遺物は、弥生土器甕・壺・高坏、石斧・石鏃・石包丁、鍬・鋤・斧柄・沓・槽・杵・梯子・柱などの木製品・建築部材が出土している。**15**は鉢形土器である。底部は僅かに丸味を呈し、口縁は直線的に外反する。口縁端部は横ナデにより丸く仕上げている。内外面とも刷毛目で整形した後にナデて仕上げているが、外面には刷毛目痕跡を器面全体に残す。口径16.4㎝、器高5.4㎝、器壁厚0.4～0.5㎝を測る。胎土は暗褐色砂粒を含む特徴を持ち、暗褐色～淡灰褐色を呈する。

5は高坏で、脚部を欠く。口縁部は杯部との屈曲が明瞭で、やや外湾気味に立ち上がる。口縁端部は横ナデにより丸く仕上げている。器面は刷毛目整形の後に内外面ともヘラ先による幅の細い磨きを放射状に施している。口径は25.6㎝、器壁厚0.5㎝を測る。胎土は0.5㎜ほどの砂粒を多く含み、茶褐色を呈する。**18**は高坏で、脚部を欠く。口縁部は杯部との屈曲が明瞭で、やや外湾気味に立ち上がる。口縁端部は横ナデにより丸く仕上げている。器面は刷毛目整形の後に内外面ともヘラ先による幅の細い磨きを放射状に施している。内外面とも一部に暗褐色の顔料が残る。口径は28.3㎝、器壁厚0.4㎝を測る。胎土は精選され0.5㎜ほどの砂粒を僅かに含み、茶褐色を呈する。**4・16**は高坏で坏部を欠く。**16**の脚部は下部近くで外湾し、端部は丸く仕上げている。外面は刷毛目整形の後に脚部上半部だけナデて仕上げている。内面は上半部の絞り痕跡をヘラ削りで仕上げている。脚部中位には径0.6㎝を測る円孔を3ヶ所に施している。底径10.7㎝を測る。胎土は精選され1㎜ほどの砂粒を僅かに含み、淡橙灰色を呈する。坏部との接合方法は差し込み式。**4**の脚部は下部近くから「く」の字状に外反しする。端部は横ナデにより面を持つ。外面は刷毛目整形の後にナデて仕上げている。内面は上半部の絞り痕跡をヘラ削りで仕上げている。底径13.2㎝を測る。胎土は精選され1㎜以上の砂粒は含まれておらず、淡褐色を呈する。

7は二重口縁を持つ壷形土器で、頸部下を欠く。頸部は外湾しながら立ち上がり、口縁は直立気味に屈曲して立ち上がる。このため口縁屈曲部には明瞭な稜線がある。口縁端部上面は平坦面を呈し、外面側は横ナデにより外方へ僅かにのばす。器面整形はハケ目の後、口縁部を横ナデ調整している。口径25.2㎝、器壁厚0.6㎝を測る。胎土は精選され1㎜ほどの砂粒を僅かに含み、淡橙灰色を呈する。**19**も二重口縁を持つ壷形土器で、頸部下を欠く。頸部は外湾しながら立ち上がり、口縁は直立気味に屈曲して立ち上がる。このため口縁屈曲部には明瞭な稜線がある。口縁端部上面は平坦面を呈し、外面側は横ナデにより外方へ僅かにのばす。器面整形はハケ目の後、口縁部を横ナデ調整している。口径24.8㎝、器壁厚0.5㎝を測る。胎土は0.5～1㎜ほどの砂粒を僅かに含み、茶灰色を呈する。

11は丸底壺である。胴部は球状を呈する。頸部は締まる。口縁は「く」の字状に折れ曲がり直線的にのびる。このため頸部屈曲部は稜線を呈する。外面の胴央部下半はヘラ削り、上半部は目の細かい刷毛目で整形した後にいずれも粗いヘラ磨きを施して仕上げている。口径は13.6㎝、器壁厚0.3～0.4㎝を測る。胎土は1㎜ほどの砂粒を含み、暗茶灰色を呈する。

20は弥生土器の甕形土器で胴央部下を欠く。口縁が逆「L」字状を呈し、鍔状の短い口縁部を有する。上端部は平坦である。内外面とも細かい刷毛目整形の後、内面はナデて仕上げている。口径20.8㎝、器壁厚0.6㎝を測る。胎土は1～2㎜ほどの暗褐色砂粒を多く含む特徴を持ち、橙褐色を呈する。**8**は甕形土器で胴央部下半を欠く。胴部は張りのある球形を呈する。口縁は「く」の字状に外反し、直線的にのびる。このため頸部屈曲部の内外面には強い稜線を呈する。胴部外面は平行板目による叩き整形の後、縦方向に目の細かい刷毛目調整を施している。内面はナデて仕上げている。口縁は刷毛目

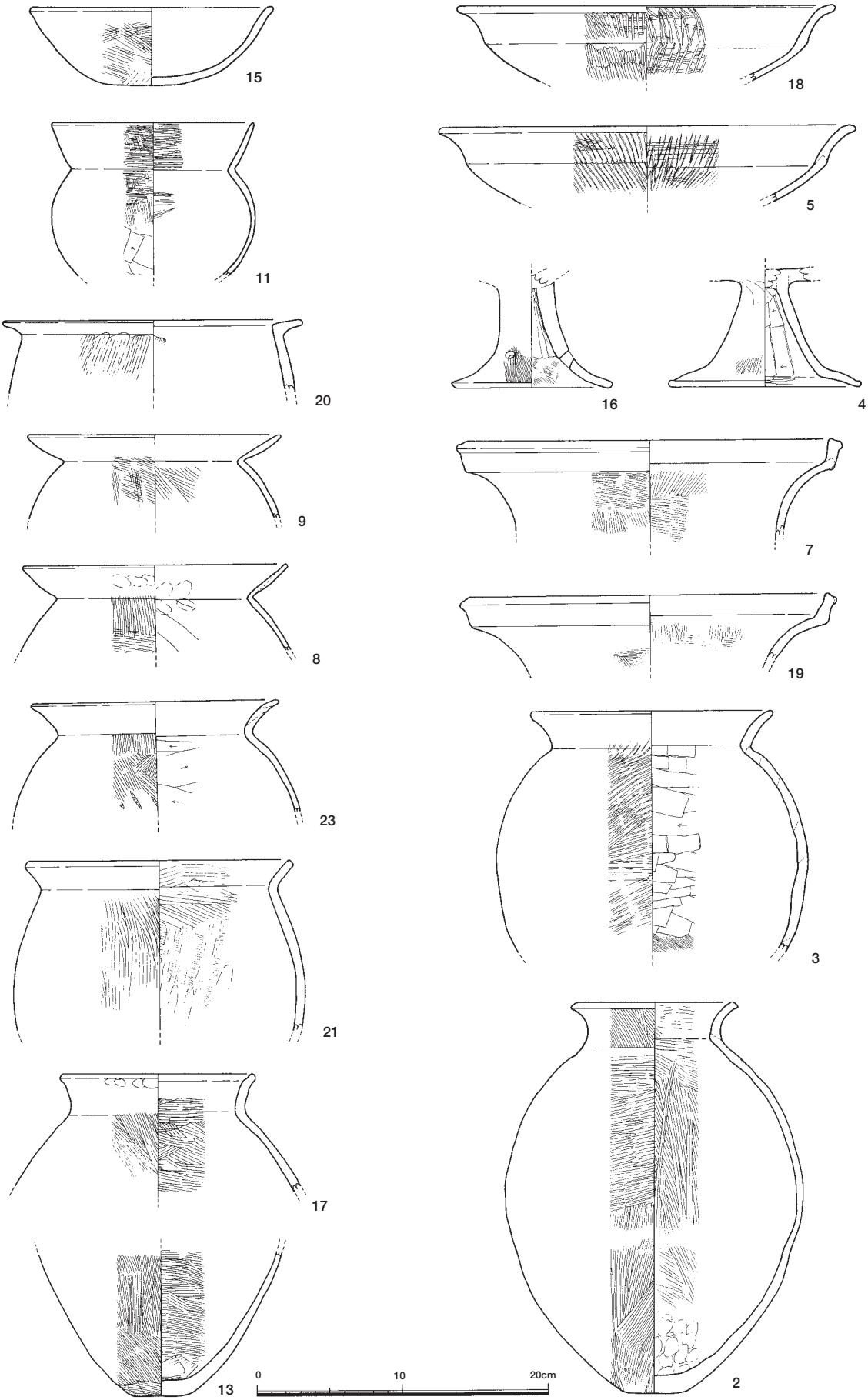


Fig.44　溝SD104出土遺物実測図1（1/4）

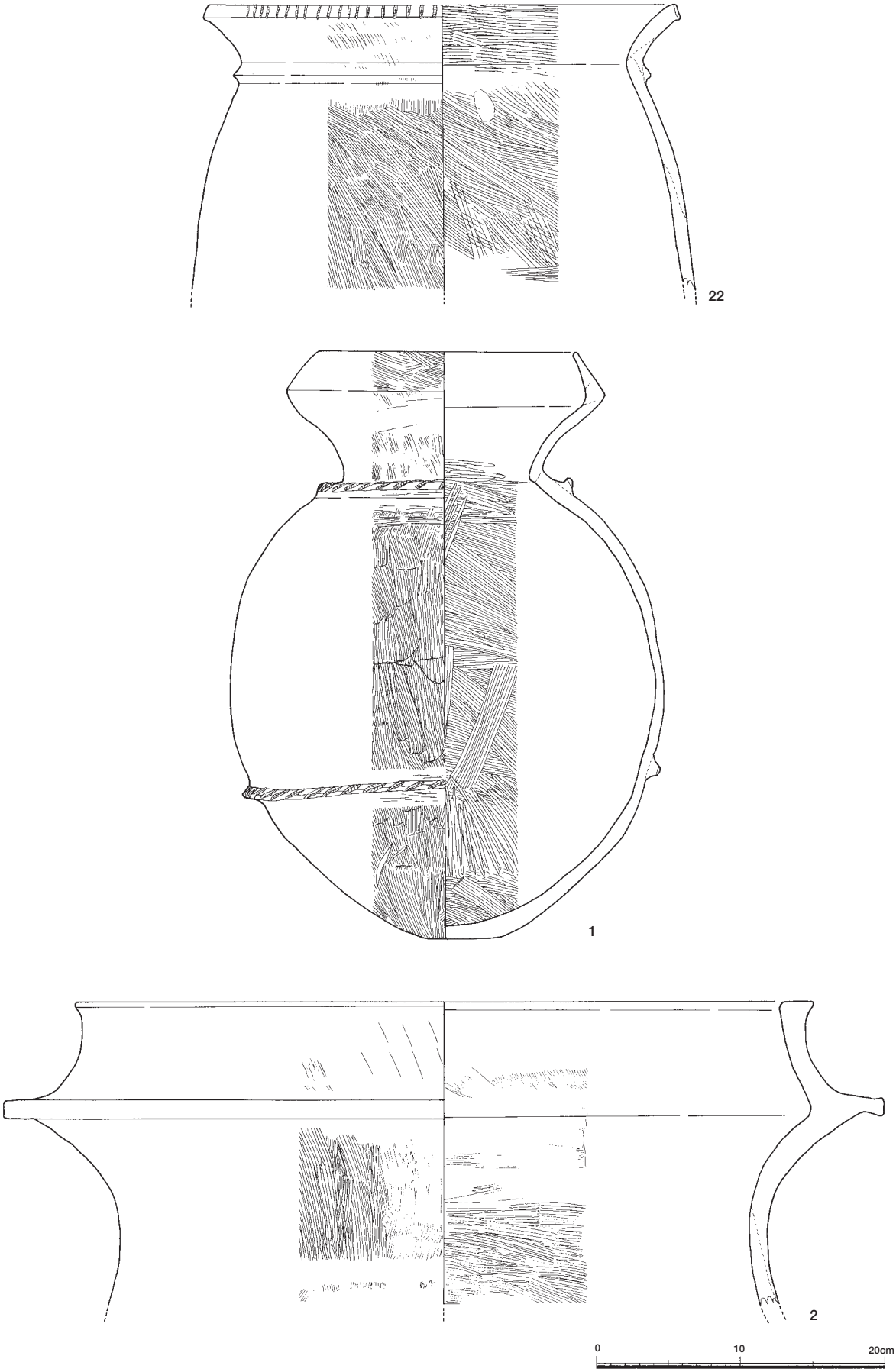


Fig.45　溝SD104出土遺物実測図2（1/4）

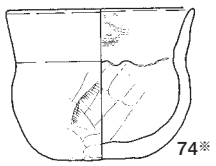


Fig.46　溝SD221出土遺物実測図（1/4※）

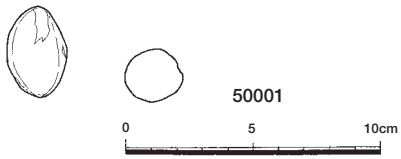


Fig.47　溝SD223出土遺物実測図（1/3）

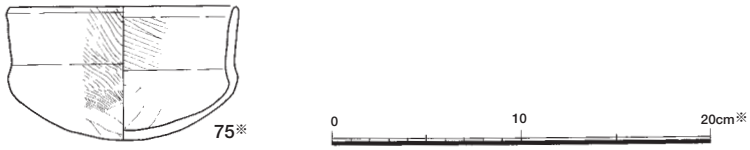


Fig.48　土壙SK226出土遺物実測図（1/4※）

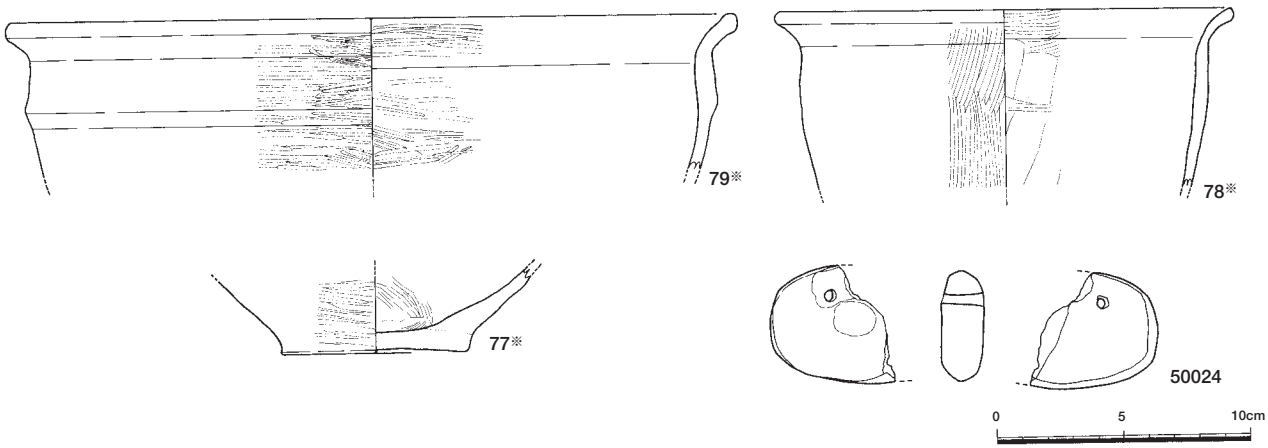


Fig.49　土壙SK244出土遺物実測図（1/3・1/4※）

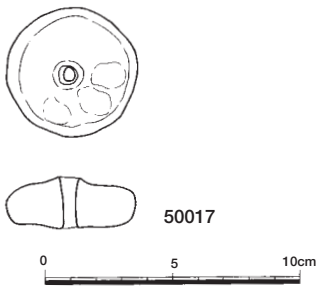


Fig.50　土壙SK249出土遺物実測図（1/3）

整形の後にヨコナデ調整し、端部は丸く仕上げている。口径17.8㎝、器壁厚0.3㎝を測る。胎土は0.5㎜ほどの砂粒を多く含み、暗橙灰色を呈する。器面外面には口縁端部近くまで煤が付着している。9は甕形土器で、胴央部下半を欠く。胴部は張りのある球形を呈する。口縁は「く」の字状に外反し、直線的にのびる。このため頸部屈曲部の内外面には強い稜線を呈する。胴部外面は平行板目による叩き整形で、叩き目を消すように全面ナデて仕上げている。胴部内面は頸部屈曲部まで刷毛目調整している。口縁は刷毛目整形の後にヨコナデ調整し、端部は丸く仕上げている。口径17.2㎝、器壁厚0.4㎝を測る。胎土は0.5㎜ほどの砂粒を多く含み、暗橙灰色を呈する。器面外面には口縁端部近くまで煤が付着している。**23**は甕形土器で、胴央部下半を欠く。胴部は残存部から球形を推定させる。口縁は「く」の字状に外反し、やや反りを呈しながらのびる。頸部屈曲部は丸味を呈しており、稜線は弱い。胴部外面は極めて目の細かい刷毛目で仕上げている。胴部内面は頸部屈曲部までヘラ削りしている。口縁はヨコナデ調整し、端部は丸く仕上げている。口径16.4㎝、器壁厚0.4㎝を測る。胎土は1㎜ほどの砂粒を多く含み、茶灰色を呈する。器面外面には口縁端部近くまで煤が付着している。**21**は甕形土器で、胴央部下半を欠く。胴部は残存部から卵形を推定させる。口縁は短く、「く」の字状に外湾し、広口である。頸部屈曲部は丸味を呈しており、稜線は極めて弱い。胴部内外面とも刷毛目で整形し、粗いナデで仕上げている。口縁はヨコナデ調整し、端部は丸く仕上げている。口径17.8㎝、器壁厚0.5㎝を測る。胎土は1～2㎜ほどの白色砂粒を多く含み、淡茶灰色を呈する。器面外面には口縁端部近くまで煤が付着している。**17**は甕形土器で胴央部下半を欠く。頸部の締まり弱く、口縁は短く外湾する。このため頸部内外面ともに屈曲部は丸味を呈し、稜線は極めて弱い。器面は内外面とも目の細かい刷毛目で仕上げている。器面外面には煤が薄く口縁端部まで付着している。口径13.2㎝、器壁厚0.5㎝を測る。胎土は1～2㎜ほどの砂粒を多く含み、淡茶褐色を呈する。**3**は甕形土器で、胴央部下半を欠く。胴部は張りのある球形を呈する。口縁は「く」の字状に外反し、やや反りを呈しながらのびる。このため頸部屈曲部の内外面には稜線を呈する。胴部外面は平行板目による叩き整形の後、粗いナデで仕上げている。胴部内面は頸部屈曲部下まで粗いヘラ削りし、ナデて仕上げているが、粘土紐重ね目を残す。口縁はヨコナデ調整し、端部を丸く仕上げている。口径16.6㎝、器壁厚0.6㎝を測る。胎土は0.5㎜ほどの砂粒を多く含み、暗橙灰色を呈する。器面外面には口縁端部近くまで煤が厚く付着している。この炭化物を放射性炭素年代測定したところ、暦年代較正値はＡＤ245、暦年代範囲はＡＤ215～265（40.4%）、ＡＤ270～340（55.2%）の結果を得た。**2**は甕形土器である。胴部は卵形を呈し、底部は極めて狭小である。口縁は「く」の字状に外反し、やや反りを呈しながらのびる。頸部屈曲部の内外面には弱い稜線を呈する。胴部外面は平行板目による叩き整形の後、刷毛目調整している。胴部内面は頸部屈曲部下まで刷毛目で仕上げている。口縁はヨコナデ調整し、端部を丸く仕上げている。口径10.8㎝、器高26.7㎝、器壁厚0.6㎝を測る。胎土は0.5㎜ほどの砂粒を多く含み、暗橙灰色を呈する。器面外面には口縁端部近くまで煤が厚く付着しているが、底部および近くには認められない。この炭化物を放射性炭素年代測定したところ、暦年代較正値はＡＤ230、暦年代範囲はＡＤ135～200（62.3%）、ＡＤ205～240（37.7%）の結果を得た。**13**は甕形土器で、胴央上半部を欠く。胴部は卵形を呈し、底部は極めて狭小である。内外面とも目の細かい刷毛目調整している。器壁厚0.5㎝を測る。胎土は0.5㎜ほどの砂粒を多く含み、暗茶灰色を呈する。

22大型の甕形土器で、底部を欠く。頸部はやや締まり、胴部は細長を推定させる。口縁は「く」の字状に外反し、口縁端部は断面形が「コ」の字状を呈し、端面にはハケ工具小口面を用いたキザミ目が施されている。頸部には断面形が三角形の低い凸帯が巡る。胴部の内外面はハケ目整形し、口縁だけ横ナデ調整している。口径32.6㎝、器壁厚0.9～1㎝を測る。胎土は1～2㎜ほどの砂粒を多く含み、

淡橙灰色を呈する。

1は二重口縁を持つ壷形土器の完形品である。胴部はやや細長の球状を呈し、頸部は締まる。口縁は鋭角的に屈曲して直線的に強く内傾するため、口縁屈曲部は強い稜線を呈する。頸部には断面形が三角形でハケ工具によるキザミ目を施した低い凸帯、胴央部下にもハケ工具によるキザミ目を施した断面形が「コ」の字状の凸帯が巡る。底部は狭小。器面整形は目の細かいハケ目で、口縁屈曲部の内外面だけ横ナデ調整している。口径17.8㎝、器高40.8㎝、底径5.2㎝、胴部最大径30.2㎝を測る。胎土は1～2㎜ほどの砂粒を多く含み、橙褐色を呈する。**12**二重口縁を持つ大型の壷形土器で、頸部下を欠く。口縁は鋭角的に屈曲して直線的に強く内傾しながら立ち上がる。口縁屈曲部外面は水平に強く発達させ、鍔状を呈する。口縁上端は平坦で、横ナデにより外方に引き出す。器面整形はハケ目整形の後に横ナデ調整している。口径50.8㎝、器壁厚1.4㎝を測る。胎土は1～2㎜ほどの砂粒を多く含み、淡橙灰色を呈する。

SD220

遺物は、弥生土器甕・高坏、黒曜石製石鏃・小玉石が出土している。

SD221（Fig. 46　PL. 103）

遺物は、弥生土器甕・鉢、石斧が出土している。

74は小型丸底の壺である。底部は狭小ではあるが平坦面を呈する。胴部は弱く張り出し、頸部は僅かに締まる。口縁は「く」の字状に外反するものの程度は弱く、直線的にのびる。このため口縁屈曲部には弱い稜線を呈する。口縁端部は先細で丸く仕上げている。器面は刷毛目整形の後にナデて仕上げている。口径9.6㎝、器高8.0㎝、器壁厚0.5㎝を測る。胎土は1～2㎜ほどの白色砂粒を多く含み、淡橙褐色を呈する。

SD223（Fig. 47　PL. 114）

遺物は、弥生土器甕、投弾型土製品が出土している。

50001は土製でラブビーボールの形状を呈する。いわゆる投弾である。器面はナデにより極めて滑らかである。全長3.5㎝、最大径2.2㎝、重量14ｇを測る。胎土は僅かに0.5㎜ほどの砂粒を含み、淡灰褐色を呈する。

SD232

遺物は、弥生土器甕、石包丁が出土している。

SD234

遺物は、弥生土器甕が出土している。

SD235（PL. 78）

遺物は、弥生土器甕・鉢、黒曜石製石鏃・石製紡錘車円盤・小玉石、板状木製品が出土している。

土　坑（SK）

SK226（Fig. 48　PL. 103）

遺物は弥生土器甕が出土している。**75**は小型丸底の壺である。胴部は浅く丸底で、頸部の締まりは弱い。口縁は僅かに外反するものの直立し、口縁端部は丸く仕上げている。器面は刷毛目整形の後に粗いナデで仕上げている。口径11.8㎝、器高7.2㎝、器壁厚0.3～0.4㎝を測る。胎土は1～2㎜ほどの白色砂粒を多く含み、淡茶灰色を呈する。

SK243

遺物は木製農耕具の鍬が出土している。

SK244（Fig. 49　PL. 79,114）

遺物は弥生土器甕・鉢・壺、土製品、木製農耕具の鍬・斧柄・建築部材が出土している。**79**は鉢形土器で胴央部下半を欠く。肩部を肥厚させ低い段が付く。肩部から頸部は直立し、口縁は外湾する。このため頸部屈曲部は内外面とも丸味を呈し、稜線は極めて弱い。器面調整は内外面とも丁寧なヘラ磨きを施している。口径38.2㎝、器壁厚0.6～0.7㎝を測る。胎土は1～2㎜ほどの白色砂粒を多く含み、暗茶褐色を呈する。器面外面の肩部下には煤が薄く付着している。

78は甕形土器で胴央部下半を欠く。頸部の締まりは弱く、口縁は短く外湾する。このため頸部内外面ともに屈曲部は丸味を呈し、稜線は極めて弱い。口縁部端部は横ナデにより丸く仕上げている。器面は内外面とも目の粗い刷毛目による整形の後、胴部内面だけはナデて仕上げている。煤が胴部外面から口縁端部まで付着している。口径24.0㎝、器壁厚0.6～0.7㎝を測る。胎土は1～2㎜ほどの白色砂粒を多く含み、暗橙褐色を呈する。

77壺形土器の底部と考えられ、胴央部上半を欠く。胴部は残部から球形を想定させる。底部は平坦である。胴部は外面を丁寧なヘラ磨きを施し、内面は刷毛目整形の後に粗いナデを施している。底部径10.2㎝、器壁厚0.6㎝を測る。胎土は1㎜ほどの白色砂粒を多く含み、暗茶褐色を呈する。

50024は穿孔のある楕円形土製品で大半を欠く。残部から小判形の器形を想定させ、縁近くに径0.5㎝を測る穿孔が施されている。厚みは肉厚で、1.6～1.9㎝を測る。外縁は丸く、ナデて仕上げている。胎土は1～2㎜ほどの砂粒を多く含み、暗灰褐色を呈する。

SK245（PL. 80）

遺物は弥生土器甕・壺、石製穿孔具、円盤形木製品・建築部材の柱が出土している。

SK249（Fig. 50　PL. 114）

遺物は土製紡錘車円盤が出土している。**50017**は肉厚の土製紡錘車で、完形品である。外径4.0㎝、厚さ1.8㎝、重量52ｇを測る。円盤形を呈し、中央が肉厚。中心に径0.6㎝の孔が貫通する。器面はナデている。胎土は1㎜ほどの砂粒を多く含み、暗灰褐色を呈する。

SK251

遺物は、弥生土器甕・壺・丹塗り彩色壺が出土している。

遺構検出面（Fig. 51,52　PL. 103,114）

363は須恵器の短脚高坏で坏部を欠く。脚部には長方形の透かしが施されている。口径11.2㎝を測る。胎土は1㎜ほどの砂粒を多く含み、暗青灰色を呈する。上部遺構の紛れ込みと考えられる。

382は手捏ねによる超小型の鉢形土器である。粘土小塊を親指と人差し指とで成形している。口径2.5㎝、器高1.4㎝を測る。胎土は0.5㎜ほどの砂粒を含み、淡茶灰色を呈する。**377**も手捏ねによる鉢形土器である。粘土紐を重ねて成形し、外面には粘土紐の重ね目が残る。口径8.4㎝、器高4.5㎝を測る。胎土は0.5㎜ほどの砂粒を含み、淡橙灰色を呈する。

370・372は甕形土器で胴央部下半を欠く。口縁端部外縁には粘土紐を貼り付けた凸帯が巡り、キザミ目を施している。器面外面はカイガラ状痕で整形し、内面はナデて仕上げている。いずれも器面外面には煤が付着している。胎土は1㎜ほどの砂粒を含み、淡橙灰～淡茶灰色を呈する。**389**も甕形土器で胴央部下半を欠く。口縁端部を僅かに外反させ、外縁にキザミ目を施している。器面調整は丁寧なヘラ磨きが施されている。器面外面全面に煤が付着している。胎土は2㎜ほどの砂粒を含み、淡茶灰色を呈する。**350**は甕形土器である。底部は円盤状の底上げで平坦である。胴部は底部から直線的に外傾しながら立ち上がり、胴央部上位で「く」の字状に屈曲する。屈曲部外面には断面形が三角

形を呈しキザミ目を施した凸帯が巡る。口縁部は上端部直下に粘土紐を巡らしキザミ目を施している。器面は内外面ともナデて仕上げている。口径20.2cm、器高23.8cm、底径7.6cmを測る。器面外面の屈曲部下から口縁端部まで煤が付着している。胎土は1～2mmほどの砂粒を含み、淡橙灰～淡茶灰色を呈する。**373**は甕形土器で、口縁部と底部とを欠く。胴部は底部から直線的に外傾しながら立ち上がり、胴央部上位で折れ曲がりやや内傾しながら立ち上がる。屈曲部外面には断面形が三角形を呈しキザミ目を施した凸帯が巡る。器面は外面がカイガラ状痕による整形、内面はナデて仕上げている。器面外面の屈曲部付近には煤が付着している。胎土は1～2mmほどの砂粒を含み、淡橙褐色を呈する。

343は鉢形土器で胴央部下半を欠く。口縁は丸味のある胴部上位から内傾し、反りを呈しながら立ち上がる。屈曲部の肩部は沈線が巡り低い段状を呈する。器面は内外面とも丁寧なヘラ磨きが施されている。口径17.5cm、器壁厚0.5～0.6cmを測る。胎土は1～2mmほどの白色砂粒を含み、内面は黒色、外面は淡茶灰色を呈する。

374は壺形土器で、口縁部と底部とを欠く。器面は丁寧なヘラ磨きが施され、胴部上半部に無軸羽状紋と三条の沈線が施されている。器壁厚0.8cmを測る。胎土は精選され僅かに1mmほどの白色砂粒を含み、淡茶灰色を呈する。**371**は壺形土器で胴部下を欠く。口縁は口縁端部近くで外湾し、端部は丸く仕上げている。器面は丁寧なヘラ磨きの後に赤色顔料を器面内外に塗っている。胎土は1～2mmほどの砂粒を多く含み、淡茶灰色を呈する。

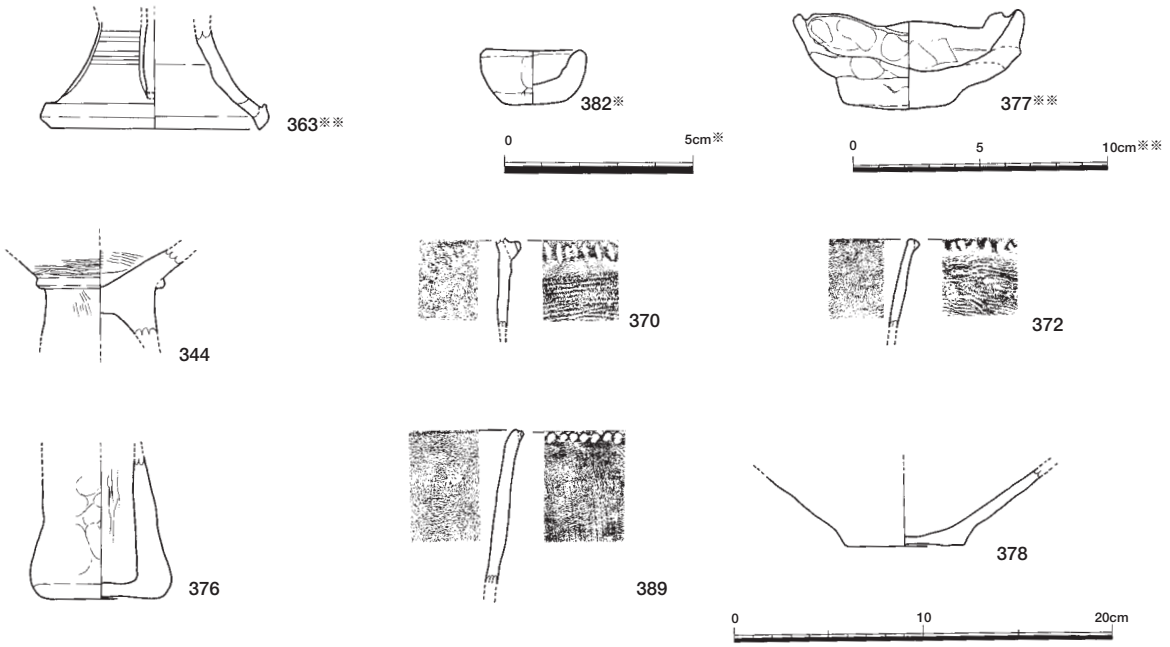


Fig.51　第4遺構検出面出土遺物実測図1（1/2※・1/3※※・1/4）

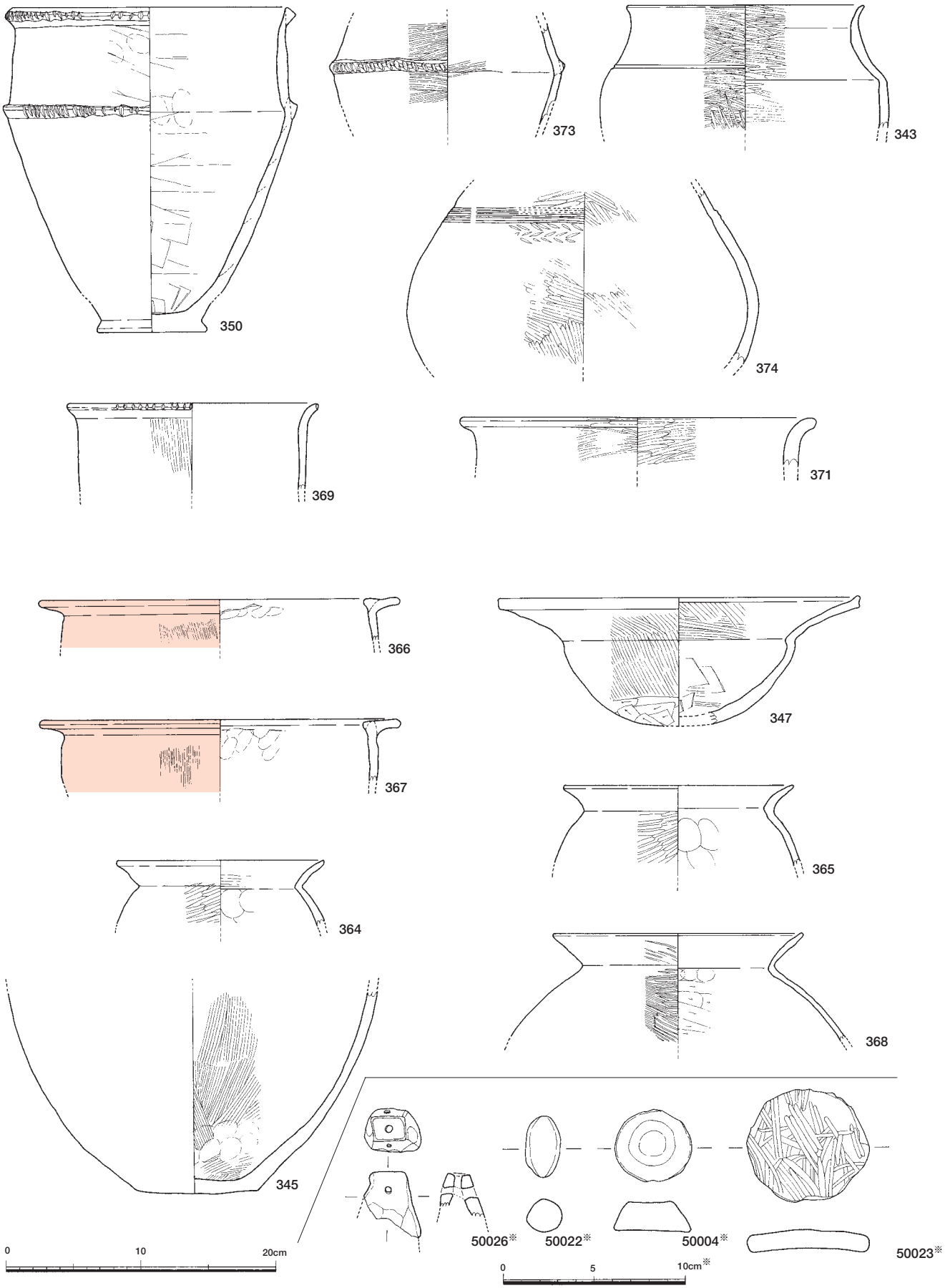


Fig.52　第4遺構検出面出土遺物実測図2（1/3※・1/4）

369は甕形土器で胴部下半を欠く。口縁端部を僅かに外反させ、外縁にキザミ目を施している。このため、口縁屈曲部は内外面とも丸味を呈している。器面調整は内外面とも刷毛目整形の後にナデて仕上げている。口径18.1㎝、器壁厚0.4㎝を測る。胎土は1㎜ほどの砂粒を含み、茶灰色を呈する。**366**・**367**は口縁が鍔状の甕形土器で、口縁断面形が「鋤先」状を呈する。口縁は端部を外方水平方向に極端にのばすとともに内方へも水平に短くのばし、上端が平坦である。胴部はいずれも胴央部下を欠くが胴長を推定させる。器面外面は縦方向の刷毛目調整の後にナデて仕上げている。器面外面の一部に赤色顔料が残る。**366**は口径26.8㎝、器壁厚0.6㎝を測る。胎土は1～3㎜程の白色砂粒を多く含む橙灰色を呈する。**367**は口径26.6㎝、器壁厚0.4～0.5㎝を測る。胎土は1～3㎜程の白色砂粒を多く含む橙灰色を呈する。

347は鉢形土器で口縁部が「く」の字状に強く外反し、発達した鍔状の口縁部を有する鉢形土器である。口縁上端部は上方へつまみ出している。口縁屈曲部は体部は深く屈曲部が明瞭で、底部は丸底である。内外面ともハケ目整形の後にナデ調整を施し、底部はヘラ削りを施している。口径26.6㎝、器高9.6㎝を測る。胎土は1～2㎜ほどの砂粒を多く含み、淡灰褐色を呈する。

364・**365**は甕形土器で胴央部下半を欠く。残部から胴部は球状が推定される。口縁部はやや反りを呈しながら「く」の字状に外反し、頸部は締まる。胴部外面は叩き板による整形の後、目の細かいハケ目で仕上げている。内面は刷毛目整形の後にナデて仕上げている。**364**は口径15.2㎝、器壁厚0.5㎝を測る。胎土は1㎜の白色砂粒を含み茶灰色を呈する。外面には煤が付着している。**365**は口径16.8㎝、器壁厚0.35㎝を測る。胎土は1㎜の白色砂粒を含み茶灰色を呈する。外面には煤が付着している。

368は甕形土器で胴央部下半を欠く。残部から胴部は球状が推定される。口縁部はやや反りを呈しながら「く」の字状に外反し、頸部は締まる。口径18.2㎝、器壁厚0.4㎝を測る。胴部外面はハケ目調整で仕上げている。内面は頸部下までヘラ削りで仕上げている。胎土は1㎜の白色砂粒を含み端茶灰色を呈する。外面には煤が付着している。**345**は甕形土器で胴央上半部を欠く。胴部は張りのある胴長の器形である。底部は僅かに丸味を呈する。器面は内外面とも刷毛目整形し、外面は丁寧にナデて仕上げている。底部9.1径㎝、器壁厚0.6㎝を測る。胎土は1㎜の白色砂粒を多く含み、端茶灰色を呈する。

50026は鐸形土製品で下半部を欠く。頂部は四角裁頭形で、裾部の形状は不明。頂部端面は中央部に径0.35㎝を測る円孔が、頂部下側面にも径0.25㎝を測る円孔が貫通している。器面はナデて仕上げている。胎土は1㎜ほどの白色砂粒を多く含む特徴を持ち、淡茶灰色を呈する。

50022は土製でラブビーボールの形状を呈する。いわゆる投弾である。器面はナデにより極めて滑らかである。全長3.4㎝、最大径1.7㎝、重量10ｇを測る。胎土は僅かに0.5㎜ほどの砂粒を含み、淡灰褐色を呈する。

50004は裁頭円錐形の土製品である。ナデて仕上げている。上面径2.2㎝、下面径4.1㎝、器高1.6㎝を測る。胎土は1～3㎜ほどの白色砂粒を多く含む特徴を持ち、淡橙灰色を呈する。

50023は甕形土器の胴部を円盤状に打ち欠いて加工したものである。反りを呈し、凸面にはヘラ磨き痕、ナデ痕が残る。周縁は打ち欠いた後に擦って整形している。径6.1～6.4㎝、厚さ0.8～0.9㎝を測る。胎土は1～2㎜ほどの白色砂粒を多く含む特徴を持ち、淡茶灰色を呈する。

（5）第5遺構検出面

柵（SA）

SA247

遺物は、丹塗磨研壺が出土している。

溝・河川（SD）

SD114（Fig. 53～63　PL. 14,15,88,89,104～111,115～117）

遺物は、弥生土器甕・高坏・壺・鉢・小型鉢・丹塗り磨研壺・黒色磨研壺・器台・甑、甕再加工円盤形土製品・土製紡錘車円盤・有孔円盤型土製品、黒曜石製石鏃・サヌカイト製石鏃・太型蛤刃石斧・扁平片刃石斧・柱状片刃石斧・石包丁・たたき石・石剣・スクレイパー小玉石、木製農耕具鍬・杵・建築材柱・琴・槽が出土している。

192・232は浅鉢形土器である。**192**は胴上部で内側に屈曲し、口縁は僅かに内傾しながら立ち上がり端部近くで短く外湾する。内外面とも黒色研磨を施している。口径18.8㎝、器壁厚0.4～0.5㎝を測る。胎土は精選され僅かに0.5㎜ほどの白色砂粒を含み、淡橙灰色を呈する。**232**は底部が円盤状の台を呈し、いわゆる底上げである。胴上部で内側に屈曲し、口縁は僅かに反りを呈しながら上方へ立ち上がる。内外面とも黒色研磨を施している。口径17.8㎝、底径8.0㎝、器高10.4㎝、器壁厚0.6㎝を測る。胎土は0.5～1㎜ほどの白色砂粒を多く含み、黒灰色を呈する。

185は浅鉢形土器で、底部を欠く。胴上部で屈曲し、口縁は僅かに外湾しながら上方へ立ち上がる。内外面とも丁寧なヘラ磨きを施し、外面の肩部～口縁部まで丹塗りが施されている。口径19.4㎝、器壁厚0.4～0.5㎝を測る。胎土は精選され僅かに0.5㎜ほどの白色砂粒を含み、淡橙灰色を呈する。

190は鉢形土器で胴部下半を欠く。胴部上部で内側に屈曲して肩部とし、口縁は短く折れ曲がり外反する。このため肩部と頸部の屈曲部には弱い稜線を呈する。口径17.8㎝、器壁厚0.4～0.5㎝を測る。胎土は精選され僅かに0.5㎜ほどの白色砂粒を含み、淡橙灰色を呈する。

239は半球状の椀形をした鉢形土器である。平坦な底部は円盤状の台を呈し、いわゆる底上げである。肉厚の口縁は外反しながら直線的に立ち上がり、端部は平坦である。器面は内外面とも黒色磨研している。口径21.8㎝、器高9.4㎝、底径8.5㎝、器壁厚0.8～0.9㎝を測る。胎土は1～2㎜ほどの白色砂粒を多く含み、暗茶灰色を呈する。

140は鉢形土器で胴央部下半を欠く。頸部の締まりは弱く、口縁は短く外湾する。このため頸部内外面ともに屈曲部は丸味を呈し、稜線は弱い。口縁端部は丸く仕上げている。器面は内外面ともに丁寧なヘラ磨きが施されている。口径23.0㎝、器壁厚0.6㎝を測る。胎土は精選され、0.5～1㎜ほどの白色砂粒を含み、淡茶灰色を呈する。

143・161は鉢形土器で胴央部下半を欠く。頸部の締まりは弱く、口縁は短く外湾する。このため頸部内外面ともに屈曲部は丸味を呈し、稜線は極めて弱い。外面の屈曲部と胴央部にはヘラ先による浅い沈線が3条巡る。器面は内外面ともに丁寧なヘラ磨きが施されている。**143・161**とも口径23.2㎝、器壁厚0.6～0.8㎝を測る。胎土は1㎜ほどの白色砂粒を多く含み、暗橙褐色を呈する。

110は鉢形土器で胴央部下半を欠く。頸部の締まりは極めて弱く、口縁は短く僅かに外湾する。このため頸部内面の屈曲部は丸味を呈し、稜線は極めて弱い。口縁端部は丸く仕上げている。器面は内外面ともに丁寧なヘラ磨きが施されている。口径29.8㎝、器壁厚0.7㎝を測る。胎土は1～2㎜ほどの白色砂粒を多く含み、淡橙灰色～淡灰褐色を呈する。

230は口縁部を欠く鉢形土器もしくは壺形土器と推定される。胴部下半は半球形を呈し、底部は平

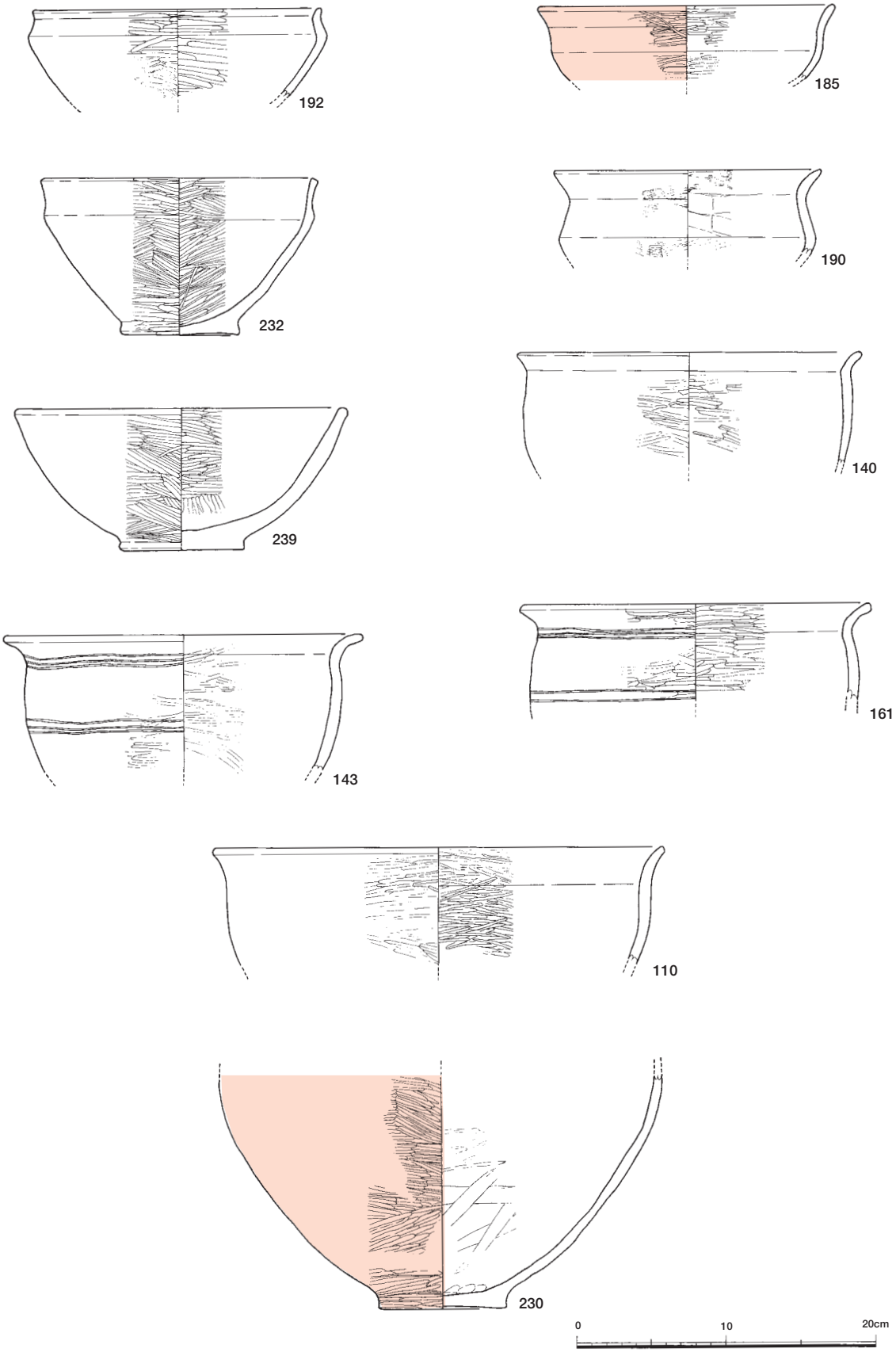


Fig.53　溝SD114出土遺物実測図1（1/4）

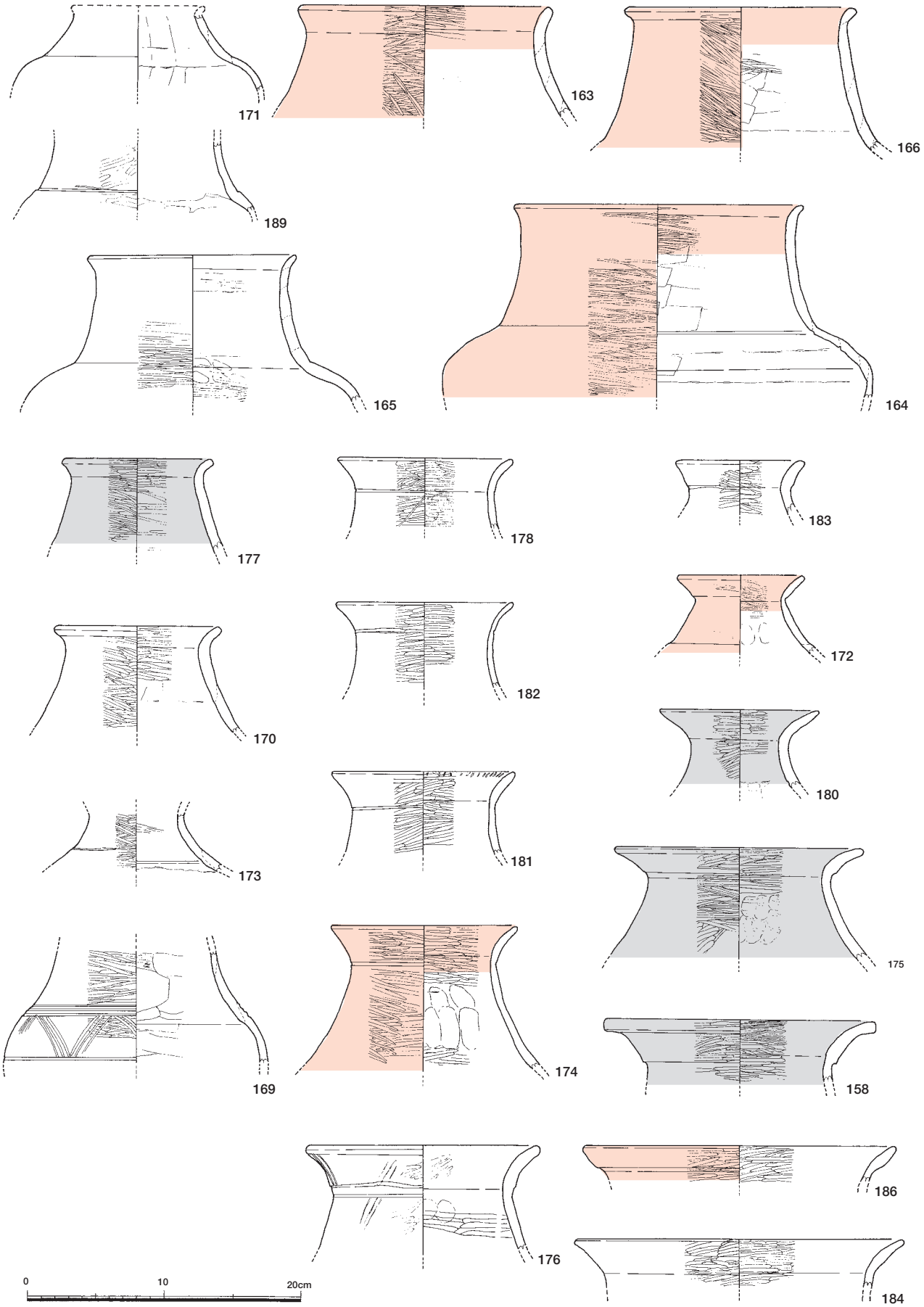
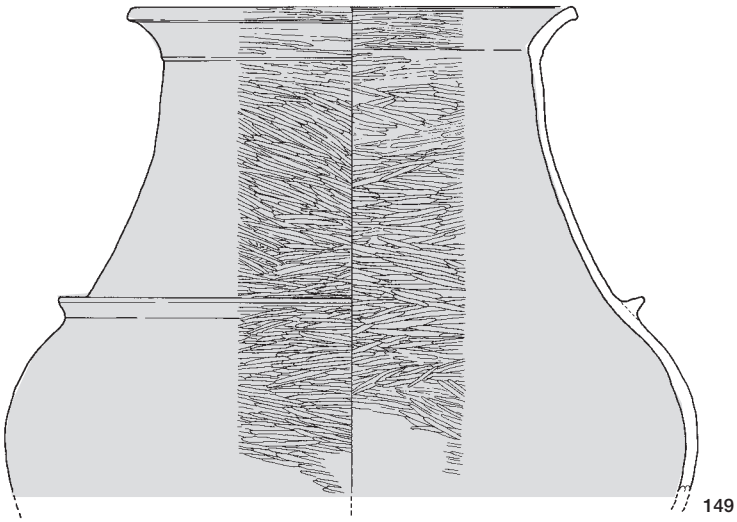


Fig.54　溝SD114出土遺物実測図2（1/4）



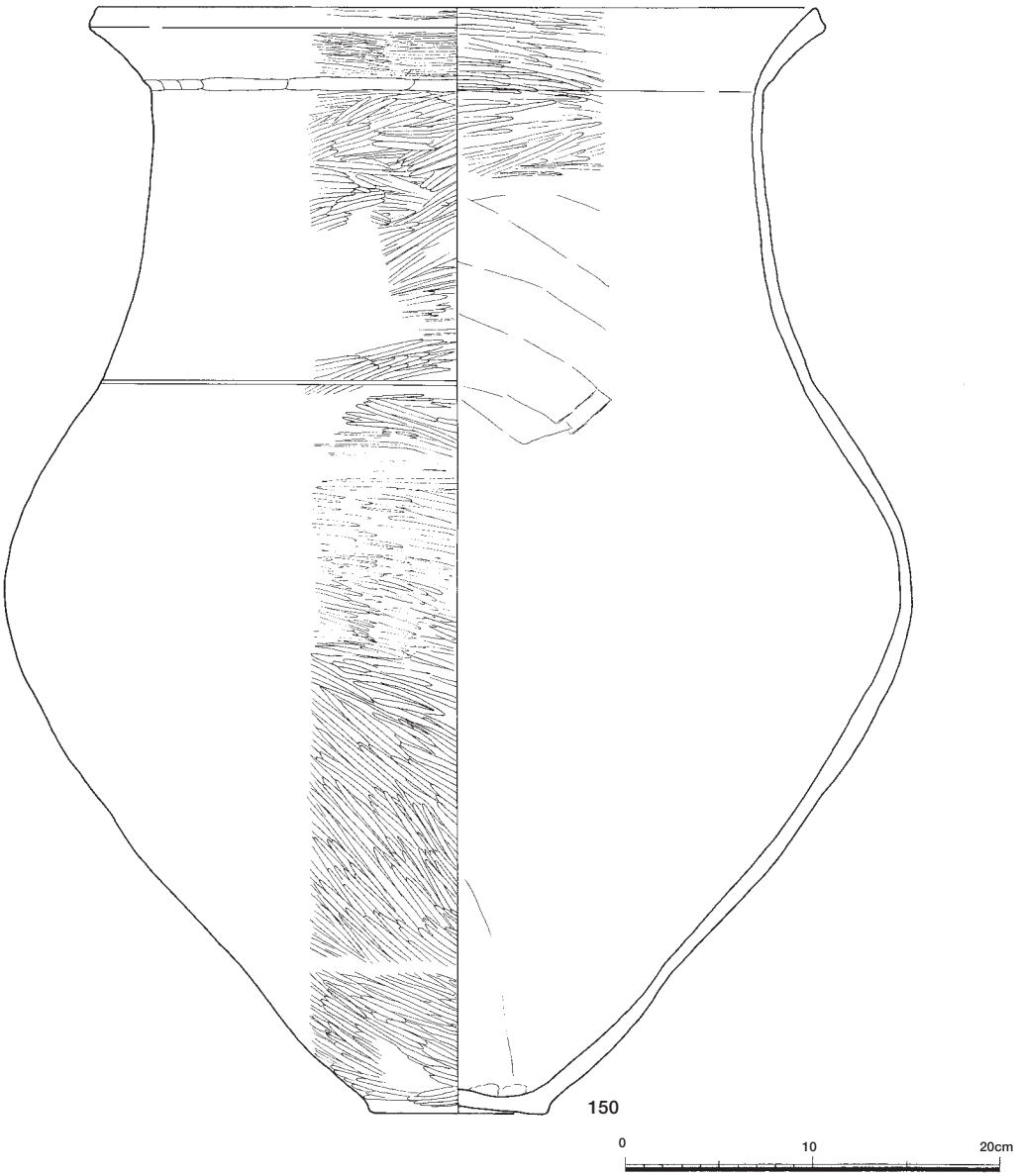


Fig.55　溝SD114出土遺物実測図3（1/4）

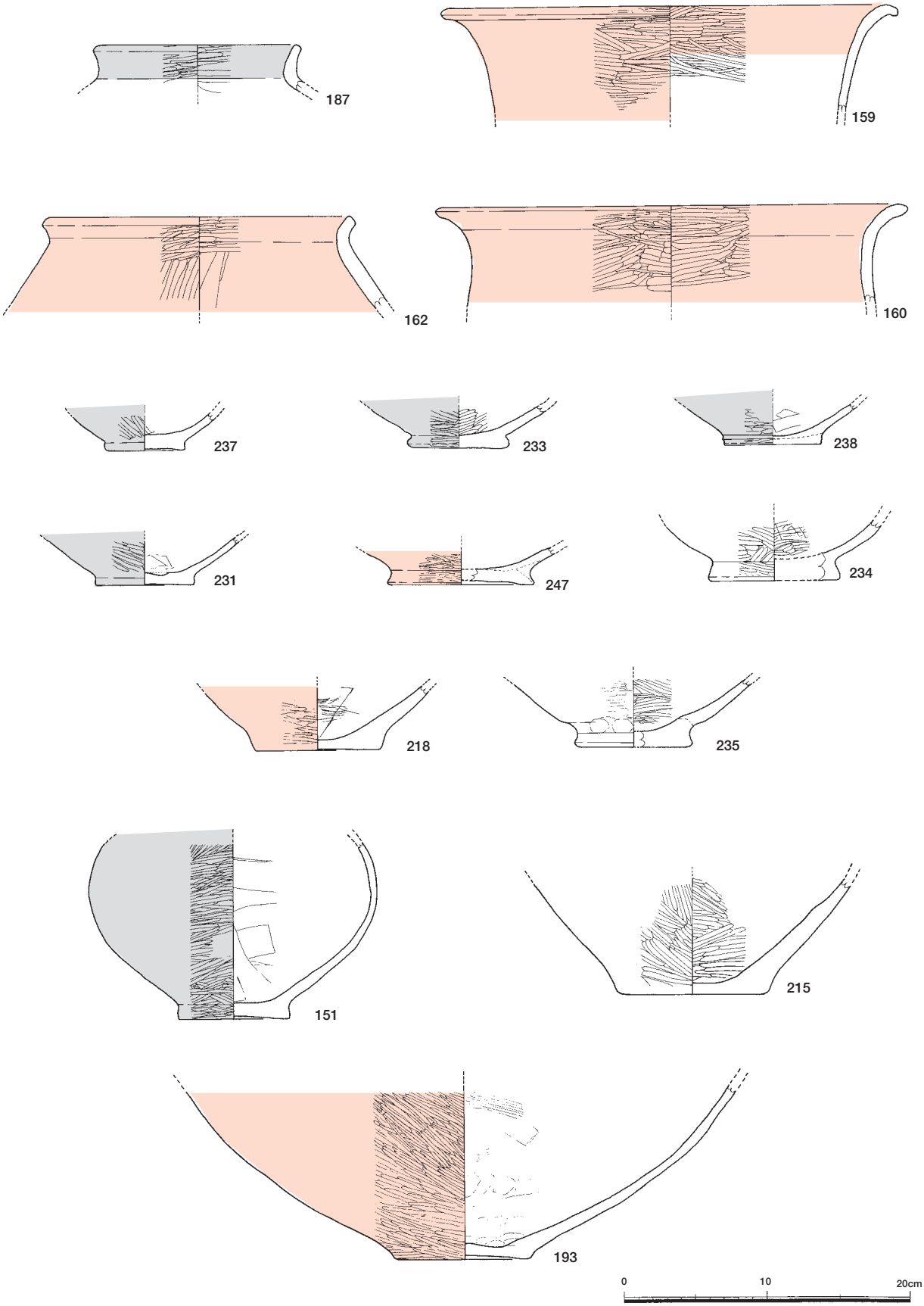


Fig.56　溝SD114出土遺物実測図4（1/4）

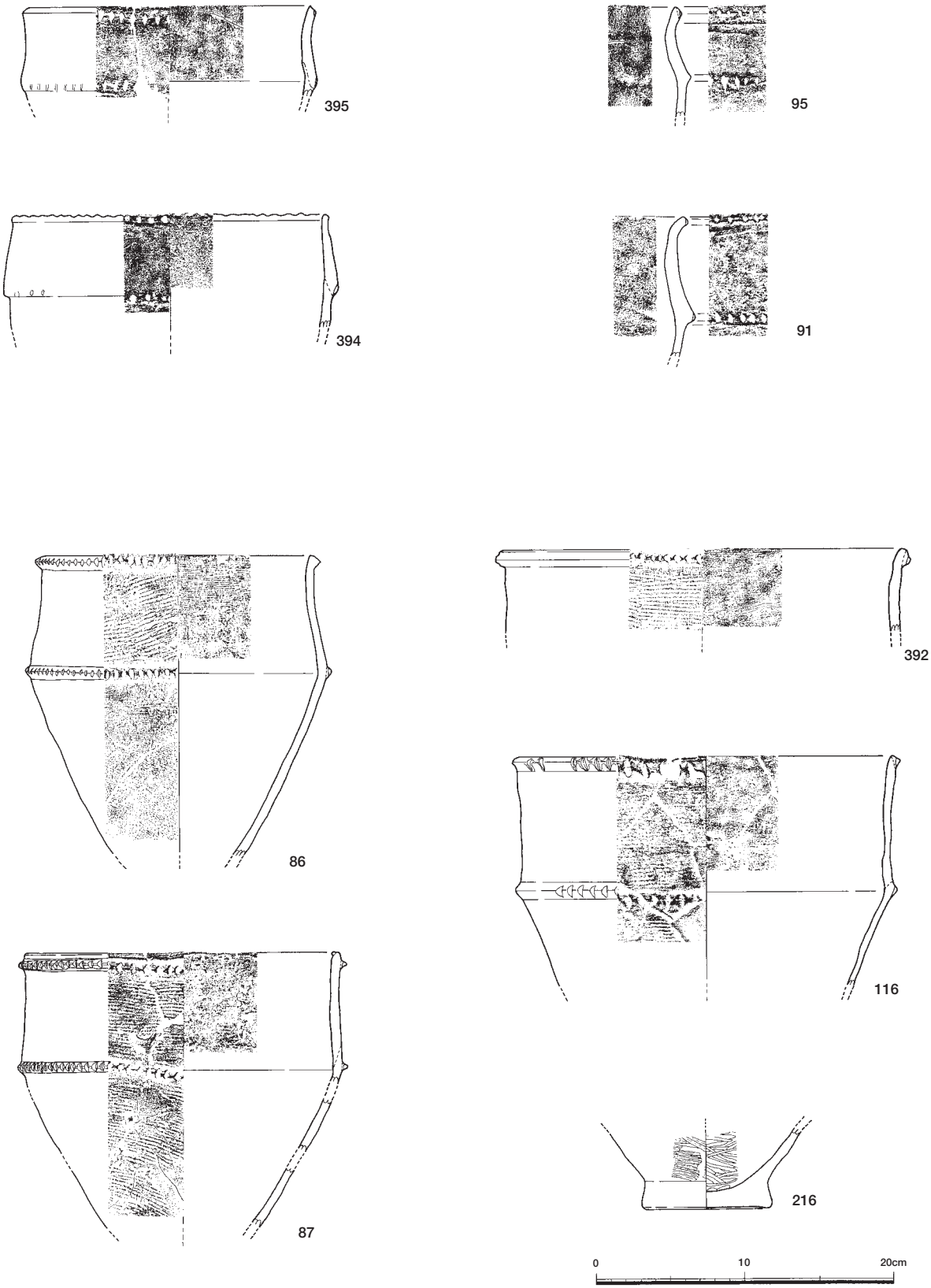


Fig.57　溝SD114出土遺物実測図5（1/4）

Fig.58　溝SD114出土遺物実測図6（1/4）

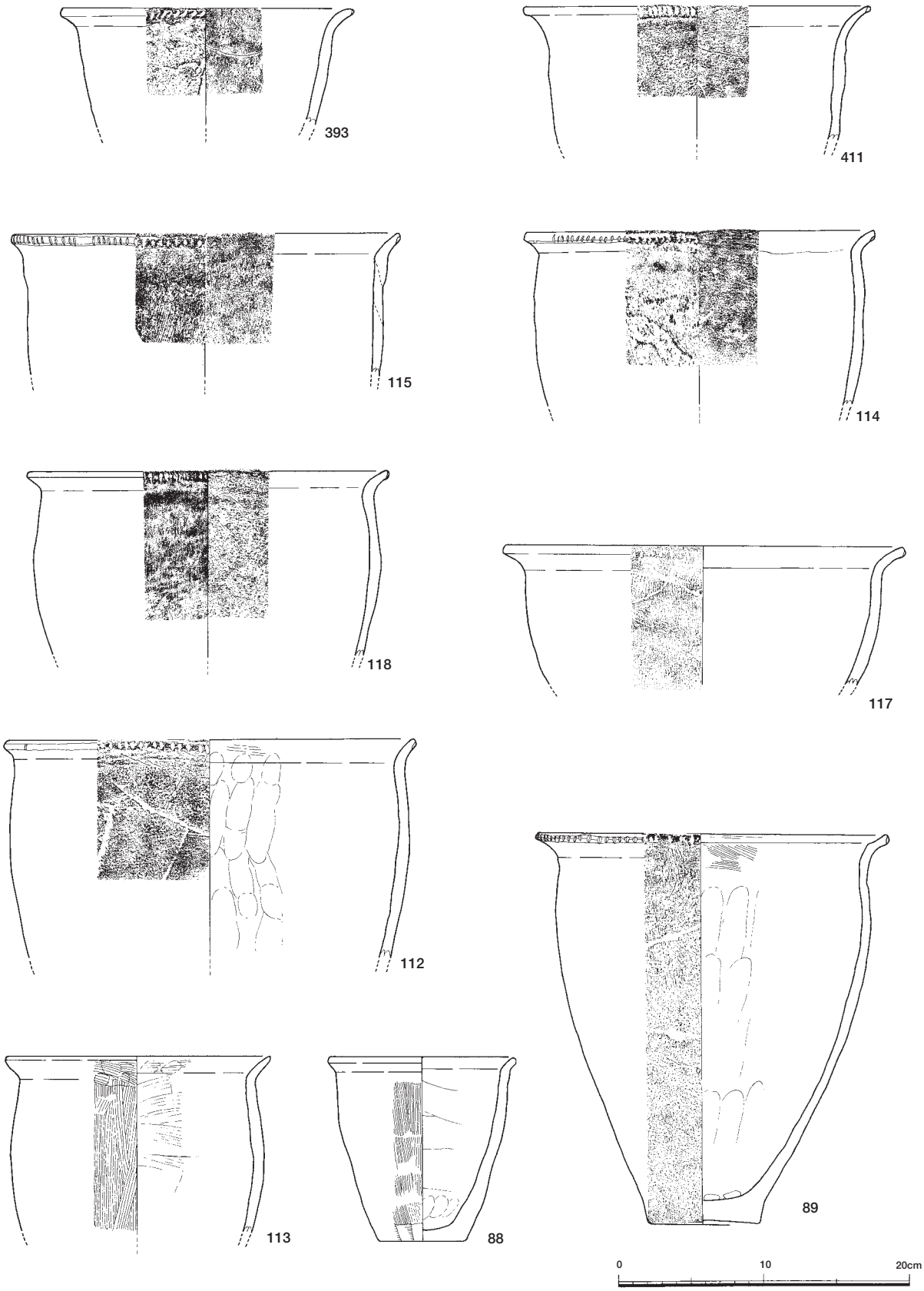


Fig.59　溝SD114出土遺物実測図7（1/4）

Fig.60 溝SD114出土遺物実測図8（1/4）

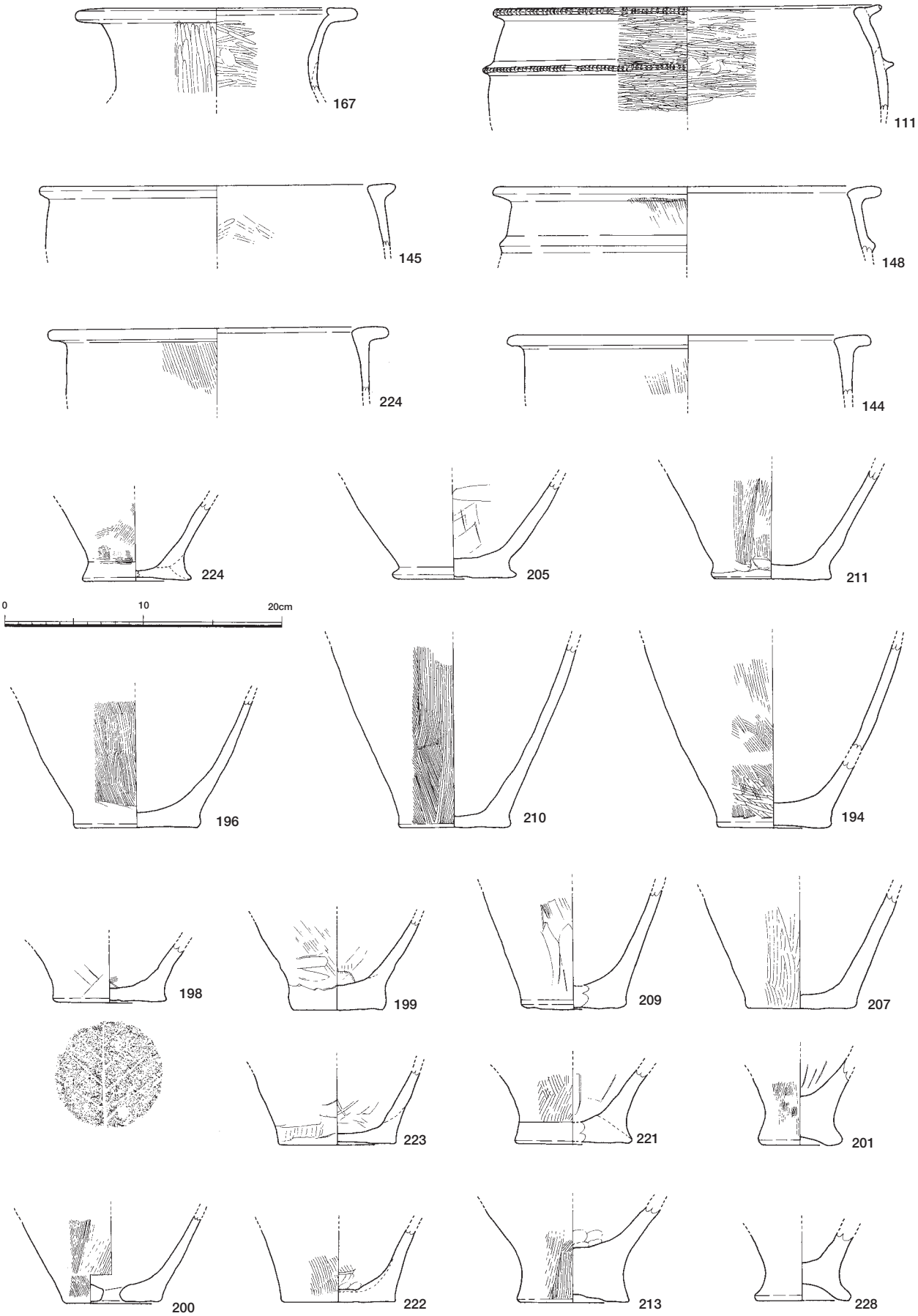


Fig.61　溝SD114出土遺物実測図9（1/4）

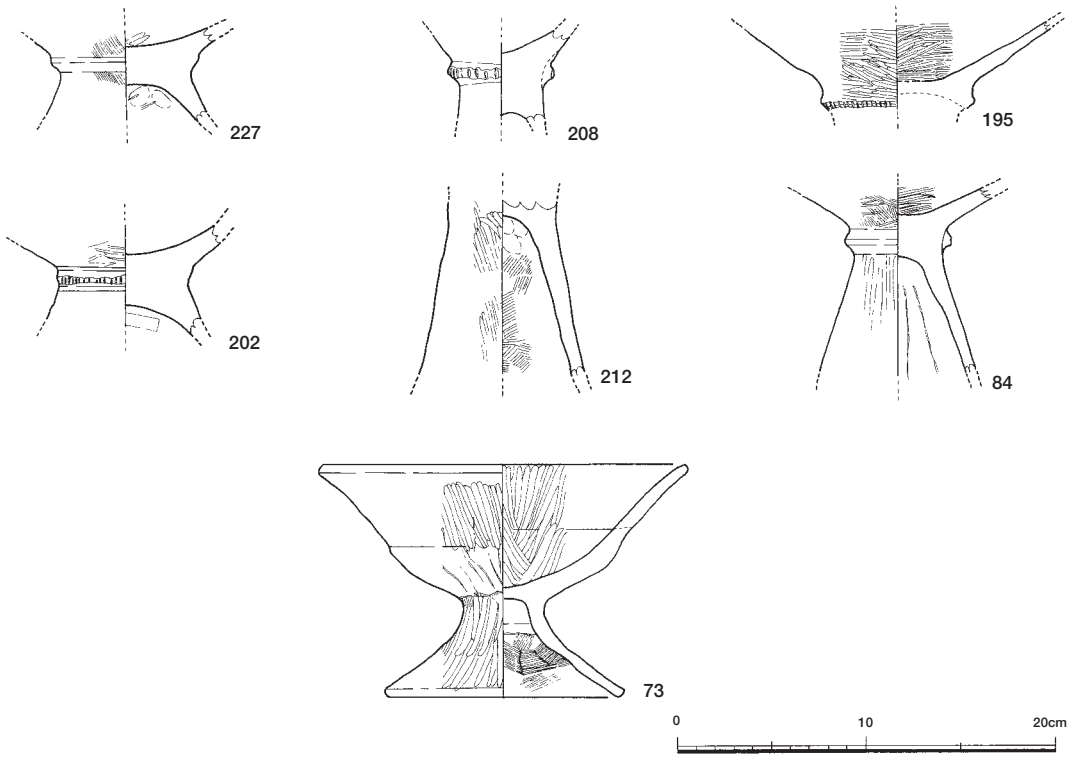


Fig.62　溝SD114出土遺物実測図10（1/4）

坦な円盤状の台を呈するいわゆる底上げである。器面は内外面とも丹塗り磨研が施されている。底径8.8cm、器壁厚0.5cmを測る。胎土は精選され僅かに0.5mmほどの砂粒を含み、淡橙灰色を呈する。

171は壺形土器で口縁端部と底部を欠く。内傾する頸部から口縁部が短く外反する。胴部はやや扁球を呈する。肩部と頸部との境には低い段を設けている。器面は丁寧なヘラ磨きが施されている。器壁厚0.4cmを測る。胎土は0.5～1mmほどの砂粒を含み、淡橙灰色を呈する。**163**は壺形土器で胴部以下を欠く。内傾する頸部から口縁端部が僅かに外反する。胴部は扁球を呈する。器面は丹塗磨研している。胴部内面には粘土紐合わせ目を残す。口径17.8cm、器壁厚0.7cmを測る。胎土は精選され僅かに0.5mmほどの砂粒を含み、淡橙灰色を呈する。**166**は壺形土器で胴部以下を欠く。内傾する頸部から口縁が短く外反し、端部は角張り面を呈する。頸部と口縁部との屈曲部外面には稜線を呈する。肩部と頸部との境には低い段が設けられている。器面外面は丹塗磨研している。口径15.4cm、器壁厚0.7cmを測る。胎土は1～2mm程の砂粒を多く含み、淡灰褐色を呈する。**189**は壺形土器で口縁端部と底部を欠く。頸部は内傾し、胴部はやや扁球を呈する。肩部と頸部との境には1条の沈線が巡る。器面は丁寧なヘラ磨きが施されている。器壁厚0.4cmを測る。胎土は精選され僅かに0.5mmほどの砂粒を含み、橙灰色を呈する。**165**は壺形土器で底部を欠く。内傾する頸部から口縁部が短く外反する。胴部はやや扁球を呈する。肩部と頸部との境には極めて不明瞭な浅い段を設けている。カイガラ状痕で整形の後にナデ調整し、ヘラ磨きを施している。口径14.8cm、器壁厚0.7cmを測る。胎土は1～2mm程の砂粒を多く含み、淡灰褐色を呈する。**164**は壺形土器で底部を欠く。内傾する頸部から口縁端部が短く外反する。胴部は扁球を呈する。器面外面は丹塗磨研している。胴部内面には粘土紐合わせ目を残す。口径20.6cm、器壁厚0.5～0.7cmを測る。胎土は1～2mm程の砂粒を多く含み、淡灰褐色を呈する。**177**は壺形土器で胴部以下を欠く。内傾する頸部から口縁部が短く僅かに外反する。口縁屈曲部は内外面ともに丸味を呈する。器面は黒色磨研が施されている。口径10.4cm、器壁厚0.6～0.7cmを測る。胎土は0.5mmほどの砂粒を含み、淡灰色～淡橙灰を呈する。**170**は壺形土器で胴部以下を欠く。内傾する頸部から口縁部が穏やかに外反する。器面は丁寧なヘラ磨きが施されている。口径11.6cm、器壁厚0.6～0.7cmを測る。

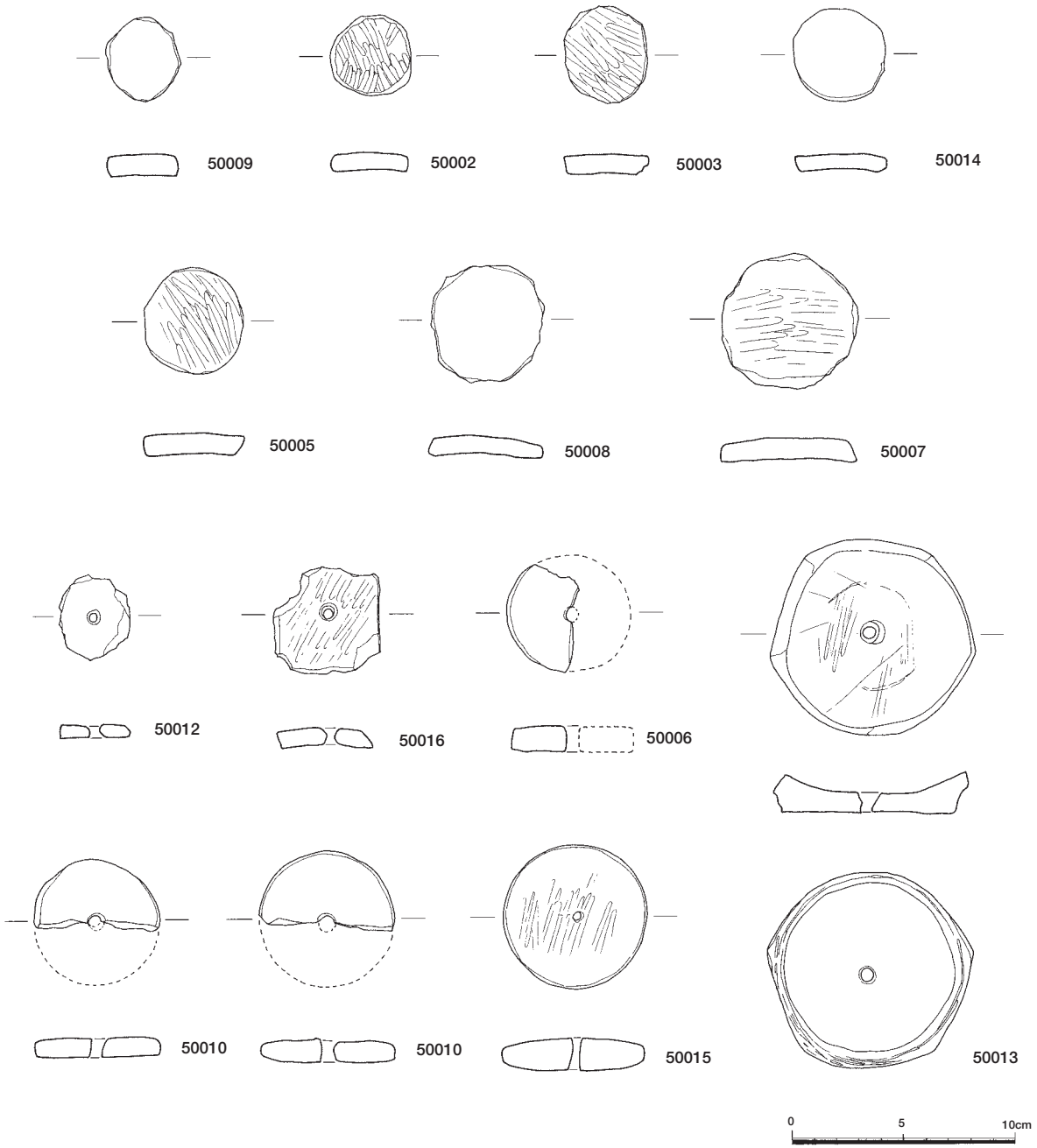


Fig.63　溝SD114出土遺物実測図11（1/3）

胎土は1～2㎜ほどの砂粒を含み、淡茶灰色を呈する。**178**は壺形土器で、胴部下半を欠く。頸部は締まり、弱く内傾する。外反する口縁部と頸部との境には１条の沈線が巡る。口縁屈曲部は内外面ともに丸味を呈する。器面は丁寧なヘラ磨きが施されている。口径12.2㎝、器壁厚0.6㎝を測る。胎土は精選され、0.25㎜以上を測る砂粒は含まれず、淡灰褐色を呈する。**182**は壺形土器で、胴部下半を欠く。頸部は締まり、弱く内傾する。外反する口縁部と頸部との境には１条の沈線が巡る。口縁屈曲部は内外面ともに丸味を呈する。器面は丁寧なヘラ磨きが施されている。口径12.4㎝、器壁厚0.4㎝を測る。胎土は精選され、0.25㎜以上を測る砂粒は含まれず、淡灰褐色を呈する。**181**は壺形土器で、胴部下半を欠く。頸部は締まり、弱く内傾する。外反する口縁部と頸部との境には１条の沈線が巡る。口縁屈曲部は内外面ともに丸味を呈する。器面は丁寧なヘラ磨きが施され、口縁部と沈線に丹塗している。口径12.9㎝、器壁厚0.5㎝を測る。胎土は精選され、0.25㎜以上を測る砂粒は含まれず、淡灰褐色を呈する。**174**は壺形土器で、胴部下半を欠く。頸部は締まり、弱く内傾する。外反する口縁部と頸部との境には１条の沈線が巡る。口縁屈曲部は内外面ともに丸味を呈する。器面は丁寧なヘラ磨きの後に丹塗りが施されている。口径13.2㎝、器壁厚0.6㎝を測る。胎土は精選され、0.25㎜以上を測る砂粒は含まれず、淡灰褐色を呈する。**176**は壺形土器で、胴部下半を欠く。頸部の締まりは弱く僅かに内傾する。外反する口縁部は外面を肥厚させ、頸部との境に段を設けている。このため、口縁屈曲部の内面は丸味を呈する。器面は丁寧なヘラ磨きが施されている。口径13.5㎝、器壁厚0.6～0.7㎝を測る。胎土は1㎜ほどの白色砂粒を多く含み、淡茶灰色を呈する。**180**壺形土器で胴部以下を欠く。頸部は内傾し、口縁は外反して直線的にのびる。口縁屈曲部は内外面ともに弱い稜線を呈する。器面は黒色磨研が施されている。口径11.5㎝、器壁厚0.6～0.7㎝を測る。胎土は0.5㎜ほどの砂粒を含み、淡橙灰を呈する。**183**は肉厚の壺形土器で、胴部下半を欠く。頸部は締まり、弱く内傾する。外反する口縁部と頸部との境には１条の沈線が巡る。口縁屈曲部は内外面ともに丸味を呈する。器面は丁寧なヘラ磨きが施されている。口径8.8㎝、器壁厚0.6～0.7㎝を測る。胎土は精選され、僅かに0.5～1㎜を測る砂粒を含み、淡灰色を呈する。**172**は壺形土器で、胴部下半を欠く。頸部は締まり、強く外反する口縁部は外面を僅かに肥厚させ、頸部との境に段を設けている。口縁屈曲部の内面には弱い稜線を呈する。頸部と肩部との境にも段を設けている。器面は丁寧なヘラ磨きが施された後に丹塗りが施されている。口径8.7㎝、器壁厚0.5㎝を測る。胎土は精選され、0.25㎜以上を測る砂粒は含まれず、淡灰褐色を呈する。**175**は壺形土器で、胴部下半を欠く。頸部の締まりは弱く僅かに内傾する。外反する口縁部は外面を肥厚させ、頸部との境に段を設けている。口縁屈曲部の内面は丸味を呈する。器面は丁寧なヘラ磨きが施されている。口径17.4㎝、器壁厚0.6～0.7㎝を測る。胎土は1㎜ほどの白色砂粒を多く含み、淡茶褐色を呈する。**158**は壺形土器で、胴部下半を欠く。頸部の締まりは弱く僅かに内傾する。外反する口縁部は外面を肥厚させ、頸部との境に段を設けている。口縁屈曲部の内面は丸味を呈する。器面は丁寧な黒色磨研を施しているが、一部内面にカイガラ状痕を残す。口径19.4㎝、器壁厚0.6㎝を測る。胎土は1㎜ほどの白色砂粒を多く含み、淡茶褐色～淡橙灰色を呈する。**186**は壺形土器で、胴部下半を欠く。頸部の締まりは弱く僅かに内傾する。口縁部は身近区外湾する外反し短い。外面を肥厚させ、頸部との境に段を設けている。口縁屈曲部の内面は丸味を呈する。器面は丁寧な黒色磨研の後に丹塗り装飾が施されている。口径23.0㎝、器壁厚0.6㎝を測る。胎土は1㎜ほどの白色砂粒を含み、淡茶褐色を呈する。**184**は壺形土器で、胴部下半を欠く。頸部の締まりは弱く僅かに内傾する。外反する口縁部は外面を肥厚させ、頸部との境に低い段を設けている。口縁屈曲部の内面は丸味を呈する。器面は丁寧なヘラ磨きが施されている。口径24.8㎝、器壁厚0.6㎝を測る。胎土は精選され僅かに0.5㎜ほどの白色砂粒を含み、淡茶灰色を呈する。**149**は壺形土器で、底部を欠く。胴部は張りを持ち、頸

部の締まりは弱く僅かに内傾する。外反する口縁部は肥厚させ、頸部との境に低い段を設けている。このため、口縁屈曲部の内面は弱い稜線を呈する。胴部と頸部との境には鍔状の断面形が三角形の高い凸帯が巡る。器面整形は黒色磨研している。口径23.4cm、器壁厚0.5～0.6cmを測る。胎土は1mmほどの白色砂粒を含み、暗茶褐色を呈する。

150は大型の壺形土器である。底部は狭小平坦で、胴部は張りを持つ。頸部は締まりは弱く、僅かに内傾する。外反する口縁部は外面側を肥厚させ、頸部との境に段を設けている。このため、口縁屈曲部の内面は丸味を呈する。器面は丁寧なヘラ磨きを施している。口径38.6cm、底径9.3cm、器高58.2cm、器壁厚0.8～0.9cmを測る。胎土は1mmほどの白色砂粒を多く含み、暗橙灰色を呈する。**173**は壺形土器で口縁端部と底部を欠く。内傾する頸部から口縁部が短く外反する。胴部は球形が推定される。肩部と頸部との境には低い段を設けている。器面は外面だけ丁寧なヘラ磨きが施されている。器壁厚0.4～0.5cmを測る。胎土は0.5～1mmほどの砂粒を含み、淡橙灰色を呈する。**169**は壺形土器で口縁端部と底部を欠く。頸部は内傾し、胴部は球状を呈する。肩部にはヘラ先の沈線による山形紋が巡る。器面は丁寧なヘラ磨きが施されている。器壁厚0.5cmを測る。胎土は精選され僅かに0.5mmほどの砂粒を含み、淡橙灰色を呈する。

159は壺形土器で胴部以下を欠く。口縁部を僅かに肥厚させ、緩やかに外湾する。屈曲部は丸味を呈する。器面は丁寧な丹塗磨研が施されている。口径31.8cm、器壁厚0.5cmを測る。胎土は0.5～1mmほどの砂粒を含み、淡橙灰色を呈する。**160**は壺形土器で胴部以下を欠く。口縁部を僅かに肥厚させ、緩やかに外湾する。屈曲部は丸味を呈する。器面は丁寧な丹塗磨研が施されている。口径32.8cm、器壁厚0.6～0.7cmを測る。胎土は0.5～1mmほどの砂粒を含み、淡橙灰色を呈する。**187**は壺形土器で胴部以下を欠く。口縁部は短く、外傾しながら直線的に立ち上がり、口縁端部は面を呈する。器面は丁寧に黒色研磨している。口径13.6cm、器壁厚0.7～0.8cmを測る。胎土は精選され僅かに0.5mmほどの砂粒を含み、淡橙灰色を呈する。**162**は壺形土器で胴部以下を欠く。頸部は内傾し、口縁部は短く、緩やかに外湾し、口縁端部は角張り面を呈する。器面は丁寧な丹塗磨研が施されている。口径20.8cm、器壁厚0.8cmを測る。胎土は1～2mmほどの砂粒を多く含み、淡橙灰色を呈する。**237**は壺形土器で胴部以上を欠く。底部は平底で、円盤が張り付いたような上げ底である。胴部は球状を呈する。器面外面は黒色磨研を施している。底径5.7cm、器壁厚0.6cmを測る。胎土は精選され僅かに0.5mmほどの白色砂粒を含み、淡橙灰色を呈する。**233**は壺形土器で胴部以上を欠く。底部は平底で、円盤が張り付いたような上げ底である。胴部は球状を呈する。器面外面は黒色磨研を施している。底径7.1cm、器壁厚0.6cmを測る。胎土は0.5～1.0mmほどの白色砂粒を含み、淡橙灰色を呈する。**238**は壺形土器で胴部以上を欠く。底部は平底で、円盤が張り付いたような上げ底である。胴部は球状を呈する。器面外面はヘラ磨きを施している。底径6.7cm、器壁厚0.4cmを測る。胎土は精選され僅かに0.50mmほどの白色砂粒を含み、淡橙灰色を呈する。**231**は壺形土器で胴部以上を欠く。底部は平底で、円盤が張り付いたような上げ底である。胴部は球状を想定させる。器面外面は黒色磨研を施している。底径7.1cm、器壁厚0.6cmを測る。胎土は0.5～1.0mmほどの白色砂粒を含み、淡橙灰色を呈する。**217**は壺形土器の底部である。平底で端部が張り出し、胴部が開く。器面外面は丹塗磨研を施している。底径10.4cm、器壁厚0.5～0.6cmを測る。胎土は0.5mmほどの白色砂粒を多く含み、淡橙灰色を呈する。**234**は壺形土器の底部である。平底で端部が僅かに張り出し、胴部が大きく開く。器面外面は丁寧なヘラ磨きを施している。底径9.2cm、器壁厚0.7cmを測る。胎土は0.5mmほどの白色砂粒を多く含み、淡茶灰色を呈する。**218**は壺形土器の底部である。平底で胴部が開く。器面外面は丹塗磨研を施している。底径8.9cm、器壁厚0.7～0.8cmを測る。胎土は1～2mmほどの砂粒を含み、淡橙灰色を呈する。**235**は壺形土器の底部である。平

底で端部が僅かに張り出し、胴部が大きく開く。器面外面は黒色磨研を施している。底径8.6㎝、器壁厚0.6㎝を測る。胎土は0.5～１㎜ほどの白色砂粒を多く含み、淡茶灰色を呈する。**151**は壺形土器で口縁部を欠く。底部は平底で、円盤を張り付けたような上げ底である。胴部は球状を呈する。器面外面は黒色磨研を施している。底径7.7㎝、器壁厚0.5㎝を測る。胎土は0.5～1.0㎜ほどの暗褐色砂粒を含む特徴持み、淡橙灰色を呈する。**215**は壺形土器の底部である。平底で胴部が開く。器面は内外面ともヘラ磨きを施している。底径10.6㎝、器壁厚0.6～0.7㎝を測る。胎土は1～2㎜ほどの砂粒を多く含み、淡橙灰色を呈する。**193**は壺形土器の底部である。平底で胴部は球状を推定させる。器面は外面を丹塗り磨研、内面をナデて仕上げている。底径9.5㎝、器壁厚0.6～0.7㎝を測る。胎土は1～2㎜ほどの砂粒を多く含み、暗茶褐色を呈する。

394は甕形土器で胴部下半を欠く。胴央部上位で肥厚させて段を呈し、口縁端部に向かって器壁は薄くなる。口縁は直立し、平坦な上端面には棒状工具の側面を用いた押圧を連続させ、波状紋的姿を呈する。段を呈する屈曲部外面にも段の上縁には鋭角な工具によるキザミ目を施している。口径20.8㎝、胴部器壁0.6㎝を測る。器面外面には口縁端部まで煤が付着している。胎土は1～2㎜ほどの白色砂粒を含み、淡橙灰色～淡茶灰色を呈する。**395**は甕形土器で胴部下半を欠く。胴央部上位で肥厚させて段を呈する。口縁は弱く内傾し、端部近くで僅かに外反する。上端部は傾斜を呈し、キザミ目を外縁に直接施している。段を呈する屈曲部外面にも段の上縁にキザミ目を施している。口径19.2㎝、胴部器壁0.5～0.6㎝を測る。器面外面には口縁端部まで煤が付着している。胎土は0.5～1㎜ほどの白色砂粒を多く含み、淡橙灰色～淡茶灰色を呈する。**91**は甕形土器で胴部下半を欠く。胴央部上位で肥厚させて段を呈する。口縁は弱く内傾し、端部近くで僅かに外反する。口縁端部断面は方形を呈し、外縁にキザミ目を直接施している。段を呈する屈曲部外面にも段の上縁にキザミ目を施している。胴部器壁0.6～0.7㎝を測る。器面外面は目の細かい刷毛目整形の後にナデて仕上げている。胎土は0.5～1㎜ほどの白色砂粒を含み、淡橙灰色を呈する。**95**は甕形土器で胴部下半を欠く。胴央部上位で肥厚させて段を呈する。口縁は弱く内傾し、端部近くで僅かに外反する。上端部は平坦を呈するが外方へ弱く傾斜し、外縁部にキザミ目を直接施している。段を呈する屈曲部外面にもキザミ目を施している。内外面ともナデて仕上げている。胴部器壁0.6～0.7㎝を測る。器面外面には口縁端部まで煤が付着している。胎土は0.5㎜ほどの白色砂粒を含み、淡茶灰色を呈する。**86**は甕形土器で胴部下半を欠く。胴部は直線的に外反し、胴央部上位で「く」の字状に屈曲し、口縁は直立する。屈曲部と口縁端部外縁直下には粘土紐を貼り付け、キザミ目を施した断面形が三角形の凸帯が巡る。調整は器面外面の屈曲部を境に下部は目の細かい刷毛目、上部はカイガラ条痕を残す。内面は目の細かい刷毛目整形の後に屈曲部より下部だけナデて仕上げている。口径18.2㎝、胴部器壁0.6㎝を測る。器面外面の屈曲部下から口縁端部まで煤が厚く付着している。胎土は0.5～1㎜ほどの白色砂粒を多く含み、淡橙灰色～淡茶灰色を呈する。**87**は甕形土器で胴部下半を欠く。胴部は直線的に外反し、胴央部上位で「く」の字状に屈曲する。口縁は直立し、端部は断面形が方形で平坦である。屈曲部と口縁端部外縁直下には粘土紐を貼り付け、キザミ目を施した断面形が三角形の凸帯が巡る。調整は器面外面はカイガラ状痕を残し、内面はナデてカイガラ条痕をスリ消している。口径21.2㎝、胴部器壁0.5㎝を測る。器面外面の屈曲部下から口縁端部まで煤が厚く付着している。胎土は0.5～1㎜ほどの白色砂粒を多く含み、淡橙灰色～淡茶灰色を呈する。**116**は甕形土器で胴部下半を欠く。胴部は直線的に外反し、胴央部上位で「く」の字状に屈曲し、口縁は直立する。屈曲部と口縁端部外縁直下には粘土紐を貼り付け、キザミ目を施した断面形が三角形の凸帯が巡る。調整は器面外面はカイガラ状痕を残し、内面はナデてカイガラ条痕をスリ消している。口径24.8㎝、胴部器壁0.5㎝を測る。器面外面の屈曲部から口縁端部まで

煤が付着している。胎土は0.5～1㎜ほどの白色砂粒を多く含み、淡橙灰色～淡茶灰色を呈する。**392**は甕形土器で胴部の大半を欠くが、胴央部上位で「く」の字状に屈曲する器形と推定される。口縁は直立し、端部は断面形が方形で平坦である。口縁端部外縁直下には粘土紐を貼り付け、キザミ目を施した断面形が三角形の凸帯が巡る。調整は器面外面はカイガラ条痕を残し、内面はナデてカイガラ条痕をスリ消している。口径24.8㎝、胴部器壁0.6～0.7㎝を測る。器面外面には口縁端部まで煤が付着している。胎土は0.5～1㎜ほどの白色砂粒を多く含み、淡橙灰色～淡茶灰色を呈する。

90・96・97・407は甕形土器で胴部下半を欠く。胴部は直線的に外反し、胴央部上位で「く」の字状に屈曲し、口縁は直立する。屈曲部と口縁端部外縁直下には粘土紐を貼り付け、キザミ目を施した断面形が三角形の凸帯が巡る。調整は器面外面はカイガラ状痕を残し、内面はナデてカイガラ条痕をスリ消している。いずれも器面外面には口縁端部まで煤が付着する。**216**は甕形土器の底部で、胴部以上を欠く。底部は平坦で、外縁部が僅かに張り出す。胴部は直線的に開く様相を見せる。外面はカイガラ状痕による整形、内面はヘラ磨きを施している。底径8.6㎝、器壁厚0.6～0.7㎝を測る。器面外面には煤が付着している。胎土は0.5～1㎜ほどの白色砂粒を多く含み、淡橙灰色を呈する。

126・130・396・397・412・414・418は甕形土器で口縁は直立し、口縁端部外縁下に粘土紐を貼り付けキザミ目を施した断面形が三角形の凸帯が巡る。このため口縁端面と凸帯が一体化しておらず、「ト」の字状を呈する。外面はナデもしくはヘラ状工具により調整し、カイガラ条痕を遺さない。**396・397・418**の外面には煤が付着している。

102・103・119・408は直立する口縁端部外縁にキザミ目を直接施し、外面に煤が付着する甕形土器である。**103**は口縁端面が内側に傾斜し、器面外面が刷毛目で仕上げているのに対し、他の土器の口縁端部は平坦で断面形が方形を呈し、ヘラ磨きで仕上げている。**119**は口径25.8㎝、器壁厚0.6～0.7㎝を測る。胎土は0.5～1㎜ほどの白色砂粒を含み、淡茶灰色を呈する。

132・402は口縁が直立するものの、端部近くで極めて僅かに反りを呈する。口縁端部は断面形が方形で、端面は平坦を呈し、口縁端部外縁にキザミ目を直接施している甕形土器である。**402**は刷毛目整形の後にナデて仕上げている。**132**は口縁部近くに刷毛目痕を残し、外面に煤が付着する。

89・112・114・115・117・118・393・411は口縁部が外方に湾曲する、いわゆる如意状に屈曲し、口縁端部にキザミ目が巡る甕形土器である。**89**は甕形土器で完形品である。底部は平坦で、胴部は砲弾形を呈する。頸部内外面の屈曲部はともに丸味を呈し、稜線は極めて弱い。口縁端部断面は隅丸方形を呈する。器面外面は極めて目の細かい刷毛目による整形、内面は刷毛目整形の後にナデて仕上げている。器面外面には煤が胴央部から口縁端部にわたり付着している。口径12.6㎝、器高12.8㎝、底径6.2㎝、器壁厚0.8㎝を測る。胎土は1～2㎜ほどの砂粒を多く含み、淡茶灰色を呈する。**112**は内外面とも刷毛目整形の後にナデて仕上げている。キザミ目は口縁端面外縁に施している。煤が胴央部から口縁端部に付着している。口径27.6㎝、器壁厚0.7～0.8㎝を測る。胎土は1～2㎜ほどの白色砂粒を多く含み、茶褐色を呈する。**114**は口縁端部下縁にキザミ目を施している。器面は外面を刷毛目で整形し、内面はナデて仕上げている。外面には口縁部まで煤が付着している。口径23.8㎝、器壁厚0.6～0.8㎝を測る。胎土は1㎜ほどの白色砂粒を含み、淡橙灰色を呈する。**115**は内外面とも刷毛目整形の後にナデて仕上げている。キザミ目は口縁端面外縁に施している。煤が胴央部から口縁端部に付着している。口径27.6㎝、器壁厚0.7㎝を測る。胎土は1～2㎜ほどの白色砂粒を多く含む他に2㎜ほどの砂粒をほかにみ、茶褐色を呈する。**117**は口縁端部下縁にキザミ目を施している。器面は外面を刷毛目で整形し、内面はナデて仕上げている。外面には口縁部まで煤が付着している。口径26.1㎝、器壁厚0.7㎝を測る。胎土は1㎜ほどの白色砂粒を含み、淡橙灰色を呈する。**118**はキザミ目を丸く仕上げた口縁端面に施

している。器面は外面を刷毛目で整形し、内面は刷毛目整形の後にナデて仕上げている。外面には口縁端部まで煤が付着している。口径24.6cm、器壁厚0.4～0.5cmを測る。胎土は0.5～1mmほどの白色砂粒を多く含み、淡橙褐色を呈する。**393**は内外面とも刷毛目整形の後にナデて仕上げている。器面外面には煤が口縁端部にまで厚く付着している。口縁端面に施されているキザミ目は他の土器が縦方向に施されているのに対して斜行する特徴を持つ。口径20.8cm、器壁厚0.7～0.8cmを測る。胎土は1～2mmほどの白色砂粒を多く含み、茶褐色を呈する。**411**は内外面とも刷毛目整形の後にナデて仕上げている。口縁部外面下には器面外面を刷毛で整形した際の当たり痕跡を残し、低い段を呈する。キザミ目は口縁端面に施している。器面外面には煤が口縁端部にまで厚く付着している。口径23.6cm、器壁厚0.5cmを測る。胎土は1～2mmほどの砂粒を多く含み、暗茶褐色を呈する。

113は底部を欠く甕形土器であるが、張りの弱い胴長の器形を想定させる。口縁が「く」の字状に外反し、屈曲部は内外面とも弱い稜線を呈する。口縁端部は丸く仕上げている。外面は頸部以下を縦方向、口縁部を横方向のそれぞれ刷毛目整形し、内面はナデて仕上げている。煤は頸部下 6 cm前後を境として口縁端部までの器面外面上部に厚く付着している。口径17.9cm、器壁厚0.7～0.8cmを測る。胎土は0.5～1mmほどの砂粒を多く含み、暗茶褐色を呈する。

88は小型の甕形土器である。底部は平坦で、胴部は砲弾形を呈する。口縁部は短く如意状に屈曲する。このため頸部内外面ともに屈曲部は丸味を呈し、稜線は極めて弱い。口縁端部にはヘラによるキザミ目が施されている。器面外面は目の細かい刷毛目による整形、内面は刷毛目整形の後にナデて仕上げている。器面外面には煤が胴央部から口縁端部にわたり付着している。口径22.8cm、器高26.7cm、底径7.8cm、器壁厚0.6cmを測る。胎土は1～3mmほどの砂粒を多く含み、淡橙褐色を呈する。

SD250（Fig. 65　PL. 90,111）

遺物は、弥生土器甕・壺・丹塗磨研壺、石皿、棒状木製品・弓が出土している。

242は甕形土器で、胴央部下を欠く。胴部は底部から直線的に外傾しながら立ち上がり、胴央部上位で「く」の字状に内側に屈曲する。屈曲部外面には断面形が三角形を呈しキザミ目を施した凸帯が巡る。口縁部の上端部直下にも断面形が三角形を呈しキザミ目を施した凸帯が巡る。器面は内外面ともカイガラ状痕で整形し、内面だけ部分的にナデて仕上げている。器壁厚0.6cmを測り、器面外面の屈曲部下から口縁端部まで煤が付着している。胎土は1～2mmほどの砂粒を含み、暗茶灰色を呈する。

SD256（Fig. 66　PL. 92,112）

遺物は、弥生土器甕・高坏・壺・小型壺・鉢・小型鉢・彩文土器、石製紡錘車円盤・玉石、木製農耕具鍬・槽・建築部材柱・盾・が出土している。

258は大型の鉢形土器で胴部下半を欠く。胴央部上位で「く」の字状に内側に屈曲し、口縁は直立しながら端部は外反する。器面内外面とも黒色磨研で仕上げている。口径30.2cm、胴部器壁厚0.6cmを測る。胎土は精選され、僅かに0.5mmほどの白色砂粒を含み、黒褐色を呈する。

249は甕形土器で、胴央部下を欠く。胴部は底部から直線的に外傾しながら立ち上がり、胴央部上位で僅かに内側へ屈曲する。屈曲部外面には断面形が三角形を呈しキザミ目を施した凸帯が巡る。口縁端部は平坦で外方へのび、外縁にはキザミ目を施している。器面は内外面とも目の細かいカイガラ状痕で整形している。口径18.6cm、器壁厚0.5cmを測り、器面外面の屈曲部下から口縁端部まで煤が付着している。胎土は1mmほどの砂粒を含み、暗橙灰色を呈する。

246・247・386・387はいずれも口縁が口縁部が外方に湾曲する、いわゆる如意状に屈曲し、口縁端部にキザミ目が巡る甕形土器である。頸部内外面の屈曲部はともに丸味を呈し、稜線は極めて弱い。器面外面は極めて目の細かい刷毛目による整形、内面は刷毛目整形の後にナデて仕上げている。器面

外面には煤が胴央部から口縁端部にわたり付着している。**246**は口径19.6cm、器壁厚0.7cmを測る。胎土は1～2mmほどの砂粒を多く含み、暗茶褐色を呈する。**247**は口径21.6cm、器壁厚0.7cmを測る。胎土は1mmほどの砂粒を多く含み、暗茶褐色を呈する。**386**は口径20.2cm、器壁厚0.7cmを測る。胎土は1～mmほどの砂粒を含み、淡橙灰色を呈する。**387**は口径24.8cm、器壁厚0.8cmを測る。胎土は1mmほどの砂粒を多く含み、淡橙灰色を呈する。

251は小型の壺形土器である。**252・253・255・256・259**も壺形土器で、いずれも器面内外面とも緻密なヘラ磨きが施されている。**253・255・256**は胴部が球状もしくは扁球状を呈するのに対して**252**は底部からの丸味が弱い。257は底部に整形時の刷毛目を遺す。

土　壙（SK）

SK254

遺物は、弥生土器・高坏・甕、サヌカイト製石鏃が出土している。

堰（SX）

SX258

遺物は、弥生土器甕・壺・丹塗り磨研壺、石棒・小玉石が出土している。

擁護壁杭列（SX）

SX252

遺物は、弥生土器甕・壺・丹塗り壺が出土している。

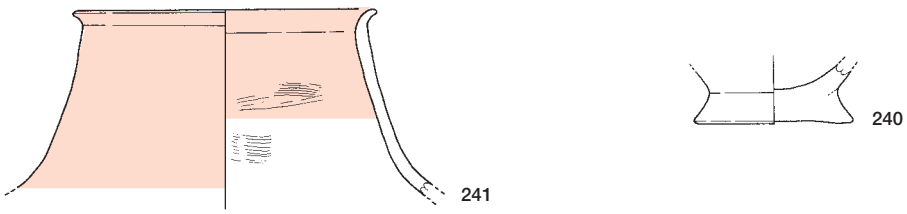


Fig.64　溝SD247出土遺物実測図（1/4）

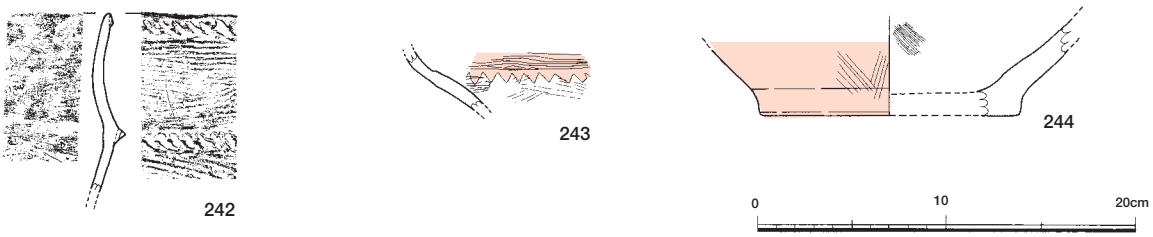


Fig.65　溝SD250出土遺物実測図（1/4）

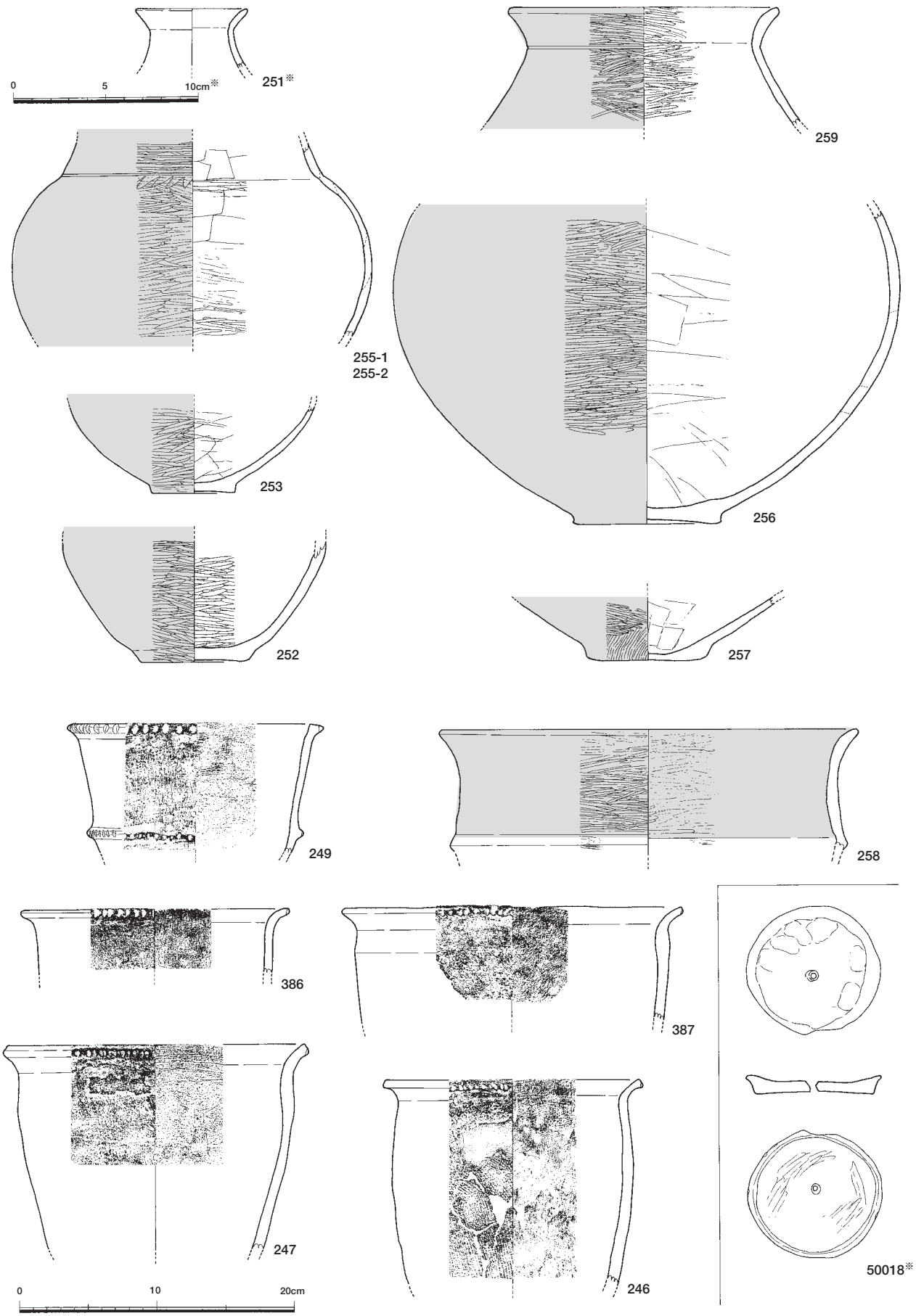


Fig.66 溝SD256出土遺物実測図（1/3※・1/4）

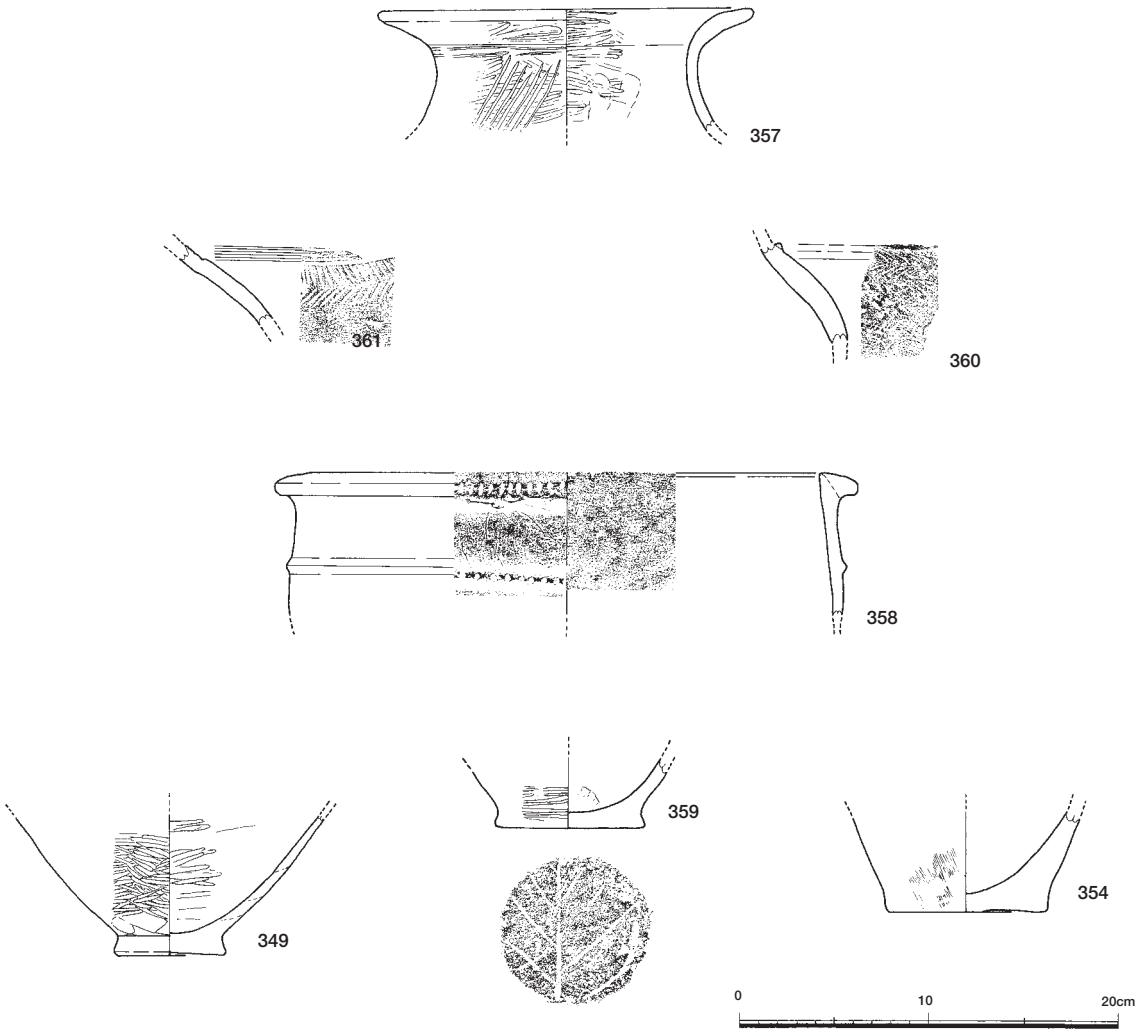


Fig.67　暗灰色粘質土・暗灰色粘性砂質土出土遺物実測図（1/4）

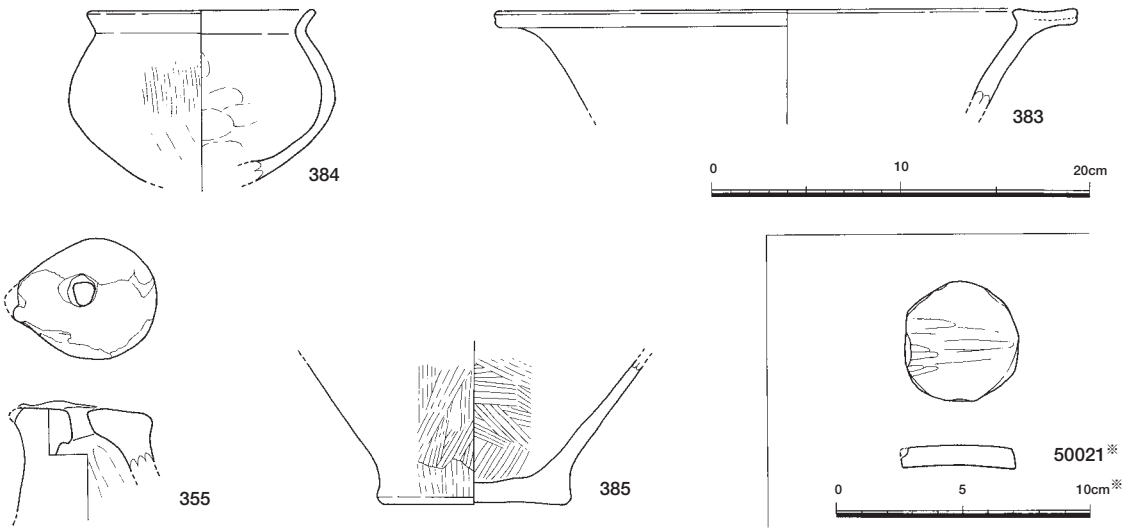


Fig.68　第5遺構検出面出土遺物実測図（1/3※・1/4）

（2）石器・石製品

1）第1遺構検出面

土　坑（SK）

SK151

遺物は、石包丁が出土している。

SK167（Fig. 69　PL. 119）

遺物は、くぼみ石が出土している。70063はくぼみ石である。石材は滑石であり、表面の摩滅状態からほぼ完形品と考えられる。表面中央に長さ5cm、幅4cm、深さ0.7cmの窪みが形成される。窪みの内面には鑿痕状の傷が見られ、その後研摩が行われる。長さ17.1cm、幅10.6cm、厚さ5.0cmである。

SK182（Fig. 70　PL. 119）

砥石が出土している。**70057**は砥石で石材は不明であるが細目の密度をもつ。四面体の方柱で、使用により中央が大きく窪んでいる。中央で欠損する。現状で長さ4.9cm、幅3.7cm、厚さ3.2cmである。

2）第3遺構検出面

河　川（SD）

SD190（Fig. 72　PL. 121）

遺物は、石製紡錘車円盤・石包丁・石剣・扁平片刃石斧が出土している。**70051**は紡錘車の破片で石材は滑石である。両面、側面を丁寧に研摩仕上げられている。径約4.8cm、厚さ0.5cmである。**70009**は石庖丁であり、約三分の一を欠損する。石材は玄武岩で紐懸けの穿孔二箇所が残る。穿孔は中心で2.4cm離れる。現状で幅8.2cm、高さ5.5cm、厚さ0.7cmである。　**70068**は石剣未製品の基部か。石材は砂岩で、周囲に粗い剥離調整がある。現状で長さ4.5cm、幅2.5cm、厚さ0.6cmである。**70047**は小型の扁平片刃石斧である。石材は頁岩で、完形品である。長さ3.6cm、幅2.0cm、厚さ0.6cmである。**70069**は磨製石器であるが、器種は不明。石庖丁の未製品か石鎌の可能性がある。石材は粘板岩で、両面に研摩を施したと見られるが、風化のため明確でない。少なくとも図の下縁に刃部が形成されたとみられる。現状で幅7.5cm、高さ6.3cm、厚さ0.7cmである。

SD191（Fig. 73　PL. 122）

遺物は、石剣・扁平片刃石斧・凹み石が出土している。**70070**は扁平片刃石斧である。石材は砂岩であり、完形品である。長さ6.7cm、幅2.0cm、厚さ0.8cmである。基部両面に研磨による深さ0.2cm前後の抉りを設けている。刃部は摩滅する。**70048**は柱状片刃石斧で、石材は頁岩である。先端部の破片である。現状で長さ4.7cm、幅1.6cm、厚さ2.3cmである。先端刃部は潰れている。

70016は石剣基部である。石材は頁岩で、中央に節理面が残る。基底部も研磨で丁寧に仕上げている。現状で長さ9.7cm、刃部幅4.2cm、柄部幅3.7cm、厚さ1.0cmである。**70034**はくぼみ石である。石材は玄武岩で、角柱状の柱状節理原石を利用したと考えられる。一部に研磨痕が認められるが、砥石としての主な利用は考え難い。四方に打痕による窪みが形成される。長さ12.5cm、幅4.7cm、厚さ4.5cmである。

SD194（Fig. 74　PL. 122）

遺物は、石剣が出土している。

水　田（SX）

SX200（Fig. 75　PL. 120）

遺物は、水田覆土（砂）中から砥石が出土している。**70121**は砥石破片である。石材は緻密な火成

岩でありアプライトか。表面には線状痕があり、研摩は表面と側面にある。破砕後、被熱を受け全体に煤が附着する。煤附着後さらに破断している。現状で長さ13.8cm、幅6.5cm、厚さ4.3cmである。

SX212（PL. 122）

遺物は、水田覆土（砂）中から小玉石が出土している。

3）第4遺構検出面

溝・河川（SD）

SD104（Fig. 77,78　PL. 123）

遺物は、石斧・石鏃・石包丁が出土している。**70038**は扁平打製石斧である。石材は片岩系であり、長さ約14cm、幅約8cm、厚さ約1cmである。大型でほぼ完形品である。基部側両測縁に抉りがあり、「分銅形」を呈する。刃部は片方に傾斜し両面に摩滅痕が認められる。

70037は打製石斧である。石材は片岩系であり、長さ16.5cm、幅約6.5cm、厚さ2.8cmである。基部を一部欠損しているが、ほぼ完形である。

70025は良質漆黒色黒耀石を石材とする石鏃である。長脚で二次調整が入念である。長さ1.7cm、幅約1.6cm、厚さ0.3cmである。縄文時代早期の混入品か。

70008は石庖丁の端部破片である。風化が進み不明瞭であるが変成岩素材とみられる。現状で幅4.7cm、高さ5.1cm、厚さ0.3cmである。**70008**は石庖丁であり、石材は不明だが、火成岩と両端を欠損する。現状で幅9.5cm、高さ4.5cm、厚さ0.5cmである。紐懸けの穿孔は二箇所あり、中心で1.7cm離れる。

70046は今山産玄武岩製磨製石斧である。基部を欠損し、両面は強い被熱により表面の剥落が著しい。現状で幅5.3cm、長さ6.8cm、厚さ1.6cmである。

SD220（PL.124）

遺物は、黒曜石製石鏃・小玉石が出土している。

SD221（Fig. 78　PL. 124）

遺物は、石斧が出土している。**70049**は磨製石斧の破片である。石材は今山産玄武岩である。基部に近い断片であり、荒調整と叩打を施すが、研摩痕は認められない。現状で長さ4.9cm、幅5.8cm、厚さ3.5cmである。

SD232（Fig. 80　PL. 124）

遺物は、石包丁が出土している。**70010**は石庖丁の破片である。石材は立岩産凝灰岩である。中央側は古い欠損であるが、他は調査時の欠損である。穿孔1つが残る。幅4.8cm、高さ4.7cm、厚さ0.5cmである。

SD235（Fig. 81　PL. 124）

遺物は、黒曜石製石鏃・石製紡錘車円盤・小玉石が出土している。**70027**は石鏃である。大型の剥片鏃で先端を欠損する。石材は腰岳産黒耀石と見られる。表裏で剥離方向が逆転することから打面両設の石核を用いている。現状で長さ4.8cm、幅2.7cm、厚さ0.3cmである。縄文時代後期後半～末に位置付けられる。

70032は紡錘車である。完形品である。石材は滑石であり、表裏、側面を丁寧に研摩されている。径4.1～4.3cm、厚さ0.7cmである。

土　坑（SK）

SK245（Fig. 82　PL. 124）

遺物は石製穿孔具が出土している。**70056**は穿孔具である。石材は砂岩であり、基部を欠損する。軸部は叩打、穿孔部は研摩で仕上げている。現状で長さ11.0cm、幅5.2cm、厚さ4.6cmである。

４）第５遺構検出面

溝・河川（SD）

SD114（Fig. 86～90　PL. 130～136）

遺物は、黒曜石製石鏃・サヌカイト製石鏃・太型蛤刃石斧・扁平片刃石斧・柱状片刃石斧・石包丁・たたき石・石剣・スクレイパー小玉石が出土している。**70026**は石鏃未製品である。石材は腰岳産黒耀石であり、長さ3.3cm、幅1.6cm、厚さ0.7cmである。縦長剥片の基部を先端とする。二次調整が粗く、基部側が裁断面のまま未調整である。**70023**は石鏃である。石材は漆黒色黒耀石製であり、、完形品である。長さ1.8cm、幅1.5cm、厚さ0.4cmである。素材として後期旧石器時代のナイフ形石器の基部を利用している。側縁のブランティングはそのままで、折断後抉りを入れて仕上げている。ナイフ形石器は型式は不明であるが、背面に先行する剥片剥離痕がある縦長の剥片で二側縁調整であり、全長４～５cm程度に復元されることから後期旧石器時代後半期のものと推定される。**70020**は石鏃である。石材はサヌカイトであり、現状で長さ2.4cm、幅1.5cm、厚さ0.5cmを測る。調査時に脚部一端を欠損する。

70021は石鏃である。石材はサヌカイトであり、現状で長さ2.3cm、幅1.5cm、厚さ0.4cmである。先端を欠損は古い。**70024**は石鏃である。石材は腰岳産黒耀石であり、長さ3.5cm、幅2.0cm、厚さ0.5cmである。完形品である。

70019は磨製石鏃である。石材は粘板岩などの堆積岩であり、長さ6.1cm、幅2.3cm、厚さ0.7cmである。茎部は細かく面取りされ、断面多角形となる。先端と基部を僅かに欠損する。復元長は約7.5cmである。

70014は石剣の基部である。石材は堆積岩系であるが不明。現状の長さ4.8cm、幅3.7cm、厚さ1.0cmである。茎部は短く、長さ約1.5cmである。剣身側は全て欠損・剥落する。復元される基部側の剣幅は4.2cmである。**70015**は石剣の基部か磨製石鎌の基部である。石材は粘板岩であり、現状で長さ7.7cm、幅3.5cm、厚さ1.2cmである。両端を欠損し、表面も剥落する。基部付近では片縁にのみ刃部形成がある。

70006は石庖丁の完形品である。石材は砂岩であり、表面の風化、剥落が著しい。幅9.1cm、高さ5.0cm、厚さ0.4cmである。紐懸けの穿孔は三箇所あり、上部中央の二箇所の穿孔は中心で1.7cm離れる。もう一箇所の穿孔は刃部寄りにある。**70003**は石庖丁の完形品である。石材は砂岩であり、表面の風化、剥落が著しい。幅11.0cm、高さ4.6cm、厚さ0.4cmである。完形品である。紐懸けの穿孔は上部中央に一箇所ある。**70002**は石庖丁の破片である。石材は砂岩であり、表面の風化、剥落が著しい。幅8.0cm、高さ5.2cm、厚さ0.6cmである。紐懸けの穿孔はない。**70005**は石庖丁の破片である。石材は砂岩であり、表面の風化、剥落が著しい。幅5.6cm、高さ4.4cm、厚さ0.4cmである。紐懸けの穿孔はない。**70004**は石庖丁の破片である。石材は砂岩であり、表面の風化、剥落が著しい。幅5.0cm、高さ2.9cm、厚さ0.3cmを測る。紐懸けの穿孔は一箇所にある。**70001**は石庖丁の破片である。石材は凝灰岩であり、表面の研磨痕が良好に残る。幅4.3cm、高さ1.5cm、厚さ0.6cmである。紐懸けの穿孔はない。**70076**は石庖丁の中央部破片である。石材は砂岩であり、表面の風化、剥落が著しい。幅約3.0cm、高さ5.2cm、厚さ0.6cmである。紐懸けの穿孔は二箇所あり、穿孔は中心で2.7cm離れる。

70074は横刃石器の破片である。石材は粘板岩であり、背面には自然円礫面がある。稜上剥離による不定形横長剥片を素材とする。現状の幅5.5cm、高さ4.4cm、厚さ1.0cmである。側縁から上縁には調整剥離が、下縁には刃こぼれ状の微剥離がある。**70073**は横刃石器の破片である。石材はサヌカイト質の安山岩であり、背面に自然面が残る。調整打面から剥離した縦長剥片を素材とし、外周に調整剥離を施す。上縁は潰れており、下縁を刃部とする。現状の幅5.4cm、高さ4.2cm、厚さ1.4cmである。**70071**は横刃石器の完形品である。石材は粘板岩であり、背面には自然円礫面がある。不定形横長剥片を素材とし、外周に調整剥離を施す。上縁は潰れており、下縁を刃部とする。幅8.7cm、高さ5.7cm、厚さ1.0

cmである。**70081**は磨製石斧の破片を転用した横刃石器で、石材は細粒砂岩である。周囲に微調整が有る。幅6.2cm、高さ6.0cm、厚さ1.0cmである。

70064は磨製石斧の破片を転用したたたき石である。石材は硬質砂岩であり、背面には石斧の研磨面が残る。全周がこう打により潰れている。長さ6.1cm、幅6.1cm、厚さ1.0cmである。**70065**はたたき石である。石材は緻密な堆積岩亜角礫であり、長さ7.0cm、幅5.9cm、厚さ3.4cmである。完形品である。全周がこう打により潰れているほか、四面にくぼみ石状にこう打による窪みが形成されている。**70060**は乳棒状磨製石斧の基部破片を転用したたたき石である。石材は緻密な堆積岩であり、長さ8.6cm、幅4.4cm、厚さ4.3cmである。上下両端にこう打痕が認められる。**70043**は太型蛤刃石斧の基部破片を転用したたたき石である。石材は玄武岩であり、肉眼では今山産出石材に類似する。長さ10.5cm、幅7.6cm、厚さ4.0cmである。上下両端にこう打痕や剥離痕が認められる。また片面にくぼみ石状にこう打による窪みが形成されている。

70040は扁平片刃石斧である。石材は灰色シルト岩であり、長さ3.8cm、幅3.2cm、厚さ0.5cmである。背面に大きな剥片剥離面が有り、素材の周囲を調整後、研磨仕上げている。基部を欠損する。

70042は柱状片刃石斧の基部破片である。石材は頁岩であり、長さ2.5cm、幅2.9cm、厚さ2.3cmである。剥離後研磨して仕上げるが、一部に破損後被熱による剥離がみられる。**70035**は柱状片刃石斧の先端破片である。石材は頁岩であり、長さ6.4cm、幅3.3cm、厚さ1.7cmである。側縁や背面には剥離痕があり、幾度かの破損と再研磨が行われた後、欠損したとみられる。

70036は抉入柱状片刃石斧の基部破片である。石材はシルト岩であり、長さ7.3cm、幅0.8cm、厚さ1.8cmである。抉りは基部端から2.5cmの位置にあり幅1.8cm、深さ0.2cmである。基部側からの加圧により剥落したものである。

70072は磨製石斧の先端破片である。石材は頁岩であり、現状で長さ5.7cm、幅4.5cm、厚さ1.0cmである。刃縁隅部に使用痕とみられる剥離がある。**70082**は磨製石斧の先端付近の破片である。石材は細粒砂岩であり、現状で長さ8.3cm、幅6.5cm、厚さ1.0cmである。刃縁隅部に使用痕とみられる剥離がある。

70077は磨製石斧の破片を利用したたたき石である。石材は粘板岩であり、長さ7.5cm、幅4.9cm、厚さ1.5cmである。石斧の刃部に近い位置を利用し平面形を方形に整えている。全周に敲打痕がみられる。

SD250（Fig. 91　PL. 137）

遺物は石皿が出土している。

SD256（Fig. 92,93　PL. 137,138）

遺物は、石製紡錘車円盤・玉石が出土している。

SD259（Fig. 94　PL. 139）

遺物は黒曜石製石鏃が出土している。

土　坑（SK）

SK254（PL. 139）

遺物はサヌカイト製石鏃が出土している。

堰（SX）

SX258（PL. 138）

遺物は、石棒・小玉石が出土している。

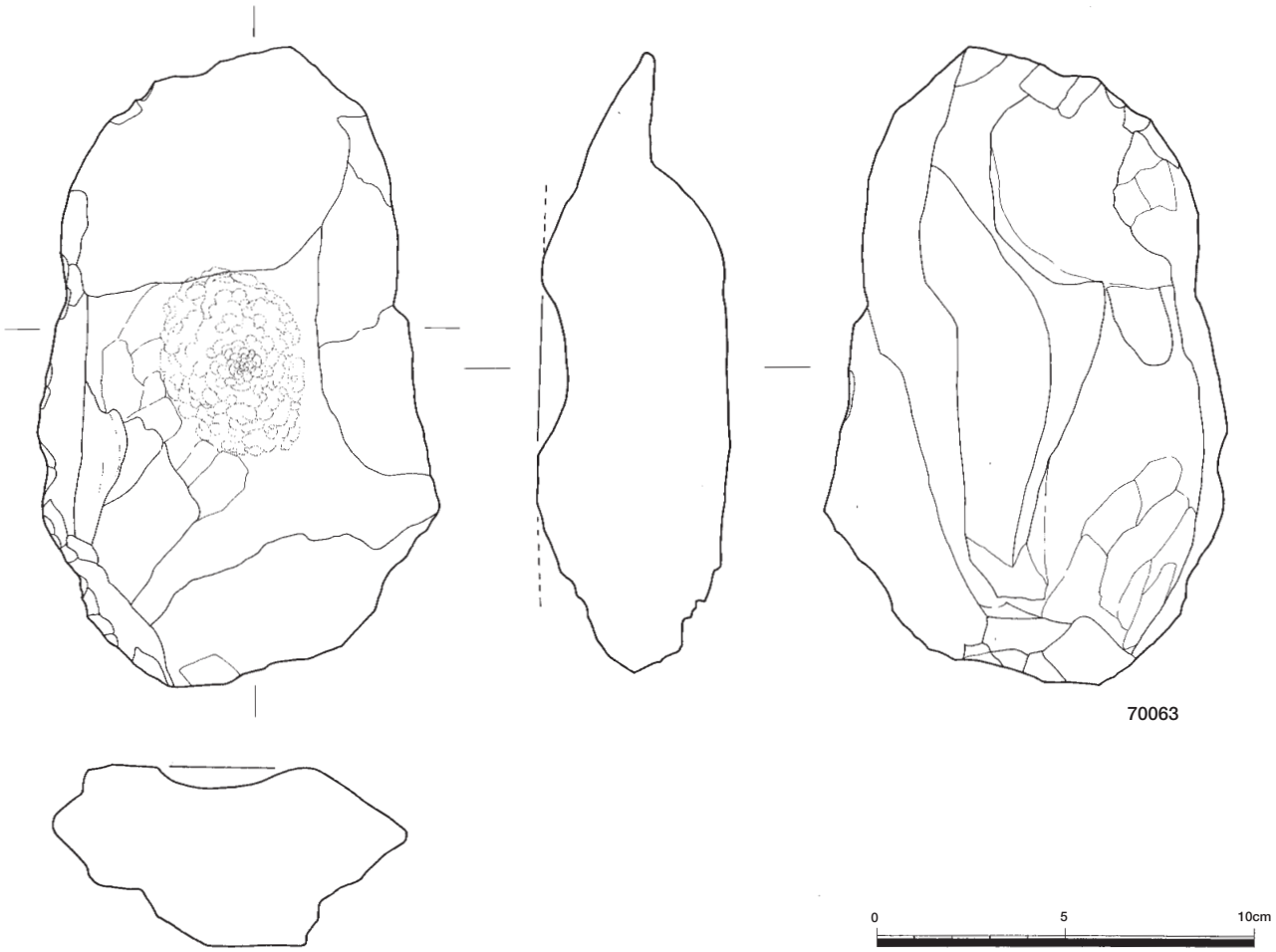


Fig.69　土壙SK167出土石製品実測図（1/2）

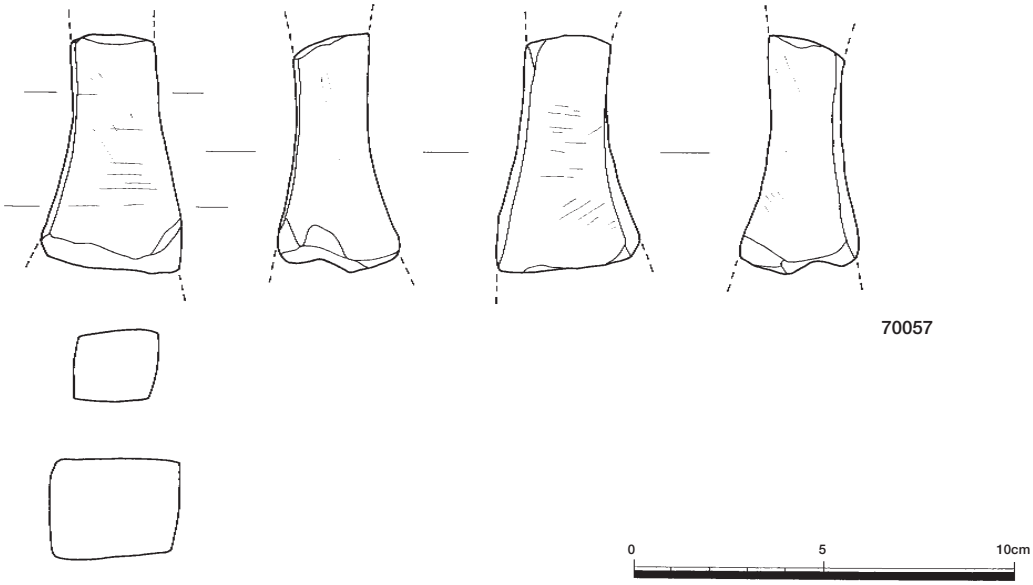


Fig.70　土壙SK182出土石製品実測図（1/2）

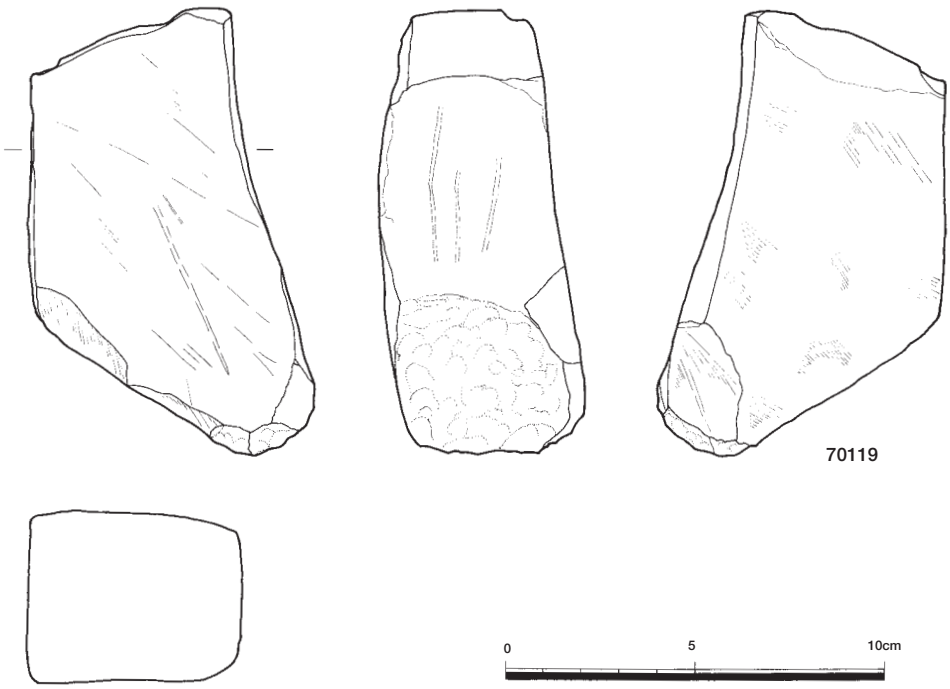


Fig.71　水田SX183出土石製品実測図（1/2）

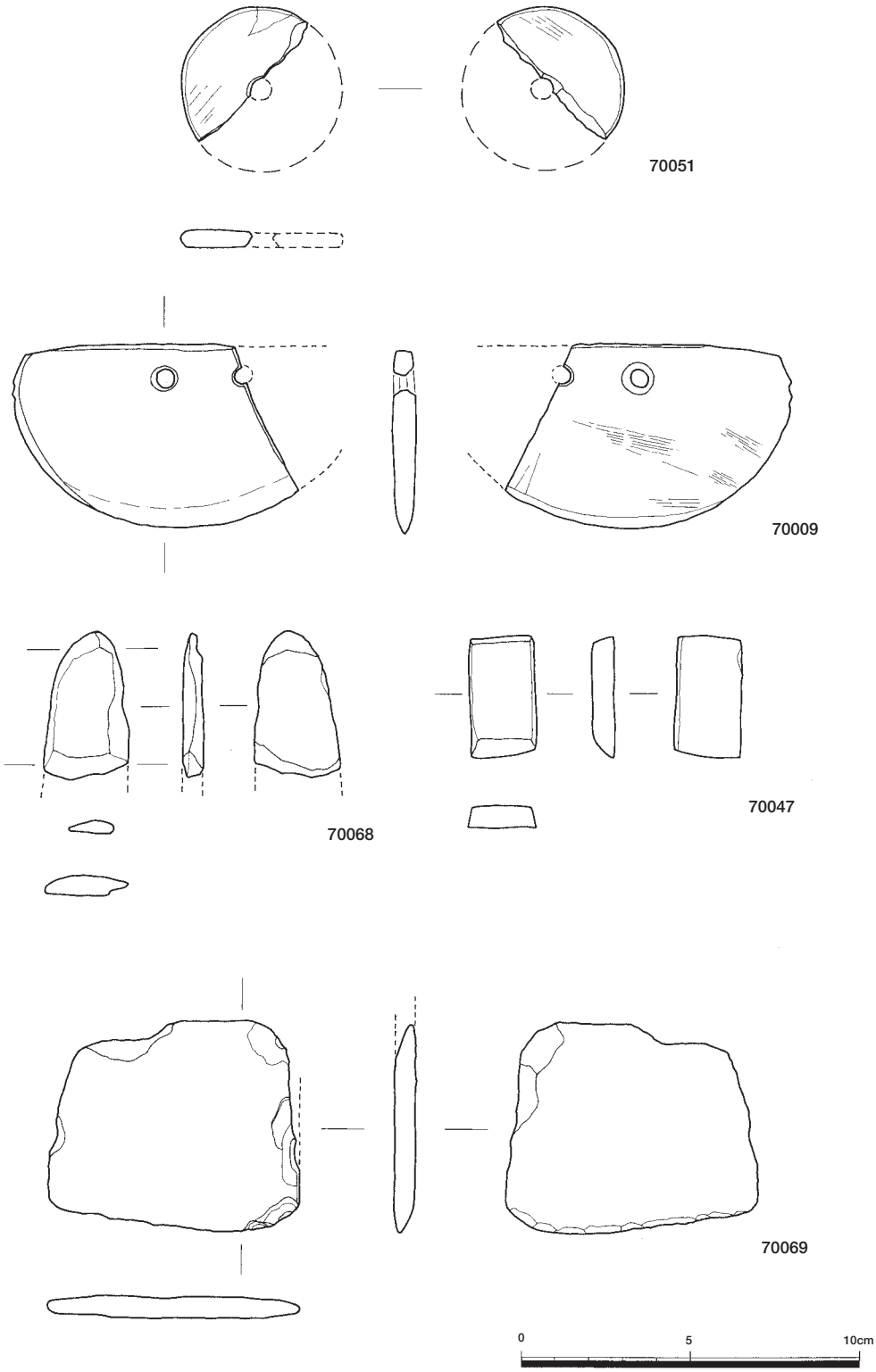


Fig.72　溝SD190出土石製品実測図（1/2）

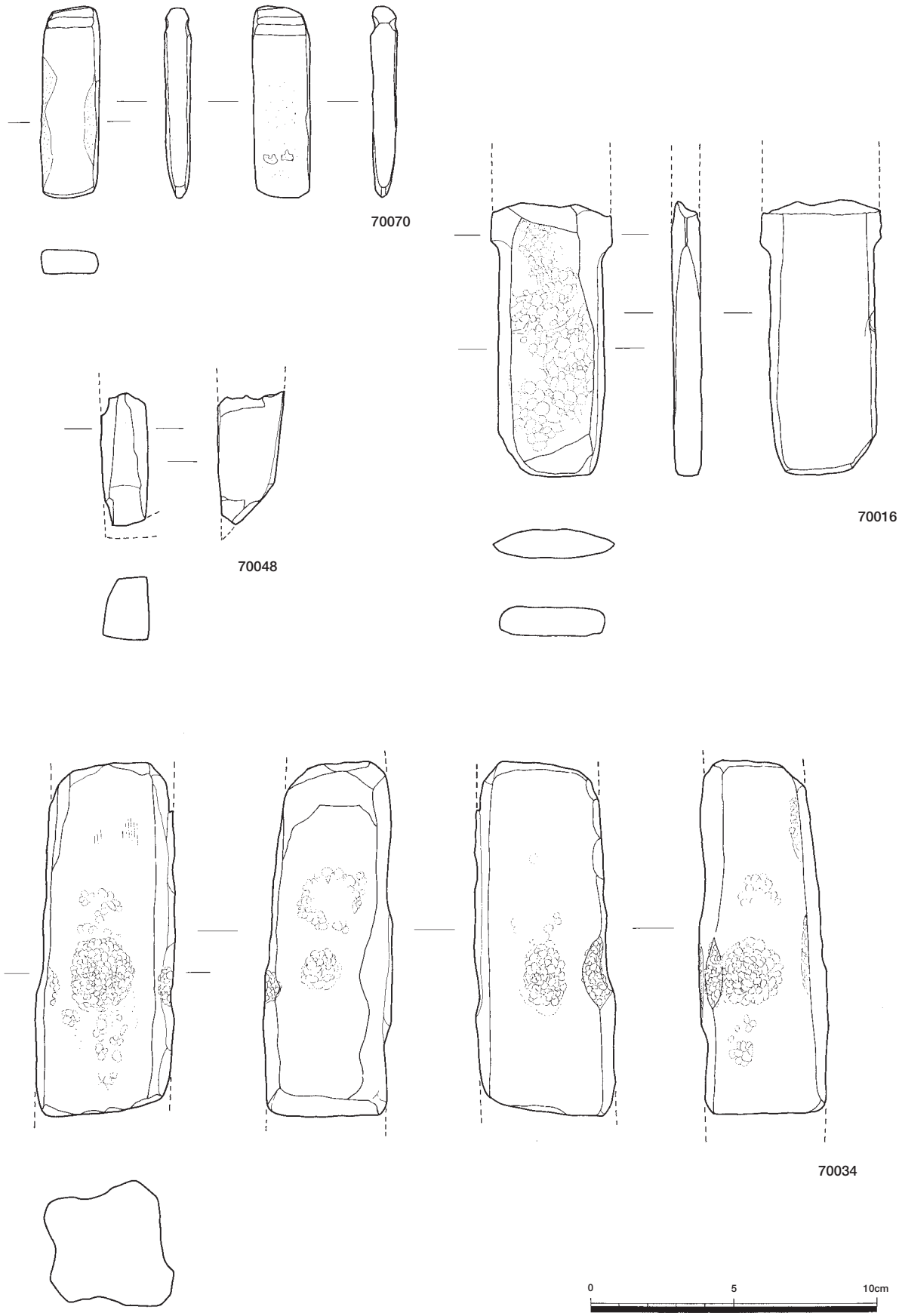


Fig.73　溝SD191出土石製品実測図（1/2）

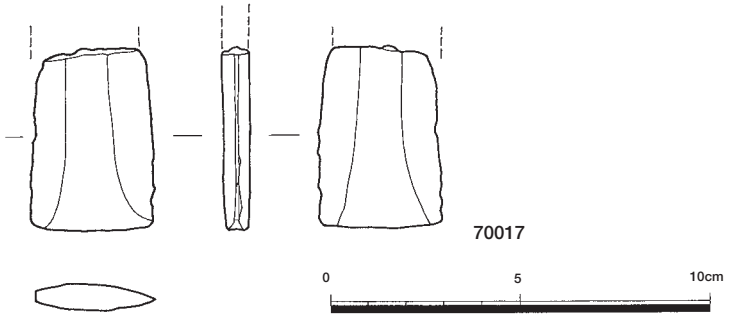


Fig.74　溝SD194出土石製品実測図（1/2）

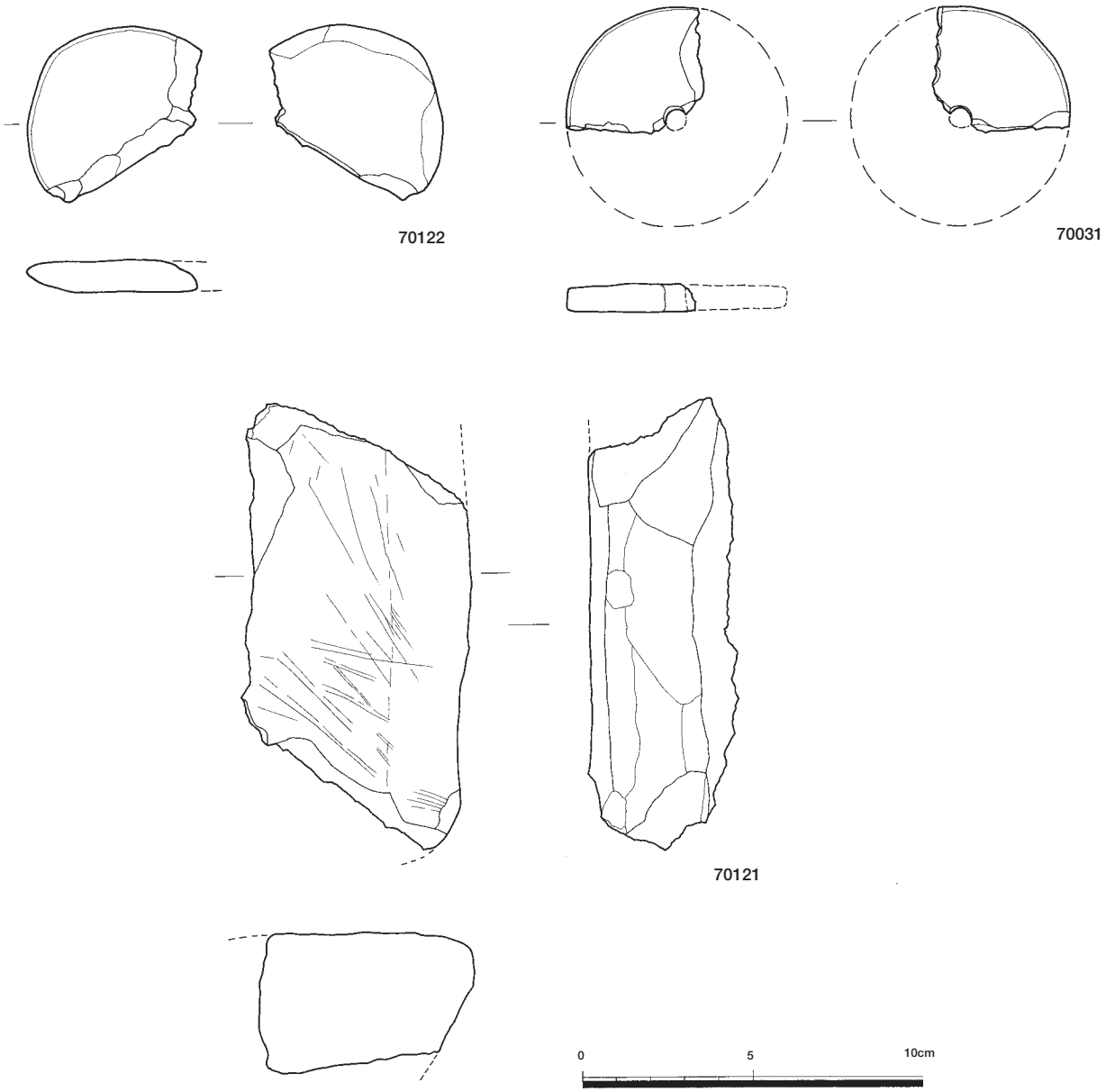


Fig.75　水田SX200出土石製品実測図（1/2）

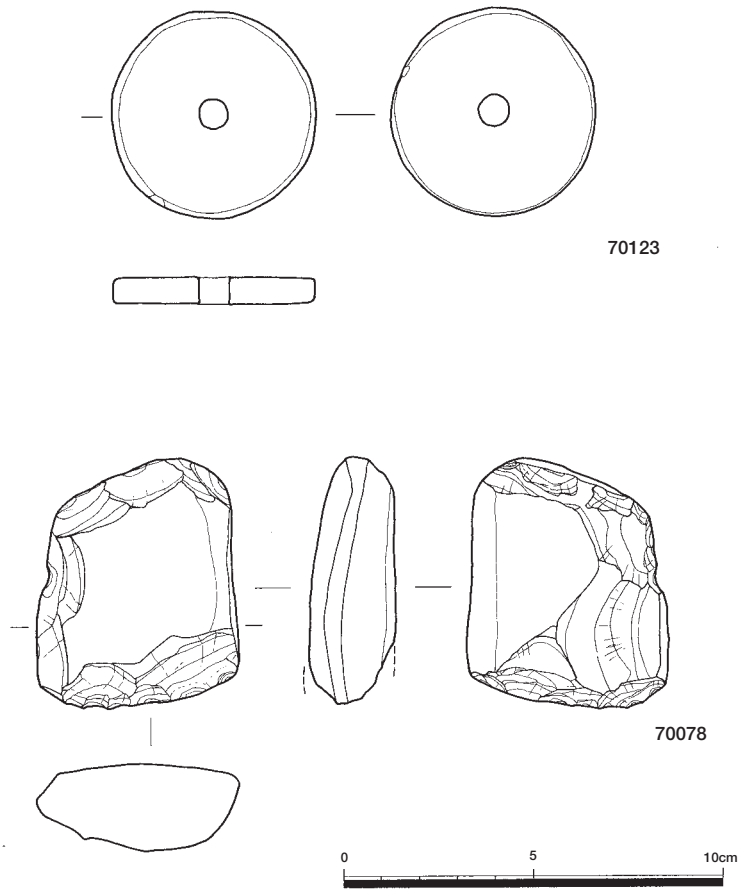


Fig.76　暗灰色粘質土出土石製品実測図（1/2）

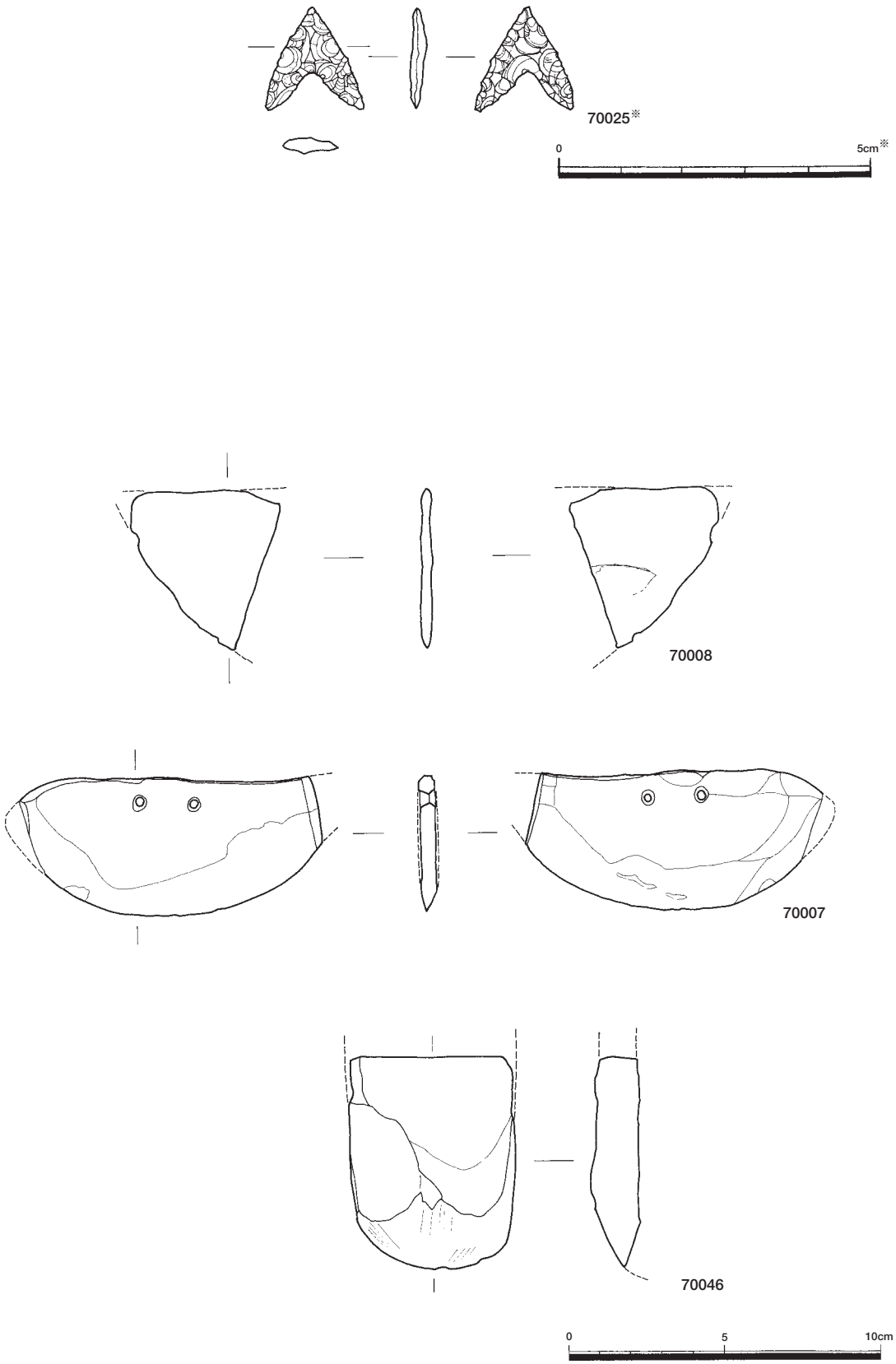


Fig.77　溝SD104出土石製品実測図1（1/1※・1/2）

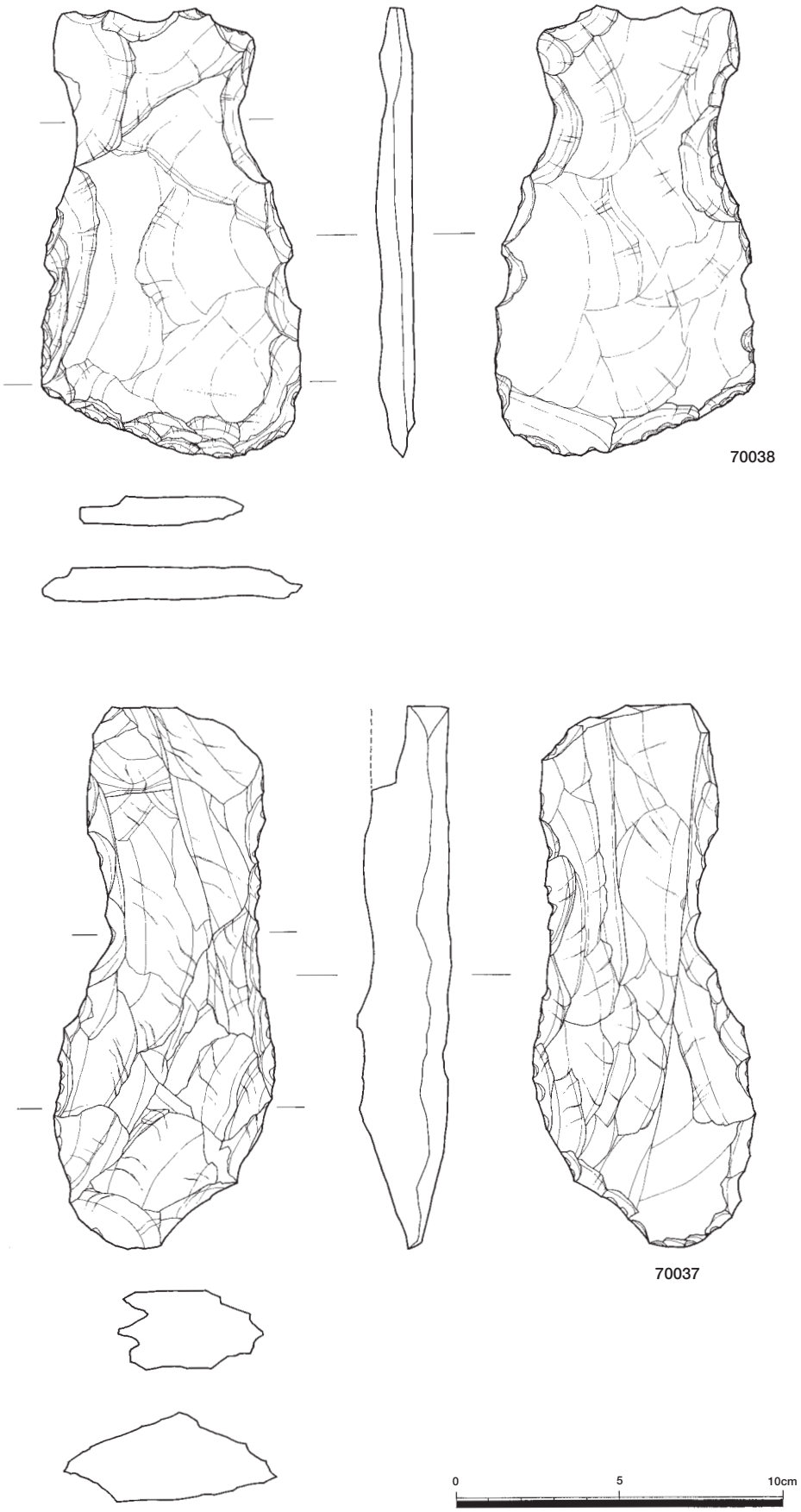


Fig.78　溝SD104出土石製品実測図2（1/2）

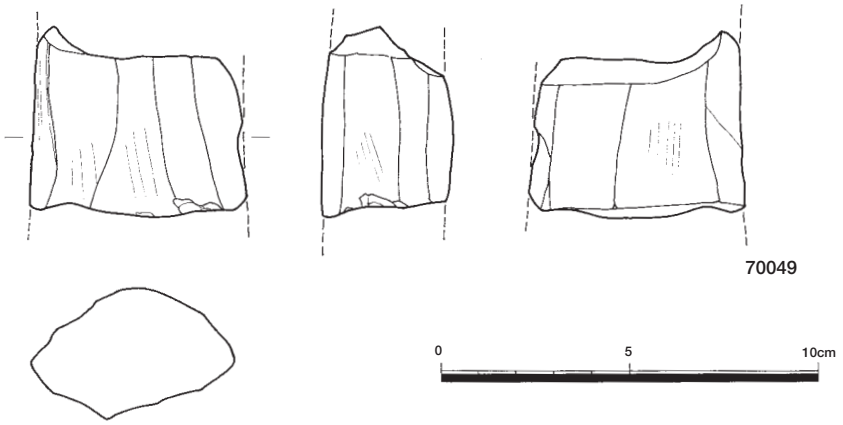


Fig.79　溝SD221出土石製品実測図（1/2）

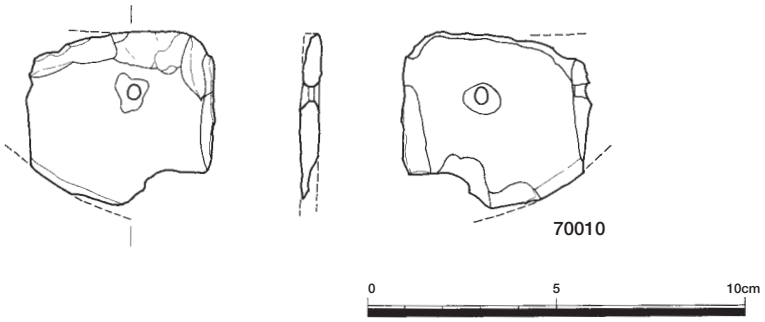


Fig.80　溝SD232出土石製品実測図（1/2）

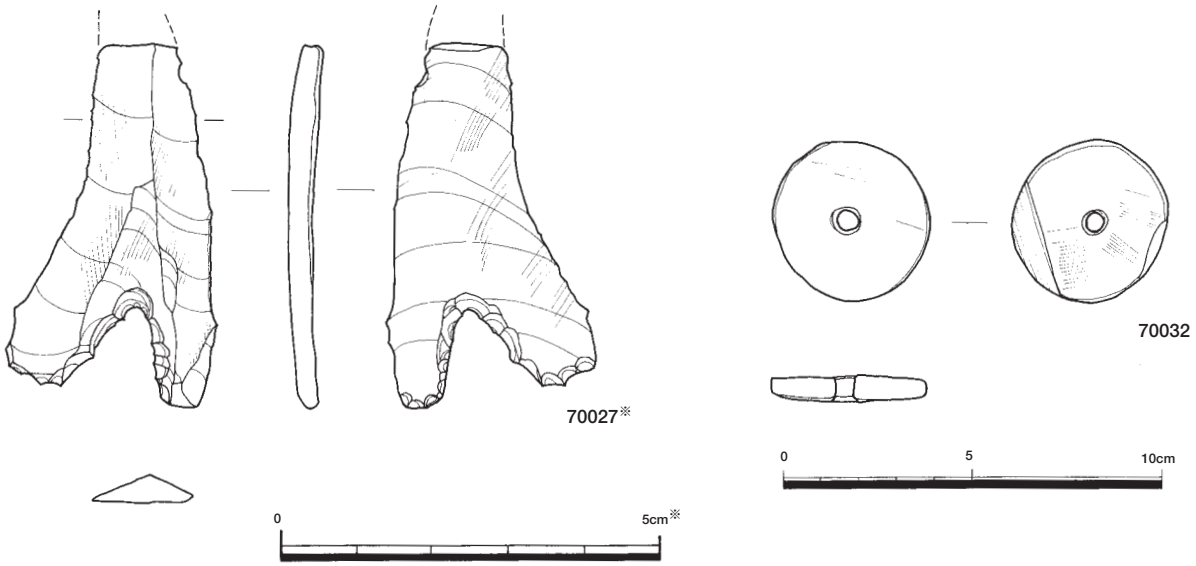


Fig.81　溝SD235出土石製品実測図（1/1※・1/2）

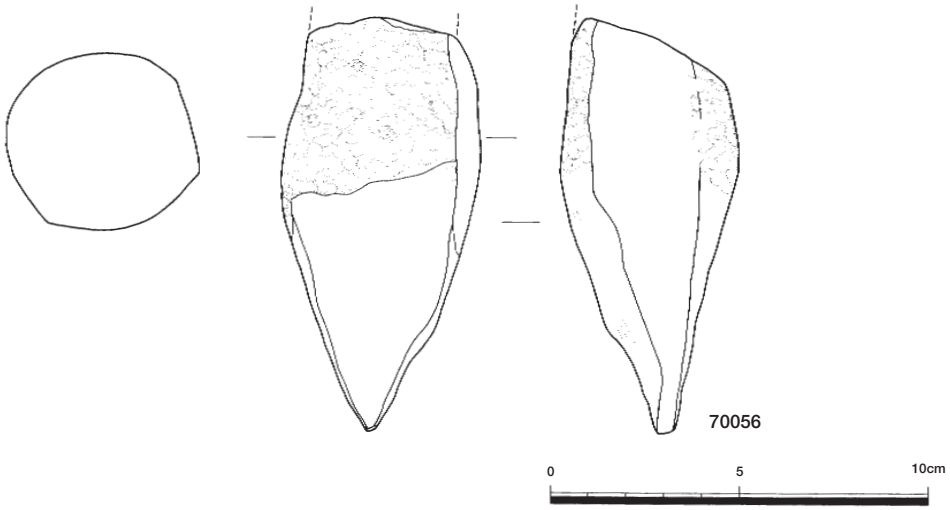


Fig.82　土壙SK245出土石製品実測図（1/2）

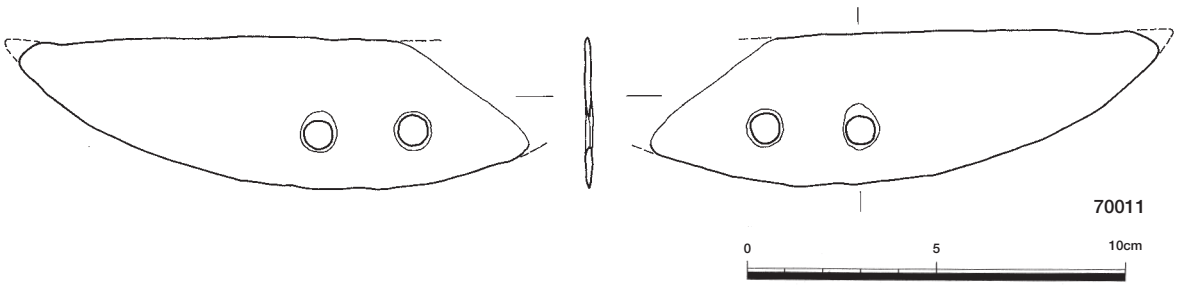


Fig.83　土壙SK251出土石製品実測図（1/2）

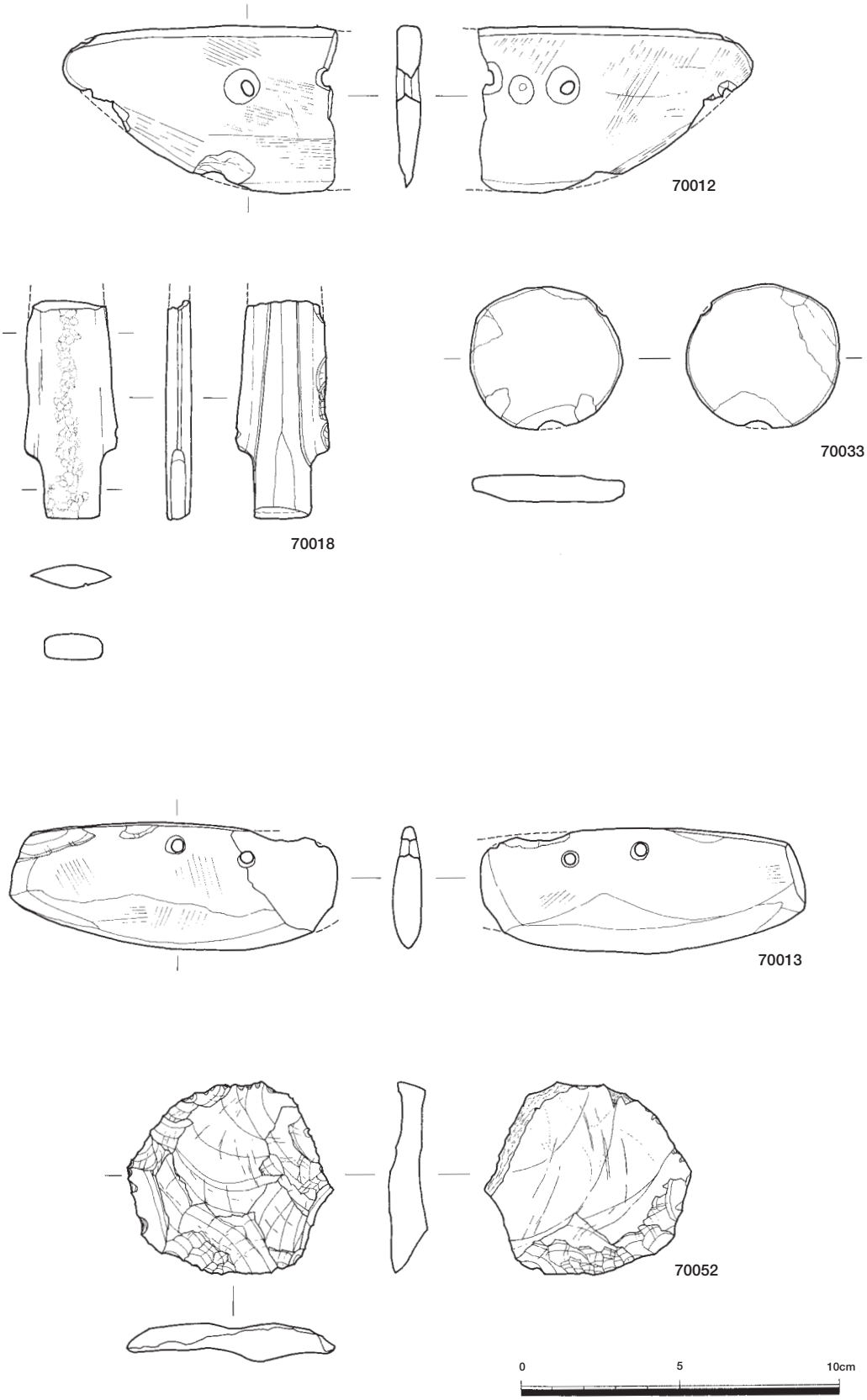


Fig.84 暗灰色粘質土出土石製品実測図（1/2）

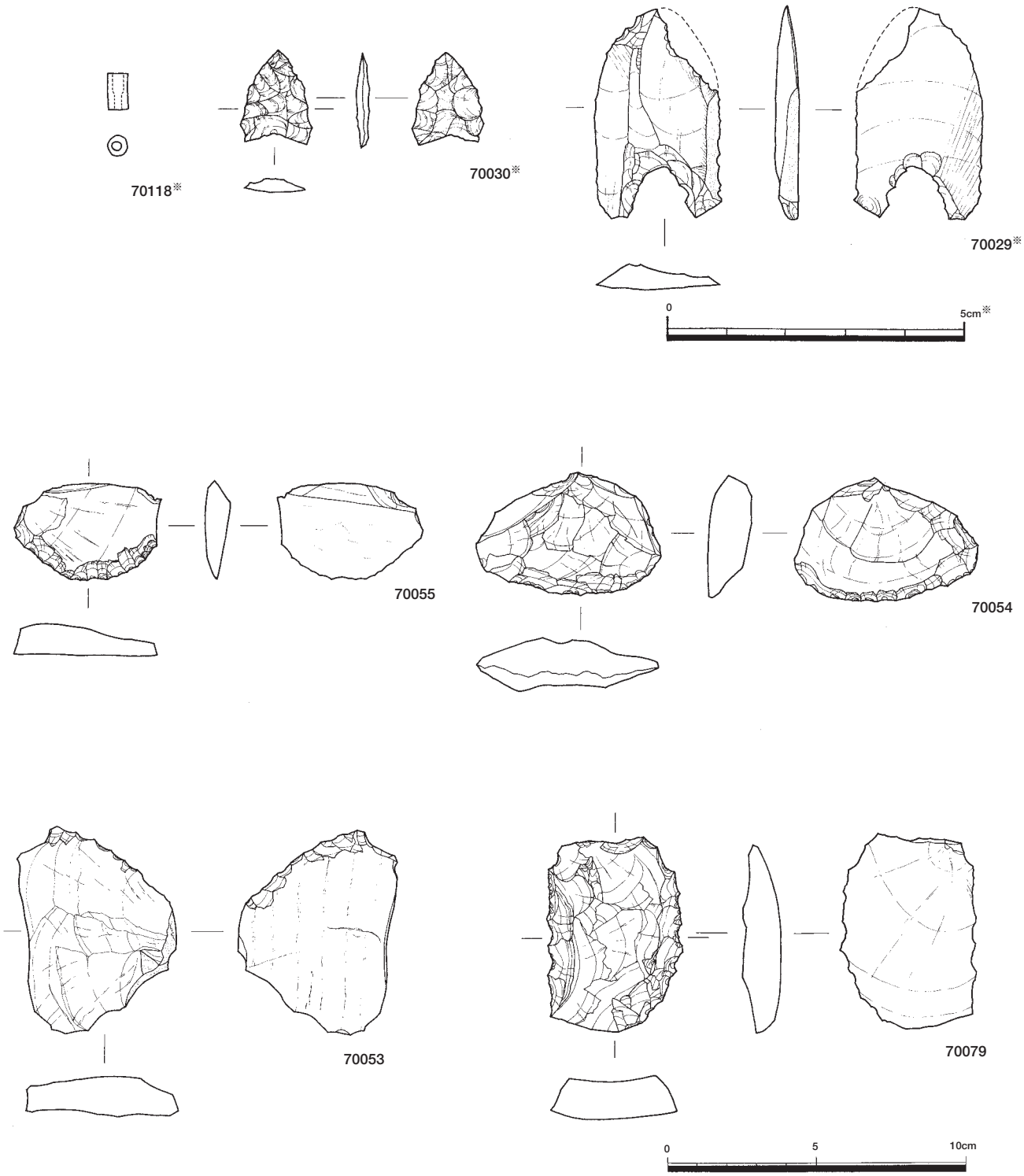


Fig.85　第4遺構検出面出土石製品実測図1（1/1※・1/2）

Fig.86　第4遺構検出面出土石製品実測図2（1/2）

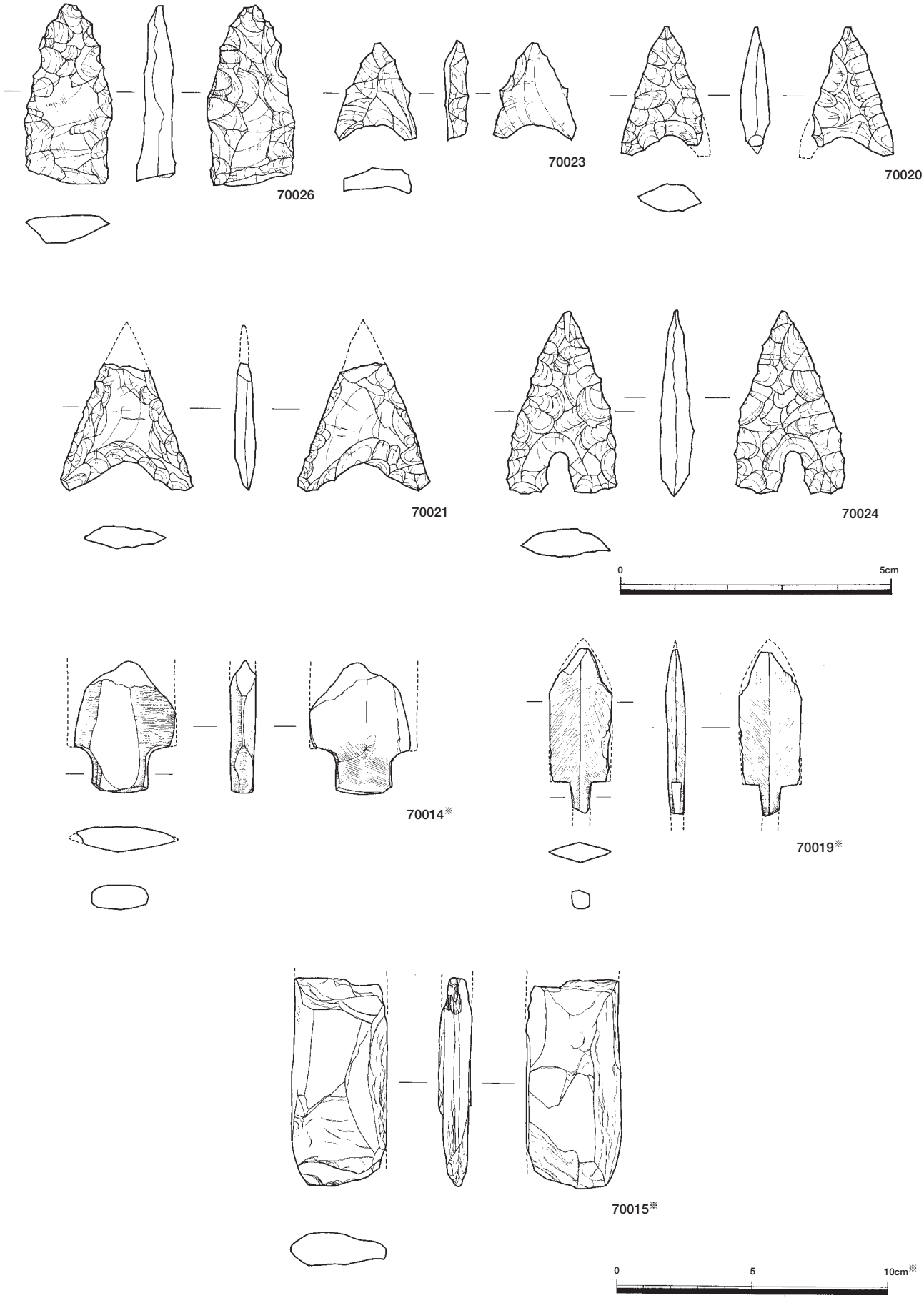


Fig.87　溝SD114出土石製品実測図1（1/1・1/2※）

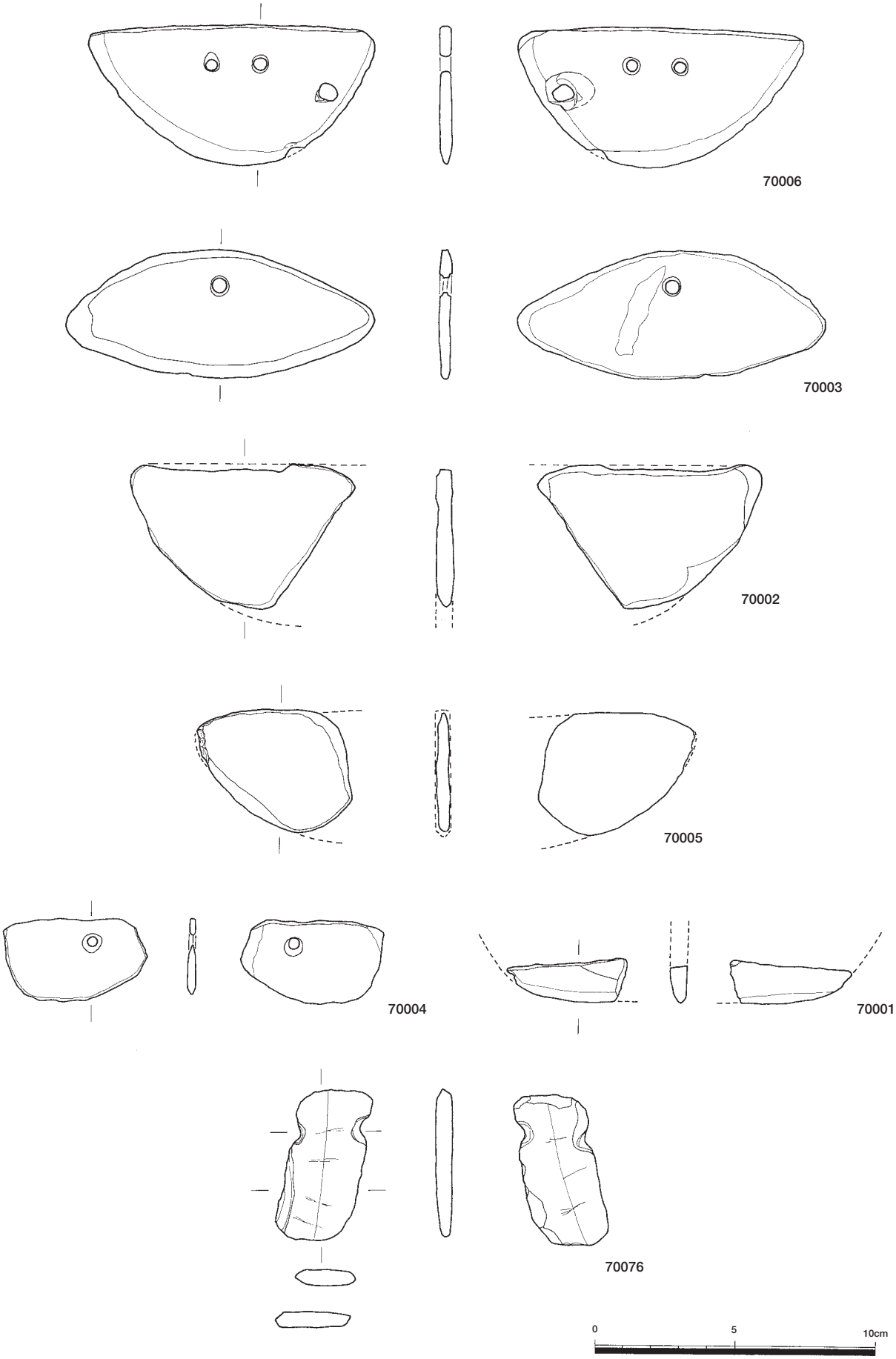


Fig.88　溝SD114出土石製品実測図2（1/2）

Fig.89　溝SD114出土石製品実測図3（1/2）

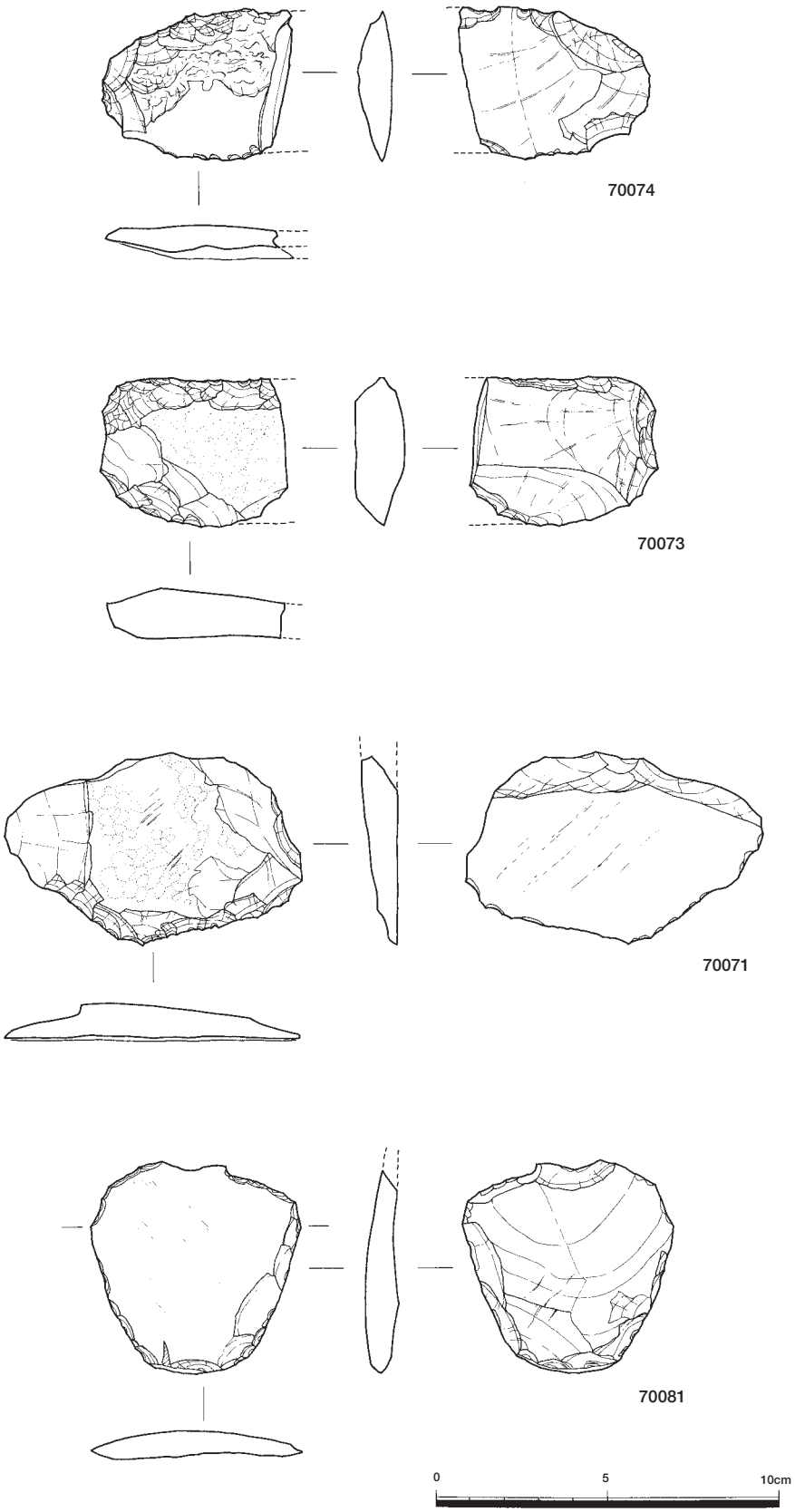


Fig.90　溝SD114出土石製品実測図4（1/2）

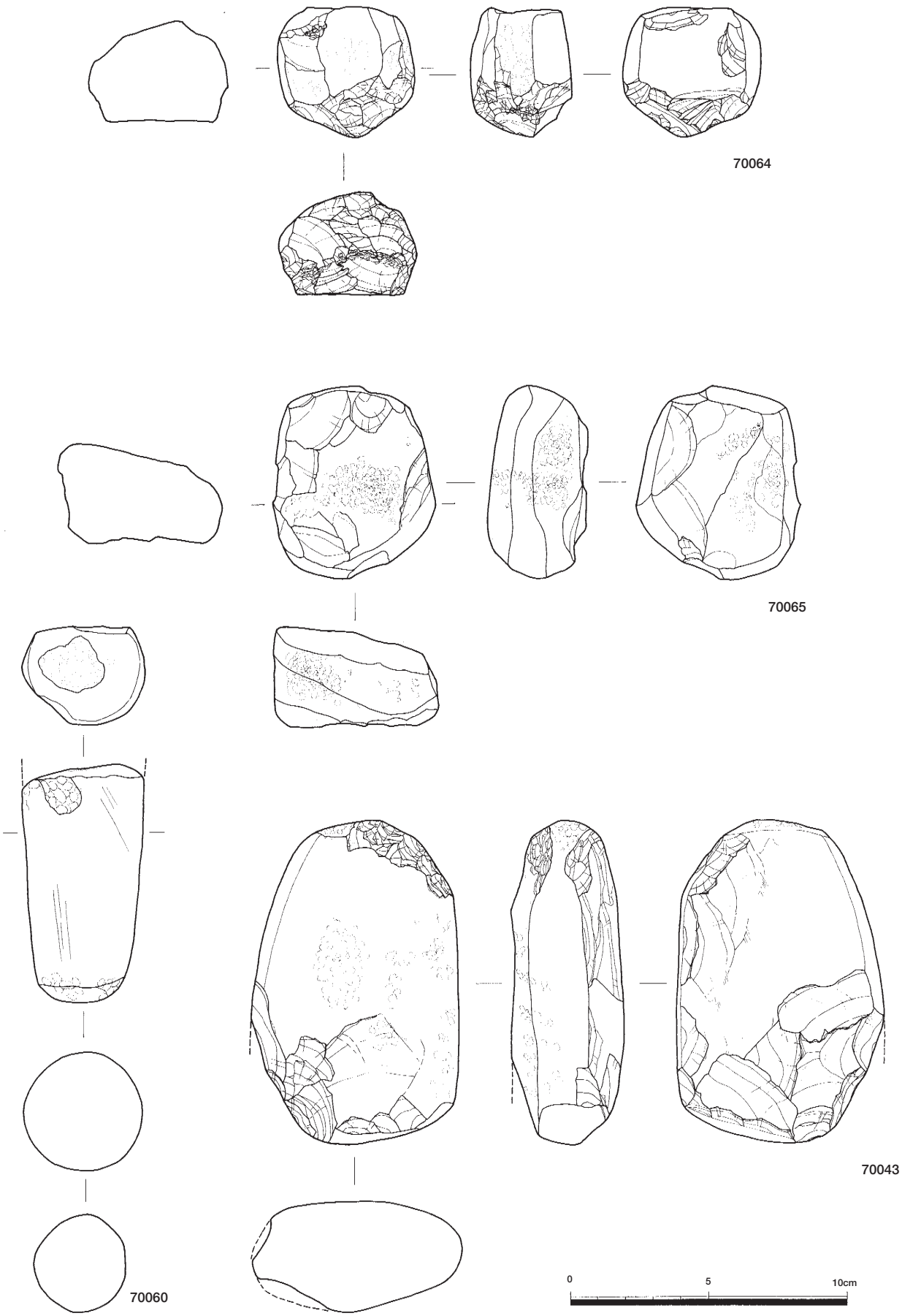


Fig.91　溝SD114出土石製品実測図5（1/2）

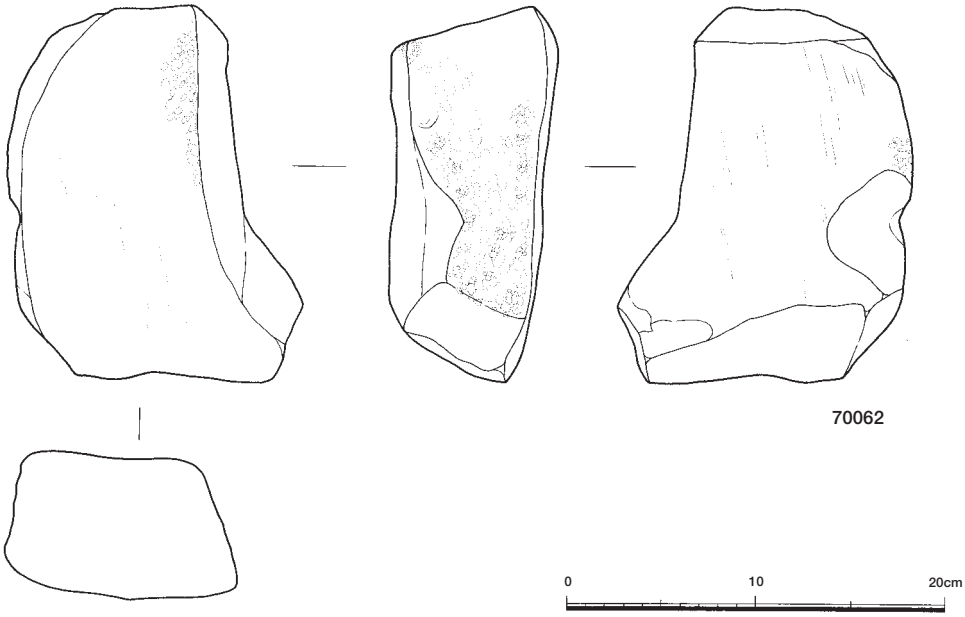
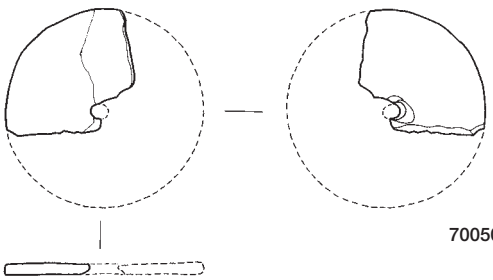


Fig.92　溝SD250出土石製品実測図（1/4）



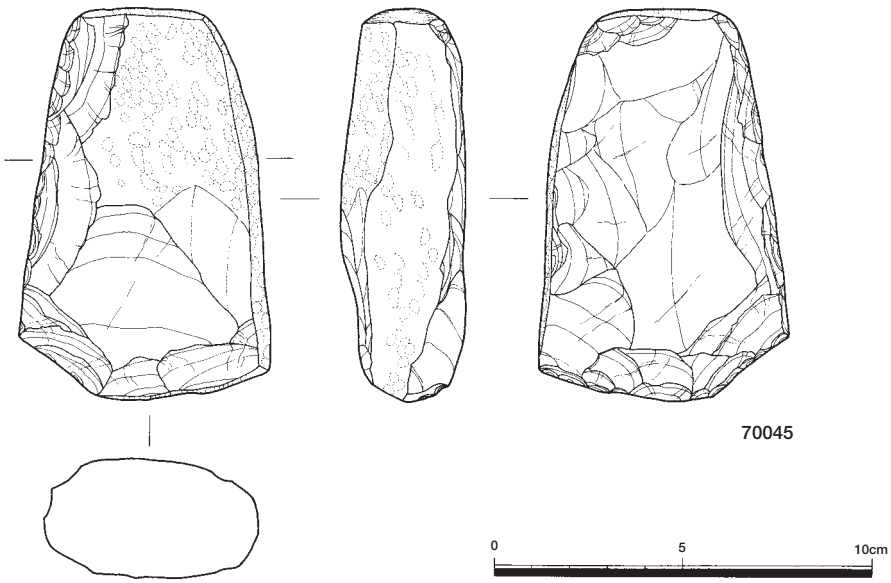


Fig.93　溝SD256出土石製品実測図1（1/2）

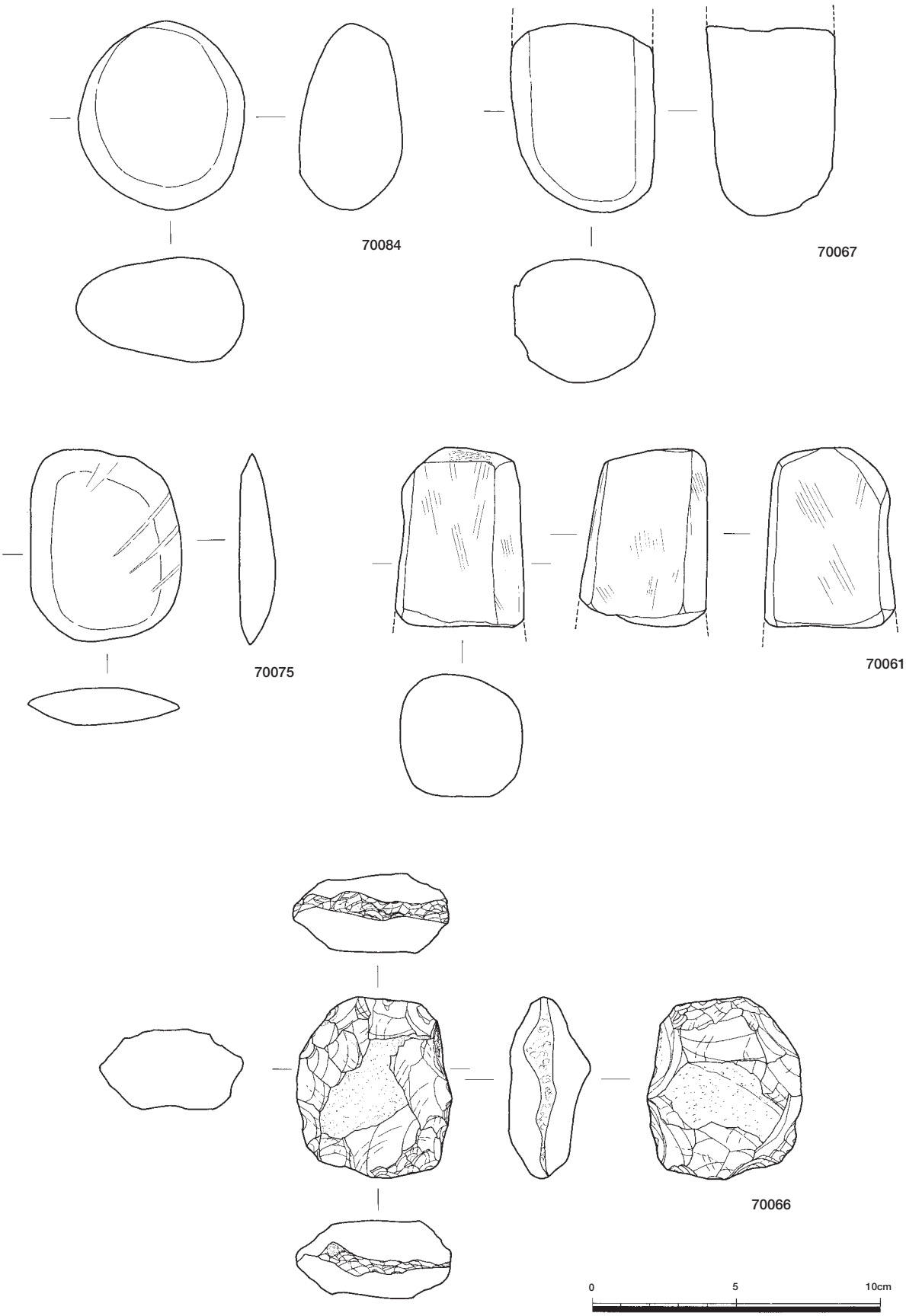


Fig.94　溝SD256出土石製品実測図2（1/2）

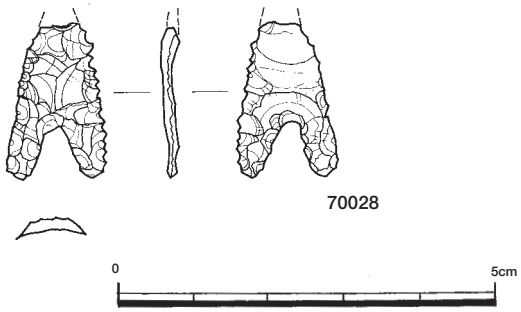


Fig.95　溝SD259出土石製品実測図（1/1）

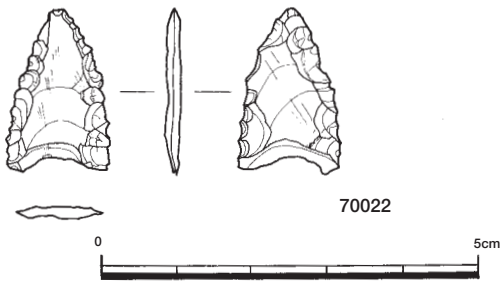


Fig.96　土壙SK254出土石製品実測図（1/1）

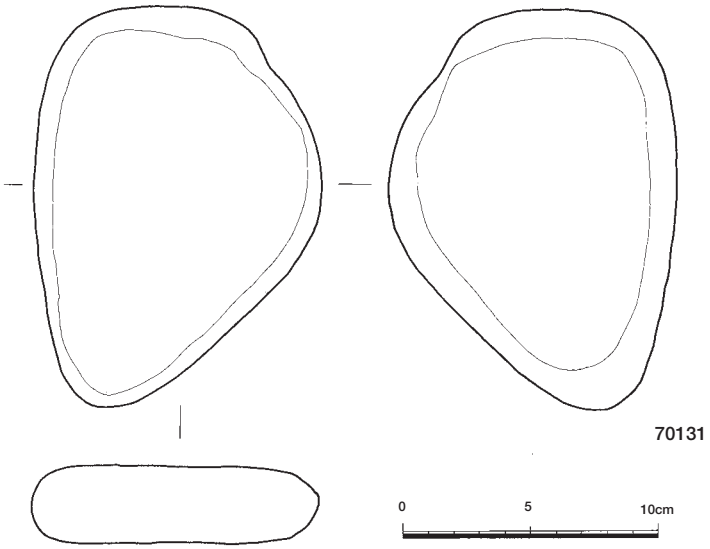


Fig.97　第5遺構検出面出土石製品実測図（1/3）

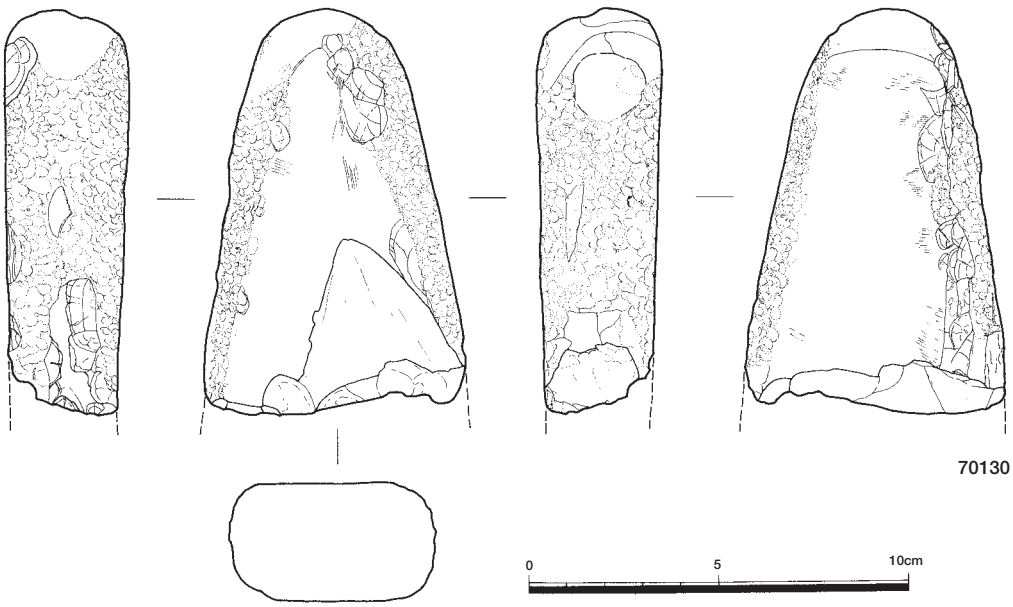


Fig.98　暗灰色粘質土出土石製品実測図（1/2）

（３）金属製品

金属製品を装填する木製品は出土しているものの金属製品は殆ど出土しておらず、古墳時代後半期の溝SD190から出土した銅銭が唯一の出土例である。

１）第３遺構検出面

溝（SD）

SD190（Fig. 99　PL. 139）

一枚の貨泉が調査区西辺部、溝SD190から出土している。全体的に腐蝕・摩滅が進んでおり、表面刻字の微細にわたる観察は不可能であるが、Fig.99に示すように判読はできる。表面には向かって右側に「貨」、左側に「泉」が配されている。裏面は、「泉」の裏に当る位置が長さ0.43㎝・幅0.1㎝・高さ0.02㎝にわたって外縁から中心へ向かって「一」の字状に肉厚に盛り上がっている。意図的なものとは考えられず、銅銭の鋳型に笵キズを有していることが不明なまま鋳造されたものであろうことは明かである。残存値は外径2.03㎝、外縁厚0.10～0.13㎝、1,557ｇを測る。

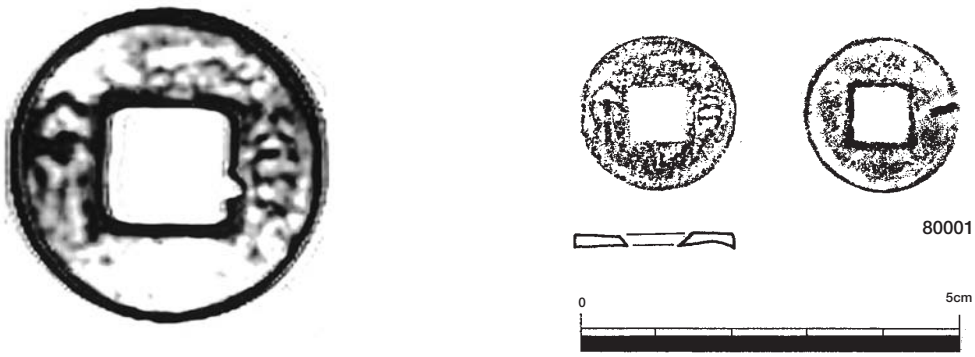


Fig.99　溝SD190出土貨泉X線透過写真（2/1）・拓影（1/1）

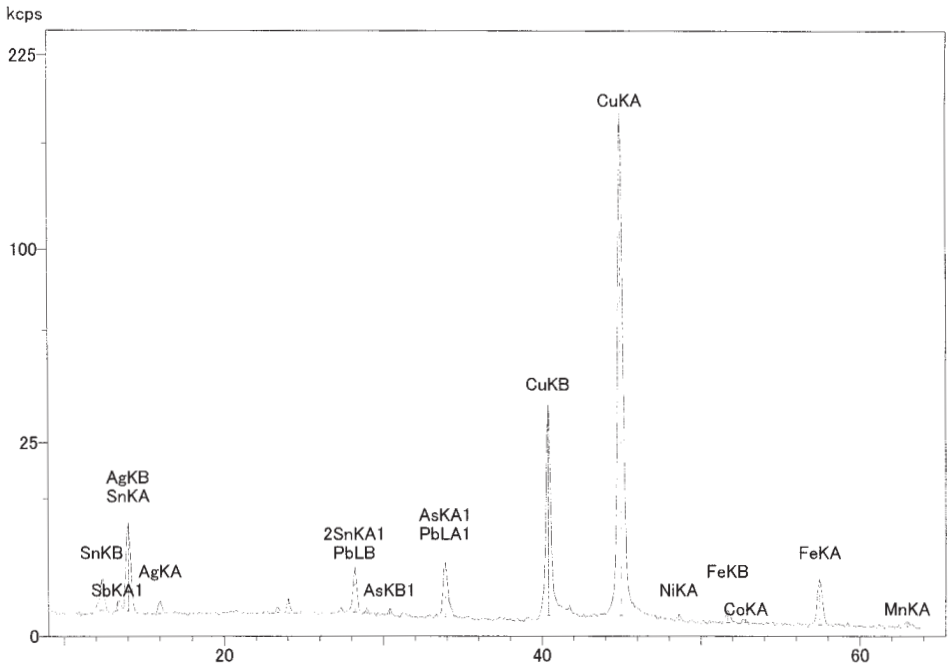


表6　貨泉（80001）蛍光X線分析結果

（３）木製品・建築部材

１）出土遺物

SD195（Fig. 100　PL. 140）

古墳時代後期後半の本溝からは、家具の組合せ部材と考えられる有孔板材が出土した。**30143**はスギの板目取り材を用い、片方端部は粗いナナメの削り加工で逆Ｖ字状にし、相対する位置に2.7×２㎝の長方形孔を穿ち、平面形は長方形をなすと考えられ箱状製品の部材か。器長48㎝、遺存幅15.2㎝、最大厚2.7㎝を測る。

SD196（Fig. 100　PL. 140）

古墳時代後期後半の本溝からは、工具の掛矢が出土した。**30144**はカシの芯持ち材を用い、搗部は相対する上下２面の平坦面を造り、両側縁は素材形状を生かし、端部は粗い面取り加工を加え仕上げている。握部は径6.05×3.8㎝前後に削り出しているが、端部は欠失しており、掛矢としたが工作台の可能性もある。遺存長27.38㎝、搗部長18.9㎝、搗部最大幅16.9㎝、搗部最大厚9.4㎝を測る。

SD197（Fig. 100　PL. 140）

古墳時代後期後半の本溝からは、農具の二又鍬と大足？が出土した。**30145・30146**はカシの柾目取り材を用いた方形着柄孔をもつ直柄二又鍬で、前者は乾燥し圧縮変形しているものの頭部から右刃にかけての破片であり、遺存長20.3㎝・幅6.2㎝・最大厚1.05を測る。後者は着柄孔から右刃部が遺存している製品で、刃部の横断面形は両端が尖りぎみの楕円形をなし、遺存長34.1㎝・幅10㎝・最大厚1.4㎝を測る。**30147**はスギのナナメ取り材を用いた一ヶ所2.5×1.9㎝の長方形孔を穿った組合せ部材の有孔板材で、後に大足に転用したと考えられる。両端に枠固定のためと考えられるコの字状の切り込みをもち、両端近くの両側縁を削り加工で狭め、中央両側縁には圧痕がみられ、器長42.1㎝、幅10.7㎝、最大厚1.7㎝を測る。

SD199（Fig. 101　PL. 140）

古墳時代後期後半の本溝からは、農具の平鍬・砧と紡織具？が出土した。**30151**はカシの柾目取り材を用いた方形着柄孔をもつ直柄鍬類で、着柄孔から刃部にかけての中央部が欠失しており本体は二又鍬の可能性が高いが、使用時は平鍬として使用されているものであることから直柄平鍬とした。着柄孔は長さ５㎝強、幅4.5㎝を測り、着柄孔に接して内側上部に段を削りだしており、鍬類組合せ着装具を用いて直柄と組合せたものといえる。また、体部から丸みをもった刃部になる両側縁にＵ字形鋤先を着装するための段を造り出している。遺存長38.5㎝、幅17.3㎝、最大厚1.7㎝を測る。**30192**は広葉樹の芯持ち材を用いた砧で、搗部先端は凸レンズ状をなし、搗部や柄部の器面には少し削り加工痕が残り、柄部端は欠失している。遺存長21.6㎝、搗部長13.7㎝、搗部最大径8.15×７㎝、柄部径2.8×2.6㎝を測る。**30150**は広葉樹の芯持ち材を用いた加工材で、片方端部に削り加工を加えクビレ部を造り出しており建築材の部材とも考えたが、器面に明瞭に遺存している削り加工痕は細かく丁寧であること、径が3.5～３㎝と細いことから紡織具の部材とした。遺存長59.4㎝を測る。

第３面（Fig. 113 ,118　PL. 141）

古墳時代後期の遺構検出時などで、工具の槌、容器類の蓋？、建築材の部材が出土した。　**30148**はカシの割材を用いた槌（掛矢）で、木取りおよび搗部先端の形状から竪杵の握部近くの搗部の再利用品と考えられる。搗部中央は使用により凹まり横断面形は不整方形状をなしている。器長40.5㎝、搗部の長さ26.2㎝、幅8.6㎝、最大厚6.5㎝、柄径3.35×3.5㎝を測る。**30187**は広葉樹の柾目取り材を用い、細かい丁寧な削り加工で中央部がやや厚い円盤状に仕上げている。一部は火を受けて炭化し変化しているが、容器類の蓋、または蓋未製品と考えられる。径6.75×6.45㎝、最大厚1.4㎝を測る。

30149はスギの芯持ち材を用いた丸太と角材の部分からなる加工材で、遺存状態が悪く、全体形がわからないが建築材の部材か。遺存長51.6cm・最大径9.2×6.5cmを測る。

SD104（Fig. 102～111　PL. 141～146）

本溝からは、第４次調査においても多くの木製品が出土しており49点をすでに紹介しているが、第５次調査においても農具・工具・家具・履物・什器・容器類・狩猟具・建築材など多数の木製品が出土した。

農具は、起耕具の鍬類・鋤類、整地具の杷、脱穀具の杵類があり、鍬類から詳述する。鍬類（Fig.102～104）は直柄二又鍬、反柄の二又鍬・三又鍬などがあり、いずれもカシの柾目取り材を用いている。**30101・30105・30106・30109・30116**は方形着柄孔をもち、直柄を組合わせる鍬類（以下、直柄鍬類とする）で、**30101・30105・30109**は二又鍬、**30106**は頭部から着柄孔にかけての破片、**30116**は形状から平鍬の可能性が高いが器種の特定はできない。**30101**は乾燥のため少し変形しているものの、長さ４cm前後の着柄孔をもち、又部は平面・断面形ともＶ字形をなし、長さ約29cmを測る左刃（以下、本書のなかでは、鍬類の内側を表とする）の横断面形は五角形をなしている。器長50.9cm、遺存幅11.6cm、最大厚1.8cmを測る。**30105**は長さ５cm前後の着柄孔をもち、長さ26cm前後を測る右刃の基部近くの横断面形は、五角形をなしており、器面には製作時の削り加工痕が比較的明瞭に残っている。遺存の長さ37.4cm・幅６cm・最大厚1.5cmを測る。**30109**も前者２例と同形で、遺存の長さ22.8cm・幅9.5cm・最大厚1.4cmを測る。**30106**は長さ3.7cm、幅3.4cm前後の着柄孔をもち、遺存の長さ12cm・幅5.3cm、最大厚1.9cmを測る。**30116**は遺存の長さ17.6cm・幅6.7cm・最大厚１cmを測る。

30110～30113・30115は反柄との縄縛固定用のナスビの蕚状に造り出す基部をもつ鍬類（以下、反柄鍬類とする）で、基部から頭部にかけての横断面形は蒲鉾形をなし、**30110・30111・30113**は二又鍬、**30115**は三又鍬、**30112**は二又鍬の可能性が高いが、基部から頭部にかけての遺存で器種特定はできない。**30110**は乾燥のためやや圧縮変形しているが、頭部から左刃が遺存しており、又部は平面・断面形ともＶ字形をなし、刃部の横断面形は五角形をなしていたと考えられる。基部造り出し下の最小幅は9.7cmで、遺存の長さ48.8cm・幅11.6cm・最大厚0.65cmを測る。**30111**が最も遺存状態が良く、又部は平面・断面形ともＶ字形をなし、長さ36cmを測る左右の刃部横断面形は五角形をなし、刃部最大幅は左刃が5.8cm、右刃が5.2cmを測り、基部造り出し下の最小幅は5.4cmを測る。遺存長53.35cm、最大幅14.3cm、最大厚１cmを測る。30113は基部から刃部にかけて遺存しており、刃部の横断面形は五角形をなし、基部近くの刃部外縁にＶ字状の切り込みがあり、基部造り出し下の側縁には柄固定時の縄縛痕がみられる。遺存の長さ28.3cm・幅７cm、最大厚1.25cmを測る。**30115**は一部火を受け炭化しているが、基部から中央刃にかけて遺存しており、長さ34cm前後の中央刃部の横断面形は六角形から楕円形をなし、遺存の長さ45.45cm・幅7.7cm・最大厚1.65cmを測る。**30112**は基部造り出し下の最小幅6.2cmを測り、基部造り出し下と頭部の両側縁から外側にかけて、柄固定時の縄縛痕がみられ、遺存の長さ23.6cm・幅7.9cm、最大厚1.2cmを測る。**30102～30104・30107・30108**はいずれも刃部の横断面形が台形・五角形・楕円形をなし、最大幅が５cm以上あることから二又鍬といえるが、方形着柄孔をもつ直柄鍬類か反柄鍬類で、膝柄を組合わせる鍬類（以下、膝柄鍬類とする）は考えられない。**30102**は最大刃幅5.6cmで、遺存の長さ46.8cm・幅7.3cm・最大厚0.8cmを測る。**30103**は直柄二又鍬と考えられるが、頭部から方形着柄孔を欠失していることから直柄鍬類と特定しなかった。遺存が良い方の刃部の最大幅は7.1cmを測り、遺存の長さ33.4cm・幅13.75cm・最大厚1.3cmを測る。**30104**は刃部最大幅5.3cmを測り、器面には製作時の削り加工痕が明瞭に残っている。遺存の長さ34.05cm・幅6.3cm・最大厚1.2cmを測る。**30107**は刃部最大幅6.7cmで、遺存の長さ37.2cm・幅7.05cm・最大厚１cmを測る。

30108は刃部最大幅5.1cmで、遺存の長さ20.6cm・幅5.3cm・最大厚１cmを測る。

鋤類（Fig.105・106）は一木造り平鋤と鋤類の柄があり、いずれもカシの柾目取り材を用いている。**30117・30118**は一木造り平鋤、**30120・30121**も欠失部近くの厚さが薄く・幅広となりつつあることなどから一木造り鋤類と考えられるが、**30119**とともに鋤類柄として詳述する。**30117**は抄い部肩に足掛りのための造り出しをもち、抄い部先端の刃はまるくおさめ、柄はスコップの柄状をなし、三角形の握り手を造り出しているが、抄い部の器面および側縁には製作時の削り加工痕が明瞭に残っており、抄い部の中央横断面形が長方形をなしており、未使用の製品の可能性が極めて高いといえる。抄い部の長さ53.5cm、最大幅16.3cm、最大厚1.7cmで、握部は最大幅10cm、最大厚2.6cmで、天井幅7.2cm、高さ７cmのほぼ正三角形に刳り貫いており、全体の器長は114.8cmを測る。**30118**はうちわ状をなす抄い部をもち、握部の造り出しは無く、柄端は丸くおさめている。抄い部の刃は欠失しており、遺存長23.8cm、肩部幅9.7cm、最大幅15.9cm、全体の遺存長81.4cm、最大厚2.5cmを測る。**30119**は天井幅12.5cmで高さ9.5cm前後を測る半円形から５×2.1cmの長方形を引き手状に刳り貫いて握部としている。遺存長65.1cm、最大厚3.2cmを測る。**30120・30121**はスコップの柄状をなし、握部はそれぞれ最大幅9.1cm・9.7cm、最大厚2.6cm・2.3cmで、天井幅7.2cm・6.5cm、高さ7.4cm・6.5cmの三角形に刳り貫いて仕上げており、遺存長56.3cm・63.9cmを測る。**30119・30121**は器面に製作時の削り加工痕が明瞭に残っている。

以上の他、農具は整地具の杷（Fig.102）、脱穀具の杵類（Fig.107）がある。**30123**はカシの柾目取り材を用いた杷（サラエ）で、中央刃を挟み肥厚した刃部の基部近くに２×2.3cm・1.7×２cmの二つの着柄方形孔を穿ち、半円状をなす背は着柄孔をもつ刃部基部とともに盆の縁状に肥厚させ、肥厚部の両端は左右端の刃部状をなしている。中央の刃部は又部から長さ5.7cm、その両側の刃部は5.4cm前後と、３本の刃部の平面形は逆二等辺三角形を呈し、さらに左右２本づつの刃部は正三角形状をなし、刃部は中央が最も又部から長く、両端にいくに従って短くなっている。刃部の横断面形は六角形から楕円形をなしている。柄の形状や着柄方法（鋭角または鈍角）については類例を待ちたい。器長15.8cm、器幅44cm強、最大厚1.6cmを測る。**30132**はカシの割材を用いた竪杵で、搗端部は凸レンズ状をなし、遺存の長さ45.1cm・最大径8.5×7.2cm、握部最小径３cmを測る。なお、破損後槌として再利用されており、搗部中央は使用により横断面形が不整方形に変形している。

工具は、鉄斧柄（Fig.106）、槌など（Fig.107）がある。**30122**は芯持ち材の枝別れ部を用いた鋳造鉄斧の柄で、台部の基部に内法3.3×1.5cmで、厚さ２～３mmの鉄斧着装痕があり、鉄斧の袋部の長さは少なくと4.5cmあったことがわかるが、台部から基部にかけて火を受け炭化している。遺存の長さ17.2cm・柄最大径2.05×2.45cm、台部の長さ9.3cm・最大幅2.95cmを測る。**30132**は竪杵転用の槌、**30133**はクヌギ？の芯持ち材を用いた槌未製品で、搗端部は粗い削り加工で尖らせ、搗部は粗い削り加工が加えられた所と表皮を残している所が半々で、柄は面取り加工で横断面形方形状にしている。器長60.9cm、搗部径8.6×6.2cm、柄最小幅３cm・最小厚４cmを測る。

家具は、案（Fig.106）、椅子（Fig.104）、箱など家具類と考えられる組合せ部材の板材（Fig.107・109）がある。**30126**はスギの柾目に近いナナメ取り材を用いた案の脚で、ほぼ中央の片側縁を半円に削り取り、その上に天板・天板を挟み込む桟板を乗せる段を両側縁に設け、さらに鼻栓で固定するための2.8×0.8cmの長方形孔を穿ち、頭部は半円状に仕上げている。しかし、この型の案の脚によくみられる天板・桟板組合せのための設計線（当たり線）はみられない。器長23.95cm、幅7.8cm、最大厚1.2cmを測る。**30114**は広葉樹の板目取り材を用いた脚と枘組合せ固定する組合せ式椅子で、北九州市の上清水遺跡・貫川遺跡に出土例がある。3.5×2cmを測る長方形の脚組合せ用の枘孔から湾曲する

腰掛座まで遺存しているが、他端は欠失している。図でみる下側の器面には削り加工痕が明瞭にみられるが、他面は磨きを加えたのか削り加工痕はみられない。遺存長39.3cm、最大幅18.6cm、最大厚2.2cmを測る。**30127**はヒノキ？の柾目取り材を用いた組合せ部材の板材で、遺存の長さ28.5cm・幅8.6cm・最大厚0.85cmを測る。**30128**はスギの柾目取り材を用いた組合せ部材の板材で、遺存の長さ28.7cm・幅9.7cm、最大厚１cmを測る。**30137**はスギの板目取り材を用いた組合せ部材の板材で、左側面はスリット組合せのためか細くし、両端は欠失しているが右側面の両端近くは削り加工により幅を狭める意図がみられる。なお、器面には削り加工痕が明瞭に残っており、遺存長47.3cm、幅7.5cm、最大厚1.15cmを測る。

履物として、**30124・30125**の広葉樹の板目取り材を用いた沓（Fig.106）がある。**30124**は指側を幅広、踵側を幅狭として沓形に仕上げ、外底は2.5～４cmの間隔で７条の切り込みの溝を造り洗濯板状となし、両側の踵よりの内底から外に縄縛用の小孔を穿っている。形状から右足用で、外底には使用時のものと考えられる擦り傷が数条みられる。器長29.1cm（内法23.4cm）、最大幅約13cm、最大高3.1cm（内法1.8cm）、外縁最大厚2.5cmを測る。**30125**は遺存状態が悪いが、外底は２～３cm間隔で切り込みの溝を造り洗濯板状となしており、内側は**30124**と同様丁寧に磨きをかけて仕上げており、右足用の沓といえよう。遺存の長さ17.6cm・幅７cm・最大厚1.5cmを測る。

什器として、**30129**の発火具である火鑽臼（Fig.106）がある。長さ31cm強で径２cm前後の広葉樹の芯持ち材を用い、長さ30.9cmで切り、両端に面取り加工を施し、削り加工で４面体とし、２面に渡って1.6cm前後（最大2.2cm、最小1.3cm）の中心間間隔で18箇所の発火用の火鑽臼部を設定して造り出しているが、使用されたのは端部から２番目の１箇所のみである。最大幅1.7cm、最大厚1.4cmを測る。

容器類は、鉢（Fig.106・107）がある。**30130**はスギの板目取り材を用いた平面の外形・平坦な内底形とも長方形を呈する大型の鉢と考えられるが、片側小口縁から鉢部にかけての破片であり、全体の形状はわからない。遺存の長さ49.4cm（内法32cm）・幅12.85cm・最大高6.6cm（内法5.6cm）を測る。

30136は広葉樹の板目取り材を用いた容器類の鉢底と考えられるが、小破片のため全体の形状はわからない。遺存の長さ6.7cm・幅3.15cm・高さ1.8cmを測る。

狩猟具として、**30183**の木鏃（Fig.106）がある。比較的丁寧な削り加工で横断面が丸に近くなるようにし、先端は面取り状に三角錐に仕上げているが、茎部は欠失している。遺存長6.3cm、最大径1.45×1.55cmを測る。以上の他、建築材以外では、不明木製品として**30134**の角棒状木製品（Fig.110）がある。広葉樹の芯持ち材を用い、面取り加工により７面体に整形し、片方端部は一撃で落とし、端部近くは屈曲させ柄の手掛り状をなしている。器面全体に製作時の削り加工痕が明瞭に残っており、農具の柄や組合せ部材の未製品か組合せ部材そのものか。遺存の長さ56.6cm・最大幅5.65cm・最大厚3.55cmを測る。

建築材は、**30131**の鼠返し（Fig.109）、**30135・30152**の梯子（Fig.108）と部材（Fig.109・110）がある。**30131**は広葉樹の板目取り材を用いており、中央裂け面の一部約６cm弱が枘孔の一辺にあたり、全体形は不整円形か隅丸方形をなすと考えられ、遺存の径53.1cm・最大厚２cmを測る。**30135**はスギの割材を用いており、34cm間隔で足掛りを設けて２段遺存しているが、大半が欠失しており幅、長さは不明である。遺存の長さ82.5cm・幅10.8cm・最大厚７cm・足掛り間の最大厚1.5cmを測る。**30152**は広葉樹の芯持ち材を用いており、約30cmの間隔で足掛りを設けて５段遺存しており、第４次調査出土の**30146**と同一形態をとるが足掛りの間隔や幅がことなるため別個体である。遺存長150.8cm・幅15.5cm・最大厚８cm・足掛り間の最大厚2.9cmを測る。**30138**は広葉樹の板目取り材を用いた痛みの激しい有孔板材で、組合せ部材で建築部材でなく家具など他の部材の可能性もある。他端から７cmに２×

1.8cmの長方形の枘孔を穿っており、器長102.15cm、遺存幅9.1cm、最大厚1.6cmを測る。**30139**は広葉樹の芯持ち材を用いた横架材で、端部に幅2.4cmで長さ7cmの枘を造り出し、他は横断面形長方形になるように面取り加工を加えている。遺存長143.4cm、最大幅8.9cm、最大厚5cmを測る。**30140**はカシ？の割材を用いた床大引材？で、半円状をなす面の中央に22.5cmの間を開けて11×4×2cm・13×3.5×3cmの長方形箱形の桟穴を入れ、さらに上に43.5cm開けて桟穴が始まっているが下は33cmまで桟穴はみられない。この彫り込みは枘組合せのためのものと考えられる。遺存長126cm・最大幅10.5cm、最大厚6cmを測る。**30141**はカシの割材を用いた組合せ部材で、片方端に枘組合せの孔または切り込みがみられる。遺存長80.8cm、最大幅7.6cm、最大厚6.2cmを測る。**30169**はスギの板目取り材を用いた組合せ部材の板材で、左側縁には2箇所にコの字の切り込みがみらるが、乾燥のため変形し、一部は火も受け炭化しており、全体ないことから形状もわからない。壁材や床材のほか家具の組合せ部材の可能性もある。器長112.4cm、遺存最大幅34.3cm、最大厚2.7cmを測る。　以上の出土木製品は、本溝出土土器から弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭にかけてのものといえる。

SK243（Fig. 117　PL. 147）

弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭と考えられる本溝からは、農具の直柄三又鍬が出土した。**30155**はカシの柾目取り材を用い、幅3cm強を測る方形着柄孔部から左刃と中央刃・右刃の基部が遺存しているが、乾燥により圧縮変形している。遺存長29.25cm・幅11.3cm・最大厚1.5cmを測る。

SK245（Fig. 117　PL. 148）

弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭と考えられる本溝からは、運搬具の背負子と容器類の蓋が出土した。30159はスギの枝分かれ部を用いた背負子の部材で、上部を欠失しているが、横桟組合せのための枘孔・コ字状をなす切り込みがみられる。遺存長19.5cm、台部長12.75cm、台部幅2.2cm、台部厚3.35～4.2cm、背合わせ枠径2cmを測る。台部が短く、背負子を鉄斧柄に転用している可能性もある。**30160**は広葉樹の板目取り材を用い不整円形に仕上げた板材で、欠失部も多いが容器の蓋と考えられる。径15cm前後、最大厚0.6cmを測る。

SK251（Fig. 112　PL. 149 ,151）

弥生時代後期後半の本溝からは、楽器の琴と紡織具の紡錘車が出土した。**30173**はスギのナナメに近い柾目取りした材を用いた琴で、共鳴孔・集弦孔をもち、裏面に共鳴槽を装着するための溝が造り出されていることから櫛形の突起は欠失しているが、琴の上板といえる。集弦孔側の端部端から21cmの所から幅を狭くし、端部幅は18.3cmを測り、裏面の共鳴槽装着の溝および径0.5cm前後の縄縛固定用の小孔から、共鳴槽は厚さ1～2.5cm前後の側板からなり、19.8cm前後の幅をもち、春日市辻畑遺跡出土の六突起をもつ琴と同形態と考えられるが、小口板があったか否かはわからない。遺存長87.1cm・最大幅23.7cm、最大厚1.8cm、円形の共鳴孔径2.8cm、不整三角形の集弦孔の幅3.85cm、長さ2.5cmを測る。**30190**は広葉樹の柾目取り材を用いた紡輪と割材を用いた回転軸からなる紡錘車で、紡輪は上場径0.75×1cm、下場径4.95cm、高さ1.55cmを測る台形錐を呈し、その中央に回転軸組合せの円孔を穿ち、側面には細かい丁寧な削り加工痕が残っている。回転軸は遺存長5.7cm、径0.7cmを測る。

SD114（Fig. 114 ,115 ,118　PL. 150）

本溝からは、第4次調査においても木製品が出土しており鍬類・容器類各1点をすでに紹介しているが、第5次調査においても農具・紡織具？・楽器・容器類・建築材などの木製品が出土した。

農具は、起耕具の鍬類、整地具の杁（エブリ）？、脱穀具の杵類があり、鍬類から詳述する。鍬類（Fig.114）は、諸手鍬、直柄三又鍬と泥除けがある。**30162・30163**はカシの柾目取り材を用いた幅広の諸手鍬で、外側に円形台の着柄隆起部を造り出し、円形の着柄孔を穿っているが、刃部は欠失し

ており、遺存長22.9㎝・28.1㎝、遺存幅15.9㎝・17.2㎝、柄孔最大径4.8×４㎝・3.3㎝、最大厚2.5㎝・３㎝を測る。**30161**はカシの柾目取り材を用いた方形着柄孔をもつ直柄三又鍬で、頭部から右刃にかけて欠失し、乾燥のため圧縮変形している。頭部端は面取り加工を加え平面形コの字形に仕上げ、着柄孔は長さ5.1㎝、幅４㎝前後で、中央刃の横断面形は六角形を、左刃は五角形を呈すると考えられる。遺存長40.5㎝・最大幅9.9㎝・最大厚1.7㎝を測る。**30165**は広葉樹の板目取り材を用いた泥除けで、着柄部で半分に折れ、片方は欠失している。火で炙られたと考えられ器表は軽く炭化している。遺存長16.8㎝、最大幅26.7㎝、最大厚1.7㎝を測る。**30164**はクヌギ？の柾目取り材を用いた杁（Fig.114）で、内側に円形台の着柄隆起部を造り出し、円形の着柄孔を穿っているが両端は欠失している。着柄孔を中心として大きく内湾しており、着柄孔が背に接していること、諸手鍬の内湾する型は幅狭となるが本製品は幅広であることなどから杁とした。器長12.9㎝、遺存幅36.3㎝、最大厚4.3㎝を測る。

30167は広葉樹の芯持ち材を用いた竪杵（Fig.115）で、握部中央に算盤玉状の造り出しをもち、搗部端は平坦に近い凸レンズ状をなし、使用痕がみられるが、搗部の器面には製作時の削り加工痕が明瞭に残っている。遺存長72.7㎝、搗部最大径7.8×6.7㎝、握部最大径約7.8×5.8㎝、握部最小径3.9×2.7㎝を測る。

紡織具として、布巻具の可能性がある製品（Fig.115）が出土している。**30166**は広葉樹の芯持ち材を用い、両側に先端を面取り加工により三角形にし、付け根を横断面形長方形に仕上げた造り出しをもち、体部は丁寧な加工により横断面形が四突起となる特異な形に仕上げている。遺存長53.4㎝、最大幅7.25㎝、最大高4.3㎝を測る。

楽器として、板目取り材を用いた**30189**の琴（Fig.115）がある。痛みがあり、欠失部もあるため全体の形状はわからないものの片方端部には２突起の造り出しがみられる。遺存長20.9㎝・最大幅4.7㎝・最大厚0.9㎝を測る。

容器類は、広葉樹を用いた**30188**の２点の赤漆塗布の高杯（Fig.115）がある。１点は軸部から脚にかけて遺存している製品で、軸部から脚裾に移る間に円盤状をなす造り出しがあり、部分的な赤色顔料の遺存から杯部の内側および器表に赤漆を塗布していたといえる。遺存高11.5㎝、脚部円盤径6.2㎝、脚部最小径2.05㎝を測る。もう１点は裾部の破片で、遺存厚0.2～0.9㎝を測り、表裏の器面には赤漆を塗布しており裾部でなく杯部の可能性もある。この２点は同一個体と考えられ、長崎県里田原遺跡・原の辻遺跡、佐賀県石木中高遺跡、福岡市比恵遺跡の弥生時代前期後半に出土例がある赤・黒の顔料を使い幾何学的な彩色を行った優美なワイングラス状をなす高杯とは別型で、赤色顔料のみをつかった福岡市拾六町平田遺跡出土例と同一型のものである。

建築材として、広葉樹の芯持ち材を用いた**30168**の柱材（Fig.118）がある。枝分かれ部を利用しＬ字状に受け部を造り出しており、遺存長72.2㎝、最大幅17.4㎝、最大厚10.4㎝を測る。

以上の木製品は、本溝出土土器から弥生時代前期中頃に近い前期後半のものであるが、少なくとも**30161**は弥生時代後期以降の上部遺構の遺存混入品と考えられる。

SD235（Fig. 117　PL. 147）

弥生時代前期と考えられる本溝からは、農具の鍬類が出土した。**30153**は広葉樹の板目取り材を用いた諸手鍬未製品？で、中央部の幅狭となった所の中央を肥厚させ円形着柄孔をもち、その横に４×2.4㎝を測る長方形孔を穿っているが両端の刃部は造り出していない。着柄孔を穿っていることから農具の杁や板目取り材を用いていることなどから農具以外の製品の可能性もある。器長37.4㎝、遺存幅23.8㎝、最大厚2.9㎝を測る。**30154**はカシの柾目取り材を用いた平鍬未製品で、径3.5㎝を測る円形着柄孔を肥厚部に穿っているが、刃部は造り出していない。未製品としたが平鍬製品と工具の片刃石

斧柄の製品・未製品の可能性もある。器長26.9cm、幅8.7cm、最大厚2.4cmを測る。

SK244（Fig. 117・118　PL. 147）

弥生時代前期と考えられる本溝からは、農具の諸手鍬、漁労具の櫂、建築材の板材が出土した。**30156**はカシの柾目取り材を用いた諸手鍬で、外側中央に円形台の着柄孔隆起部をもち、径3.3～3.8cmを測る着柄孔を穿っているが両端の刃部は欠失している。遺存長23.6cm・幅16.7cm、最大厚2.5cmを測る。**30157**はカシの柾目取り材を用いた櫂で、柄部は横断面形を楕円形に仕上げているが端部は欠失し、片面は平にし、他面は中央部が肉厚となる水掻き部は破損後再加工を加え使用している。遺存長54cm、幅7.75cm、最大厚2.1cmを測る。**30158**はシイ？の柾目取り材を用いた板材で、平面形および断面形も長方形をなすが、片方小口は欠失している。壁または床板として使用されたと考えられ、遺存長80.5cm、幅15.4cm、最大厚1.5cmを測る。

SD250（Fig. 116　PL. 149 ,151）

弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭と考えられる本溝からは、建築部材２点が出土した。**30170・30171**は広葉樹の芯持ち材を用いた建築部材で、接点はないが樹種や形状から同一個体と考えられる。前者は縄縛り用の切り込みを入れ頭部を造り出し、後者の端部は杭状に尖らせ、両者の折れ部付近には湾曲させるためと考えられる刃物痕がみられる。同一個体とすると遺存長217.2cm、最大径３×2.6cm、切り込み部径２cm前後を測る。

SX254（Fig. 119）

弥生時代後期後半から弥生時代終末期と考えられる本遺構からは、一木造り平鋤が出土した。**30200**はカシの柾目取り材を用い、抄い部から柄の一部にかけて遺存しているが、柄から握部にかけてと抄い部の左側から刃部にかけては欠失している。遺存長51.1cm・幅12.3cm・最大厚1.8cmを測る。

SD256（Fig. 120 ,121　PL. 152）

本溝からは、農具の鍬類、工具の伐採斧柄未製品、武具の楯、建築材の柱材が出土した。　鍬類は、カシの柾目取り材を用いた直柄鍬類の諸手鍬・二又鍬・又鍬と広葉樹の板目取り材を用いた泥除けが出土している。**30174**は二又鍬で、長さ5.25cm、幅3.3cmを測る長方形着柄孔をもち、頭端部を平面形コの字状に面取り加工を加え、左右の刃部の横断面形は五角形に仕上げているが、両刃とも先端を欠失している。遺存長42.3cm、幅14.8cm、最大厚1.7cmを測る。**30175**は諸手鍬で、一部破損はあるもののほぼ完形である。やや幅狭となった中央外側に径9.5cmを測る円形台隆起部に径3.8cmの円形着柄孔をもち、内湾し、幅広となりながら丸みをもった刃部となっている。器長44cm、幅19.9cm、最大厚13.4cmを測る。**30178**は半円状をなす頭部から体部の中央に円形着柄孔をもち、頭部から又部の縦断面形を八面体に仕上げ、刃部の横断面形が方形をなす又鍬の体部片で、三又鍬か四又鍬。遺存長9.3cm・幅8.5cm・最大厚1.7cmを測る。**30177**は着柄孔がなく、破片であるため全体の形状はわからないが、全体的に内湾し、体部に径0.4×0.5cmや２cmを測る小孔をもっていることから泥除けと考えられる。遺存長14.3cm・幅22.8cm・最大厚0.9cmを測る。**30176**の体部は笠状をなしているが、着柄孔は穿ってないことから泥除け未製品と考えられる。遺存長15.5cm・幅22.75cm、最大厚2.15cmを測る。

工具としては**30180・30181**の太型蛤刃石斧柄未製品がある。前者はカシの芯持ち材を用い、三角に尖った頭からなる石斧着装部を造り出しているが、着装孔は穿ってなく、柄握部端は面取り加工を加えているが、握部は全体的に四面体の面取り加工を加えている段階である。着装部の長さ16.3cm、最大幅12.2cm、最小幅7.9cm、最大厚9.5cm、握部の最大幅12.6cm、最大厚9.4cmで器長約87.6cmを測る。後者はカシの割材を用い、石斧着装部と握部を意識し、削り加工を加え整形しているが、握部の一部には表皮も残っており前者の一行程前の段階といえる。遺存長77.9cm、最大幅10.8cm、最大厚7.2cmを

測る。

武具として**30191**の楯がある。モミ？の板目取り材を用い、縦方向0.6～0.7㎝、横方向0.2～0.6㎝の間隔で径0.2㎝前後の小孔を穿ち、横方向の小孔間には表裏に紐縛痕があり、やや膨らんだ面（図の表面）に赤色顔料の痕跡があり、表面のみ塗布していたといえる。破片２点あり、接点はないものの同一個体である。第４次調査の溝SD112から出土している**30209**も用材・形状から同一個体の可能性が高いといえる。遺存長8.7㎝・7.5㎝・幅3.4㎝・2.9㎝、最大厚0.5㎝・0.5㎝を測る。

建築材としては、**30179**の又柱がある。広葉樹の枝分かれ部を用い、枝分かれ部に削り加工を加え受け部を造り出しているが基部・先端とも欠失している。遺存長49.8㎝・幅18.4㎝・最大厚7.8㎝を測る。

以上の木製品は、本溝出土土器から弥生時代前期中頃に近い前期後半のものであるが、少なくとも**30174**は弥生時代後期以降の上部遺構の遺存混入品と考えられ、**30191**は第４次調査出土の30209と同一個体の可能性が高いこと、モミを用材としていること、全国的な出土例などから弥生時代後期後半から古墳時代初頭のものといえる。

SX257（Fig. 122　PL. 152）

弥生時代前期と考えられる本溝からは、工具の抉入方柱状片刃石斧柄未製品が出土した。**30182**は広葉樹の枝分かれ部を用い、長さ22.7㎝、幅9.3㎝を測る石斧着装用の台部を造り出しているが、着装部は造り出してなく、握部端は面取り加工で仕上げているものの全体的には四面体のままの段階である。器長62.35㎝、握部の幅8.5㎝、最大厚7.5㎝を測る。

２）下月隈Ｃ遺跡第４・５次調査出土木製品について

第４・５次調査では、縄文時代終末期の突帯文土器期から弥生時代前期中頃に近い後半期、弥生時代後期後半から終末期、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭、古墳時代後期、古代の各時代・時期の多種多様な木製品が出土した。ここでは、建築材や杭など構築部材を除いた木製品について、比較的まとまった出土量がある次の２時期について、留意点を述べまとめとする。１はSD114に代表される弥生時代前期中頃に近い後半期で、これに突帯文土器期までのものを含めてⅠ期とする。２はSD104に代表される弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭のもので、SK251などのように弥生時代後期後半と時期限定できるものも含めてⅡ期とする。

Ⅰ期の木製品

SD114の他、第４次ではSD104･108の後世の遺構から、第５次ではSD235･256、SK244、SX257から農具・漁労具・工具・紡織具・容器類・楽器が出土した。

農具は出土木製品の62.5%を占め、第４次報告で杁とした**30191**を諸手鍬・**30136**を平鍬と訂正すると、起耕具の鍬類10点、整地具の杁１点、脱穀具の竪杵１点で製品は12点で鍬類未製品３点となる。鍬類は出土農具の83%（未製品を合わせると86%）を占め、内訳は幅広で着柄孔隆起部を外側にもつ諸手鍬が５点と最も多く、幅狭で着柄孔隆起部を内側にもつ諸手鍬１点、着柄隆起部をもつ平鍬１点、肥厚した円形着柄孔をもつ又鍬１点、泥除け２点である。杁は内側に着柄隆起部をもつ型態で、竪杵は握部中央に算盤玉状の造り出しをもつ型態である。

農具の他に、漁労具として櫂１点、工具として太型蛤刃石斧柄未製品２点と片刃石斧柄未製品１点（出土木製品の12.5%）、紡織具として布巻き具１点、容器類として高杯２点と大型の盤１点、楽器として琴１点がある。高杯２点は同一個体の可能性が極めて高いといえ、赤色顔料のみをつかった福岡

市拾六町平田遺跡出土例と同一型態のものである。

Ⅱ期の木製品

SD104の他、第４次のSD103･105･108･112･116、SK113･119･126･142、第５次のSK243･245･251、SX254から出土している。他に遺物取り上げおよび整理の段階でSD114･256のⅠ期の遺構に混入して出土した**30174・30161・30191**がある。建築材以外の木製品は、農具・工具・紡織具・家具類・楽器・履き物・容器類・什器・狩猟具・武具・運搬具・その他で、製品116点、鍬類の組合せ部品３点、未製品５点（農具３点、工具・容器類各１点）がある。

農具が71点（出土木製品の61%）と最も多く、なかでも鍬類48点で68%・鋤類13点で18%と起耕具が農具の86%を占めており、整地具は杷（サラエ）１点、脱穀具は竪杵４点と砧１点、補助具として槽４点がある。鍬類は二又鍬が31点で出土鍬類の65%を占め、三又鍬９点で19%、平鍬４点で８%、不明鍬類４点となり、着柄方法で分けると直柄鍬類が31点で64.5%を占め、反柄鍬類が７点で14.5%、直柄か反柄か識別できない鍬類10点で21%となる（第４次の**30166**は槌、**30141～30143・30145**は大足として報告したが、前者を砧、後者を背負子と訂正する）。鍬類に視点を当てると、方形着柄孔をもつ直柄鍬類が主に製作使用され、反柄鍬類は存在するが曲柄鍬類は存在していないと考えられる。また、鋤類は13点（柄も１点としてカウント）出土しているが、三又鍬が少ないこと、二又鍬が多いことからみていくと、本遺跡周辺は少なくとも弥生時代後期前半までに開墾・開田が終わり、安定した水稲耕作が行われていたと考えられる。鍬類補助具として、着装組合せ具１点、泥除け２点があり、直柄二又鍬・泥除け・一木造り平鋤各１点の未製品がある。

工具は鋳造鉄斧柄１点・槌３点（**30132**は竪杵とダブルカウント）、紡織具として紡錘車・布巻き具？各１点があり、工具・紡織具は６点（出土木製品の５%）で、他に槌未製品１点がある。

家具類は、案３点・椅子２点（第４次の**30151**を器種特定）と製品の全体像はわからないが組合せ部材の台１点・板材12点・角材１点（第４次**30193**）を家具類とすると19点となり、楽器の琴１点があり、家具類・楽器20点（出土木製品の17%）となる。琴は弥生時代のものとしては最大級のものである。

容器類は蓋３点・鉢５点（方形２点、ボール状１点、高脚１点、大型１点）が、什器として杓文字状木製品１点・火鑽臼１点があり、容器類・什器10点（出土木製品の９%）となり、他に容器類未製品１点（第４次30154を特定）がある。第４次の**30167・30188**は優品である。

狩猟具として木鏃１点、武器として棍棒？１点、武具として楯１点（第４次**30209**と第５次**30191**同一個体としてカウント）で、狩猟具・武器・武具は３点（出土木製品の３%）となる。楯は細片となっているが量・各部位があり、保存処理後の接合復元により全体形がわかる可能性がある。

以上の他、履き物として沓２点、運搬具として背負子２点（第４次**30141～30143・30145**を１点としてカウント）、その他として加工材２点の合わせて６点（出土木製品の５%）がある。

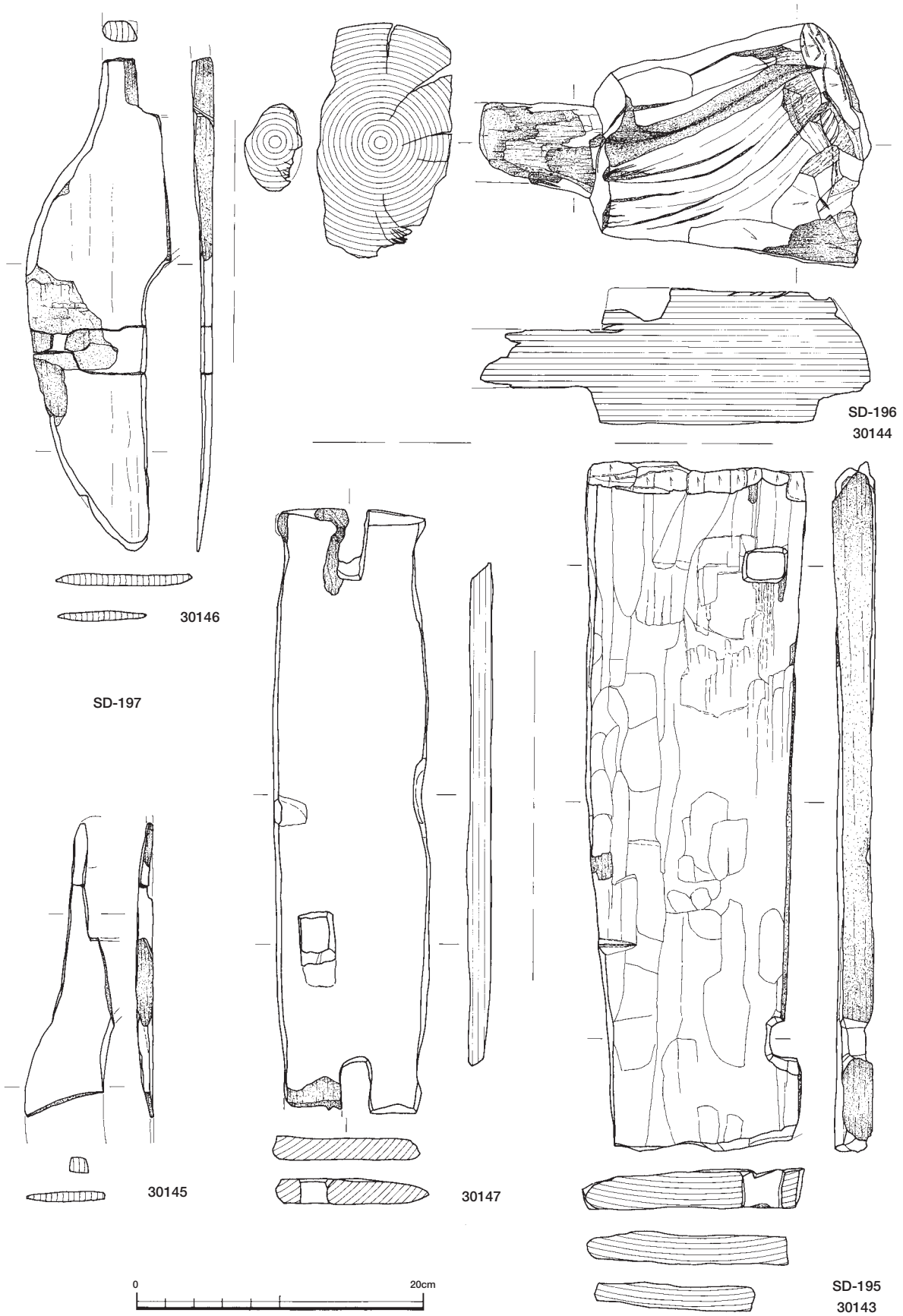


Fig.100　溝SD195～197出土木製品実測図（1/4）

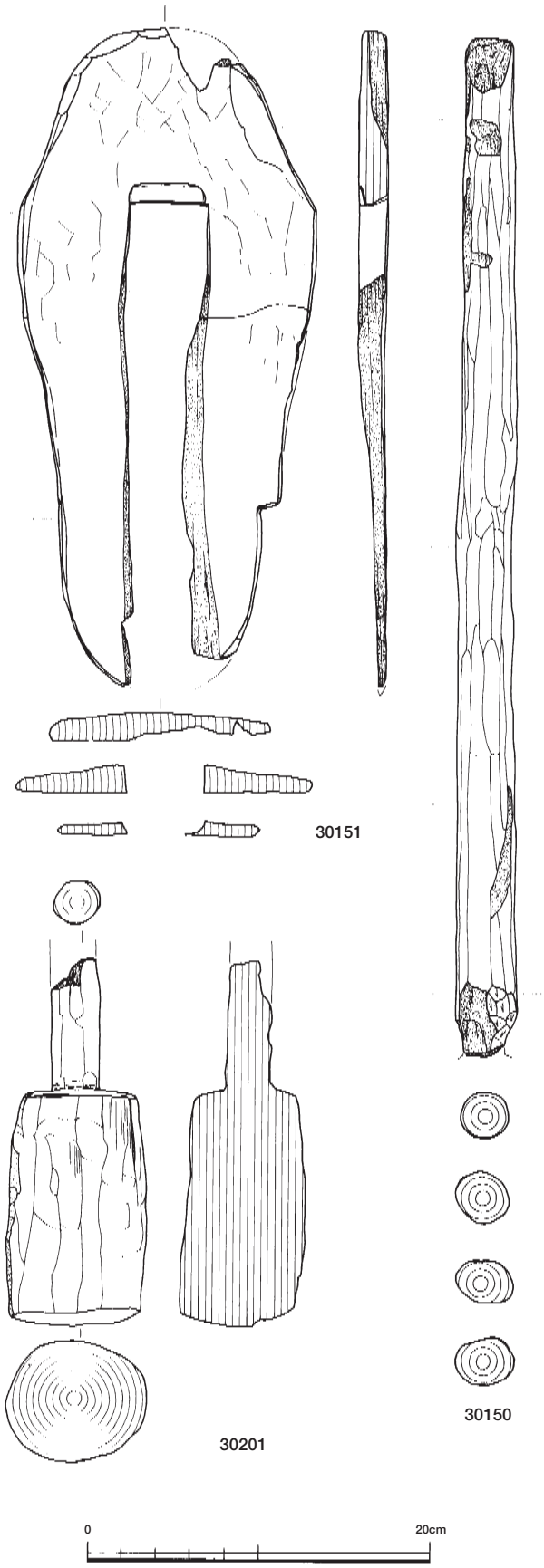


Fig.101　溝SD199出土木製品実測図（1/4）

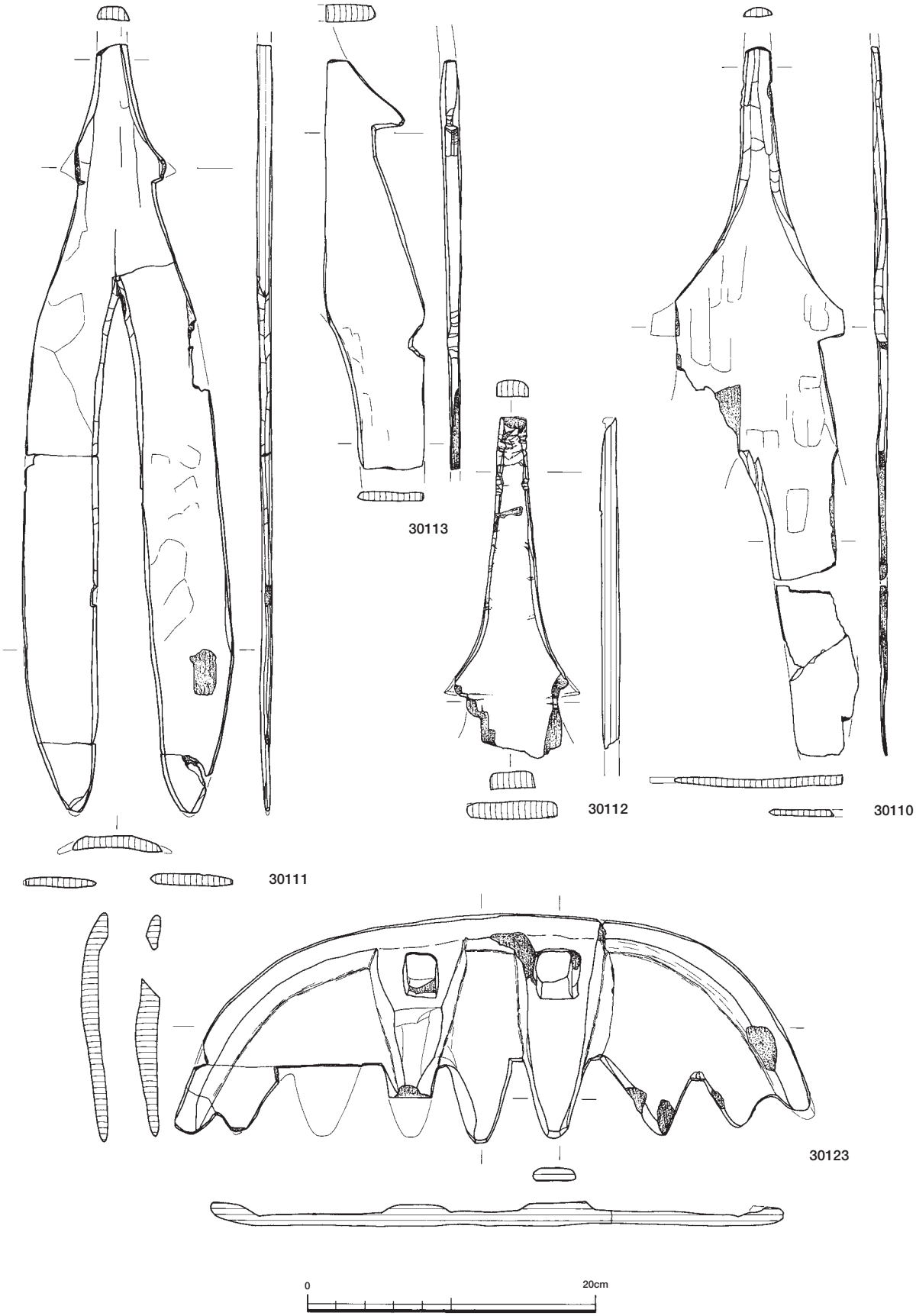


Fig.102　溝SD104出土木製品実測図1（1/4）

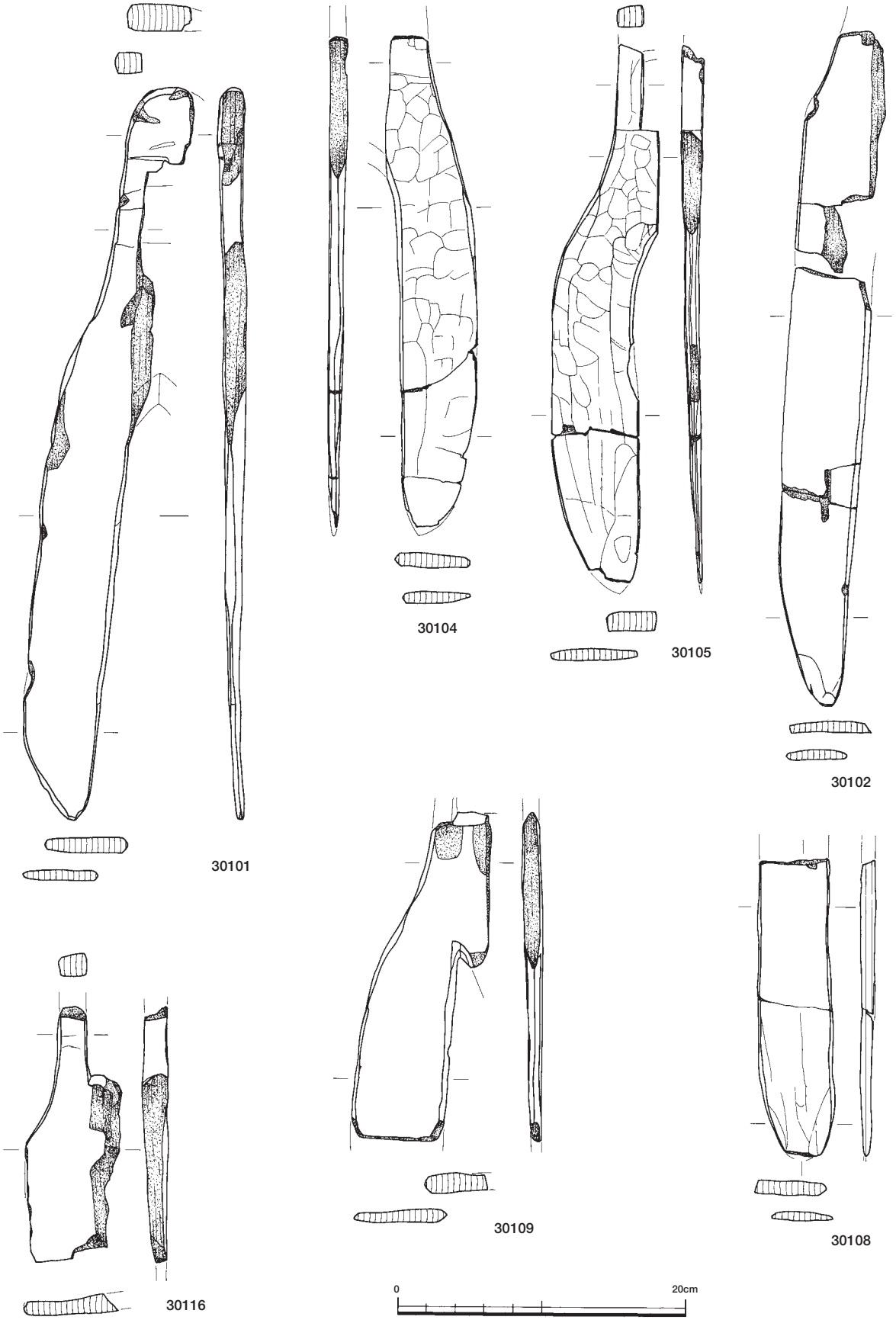


Fig.103　溝SD104出土木製品実測図2（1/4）

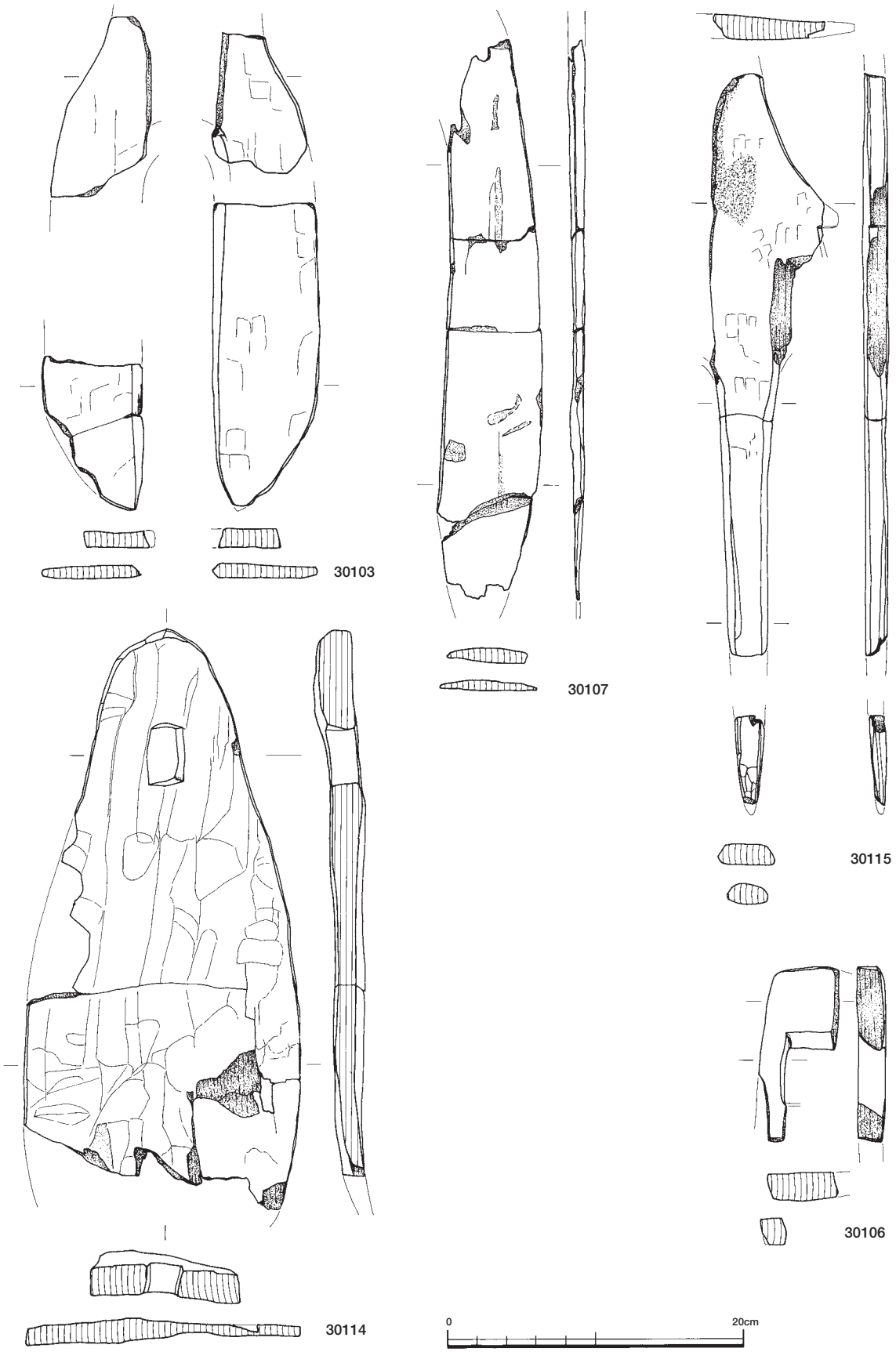


Fig.104　溝SD104出土木製品実測図3（1/4）

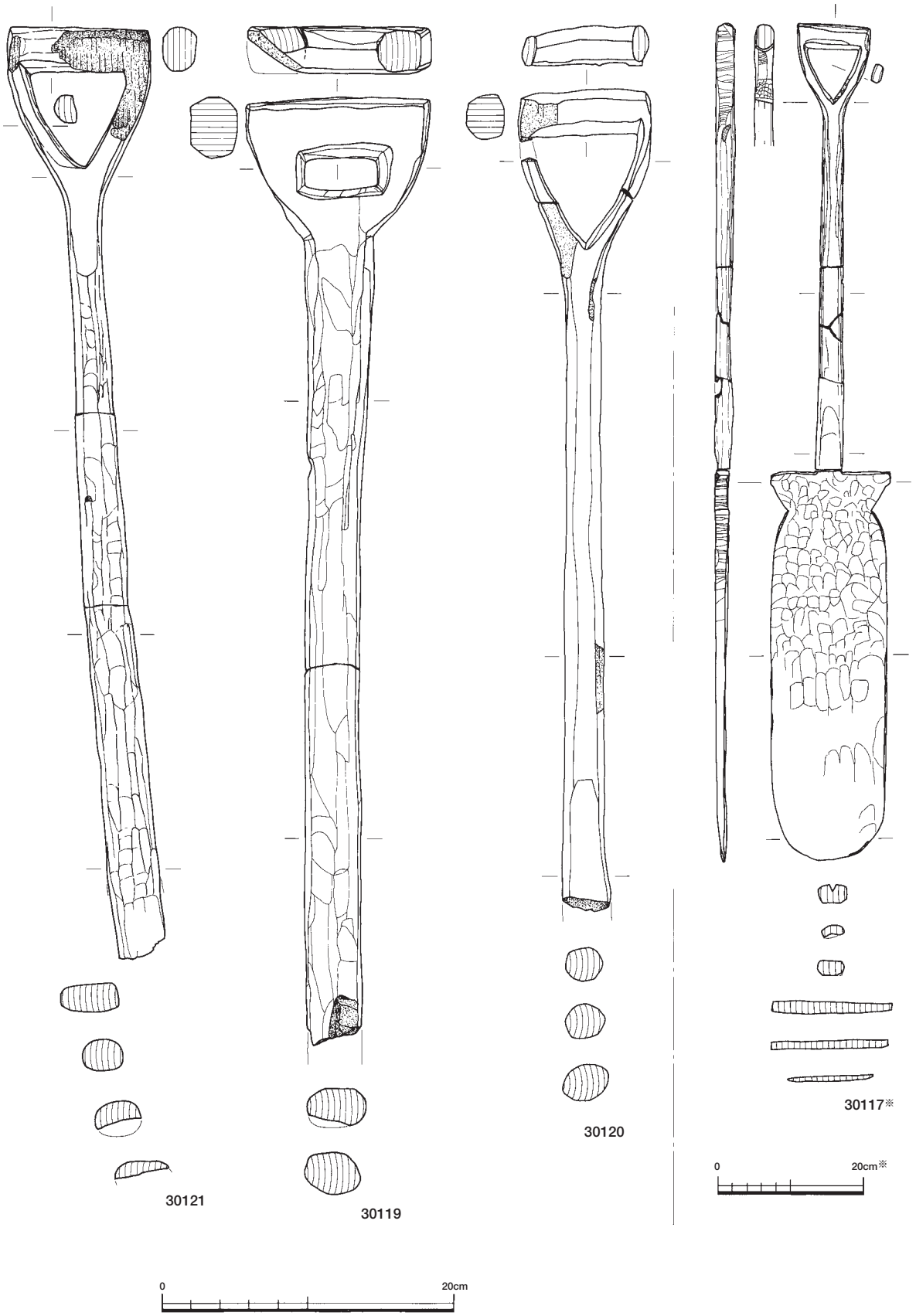


Fig.105　溝SD104出土木製品実測図4（1/4・1/8※）

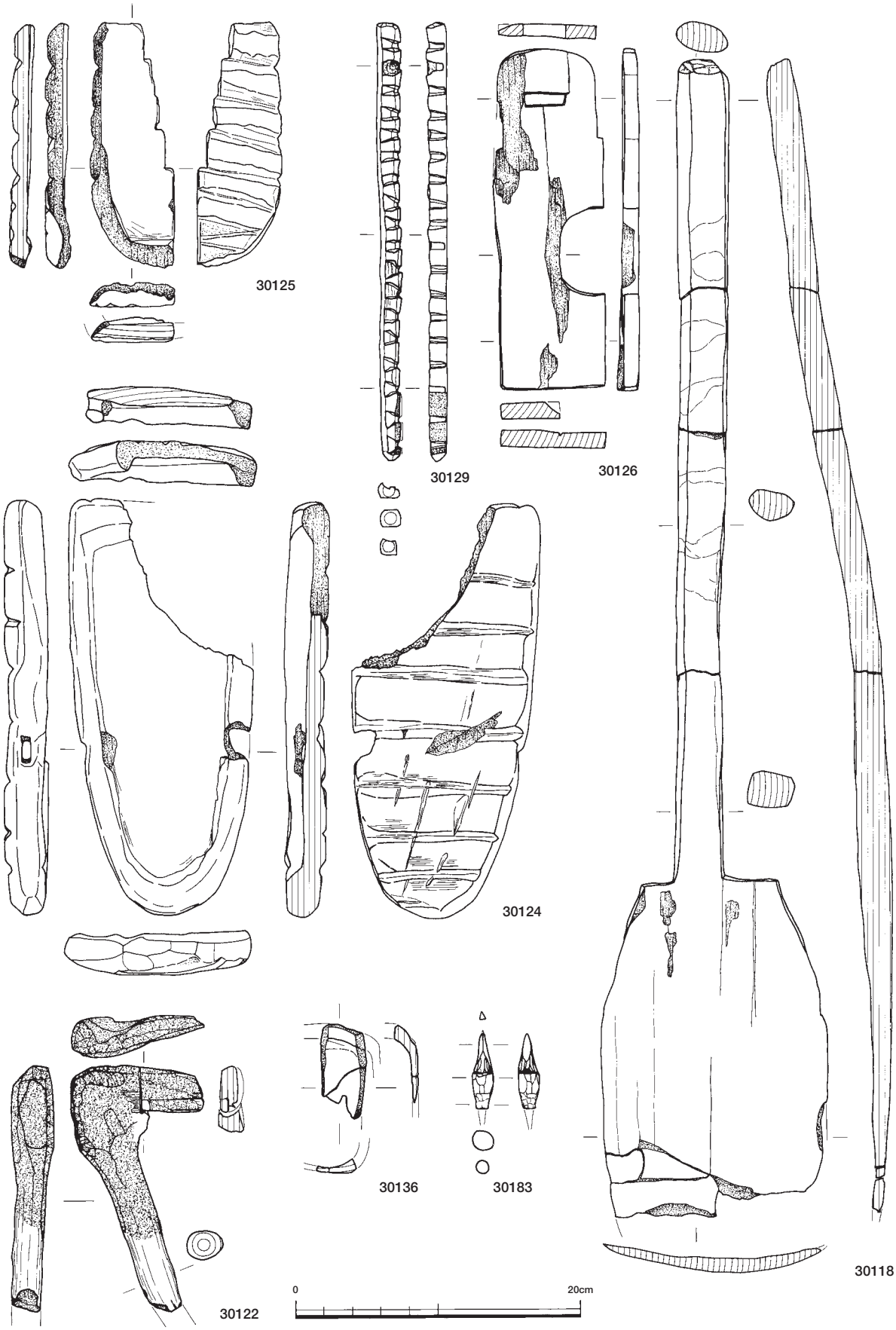


Fig.106　溝SD104出土木製品実測図5（1/4）

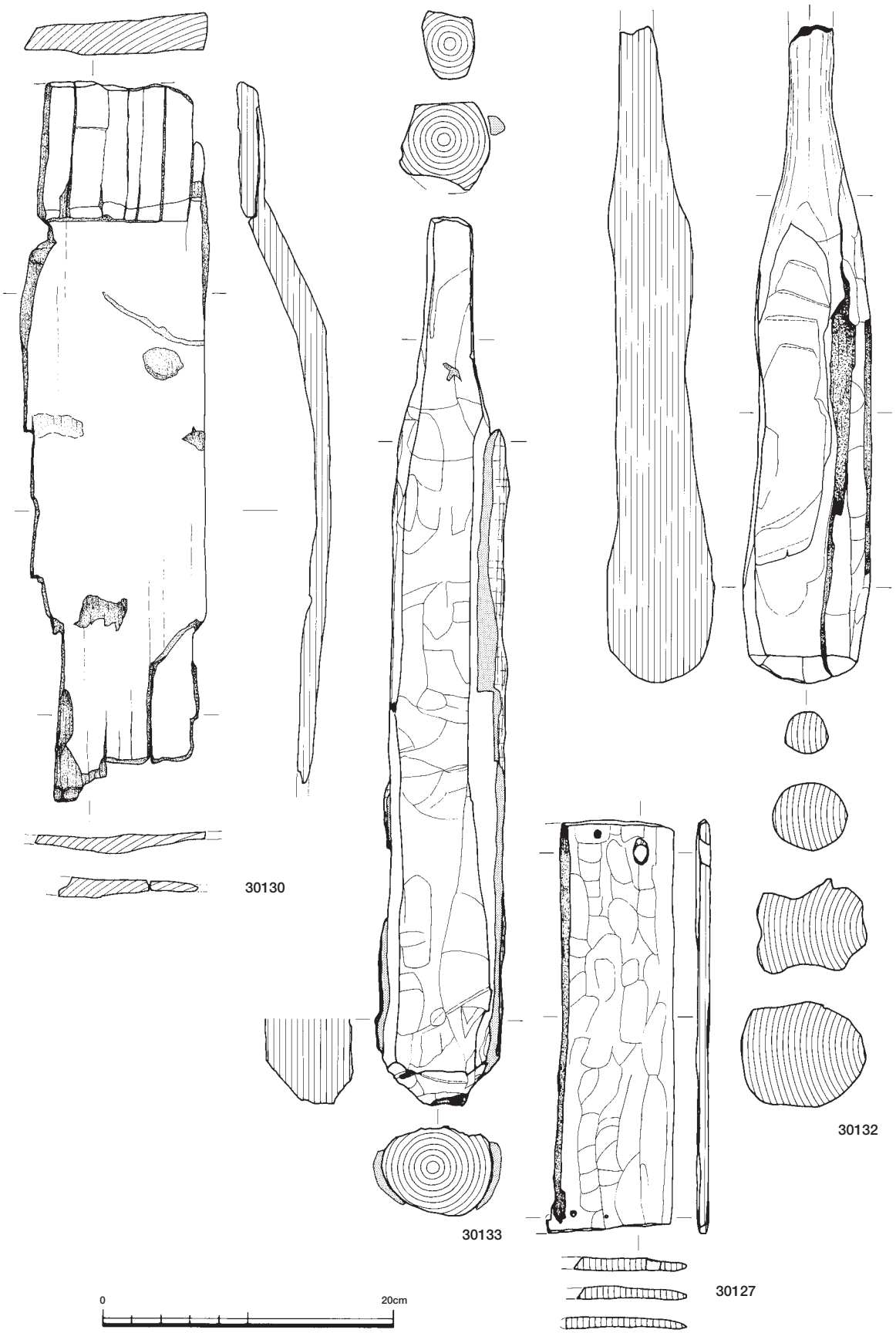


Fig.107　溝SD104出土木製品実測図6（1/4）

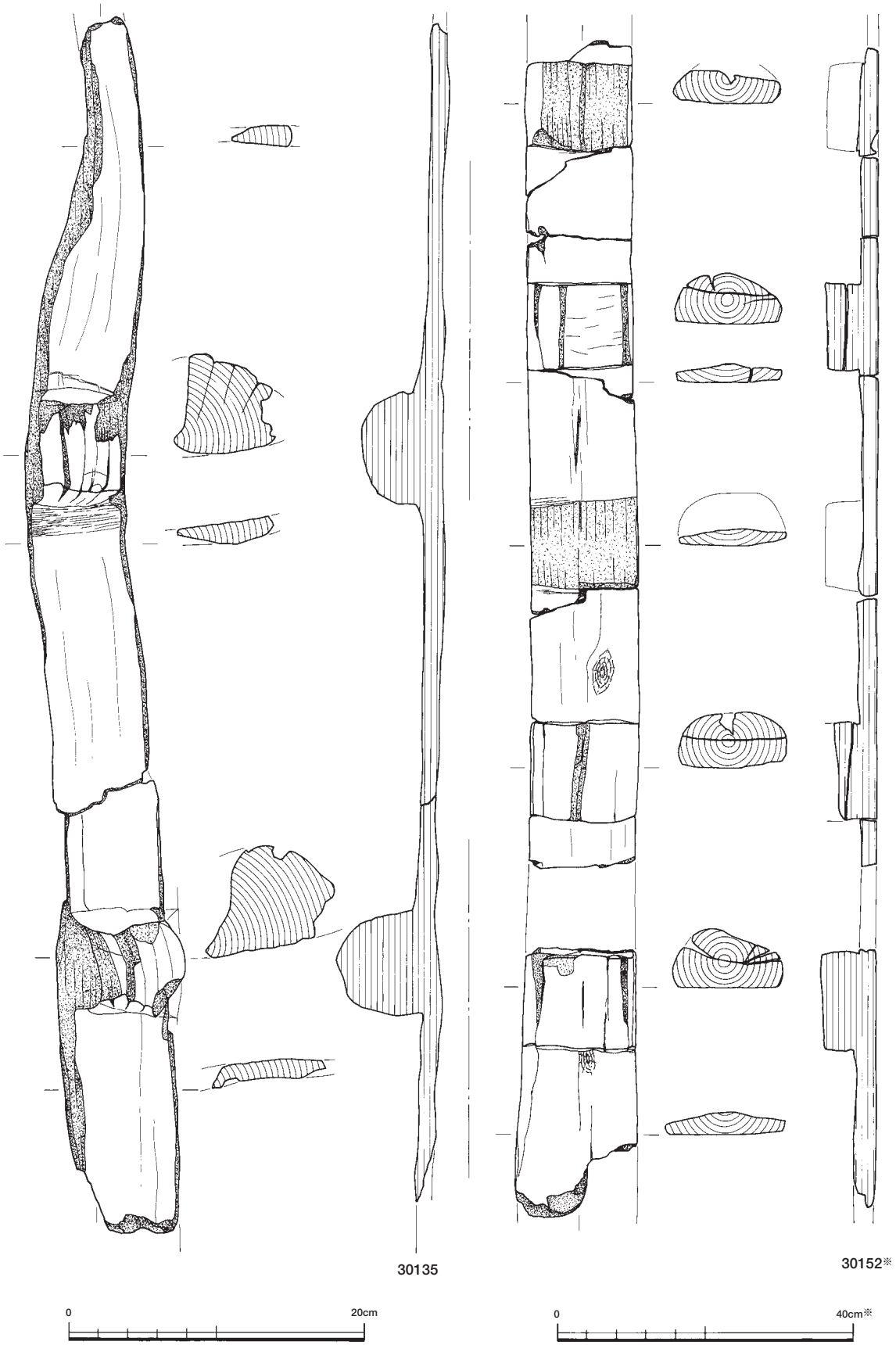


Fig.108　溝SD104出土建築部材実測図7（1/4・1/8※）

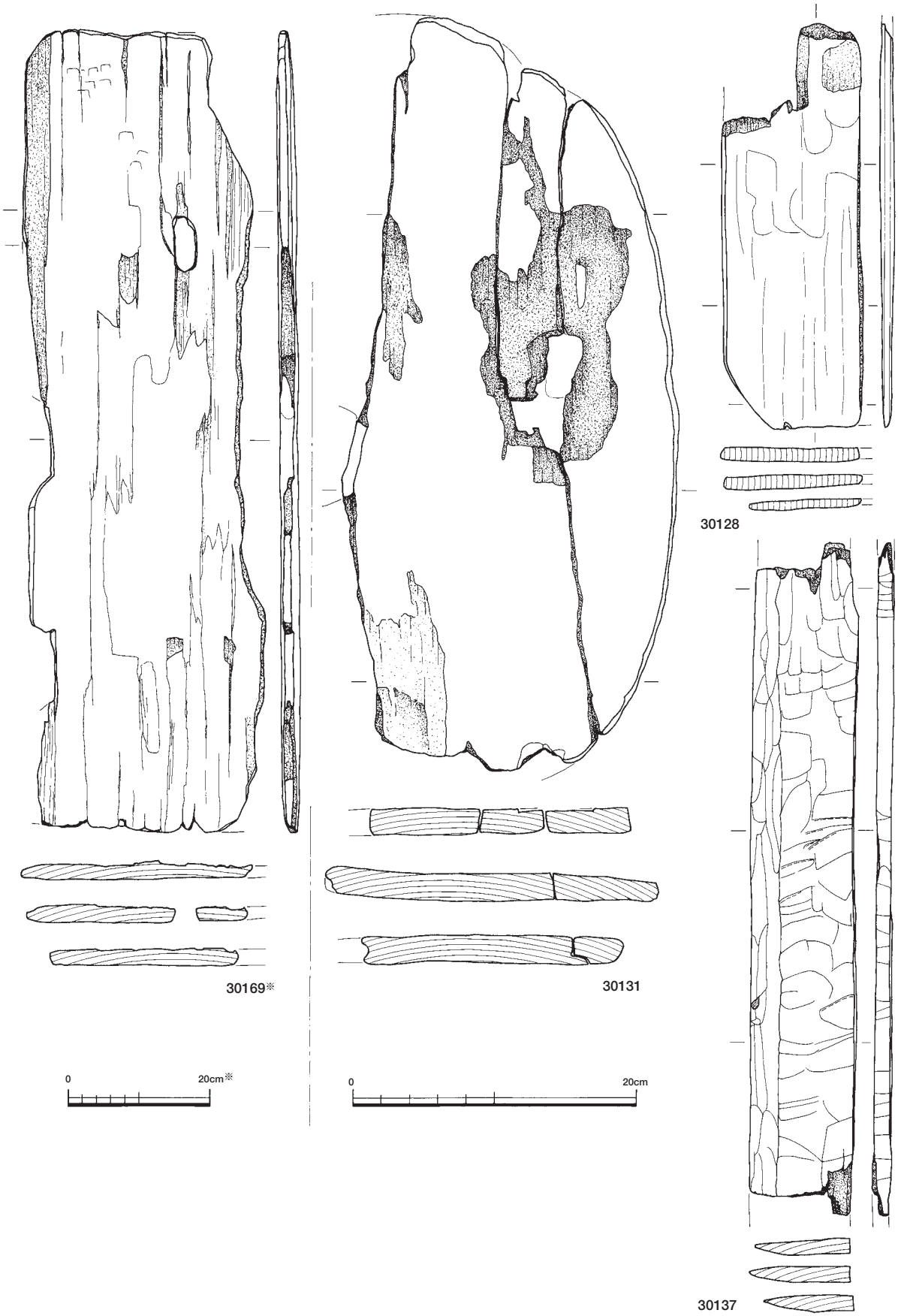


Fig.109　溝SD104出土建築部材実測図8（1/4・1/8※）

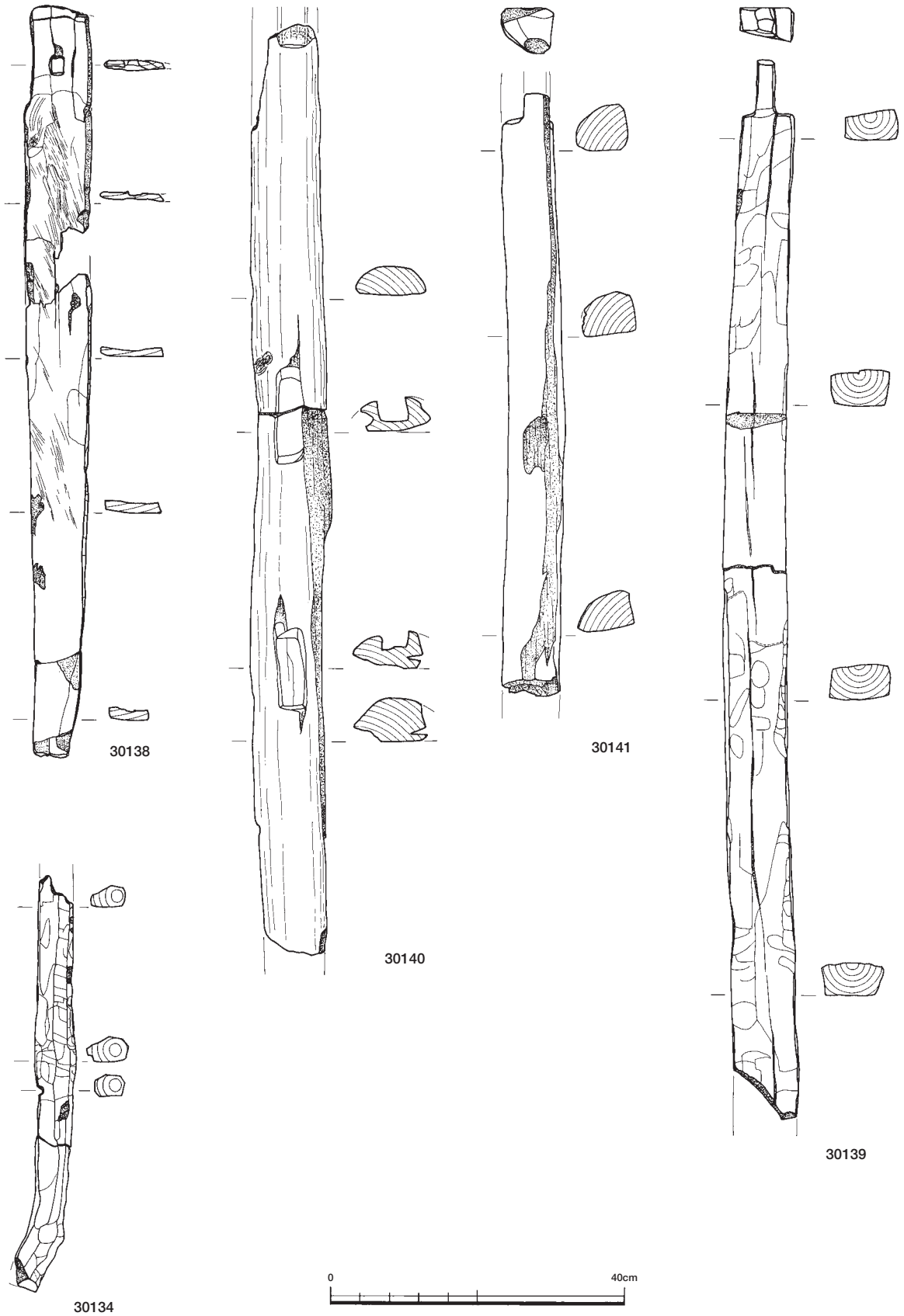


Fig.110　溝SD104出土建築部材実測図9（1/8）

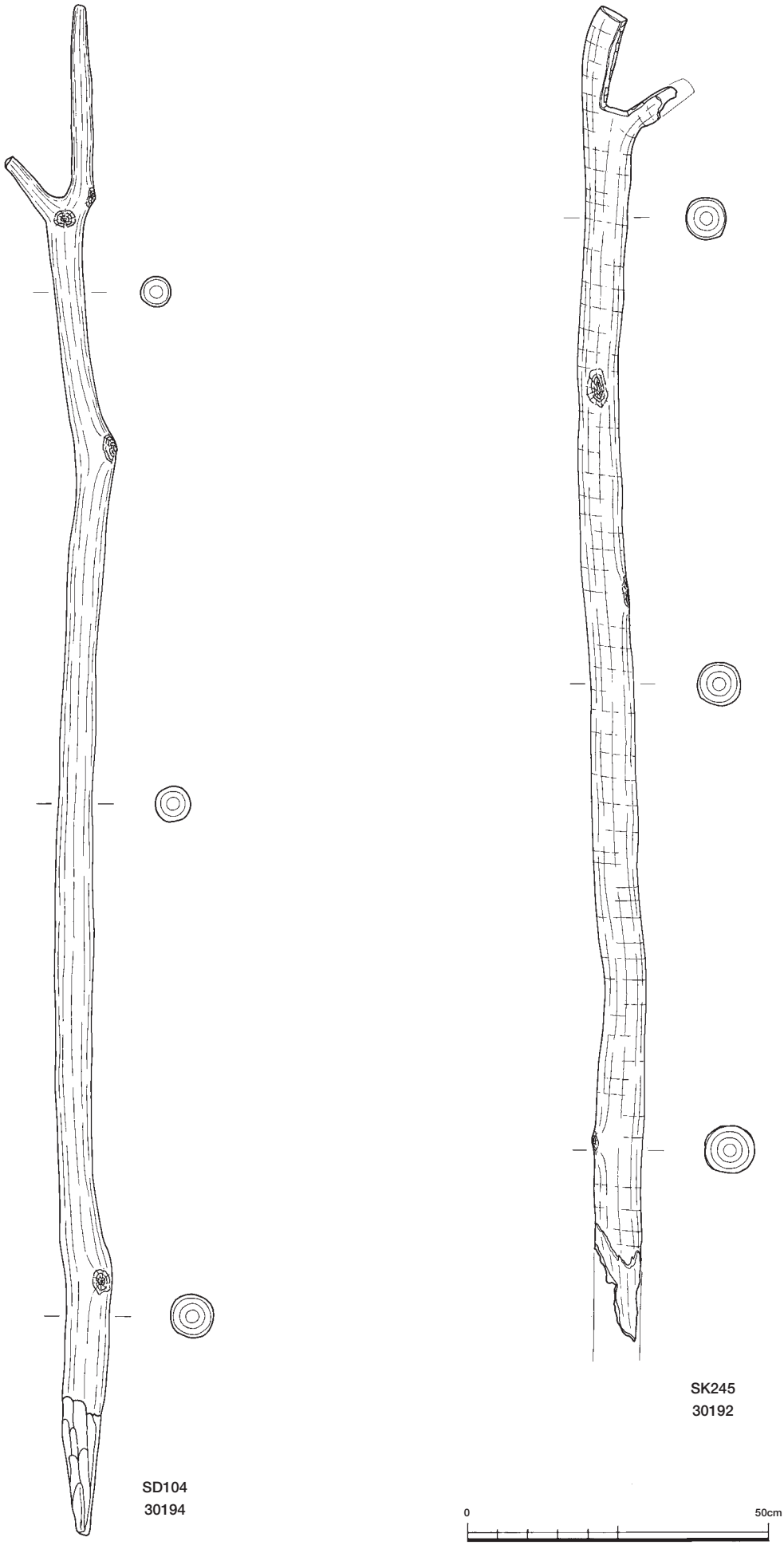


Fig.111　溝SD104，土壙SK245出土建築部材実測図（1/10）

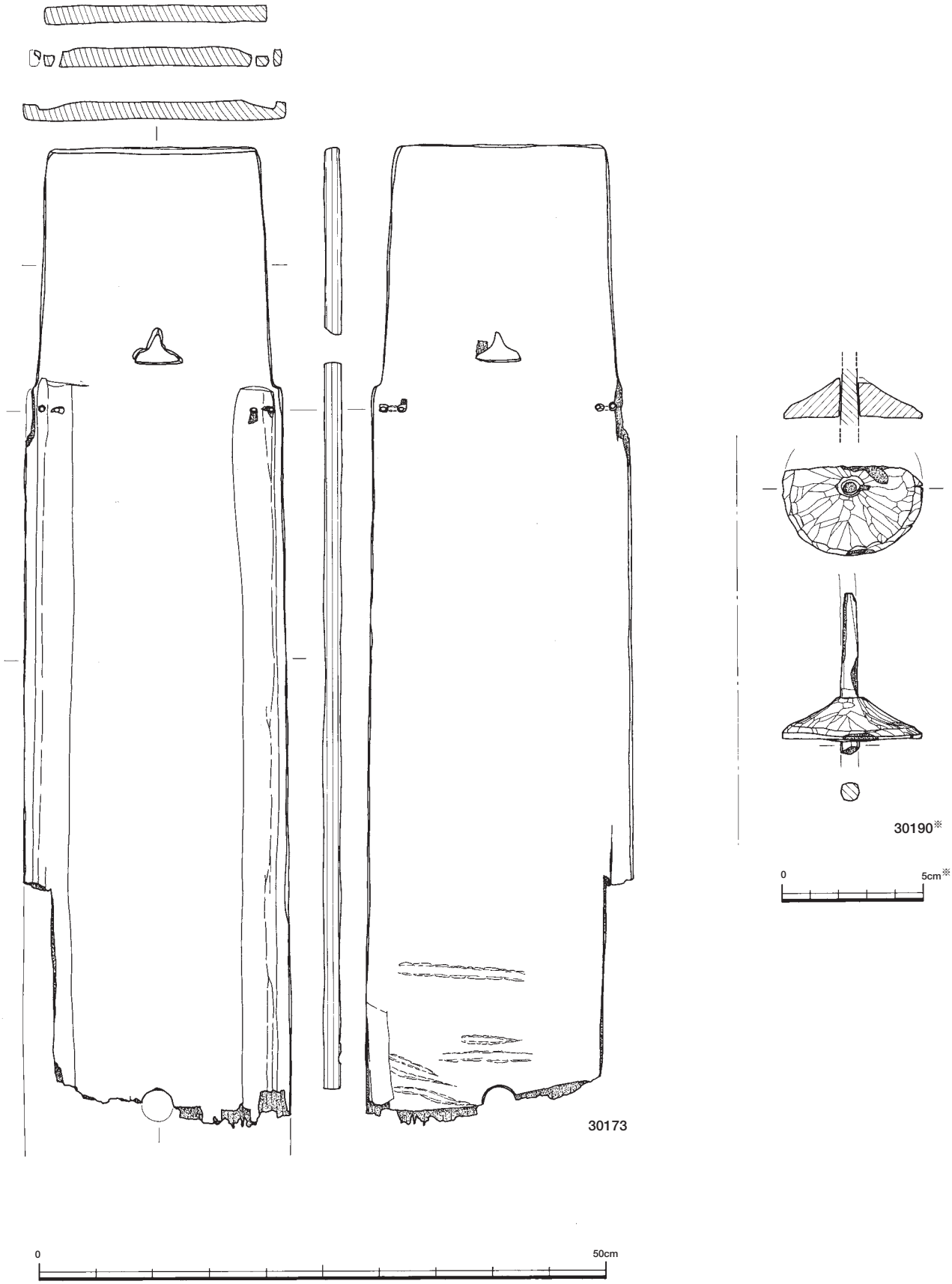


Fig.112　土壙SK251出土木製品実測図（1/2※・1/5）

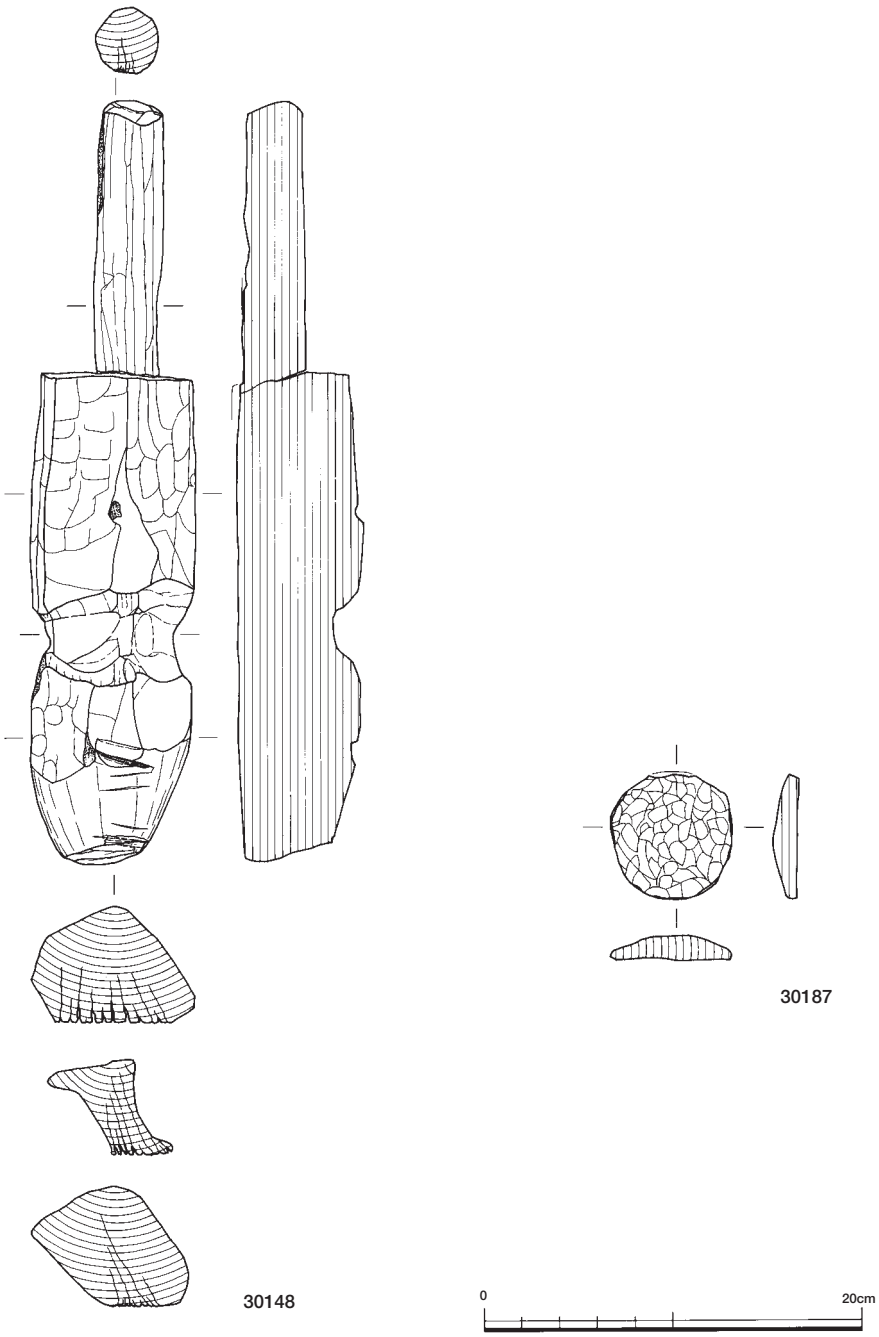


Fig.113　第3遺構検出面出土木製品実測図（1/4）

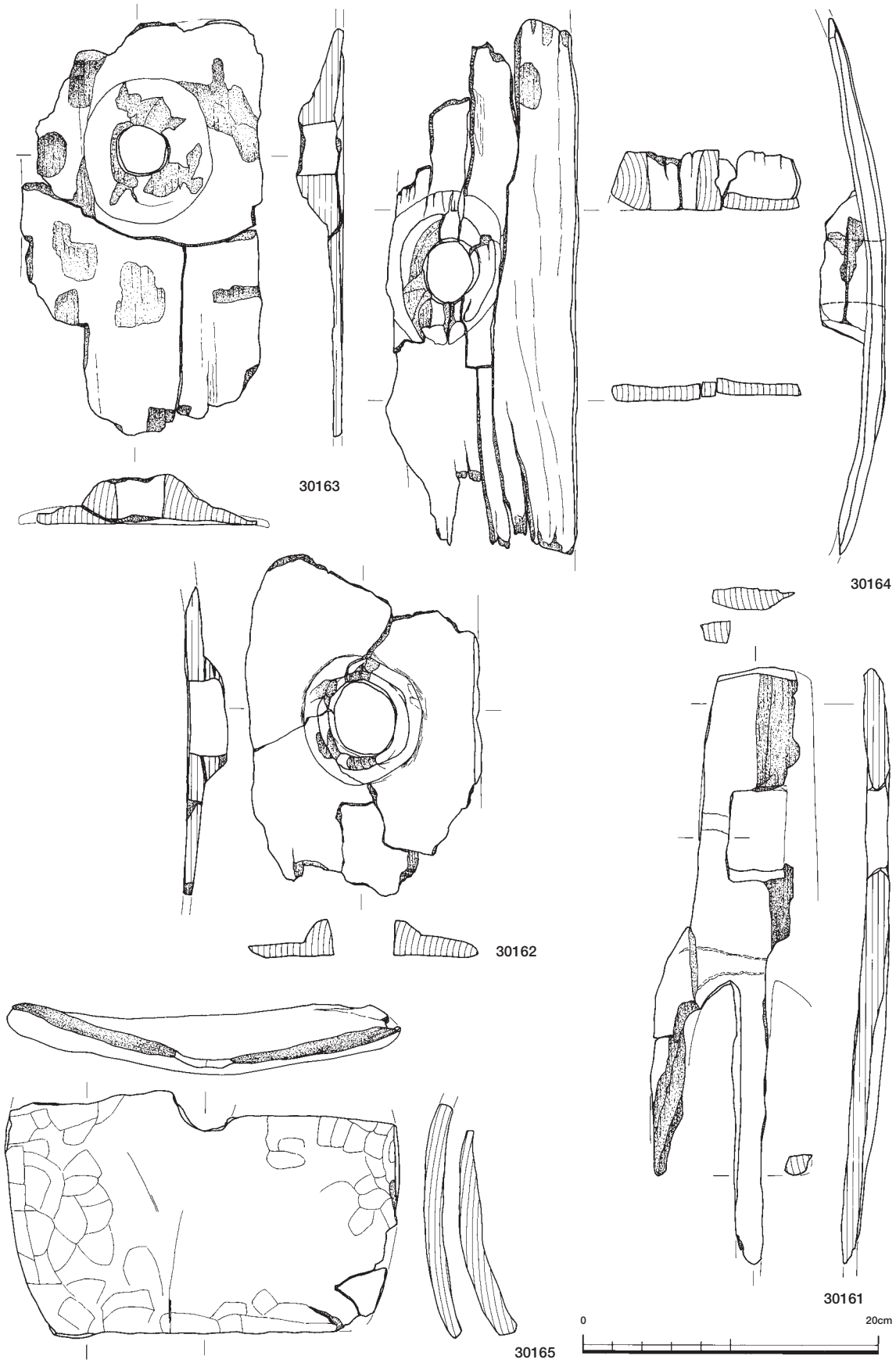


Fig.114 溝SD114出土木製品実測図1（1/4）

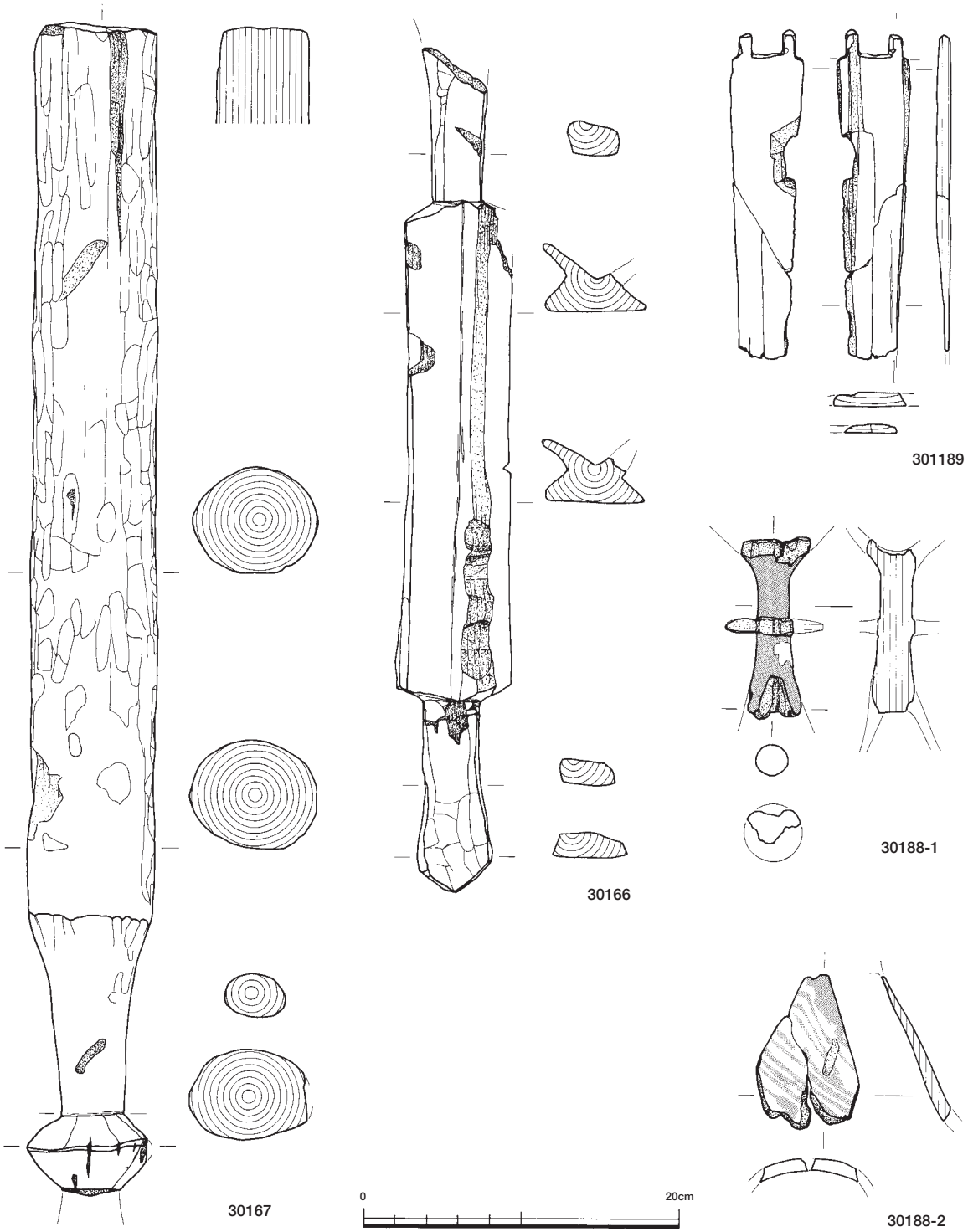


Fig.115　溝SD114出土木製品実測図2（1/4）

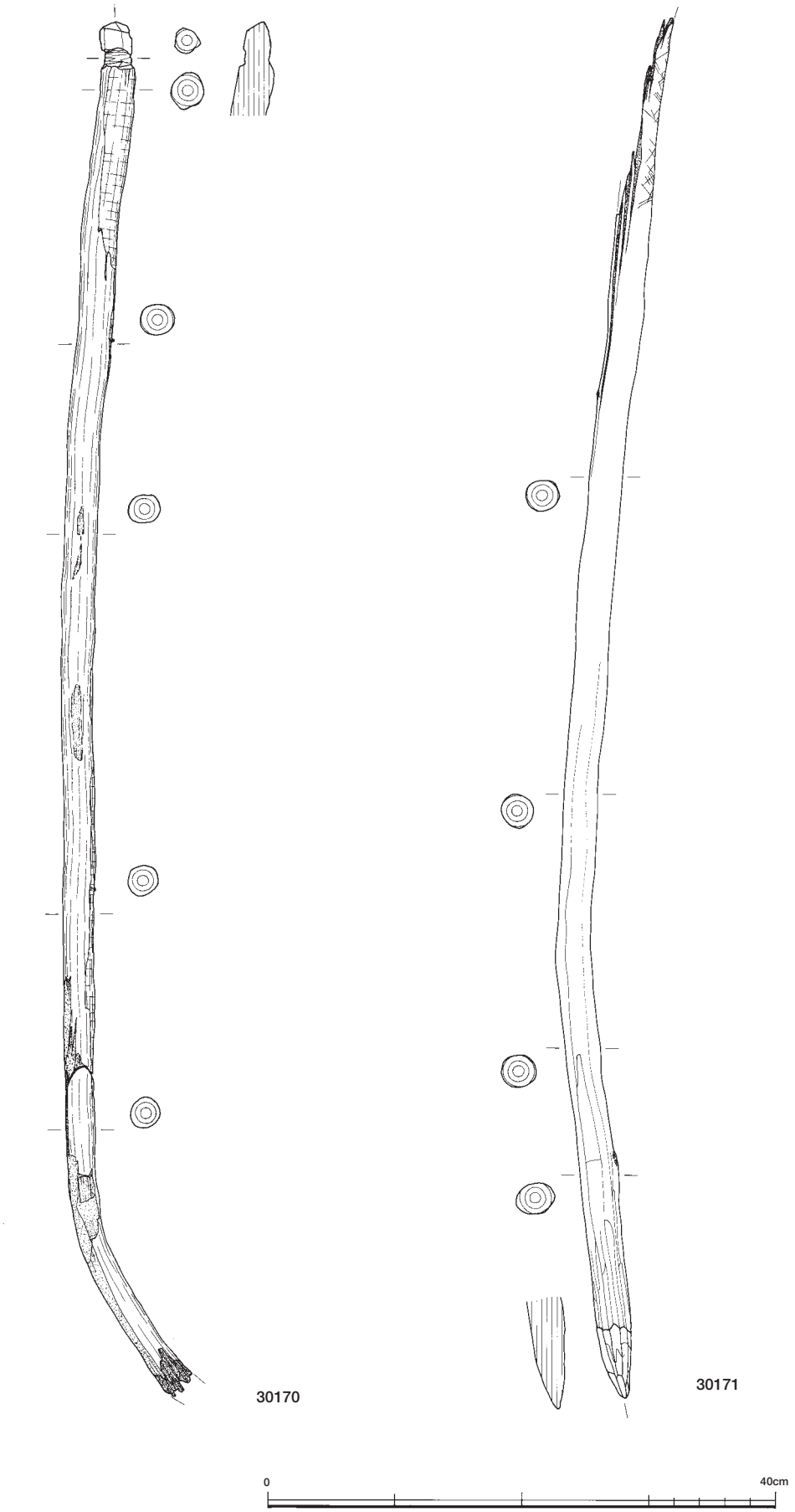


Fig.116　溝SD250出土木製品実測図（1/5）

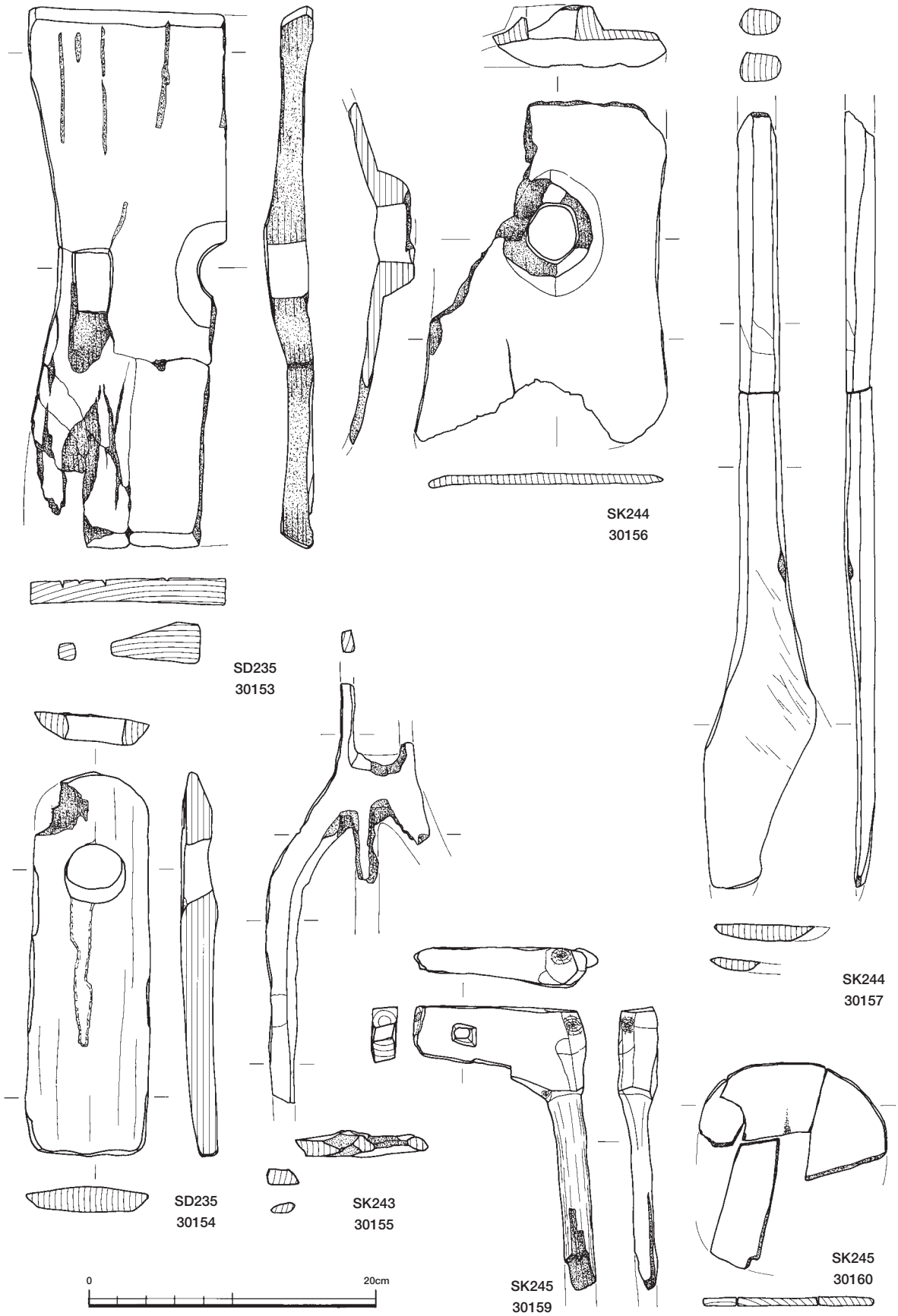


Fig.117　溝SD235，土壙SK243～245出土木製品実測図（1/4）

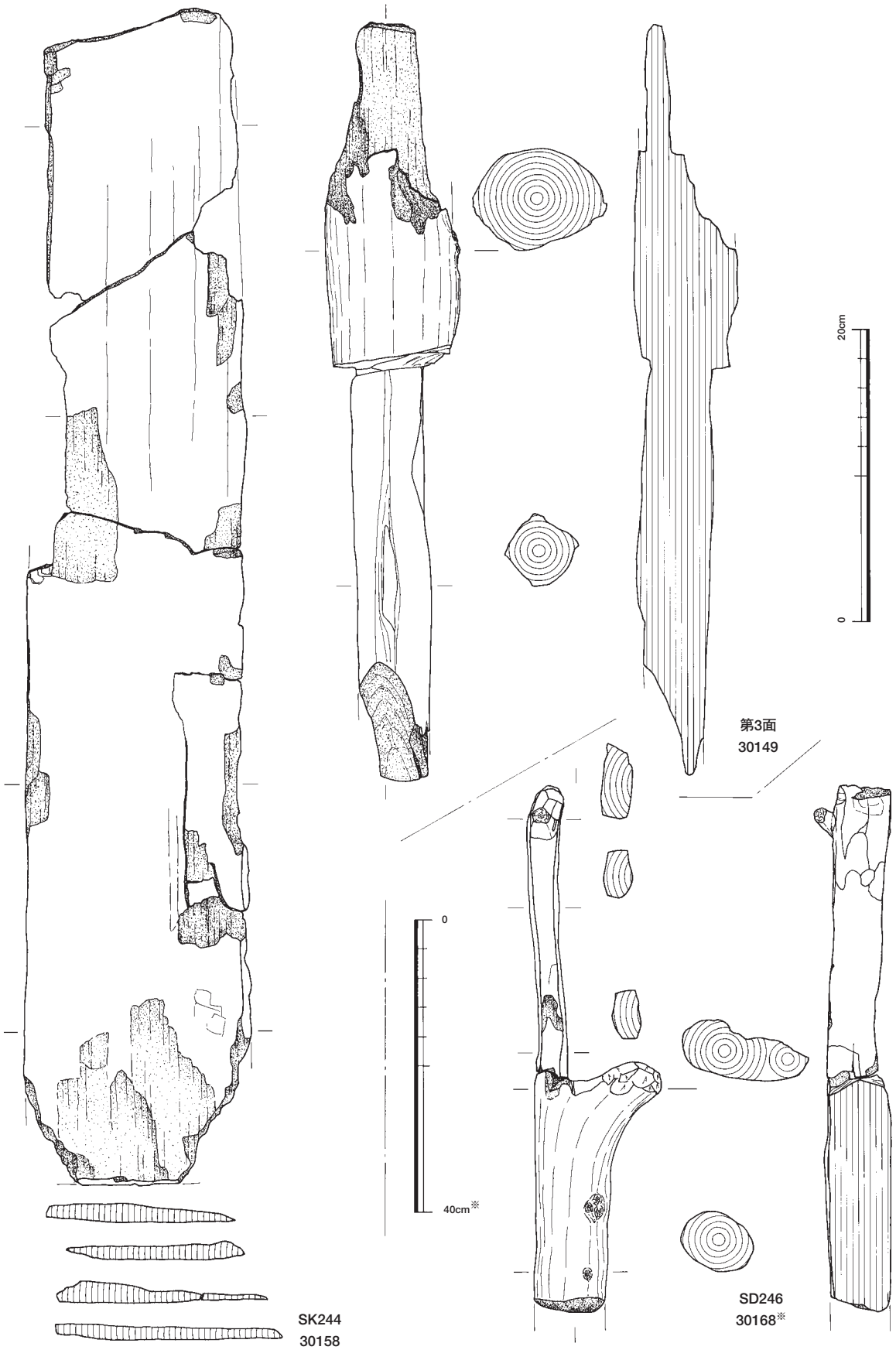


Fig.118　溝SD114，土壙SK244出土建築部材実測図（1/4・1/8※）

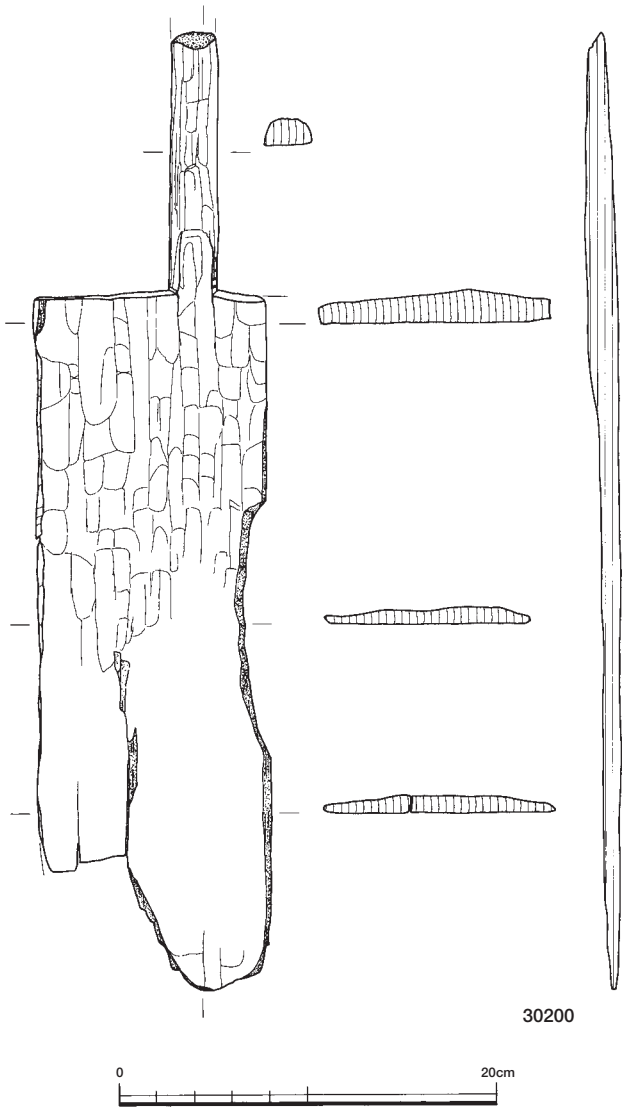


Fig.119　土壙SK254出土木製品実測図（1/4）

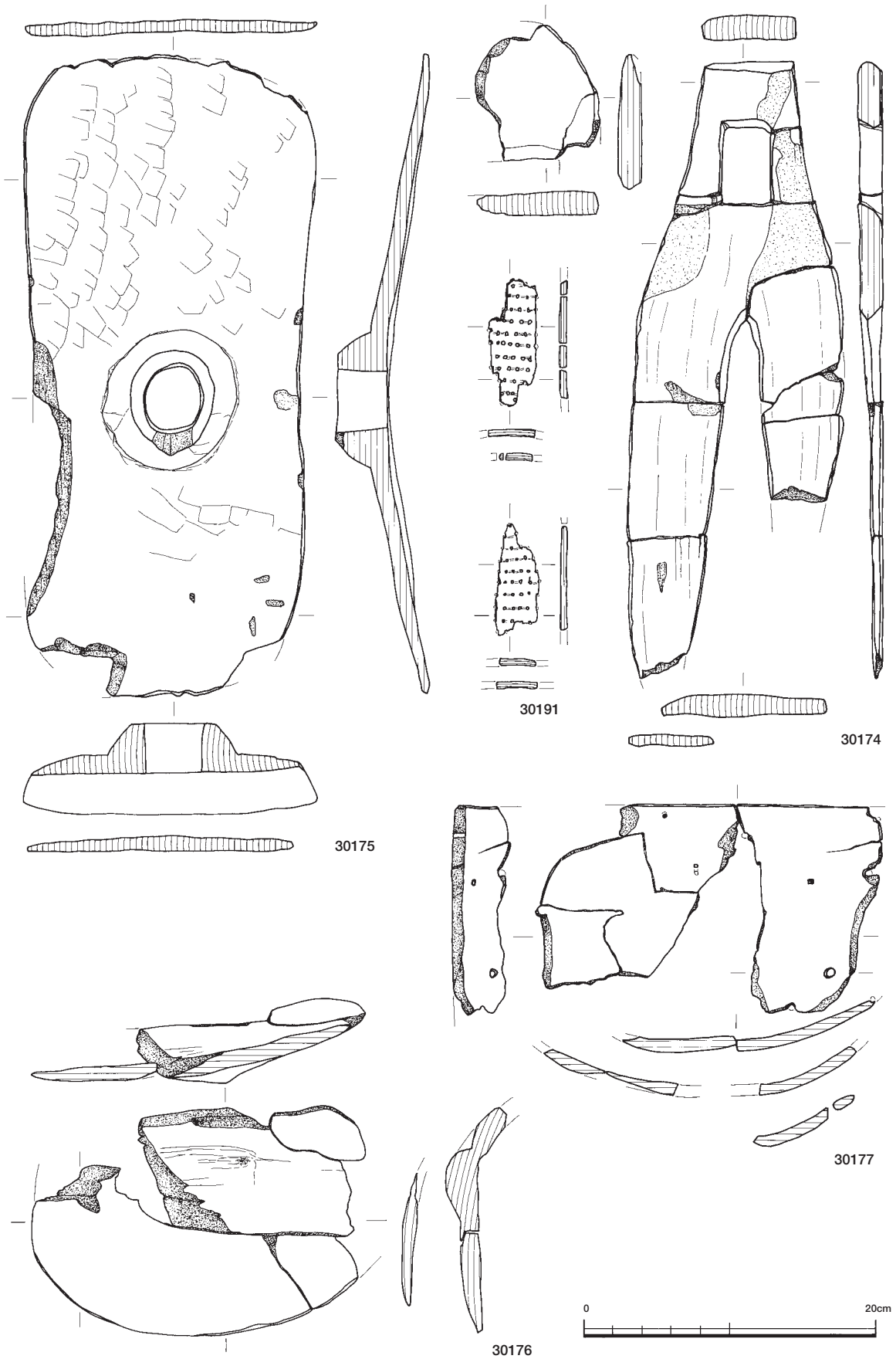


Fig.120　溝SD256出土木製品実測図1（1/4）

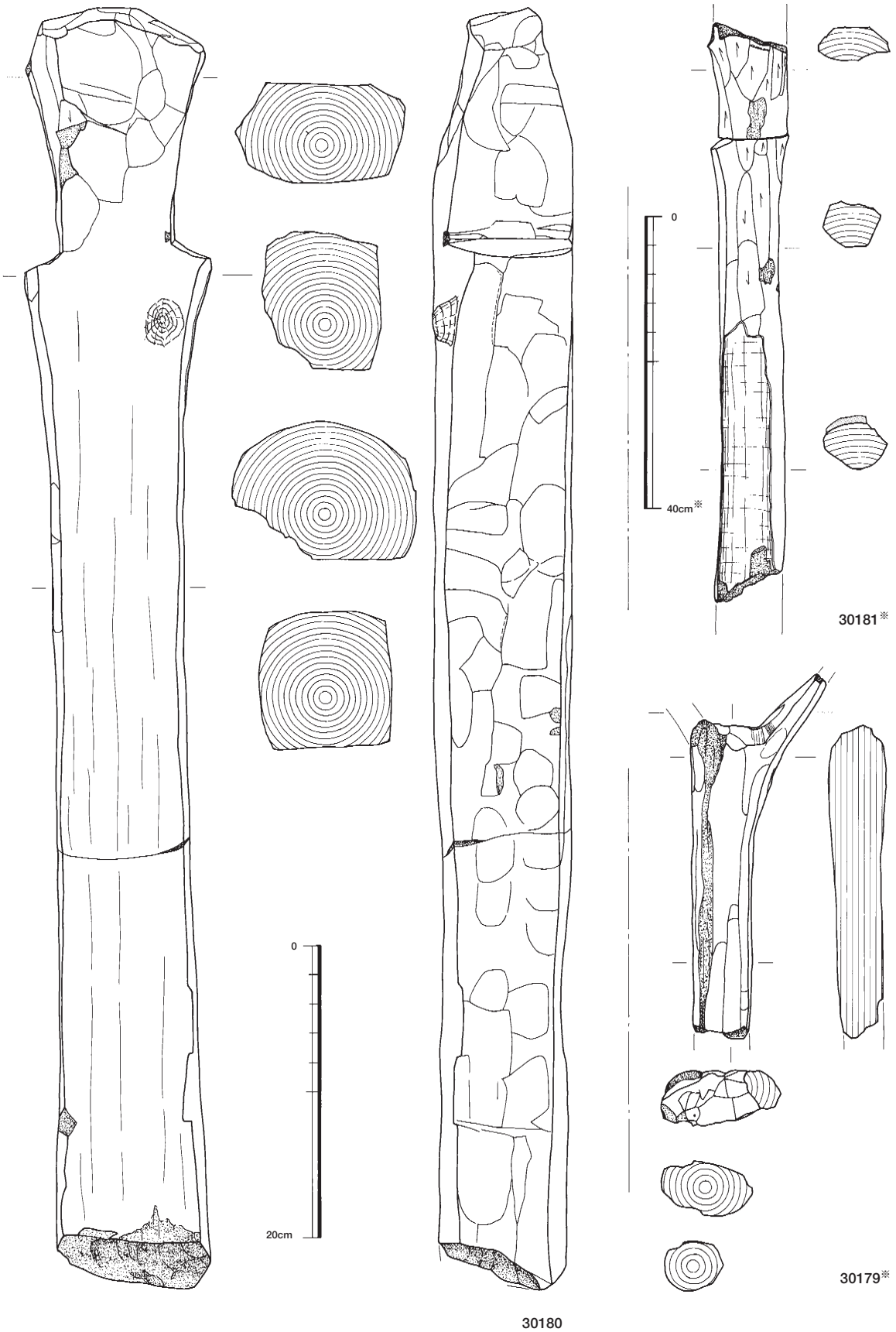


Fig.121　溝SD256出土木製品・建築部材実測図2（1/4・1/8※）

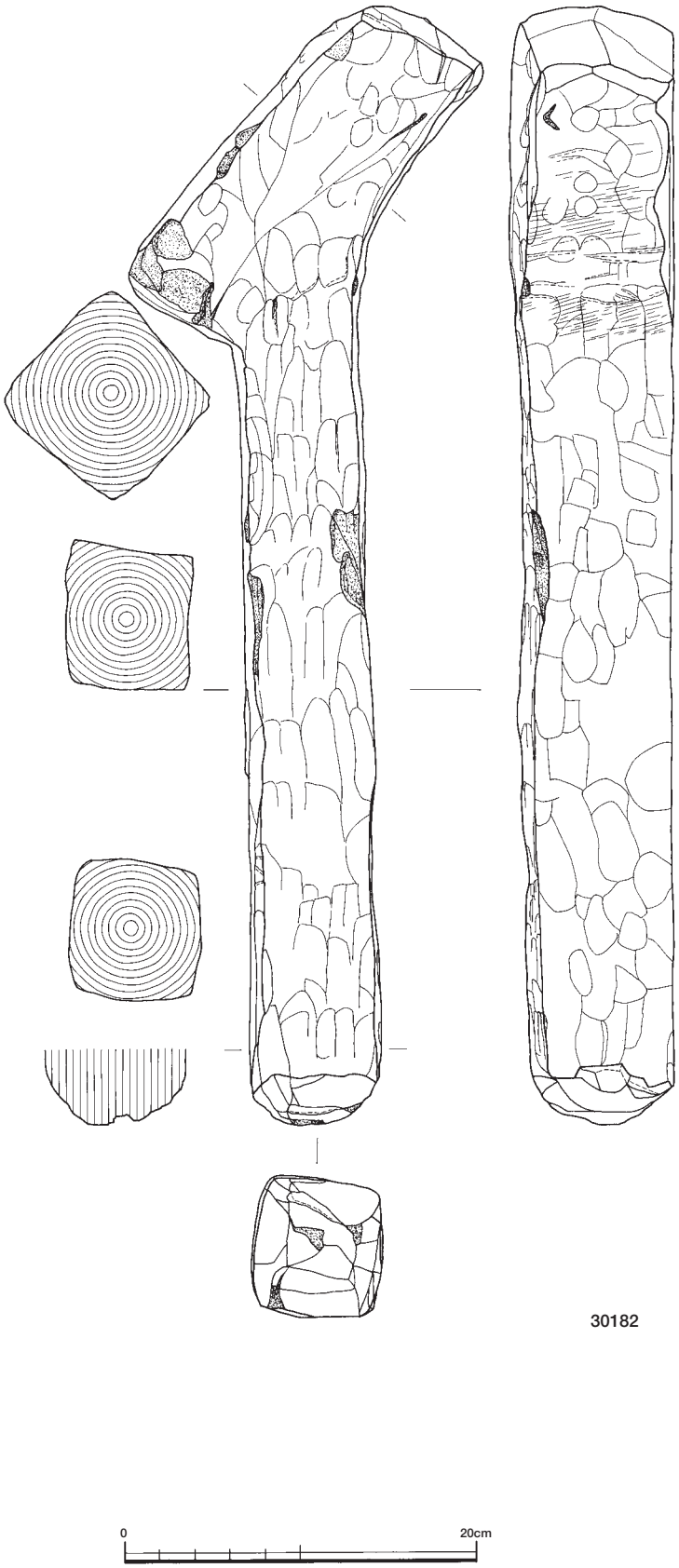


Fig.122 堰SX257出土木製品実測図（1/4）

第Ⅴ章　自然化学分析

1．樹　種　同　定

2．土　壌　分　析（花粉）

3．土　壌　分　析（植物珪酸体）

4．土　壌　分　析（大型植物化石・種実）

5．放射性炭素年代測定

1．樹 種 同 定

株式会社 古環境研究所

1．はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、その構造は年輪が形成され針葉樹材や広葉樹材で特徴ある組織をもつ。そのため、解剖学的に概ね属レベルの同定が可能となる。木材は大型の植物遺体であるため移動性が少なく、堆積環境によっては現地性の森林植生の推定が可能になる。考古学では木材の利用状況や流通を探る手がかりになる。

2．試　　料

試料は、下月隈Ｃ遺跡第５次調査において出土した木材865点である。

3．方　　法

カミソリを用いて、試料の新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、生物顕微鏡によって60～600倍で観察した。同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4．結　　果

結果は表１～４に示し、以下に同定根拠となった特徴を記す。

カ ヤ　*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.　イチイ科

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横 断 面：早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭く年輪界は比較的不明瞭である。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔はヒノキ型で１分野に１～４個存在する。仮道管の内壁には、らせん肥厚が存在し２本対になる傾向を示す。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、仮道管の内壁には２本対になる傾向を示すらせん肥厚が存在する。

以上の形質より、カヤに同定される。カヤは宮城県以南の本州、四国、九州と韓国の済州島に分布する。常緑の高木で通常高さ25m、径90cmに達する。材は均質緻密で堅硬、弾性強く水湿にも耐え、保存性が高い。弓などに用いられる。

マ キ 属　*Podocarpus*　マキ科

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横 断 面：早材から晩材への移行はゆるやかで、年輪界がやや不明瞭である。年輪の中に樹脂細胞が散在する。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型で１分野に１～２個存在する。樹脂細胞が散在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、１～20細胞高である。樹脂細胞が多く見られる。

以上の形質よりマキ属に同定される。マキ属には、イヌマキ、ナギがあり、関東以西の本州、四国、九州、琉球に分布する。常緑高木で、通常高さ20m、径50～80cmである。材は、耐朽性が強く、

耐水性も高い。建築、器具、桶、箱、水槽などに用いられる。

モミ属 *Abies* マツ科

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横 断 面：早材から晩材への移行は比較的緩やかである。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は小型のスギ型で１分野に１～４個存在する。放射柔細胞の壁が厚く、じゅず状末端壁を有する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質より、モミ属に同定される。モミ属は日本に５種が自生し、その内ウラジロモミ、トドマツ、シラビソ、オオシラビソの４種は亜寒帯に分布し、モミは温帯を中心に分布する。常緑高木で高さ45m、径1.5mに達する。材は保存性が低く軽軟であるが、現在では多用される。

スギ *Cryptomeria japonica D.Don* スギ科

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横 断 面：早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、１分野に２個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、10細胞高以下のものが多い。樹脂細胞が存在する。

以上の形質よりスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、高さ40m、径２mに達する。材は軽軟であるが強靭で、広く用いられる。

ヤナギ属 *Salix* ヤナギ科

横 断 面：小型で丸い、放射方向にややのびた道管が、単独あるいは２～３個放射方向に複合し、散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、道管相互の壁孔は交互状で密に分布する。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は、単列の異性放射組織型である。

以上の形質よりヤナギ属に同定される。ヤナギ属は落葉の高木または低木で、北海道、本州、四国、九州に分布する。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科

横 断 面：年輪のはじめに大型の道管が、数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりクリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径40cmぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径２mに達する。耐朽性強く、水湿によく耐え、保存性の極めて高い材で、現在では建築、家具、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、椎茸ほだ木など広く用いられる。

スダジイ　*Castanopsis sieboldii* Hatusima　ブナ科

横　断　面：年輪のはじめに中型から大型の道管が、やや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりスダジイに同定される。スダジイは本州（福島県、新潟県佐渡以南）、四国、九州に分布する。常緑の高木で、高さ20m、径1.5mに達する。材は耐朽、保存性やや低く、建築、器具などに用いられる。

ツブラジイ　*Castanopsis cuspidata* Schottky　ブナ科

横　断　面：年輪のはじめに中型から大型の道管が、やや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。放射組織は、単列のものと集合放射組織が存在する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなり、同性放射組織型である。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと集合放射組織が存在する。

以上の形質よりツブラジイに同定される。ツブラジイは関東以南の本州、四国、九州に分布する。常緑の高木で、高さ20m、径1.5mに達する。材は耐朽性、保存性低く、建築材などに用いられる。

コナラ属アカガシ亜属　*Quercus subgen. Cyclobalanopsis*　ブナ科

横　断　面：中型から大型の道管が、１～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30m、径1.5m以上に達する。材は堅硬で強靭、弾力性強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

マテバシイ　*Lithocarpus edulis Nakai*　ブナ科

横　断　面：中型の道管が、１～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと集合放射組織が存在する。

以上の形質よりマテバシイに同定される。マテバシイは、現在では、本州、四国、九州、琉球の暖帯～亜熱帯に広く見られるが、古くから植栽されていたため自然分布の範囲が不明瞭である。元来の自生地は九州および琉球と推定される。常緑高木で、高さ15m、径60cmに達する。

コナラ属コナラ節　*Quercus* sect. *Prinus*　ブナ科

横　断　面：年輪のはじめに大型の道管が、１～数列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ15m、径60cmぐらいに達する。材は強靭で弾力に富み、建築材などに用いられる。

コナラ属クヌギ節　*Quercus* sect. *Aegilops*　ブナ科

横 断 面：年輪のはじめに大型の道管が、１～数列配列する環孔材である。晩材部では厚壁で丸い小道管が、単独でおよそ放射方向に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属クヌギ節に同定される。コナラ属クヌギ節にはクヌギ、アベマキなどがあり、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ15m、径60cmに達する。材は強靭で弾力に富み、器具、農具などに用いられる。

ムクノキ　*Aphananthe aspera* (Thunb.) *Planch.*　ニレ科

横 断 面：中型から小型で厚壁の放射方向にのびた道管が、年輪界にむけて径を減少しながら、単独あるいは２～３個放射方向に複合して、まばらに散在する散孔材である。軸方向柔細胞は早材部で周囲状、晩材部では、数細胞幅で帯状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、１～４細胞幅である。多列部は平伏細胞からなり、単列部は直立細胞からなる。

以上の形質よりムクノキに同定される。ムクノキは本州（関東以西）、四国、九州、琉球に分布する。落葉高木で、通常高さ15～20m、径50～60cmぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径1.5mに達する。材はやや堅く密で強靱である。建築、器具、楽器、下駄、船、薪炭などに用いられる。

ニレ属　Ulmus　ニレ科

横 断 面：年輪のはじめに中型から大型の道管が１～３列配列する環孔材である。孔圏部外の小道管は多数複合して花束状、接線状、斜線状に比較的規則的に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は同性で、すべて平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、１～５細胞幅ぐらいである。

以上の形質よりニレ属に同定される。ニレ属にはハルニレ、オヒョウなどがあり、北海道、本州、四国、九州、琉球に分布する落葉の高木である。材は器具、旋作、薪炭などに用いられる。

ヤマグワ　*Morus australis* Poiret　クワ科

横 断 面：年輪のはじめに中型から大型の丸い道管が、単独あるいは２～３個複合して配列する環

孔材である。孔圏部外の小道管は複合して円形の小塊をなす。道管の径は徐々に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞であるが、上下の縁辺部の１～３細胞ぐらいは直立細胞である。

接線断面：放射組織は上下の縁辺部が直立細胞からなる異性放射組織型で、１～６細胞幅である。小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。

以上の形質よりヤマグワに同定される。ヤマグワは北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、通常高さ10～15m、径30～40cmである。材は堅硬、靭性に富み、建築などに用いられる。

クスノキ　*Cinnamomum camphora* Presl　クスノキ科

横 断 面：中型から大型の道管が、単独および２～数個放射方向に複合して、平等に分布する散孔材である。道管の周囲を鞘状に軸方向柔細胞が取り囲んでいる。これらの軸方向柔細胞の中には、油を含み大きく膨れ上がったものも存在する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞で上下の縁辺部のみ直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で１～２細胞幅である。上下の縁辺部の直立細胞のなかには、しばしば大きく膨れ上がったものがみられる。

以上の形質よりクスノキに同定される。クスノキは、関東以西の本州、四国、九州、琉球に分布する。常緑の高木で、通常高さ25m、径80cmぐらいであるが、高さ50m、径5mに達するものもある。材は堅硬で耐朽性が強く、保存性が高く芳香がある。建築、器具、楽器、船、彫刻、ろくろ細工などに用いられる。

ヤブニッケイ　*Cinnamomum japonicum* Sieb.　クスノキ科

横 断 面：小型の道管が、単独および２～数個放射方向に複合して、平等に分布する散孔材である。道管の周囲を鞘状に軸方向柔細胞が取り囲んでいる。これらの軸方向柔細胞の中には、油を含み大きく膨れ上がったものも存在する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔および数の少ない階段穿孔で、道管の内壁にらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞で上下の縁辺部のみ直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で１～２細胞幅である。上下の縁辺部の直立細胞のなかには、しばしば大きく膨れ上がったものがみられる。

以上の形質よりヤブニッケイに同定される。ヤブニッケイは、関東以西の本州、四国、九州、琉球に分布する。常緑の高木で、高さ15m、径１mに達する。材は強さ中庸で、家具、器具、薪炭などに用いられる。

タブノキ　*Machilus thunbergii* Sieb.et Zucc.　クスノキ科

横 断 面：やや小型の道管が、単独および２～数個放射方向に複合して、平等に分布する散孔材である。道管の周囲を鞘状に軸方向柔細胞が取り囲んでいる。これらの軸方向柔細胞の中には、油を含み大きく膨れ上がったものも存在する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔または少数ではあるが、数の少ない階段穿孔が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞で上下の縁辺部のみ直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で１～２細胞幅である。上下の縁辺部の直立細胞のなかには、しばしば大きく膨れ上がったものがみられる。

以上の形質よりタブノキに同定される。タブノキは、本州（暖地）、四国、九州、琉球に分布する。常緑の高木で、高さ15m、径１mに達する。材は耐朽性、保存性ともに中庸で、建築、家具、土木、器具、楽器、船、彫刻、薪炭などに用いられる。

シロダモ　*Neolitsea sericea* Koids.　クスノキ科

横 断 面：小型でやや薄壁のいくぶん角張った道管が、単独あるいは２個放射方向に複合して散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔、及び階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は少なく10本以内である。放射組織はほとんどが平伏細胞で、上下の縁辺部の１～２細胞が直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は上下の縁辺部の１～２細胞が直立細胞からなる異性放射組織型で、１～２細胞幅である。

以上の形質よりシロダモに同定される。シロダモは本州、四国、九州、琉球に分布する。常緑の高木で、高さ15m、径50cmに達する。材はやや軟らかく、建築、器具、薪炭などに用いられる。

クスノキ科　Lauraceae

横 断 面：中型から小型の道管が、単独および２～数個放射方向に複合して、平等に分布する散孔材である。道管の周囲を鞘状に軸方向柔細胞が取り囲んでいる。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔のものが存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞で上下の縁辺部のみ直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で１～３細胞幅である。上下の縁辺部のみ直立細胞である。

以上の形質よりクスノキ科に同定される。クスノキ科には、クスノキ、ヤブニッケイ、タブノキ、カゴノキ、シロダモ属などがあり、道管径の大きさ、多孔穿孔および道管内壁のらせん肥厚の有無などで細分できるが、本試料は道管径以外の点が不明瞭な為、クスノキ科の同定にとどまる。なお、本試料は道管径の大きさから、クスノキ以外のクスノキ科の樹種のいずれかである。

サクラ属　Prunus　バラ科

横 断 面：小型で丸い道管が、単独あるいは２～３個放射方向および斜め方向に複合して散在する散孔材である。道管の径は、早材部から晩材部にかけてゆるやかに減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は、同性に近い異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で１～４細胞幅である。

以上の形質よりサクラ属に同定される。サクラ属には、ヤマザクラ、ウワミズザクラ、シウリザクラ、ウメ、モモなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木または低木である。

アワブキ属　*Meliosma*　アワブキ科

横 断 面：小型の道管が、単独ないしその複合部に１～２個の軸方向柔細胞をはさんで、放射方向

にむかって２～４個複合して散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は少なく10本前後である。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で１～４細胞幅である。

以上の形質よりアワブキ属に同定される。アワブキ属は本州、四国、九州に分布する。落葉または常緑の小高木から高木である。

ヤブツバキ　*Camellia japonica* Linn.　ツバキ科

横　断　面：小型でやや角張った道管が、単独ないし２～３個複合して散在する散孔材である。道管の径はゆるやかに減少する。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は８～30本ぐらいである。放射組織は平伏細胞と直立細胞からなる異性で、直立細胞には、ダルマ状に膨れているものが存在する。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で、１～３細胞幅である。直立細胞には大きく膨れているものが存在する。

以上の形質よりヤブツバキに同定される。ヤブツバキは本州、四国、九州に分布する。常緑の高木で、通常高さ５～10m、径20～30cmである。材は強靭で、耐朽性強く、建築、器具、楽器、船、彫刻などに用いられる。

サ カ キ　*Cleyera japonica* Thunb.　ツバキ科

横 断 面：小型の道管が、単独ないし２個複合して均等に分布する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は多く80を越えるものがある。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で単列である。

以上の形質よりサカキに同定される。サカキは関東以西の本州、四国、九州、琉球に分布する。常緑高木で、通常高さ８～10m、径20～30cmである。材は強靭、堅硬で、建築、器具などに用いられる。

ヒサカキ属　*Eurya*　ツバキ科

横 断 面：小型で角張った道管が、ほぼ単独で密に分布する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は多く70を越えるものがある。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で、１～３細胞幅で、多列部と比べて単列部が長い。

以上の形質よりヒサカキ属に同定される。ヒサカキ属にはヒサカキ、ハマヒサカキなどがあり、本州、四国、九州、琉球に分布する。常緑の小高木で、通常高さ10m、径30cmである。材は強さ中庸で、器具などに用いられる。

カキノキ属　Diospyros　カキノキ科

横 断 面：中型から大型で厚壁の道管が、単独および２～３個放射方向に複合して、平等に分布する散孔材である。軸方向柔細胞は周囲状および接線状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は異性である。
接線断面：放射組織は異性放射組織型で１～２細胞幅である。いずれの放射組織も高さがほぼ同じで、層階状に配列する傾向を示す。

以上の形質よりカキノキ属に同定される。カキノキ属には、トキワガキ、ヤマガキなどがあり、本州（西部）、四国、九州に分布する。落葉の高木ないし小高木である。材は、建築、器具などに用いられる。

チシャノキ属　Ehretia　ムラサキ科

横　断　面：年輪のはじめに大型の道管が、１～３列配列する環孔材である。孔圏部外の道管は単独または２～３個複合して散在し、年輪界付近の小道管は群状に複合する。軸方向柔細胞が１列幅で、接線状に規則的に配列する傾向を示す。
放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、小道管の内壁にらせん肥厚が存在する。放射組織は平伏細胞である。
接線断面：放射組織は同性放射組織型で、１～７細胞幅である。小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。

以上の形質よりチシャノキ属に同定される。チシャノキ属には、チシャノキ、マルバチシャノキがあり本州（千葉県以西）、四国、九州、琉球に分布する。落葉の高木ないし小高木である。

環孔材　ring-popous wood

横　断　面：年輪のはじめに大型の道管が配列する。晩材部では小型で厚壁の道管が単独あるいは放射方向に２～３個複合してまばらに散在する。道管の径は早材から晩材にかけて徐々に減少する。
放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は異性である。
接線断面：放射組織は、異性放射組織型で１～３細胞幅である。

以上の形質より環孔材に同定される。

散孔材　diffuse-porous wood

横 断 面：小型の道管が散在する。
放射断面：道管が存在する。
接線断面：放射組織が存在することがかろうじて確認できた。

以上の形質より散孔材に同定される。なお本試料は変形が激しく、保存状態が悪い為、広範囲の観察が出来なかったので、散孔材の同定にとどまる。

参考文献

佐伯 浩・原田 浩（1985）針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.20-48.
佐伯 浩・原田 浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.49-100.
島地 謙・伊東 隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，296p.

表1　下月隈C遺跡第5次調査における樹種同定結果

遺　構	結　果(和名／学名)		点　数
SD101	カヤ	Torreya nucifera Sieb. et Zucc.	1
	スギ	Cryptomeria japonica D.Don	1
	スダジイ	Castanopsis sieboldii Hatusima	1
	ツブラジイ	Castanopsis cuspidata Schottky	3
	コナラ属アカガシ亜属	Quercus subgen. Cyclobalanopsis	15
	シラキ属	Sapium	1
	ヒサカキ属	Eurya	1
	ミズキ属	Cornus	2
SD104	マキ属	Podocarpus	1
	モミ属	Abies	1
	スギ	Cryptomeria japonica D.Don	1
	ヤナギ属	Salix	12
	クリ	Castanea crenata Sieb. et Zucc.	2
	スダジイ	Castanopsis sieboldii Hatusima	1
	ツブラジイ	Castanopsis cuspidata Schottky	3
	コナラ属アカガシ亜属	Quercus subgen. Cyclobalanopsis	6
	コナラ属コナ ラ節	Quercus sect. Prinus	1
	コナラ属クヌギ節	Quercus sect. Aegilops	4
	タブノキ	Machilus thunbergii Sieb.et Zucc.	2
	ユズリハ属	Daphniphyllum	1
	アワブキ属	Meliosma	3
	ヤブツバキ	Camellia japonica Linn.	2
	ヒサカキ属	Eurya	1
	サカキ	Cleyera japonica Thunb.	1
	散孔材	diffuse-porous wood	2
	シロダモ	Neolitsea sericea Koids.	4
	樹皮	bark	1
SK170	モミ属	Abies	1
SK182	クロマツ	Pinus thunbergii Parl.	2
	スギ	Cryptomeria japonica D.Don	1
SD190	スダジイ	Castanopsis sieboldii Hatusima	5
SD191	ヤマグワ	Morus australis Poiret	1
SX192	散孔材	diffuse-porous wood	3
SX209堰	コナラ属アカガシ亜属	Quercus subgen. Cyclobalanopsis	4
	コナラ属クヌ ギ節	Quercus sect. Aegilops	1
	ヤマグワ	Morus australis Poiret	2
	サカキ	Cleyera japonica Thunb.	1
	ミズキ属	Cornus	1
	散孔材	diffuse-porous wood	1
SD235	ツブラジイ	Castanopsis cuspidata Schottky	1
	クリ	Castanea crenata Sieb. et Zucc.	1
	ムクノキ	Aphananthe aspera Planch.	8
	ヤマグワ	Morus australis Poiret	1
	ヤブニッケイ	Cinnamomum japonicum Sieb.	2
	ヤブツバキ	Camellia japonica Linn.	1
	カキノキ属	Diospyros	1
	散孔材	diffuse-porous wood	3
SX244	コナラ属アカガシ亜属	Quercus subgen. Cyclobalanopsis	2

表2　下月隈C遺跡第5次調査における樹種同定結果

遺　構	結　果（和名／学名）		点　数
SD114	カヤ	Torreya nucifera Sieb. et Zucc.	26
	マキ属	Podocarpus	40
	コウヤマキ	Sciadopitys verticillata Sieb. et Zucc.	1
	クリ	Castanea crenata Sieb. et Zucc.	55
	スダジイ	Castanopsis sieboldii Hatusima	20
	ツブラジイ	Castanopsis cuspidata Schottky	13
	コナラ属アカガシ亜属	Quercus subgen. Cyclobalanopsis	15
	コナラ属コナラ節	Quercus sect. Prinus	4
	コナラ属クヌギ節	Quercus sect. Aegilops	15
	ムクノキ	Aphananthe aspera Planch.	22
	ケヤキ	Zelkova serrata Makino	7
	ヤブニッケイ	Cinnamomum japonicum Sieb.	1
	シロダモ	Neolitsea sericea Koids.	18
	サクラ属	Prunus	7
	サカキ	Cleyera japonica Thunb.	28
	ヒサカキ属	Eurya	19
	散孔材	diffuse-porous wood	8
	モミ属	Abies	4
	クロマツ	Pinus thunbergii Parl.	1
	ヒノキ	Chamaecyparis obtusa Endl.	6
	ヤナギ属	Salix	13
	ヤマグワ	Morus australis Poiret	23
	クスノキ	Cinnamomum camphora Presl	6
	タブノキ	Machilus thunbergii Sieb.et Zucc.	26
	フジ	Wisteria floribunda DC.	13
	センダン	Melia azedarach L. var. subtripinnata	1
	Miq.		7
	ムクロジ	Sapindus mukorossi Gaertn.	9
	アワブキ属	Meliosma	10
	ヤブツバキ	Camellia japonica Linn.	1
	針葉樹	conifer	9
	環孔材	ring-popous wood	1
	不明	unknown	2
	クスノキ科	Lauraceae	1
	トネリコ属	Fraxinus	1
	カキノキ属	Diospyros	1
	モチノキ属	Ilex	
SA247	クリ	Castanea crenata Sieb. et Zucc.	5
	アワブキ属	Meliosma	1
	サカキ	Cleyera japonica Thunb.	1
SD250	スダジイ	Castanopsis sieboldii Hatusima	16
	ツブラジイ	Castanopsis cuspidata Schottky	3
	カヤ	Torreya nucifera Sieb. et Zucc.	5
	マキ属	Podocarpus	6
	ヤナギ属	Salix	5
	ムクノキ	Aphananthe aspera Planch.	5
	アワブキ属	Meliosma	1
	タブノキ	Machilus thunbergii Sieb.et Zucc.	1
	ヤブツバキ	Camellia japonica Linn.	13
	コナラ属アカガシ亜属	Quercus subgen. Cyclobalanopsis	1
	コナラ属クヌギ節	Quercus sect. Aegilops	3
	クスノキ	Cinnamomum camphora Presl	2
	クスノキ科	Lauraceae	1
	サカキ	Cleyera japonica Thunb.	1

表3　下月隈C遺跡第5次調査における樹種同定結果

遺　構	結　果(和名／学名)		点　数
SX252	カヤ	Torreya nucifera Sieb. et Zucc.	2
	スダジイ	Castanopsis sieboldii Hatusima	4
	コナラ属アカガシ亜属	Quercus subgen. Cyclobalanopsis	1
	マテバシイ	Pasania edalis Makino	2
	ヤブツバキ	Camellia japonica Linn.	3
	環孔材	ring-popous wood	1
SX253	カヤ	T orreya nucifera Sieb. et Zucc.	3
	マキ属	P odocarpus	1
	スダジイ	C astanopsis sieboldii Hatusima	7
	ツブラジイ	C astanopsis cuspidata Schottky	1
	アワブキ属	M eliosma	2
	不明	unknown	1
SX255	コナラ属アカガシ亜属	Quercus subgen. Cyclobalanopsis	1
	ヒサカキ属	E urya	1
SD256	スギ	Cryptomeria japonica D.Don	1
	スダジイ	Castanopsis sieboldii Hatusima	19
	ツブラジイ	Castanopsis cuspidata Schottky	6
	コナラ属アカガシ亜属	Quercus subgen. Cyclobalanopsis	6
	カヤ	Torreya nucifera Sieb. et Zucc.	4
	ヤナギ属	Salix	12
	クリ	Castanea crenata Sieb. et Zucc.	13
	コナラ属コナラ節	Quercus sect. Prinus	4
	ムクノキ	Aphananthe aspera Planch.	6
	タブノキ	Machilus thunbergii Sieb.et Zucc.	6
	散孔材	diffuse-porous wood	2
	マキ属	Podocarpus	5
	コナラ属クヌギ節	Quercus sect. Aegilops	5
	ヤマグワ	Morus australis Poiret	1
	クスノキ	Cinnamomum camphora Presl	2
	サクラ属	Prunus	3
	アワブキ属	Meliosma	2
	サカキ	Cleyera japonica Thunb.	1
	ヤブツバキ	Camellia japonica Linn.	11
	シロダモ	Neolitsea sericea Koids.	1
	クスノキ科	Lauraceae	1
	チシャノキ属	Ehretia	1
SX257堰	ヤナギ属	Sa lix	8
	クリ	C astanea crenata Sieb. et Zucc.	7
	コナラ属アカガシ亜属	Quercus subgen. Cyclobalanopsis	2
	サクラ属	Pr unus	4
	ヤブツバキ	C amellia japonica Linn.	1
SX258	カヤ	T orreya nucifera Sieb. et Zucc.	2
	ヤナギ属	Sa lix	2
	クリ	C astanea crenata Sieb. et Zucc.	7
	スダジイ	C astanopsis sieboldii Hatusima	5
	ツブラジイ	C astanopsis cuspidata Schottky	8
	コナラ属アカガシ亜属	Quercus subgen. Cyclobalanopsis	1
	コナラ属コナラ節	Quercus sect. Prinus	1
	タブノキ	M achilus thunbergii Sieb.et Zucc.	1
	ムクロジ	Sa pindus mukorossi Gaertn.	1
	散孔材	di ffuse-porous wood	1

表4　下月隈C遺跡第5次調査における樹種同定結果

遺　構	結　果(和名／学名)		点　数
第4面	タブノキ	Machilus thunbergii Sieb.et Zucc.	3
第5面	カヤ	Torreya nucifera Sieb. et Zucc.	2
第5面暗灰色粘	ヤナギ属	Salix	1
	クリ	Castanea crenata Sieb. et Zucc.	2
	スダジイ	Castanopsis sieboldii Hatusima	2
	ツブラジイ	Castanopsis cuspidata Schottky	2
	コナラ属アカガシ亜属	Quercus subgen. Cyclobalanopsis	1
	コナラ属コナラ節	Quercus sect. Prinus	1
	ヤマグワ	Morus australis Poiret	1
	ムクロジ	Sapindus mukorossi Gaertn.	1
	ヒサカキ属	Eurya	1
第5面	ヤナギ属	Salix	1
	クリ	Castanea crenata Sieb. et Zucc.	5
	サクラ属	Prunus	1
第5面	マキ属	Podocarpus	1
	スダジイ	Castanopsis sieboldii Hatusima	1
	タブノキ	Machilus thunbergii Sieb.et Zucc.	1
	シロダモ	Neolitsea sericea Koids.	1
	クスノキ科	Lauraceae	1
	サクラ属	Prunus	1
第5面	クリ	Castanea crenata Sieb. et Zucc.	2
	サカキ	Cleyera japonica Thunb.	1
	環孔材	ring-popous wood	1
大堰第2水田面	スダジイ	Castanopsis sieboldii Hatusima	2
	ツブラジイ	Castanopsis cuspidata Schottky	3
	コナラ属アカガシ亜属	Quercus subgen. Cyclobalanopsis	4
	コナラ属コナラ節	Quercus sect. Prinus	1
	モチノキ属	Ilex	2
	アワブキ属	Meliosma	1
	サカキ	Cleyera japonica Thunb.	1
SE166井筒内	ヒノキ属	Chamaecyparis	1
SE166	モミ属	Abies	1
SD256	スギ	Cryptomeria japonica D.Don	1

2．土 壌 分 析（花粉分析）

鈴木　茂（パレオ・ラボ）

はじめに

第５次調査において各遺構より土壌試料が採取された。以下にはこの土壌試料について行った花粉分析の結果を示し、弥生時代から奈良時代にかけての遺跡周辺の植生変遷について検討した。

（１）試料と分析方法

試料は、SD104第４面，SE166第１面，SD235第４面，SK244第４面，SK245第４面，SD114第５面，SD256第５面および水田SX183第２面より採取された65試料である。各試料の土相はおおむね黒～黒褐色の粘土や砂質粘土である。なお出土遺物から第２面が奈良時代、第４面が弥生時代後期から古墳時代、第５面が弥生時代初期から中期と考えられている。花粉分析はこれら65試料について以下のような手順にしたがって行った。

試料（湿重３～５ｇ）を遠沈管にとり、10%の水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後、0.5mm目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46%のフッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理（無水酢酸９：１濃硫酸の割合の混酸を加え３分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作成して行い、その際サフラニンにて染色を施した。

（２）分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉54、草本花粉46、形態分類を含むシダ植物胞子５、藻類１の総計106である。これら花粉・シダ植物胞子・藻類の一覧を表１に、それらの分布を図１（SD104第４面，SE166第２面，SD235第４面，SK244第４面，SK245第４面）、図２（SD114第５面）、図３（SD256第５面および水田SX183第２面）に示した。なお分布図について、樹木花粉は樹木花粉総数を基数として、草本花粉，シダ植物胞子，藻類については全花粉・胞子総数を基数とした百分率で示してある。また表および図においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示している。

SD104第４面（図１，No.１～16）

コナラ属アカガシ亜属の優占で特徴づけられる。シイノキ属－マテバシイ属（以後シイ類と略す）が次いで多く検出され、マツ属複維管束亜属（アカマツやクロマツなどのいわゆるニヨウマツ類）やスギ，コナラ属コナラ亜属もやや目立って検出されている。その他モミ属，イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科（以後ヒノキ類と略す），クマシデ属－アサダ属，ハンノキ属，エノキ属－ムクノキ属，イスノキ属などが検出されている。草本類ではイネ科が圧倒的に多く、次いでカヤツリグサ科が10%弱（一部20%前後）の出現率を示している。水生植物が多く検出されており、抽水植物のオモダカ属やミズアオイ属はほぼ連続して観察されている。その他同じ抽水植物のガマ属，サジオモダカ属，イボクサ属なども比較的多くの試料より得られており、やはり抽水植物のコウホネ属やヒシ属も観察されている。

SE166第１面（図１，No.17）

やはりアカガシ亜属の優占とシイ類の多産で特徴づけられるが、ノブドウ属やイボタノキ属、草本類のギシギシ属やヨモギ属などがやや目立って検出されている。

SD235第４面（図１，No.18,19）

アカガシ亜属とシイ類の優占で特徴づけられる。草本類はイネ科が多産しており、水生植物のサジオモダカ属，オモダカ属，ミズアオイ属が両試料から検出されている。

SK244第４面（図１，No.20～22）

アカガシ亜属とシイ類の優占で特徴づけられ、次いでニヨウマツ類，スギ，コナラ亜属などが目立って検出されている。草本類はやはりイネ科が多産しており、水生植物のオモダカ属，ミズアオイ属が全３試料から検出されている。

SK245第４面（図１，No.23～25）

アカガシ亜属の優占で特徴づけられ、次いでシイ類，ニヨウマツ類，スギ，コナラ亜属などが目立って検出されている。草本類はイネ科が50％弱の出現率を示して多産しており、水生植物のオモダカ属，ミズアオイ属およびクロモ（沈水植物）が全３試料から検出されている。

SD114第５面（図２，No.26～52）

アカガシ亜属とシイ類の優占で特徴づけられる。次いで10％前後を示してコナラ亜属が多く、ニヨウマツ類やスギが10％弱を示している。また同じ針葉樹のモミ属やツガ属もやや目立って検出されており、広葉樹ではエノキ属－ムクノキ属が１％を越え、イスノキ属も多くの試料で１％を越えている。草本類は40～60％の出現率を示しているイネ科が圧倒的に多く、次に多いカヤツリグサ科でも10％に達していない。そのなか花粉生産量の少ないオモダカ属やミズアオイ属がほぼ全試料から得られており、サジオモダカ属も多くの試料で観察されている。

SD256第５面（図３，No.53～61）

50％前後を示しているアカガシ亜属の優占で特徴づけられ、シイ類も20％前後を示している。その他コナラ亜属，ニヨウマツ類，スギが５％前後得られている。草本類はやはり30～40％を示しているイネ科がもっとも多く、カヤツリグサ科が10％前後である。やはり水生植物のオモダカ属が全試料から検出されており、ミズアオイ属も多くの試料から得られている。

水田SX183第２面（図３，N0.62～65）

アカガシ亜属とシイ類の優占で特徴づけられるが、SD256第５面に比べるとアカガシ亜属はやや出現率を下げている。次いで10％前後を示してニヨウマツ類とコナラ亜属が多く、スギも10％弱を示している。草本類はイネ科が50％前後を示しており、他の分類群は10％に達していない。そのなかやはりオモダカ属が全試料より得られ、ミズアオイ属も多くの試料で観察されている。

（３）遺跡周辺の植生変遷

第５面（弥生時代初期から中期）

アカガシ亜属とシイ類の圧倒的優占で特徴づけられ、この時期の遺跡周辺微高地上にはこれらに常緑のヤマモモ属，イスノキ属，モチノキ属，イボタノキ属などを交えた照葉樹林が広く成立していた。またマキ属も海岸部を中心にこれら照葉樹林に混じるように生育していたものとみられる。さらに周辺丘陵部にはモミ属やニヨウマツ類，スギなどの針葉樹類も一部に分布していた。これら森林の林縁部には植物珪酸体分析からケネザサ－ススキ群集といった景観の存在も予想され、樹木類に絡まるようにノブドウ属やウコギ科の一部（キズタ？），スイカズラ属，ヘクソカズラ属などの蔓植物も生育

していた。一方低地部には溝周辺に肥沃なところを好むエノキ属－ムクノキ属が一部に生育していたと考えられ、ハンノキ属もみられたであろう。この低地部では植物珪酸体分析から稲作地の存在が予想されており、この水田には水田雑草と考えられるサジオモダカ属（サジオモダカ），オモダカ属（オモダカ，ウリカワ），スブタ属－ミズオオバコ属，ミズアオイ属（コナギ），キカシグサ属（キカシグサ），ミズワラビ属（ミズワラビ），サンショウモなどが生育していた。また植物珪酸体分析から水田雑草のキビ族（タイヌビエ？）の存在も予想される。さらに溝部やその周辺にはこれらに加えガマ属やイボクサ属（イボクサ），ヨシ属，好湿性のツリフネソウ属，ゴキズル属－アマチャヅル属などが生育していた。その他土手や道などにはツユクサ属，ギシギシ属，アカザ科－ヒユ科，ナデシコ科，アブラナ科，セリ科，オオバコ属，ゴキヅル属－アマチャヅル属，ヨモギ属，タンポポ亜科などの雑草類が生育していた。

第４面（弥生時代後期から古墳時代初期）

依然としてアカガシ亜属とシイ類を主体とした照葉樹林が微高地上に広く分布していたが、先の時代に比べ多少とも減少傾向が認められる。千葉県茂原市の国府関遺跡群では鋤鍬にアカガシ亜属を用いるという強い指向性が示されており（能城・鈴木　1993）、農具としてこれら堅い樹種が選択して使われているようである。下月隈Ｃ遺跡においても水田稲作の拡大にともない農具としてアカガシ亜属やシイ類が選択して多く使われ、照葉樹林の一部が破壊されたことが推測される。

低地部では依然として水田稲作が営まれており、上記雑草類も同様に生育していた。

第２面（奈良時代）

依然として照葉樹林が優勢であるが、さらにアカガシ亜属やシイ類に減少傾向がみられ、先の時代から人間による照葉樹林への干渉が続いていたことが予想される。一方ニヨウマツ類にわずかではあるが増加傾向がみられ、これは照葉樹林の破壊にともなう跡地にアカマツと推測されるがニヨウマツ類が侵入・拡大する傾向を示していると考えられる。一方低地部では引き続き水田稲作が行われており、上記水田雑草などの雑草類が多く生育していた。

なお、井戸址試料のNo.17（SE166第１面）においてノブドウ属やイボタノキ属，ギジギシ属，ヨモギ属が突出した出現を示している。試料が井戸址であることから、廃棄などの際に除草されたこれらの植物が捨てられたのではないかと思われる。

引用文献

能城 修一・鈴木三男（1993）国府関遺跡から出土した木製品の樹種．　（財）長生郡市文化財センター調査報告 第15集
国府関遺跡群，（財）長生郡市文化財センター，p.285-310 p．

表1　産出花粉化石一覧表（その1）

和名	学名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25
樹木																										
マキ属	*Podocarpus*	1	-	-	-	1	1	2	5	-	4	1	2	2	6	-	2	1	4	4	5	7	4	3	2	5
モミ属	*Abies*	2	4	-	2	8	1	5	5	2	5	11	2	-	8	5	3	-	1	6	6	7	5	6	3	9
ツガ属	*Tsuga*	-	3	-	1	1	-	2	5	1	3	3	2	3	8	-	5	3	-	3	1	-	-	3	2	1
トウヒ属	*Picea*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
マツ属単維管束亜属	*Pinus* subgen. *Haploxylon*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	11	14	4	8	16	15	17	27	10	18	9	8	14	27	12	19	11	3	3	16	15	13	28	16	26
マツ属（不明）	*Pinus* (Unknown)	6	4	2	5	3	2	6	3	7	6	4	4	6	12	7	9	3	1	2	4	3	-	8	4	5
コウヤマキ属	*Sciadopitys*	-	-	-	-	1	-	2	2	-	-	-	1	1	1	-	-	1	-	-	1	-	-	-	1	-
スギ	*Cryptomeria japonica* D. Don	27	10	12	12	25	12	25	28	13	16	20	19	11	25	21	22	11	7	8	25	28	11	21	23	20
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	T.－C.	10	2	3	4	2	4	6	7	2	6	3	2	-	3	2	2	-	-	1	-	4	3	1	2	2
ヤナギ属	*Salix*	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
ヤマモモ属	*Myrica*	3	5	1	1	4	1	2	-	-	3	2	1	2	-	2	3	2	-	-	3	4	1	3	3	-
サワグルミ属－クルミ属	*Pterocarya-Juglans*	2	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	1	-	1	-	-	1	1	-	-	1	-	2	-
クマシデ属－アサダ属	*Carpinus* - *Ostrya*	4	3	1	4	7	4	1	4	4	4	3	5	4	5	3	3	2	4	3	1	4	3	3	3	2
カバノキ属	*Betula*	2	1	-	-	-	1	-	1	-	1	2	2	-	-	1	1	1	-	-	3	1	-	1	-	-
ハンノキ属	*Alnus*	4	1	2	4	4	1	4	3	3	6	-	1	3	1	-	5	1	2	-	1	3	2	2	1	2
ブナ	*Fagus crenata* Blume	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	1	-	2
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	23	25	8	17	20	20	16	24	23	23	19	15	9	20	11	26	7	14	13	14	14	15	13	17	28
コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	84	83	120	74	84	75	90	59	79	67	74	88	94	67	68	93	75	99	62	75	66	75	94	66	72
シイノキ属－マテバシイ属	*Castanopsis* - *Pasania*	18	45	50	64	41	62	32	32	55	34	53	41	77	28	93	34	52	79	67	64	35	64	38	43	32
ニレ属－ケヤキ属	*Ulmus* - *Zelkova*	2	1	-	1	1	-	2	-	1	2	1	1	-	-	-	2	-	-	-	1	2	-	2	-	1
エノキ属－ムクノキ属	*Celtis-Aphananthe*	-	-	1	2	9	6	1	4	5	3	7	5	4	3	4	3	2	4	4	10	9	9	1	6	4
ヤドリギ属	*Viscum*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カツラ属	*Cercidiphyllum*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
シキミ属	*Illicium*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イスノキ属	*Distylium*	6	8	2	3	2	3	3	5	-	8	3	10	2	6	1	3	3	3	4	2	3	-	1	3	2
サクラ属近似種	cf. *Prunus*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
サンショウ属	*Zanthoxylum*	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
コクサキ属	*Orixa*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
キハダ属	*Phellodendron*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アカメガシワ属	*Mallotus*	1	-	-	1	-	1	-	-	1	-	2	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ウルシ属	*Rhus*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
モチノキ属	*Ilex*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	2	2	-
ニシキギ科	Celastraceae	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カエデ属	*Acer*	1	-	-	1	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
トチノキ属	*Aesculus*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
ムクロジ属	*Sapindus*	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ブドウ属	*Vitis*	1	-	-	-	1	2	-	2	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1
ノブドウ属	*Ampelopsis*	1	-	-	1	-	-	1	-	1	-	-	-	2	-	1	-	9	-	-	-	-	-	1	1	1
ツバキ属	*Camellia*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ジンチョウゲ科	Thymelaeaceae	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
グミ属	*Elaeagnus*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ウコギ科	Araliaceae	-	-	-	1	-	-	-	-	2	-	-	-	-	1	-	-	2	5	1	-	-	-	-	2	1
アオキ属	*Aucuba*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ミズキ属	*Cornus*	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
カキ属	*Diospyros*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
ハイノキ属	*Symplocos*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
エゴノキ属	*Styrax*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イボタノキ属	*Ligustrum*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	20	-	-	-	-	-	-	-	-
トネリコ属	*Fraxinus*	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-
ティカカズラ属	*Trachelospermum*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ニワトコ属近似種	cf. *Sambucus*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
カマズミ属	*Viburnum*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
スイカズラ属	*Lonicera*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
草本																										
ガマ属	*Typha*	1	1	1	-	-	-	1	-	1	-	-	2	-	1	1	1	1	-	-	-	1	1	-	1	-
ミクリ属	*Sparganium*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
サジオモダカ属	*Alisma*	1	-	-	1	-	1	1	-	1	-	-	-	1	2	-	2	-	1	1	-	-	-	-	1	-
オモダカ属	*Sagittaria*	3	6	2	2	2	2	3	7	3	1	-	-	1	6	2	4	1	7	5	6	1	3	2	3	1
クロモ	*Hydrilla verticillata* Royle.	-	-	1	2	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	1	1
スブタ属－ミズオオバコ属	*Blyxa* - *Ottelia*	6	5	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-
イネ科	Gramineae	386	341	226	190	284	256	251	258	222	255	253	223	174	376	148	379	116	161	268	182	237	172	296	294	299
カヤツリグサ科	Cyperaceae	227	138	211	73	81	28	43	52	31	46	37	36	38	46	34	69	31	20	34	70	58	41	36	50	47
ホシクサ属	*Eriocaulon*	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	2	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
ツユクサ属	*Commelina*	2	3	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	4	-	2	-	-	-	-	1	-
イボクサ属	*Aneilema*	5	2	2	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	1	-	-	-	-	-
ミズアオイ属	*Monochoria*	15	16	6	3	3	1	2	1	-	4	1	4	-	-	1	8	-	1	6	1	1	2	4	1	4
ユリ科	Liliaceae	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アヤメ科	Iridaceae	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クワ科	Moraceae	-	1	1	1	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-	2	2	24	-	1	1	1	1	-	-	-
ギシギシ属	*Rumex*	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	121	-	-	-	-	-	1	-	-
サナエタデ節－ウナギツカミ節	*Polygonum* sect. Persicaria-Echinocaulon	2	4	2	4	3	1	1	1	-	1	2	1	-	5	1	1	2	-	4	-	2	-	1	-	1
イタドリ節	*Polygonum* sect. Reynoutria	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
アカザ科－ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	2	1	-	1	1	-	-	3	-	1	1	1	-	-	1	1	5	1	-	-	-	2	1	-	-
ナデシコ科	Caryophyllaceae	1	1	-	-	-	2	2	-	2	-	-	1	-	1	2	-	-	-	3	-	2	-	1	1	1
コウホネ属	*Nuphar*	-	-	-	1	-	-	1	1	-	5	-	-	-	-	2	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
カラマツソウ属	*Thalictrum*	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
他のキンポウゲ科	other Ranunculaceae	-	1	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
アブラナ科	Cruciferae	-	4	-	2	1	2	1	-	1	5	1	1	2	1	4	2	5	1	4	2	4	-	-	1	3
ワレモコウ属	*Sanguisorba*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
他のバラ科	other Rosaceae	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	2	-	1	2	-	1	-	-	-
マメ科	Leguminosae	-	2	1	3	1	1	-	1	1	2	2	1	2	1	-	1	5	-	1	-	-	-	1	1	2
カタバミ属	*Oxalis*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
トウダイグサ科	Euphorbiaceae	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ツリフネソウ属	*Impatiens*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ミソハギ属	*Lythrum*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
キカシグサ属	*Rotala*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3
ヒシ属	*Trapa*	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アリノトウグサ属	*Haloragis*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
セリ科	Umbelliferae	-	1	2	1	1	2	-	-	1	-	1	-	-	1	-	-	8	2	-	1	1	-	2	-	1
シソ科	Labiatae	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	1	4	1	-	-
ナス属	*Solanum*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
オギノツメ属	*Hygrophila*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
オオバコ属	*Plantago*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
アカネ属－ヤエムグラ属	*Rubia* - *Galium*	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1
ヘクソカズラ属	*Paederia*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
オミナエシ属	*Patrinia*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1
ゴキヅル属－アマチャヅル属	*Actinostemma* - *Gynostemma*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-
ヨモギ属	*Artemisia*	11	12	6	18	14	11	10	8	15	19	14	7	9	10	17	12	178	7	7	3	4	10	16	13	9
他のキク亜科	other Tubuliflorae	6	3	3	11	7	7	4	3	5	5	10	2	3	2	2	4	6	1	1	-	3	2	10	3	6
タンポポ亜科	Liguliflorae	2	5	2	3	9	1	5	4	4	3	3	3	2	6	3	4	7	-	4	1	9	3	5	3	4
シダ植物																										
ヒカゲノカズラ属	*Lycopodium*	3	2	-	-	1	2	2	3	2	2	2	2	3	5	-	2	2	-	1	1	1	-	3	2	1
ミズワラビ属	*Ceratopteris*	-	2	1	1	1	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1
サンショウモ	*Salvinia natans*	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
単条型胞子	Monolete spore	12	9	5	5	12	11	12	11	12	13	9	3	14	18	5	12	5	3	9	6	2	3	10	14	14
三条型胞子	Trilete spore	2	5	1	-	1	4	1	6	6	5	4	4	1	6	1	1	5	2	2	1	2	2	9	2	6
緑藻類																										
クンショウモ属	*Pediastrum*	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
樹木花粉	Arboreal pollen	215	209	206	207	232	211	219	218	209	212	220	212	235	227	234	237	210	229	186	232	206	206	233	203	217
草本花粉	Nonarboreal pollen	672	549	469	319	410	318	325	342	287	348	330	284	236	462	224	492	518	204	344	273	326	244	379	375	387
シダ植物胞子	Spores	17	18	7	6	15	17	15	20	21	20	16	9	19	29	6	16	12	5	12	8	5	5	22	18	22
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	904	776	682	532	657	546	559	580	517	580	566	505	490	718	464	745	740	438	542	513	537	455	634	596	626
不明花粉	Unknown pollen	26	28	16	17	29	18	24	15	21	23	14	13	28	22	16	22	13	8	23	22	19	7	26	21	31

T．－C．はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupresaceaeを示す

表2（その2）産出花粉化石一覧表

和名	学名	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52
樹木																												
マキ属	*Podocarpus*	6	12	9	7	13	13	15	6	10	8	6	3	3	2	7	3	3	7	11	7	15	2	11	7	12	6	7
モミ属	*Abies*	3	8	14	3	15	8	11	7	6	6	6	10	7	5	11	10	9	11	4	3	16	5	4	2	12	3	3
ツガ属	*Tsuga*	-	1	2	-	3	1	1	2	1	2	3	1	-	-	-	-	3	1	2	2	3	-	2	1	-	1	1
トウヒ属	*Picea*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
マツ属単維管束亜属	*Pinus* subgen. *Haploxylon*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	16	20	18	8	20	11	12	15	19	13	14	10	14	7	12	14	12	21	20	17	16	6	16	9	10	12	15
マツ属（不明）	*Pinus* (Unknown)	2	3	6	1	12	4	6	9	8	4	3	4	6	2	4	4	7	11	7	3	6	3	2	-	5	3	2
コウヤマキ属	*Sciadopitys*	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	1	-	1	-	1	-	-	-	1	1
スギ	*Cryptomeria japonica* D. Don	16	19	15	10	16	11	14	16	5	15	9	14	4	8	12	8	10	13	9	12	8	8	7	5	17	14	15
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	T.－C.	3	1	3	2	2	-	3	1	2	1	2	2	1	1	-	1	4	5	2	3	3	1	3	-	2	2	5
ヤナギ属	*Salix*	1	1	1	1	1	-	-	-	-	1	1	2	2	1	3	2	3	-	3	3	1	1	-	3	-	-	1
ヤマモモ属	*Myrica*	1	1	-	-	-	5	-	-	-	1	2	2	2	-	-	1	-	1	1	1	-	1	-	-	-	-	-
サワグルミ属－クルミ属	*Pterocarya-Juglans*	1	1	-	-	1	-	1	1	1	1	-	1	2	1	1	1	1	-	1	-	-	2	2	1	1	1	-
クマシデ属－アサダ属	*Carpinus - Ostrya*	5	1	5	1	3	5	1	2	-	-	3	1	4	3	1	-	3	3	2	3	3	3	-	2	2	1	1
カバノキ属	*Betula*	2	-	-	-	2	1	2	1	-	-	-	-	-	-	1	-	1	1	-	-	-	-	1	1	-	1	-
ハンノキ属	*Alnus*	1	-	1	3	-	3	1	1	2	2	4	-	1	1	-	2	2	1	1	-	-	-	-	-	1	-	-
ブナ	*Fagus crenata* Blume	-	1	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	17	24	15	10	27	21	19	22	34	17	18	22	13	12	20	11	9	25	22	24	21	18	38	25	29	28	19
コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	67	60	60	129	64	73	84	88	75	63	69	61	59	66	70	56	48	46	87	70	63	68	82	67	66	36	68
シイノキ属－マテバシイ属	*Castanopsis - Pasania*	57	41	50	111	32	32	29	27	46	59	43	61	71	102	64	33	43	57	44	62	41	64	39	86	28	29	46
ニレ属－ケヤキ属	*Ulmus - Zelkova*	-	2	-	-	4	1	1	-	3	2	3	2	1	-	-	1	1	-	2	1	1	1	-	-	4	1	3
エノキ属－ムクノキ属	*Celtis-Aphananthe*	4	8	7	3	7	7	8	5	10	5	8	10	7	5	5	4	7	4	5	11	7	11	7	12	9	15	8
ヤドリギ属	*Viscum*	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カツラ属	*Cercidiphyllum*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
シキミ属	*Illicium*	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イスノキ属	*Distylium*	5	4	2	4	5	1	1	3	2	3	2	1	3	1	3	5	1	2	2	3	3	4	3	-	5	4	6
サクラ属近似種	cf. *Prunus*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
サンショウ属	*Zanthoxylum*	-	-	-	1	-	1	2	-	-	-	1	1	1	-	-	-	-	1	-	-	1	1	-	-	-	-	-
コクサギ属	*Orixa*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
キハダ属	*Phellodendron*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アカメガシワ属	*Mallotus*	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-
ウルシ属	*Rhus*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
モチノキ属	*Ilex*	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	2	-	-	-	-	-	-	1	-	1
ニシキギ科	Celastraceae	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カエデ属	*Acer*	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-
トチノキ属	*Aesculus*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ムクロジ属	*Sapindus*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ブドウ属	*Vitis*	1	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
ノブドウ属	*Ampelopsis*	-	-	-	1	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-
ツバキ属	*Camellia*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ジンチョウゲ科	Thymelaeaceae	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
グミ属	*Elaeagnus*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ウコギ科	Araliaceae	-	-	-	1	-	2	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1
アオキ属	*Aucuba*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ミズキ属	*Cornus*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カキ属	*Diospyros*	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ハイノキ属	*Symplocos*	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
エゴノキ属	*Styrax*	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イボタノキ属	*Ligustrum*	1	-	-	-	2	1	1	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1
トネリコ属	*Fraxinus*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
ティカカズラ属	*Trachelospermum*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ニワトコ属近似種	cf. *Sambucus*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ガマズミ属	*Viburnum*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
スイカズラ属	*Lonicera*	-	-	2	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	3	-	1	-	-	-	-
草本																												
ガマ属	*Typha*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1
ミクリ属	*Sparganium*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
サジオモダカ属	*Alisma*	1	4	1	1	1	-	-	2	2	2	-	2	-	2	3	1	1	-	-	4	3	1	1	-	2	1	2
オモダカ属	*Sagittaria*	10	2	13	10	7	2	6	5	7	2	1	3	11	7	7	1	3	7	8	3	5	7	7	4	-	1	4
クロモ	*Hydrilla verticillata* Royle.	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
スブタ属－ミズオオバコ属	*Blyxa - Ottelia*	-	-	7	-	3	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
イネ科	Gramineae	346	413	446	181	413	296	394	340	448	281	363	197	209	144	245	156	172	309	244	310	234	196	236	176	305	168	206
カヤツリグサ科	Cyperaceae	15	32	31	19	16	27	31	24	18	17	16	10	14	10	19	15	19	20	18	41	21	45	41	26	39	32	11
ホシクサ属	*Eriocaulon*	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
ツユクサ属	*Commelina*	1	-	1	-	-	-	-	1	1	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イボクサ属	*Aneilema*	1	-	-	-	1	-	2	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	2
ミズアオイ属	*Monochoria*	5	8	7	1	5	6	5	11	5	7	4	1	3	4	8	1	2	6	3	-	5	7	4	1	4	2	5
ユリ科	Liliaceae	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アヤメ科	Iridaceae	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クワ科	Moraceae	1	1	1	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	1	1	1	1	2	-
キシキシ属	*Rumex*	-	-	1	1	1	-	-	-	3	1	1	-	-	-	1	2	-	-	1	1	2	2	4	1	-	-	1
サナエタデ節－ウナギツカミ節	*Polygonum* sect. Persicaria-Echinocaulon	2	1	4	3	2	3	2	1	2	10	6	-	2	1	4	3	-	4	3	-	3	1	1	2	1	1	2
イタドリ節	*Polygonum* sect. Reynoutria	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アカザ科－ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	-	2	-	1	-	-	-	1	-	-	-	2	-	1	2	-	3	3	-	-	2	1	2	1	-	1	1
ナデシコ科	Caryophyllaceae	-	2	-	1	2	3	2	1	-	2	1	2	2	2	3	-	1	1	1	4	-	-	-	4	3	1	1
コウホネ属	*Nuphar*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カラマツソウ属	*Thalictrum*	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-
他のキンポウゲ科	other Ranunculaceae	1	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-
アブラナ科	Cruciferae	3	2	3	2	-	2	3	-	3	2	6	-	1	5	5	1	1	1	3	3	2	3	3	4	2	2	3
ワレモコウ属	*Sanguisorba*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
他のバラ科	other Rosaceae	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-
マメ科	Leguminosae	-	-	-	1	-	2	-	1	-	-	1	1	1	1	-	1	1	2	-	1	1	1	1	2	-	1	-
カタバミ属	*Oxalis*	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
トウダイグサ科	Euphorbiaceae	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ツリフネソウ属	*Impatiens*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	1	2	1	1	-	-	-
ミソハギ属	*Lythrum*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
キカシグサ属	*Rotala*	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-
ヒシ属	*Trapa*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アリノトウグサ属	*Haloragis*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
セリ科	Umbelliferae	1	1	1	1	-	1	-	4	4	2	3	1	1	1	2	1	2	2	2	1	1	2	2	3	1	-	3
シソ科	Labiatae	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
ナス属	*Solanum*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
オキノツメ属	*Hygrophila*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
オオバコ属	*Plantago*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	2	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-
アカネ属－ヤエムグラ属	*Rubia - Galium*	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヘクソカズラ属	*Paederia*	-	-	-	-	2	2	2	1	-	-	1	1	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1
オミナエシ属	*Patrinia*	1	-	-	1	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
ゴキツル属－アマチャツル属	*Actinostemma - Gynostemma*	-	-	1	-	-	1	-	2	-	-	-	1	1	-	1	1	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-
ヨモギ属	*Artemisia*	5	3	7	4	10	4	5	6	6	11	12	6	9	10	6	5	4	12	9	7	4	3	13	12	9	9	2
他のキク亜科	other Tubuliflorae	9	4	5	2	1	3	5	2	4	1	3	-	6	3	2	2	2	3	7	6	3	3	2	1	3	2	-
タンポポ亜科	Liguliflorae	-	-	2	4	1	1	1	1	1	1	1	1	1	-	1	-	2	1	1	2	-	-	3	-	1	1	-
シダ植物																												
ヒカゲノカズラ属	*Lycopodium*	1	3	2	-	2	1	3	-	3	-	3	3	-	-	-	1	1	1	1	2	-	-	-	1	3	2	-
ミズワラビ属	*Ceratopteris*	-	-	2	-	1	-	2	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	2
サンショウモ	*Salvinia natans*	-	-	-	-	1	-	1	2	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
単条型胞子	Monolete spore	7	8	13	3	5	13	12	11	12	8	9	8	9	4	11	2	9	1	4	4	6	6	7	5	8	5	4
三条型胞子	Trilete spore	-	1	2	1	-	1	3	2	1	1	-	5	-	-	5	3	-	-	2	2	3	3	1	-	1	3	1
緑藻類																												
クンショウモ属	*Pediastrum*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
樹木花粉	Arboreal pollen	210	209	212	297	232	303	220	209	225	207	202	211	205	219	216	158	168	215	228	227	214	204	218	221	206	158	205
草本花粉	Nonarboreal pollen	402	478	532	234	465	355	458	407	504	344	424	230	261	193	314	195	215	376	303	386	290	277	324	240	372	225	245
シダ植物胞子	Spores	8	12	19	4	9	15	21	16	16	9	12	16	10	4	16	6	10	2	8	8	9	9	8	6	12	10	7
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	620	699	763	535	706	573	699	632	745	560	638	457	476	416	546	359	393	593	539	621	513	490	550	467	590	393	457
不明花粉	Unknown pollen	23	24	19	16	28	12	32	7	31	34	19	9	14	13	7	1	6	5	18	39	37	26	29	27	16	13	17

T．－C．はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupresaceaeを示す

表3（その3）産出花粉化石一覧表

和名	学名	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65
樹木														
マキ属	*Podocarpus*	3	3	1	6	2	5	2	5	5	-	1	2	-
モミ属	*Abies*	5	5	3	5	8	4	2	3	6	3	2	3	4
ツガ属	*Tsuga*	-	2	2	2	1	3	2	2	1	3	2	8	1
トウヒ属	*Picea*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
マツ属単維管束亜属	*Pinus* subgen. *Haploxylon*	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	2	1
マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	17	31	23	16	12	10	16	8	14	24	28	29	20
マツ属（不明）	*Pinus* (Unknown)	3	4	2	1	-	1	3	3	4	6	7	6	3
コウヤマキ属	*Sciadopitys*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
スギ	*Cryptomeria japonica* D. Don	11	22	21	16	12	16	8	8	8	17	16	17	5
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	T.－C.	3	1	3	3	-	1	5	3	2	3	1	3	1
ヤナギ属	*Salix*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヤマモモ属	*Myrica*	1	4	3	1	3	3	1	1	2	4	2	1	1
サワグルミ属－クルミ属	*Pterocarya-Juglans*	-	1	-	-	-	3	-	-	1	1	-	-	-
クマシデ属－アサダ属	*Carpinus - Ostrya*	3	3	2	3	1	2	4	8	2	4	4	2	2
カバノキ属	*Betula*	1	-	-	1	-	1	-	1	2	-	-	-	-
ハンノキ属	*Alnus*	3	-	2	1	-	2	1	5	5	7	5	3	10
ブナ	*Fagus crenata* Blume	-	-	-	1	1	1	-	-	-	-	-	-	-
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	19	23	16	17	13	36	19	25	19	17	27	23	25
コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	103	90	85	118	79	199	106	86	142	67	65	47	55
シイノキ属－マテバシイ属	*Castanopsis - Pasania*	52	23	43	42	63	103	68	63	50	25	61	8	50
ニレ属－ケヤキ属	*Ulmus - Zelkova*	-	1	1	1	-	-	-	5	1	1	-	1	2
エノキ属－ムクノキ属	*Celtis-Aphananthe*	2	8	5	2	6	9	4	-	4	5	2	1	4
ヤドリギ属	*Viscum*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カツラ属	*Cercidiphyllum*	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
シキミ属	*Illicium*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イスノキ属	*Distylium*	2	3	1	3	2	-	3	2	1	4	5	1	1
サクラ属近似種	cf. *Prunus*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
サンショウ属	*Zanthoxylum*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
コクサギ属	*Orixa*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
キハダ属	*Phellodendron*	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
アカメガシワ属	*Mallotus*	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
ウルシ属	*Rhus*	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
モチノキ属	*Ilex*	-	-	-	-	1	-	-	-	-	2	1	-	-
ニシキギ科	Celastraceae	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カエデ属	*Acer*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
トチノキ属	*Aesculus*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ムクロジ属	*Sapindus*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ブドウ属	*Vitis*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ノブドウ属	*Ampelopsis*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ツバキ属	*Camellia*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ジンチョウゲ科	Thymelaeaceae	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
グミ属	*Elaeagnus*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	2	-
ウコギ科	Araliaceae	1	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-
アオキ属	*Aucuba*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ミズキ属	*Cornus*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カキ属	*Diospyros*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ハイノキ属	*Symplocos*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
エゴノキ属	*Styrax*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イボタノキ属	*Ligustrum*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
トネリコ属	*Fraxinus*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
ティカカズラ属	*Trachelospermum*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ニワトコ属近似種	cf. *Sambucus*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ガマズミ属	*Viburnum*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
スイカズラ属	*Lonicera*	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
草本														
ガマ属	*Typha*	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ミクリ属	*Sparganium*	-	-	-	1	-	-	-	-	2	-	1	-	-
サジオモダカ属	*Alisma*	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	1	1	-
オモダカ属	*Sagittaria*	1	2	2	7	4	7	7	3	5	6	2	1	1
クロモ	*Hydrilla verticillata* Royle.	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
スブタ属－ミズオオバコ属	*Blyxa - Ottelia*	-	-	-	1	-	-	-	-	-	2	-	-	-
イネ科	Gramineae	136	183	106	163	106	225	168	160	245	348	189	328	231
カヤツリグサ科	Cyperaceae	45	31	47	35	15	49	24	41	52	49	37	44	31
ホシクサ属	*Eriocaulon*	-	-	-	-	-	-	-	1	-	2	-	1	-
ツユクサ属	*Commelina*	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-
イボクサ属	*Aneilema*	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ミズアオイ属	*Monochoria*	-	1	2	-	3	-	2	2	2	6	2	3	-
ユリ科	Liliaceae	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アヤメ科	Iridaceae	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クワ科	Moraceae	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	2	-	1
ギシギシ属	*Rumex*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
サナエタデ節－ウナギツカミ節	*Polygonum* sect. Persicaria-Echinocaulon	-	2	-	3	-	2	1	1	3	1	3	4	2
イタドリ節	*Polygonum* sect. Reynoutria	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アカザ科－ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	2	-	-	-	-	-	-	-	-	4	10	7	3
ナデシコ科	Caryophyllaceae	-	-	-	1	-	-	1	1	-	3	3	5	8
コウホネ属	*Nuphar*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カラマツソウ属	*Thalictrum*	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
他のキンポウゲ科	other Ranunculaceae	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	1
アブラナ科	Cruciferae	1	1	-	1	-	1	-	1	2	9	6	8	5
ワレモコウ属	*Sanguisorba*	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
他のバラ科	other Rosaceae	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-
マメ科	Leguminosae	-	-	-	1	-	-	-	1	1	-	3	-	-
カタバミ属	*Oxalis*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
トウダイグサ科	Euphorbiaceae	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
ツリフネソウ属	*Impatiens*	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-
ミソハギ属	*Lythrum*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
キカシグサ属	*Rotala*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヒシ属	*Trapa*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アリノトウグサ属	*Haloragis*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
セリ科	Umbelliferae	1	2	3	1	1	3	3	2	1	3	6	6	6
シソ科	Labiatae	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ナス属	*Solanum*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
オギノツメ属	*Hygrophila*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
オオバコ属	*Plantago*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	1
アカネ属－ヤエムグラ属	*Rubia - Galium*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヘクソカズラ属	*Paederia*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
オミナエシ属	*Patrinia*	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
ゴキツル属－アマチャヅル属	*Actinostemma - Gynostemma*	-	1	1	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-
ヨモギ属	*Artemisia*	8	4	7	9	6	14	9	10	9	10	28	6	12
他のキク亜科	other Tubuliflorae	-	2	1	1	1	4	1	2	1	2	4	3	3
タンポポ亜科	Liguliflorae	1	1	1	1	3	4	1	1	1	2	3	2	2
シダ植物														
ヒカゲノカズラ属	*Lycopodium*	-	-	-	-	1	1	-	1	-	4	4	7	3
ミズワラビ属	*Ceratopteris*	-	-	-	-	-	-	1	1	1	-	-	1	-
サンショウモ	*Salvinia natans*	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-
単条型胞子	Monolete spore	3	3	4	8	4	5	4	11	2	25	31	39	19
三条型胞子	Trilete spore	1	1	-	1	-	1	2	1	4	12	10	8	5
緑藻類														
クンショウモ属	*Pediastrum*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
樹木花粉	Arboreal pollen	229	224	213	239	204	401	246	230	281	195	232	159	186
草本花粉	Nonarboreal pollen	195	231	171	227	141	309	222	227	328	448	307	421	310
シダ植物胞子	Spores	4	4	4	9	6	7	7	15	7	41	45	55	28
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	428	459	388	475	351	717	475	472	616	684	584	635	524
不明花粉	Unknown pollen	15	23	9	8	10	9	16	11	4	22	37	17	18

T．－C．はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupresaceaeを示す

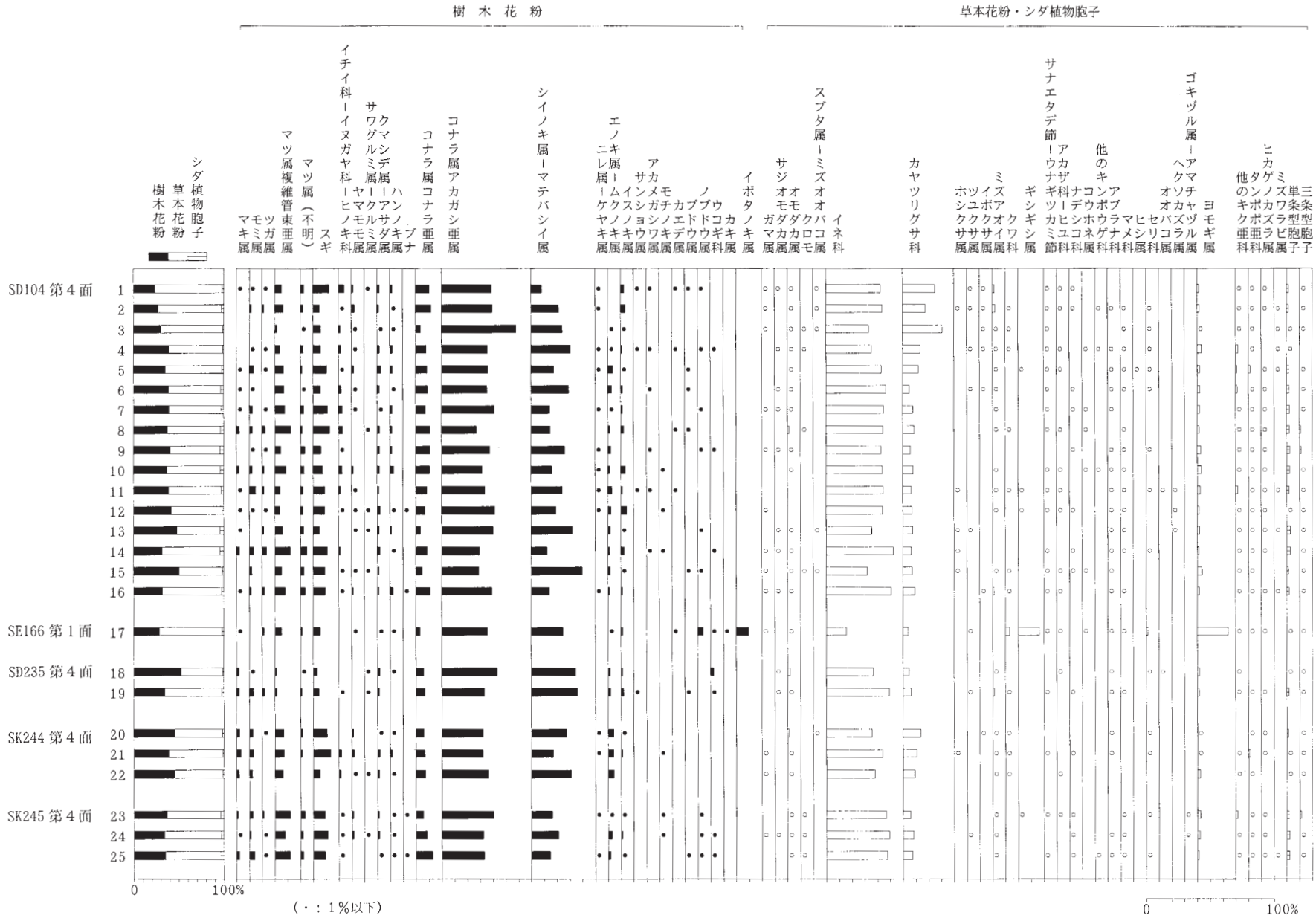
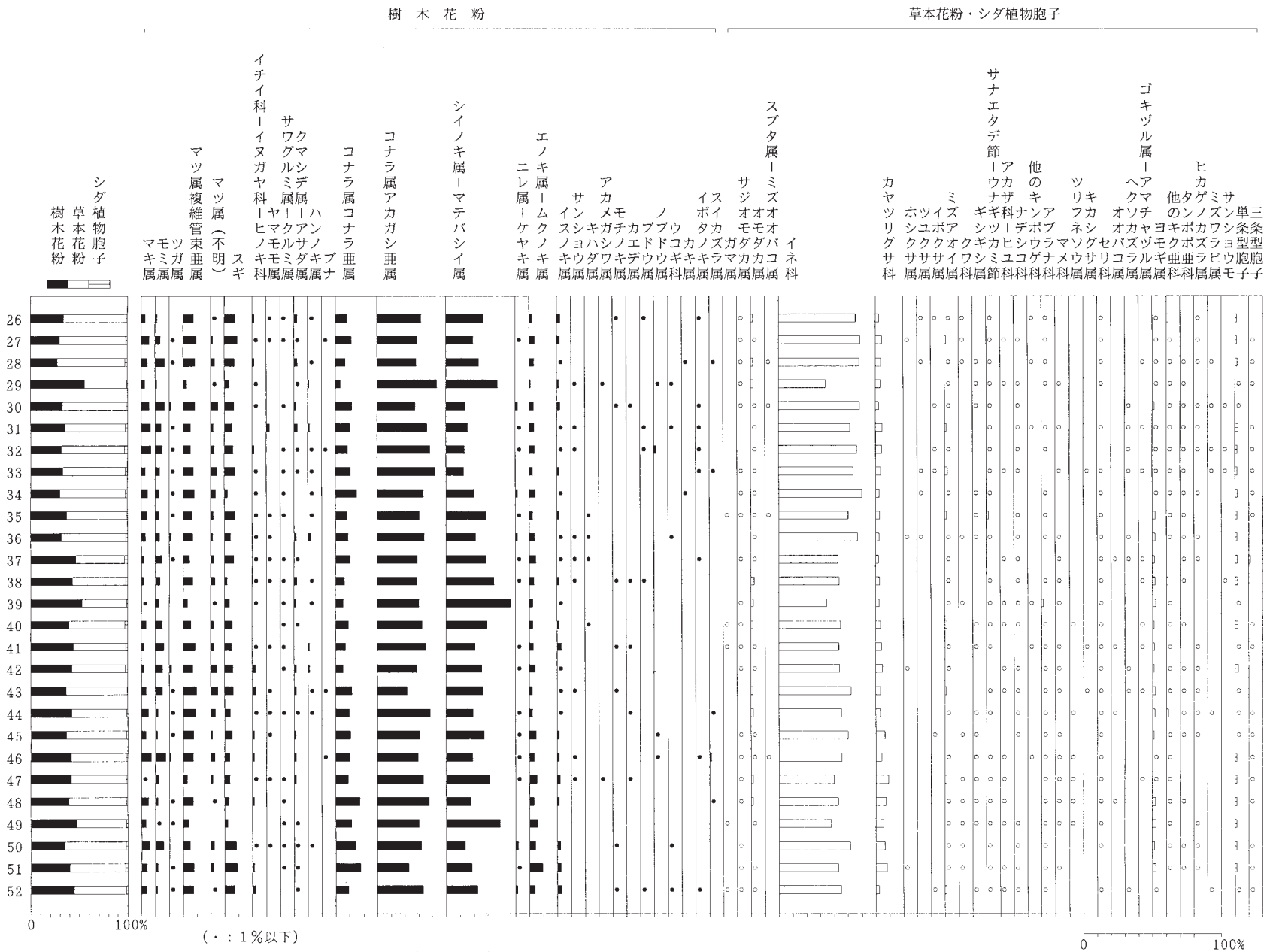


図1　SD104，SE166，SD235，SK244，SK245の主要花粉化石分布図
（樹木花粉は樹木花粉総数，草本花粉・胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した）


樹木花粉
草本花粉・シダ植物胞子
樹木花粉
草本花粉
シダ植物胞子
マキ属
モミ属
ツガ属
マツ属複維管束亜属
マツ属（不明）
スギ
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科
サワラ－ヒノキ属
クルミ属－ヤマモミ属
マツ－アカマツ属
ハンノキ属
コナラ属コナラ亜属
コナラ属アカガシ亜属
シイノキ属－マテバシイ属
ニレ属－ケヤキ属
エノキ属－ムクノキ属
サンショウ属
アカメガシワ属
モチノキ属
カエデ属
ノブドウ属
ウコギ科
イスノキ属
ボタン属
カヤツリグサ科
ホツツジ属
シュロ属
ススキ属
ススキ属
ススキ属
ミヤコワラビ属
イネ科
スブタ属－ミズオモダカ属
ミズオモダカ属
ミズオモダカ属
ジュンサイ属
カヤツリグサ科
ホツツジ属
シュロ属
ススキ属
ススキ属
ススキ属
ミヤコワラビ属
ギボウシ属
ギボウシ節
ヒメユリ属
ヒメユリ節
ヒメユリ属
ヒメユリ科
ヒメユリ科
ヒメユリ科

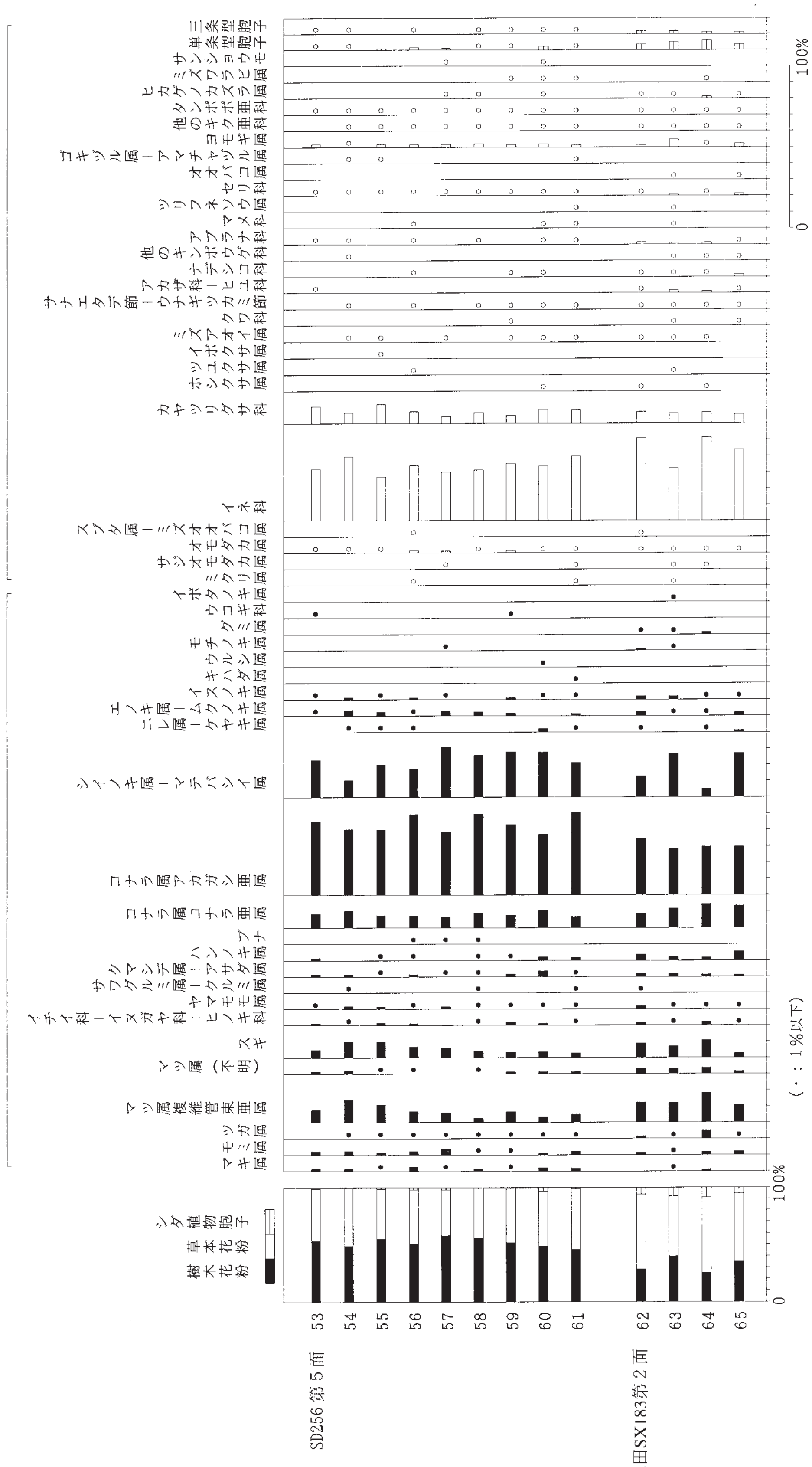
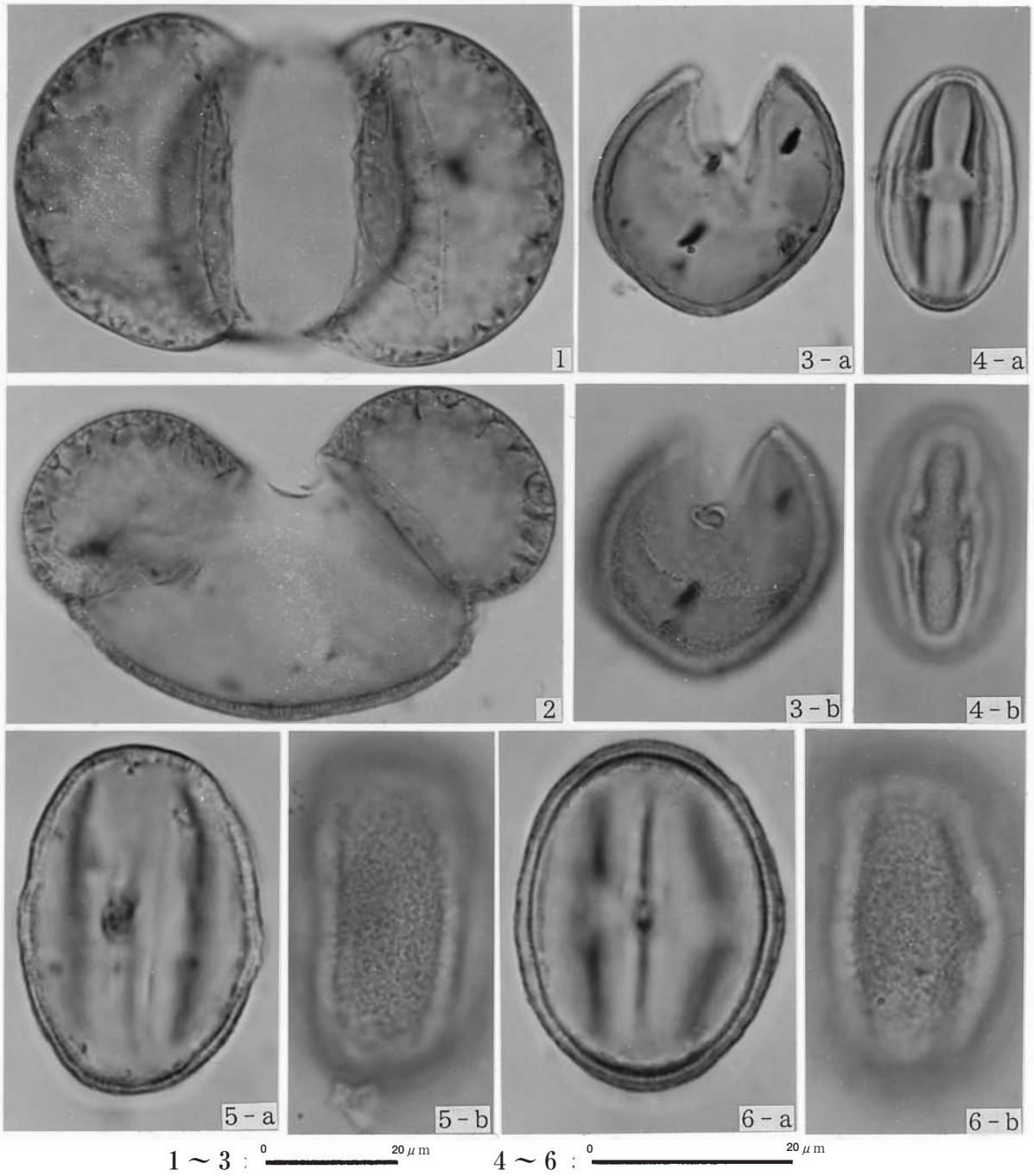


図3　SD256，SX183の主要花粉化石分布図
（樹木花粉は樹木花粉総数，草本花粉・胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した）



図版1　下月隈C遺跡の花粉化石（scale bar：20μm）

1：マキ属　PLC.SS 3361　No.19

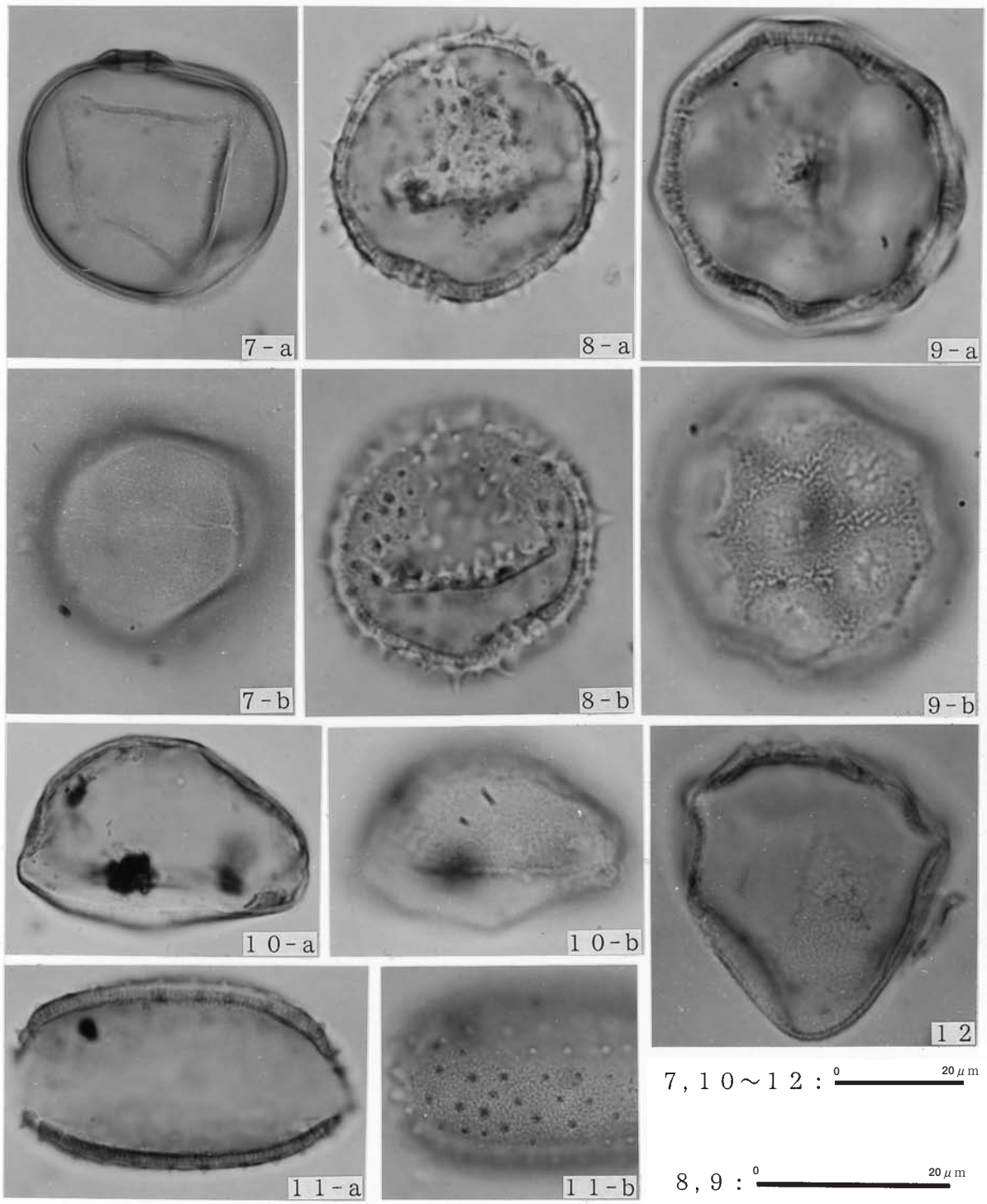
2：マツ属複維管束亜属　PLC.SS 3369　No.56

3：スギ　PLC.SS 3358　No.19

4：シイノキ属－マテバシイ属　PLC.SS 3360　No.19

5：コナラ属コナラ亜属　PLC.SS 3359　No.19

6：コナラ属アカガシ亜属　PLC.SS 3362　No.19



図版２　下月隈Ｃ遺跡の花粉化石（scale bar：20μm）

７：イネ科　PLC.SS 3368　No.56
８：オモダカ属　PLC.SS 3364　No.19
９：サジオモダカ属　PLC.SS 3366　No.52
１０：ミズアオイ属　PLC.SS 3365　No.19
１１：ツユクサ属　PLC.SS 3363　No.19
１２：カヤツリグサ科　PLC.SS 3367　No.56

3．土 壌 分 析（植物珪酸体）

鈴木　茂（パレオ・ラボ）

はじめに

イネ科植物は別名珪酸植物とも呼ばれ、根より大量の珪酸分を吸収することが知られている。この吸収された珪酸分が葉や茎の細胞内に沈積・形成されたものを植物珪酸体（機動細胞珪酸体や単細胞珪酸体など）と言い、そのうち機動細胞珪酸体については藤原（1976）や藤原・佐々木（1978）など、イネを中心としたイネ科植物の形態分類の研究が進められている。また、土壌中より検出されるイネの機動細胞珪酸体個数から稲作の有無についての検討も行われている（藤原　1984）。このような研究成果から、近年植物珪酸体分析を用いて稲作の検討が各地・各遺跡で行われており、本遺跡においても同様の目的から植物珪酸体分析を行い、稲作の有無について検討した。

（1）試料と分析方法

分析用試料はSD104，SE166，SD235，SK244，SK245，SD114，SD256および水田（SX183）より採取された65試料である。各試料の土相はおおむね黒～黒褐色の粘土や砂質粘土である。植物珪酸体分析はこの65試料について下記の方法にしたがって行った。

秤量した試料を乾燥後再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約１ｇ（秤量）をトールビーカーにとり、約0.02ｇのガラスビーズ（直径約40μｍ）を加える。これに30%の過酸化水素水を約20～30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により10μｍ以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作成し、検鏡した。同定および計数は機動細胞珪酸体についてガラスビーズが300個に達するまで行った。

（2）分析結果

同定・計数された各植物の機動細胞珪酸体個数とガラスビーズ個数の比率から試料１ｇ当りの各機動細胞珪酸体個数を求め（表１）、それらの分布を図１（溝SD104，井戸SE166，SD235，土壙SK244，土壙SK245）、図２（溝SD114）、図３（溝SD256および水田SX183）に示した。以下に示す各分類群の機動細胞珪酸体個数は試料１ｇ当りの検出個数である。

検鏡の結果、全試料よりイネの機動細胞珪酸体が検出され、ほとんどの試料で10,000個を越えている。そのうち最も多く得られたのは試料No.１の約61,000個、反対に少ないのはNo.32の2,600個である。またイネの穎に形成される珪酸体の破片も少量ながら９試料において観察され、図表には示していないがイネ型の単細胞珪酸体も若干認められる（写真図版参照）。

イネ以外ではネザサ節型が最も多く、多くの試料で100,000個を越え、No.41,42では300,000個に達している。次いでウシクサ族が20,000個前後を示して多く、ヨシ属も10,000個前後と生産数が少ないヨシ属としては比較的多く検出されている。クマザサ属型は半数近い試料で10,000個を越え，キビ族は多くの試料で10,000個～5,000個を示している。その他、サヤヌカグサ属，シバ属，ジュズダマ属などが若干得られている。

（3）稲作について

上記したように、全試料よりイネの機動細胞珪酸体が検出された。検出個数の目安として水田址の検証例を示すと、福岡市の板付北遺跡では、イネの機動細胞珪酸体が試料１ｇ当り5,000個以上という

高密度で検出された地点から推定された水田址の分布範囲と、実際の発掘調査とよく対応する結果が得られている（藤原　1984)。こうしたことから、稲作の検証としてこの5,000個を目安に、機動細胞珪酸体の産出状態や遺構の状況をふまえて判断されている。下月隈Ｃ遺跡第５次調査試料においては多くが20,000個以上と5,000個をはるかに越える個数が得られており、検出個数だけからみると各地点で稲作が行われていた可能性は高いと判断される。また、同試料を用いて行われた花粉分析結果をみるとイネ科花粉が非常に多く認められ、サジオモダカ属（サジオモダカ）やオモダカ属（オモダカ，ウリカワ），ミズアオイ属（コナギ）などの水田雑草を含む分類群も観察されている。以上のことから水田稲作が行われていた可能性は非常に高いと判断されるが、試料は溝状遺構や土坑，井戸址の埋積土より採取されたものであることからこうした遺構の周辺で行われていたと考えられよう。また分析を行った遺構の最下部（５面）が弥生時代初期から中期、最上部（２面）が奈良時代と出土遺物から考えられており、これらの時代をとおして下月隈Ｃ遺跡においては稲作が行われていたと判断されよう。

なお、唯一5,000個に達していないNo.32（2,600個）について、同じＶ-17区の他試料では5,000個を越えており、イネ科花粉も多量に検出され、上記水田雑草類を含む分類群も観察されていることから、本地点付近でも稲作が行われていた可能性は高いと判断されよう。

（４）遺跡周辺のイネ科植物

ネザサ節型が最も多く検出されており、このネザサ節型のササ類（ゴキダケ，ケネザサ(ミヤコネザサ)など）は日のあたる開けたところでの生育が考えられる。また次に多く観察されているウシクサ族（ススキ，チガヤなど）も同様のところでの生育が考えられる。本遺跡周辺には花粉分析から照葉樹林が広がっていたと考えられ、この林縁部や上記水田稲作地周辺空き地などにケネザサ－ススキ群集といった草地が分布していたことが推測される。一方クマザサ属型のササ類（スズダケ，ミヤコザサなど）については、主に林下での生育が予想され、遺跡周辺に成立していたであろう森林の下草的存在でみられたと推測される。

ヨシ属も多く検出されており、溝状遺構内や上記水田内およびその周辺水路などにヨシやツルヨシといったヨシ属が多く生育していたのであろう。またサヤヌカグサ属（アシカキなど）やジュズダマ属（ジュズダマ）もこの溝や水路内に一部生育していたと推測される。シバ属（ノシバなど）は比較的乾いたところでの生育が予想され、水田周辺の畦などに一部分布していたことが考えられよう。

なおキビ族については、その形態からアワ，ヒエ，キビといった栽培種によるものか、エノコログサ，スズメノヒエ，タイヌビエなどの雑草類によるものかについて現時点においては分類できず不明であるが、上記したように水田稲作地が予想されていることからここではエノコログサやタイヌビエなどの水田雑草類に由来するキビ族が主体と推察される。

引用文献

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（１）－数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，p.15-29.

藤原宏志（1984）プラント・オパール分析法とその応用－先史時代の水田址探査－．　考古学ジャーナル，227，p.2-7.

藤原宏志・佐々木彰（1978）プラント・オパール分析法の基礎的研究（２）－イネ（Oryza）属植物における機動細胞珪酸体の形状－．　考古学と自然科学，　11，　p.9-20.

表１　試料１ｇ当たりのプラント・オパール個数

試料番号	イネ（個/ｇ）	イネ穎破片（個/ｇ）	ネザサ節型（個/ｇ）	クマザサ属型（個/ｇ）	他のタケ亜科（個/ｇ）	サヤヌカグサ属（個/ｇ）	ヨシ属（個/ｇ）	シバ属（個/ｇ）	キビ族（個/ｇ）	ウシクサ族（個/ｇ）	ジュズダマ属（個/ｇ）	不明（個/ｇ）
1	60,800	0	132,700	7,400	0	0	21,100	0	27,300	39,700	0	39,700
2	59,300	0	124,600	9,700	2,400	1,200	14,500	1,200	19,400	23,000	0	27,800
3	41,500	0	75,000	5,400	1,300	0	5,400	0	10,700	17,400	0	20,100
4	25,300	0	85,600	2,800	1,400	0	5,600	0	5,600	19,700	0	16,800
5	31,300	0	82,200	5,200	1,300	0	11,700	0	9,100	15,600	0	20,900
6	40,400	0	76,000	4,700	1,200	0	4,700	0	11,900	14,200	0	17,800
7	23,600	0	121,900	10,500	2,600	0	6,600	1,300	10,500	24,900	0	22,300
8	39,300	0	220,100	3,700	3,700	0	7,400	0	6,100	16,000	0	17,200
9	50,800	0	138,300	14,100	1,400	0	5,600	1,400	9,900	12,700	0	19,800
10	31,000	0	153,900	9,900	1,200	0	8,700	1,200	2,500	13,700	0	19,900
11	31,300	0	199,200	8,800	2,500	0	5,000	0	10,000	8,800	0	33,800
12	24,900	0	102,400	7,900	1,300	0	11,800	0	1,300	19,700	0	14,400
13	37,500	0	103,900	6,000	4,800	0	8,500	0	3,600	18,100	0	27,800
14	23,000	0	95,700	3,800	2,600	0	12,800	0	6,400	23,000	0	11,500
15	10,100	0	49,300	4,500	0	0	4,500	0	5,600	12,300	0	13,400
16	35,600	0	52,900	4,600	1,100	0	10,300	0	3,400	8,000	0	10,300
17	14,800	5,400	21,500	4,000	2,700	0	5,400	0	6,700	17,500	0	10,700
18	18,400	0	97,700	10,300	0	0	16,100	1,100	6,900	11,500	0	14,900
19	35,500	0	103,100	7,800	2,200	0	8,900	0	7,800	5,500	0	15,500
20	30,200	0	142,600	6,900	0	0	5,500	0	8,200	30,200	0	31,500
21	27,200	0	124,900	9,500	1,400	0	5,400	1,400	8,100	29,900	0	36,700
22	33,400	0	104,700	4,600	3,000	0	4,600	0	6,100	19,700	0	19,700
23	31,000	0	124,200	6,500	0	0	2,600	0	10,300	19,400	0	16,800
24	31,900	0	105,700	8,600	3,700	0	8,600	0	7,400	25,800	0	28,300
25	43,700	0	117,700	9,300	1,300	0	7,900	0	4,000	33,100	0	11,900
26	34,700	0	195,200	8,700	2,900	0	8,700	0	10,100	47,700	0	39,000
27	30,100	0	163,500	5,200	2,600	0	11,800	0	11,800	35,300	1,300	31,400
28	22,000	0	142,300	5,900	4,400	0	8,800	0	7,300	24,900	0	19,100
29	9,900	0	58,000	5,500	3,300	0	1,100	0	1,100	12,000	0	9,900
30	22,900	0	134,800	15,300	1,300	0	11,400	0	5,100	16,500	0	11,400
31	5,700	0	108,300	8,000	1,100	0	1,100	0	3,400	26,200	0	11,400
32	2,600	0	83,100	7,800	0	0	1,300	0	5,200	10,400	0	11,700
33	13,300	0	136,800	17,300	0	0	8,000	0	2,700	27,900	0	30,500
34	13,000	0	188,200	5,900	4,700	0	9,500	1,200	3,600	10,700	0	21,300
35	14,600	0	191,500	14,600	10,600	1,300	8,000	1,300	5,300	41,200	0	31,900
36	21,700	0	144,700	10,100	0	0	17,400	0	4,300	10,100	0	11,600
37	12,900	0	144,500	10,000	2,900	0	10,000	0	8,600	30,000	0	10,000
38	22,400	0	183,800	10,500	1,500	0	7,500	0	7,500	25,400	0	14,900
39	14,600	0	195,600	13,100	5,800	0	17,500	0	4,400	23,400	0	19,000
40	8,600	0	133,400	14,800	4,900	1,200	13,600	1,200	9,900	35,800	0	13,600
41	45,100	3,200	333,700	22,600	8,100	0	9,700	0	12,900	101,600	1,600	22,600
42	21,900	4,700	316,500	12,500	12,500	1,600	17,100	0	14,000	76,400	0	14,000
43	22,300	1,200	199,100	13,600	9,900	0	16,100	0	9,900	56,900	0	28,400
44	22,600	1,400	224,100	21,100	5,600	0	16,900	0	5,600	53,600	0	22,600
45	26,800	0	161,100	17,400	1,600	0	3,200	0	4,700	34,700	1,600	11,100
46	19,200	0	196,800	16,000	6,400	0	4,800	0	8,000	46,400	0	22,400
47	20,800	0	32,000	6,400	0	0	6,400	0	4,800	38,300	0	27,200
48	22,500	0	136,400	12,800	3,200	0	9,600	1,600	4,800	30,500	0	36,900
49	32,500	0	92,900	4,400	1,500	0	8,900	0	5,900	31,000	0	23,600
50	32,100	1,500	176,600	11,700	10,200	0	17,500	0	5,800	45,200	1,500	19,000
51	43,300	0	294,100	27,900	6,200	0	23,200	0	15,500	63,500	0	17,000
52	14,500	1,500	149,500	13,100	8,700	0	10,200	0	8,700	27,600	0	24700
53	23,000	1,800	81,400	7,100	5,300	0	8,800	0	3,500	15,900	0	15,900
54	31,000	0	101,300	4,900	4,900	0	21,200	0	9,800	22,900	0	27,800
55	11,800	0	200,200	9,800	2,000	0	13,700	0	2,000	21,600	0	27,500
56	24,300	0	144,700	14,900	4,100	0	25,700	1,400	0	1,400	0	35,200
57	15,600	0	152,400	15,600	1,300	1,300	24,800	1,300	3,900	15,600	0	37,800
58	18,700	0	146,400	10,500	4,700	0	10,500	0	4,700	39,800	0	26,900
59	27,000	0	147,000	11,900	3,200	1,100	19,500	0	2,200	30,300	0	19,500
60	6,400	0	113,500	3,200	3,200	0	19,300	0	6,400	20,300	1,100	21,400
61	14,700	0	106,900	4,200	4,200	1,000	8,400	0	7,300	15,700	1,000	24,100
62	15,400	0	16,500	5,100	1,000	0	3,100	0	4,100	11,300	0	16,500
63	15,900	0	11,200	900	0	0	3,700	900	1,900	10,300	0	11,200
64	14,600	0	13,500	3,100	1,000	0	6,200	2,100	3,100	5,200	0	13,500
65	19,600	1,100	16,400	6,500	0	0	2,200	0	2,200	9,800	0	12,000

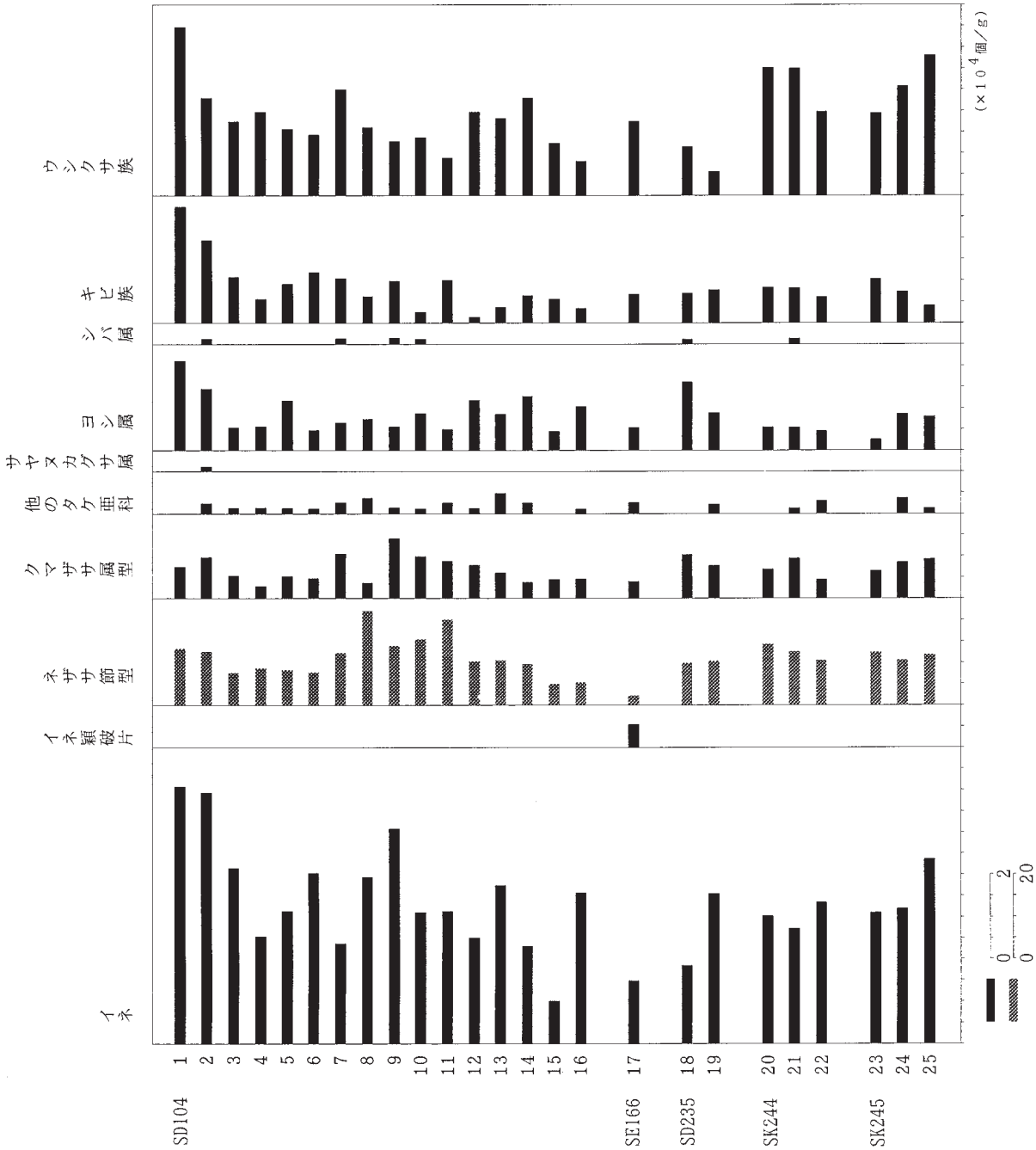


図1　SD104，SE166，SD235，SK244，SK245の機動細胞珪酸体分布図

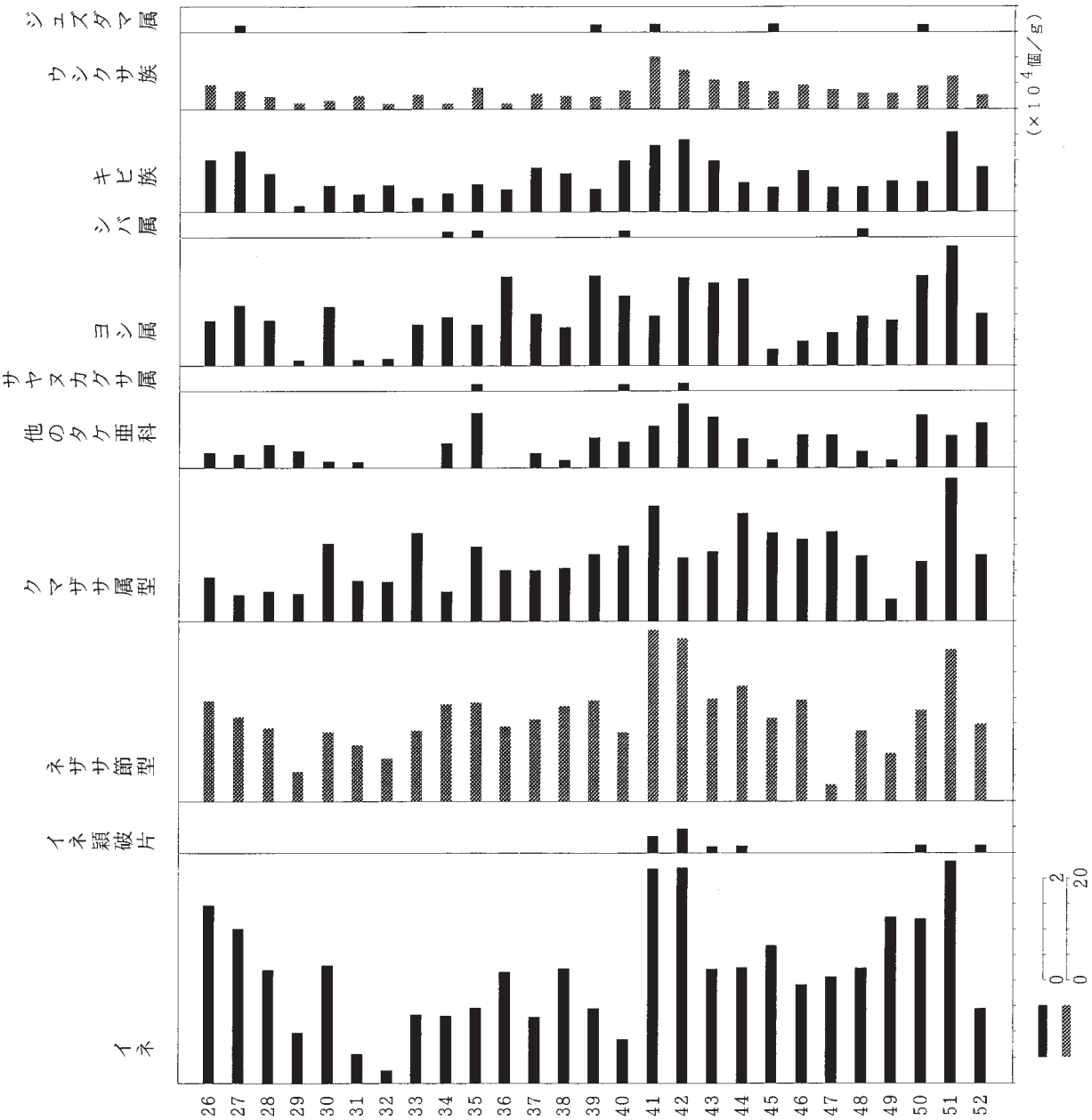


図2　SD114の機動細胞珪酸体分布図

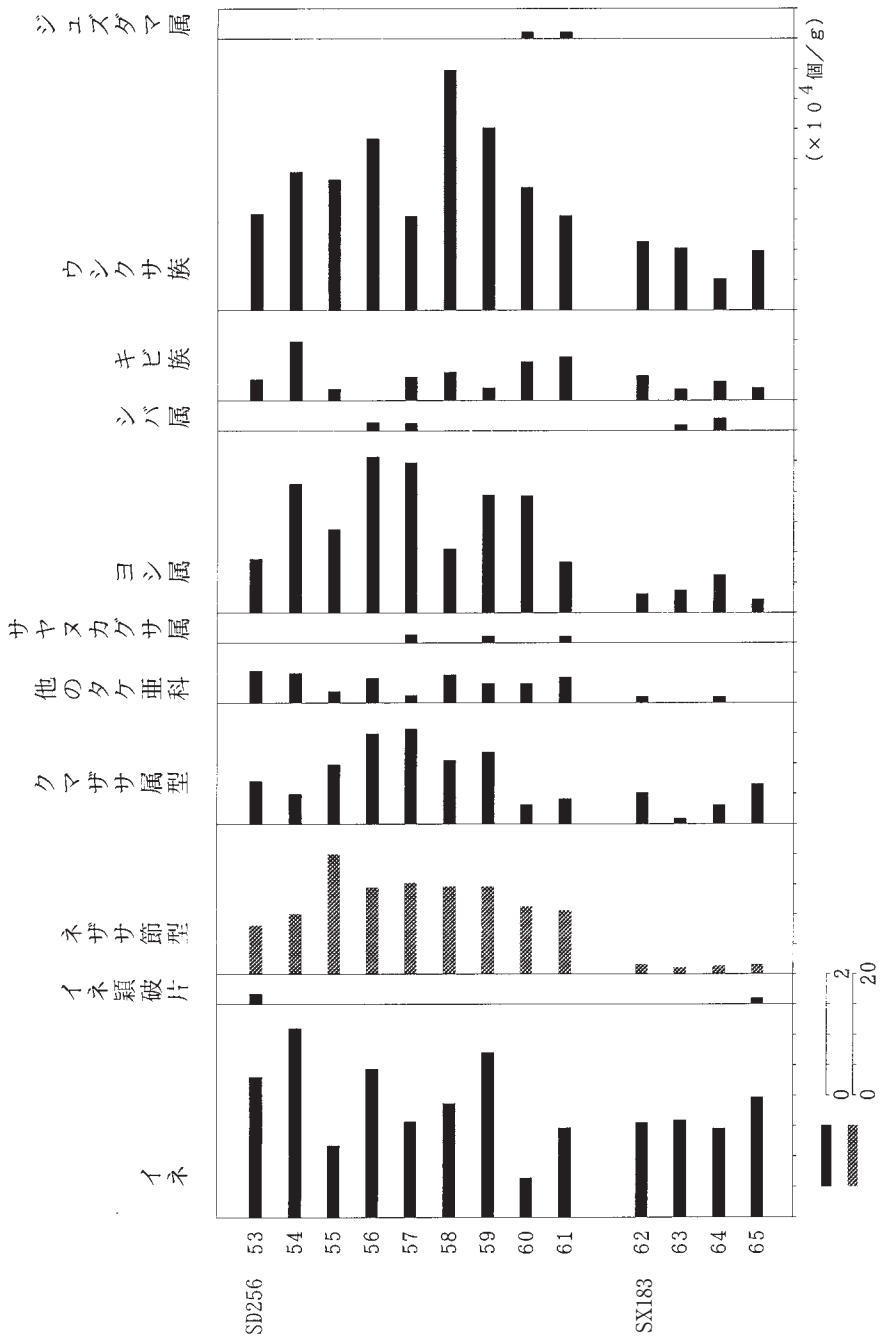
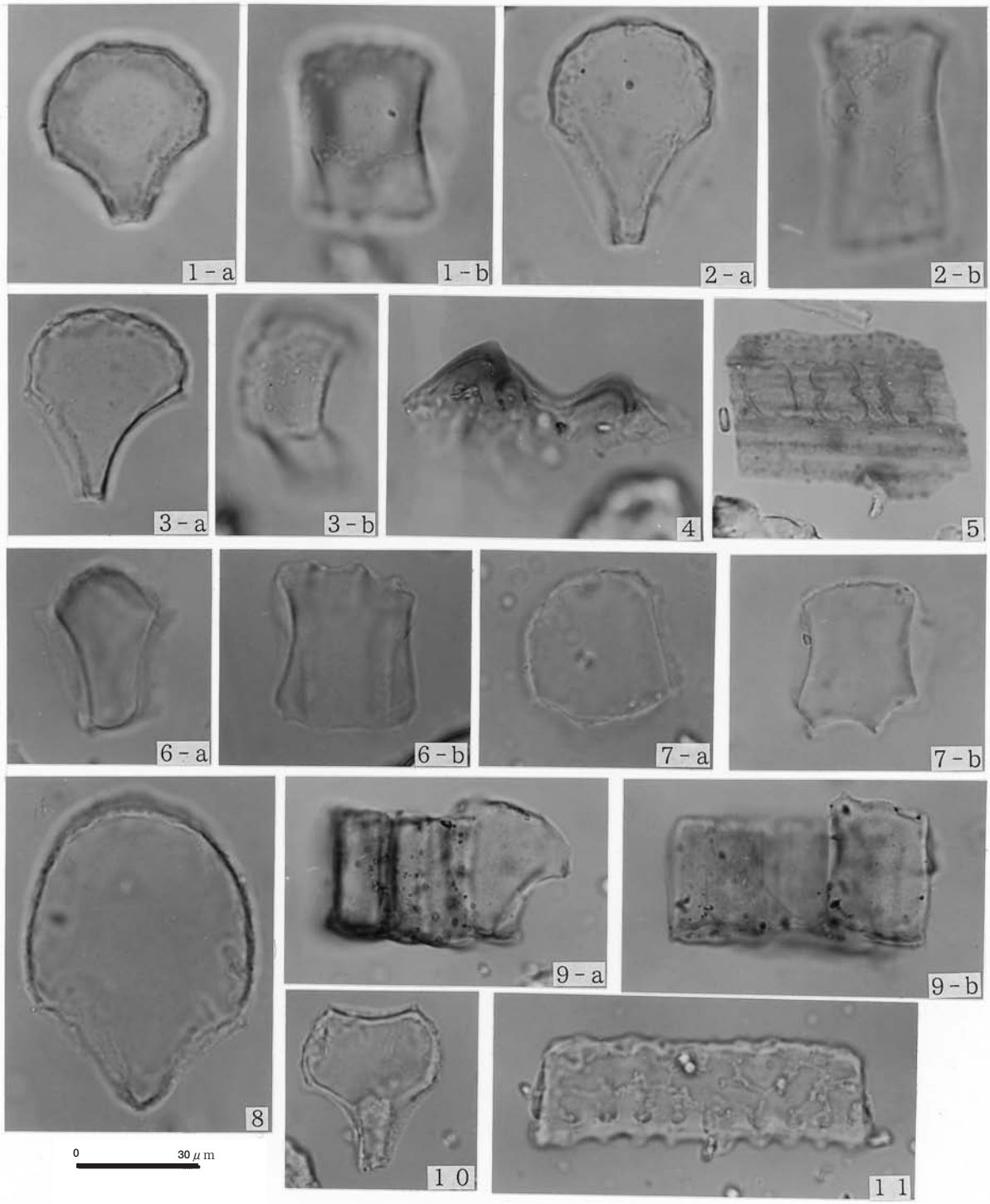


図3　SD256，SX183の機動細胞珪酸体分布図



図版　下月隈Ｃ遺跡の植物珪酸体（scale bar:30μm）

１～３：イネ（ａ：断面、ｂ：側面）１：No.20, ２：No.27, ３：No.57

４：イネ穎部破片　No.17

５：イネ型単細胞珪酸体列　No.47

６：ネザサ節型（ａ：断面、ｂ：側面）　No.57

７：クマザサ属型（ａ：断面、ｂ：側面）　No.29

８：ヨシ属（側面）　No.41

９：ウシクサ族（塊状，ａ：断面、ｂ：側面）　No.42

１０：シバ属（断面）　No.63　　１１：キビ族（側面）　No.53

4．土 壌 分 析（大型植物化石・種実）

鈴木　茂（パレオ・ラボ）

（1）試料と方法

大型植物化石の検討は、溝SD104･235･114･256、井戸SE166、土壙SK244･245および水田SX183の各遺構より採取された合計65試料(No.1～65)について行った。時代については、第2面が奈良時代、第4面が弥生時代後期～古墳時代初期、第5面が弥生時代草創期～中期と考えられている。なお、これら試料は、花粉化石、プラント・オパールの検討も行われ、試料番号は、それぞれ対応する。

大型植物化石の採集は、堆積物試料を0.25mm目の篩により水洗篩い分けを行い、残渣中から実体顕微鏡下で拾い上げた。

（2）出土した大型植物化石

出土した大型植物化石の一覧を表1に示した。以下に、遺構ごとに出土した大型植物化石の記載を示す。

［SD104、第4面南壁土層（No.1～16）：弥生時代後期～古墳時代初期］

木本では、キイチゴ属、ブドウ属のみが得られ、ブドウ属は若干目だった。草本は、ホタルイ属が全ての試料から得られ、最も多産した。また、スゲ属、カヤツリグサ属、ウキヤガラ、コナギも多くの試料から得られ、比較的多産した。他に、サガミトリゲモ、オモダカ科、ハリイ属、イヌコウジュ属などが数試料から得られ、シャジクモ属、スブタ属、コウホネ属、ハスノハカズラ、マメ科、ヒメビシ、ヒシ属などが稀に得られた。

［SE166、第1面R-11区（No.17）：奈良時代］

木本はフジ属のみが得られた。草本はスゲ属が最も多産し、カヤツリグサ属、タデ属も比較的多産した。他に、サガミトリゲモ、エノコログサ属、イボクサ、イヌコウジュ属なども得られた。

［SD235、第4面下層U-15区･第4面（No.18、19）：弥生時代後期～古墳時代初期］

木本はカラスザンショウ、ブドウ属、エゴノキが僅かに得られた。草本は、ホタルイ属が最も多産し、ヘラオモダカ、オモダカ科などが僅かに得られた。

［SK244、第4面U-11区（No.20～22）：弥生時代後期～古墳時代初期］

木本は全く得られなかった。草本は、ホタルイ属、タデ属、シロネ属がいずれの試料からも得られ、やや目立った。他に、ヒルムシロ属、ハリイ属、ギシギシ属、イヌコウジュ属などが得られた。

［SK245、第4面（No.23～25）：弥生時代後期～古墳時代初期］

木本は、カジノキ、キイチゴ属のみが僅かに得られた。草本は、ホタルイ属、スゲ属がやや多く得られ、ノブドウも僅かながらいずれの試料からも得られた。他に、ヘラオモダカ、オモダカ科、コナギなどが僅かに得られた。

［SD114、第5面V-15～17区･第5面上層～最々下層（溜）V-13区･第5面（No.26～52）：弥生時代草創期～中期］

V-15～17区は、いずれの地区も概ね類似した産状であり、ホタルイ属が最も多産し、オモダカ科、スゲ属も比較的多産した。また、僅かながらヘラオモダカ、コナギもいずれの地区からも得られた。他に、V-15区ではカナムグラ、ザクロソウ、ヒメビシなどが僅かに得られた。V-16区では、ヒルムシロ属、オモダカ属、ウキヤガラ、カナムグラなどが僅かに得られた。V-17区では、木本のエゴノキ、草本のヒルムシロ属、ミズ属、イヌコウジュ属などが僅かに得られた。

V-13区は、最々下層では、ホタルイ属が最も多産し、オモダカ科もいずれの試料からも得られた。また、コバノヒルムシロ、イボクサ、コナギ、メロン仲間などが僅かに得られた。最下層では、木本では、カラスザンショウ、エゴノキが僅かに得られた。草本は、ホタルイ属が最も多産し、オモダカ科、スゲ属もやや目立った。他に、ヒルムシロ属、ギシギシ属、ヒユ属、カタバミ属、メロン仲間などが僅かに得られた。下層では、ホタルイ属が最も多産し、オモダカ科、カヤツリグサ属もやや目立った。他に、イボクサ、コナギ、ヒユ属、ツリフネソウなどが僅かに得られた。中層では、ホタルイ属が最も多産し、オモダカ科、カヤツリグサ属もいずれの試料からも得られ、比較的多産した。他に、木本のブドウ属、草本のヒルムシロ属、サガミトリゲモ、オモダカ属、スゲ属、ウキヤガラ、イボクサ、コナギ、カナムグラ、ギシギシ属、シロザ近似種、ヒユ属、タガラシ、メロン仲間などが得られた。上層では、ホタルイ属が最も多産し、オモダカ科、スゲ属も比較的多産した。他に、木本のカラスザンショウ、ブドウ属、マタタビ属、ヒルムシロ属、ウキヤガラ、コナギ、カナムグラ、ヒユ属、マメ科、メロン仲間、ヒョウタン仲間などが得られた。

［SD256、第5面上層～下層N-18区（No.53～61）：弥生時代草創期～中期］

下層では、ホタルイ属が最も多産し、ヘラオモダカ、オモダカ科、スゲ属、カヤツリグサ属、コナギも比較的多産した。他に、木本のキイチゴ属、草本のヒルムシロ属、サガミトリゲモ、オモダカ属、ハリイ属、メロン仲間などが僅かに得られた。中層では、ホタルイ属が最も多産し、スゲ属、カヤツリグサ属も比較的多産した。他に、木本のブドウ属、草本のコバノヒルムシロ、ヒルムシロ属、サガミトリゲモ、オモダカ科、ハリイ属、コナギ、オニバス、タガラシなどが僅かに得られた。上層では、ホタルイ属がやや目立ち、スゲ属、ウキヤガラ、イボクサ、シロネ属、イヌコウジュ属が得られた。

［SX183、第2面（No.62～65）：奈良時代］

コナギ、ナデシコ科が最も多産する傾向であり、イボクサ、タガラシ、イヌコウジュ属なども比較的目立つ。他に、イトトリゲモ、サガミトリゲモ、ホタルイ属、ハリイ属、ミズ属、ヒユ属などが僅かに得られた。

（3）考　察

周辺の森林植生については、木本の出土分類群数･個数共に少なく、情報量に乏しい。第5面(弥生時代草創期～中期)では、キイチゴ属、カラスザンショウ、ブドウ属、マタタビ属、エゴノキ、エゴノキ属が僅かに得られた。第4面(弥生時代後期～古墳時代初期)では、カジノキ、キイチゴ属、カラスザンショウ、ブドウ属、エゴノキが得られ、ブドウ属が若干目立つほかは稀であった。第2面(奈良時代)では、フジ属のみが得られた。このような状況から、いずれの時期も付近には、森林と呼べるほどの林分が成立していた可能性は低いように思われる。以下では、草本類の組成から各遺構ごとに堆積環境等の推定を試みる。

第5面（弥生時代草創期～中期）の遺構

［SD114、V-15～17区･上層～最々下層（溜）V-13区（No.26～52）］

V-15～17区は、いずれの地区も概ね類似した産状であったが、ヒメビシ、ヒルムシロ属の出土から、幾分水深のある水域であったと予想される。流れも幾分伴っていたかもしれないが、さほど強い流れではなかったであろう。抽水ないし湿地性草本としては、ホタルイ属を主体に、ヘラオモダカ、オモダカ属、オモダカ科、スゲ属、ウキヤガラ、コナギ、ミズ属などがみられたであろう。また、カナムグラ、ザクロソウなどが生育する乾き気味の開けた場所もみられたであろう。

V-13区は、最々下層は、コバノヒルムシロが生育するような幾分水深のある水域であり、ホタルイ

属を主体にオモダカ科、イボクサ、コナギなどがみられた。最下層は、ヒルムシロ属が生育するような幾分水深のある水域であり、ホタルイ属を主体にオモダカ科、スゲ属などがみられた。また、最下層では、ギシギシ属、ヒユ属、カタバミ属といった路傍ないし畑地のような乾いた場所に生育するものもみられた。下層は、ホタルイ属を主体にオモダカ科、イボクサ、コナギ、ツリフネソウなどが混じる水位の低い湿地へと変化した。また、ヒユ属が生育するような乾き気味の場所もみられた。中層は、再び、ヒルムシロ属、サガミトリゲモ、ヒメビシが生育する幾分水深のある水域となり、ホタルイ属を主体にオモダカ属、オモダカ科、スゲ属、ウキヤガラ、イボクサ、コナギ、タガラシなどがみられた。また、カナムグラ、ギシギシ属、シロザ近似種、ヒユ属などが生育する乾き気味の場所もみられた。上層は、引き続き、ヒルムシロ属が生育する幾分水深のある水域であり、ホタルイ属を主体にオモダカ科、スゲ属、ウキヤガラ、コナギなどがみられた。また、カナムグラ、ヒユ属が生育する乾き気味の場所もみられた。以上のように、下層堆積期に水位が下がった可能性が考えられるほかは、やや水深のある水域であったと推定され、流れも幾分伴っていたと思われる。なお、下層を除く堆積期では、メロン仲間が出土し、上層ではヒョウタン仲間も出土した。V-13区付近において、これらが栽培されていたか、あるいは周辺の生活の場から流入したのであろう。また、上層で出土したマメ科も種子は小型であるが、炭化しており、栽培ないし利用されていた可能性が考えられる。

［SD256、上層～下層N-18区（No.53～61）］

下層は、ヒルムシロ属、サガミトリゲモが生育する幾分水深のある水域であり、流れも幾分伴っていたであろう。抽水ないし湿地性草本としては、ホタルイ属を主体にヘラオモダカ、オモダカ属、オモダカ科、スゲ属、ハリイ属などがみられたであろう。中層は、コバノヒルムシロ、ヒルムシロ属、オニバスが生育する幾分水深のある水域であった。流れも幾分伴っていたかもしれないが、さほど強くはなかったであろう。抽水ないし湿地性草本としては、ホタルイ属を主体にオモダカ科、スゲ属、ハリイ属、コナギ、タガラシなどがみられたであろう。上層は、ホタルイ属を主体にスゲ属、ウキヤガラ、イボクサ、シロネ属などが生育する水位の低い湿地になったと推定される。なお、下層においてメロン仲間が出土しており、付近で栽培されていたか、あるいは周辺の生活の場から流入したと予想される。

第4面（弥生時代後期～古墳時代初期）の遺構

［SD104、南壁土層（No.1～16）］

水湿地性草本が圧倒的に目立ち、沈水性ないし浮葉性のシャジクモ属、サガミトリゲモ、スブタ属、コウホネ属、ヒメビシ、ヒシ属の出土から、幾分水深のある水域であったと予想される。流れも幾分伴っていたかもしれないが、さほど強い流れではなかったであろう。浅い場所に生育する抽水ないし湿地性の草本としては、ホタルイ属を主体にヘラオモダカ、オモダカ属、オモダカ科、スゲ属、ウキヤガラ、コナギなどがみられたであろう。

［SD235、下層U-15区（No.18、19）］

ホタルイ属を主体にヘラオモダカ、オモダカ科などが混じる水位の低い湿地と予想される。乾いた場所にはザクロソウなどもみられたであろう。

［SK244、U-11区（No.20～22）］

ヒルムシロ属の出土から、幾分水深のある水域がみられ、ホタルイ属、ハリイ属、シロネ属などの抽水ないし湿地性草本がみられた。

［SK245（No.23～25）］

ヘラオモダカ、オモダカ科、ホタルイ属、スゲ属、コナギなどが生育する水の低い湿地の存在が予想される。

第2面(奈良時代)の遺構

［SE166、R-11区（No.17）］

サガミトリゲモの出土から、幾分水深のある水域の存在が予想される。草本類は、スゲ属を主体にエノコログサ属、カヤツリグサ属、イボクサ、タデ属、ノブドウ、イヌコウジュ属がみられたであろう。

［SX183（No.62～65）］

他遺構の試料の大半は、水湿地性草本が非常に目立ち、中でもホタルイ属が最も多産する傾向であった。これに対し、本試料はコナギ、ナデシコ科が最も多産する傾向であり、イボクサ、タガラシ、イヌコウジュ属などが比較的目立つというように様相が異なる。イトトリゲモ、サガミトリゲモの出土から幾分水深のある水域が予想されるが、これらも含め、多産したコナギや目立ったタガラシは、しばしば水田に生育するいわゆる水田雑草である。他遺構との組成の差異は、水田と水田以外の水域(湿地)という堆積環境の差異を反映したものではないだろうか。

（4）主な大型植物化石の形態記載

カジノキ　Broussonetia papyrifera (Linn.) Vent.　種子

卵形～楕円形で表面には微細な突起がある。基部には柄状の突起がある。

キイチゴ属　Rubus　核

黄褐色で腎形。表面には深い網目がある。

フジ属　Wisteria　芽

黒灰色。長卵形で下端が膨らみ、表面には縦方向に隆起がある。

カラスザンショウ　Zanthoxylum ailanthoides Sieb. et Zucc.　種子

種子は黒色で表面には粗い網目模様があり、一方の側面には細長い臍がある。

ブドウ属　Vitis　種子

広卵形～卵形で先端は尖り気味。背面に匙状の臍があり、腹面に穴が2つある。大きさ3～4mm程度でヤマブドウ以外のブドウ属と思われる。

マタタビ属　Actinidia　種子

表面には網目紋があり、マタタビ属であるが、破片であるためマタタビ、サルナシなどの区別には至らなかった。

エゴノキ　Styrax japonica Sieb. et Zucc.　種子

表面には細かい網目紋があってややざらつき、3本の溝が縦方向に走る。細かい破片については、エゴノキ属にとどめた。

シャジクモ属　Chara　卵胞子

側面観は楕円形、上面観は円形。表面には螺旋状のひれ状隆起がある。

コバノヒルムシロ　Potamogeton cristatus Regel et Maak.　種子

種子は小型。扁平でほぼ円形。背部にとさか状の翼がある。コバノヒルムシロ以外のものをヒルムシロ属とした。

イトトリゲモ　Najas japonica Nakai　種子

針形で断面は円形。表面には縦長の細胞が認められる。

サガミトリゲモ　Najas indica (Willd.) Cham.　種子

細長く断面はやや歪んだ円形。一方の側面に縫合線があり、表面にはほぼ正方形ないしやや縦長の細胞が認められる。

ヘラオモダカ　Alisma canaliculatum A.Br. et Bouche　果実

側面観は歪んだ倒卵形で上面観は狭い扇形。背軸側に1本の溝がある。

オモダカ属　Sagittaria　果実

果実は淡褐色、側面観は歪んだ倒卵形、上面観は扁平。周囲の翼は発達して広がる。

オモダカ科　Alismataceae　種子

歪んだU字型で扁平。オモダカ科の種子は、いずれもこのような形態を持つため、これ以上の同定には至らない。

スブタ属　Blyxa echinosperma (Clarke) Hooker　種子

膨らみのある長楕円形。両端に湾曲する針状の長い突起がある。表面には小さな刺状の突起がある。

エノコログサ属　Setaria　穎

側面観は卵形、上面観は片凸レンズ形。表面の基部には台形の隆起があり、表面には横方向の隆起がある。

スゲ属　Carex　果実

褐色ないし黒褐色で二面の倒卵形〜円形。先端は尖り気味。

カヤツリグサ属　Cyperus　果実

黒褐色で三稜形。長さ約1.2mm。

ウキヤガラ　Scirpus fluviatilis (Torr.) A.Gray　果実

黒灰色の倒卵形で断面は三角形。

ホタルイ属　Scirpus　果実

果実は黒色で光沢がある。倒卵形で片凸レンズ状。表面には横方向のしわがある。

イボクサ　Aneilema keisak Hassk.　種子

側面観は楕円形、上面観は三日月形。向軸面に一文字状の臍がある。

コナギ　Monochoria vaginalis (Brum.fil.)Presl　種子

側面観は楕円形、上面観は円形。表面には10本前後の縦筋があり、この間は、横方向の筋が密にある。長さはほぼ1.0mm以下のものばかりなのでコナギとした。

カナムグラ　Humulus scandens (Lour.) Merill　種子

二面の円形でへそは白く心形。

カラムシ属　Boehmeria　種子

側面観は歪んだ卵形、上面観は両凸レンズ形。両端は尖る。

サデクサ　Polygonum maackianum Regel　果実

果実は黒色で三稜形。稜はかなり丸みを帯びる。

イシミカワ　Polygonum perfoliatum Linn.　果実

果実は黒色で断面は円形。

シロザ近似種　Chenopodium cf. album Linn.　種子

種子は鈍い光沢のある黒色で偏平な円形。1本の筋が中央付近まで入る。

ヒユ属　Amaranthus　種子

種子は黒色で偏平な円形。唇状の臍がある。

タガラシ　Ranunculus sceleratus Linn.　果実

果実はレンズ形で中央部は褐色、周縁部は白色でスポンジ状。

ナデシコ科　Caryophyllaceae　種子

偏平円形で表面には多数の突起がある。

コウホネ属　Nuphar　種子

種子は光沢のある茶褐色ないし黒褐色で広卵形。一端に臍があり、表面には細かい網目模様がある。種皮の断面は厚く柵状。

オニバス　Euryale herox Salisb.　種子

種子は黒色、径10mm前後で不定形。先端には、せい点と発芽口がある。

ハスノハカズラ　Stphania japonica (Thunb.) Miers　核

太いラケット型。周辺のやや内側に突出した壁があり、壁から外に向かって突起がある。

マメ科　Leguminosae　炭化種子

No.15出土種子は、若干欠損しているが、ほぼ完形である。表面は発泡が著しく、状態は非常に悪いが、幼根の部分が認められる。およその大きさは、長さ4mm、幅3mmと推定される。No.34出土種子は、半割れで長さ3.3mm、幅2.5mm程度。

カタバミ属　Oxalis　種子

黒色で偏平な卵形。表面は、両側面に横長の網目が並ぶ。

エノキグサ　Acalypha australis Linn.　種子

種子は黒色、側面観は先端がやや尖る倒卵形、上面観は円形。表面には細かな網目模様がある。

ノブドウ　Ampelopsis brevipedunculata (Maxim.) Trautv.　種子

広卵形で先端はやや尖る。背面には棍棒状の模様があり、腹面には穴が２つある。

ヒメビシ　Trapa incisa Sieb. et Zucc.　果実

角の部分も含めた大きさは、12mm前後と小型であり、角は4本ある。ヒシ属としたものは、破片で全体の大きさの不明なものや、ヒメビシとしたものよりもやや大きく、他のヒシ属の可能性があるものである。

シロネ属　Lycopus　果実

果実は淡褐色、倒卵形で断面は広い扇形。

イヌコウジュ属　Mosla　果実

側面観は円形、上面観は楕円形。表面には網目紋がある。大きさ1.2～1.3mm以下の小さなものをイヌコウジュ属とした。

イヌコウジュ属またはシソ属　Mosla and/or Perilla　果実

側面観は円形、上面観は楕円形。表面には網目紋がある。大きさ1.4～1.7mm程度のやや大きなものをイヌコウジュ属またはシソ属とした。

ナス属　Solanum　種子

扁平な楕円形で表面には網目紋がある。

メロン仲間　Cucunis melo Linn.　種子

側面観は長楕円形、断面は薄い両凸レンズ形。No.46、61出土種子以外は、約4.5～5.7mmでいずれも藤下(1984)による6.0mm以下の小粒種子(雑草メロン型)であった。No.46(SD114、第5面最下層(溜))出土種

子は、欠損しており、正確な大きさは不明であるが、6.0mm台と推定される。No.61(SD256、第5面下層)出土種子は、約8.0mmであった。これらは、6.1～8.0mmの中粒種子(マクワ・シロウリ型)に相当する。

ヒョウタン仲間　Lagenaria siceraria Standl.　果実、種子

No.36(SD114、第5面上層(溜))で2個体が得られた。表面は磨耗しており、状態はやや悪い。長さは、約10.2mmと10.7mm。

参考文献

藤下典之(1984)　出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法．古文化財に関する保存科学と人文･自然科学 ― 総括報告書，pp. 638-654，同朋社．

表1　大型植物化石一覧表(その1)　数字は個数、()内は破片の数を示す

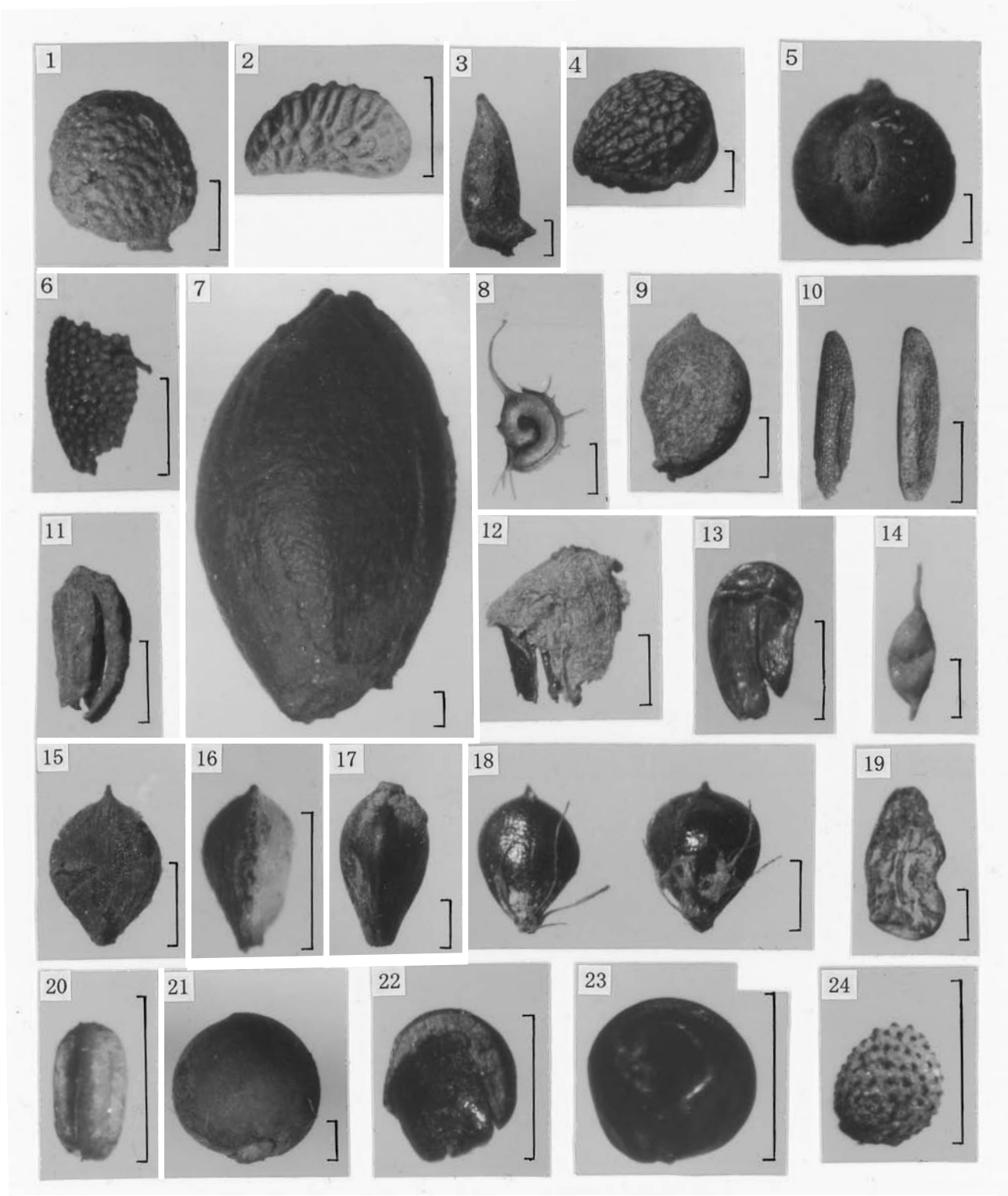
分類群・部位＼遺構名・遺構面・地区・No.		SD104																SE166	SD235		SK244		
		第4面南壁土層																第1面	第4面最下層	第4面	第4面		
																		R-11区	U-15区		U-11区		
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
キイチゴ属	核		1														1						
フジ属	芽																	1					
カラスザンショウ	種子																		(1)				
ブドウ属	種子				1		1									1	(1)			1			
エゴノキ	種子																		(1)				
シャジクモ属	卵胞子			1													1						
ヒルムシロ属	種子																				1	1	
サガミトリゲモ	種子	4	1	2	2												1	3					
ヘラオモダカ	果実	1	2	1																1			
オモダカ属	果実	4	8	1													1						
オモダカ科	種子	3		1			1					1	5		1				1	1			
スブタ属	種子	1	2																				
エノコログサ属	穎		1															2					
スゲ属	果実	7	5	6	9	3	3	2	2	2			7	6		2	2	13		1	1		2
カヤツリグサ属	果実	2	4	5	2			1	1	1		1	7	2			3	6	1	1			2
ウキヤガラ	果実	2	4	9	3	2						1				1							
ホタルイ属	果実	11	16	14	47	26	36	3	9	2	4	10	55	9	6	9	25		8	10	4	2	2
ハリイ属	果実	3			1	1	3					2	4	1			2					3	1
イボクサ	種子		2				10						2					2				1	1
コナギ	種子	2	1	3	2	1			1								5						
カラムシ属	種子															1							
ミズ属	種子												1				1						
サデクサ	果実															(1)							
イヌタデ近似種	果実																		1				
タデ属	果実						1					(1)					(1)	5(5)	(1)		4	2	2
ギシギシ属	果実																				1		
ザクロソウ	種子																		1				
ナデシコ科	種子		1																	1			
コウホネ属	種子										1					2(1)							
オニバス	種子																						
キンポウゲ属	果実				1			1	1							1	2						
ハスノハカズラ	核	1																					
マメ科	炭化種子															1							
カタバミ属	種子	1		1									1										
エノキグサ	種子															1							
ノブドウ	種子					(1)									(1)			1					
スミレ属	種子						1																
ヒメビシ	果実						(1)										1						
ヒシ属	果実		(2)														(2)						
チドメグサ属	果実		3	1	1				1														
セリ科	果実	3	1	1																			
ｵｶﾄﾗﾉｵ属ｺﾅｽﾋﾞ亜属	種子																1						
シロネ属	果実	1		1						1											2	3	2
イヌコウジュ属	果実	4(2)	3	1		1	1				1			2(1)				2				2	
ｲﾇｺｳｼﾞｭ属またはｼｿ属	果実							1															
キク科	果実			1																			

表1　大型植物化石一覧表(その2)　数字は個数、()内は破片の数を示す

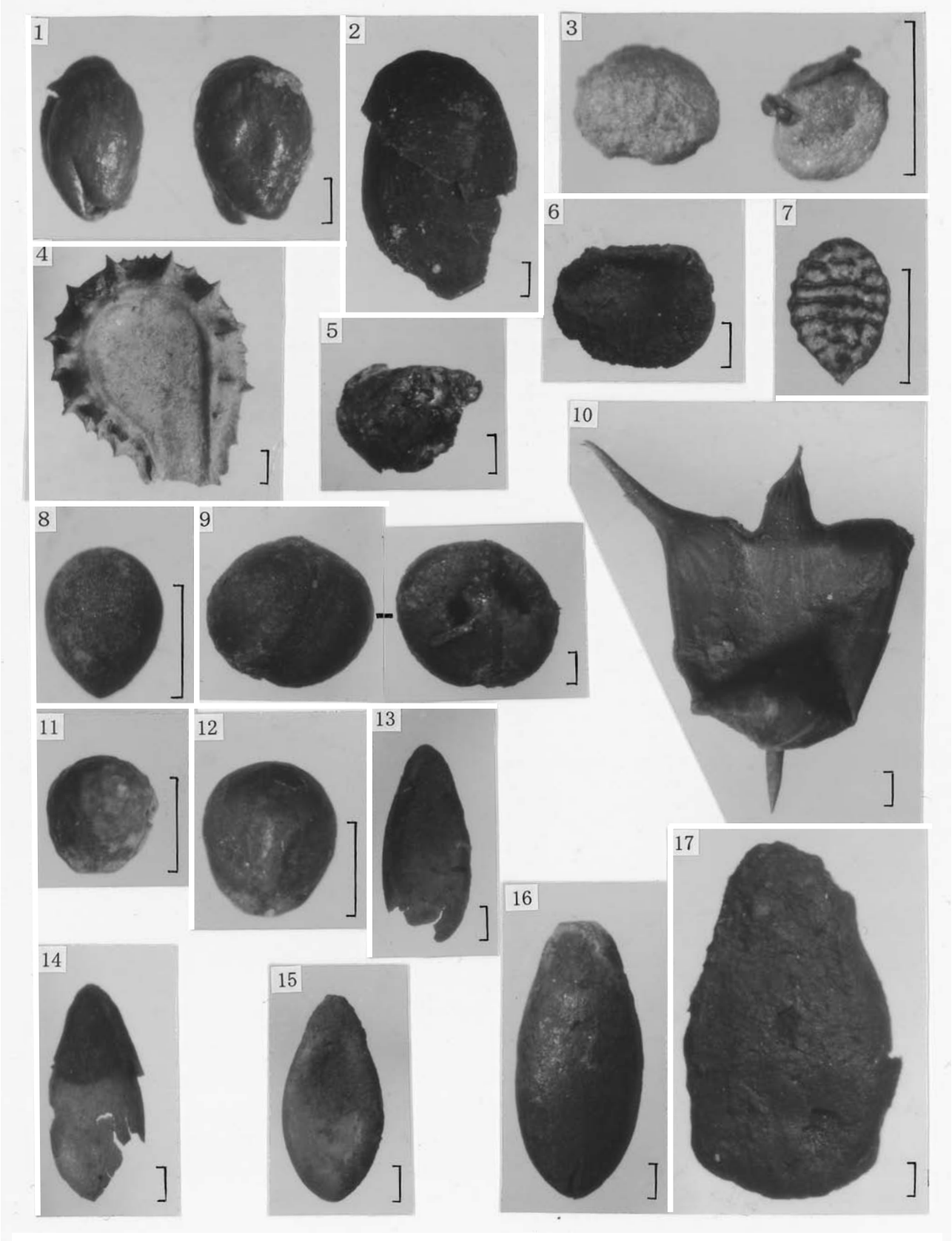
分類群・部位＼遺構名・遺構面・地区・No.		SK245			SD114																	
		第4面			第5面								第5面上層（溜）			第5面中層（溜）				第5面下層（溜）		
					V-15区			V-16区			V-17区		V-13区									
		23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43
カジノキ	種子	1																				
キイチゴ属	核	1																				
カラスザンショウ	種子												2									
ブドウ属	種子														1				(1)			
マタタビ属	種子													(1)								
エゴノキ	種子											1										
ヒルムシロ属	種子							2			1		1	2					1			
サガミトリゲモ	種子															2		1				
ヘラオモダカ	果実	1				1			1		1											
オモダカ属	果実								1									1				
オモダカ科	種子	1			11	3	1	7	6	4	5	8	4	10	2	1	3	3	2		3	2
スゲ属	果実	4		4	5	3	2	4	13	3	13	5	5	16	3		6		1			
カヤツリグサ属	果実	1	1		2			2	3				1	4		4	1	1	2		1	2
ウキヤガラ	果実								1					2		1		2				
ホタルイ属	果実	3	7	2	14	18	13	25	19	20	28	18	15	23	28	8	8	14	13	12	4	8
イボクサ	種子																1				1	
コナギ	種子	1		1		1	1	1	1		1		2		2	1		3	2		1	1
カナムグラ	種子				1				1(1)						(1)	(1)		1	(2)			
ミズ属	種子										1											
サデクサ	果実						1															
ヤナギタデ近似種	果実					1			1													1
イヌタデ近似種	果実																	1				
タデ属	果実	1			1									(1)				(1)		(1)		
ギシギシ属	果実															1						
マルミノヤマゴボウ	種子													(1)								
ザクロソウ	種子				1																	
シロザ近似種	種子																	1				
ヒユ属	種子													1				1			1	
タガラシ	果実															1		1				
キンポウゲ属	果実	1	1																			
マメ科	炭化種子												(1)									
ツリフネソウ	種子																				(1)	
ノブドウ	種子	(1)	1	1	(2)			(1)	(1)		(1)				1				(1)			
ヒメビシ	果実				(1)			1									1(2)					
チドメグサ属	果実															1						
セリ科	果実																	1				
シロネ属	果実			2																		
イヌコウジュ属	果実	1			(1)							1		1				1		(1)		
ｲﾇｺｳｼﾞｭ属またはｼｿ属	果実						1(1)											(1)				
ナス属	種子						1		1					1								
メロン仲間	種子												(1)	1	1			(1)	1(2)			
ヒョウタン仲間	種子														2							
菌核										1												

表1　大型植物化石一覧表(その3)　数字は個数、()内は破片の数を示す

分類群・部位＼遺構名・遺構面・地区・No.		SD114									SD256									第1水田面			
		第5面最下層(溜)				第5面最々下層(溜)				第5面	第5面上層			第5面中層			第5面下層			第2面			
		V-13区									N-18区												
		44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65
キイチゴ属	核																	(1)					
カラスザンショウ	種子				1																		
ブドウ属	種子															1							
エゴノキ属	種子				(1)																		
コバノヒルムシロ	種子					1		1						1									
ヒルムシロ属	種子			1											1		1		1				
イトトリゲモ	種子																			1			
サガミトリゲモ	種子									1				1				1		1			
ヘラオモダカ	果実																	3	2				
オモダカ属	果実																	1					
オモダカ科	種子		1		3	2	3	3	1	4				2			1	3	3				
スゲ属	果実			3	1		2		1	8	2		1	1	5	1	2		8				
カヤツリグサ属	果実	1							1	1				6	6		2	6	3	1	4		1
ウキヤガラ	果実												1										
ホタルイ属	果実	4	3	5	9	3	10	5	5	12	3	2	3	12	16	11	6	19	13	2	1		
ハリイ属	果実														2				1		2		
イボクサ	種子							1			1									21	6	2	
コナギ	種子					1		1		2					1		2	1	3	55	27	37	23
ミズ属	種子																				3		5
ギシギシ属	果実			2																			
ザクロソウ	種子													1			1						
ヒユ属	種子			1																1			
ナデシコ科	種子						2								1					176	21	43	6
オニバス	種子															1							
タガラシ	果実													1						5	4		4
キンポウゲ属	果実																					1	
ﾍﾋﾞｲﾁｺﾞ属,ｵﾗﾝﾀﾞｲﾁｺﾞ属,またはｷﾝﾎﾟｳｹﾞｼｮｳ属	核																				3		
カタバミ属	種子	1																					
チドメグサ属	果実													1	2					4			2
セリ科	果実			1																			
シロネ属	果実										1	2			1					1			
イヌコウジュ属	果実						1(1)			1		1	(1)		(1)			(1)	(1)	1	8(17)		1(2)
ｲﾇｺｳｼﾞｭ属またはｼｿ属	果実				1(1)		1			1										(1)	2		
キランソウ属	果実																				1		
ナス属	種子						1											1					1
メロン仲間	種子			(1)					1										1				



図版１　出土した大型植物化石（スケールは1mm）
1. カジノキ、種子、No. 23　2. キイチゴ属、核、No. 23　3. フジ属、芽、No. 17　4. カラスザンショウ、種子、No. 34　5. ブドウ属、種子、No. 58　6. マタタビ属、種子、No. 35　7. エゴノキ、種子、No. 33　8. コバノヒルムシロ、種子、No. 50　9. ヒルムシロ属、種子、No. 29　10. サガミトリゲモ、種子、No. 1　11. ヘラオモダカ、果実、No. 60　12. オモダカ属、果実、No. 2　13. オモダカ科、種子、No. 26　14. スブタ属、種子、No. 2　15. スゲ属、果実、No. 35　16. カヤツリグサ属、果実、No. 12　17. ウキヤガラ、果実、No. 3　18. ホタルイ属、果実、No. 12　19. イボクサ、種子、No. 62　20. コナギ、種子、No. 62　21. カナムグラ、種子、No. 26　22. シロザ近似種、種子、No. 39　23. ヒユ属、種子、No. 35　24. ナデシコ科、種子、No. 62



図版２　出土した大型植物化石（スケールは1mm）
1. コウホネ属、種子、No. 15　2. オニバス、種子、No. 58　3. タガラシ、果実、No. 62　4. ハスノハカズラ、種子、No. 1　5. マメ科、炭化種子、No. 15　6. マメ科、炭化種子、No. 34　7. カタバミ属、種子、No. 3　8. エノキグサ、種子、No. 15　9. ノブドウ、種子、No. 17　10. ヒメビシ、果実、No. 29　11. イヌコウジュ属、果実、No. 63　12. イヌコウジュ属またはシソ属、果実、No. 28　13. メロン仲間、種子、No. 35　14. メロン仲間、種子、No. 36　15. メロン仲間、種子、No. 51　16. メロン仲間、種子、No. 61　17. ヒョウタン仲間、種子、No. 36

5．放射性炭素年代測定

山形 秀樹（パレオ・ラボ）

1．はじめに

下月隈C遺跡第5次調査（SHC－5）より検出された土器付着物および炭化材の加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を実施した。

2．試料と方法

試料は、検出した土器より採取した付着物47点と炭化材1点の併せて48点である。

これら試料は、酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去し、石墨(グラファイト)に調整した後、加速器質量分析計(AMS)にて測定した。測定された^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した^{14}C濃度を用いて^{14}C年代を算出した。

3．結 果

表1に、各試料の同位体分別効果の補正値（基準値-25.0‰）、同位体分別効果による測定誤差を補正した^{14}C年代、^{14}C年代を暦年代に較正した年代を示す。

^{14}C年代値(yrBP)の算出は、^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。また、付記した^{14}C年代誤差(±1σ)は、計数値の標準偏差σに基づいて算出し、標準偏差(One sigma)に相当する年代である。これは、試料の^{14}C年代が、その^{14}C年代誤差範囲内に入る確率が68%であることを意味する。

なお、暦年代較正の詳細は、以下の通りである。

暦年代較正

暦年代較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された^{14}C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、および半減期の違い(^{14}Cの半減期5,730±40年)を較正し、より正確な年代を求めるために、^{14}C年代を暦年代に変換することである。具体的には、年代既知の樹木年輪の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚のU-Th年代と^{14}C年代の比較、および海成堆積物中の縞状の堆積構造を用いて^{14}C年代と暦年代の関係を調べたデータにより、較正曲線を作成し、これを用いて^{14}C年代を暦年代に較正した年代を算出する。

^{14}C年代を暦年代に較正した年代の算出にCALIB 4.3(CALIB 3.0のバージョンアップ版)を使用した。なお、暦年代較正値は14C年代値に対応する較正曲線上の暦年代値であり、1σ暦年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値はその1σ暦年代範囲の確からしさを示す確率であり、10%未満についてはその表示を省略した。1σ暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示した。

4.考 察

各試料は、同位体分別効果の補正および暦年代較正を行なった。暦年代較正した1σ暦年代範囲の

うち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲に注目すると、それぞれより確かな年代値の範囲として示された。

引用文献

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎.日本先史時代の14C年代、p.3-20.

Stuiver, M. and Reimer, P. J. (1993) Extended 14C Database and Revised CALIB3.0 14C Age Calibration Program, Radiocarbon, 35, p.215-230.

Stuiver,M., Reimer,P.J., Bard,E., Beck,J.W., Burr,G.S., Hughen,K.A., Kromer,B., McCormac,F.G., v.d. Plicht,J., and Spurk,M. (1998) INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, 24,000-0 cal BP, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

※試料分析の委託方法 福岡市教育委員会

分析試料を委託するにあたっては、各試料に通し番号を付与するにとどまり、出土遺構などの情報は明らかにしない手法を用いた。このため、本分析報告の図表・表における遺構番号は分析報告を受理した後に当教育委員会により加筆したものである。

※掲載試料分析結果について

本書では、本報告の第5次調査試料の他に、第4次調査試料と比恵遺跡第81調査試料の各測定結果を参考資料として掲載した。

表1.　放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果（その1）

測定番号 （測定法）	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　　種 遺 物 No.	$\delta^{13}C_{PDB}$ (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD−2273 (AMS)	土器付着物 SHC−5・溝SD104 壷 992200001	−20.2	2,245±35	cal BC 360 cal BC 270 cal BC 260	cal BC 385−350 (30.6%) cal BC 295−230 (62.3%)
PLD−2274 (AMS)	土器付着物 SHC−5・溝SD104 土器付着物甕 992200002	−27.1	1,815±35	cal AD 230	cal AD 135−200 (62.3%) cal AD 205−240 (37.7%)
PLD−2275 (AMS)	土器付着物 SHC−5・溝SD104 甕 992200003	−26.3	1,775±40	cal AD 245	cal AD 215−265 (40.4%) cal AD 270−340 (55.2%)
PLD−1156 (AMS)	炭化材 SHC−4・溝SD104	−29.2	2,050±60	cal BC 45	cal BC 155−135 (10.1%) cal BC 115−AD5 (82.7%)
PLD−1157 (AMS)	炭化材 SHC−4・溝SD104	−26.9	1,640±60	cal AD 415	cal AD 340−440 (72.5%)
PLD−1158 (AMS)	木片 SHC−4・溝SD104	−27.9	1,750±50	cal AD 260 cal AD 285 cal AD 300 cal AD 320	cal AD 235−360 (92.0%)
PLD−1159 (AMS)	木片 SHC−4・溝SD104	−28.2	1,840±50	cal AD 135 cal AD 165 cal AD 200 cal AD 205	cal AD 125−240 (94.3%)
PLD−1160 (AMS)	木片 SHC−4・溝SD106	−28.8	1,700±50	cal AD 345 cal AD 370 cal AD 380	cal AD 260−280 (19.7%) cal AD 320−410 (73.1%)
PLD−1161 (AMS)	木片 SHC−4・溝SD106	−29.7	2,060±50	cal BC 50	cal BC 155−130 (15.9%) cal BC 120−cal AD 0 (84.0%)
PLD−1162 (AMS)	木片 SHC−4・溝SD106	−29.0	2,100±50	cal BC 110	cal BC 175−45 (96.7%)
PLD−1163 (AMS)	木片 SHC−4・溝SD106	−27.7	2,080±50	cal BC 90 cal BC 75 cal BC 60	cal BC 170−40 (97.4%)
PLD−1164 (AMS)	木片 SHC−4・溝SD106	−28.0	2,130±50	cal BC 170	cal BC 200−90 (78.2%) cal BC 80−55 (13.4%)
PLD−2261 (AMS)	土器付着物 SHC−4・溝SD112 甕 982800861	−27.8	2,400±40	cal BC 410	cal BC 520 - 400 (96.4%)
PLD−2262 (AMS)	土器付着物 SHC−4・溝SD112 甕 982800466	−30.3	1,940±35	cal AD 70	cal AD 25−85 (76.6%) cal AD 100−125 (23.3%)
PLD−2263 (AMS)	土器付着物 SHC−4・溝SD114 甕 982800470	−28.2	2,560±40	cal BC 790	cal BC 800−760 (57.8%) cal BC 680−665 (12.8%) cal BC 615−590 (15.9%)
PLD−2264 (AMS)	土器付着物 SHC−4・溝SD114 甕 982800487	−26.4	2,445±40	cal BC 535 cal BC 520	cal BC 755−690 (32.1%) cal BC 540−410 (64.9%)

※SHC−4：下月隈C遺跡第4次調査，SHC−5：下月隈C遺跡第5次調査

表1. 放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果（その2）

測定番号（測定法）	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺物No.	$\delta^{13}C_{PDB}$ (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-2265 (AMS)	土器付着物 SHC−4・溝SD114 甕 982800488	−29.4	2,505±40	cal BC 760 cal BC 680 cal BC 670 cal BC 610 cal BC 595	cal BC 780−755 (11.2%) cal BC 695−540 (88.8%)
PLD-2266 (AMS)	土器付着物 SHC−4・溝SD114 甕 982800605	−26.5	2,635±40	cal BC 805	cal BC 825−795 (100%)
PLD-2267 (AMS)	土器付着物 SHC−4・溝SD114 甕 982800840	−29.0	2,490±40	cal BC 760 cal BC 685 cal BC 665 cal BC 640 cal BC 590 cal BC 580 cal BC 545	cal BC 725−540 (92.3%)
PLD-2268 (AMS)	土器付着物 SHC−4・溝SD114 甕 982800841	−28.7	2,420±35	cal BC 480 cal BC 470 cal BC 410	cal BC 755−725 (15.5%) cal BC 520−405 (80.2%)
PLD-2278 (AMS)	土器付着物 SHC−5・溝SD114 甕9 92200086	−26.7	2,430±40	cal BC 495 cal BC 485 cal BC 465 cal BC 450 cal BC 440 cal BC 425 cal BC 415	cal BC 755−715 (20.0%) cal BC 540−405 (75.8%)
PLD-2279 (AMS)	土器付着物 SHC−5・溝SD114 甕 992200087	−29.1	2,455±50	cal BC 740 cal BC 725 cal BC 540 cal BC 530 cal BC 520	cal BC 760−685 (33.8%) cal BC 665−640 (10.6%) cal BC 545−480 (29.1%) cal BC 470−410 (23.2%)
PLD-2280 (AMS)	土器付着物 SHC−5・溝SD114 甕 992200089	−25.5	2,385±45	cal BC 405	cal BC 520−395 (99.0%)
PLD-2281 (AMS)	土器付着物 SHC−5・溝SD114 甕 992200097	−27.3	2,530±45	cal BC 765	cal BC 795−760 (26.7%) cal BC 685−660 (14.2%) cal BC 645−545 (59.1%)
PLD-2282 (AMS)	土器付着物 SHC−5・溝SD114 甕 992200102	−28.6	2,450±35	cal BC 535 cal BC 530 cal BC 520	cal BC 760−685 (35.7%) cal BC 545−480 (31.7%) cal BC 470−410 (26.8%)
PLD-2283 (AMS)	土器付着物 SHC−5・溝SD114 甕 992200113	−28.8	2,420±50	cal BC 480 cal BC 470 cal BC 445 cal BC 410	cal BC 755−700 (26.2%) cal BC 540−405 (73.8%)
PLD-2284 (AMS)	土器付着物 SHC−5・溝SD114 甕 992200114	−27.3	2,390±45	cal BC 405	cal BC 520−395 (95.4%)

※SHC−4：下月隈C遺跡第4次調査，SHC−5：下月隈C遺跡第5次調査

表1.　放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果（その3）

測定番号 （測定法）	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　　種 遺 物 No.	$\delta^{13}C_{PDB}$ (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD−2285 (AMS)	土器付着物 SHC−5・溝SD114 甕 992200118	−27.6	2,475±40	cal BC 755 cal BC 690 cal BC 655 cal BC 650 cal BC 540	cal BC 760−680 (36.9%) cal BC 670−610 (27.2%) cal BC 595−520 (35.1%)
PLD−2286 (AMS)	土器付着物 SHC−5・溝SD114 甕 992200119	−28.0	2,465±35	cal BC 755 cal BC 700 cal BC 540	cal BC 760−680 (37.9%) cal BC 665−615 (22.5%) cal BC 565−515 (22.3%)
PLD−2287 (AMS)	土器付着物 SHC−5・溝SD114 甕 992200120	−28.1	2,495±40	cal BC 760 cal BC 680 cal BC 665 cal BC 630 cal BC 615 cal BC 590 cal BC 575 cal BC 560	cal BC 705−540 (90.4%)
PLD−2288 (AMS)	土器付着物 SHC−5・溝SD114 甕 992200123	−28.6	2,420±35	cal BC 480 cal BC 470 cal BC 445 cal BC 410	cal BC 755−725 (16.1%) cal BC 520−405 (79.4%)
PLD−2289 (AMS)	土器付着物 SHC−5・溝SD114 甕 992200124	−27.9	2,500±35	cal BC 760 cal BC 680 cal BC 670 cal BC 625 cal BC 620 cal BC 615 cal BC 595 cal BC 575 cal BC 560	cal BC 705−540 (91.9%)
PLD−2290 (AMS)	土器付着物 SHC−5・溝SD114 甕 992200133	−26.2	2,455±35	cal BC 740 cal BC 725 cal BC 540 cal BC 530 cal BC 520	cal BC 760−685 (36.5%) cal BC 545−480 (30.1%) cal BC 440 - 410 (13.4%)
PLD−2291 (AMS)	土器付着物 SHC−5・溝SD114 甕 992200135	−29.3	2,375±40	cal BC 405	cal BC 515−460 (50.3%) cal BC 450−440 (12.5%) cal BC 415−395 (28.8%)
PLD−2292 (AMS)	土器付着物 SHC−5・溝SD114 甕 992200152	−29.5	1,730±35	cal AD 260 cal AD 280 cal AD 325 cal AD 330 cal AD 335	cal AD 255−305 (49.5%) cal AD 315−355 (39.4%) cal AD 370−380 (11.1%)
PLD−2293 (AMS)	土器付着物 SHC−5・溝SD114 甕 992200204	−26.5	2,500±35	cal BC 760 cal BC 680 cal BC 670 cal BC 625 cal BC 615 cal BC 595 cal BC 575 cal BC 565	cal BC 700−540 (89.8%)

※SHC−4：下月隈C遺跡第4次調査，SHC−5：下月隈C遺跡第5次調査

表1. 放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果（その4）

測定番号 （測定法）	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　　種 遺 物 No.	$\delta^{13}C_{PDB}$ (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD−2294 (AMS)	土器付着物 SHC−5・溝SD114 甕 992200210	−28.0	2,415±40	cal BC 475 cal BC 470 cal BC 410	cal BC 755−725 (15.4%) cal BC 520−405 (80.3%)
PLD−2300 (AMS)	土器付着物 SHC−5・溝SD114 甕 992200099	−26.2	2,510±35	cal BC 760 cal BC 680 cal BC 670 cal BC 605 cal BC 600	cal BC 780−760 (13.3%) cal BC 685−660 (16.0%) cal BC 650−540 (70.7%)
PLD−2301 (AMS)	土器付着物 SHC−5・溝SD114 甕 992200106	−26.5	2,600±35	cal BC 800	cal BC 815−775 (100%)
PLD−2302 (AMS)	土器付着物 SHC−5・溝SD114 甕 992200107	−28.7	2,585±35	cal BC 795	cal BC 810−765 (97.0%)
PLD−2303 (AMS)	土器付着物 SHC−5・溝SD114 甕 992200108	−26.6	2,445±35	cal BC 535 cal BC 520	cal BC 755−695 (33.7%) cal BC 540−480 (33.8%) cal BC 470−410 (30.3%)
PLD−2304 (AMS)	土器付着物 SHC−5・溝SD114 甕 992200393	−26.8	2,445±35	cal BC 535 cal BC 520	cal BC 755−695 (33.7%) cal BC 540−480 (33.8%) cal BC 470−410 (30.3%)
PLD−2305 (AMS)	土器付着物 SHC−5・溝SD114 甕 992200403	−27.3	2,505±35	cal BC 760 cal BC 680 cal BC 670 cal BC 610 cal BC 595	cal BC 695−540 (91.0%)
PLD−2306 (AMS)	土器付着物 SHC−5・溝SD114 甕 992200419	−27.0	2,550±45	cal BC 785	cal BC 800−760 (42.1%) cal BC 680−665 (12.8%) cal BC 635−590 (30.6%) cal BC 580−555 (14.5%)
PLD−1165 (AMS)	炭化材 SHC−4・溝SD114	−26.9	2,440±60	cal BC 515 cal BC 460 cal BC 455 cal BC 435 cal BC 430 cal BC 415	cal BC 760−685 (31.9%) cal BC 545−410 (62.9%)
PLD−1166 (AMS)	炭化材 SHC−4・溝SD114	−25.6	2,000±50	cal AD 5 cal AD 10 cal AD 15	cal BC 45−cal AD 65 (100%)
PLD−1167 (AMS)	炭化材 SHC−4・溝SD114	−25.7	2,550±60	cal BC 785	cal BC 800−760 (32.3%) cal BC 685−660 (13.8%) cal BC 645−545 (53.9%)
PLD−1168 (AMS)	木片 SHC−4・溝SD114	−27.1	2,580±60	cal BC 795	cal BC 815−760 (47.1%) cal BC 685−665 (10.8%) cal BC 640−590 (26.2%) cal BC 580−545 (15.9%)
PLD−1169 (AMS)	木片 SHC−4・溝SD114	−26.6	2,530±60	cal BC 765	cal BC 795−755 (20.4%) cal BC 700−540 (79.6%)

※SHC−4：下月隈C遺跡第4次調査，SHC−5：下月隈C遺跡第5次調査

表1.　放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果（その5）

測定番号 （測定法）	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　　種 遺 物 No.	$\delta^{13}C_{PDB}$ (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD−1170 (AMS)	木片 SHC−4・溝SD114	−26.1	2,520±50	cal BC 760 cal BC 675 cal BC 670	cal BC 790−755 (17.2%) cal BC 700−540 (81.7%)
PLD−1171 (AMS)	木片 SHC−4・溝SD114	−27.7	2,520±50	cal BC 765 cal BC 675	cal BC 790−755 (17.8%) cal BC 700−540 (81.8%)
PLD−1172 (AMS)	炭化材 SHC−4・溝SD114	−27.7	2,590±50	cal BC 795	cal BC 825−760 (65.9%) cal BC 615−590 (12.4%)
PLD−1173 (AMS)	炭化材 SHC−4・溝SD114	−25.0	2,350±50	cal BC 400	cal BC 520−375 (98.7%)
PLD−1174 (AMS)	炭化材 SHC−4・溝SD114	−28.2	2,400±50	cal BC 410	cal BC 755−720 (17.0%) cal BC 525−400 (77.3%)
PLD−1175 (AMS)	炭化材 SHC−4・溝SD114	−28.4	2,430±50	cal BC 480 cal BC 465 cal BC 450 cal BC 440 cal BC 415	cal BC 755−695 (28.3%) cal BC 540−405 (71.3%)
PLD−1176 (AMS)	木片 SHC−4・溝SD114	−26.2	2,540±60	cal BC 785	cal BC 800−755 (27.9%) cal BC 685−660 (15.4%) cal BC 650−540 (56.7%)
PLD−1177 (AMS)	木片 SHC−4・溝SD114	−26.1	2,470±60	cal BC 755 cal BC 700 cal BC 540 cal BC 525	cal BC 760−680 (33.3%) cal BC 665−610 (22.2%) cal BC 565−505 (24.0%)
PLD−1178 (AMS)	木片 SHC−4・溝SD114	−27.2	2,400±60	cal BC 410	cal BC 755−715 (17.5%) cal BC 525−400 (74.0%)
PLD−1179 (AMS)	木片 SHC−4・溝SD114	−26.0	2,370±50	cal BC 405	cal BC 520−385 (95.6%)
PLD−2269 (AMS)	土器付着物 SHC−4・溝SD116 甕 982800513	−28.9	2,425±35	cal BC 480 cal BC 465 cal BC 450 cal BC 440 cal BC 410	cal BC 755−720 (19.0%) cal BC 525−405 (74.9%)
PLD−2270 (AMS)	土器付着物 SHC−4・溝SD116 甕 982800514	−27.6	2,555±40	cal BC 785	cal BC 800−760 (53.0%) cal BC 680−665 (12.9%) cal BC 615−590 (17.6%)
PLD−1180 (AMS)	木片 SHC−4・溝SD119	−28.3	1,940±50	cal AD 65	cal AD 15−90 (69.4%) cal AD 100−125 (22.7%)
PLD−1181 (AMS)	木片 SHC−4・溝SD119	−28.4	1,960±50	cal AD 30 cal AD 35 cal AD 55	cal AD 0−85 (80.7%) cal AD 100−120 (13.9%)
PLD−2295 (AMS)	土器付着物 SHC−5・溝SD256 甕 992200247	−28.3	2,445±35	cal BC 535 cal BC 520	cal BC 755−695 (31.9%) cal BC 540−475 (33.9%) cal BC 470−410 (32.0%)
PLD−2296 (AMS)	土器付着物 SHC−5・溝SD256 甕 992200249	−26.4	2,495±40	cal BC 760 cal BC 680 cal BC 665 cal BC 630 cal BC 590 cal BC 575 cal BC 560	cal BC 720−540 (92.8%)

※SHC−4：下月隈C遺跡第4次調査，SHC−5：下月隈C遺跡第5次調査

表1. 放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果（その6）

測定番号（測定法）	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺物No.	$\delta^{13}C_{PDB}$ (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD−2307 (AMS)	土器付着物 SHC−5・溝SD256 甕 992200246	−27.7	2,495±75	cal BC 760 cal BC 680 cal BC 665 cal BC 635 cal BC 590 cal BC 580 cal BC 560	cal BC 775−535 (100%)
PL−2271 (AMS)	土器付着物 SHC−4・井戸SE120 甕 982800620	−27.4	1,670±35	cal AD 400	cal AD 340−420 (99.1%)
PLD−1182 (AMS)	炭化材 SHC−4・井戸SE120	−29.6	1,870±50	cal AD 130	cal AD 80−215 (100%)
PLD−1183 (AMS)	炭化材 SHC−4・井戸SE120	−29.5	1,620±50	cal AD 425	cal AD 395−470 (60.3%) cal AD 480−530 (39.7%)
PLD−1184 (AMS)	炭化材 SHC−4・井戸SE120	−26.4	1,790±50	cal AD 240	cal AD 135−160 (18.1%) cal AD 165−200 (20.9%) cal AD 205−260 (39.4%) cal AD 300−320 (16.7%)
PLD−1185 (AMS)	木片 SHC−4・井戸SE120	−29.8	1,560±50	cal AD 535	cal AD 430−540 (100%)
PLD−1186 (AMS)	木片 SHC−4・井戸SE120	−29.3	1,710±50	cal AD 340 cal AD 375	cal AD 260−285 (20.5%) cal AD 320−405 (71.2%)
PLD−1187 (AMS)	炭化材 SHC−4・井戸SE120	−28.5	1,600±50	cal AD 430	cal AD 415−535 (100%)
PLD−1188 (AMS)	木片 SHC−4・井戸SE120	−26.4	1,590±50	cal AD 435 cal AD 525	cal AD 425−535 (100%)
PLD−1189 (AMS)	木片 SHC−4・井戸SE120	−28.3	1,740±50	cal AD 260 cal AD 280 cal AD 295 cal AD 325	cal AD 245−355 (90.5%)
PLD−1190 (AMS)	木片 SHC−4・井戸SE120	−27.3	1,780±60	cal AD 245	cal AD 135−155 (10.5%) cal AD 175−195 (10.0%) cal AD 210−65 (36.8%) cal AD 275−340 (42.7%)
PLD-1191 (AMS)	木片 SHC-4・井戸SE120	−27.4	1,710±50	cal AD 265 cal AD 270 cal AD 340 cal AD 375	cal AD 260−300 (33.5%) cal AD 320−400 (66.5%)
PLD−2276 (AMS)	土器付着物 SHC−5・井戸SE166 甕 992200026	−22.0	855±35	cal AD 1,195 cal AD 1,210	cal AD 1,160−1,245 (96.1%)
PLD−2277 (AMS)	土器付着物 SHC−5・土壙SK244 甕 992200078	−29.0	2,400±45	cal BC 410	cal BC 755−725 (14.2%) cal BC 520−400 (82.2%)
PLD−2272 (AMS)	土器付着物 SHC−4・黒色粘質土 壷 982800820	−27.1	1,820±35	cal AD 225	cal AD 135−160 (30.0%) cal AD 170−200 (35.1%) cal AD 205−240 (34.8%)

※SHC−4：下月隈C遺跡第4次調査，SHC−5：下月隈C遺跡第5次調査

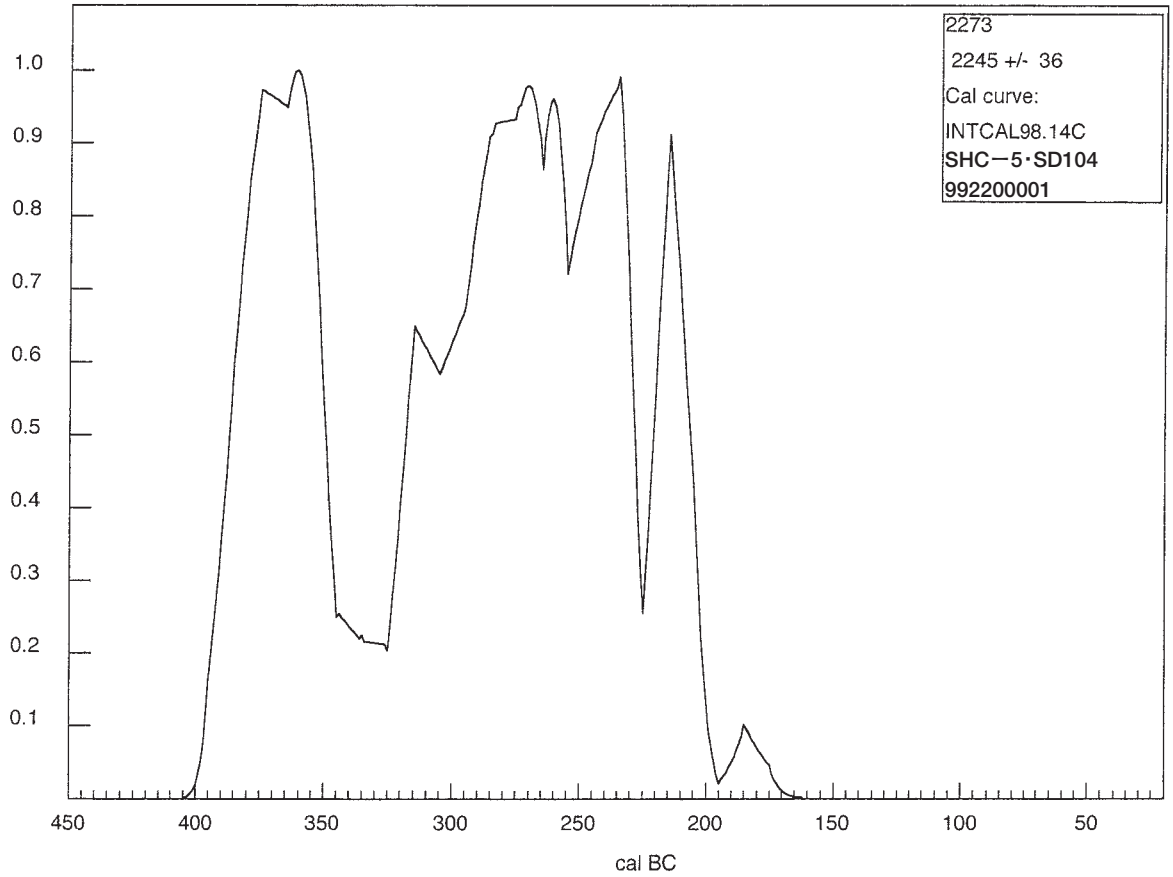
表1.　放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果（その7）

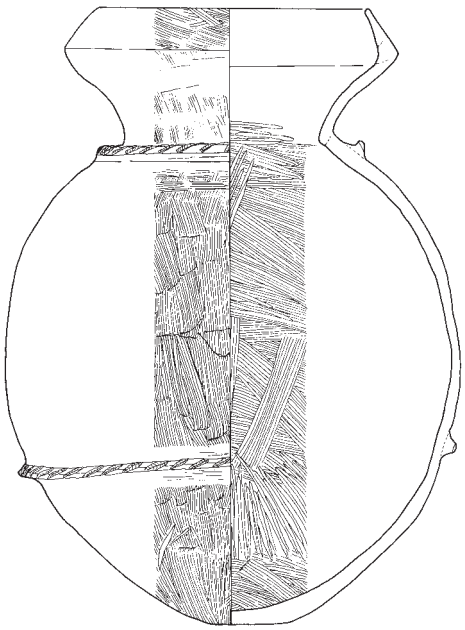
測定番号 （測定法）	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　　種 遺 物 No.	$\delta^{13}C_{PDB}$ (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD−2297 (AMS)	土器付着物 HIE−81・溝SD06 甕 023900041	−27.8	1,880±35	cal AD 130	cal AD 80−135 (64.9%) cal AD 150−175 (19.3%) cal AD 190−210 (15.9%)
PLD−2298 (AMS)	土器付着物 HIE−81・溝SD06 甕 023900042	−27.4	1,685±35	cal AD 385	cal AD 265−275 (11.2%) cal AD 340−410 (88.8%)
PLD−2309 (AMS)	土器付着物 HIE−81・溝SD12 甕 023900080	−14.4	2,095±45	cal BC 105	cal BC 165−50 (100%)

※HIE−81：比恵遺跡第81調査

放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ 13C PDB (‰)	14C年代 (yrBP±1σ)	14C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-2273 (AMS)	土器付着物 SHC-5・溝ＳＤ104 壺 992200001	-20.2	2,245±35	cal BC 360 cal BC 270 cal BC 260	cal BC 385 - 350 (30.6%) cal BC 295 - 230 (62.3%)

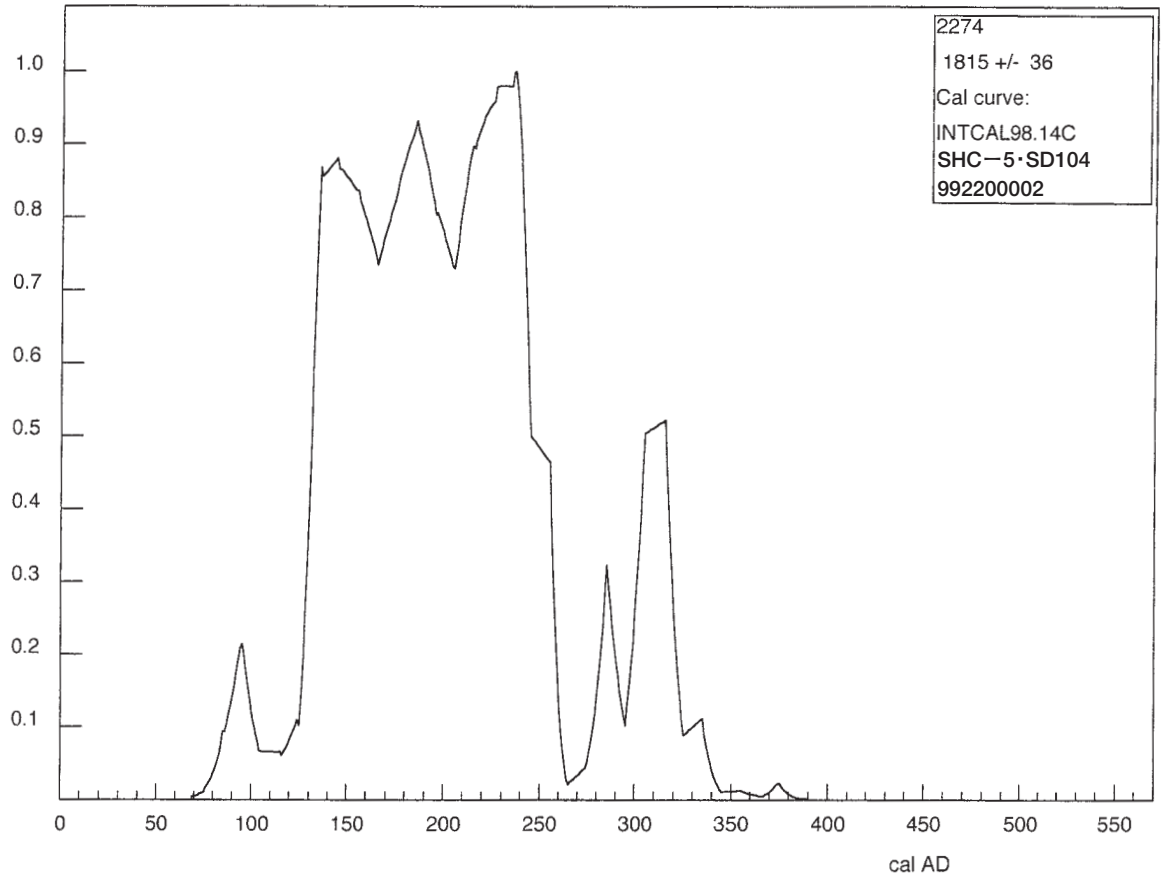


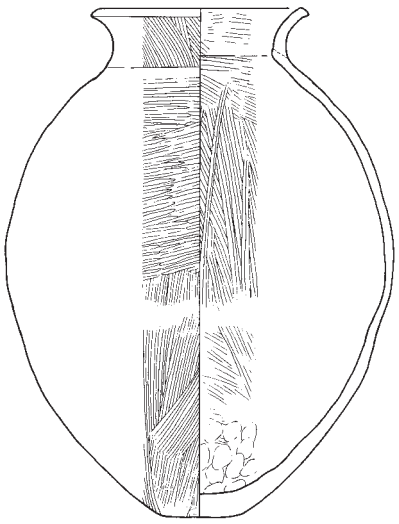


下月隈C遺跡第5次・SD104出土土器（992200001）実測図（縮尺：1/4）

放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ 13C PDB (‰)	14C年代 (yrBP±1σ)	14C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-2274 (AMS)	土器付着物 SHC-5・溝ＳＤ104 甕 992200002	-27.1	1,815±35	cal AD 230	cal AD 135 - 200 (62.3%) cal AD 205 - 240 (37.7%)

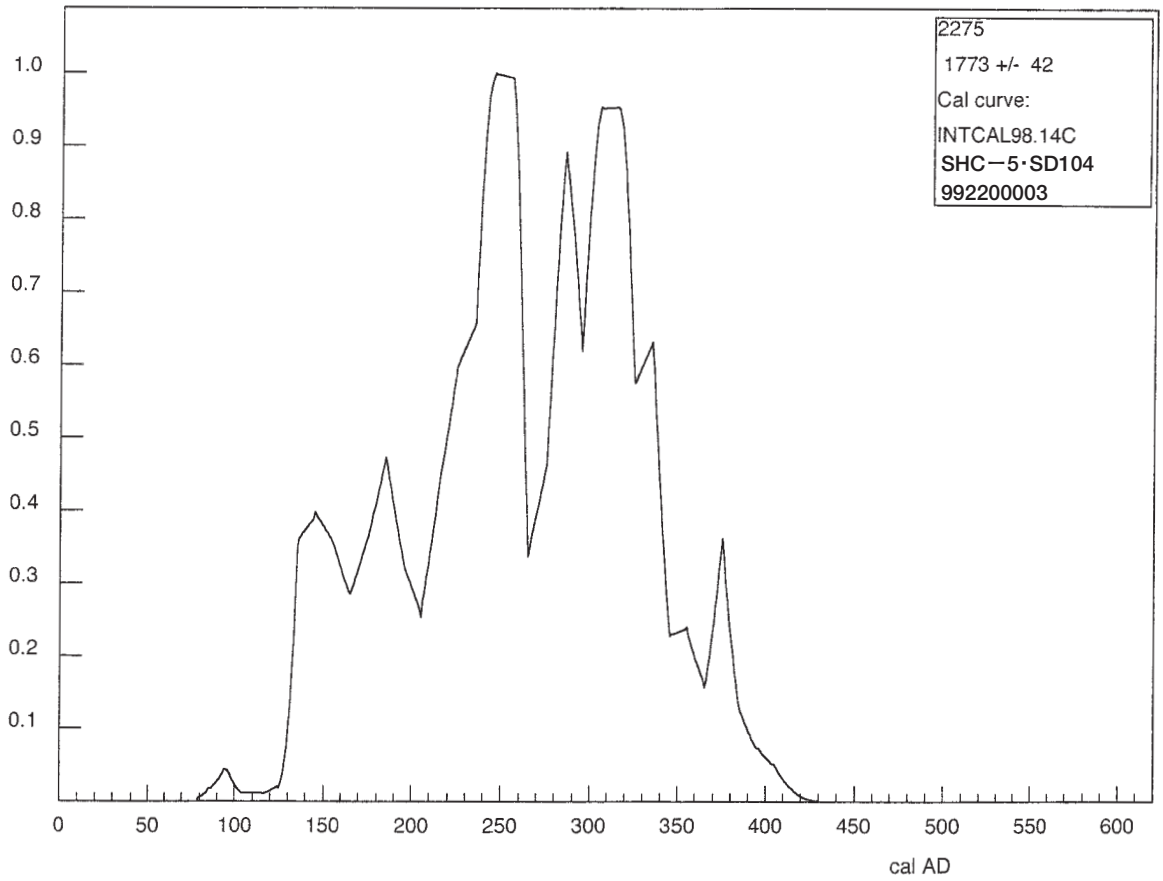


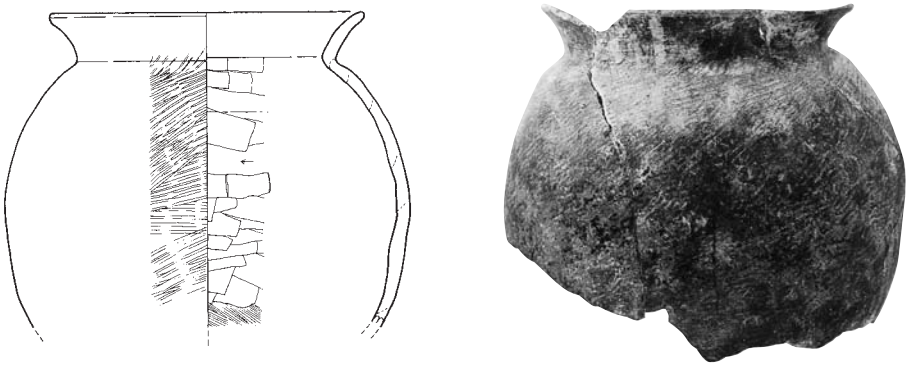


下月隈C遺跡第5次・SD104出土土器（992200002）実測図（縮尺：1/4）

放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号（測定法）	分析試料 遺跡名・出土遺構 器種 遺物No.	δ13C PDB (‰)	14C年代 (yrBP±1σ)	14C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-2275 (AMS)	土器付着物 SHC-5・溝SD104 甕 992200003	-26.3	1,775±40	cal AD 245	cal AD 215 - 265 (40.4%) cal AD 270 - 340 (55.2%)

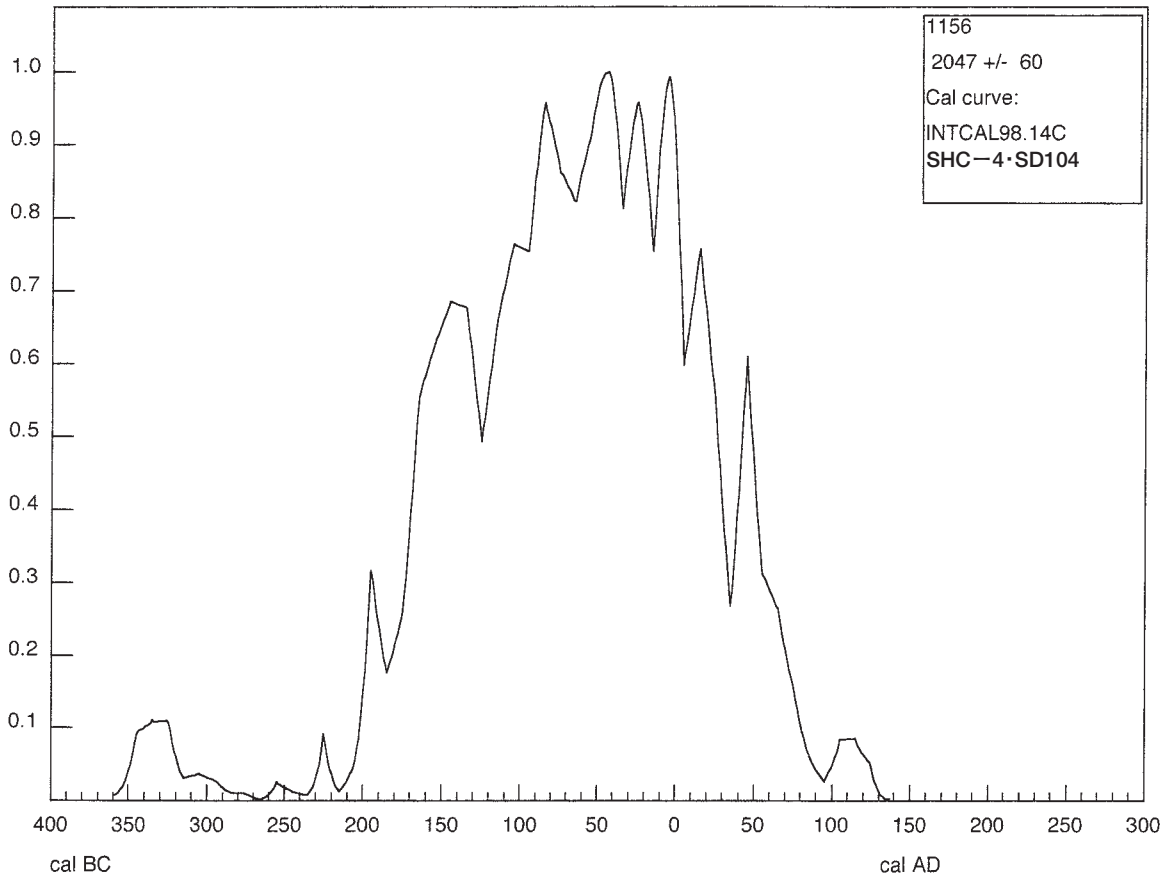




下月隈C遺跡第5次・SD104出土土器（992200003）実測図（縮尺：1/4）

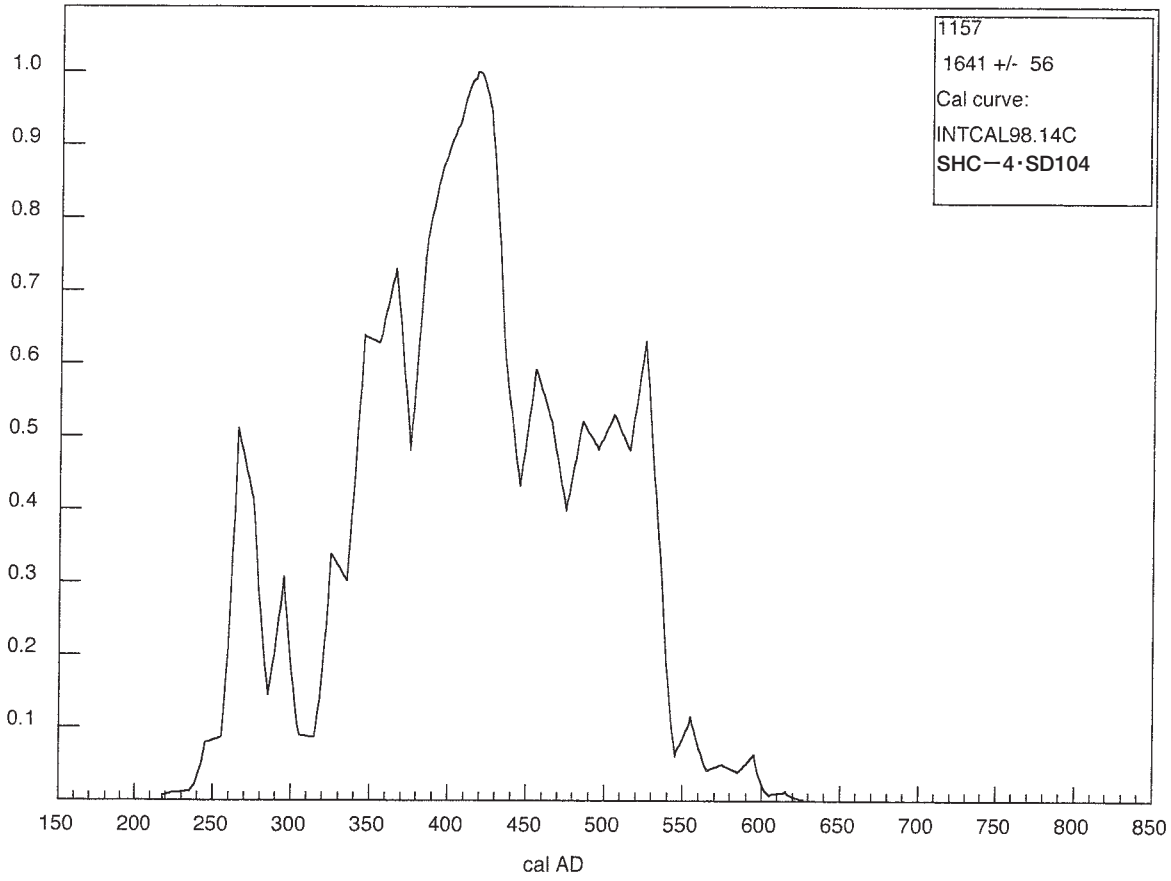
放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ^{13}C PDB (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-1156 (AMS)	炭化材 SHC-4・溝ＳＤ104	-29.2	2,050±60	cal BC 45	cal BC 155 - 135 (10.1%) cal BC 790 - 760 (82.7%)



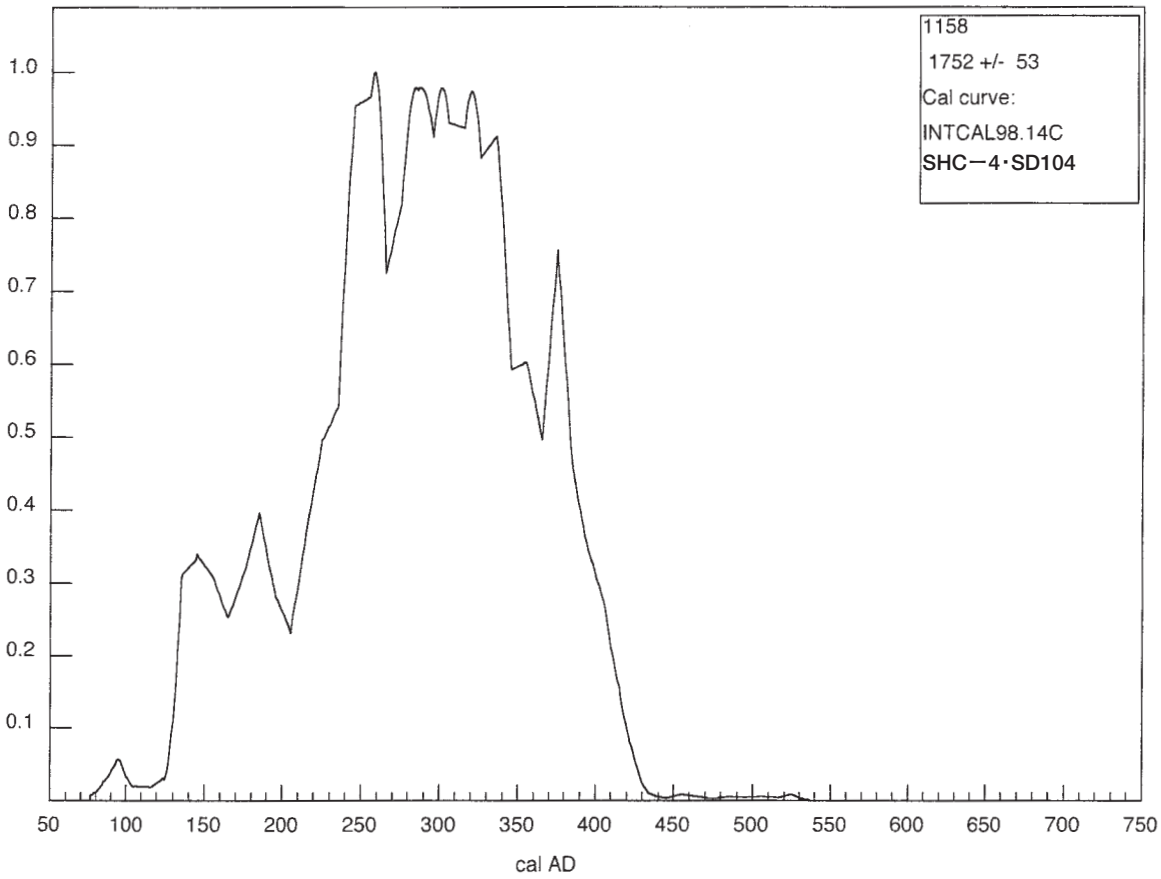
放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ^{13}C PDB (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-1157 (AMS)	炭化材 SHC-4・溝ＳＤ104	-26.9	1,640±60	cal AD 415	cal AD 340 - 440 (72.5%)



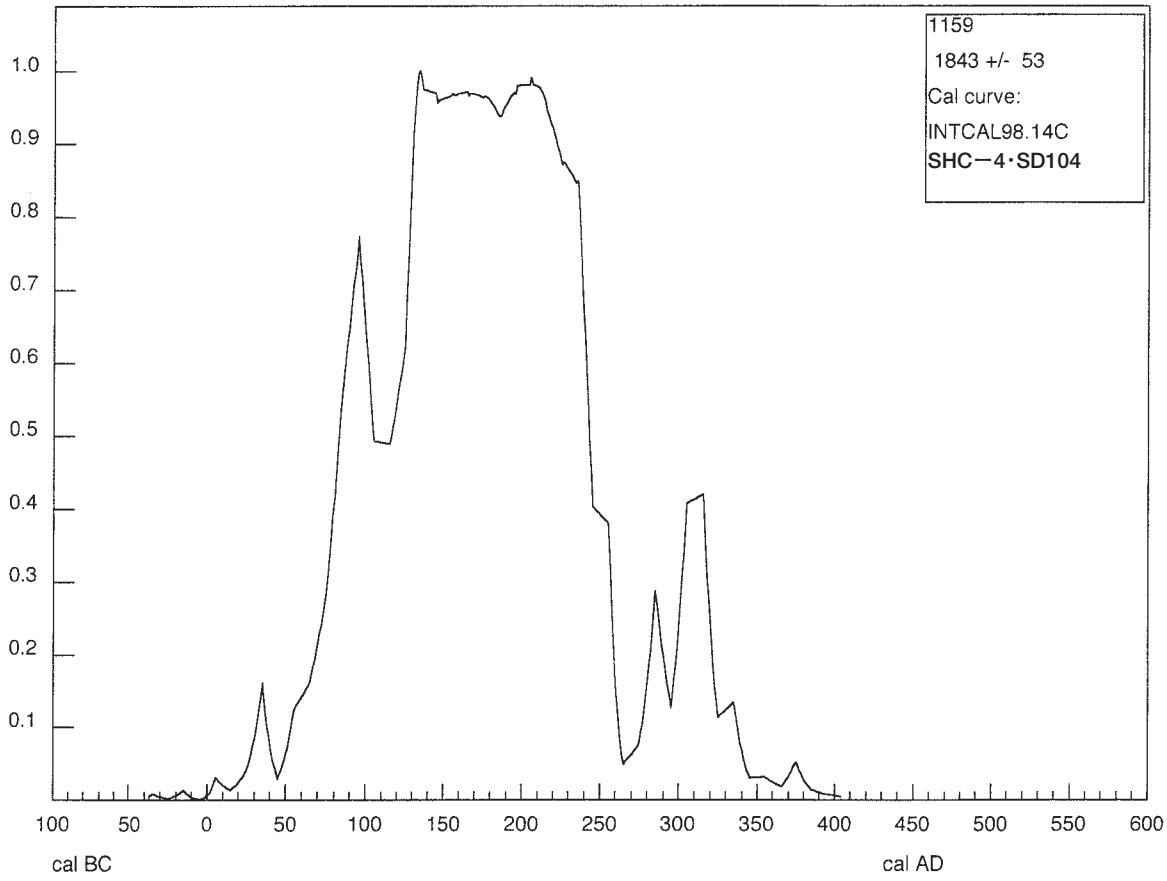
放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ^{13}C PDB (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-1158 (AMS)	木片 SHC-4・溝ＳＤ104	-27.9	1,750±50	cal AD 260 cal AD 285 cal AD 300 cal AD 320	cal AD 235 - 360 (92.0%)



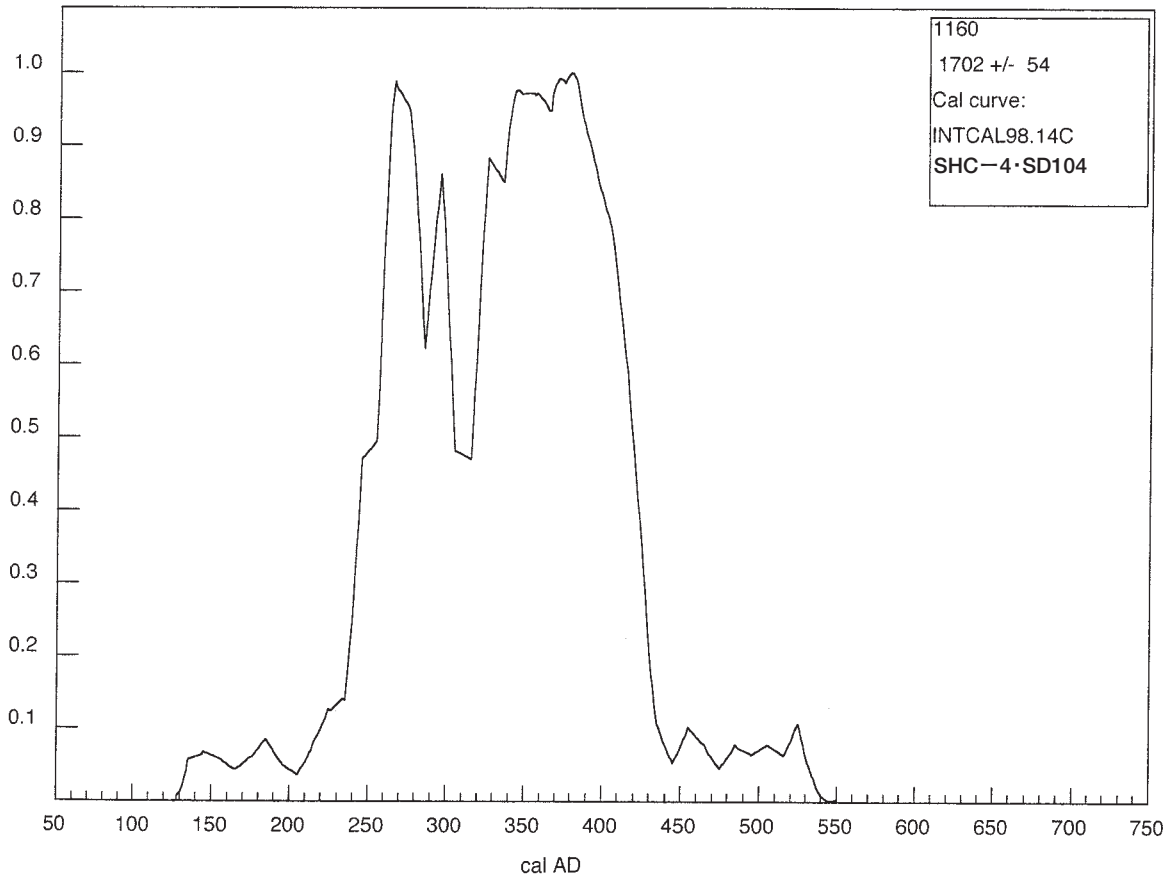
放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ^{13}C PDB (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-1159 (AMS)	木片 SHC-4・溝ＳＤ104	-28.2	1,840±50	cal AD 135 cal AD 165 cal AD 200 cal AD 205	cal AD 125 - 240 (94.3%)



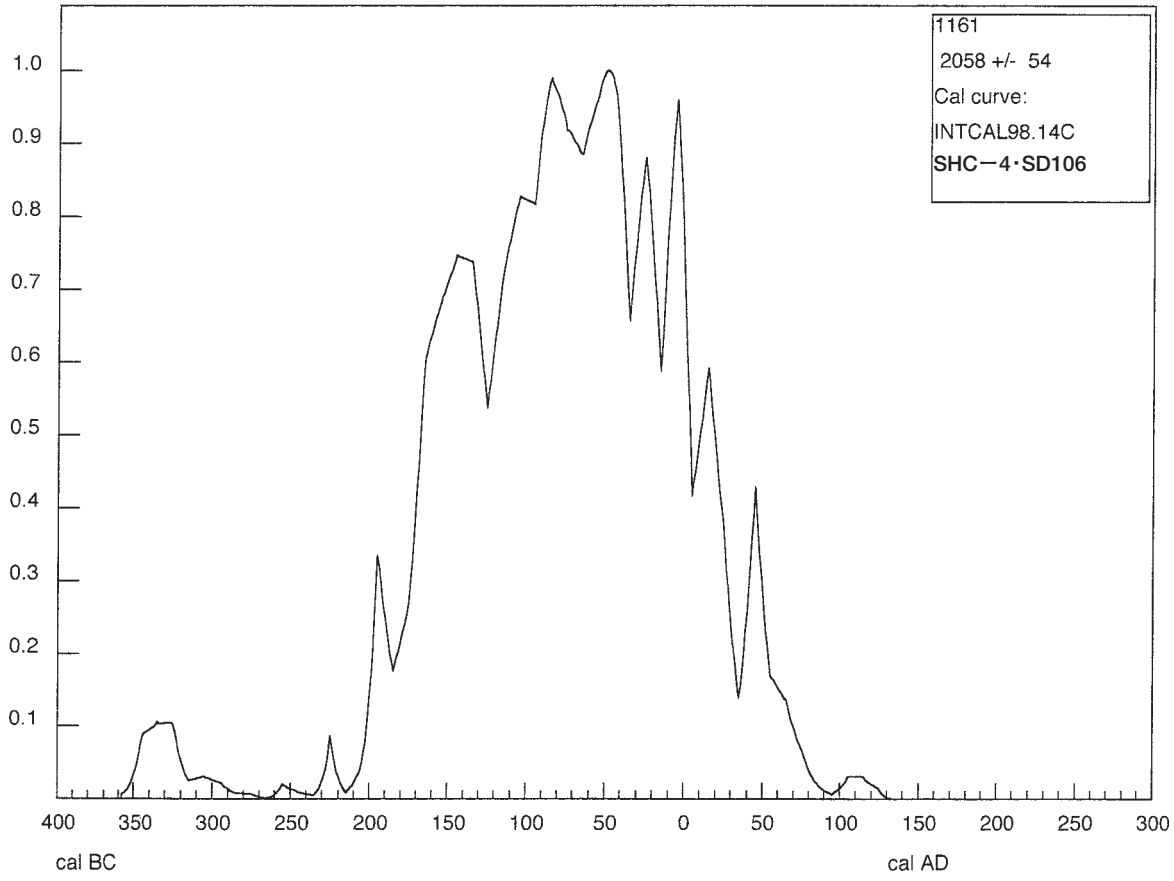
放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ^{13}C PDB (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-1160 (AMS)	木片 SHC-4・溝ＳＤ106	-28.8	1,700±50	cal AD 345 cal AD 370 cal AD 380	cal AD 260 - 280 (19.7%) cal AD 320 - 410 (73.1%)



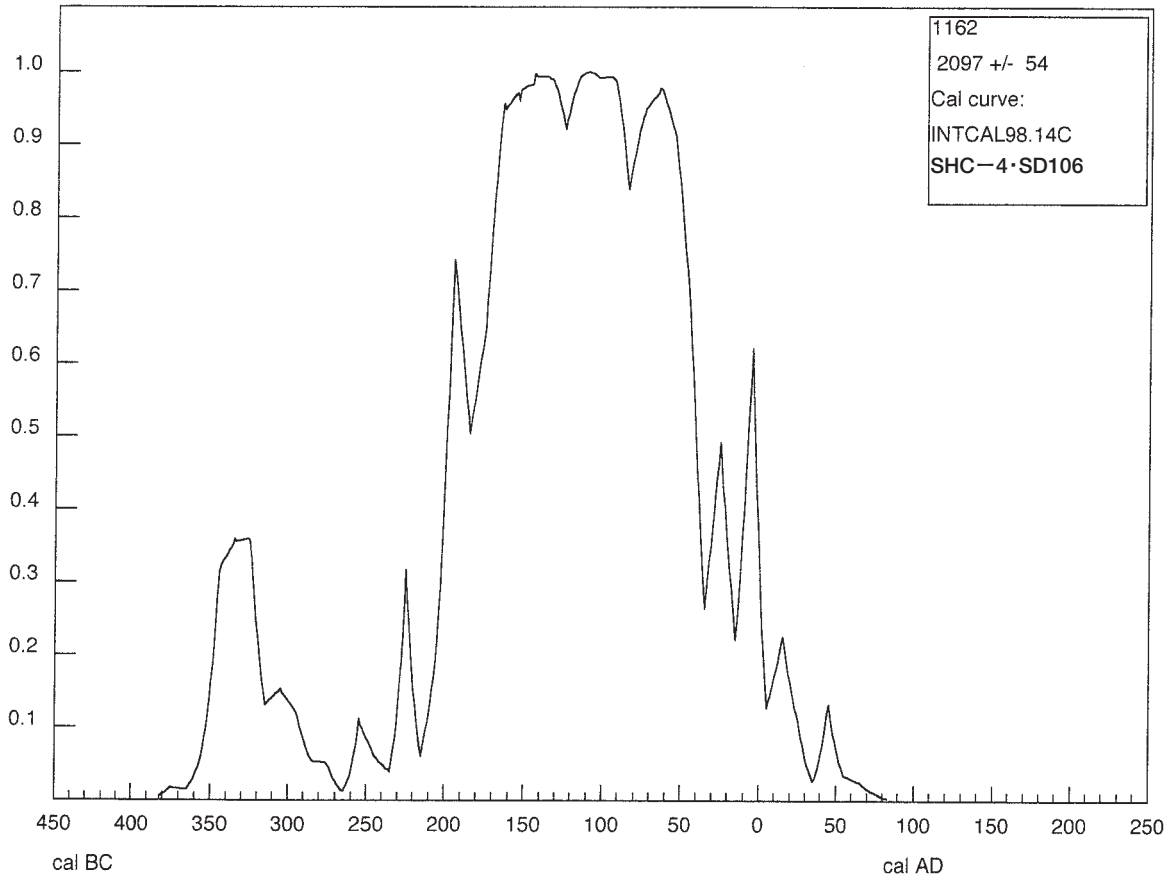
放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ^{13}C PDB (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-1161 (AMS)	木片 SHC-4・溝ＳＤ106	-29.7	2,060±50	cal BC 50	cal BC 155 - 130 (15.9%) cal BC 120 - cal AD 0 (84.0%)



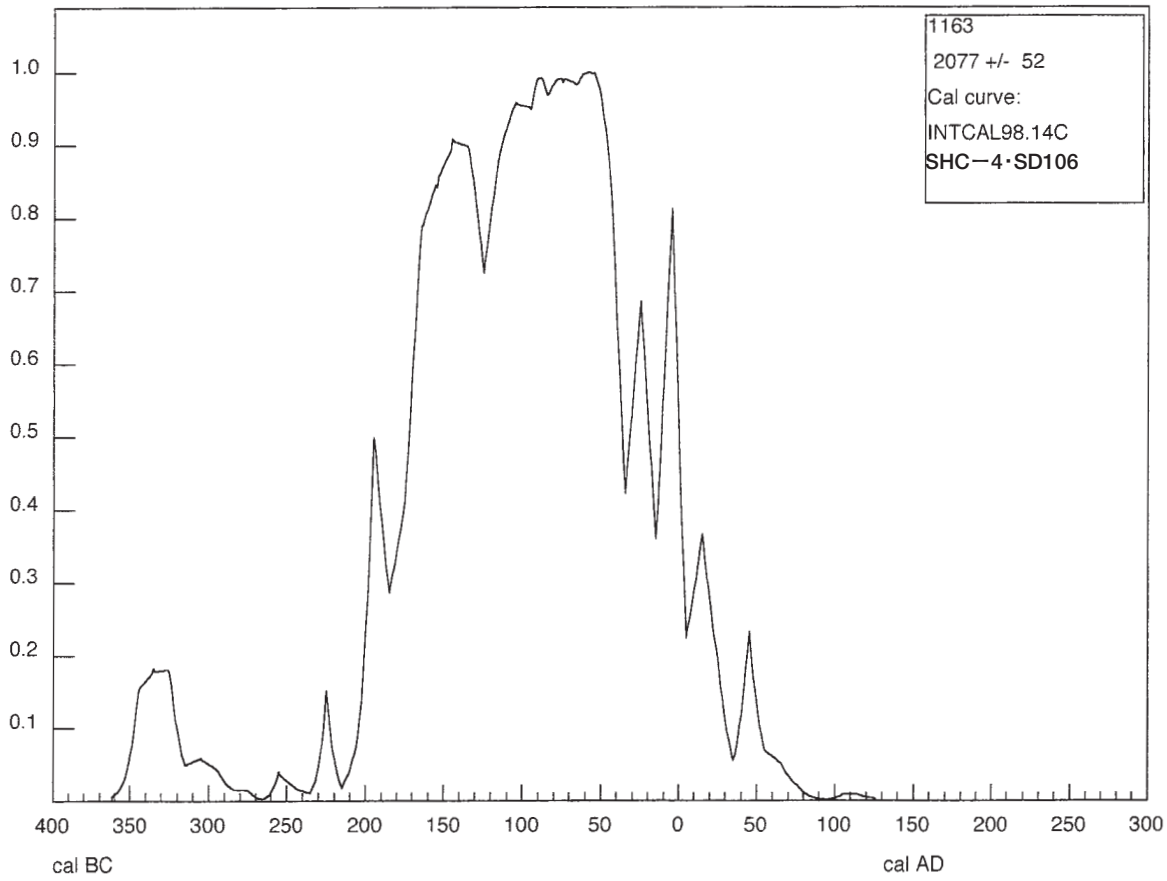
放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ^{13}C PDB (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-1162 (AMS)	木片 SHC-4・溝ＳＤ106	-29.0	2,100±50	cal BC 110	cal BC 175 - 45 (96.7%)



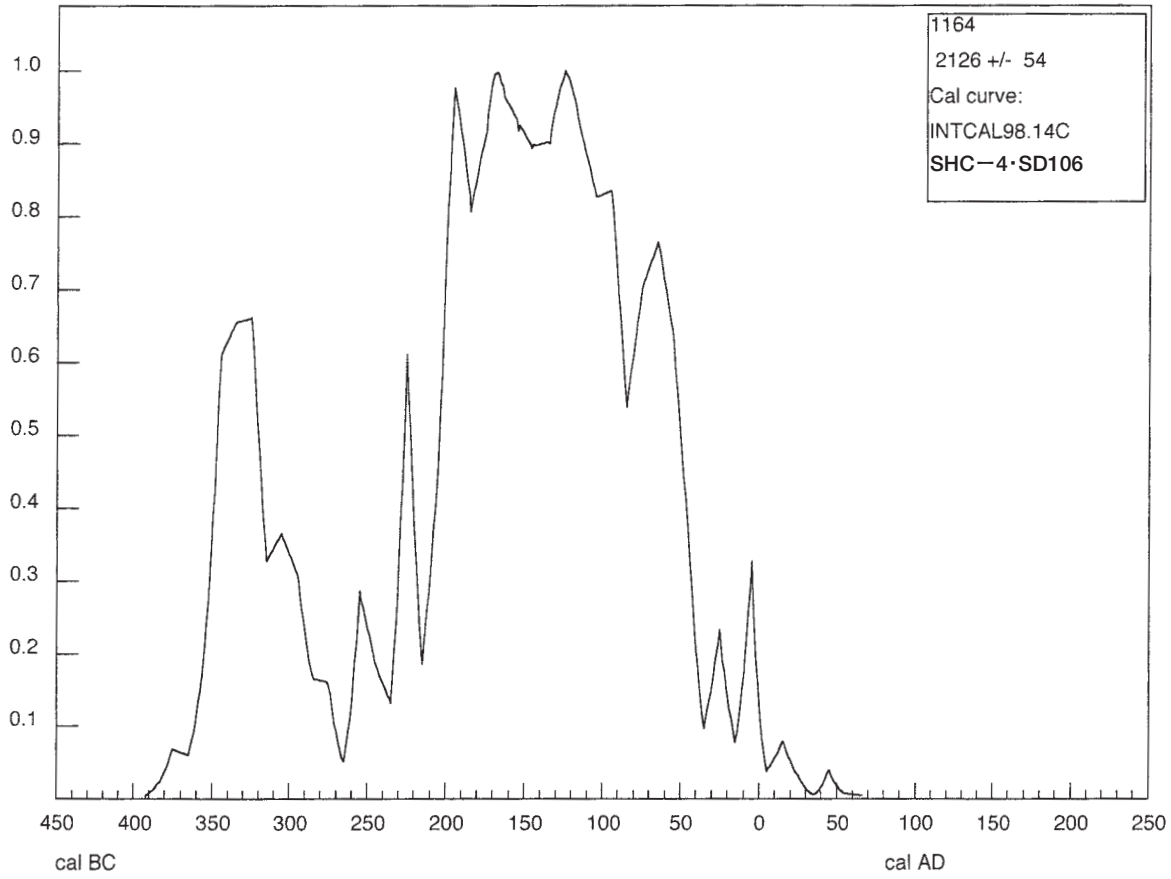
放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ^{13}C PDB (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-1163 (AMS)	木片 SHC-4・溝ＳＤ106	-27.7	2,080±50	cal BC 90 cal BC 75 cal BC 60	cal BC 170 - 40 (97.4%)



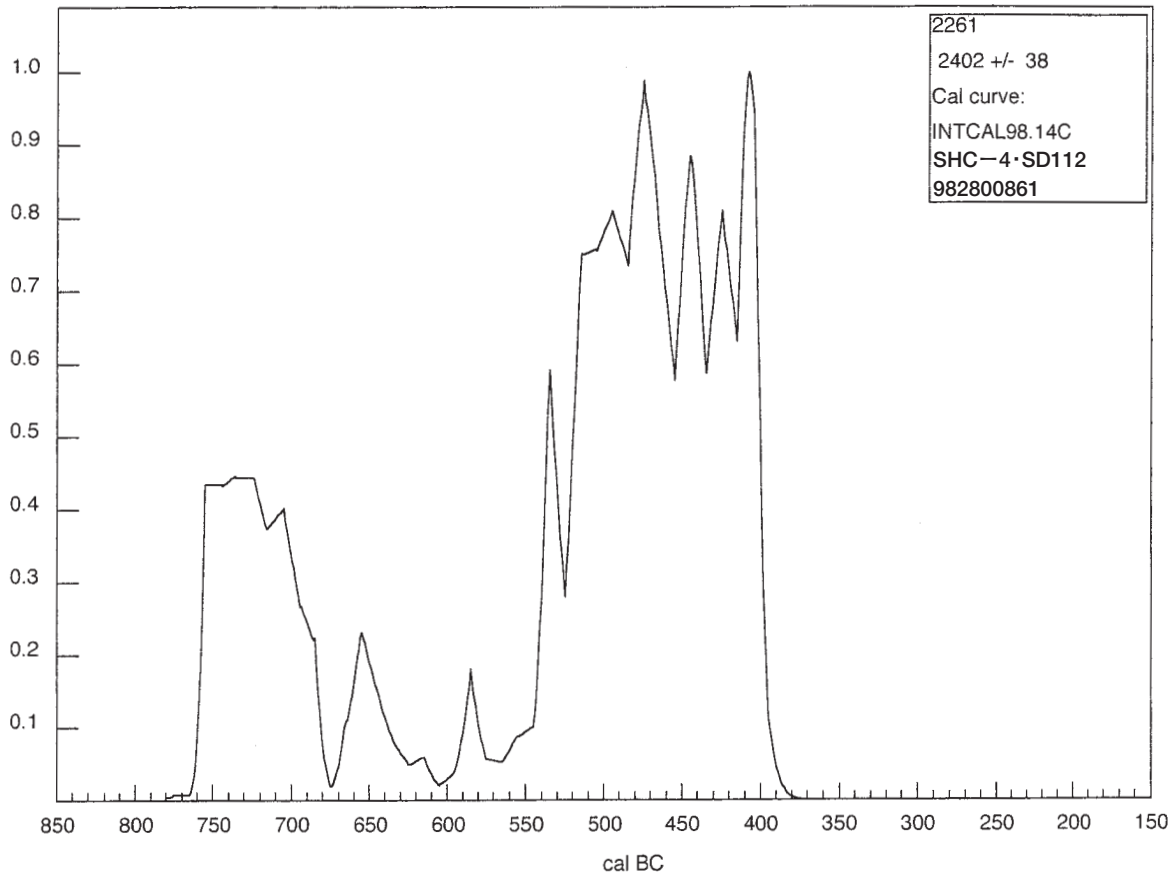
放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ^{13}C PDB (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-1164 (AMS)	木片 SHC-4・溝ＳＤ106	-28.0	2,130±50	cal BC 170	cal BC 200 - 90 (78.2%) cal BC 80 - 55 (13.4%)



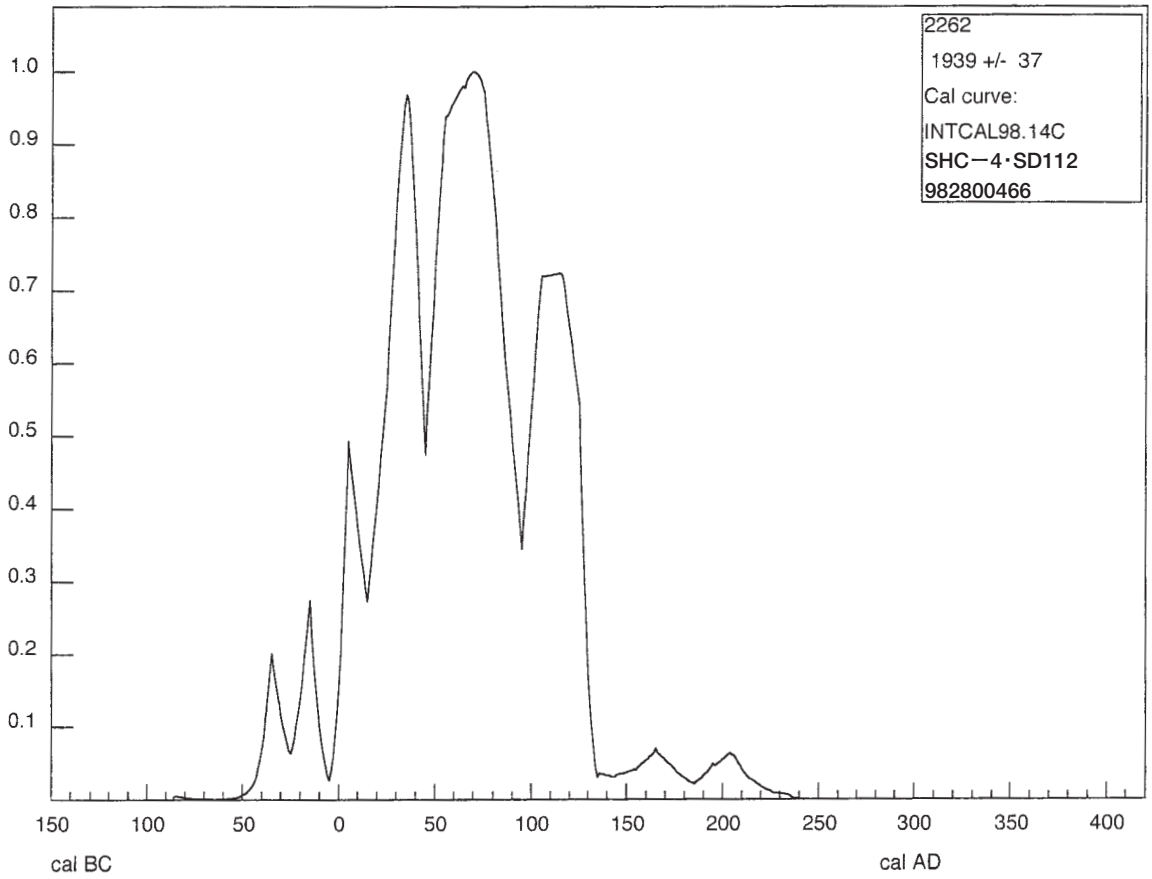
放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

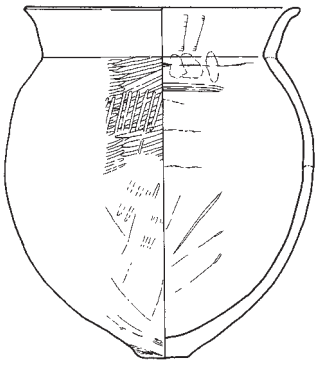
測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ^{13}C PDB (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-2261 (AMS)	土器付着物 SHC-4・溝ＳＤ112 甕 982800861	-27.8	2,400±40	cal BC 410	cal BC 520 - 400 (96.4%)



放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ^{13}C PDB (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-2262 (AMS)	土器付着物 SHC-4・溝ＳＤ112 壺 982800466	-30.3	1,940±35	cal AD 70	cal AD 25 - 85 (76.6%) cal AD 100 - 125 (23.3%)

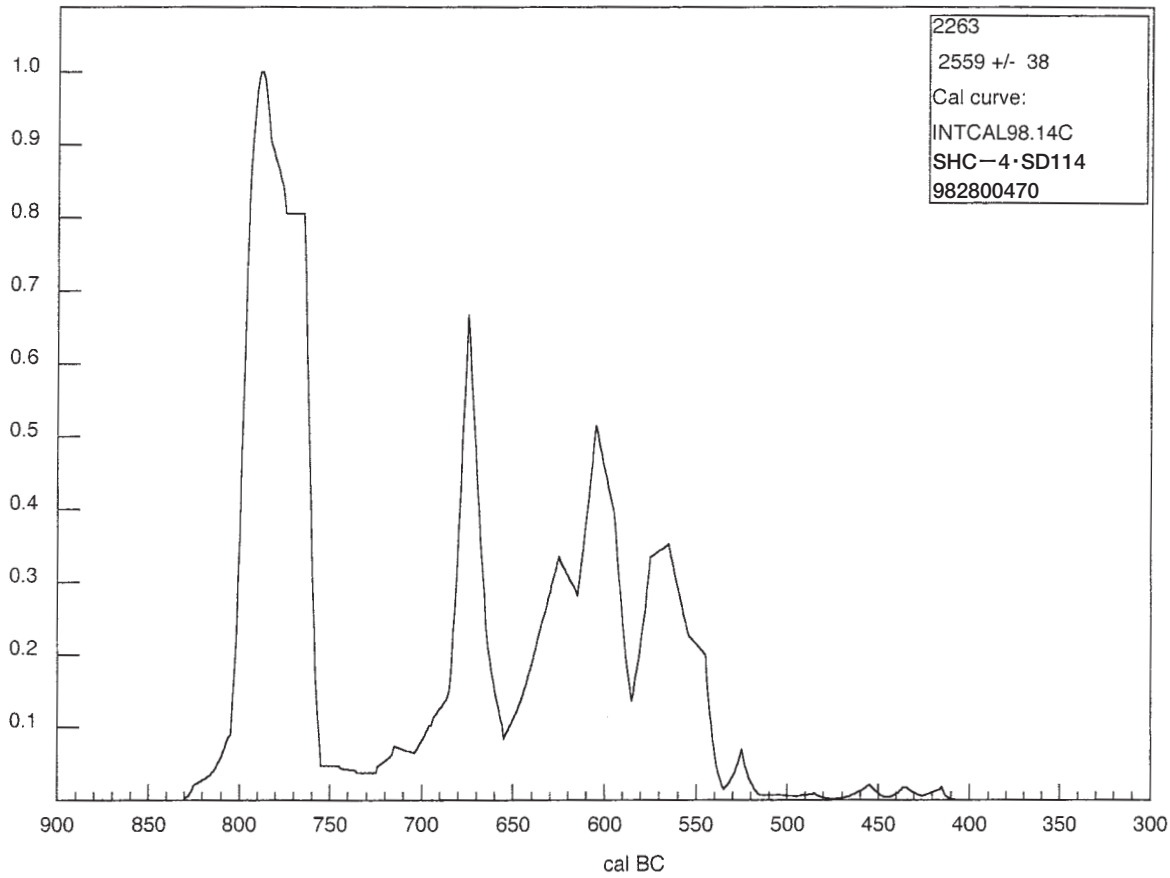


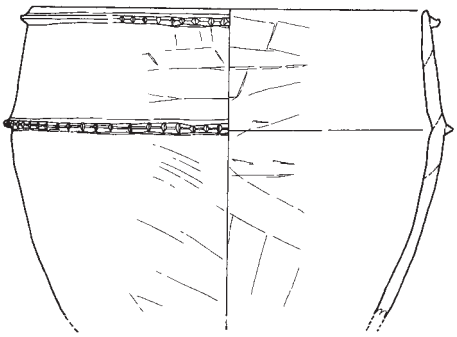


下月隈C遺跡第4次・SD112出土土器（982800466）実測図（縮尺：1/4）

放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ^{13}C PDB (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-2263 (AMS)	土器付着物 SHC-4・溝ＳＤ114 甕 982800470	-28.2	2,560±40	cal BC 790	cal BC 800 - 760 (57.8%) cal BC 680 - 665 (12.8%) cal BC 615 - 590 (15.9%)

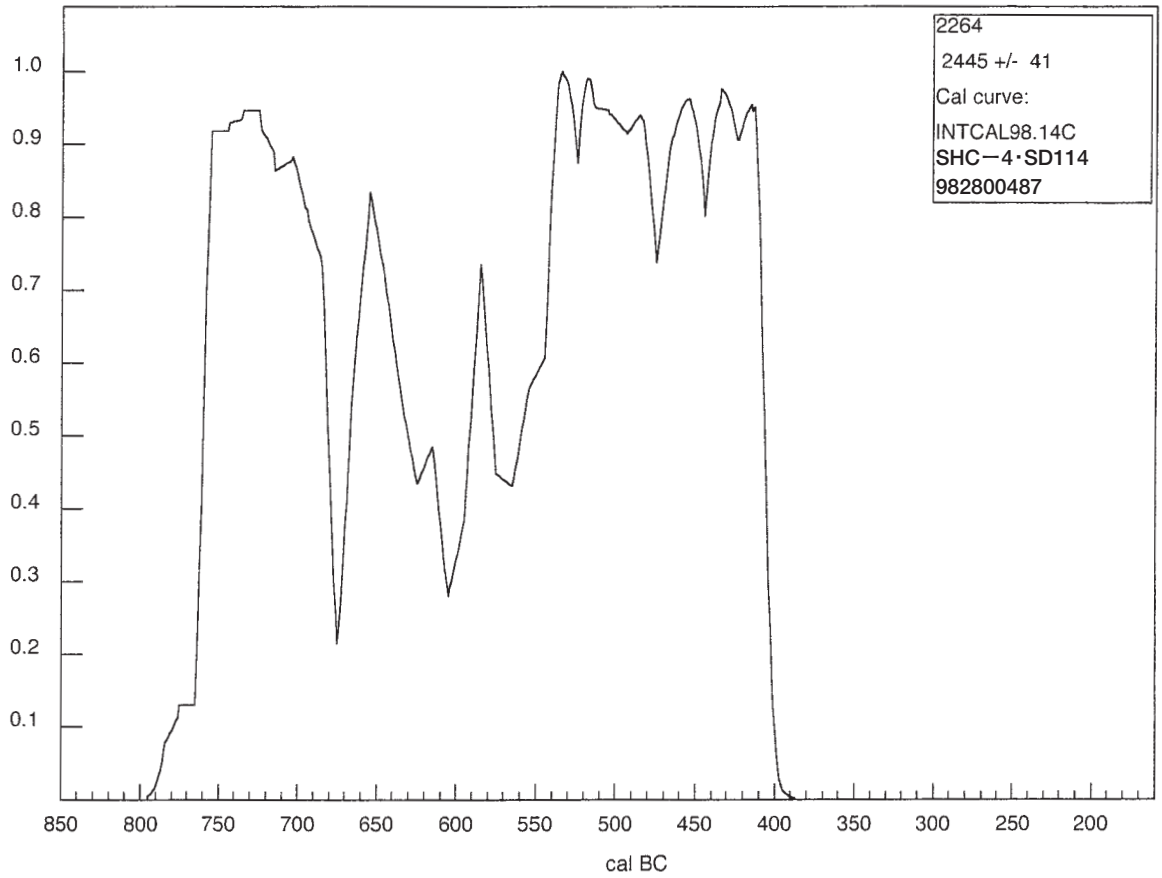


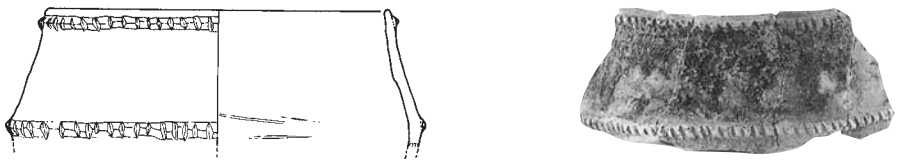


下月隈C遺跡第4次・SD114出土土器（982800470）実測図（縮尺：1/4）

放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ^{13}C PDB (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1 σ 暦年代範囲
PLD-2264 (AMS)	土器付着物 SHC-4・溝ＳＤ114 甕 982800487	-26.4	2,445±40	cal BC 535 cal BC 520	cal BC 755 - 690 (32.1%) cal BC 540 - 410 (64.9%)

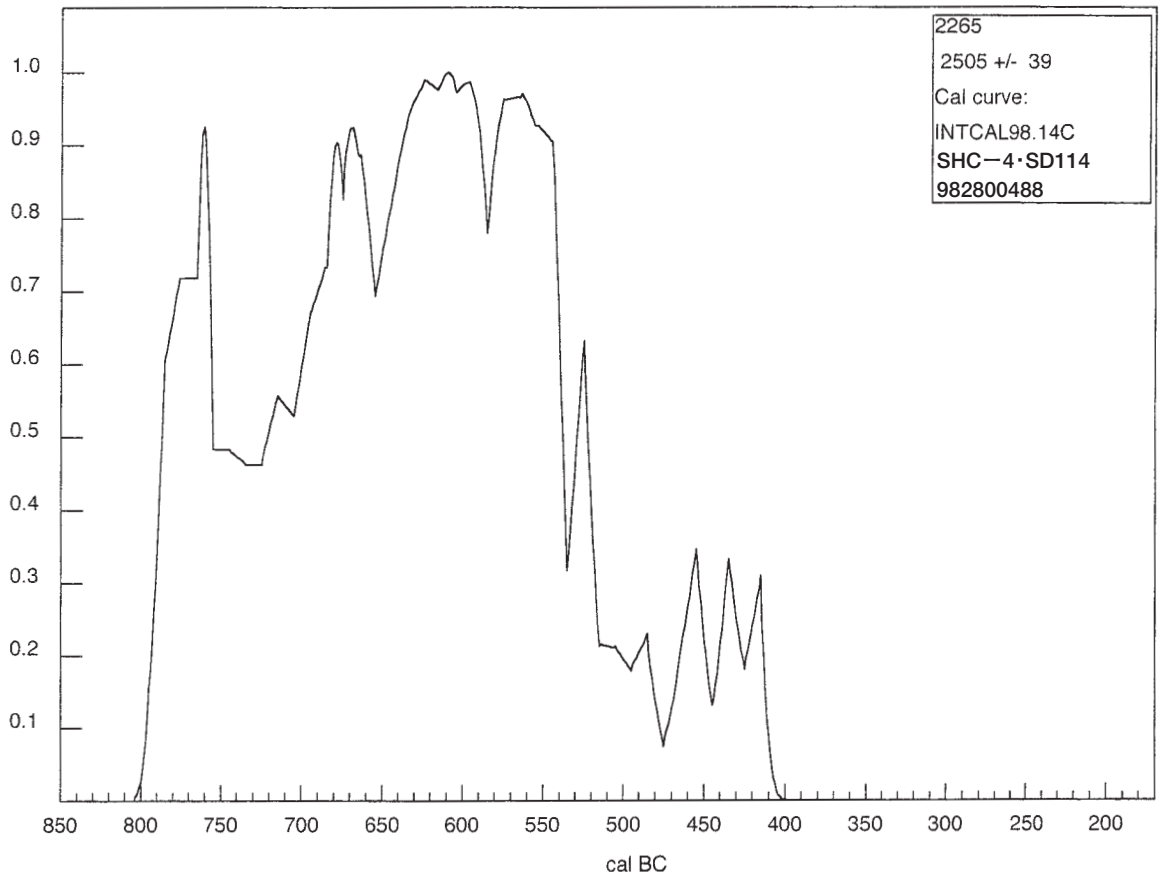


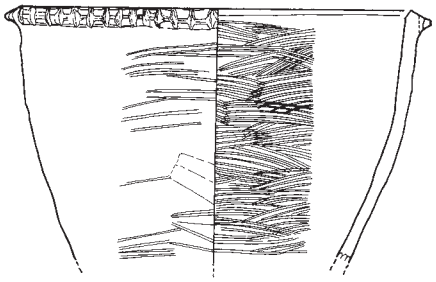


下月隈C遺跡第4次・SD114出土土器（982800487）実測図（縮尺：1/4）

放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号（測定法）	分析試料 遺跡名・出土遺構 器種 遺物No.	δ13C PDB (‰)	14C年代 (yrBP±1σ)	14C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-2265 (AMS)	土器付着物 SHC-4・溝SD114 甕 982800488	-29.4	2,505±40	cal BC 760 cal BC 680 cal BC 670 cal BC 610 cal BC 595	cal BC 780 - 755 (11.2%) cal BC 695 - 540 (88.8%)

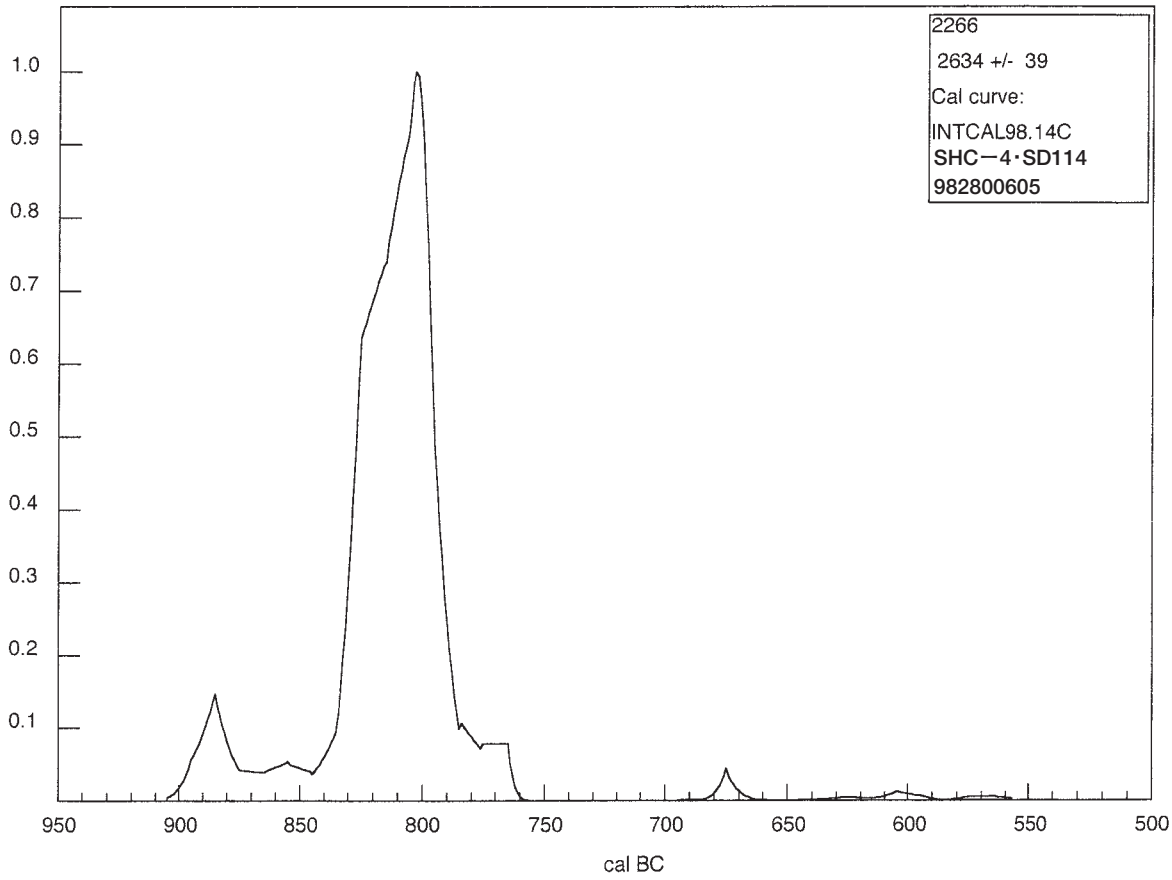


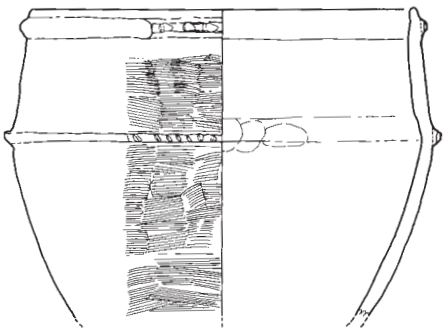


下月隈C遺跡第4次・SD114出土土器（982800488）実測図（縮尺：1/4）

放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ ^{13}C PDB (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-2266 (AMS)	土器付着物 SHC-4・溝ＳＤ114 甕 982800605	-26.5	2,635±40	cal BC 805	cal BC 825 - 795 (100%)

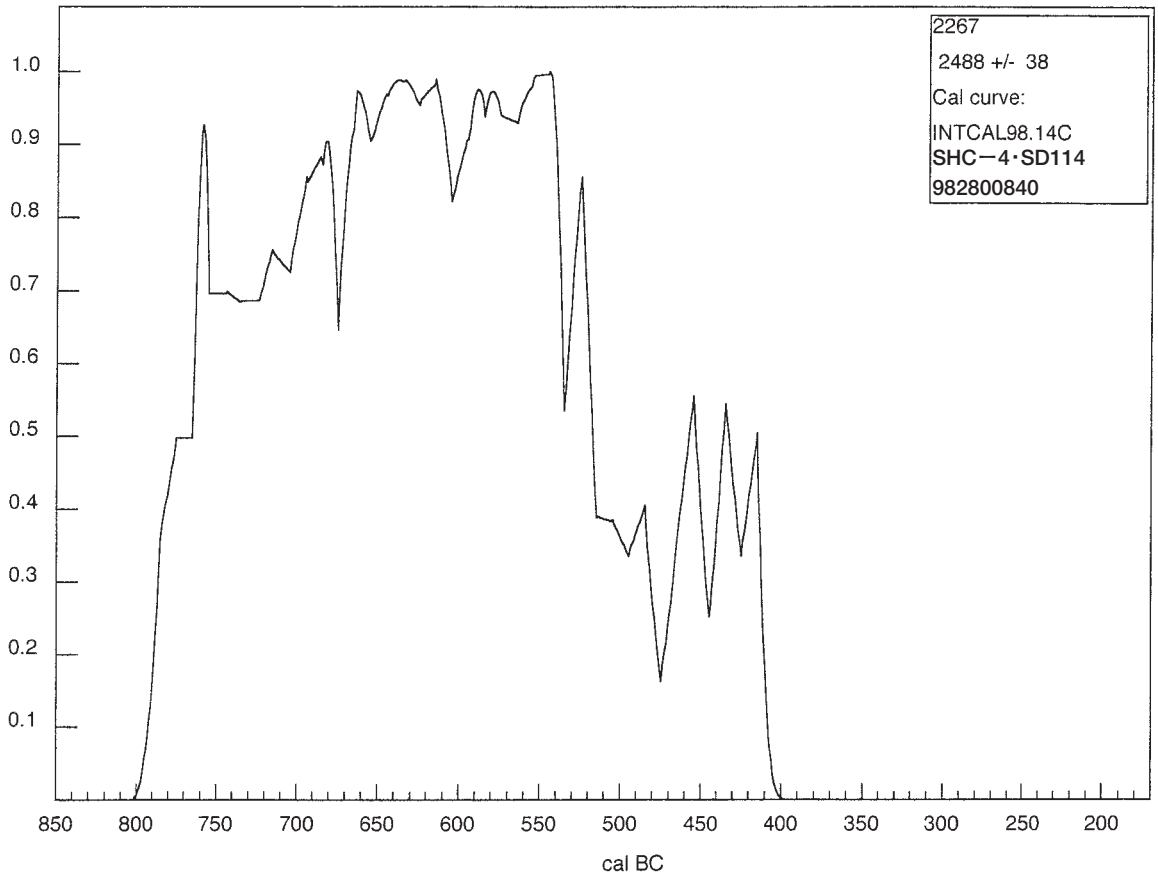


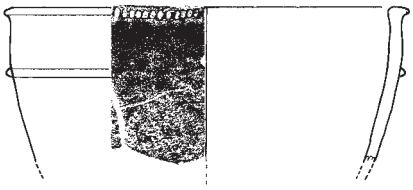


下月隈C遺跡第4次・SD114出土土器（982800605）実測図（縮尺：1/4）

放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ^{13}C PDB (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-2267 (AMS)	土器付着物 SHC-4・溝ＳＤ114 甕 982800840	-29.0	2,490±40	cal BC 760 cal BC 685 cal BC 665 cal BC 640 cal BC 590 cal BC 580 cal BC 545	cal BC 725 - 540 (92.3%)

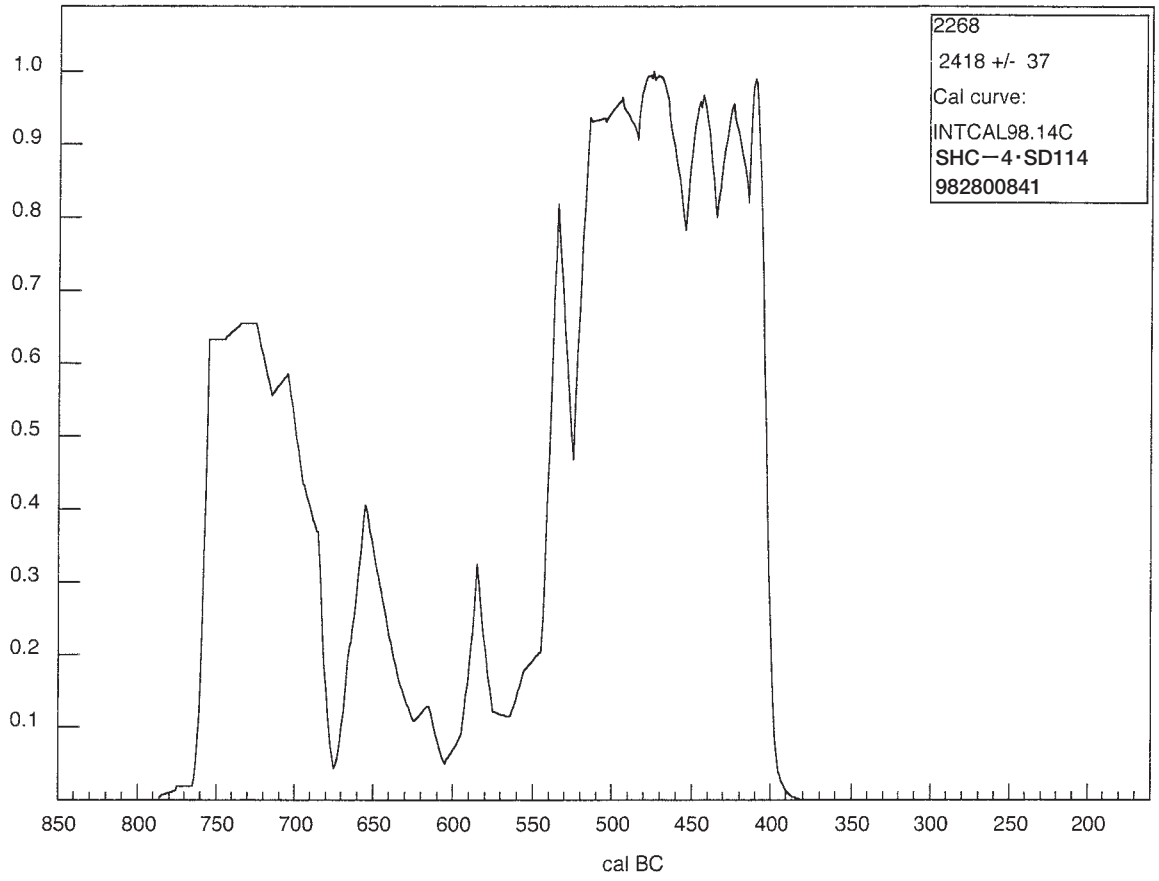


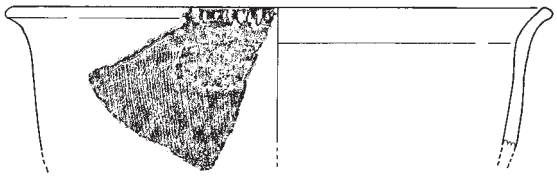


下月隈C遺跡第4次・SD114出土土器（982800840）実測図（縮尺：1/4）

放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ^{13}C PDB (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-2268 (AMS)	土器付着物 SHC-4・溝ＳＤ114 甕 982800841	-28.7	2,420±35	cal BC 480 cal BC 470 cal BC 410	cal BC 755 - 725 (15.5%) cal BC 520 - 405 (80.2%)

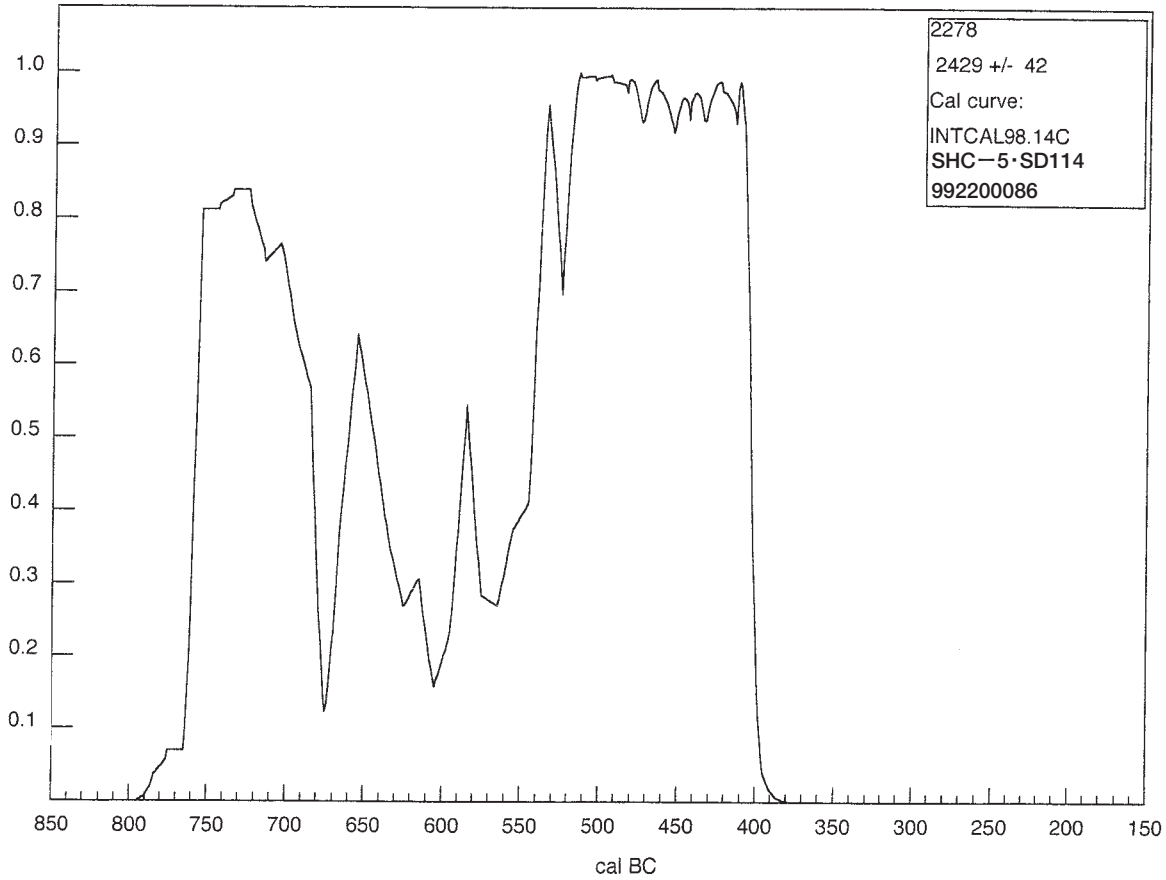


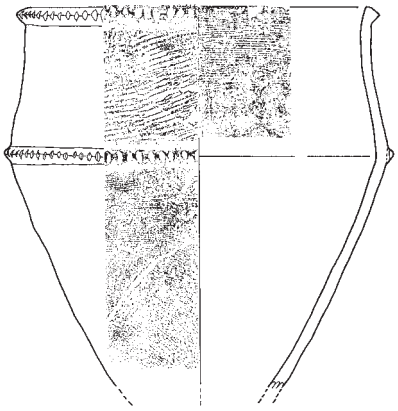


下月隈C遺跡第4次・SD114出土土器（982800841）実測図（縮尺：1/4）

放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号（測定法）	分析試料 遺跡名・出土遺構 器種 遺物No.	δ^{13}C PDB (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-2278 (AMS)	土器付着物 SHC-5・溝SD114 甕 992200086	-26.7	2,430±40	cal BC 495 cal BC 485 cal BC 465 cal BC 450 cal BC 440 cal BC 425 cal BC 415	cal BC 755 - 715 (20.0%) cal BC 540 - 405 (75.8%)

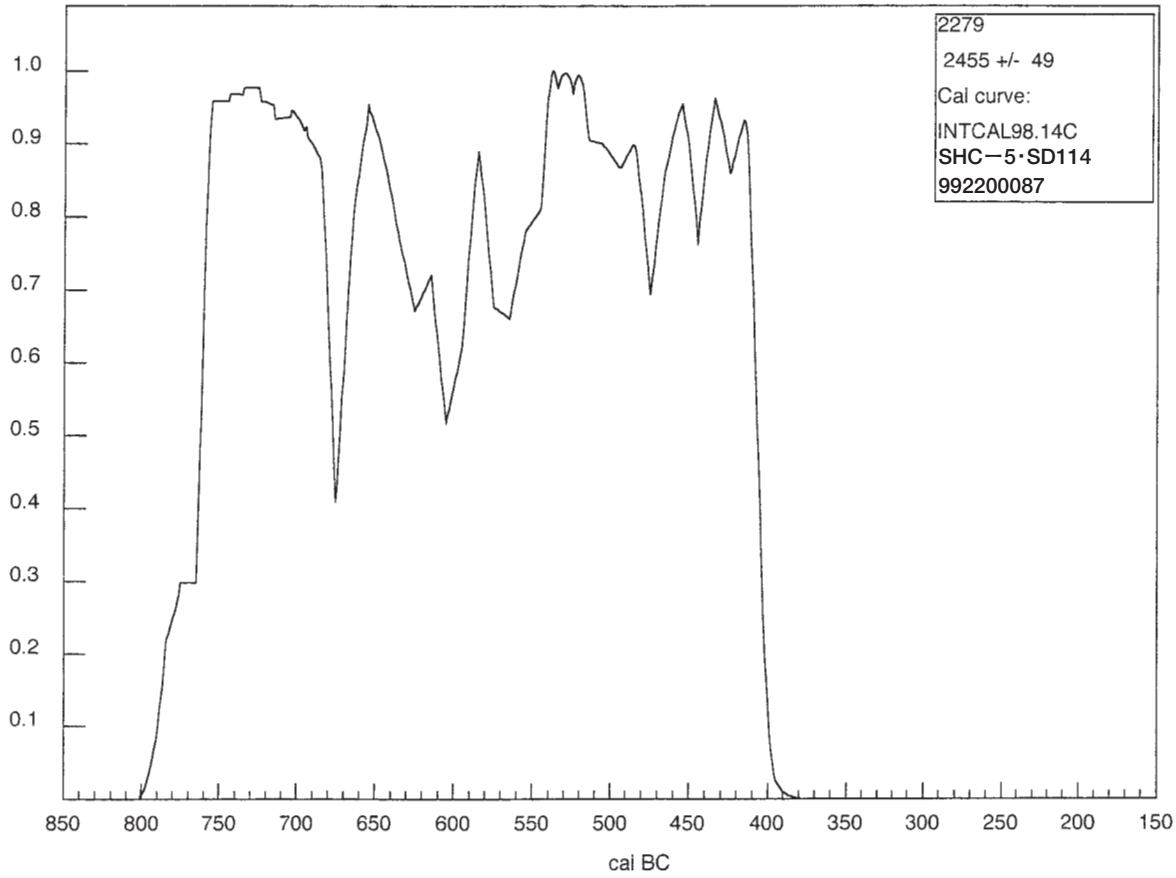


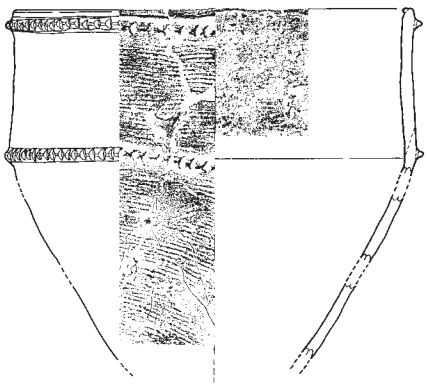


下月隈C遺跡第5次・SD114出土土器（992200086）実測図（縮尺：1/4）

放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ 13C PDB (‰)	14C年代 (yrBP±1σ)	14C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-2279 (AMS)	土器付着物 SHC-5・溝ＳＤ114 甕 992200087	-29.1	2,455±50	cal BC 740 cal BC 725 cal BC 540 cal BC 530 cal BC 520	cal BC 760 - 685 (33.8%) cal BC 665 - 640 (10.6%) cal BC 545 - 480 (29.1%) cal BC 470 - 410 (23.2%)

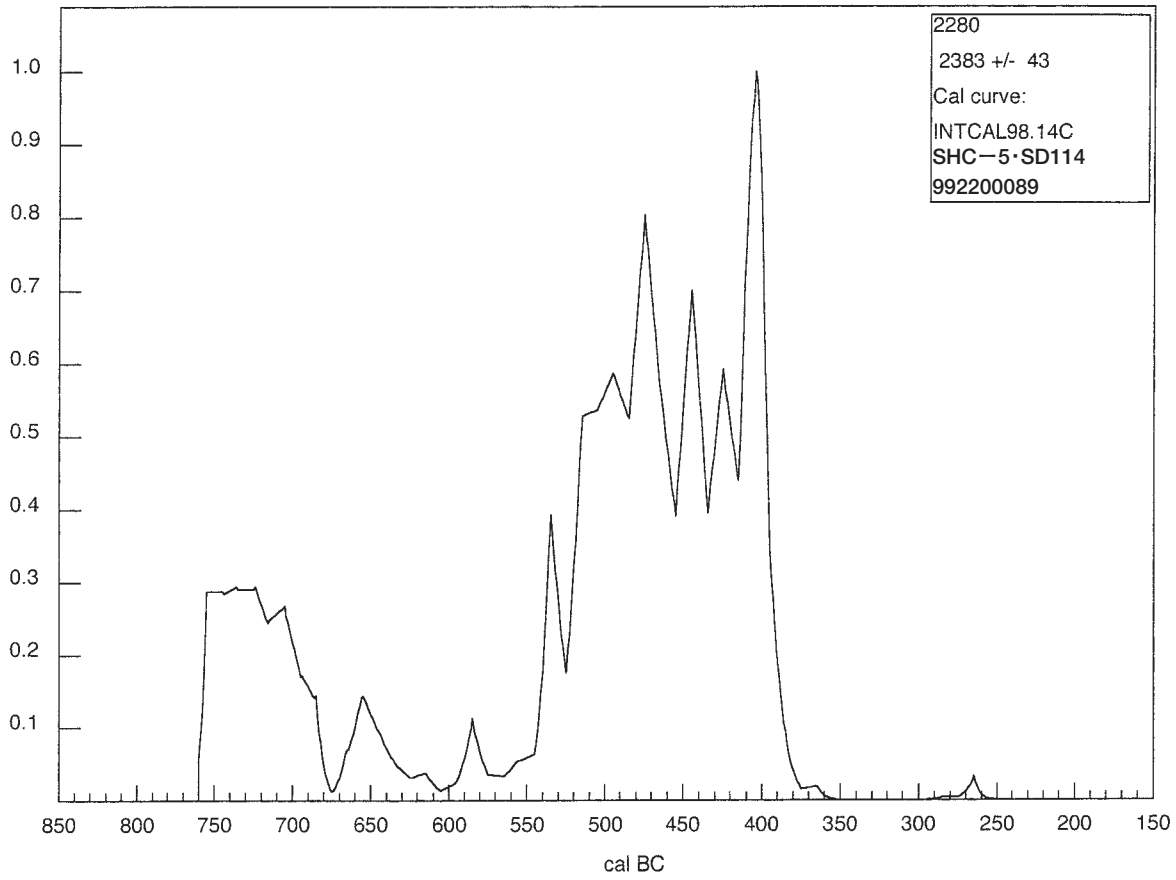


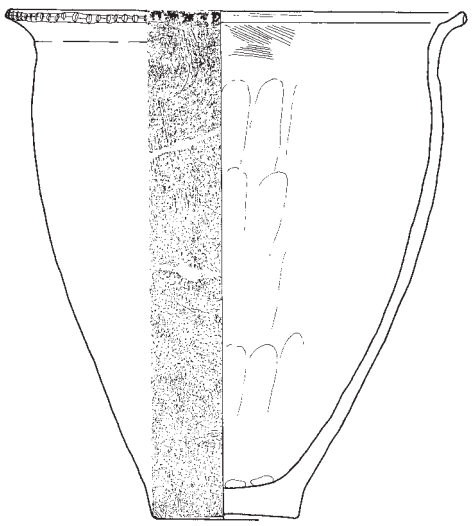


下月隈C遺跡第5次・SD114出土土器（992200087）実測図（縮尺：1/4）

放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ 13C PDB (‰)	14C年代 (yrBP±1σ)	14C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-2280 (AMS)	土器付着物 SHC-5・溝ＳＤ114 甕 992200089	-25.5	2,385±45	cal BC 405	cal BC 520 - 395 (99.0%)

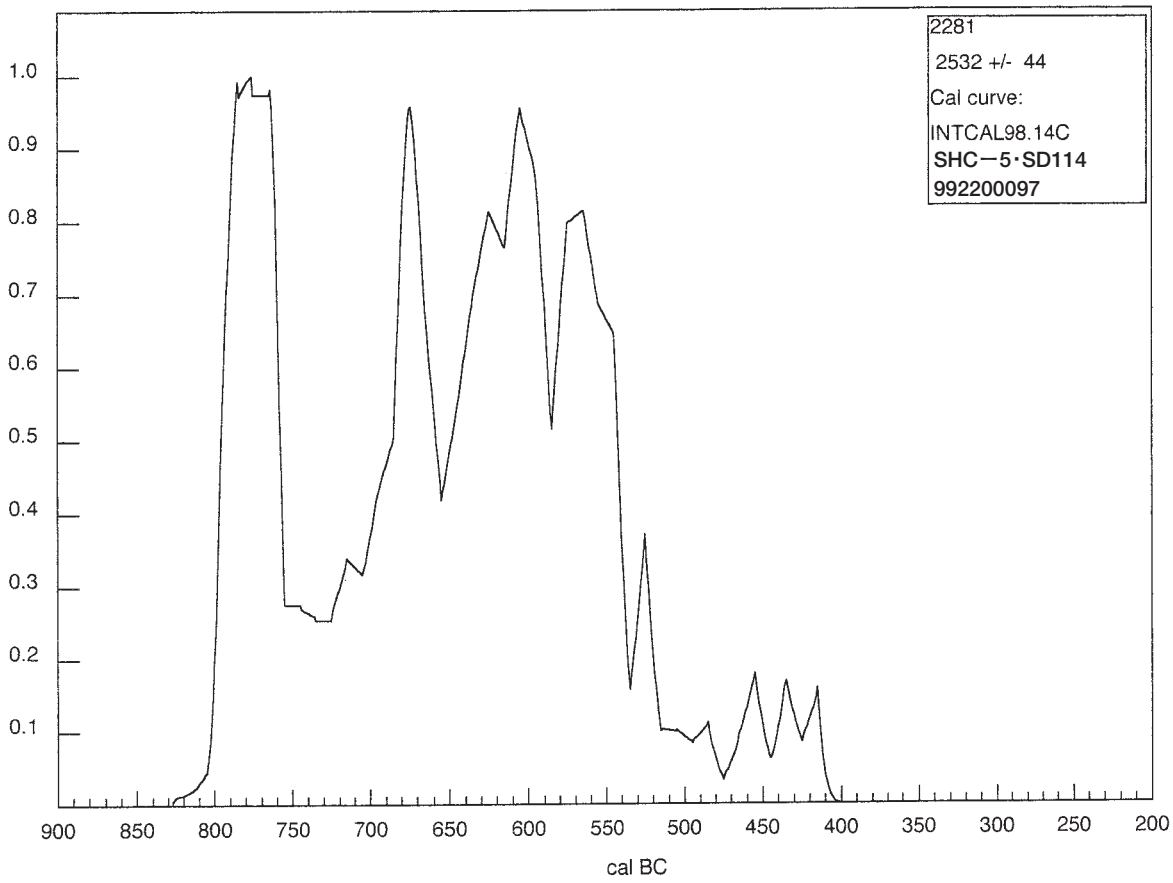


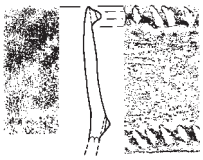


下月隈C遺跡第5次・SD114出土土器（992200089）実測図（縮尺：1/4）

放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ^{13}C PDB (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-2281 (AMS)	土器付着物 SHC-5・溝ＳＤ114 甕 992200097	-27.3	2,530±45	cal BC 765	cal BC 795 - 760 (26.7%) cal BC 685 - 660 (14.2%) cal BC 645 - 545 (59.1%)

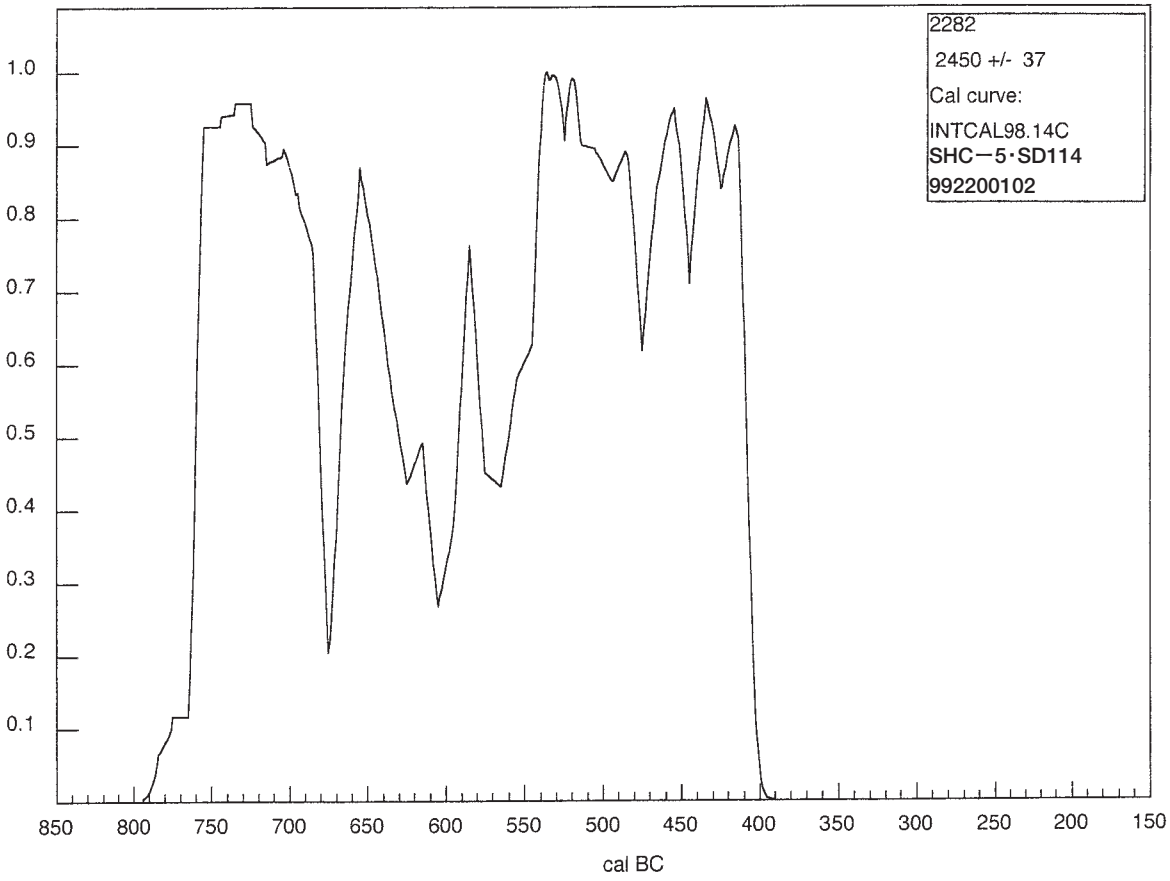


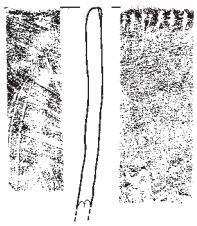


下月隈C遺跡第5次・SD114出土土器（992200097）実測図（縮尺：1/4）

放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ^{13}C PDB (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-2282 (AMS)	土器付着物 SHC-5・溝ＳＤ114 甕 992200102	-28.6	2,450±35	cal BC 535 cal BC 530 cal BC 520	cal BC 760 - 685 (35.7%) cal BC 545 - 480 (31.7%) cal BC 470 - 410 (26.8%)

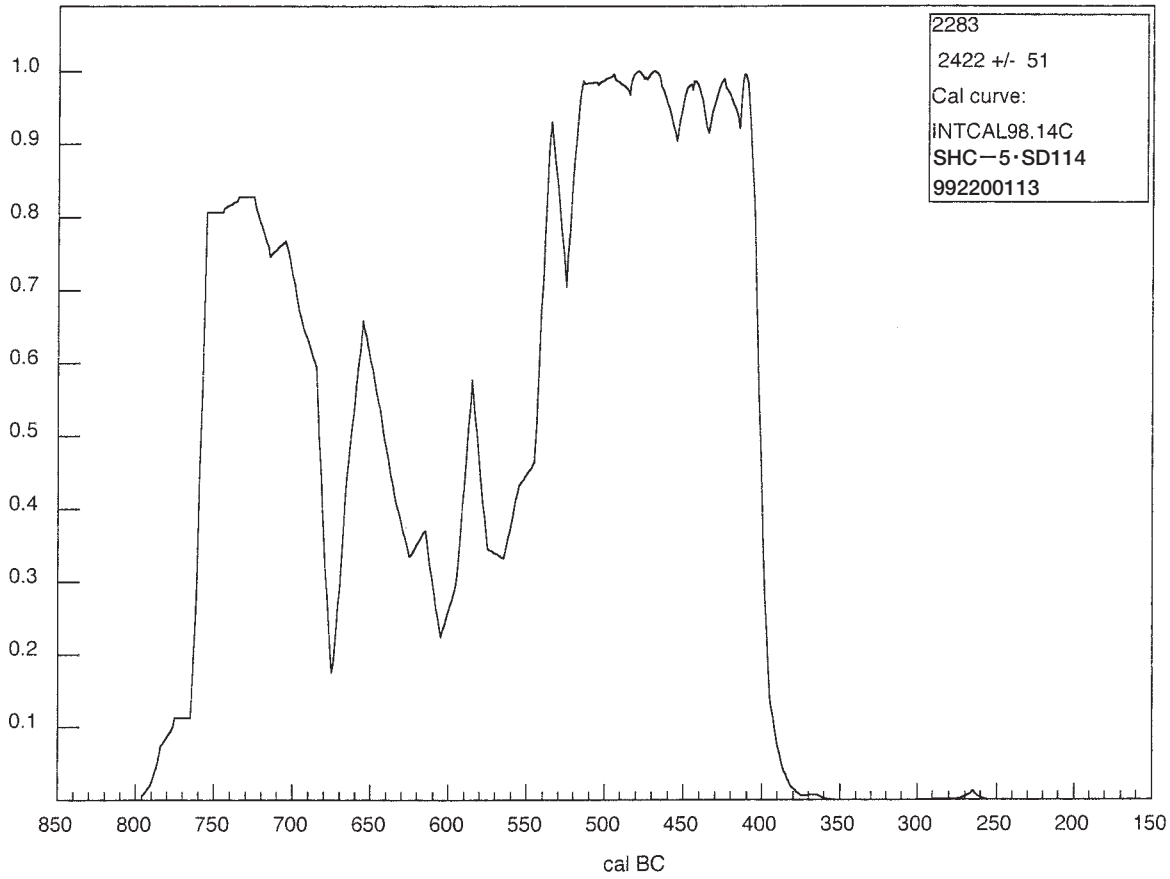


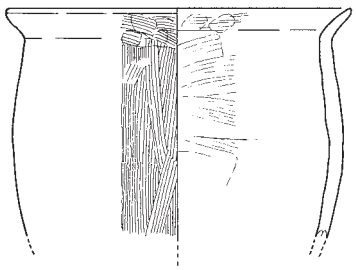


下月隈C遺跡第5次・SD114出土土器（992200102）実測図（縮尺：1/4）

放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ13C PDB (‰)	14C年代 (yrBP±1σ)	14C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-2283 (AMS)	土器付着物 SHC-5・溝ＳＤ114 壺 992200113	-28.8	2,420±50	cal BC 480 cal BC 470 cal BC 445 cal BC 410	cal BC 755 - 700 (26.2%) cal BC 540 - 405 (73.8%)

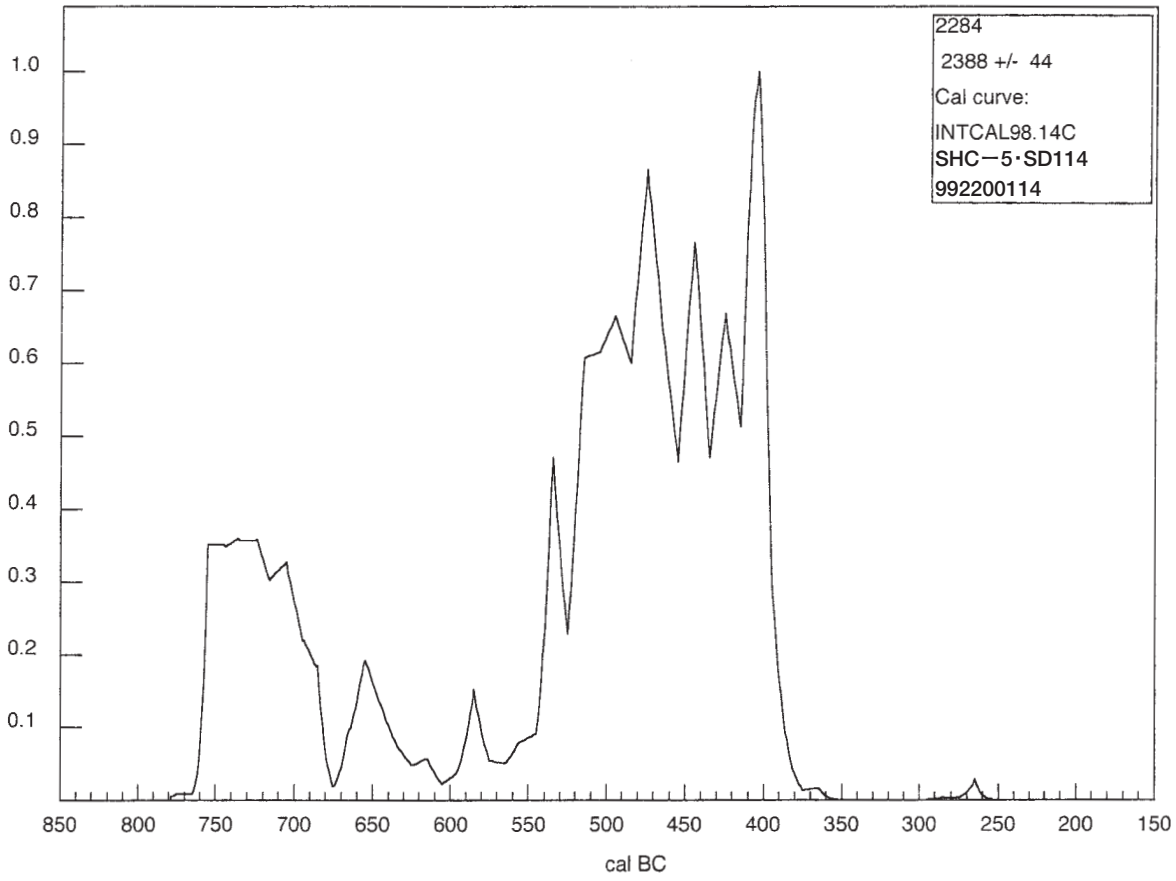


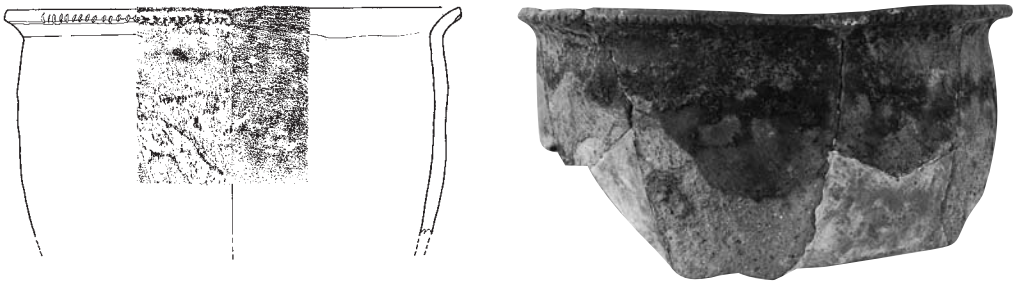


下月隈C遺跡第5次・SD114出土土器（992200113）実測図（縮尺：1/4）

放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ^{13}C PDB (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-2284 (AMS)	土器付着物 SHC-5・溝ＳＤ114 甕 992200114	-27.3	2,390±45	cal BC 405	cal BC 520 - 395 (95.4%)

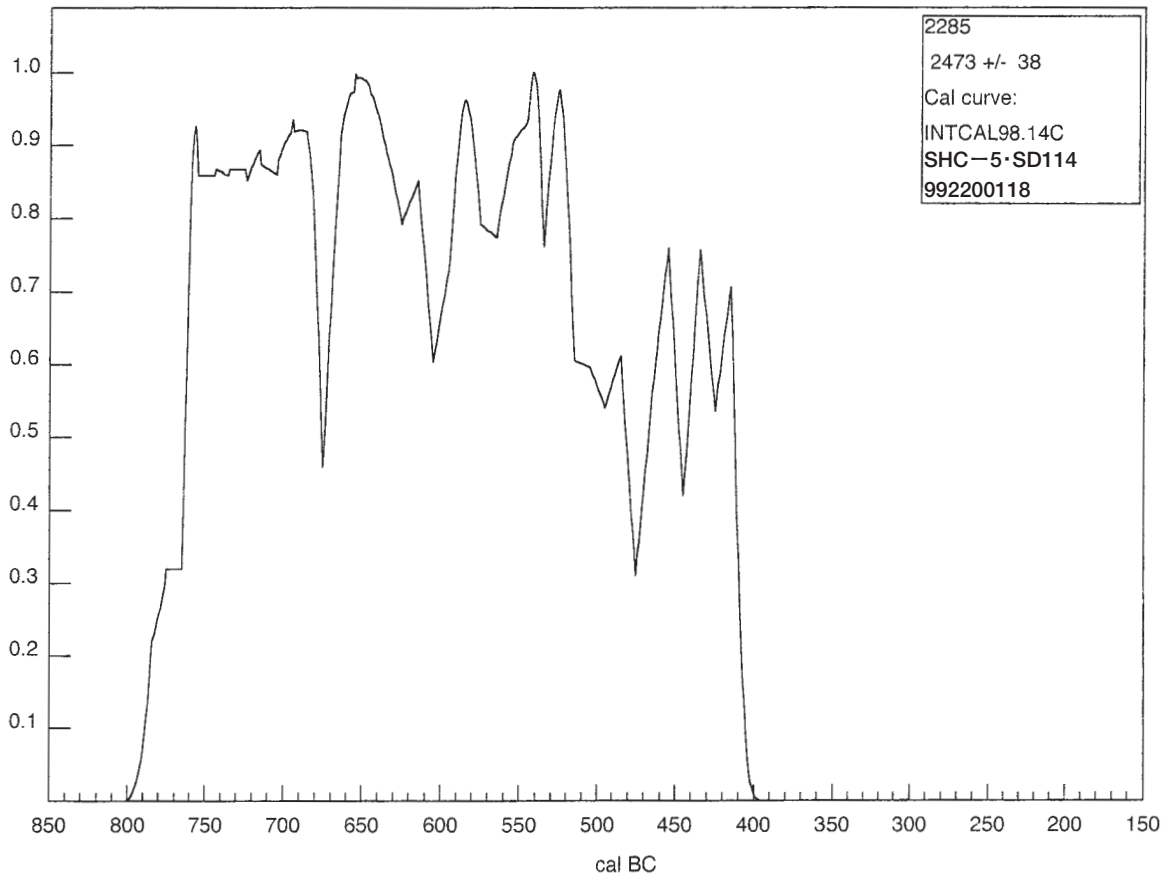


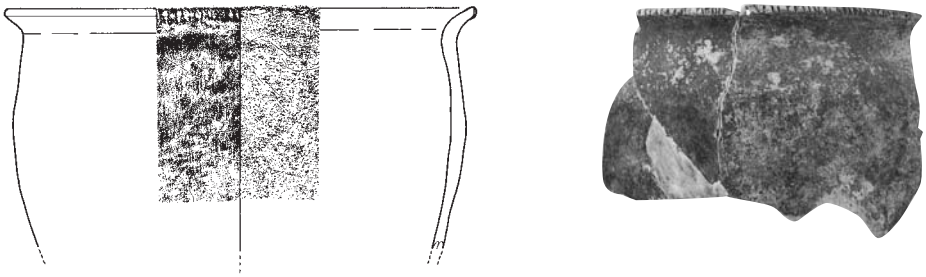


下月隈C遺跡第5次・SD114出土土器（992200114）実測図（縮尺：1/4）

放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ13C PDB (‰)	14C年代 (yrBP±1σ)	14C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-2285 (AMS)	土器付着物 SHC-5・溝ＳＤ114 甕 992200118	-27.6	2,475±40	cal BC 755 cal BC 690 cal BC 655 cal BC 650 cal BC 540	cal BC 760 - 680 (36.9%) cal BC 670 - 610 (27.2%) cal BC 595 - 520 (35.1%)

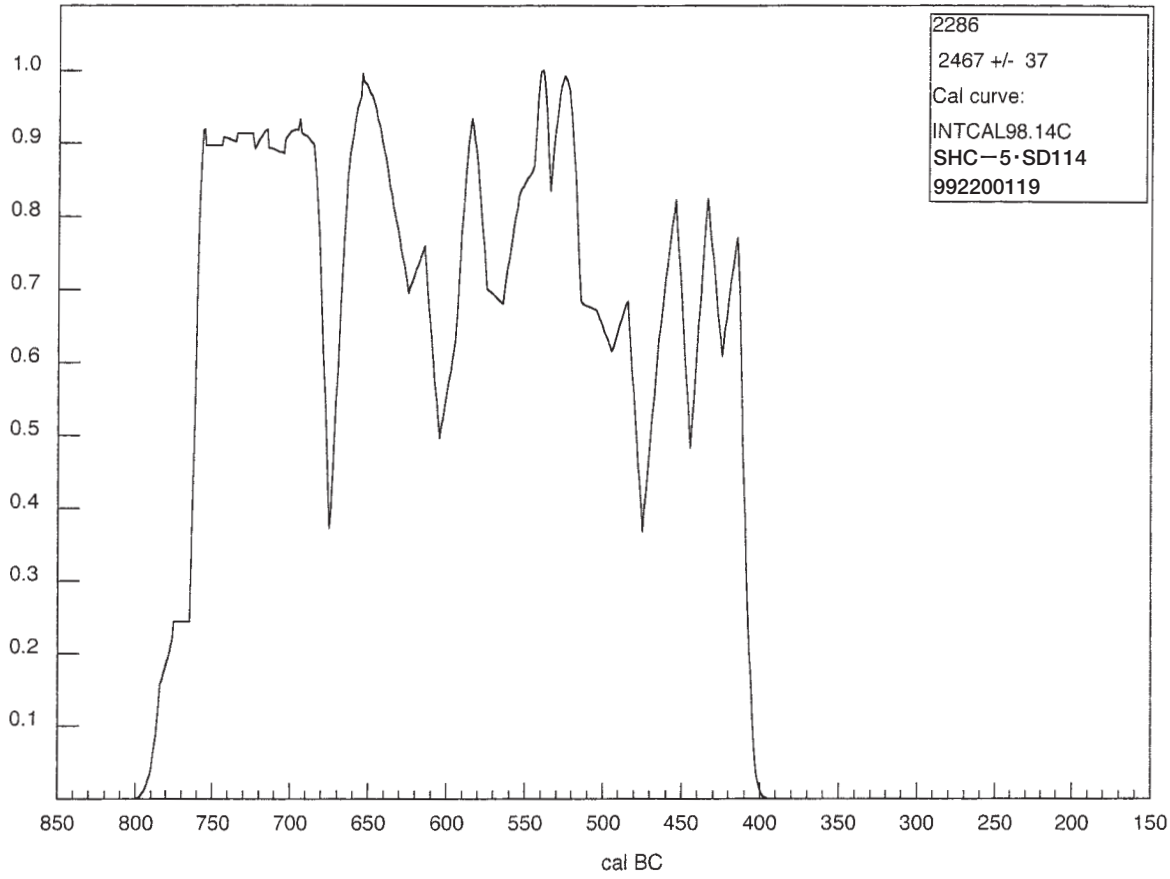


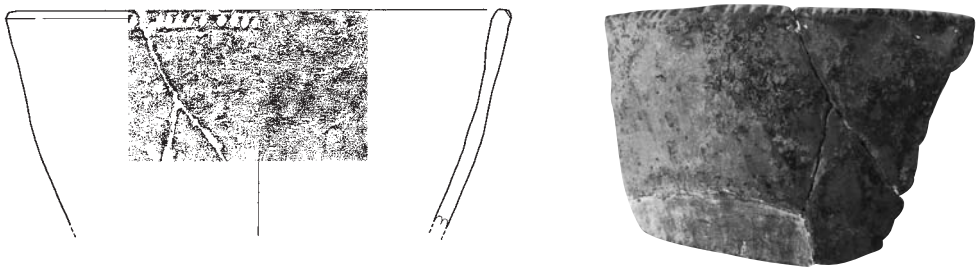


下月隈C遺跡第5次・SD114出土土器（992200118）実測図（縮尺：1/4）

放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ13C PDB (‰)	14C年代 (yrBP±1σ)	14C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-2286 (AMS)	土器付着物 SHC-5・溝ＳＤ114 甕 992200119	-28.0	2,465±35	cal BC 755 cal BC 700 cal BC 540	cal BC 760 - 680 (37.9%) cal BC 665 - 615 (22.5%) cal BC 565 - 515 (22.3%)

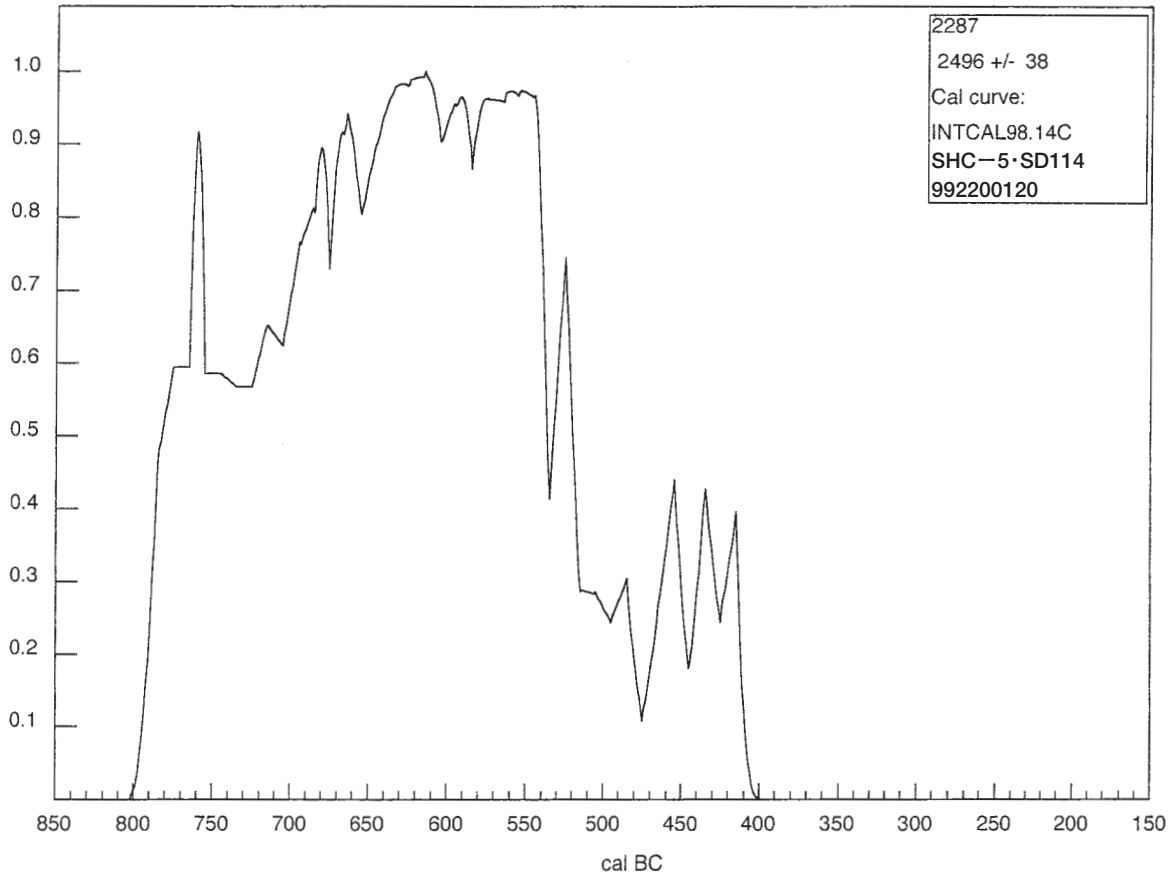


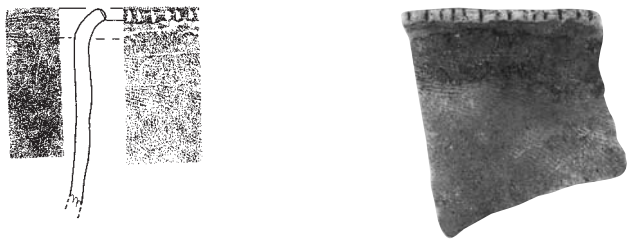


下月隈C遺跡第5次・SD114出土土器（992200119）実測図（縮尺：1/4）

放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ^{13}C PDB (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-2287 (AMS)	土器付着物 SHC-5・溝ＳＤ114 壺 992200120	-28.1	2,495±40	cal BC 760 cal BC 680 cal BC 665 cal BC 630 cal BC 615 cal BC 590 cal BC 575 cal BC 560	cal BC 705 - 540 (90.4%)

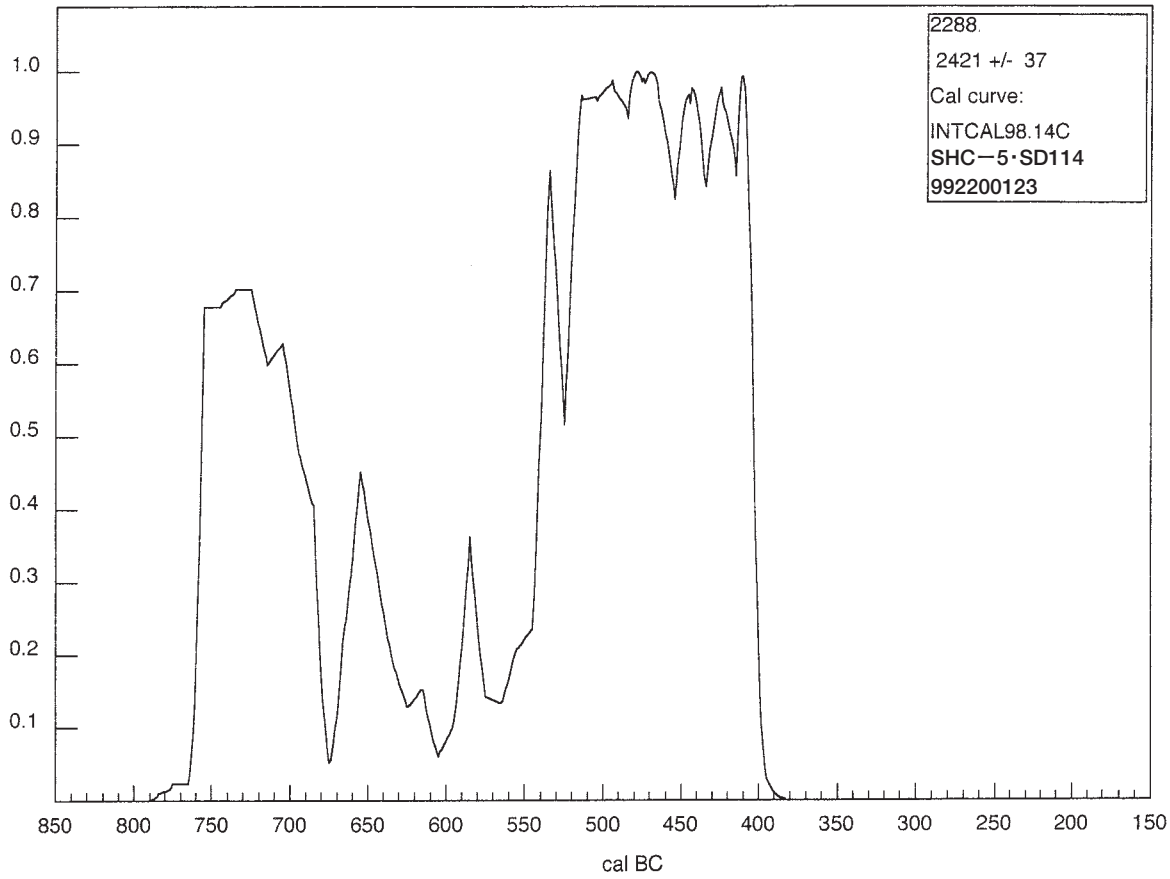




下月隈C遺跡第5次・SD114出土土器（992200120）実測図（縮尺：1/4）

放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

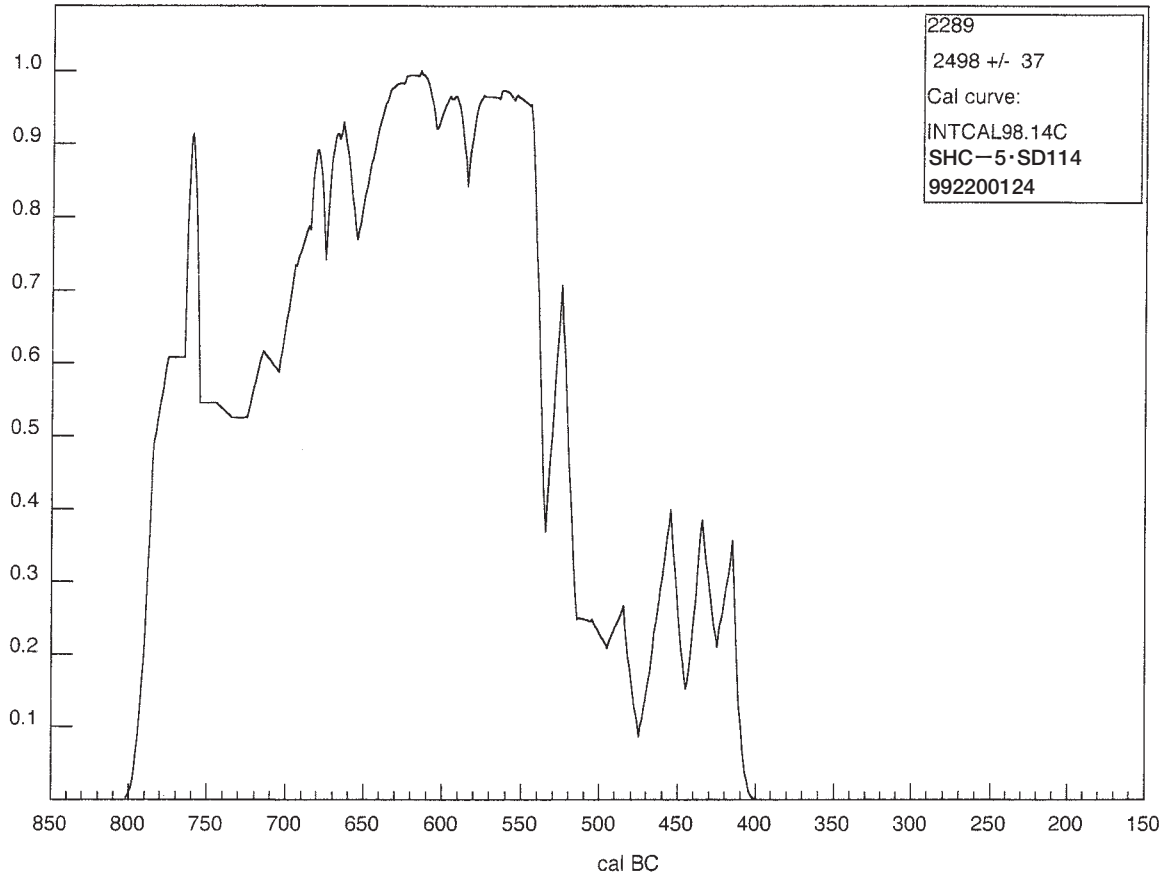
測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ^{13}C PDB (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-2288 (AMS)	土器付着物 SHC-5・溝ＳＤ114 甕 992200123	-28.6	2,420±35	cal BC 480 cal BC 470 cal BC 445 cal BC 410	cal BC 755 - 725 (16.1%) cal BC 520 - 405 (79.4%)



下月隈C遺跡第5次・SD114出土土器（992200123）実測図（縮尺：1/4）

放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

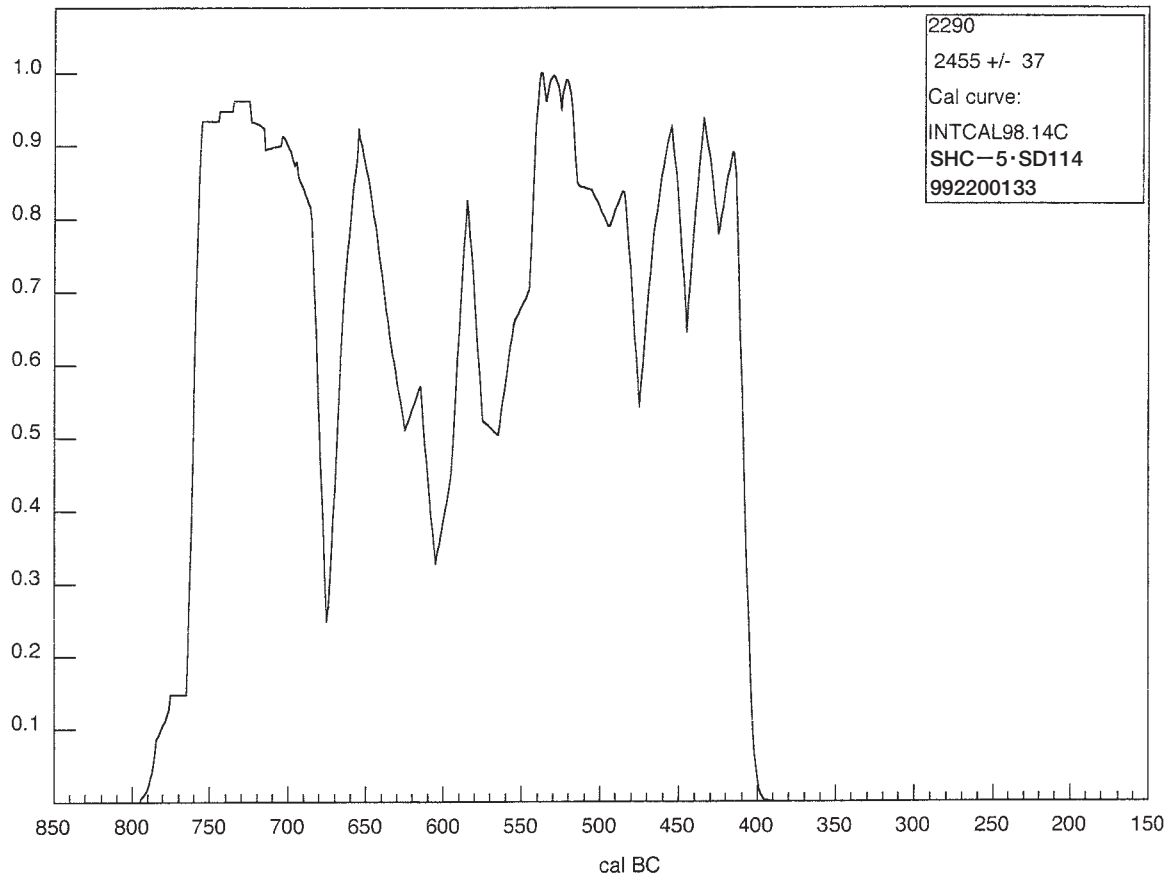
測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ^{13}C PDB (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-2289 (AMS)	土器付着物 SHC-5・溝ＳＤ114 甕 992200124	-27.9	2,500±35	cal BC 760 cal BC 680 cal BC 670 cal BC 625 cal BC 620 cal BC 615 cal BC 595 cal BC 575 cal BC 560	cal BC 705 - 540 (91.9%)

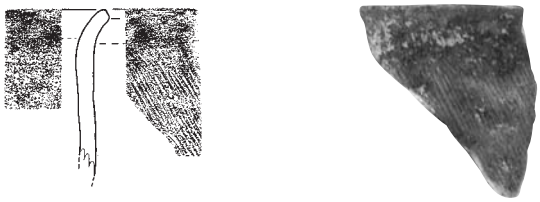


下月隈C遺跡第5次・SD114出土土器（992200124）実測図（縮尺：1/4）

放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ ^{13}C PDB (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-2290 (AMS)	土器付着物 SHC-5・溝ＳＤ114 甕 992200133	-26.2	2,455±35	cal BC 740 cal BC 725 cal BC 540 cal BC 530 cal BC 520	cal BC 760 - 685 (36.5%) cal BC 545 - 480 (30.1%) cal BC 440 - 410 (13.4%)

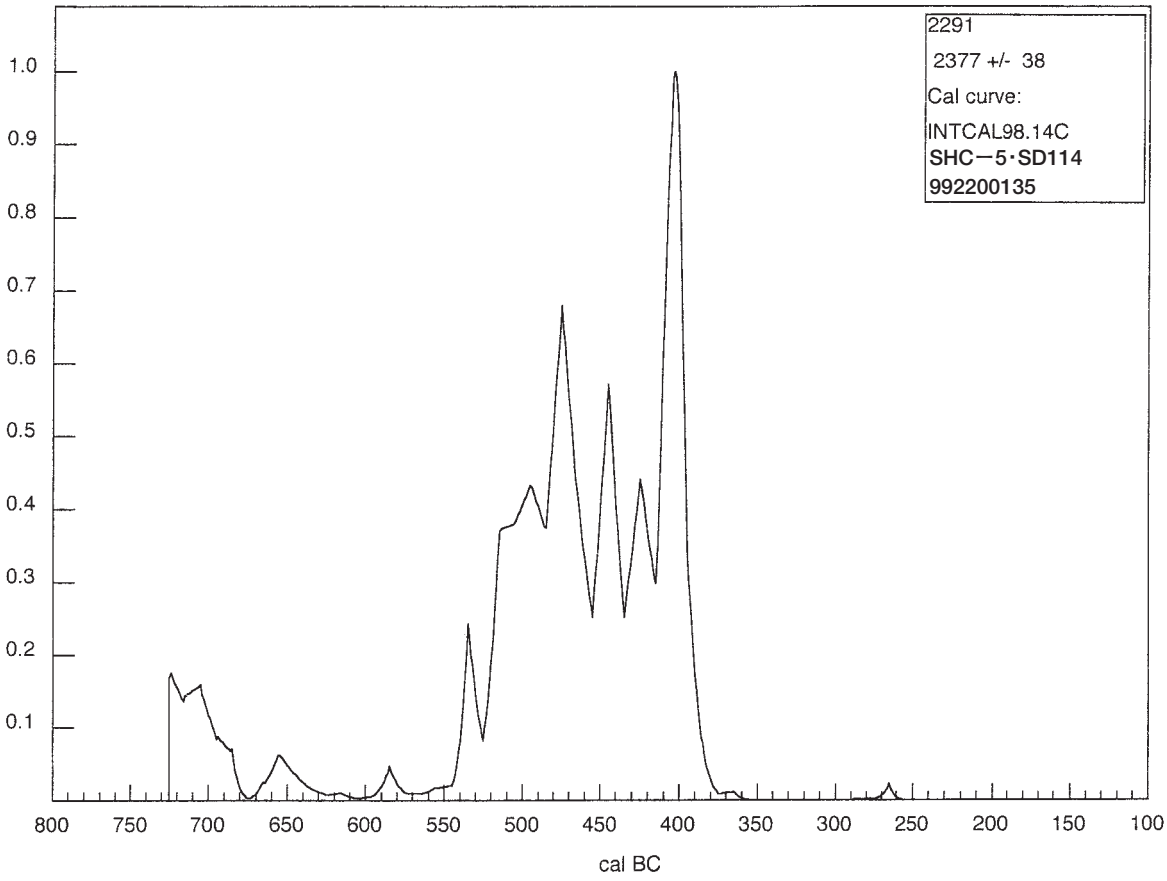


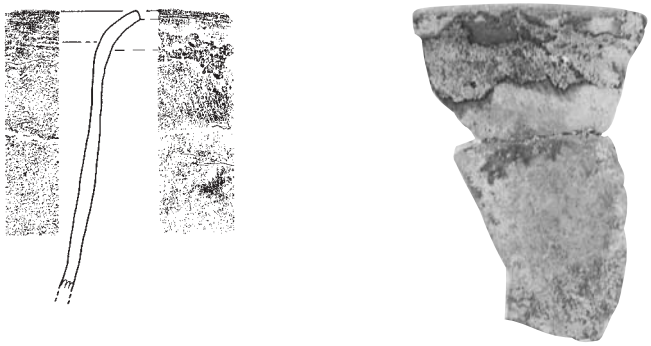


下月隈C遺跡第5次・SD114出土土器（992200133）実測図（縮尺：1/4）

放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ^{13}C PDB (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-2291 (AMS)	土器付着物 SHC-5・溝ＳＤ114 甕 992200135	-29.3	2,375±40	cal BC 405	cal BC 515 - 460 (50.3%) cal BC 450 - 440 (12.5%) cal BC 415 - 395 (28.8%)

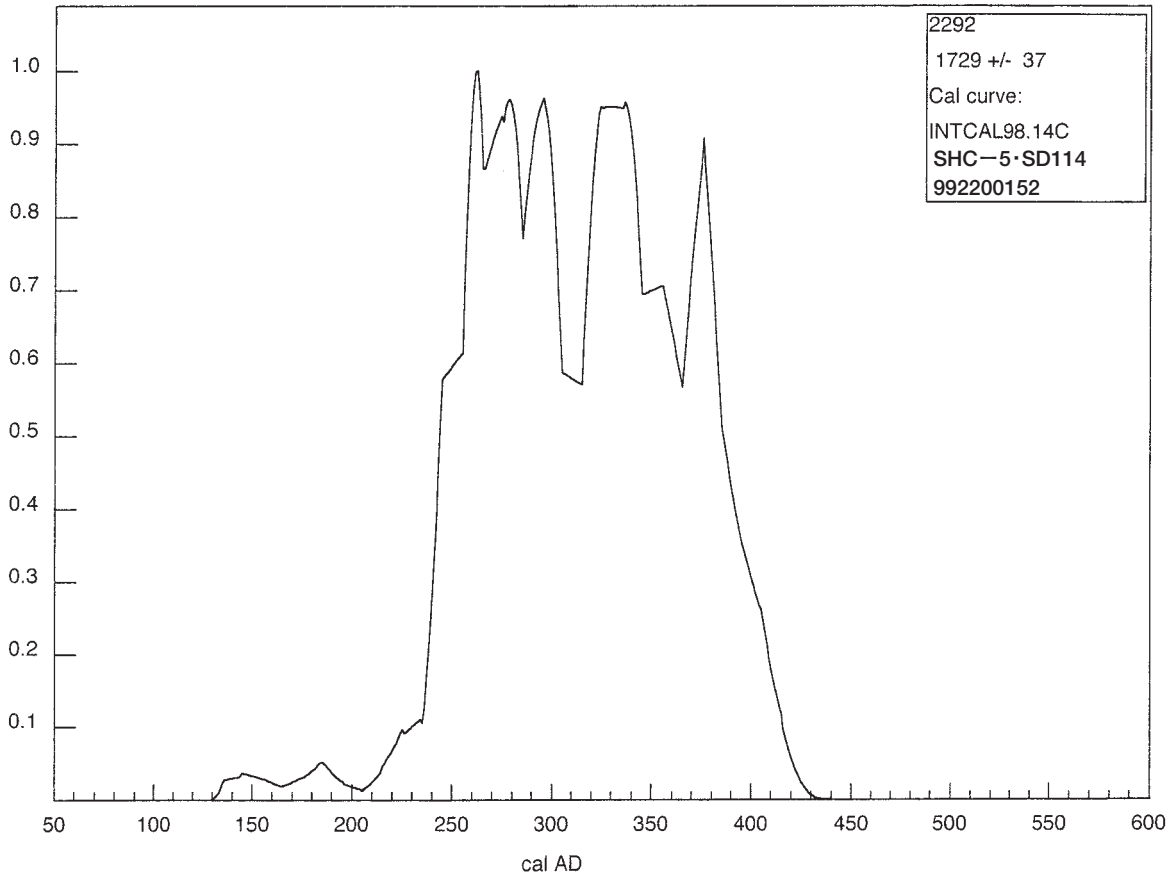


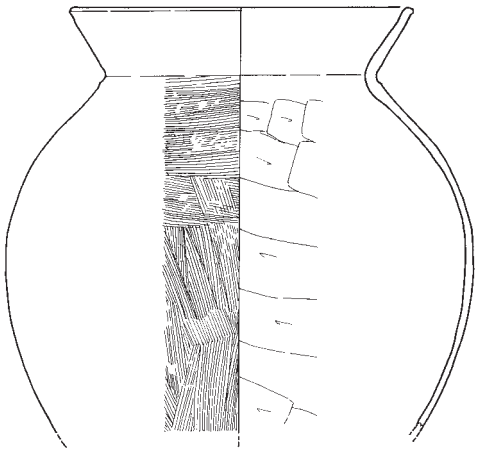


下月隈C遺跡第5次・SD114出土土器（992200135）実測図（縮尺：1/4）

放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ^{13}C PDB (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-2292 (AMS)	土器付着物 SHC-5・溝ＳＤ114 甕 992200152	-29.5	1,730±35	cal AD 260 cal AD 280 cal AD 325 cal AD 330 cal AD 335	cal AD 255 - 305 (49.5%) cal AD 315 - 355 (39.4%) cal AD 370 - 380 (11.1%)

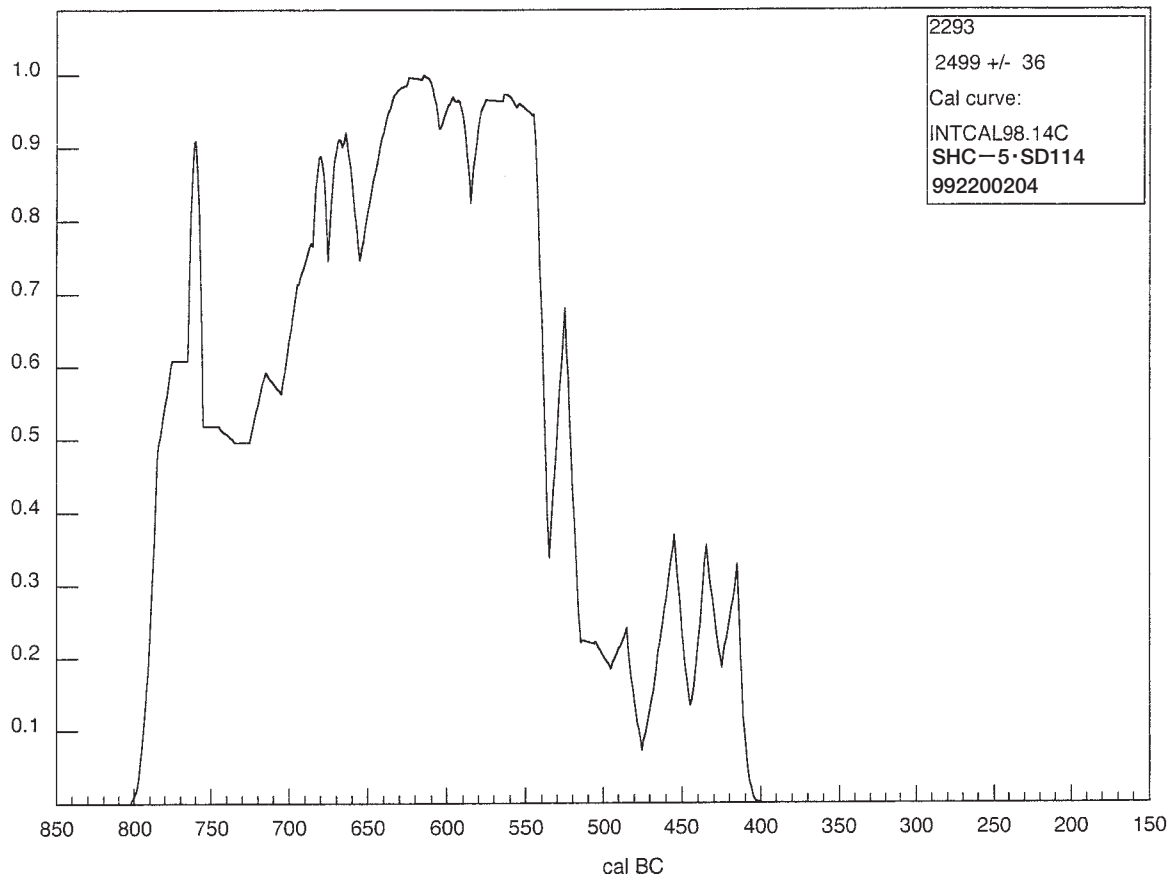


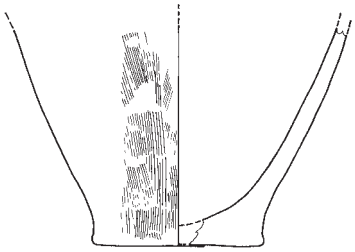


下月隈C遺跡第5次・SD114出土土器（992200152）実測図（縮尺：1/4）

放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ^{13}C PDB (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-2293 (AMS)	土器付着物 SHC-5・溝ＳＤ114 壺 992200204	-26.5	2,500±35	cal BC 760 cal BC 680 cal BC 670 cal BC 625 cal BC 615 cal BC 595 cal BC 575 cal BC 565	cal BC 700 - 540 (89.8%)

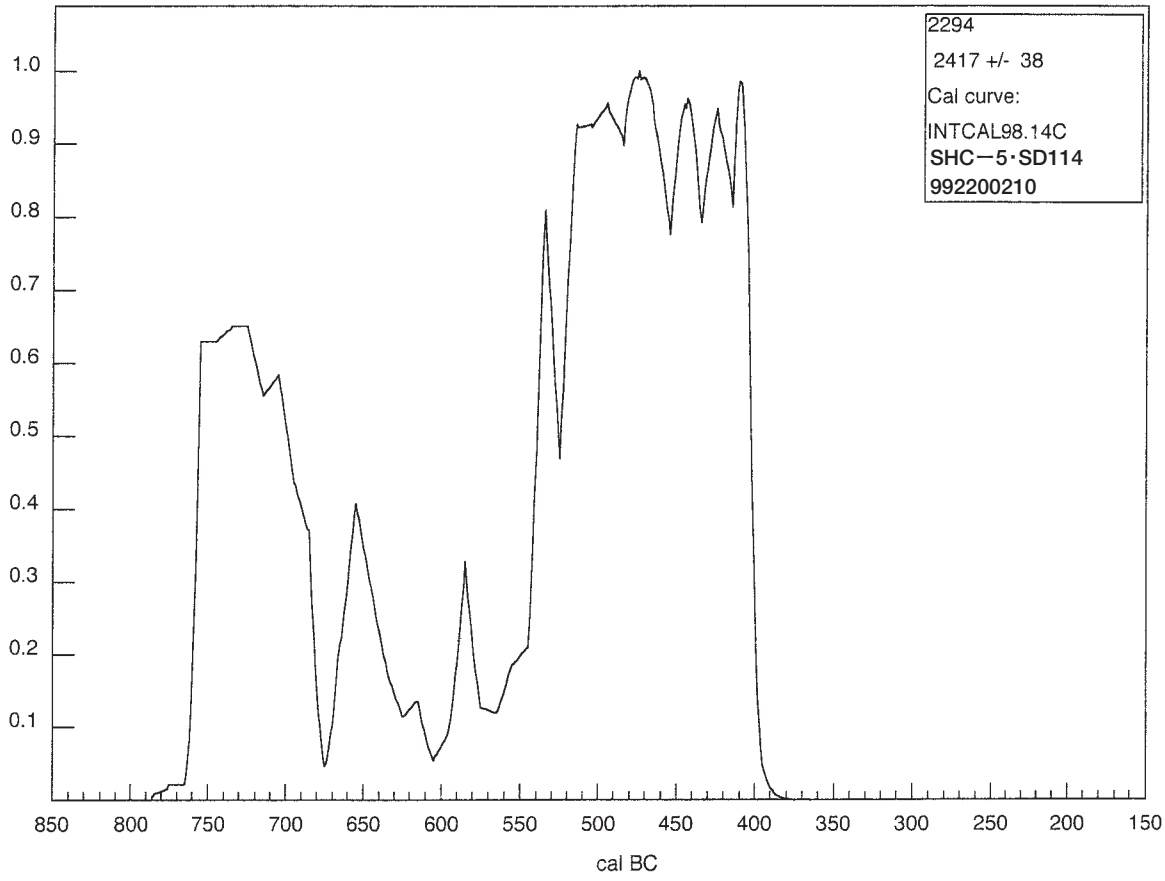


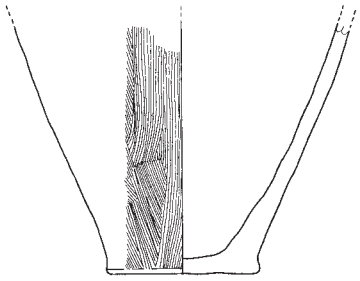


下月隈C遺跡第5次・SD114出土土器（992200204）実測図（縮尺：1/4）

放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ^{13}C PDB (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-2294 (AMS)	土器付着物 SHC-5・溝ＳＤ114 甕 992200210	-28.0	2,415±40	cal BC 475 cal BC 470 cal BC 410	cal BC 755 - 725 (15.4%) cal BC 520 - 405 (80.3%)

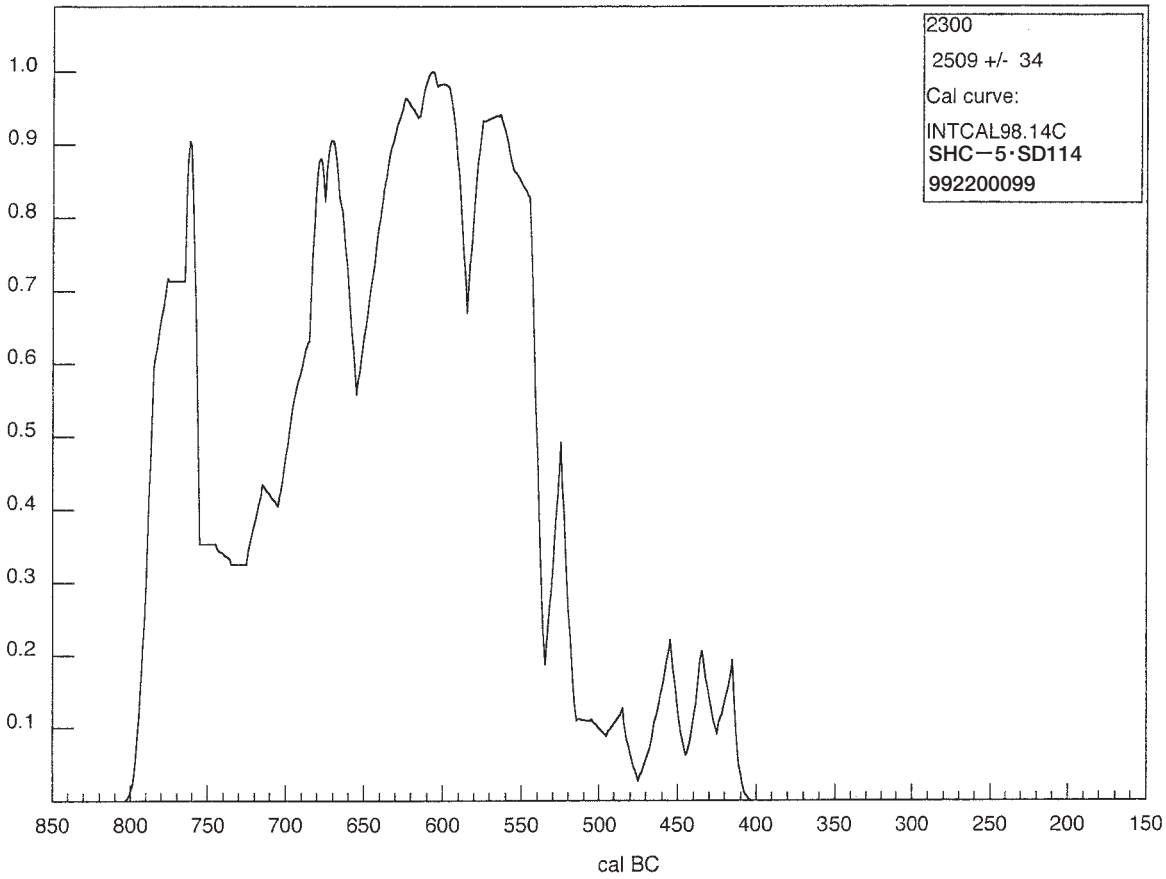


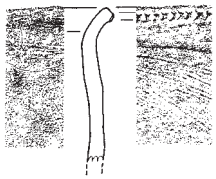


下月隈C遺跡第5次・SD114出土土器（992200210）実測図（縮尺：1/4）

放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ 13C PDB (‰)	14C年代 (yrBP±1σ)	14C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-2300 (AMS)	土器付着物 SHC-5・溝ＳＤ114 甕 992200099	-26.2	2,510±35	cal BC 760 cal BC 680 cal BC 670 cal BC 605 cal BC 600	cal BC 780 - 760 (13.3%) cal BC 685 - 660 (16.0%) cal BC 650 - 540 (70.7%)

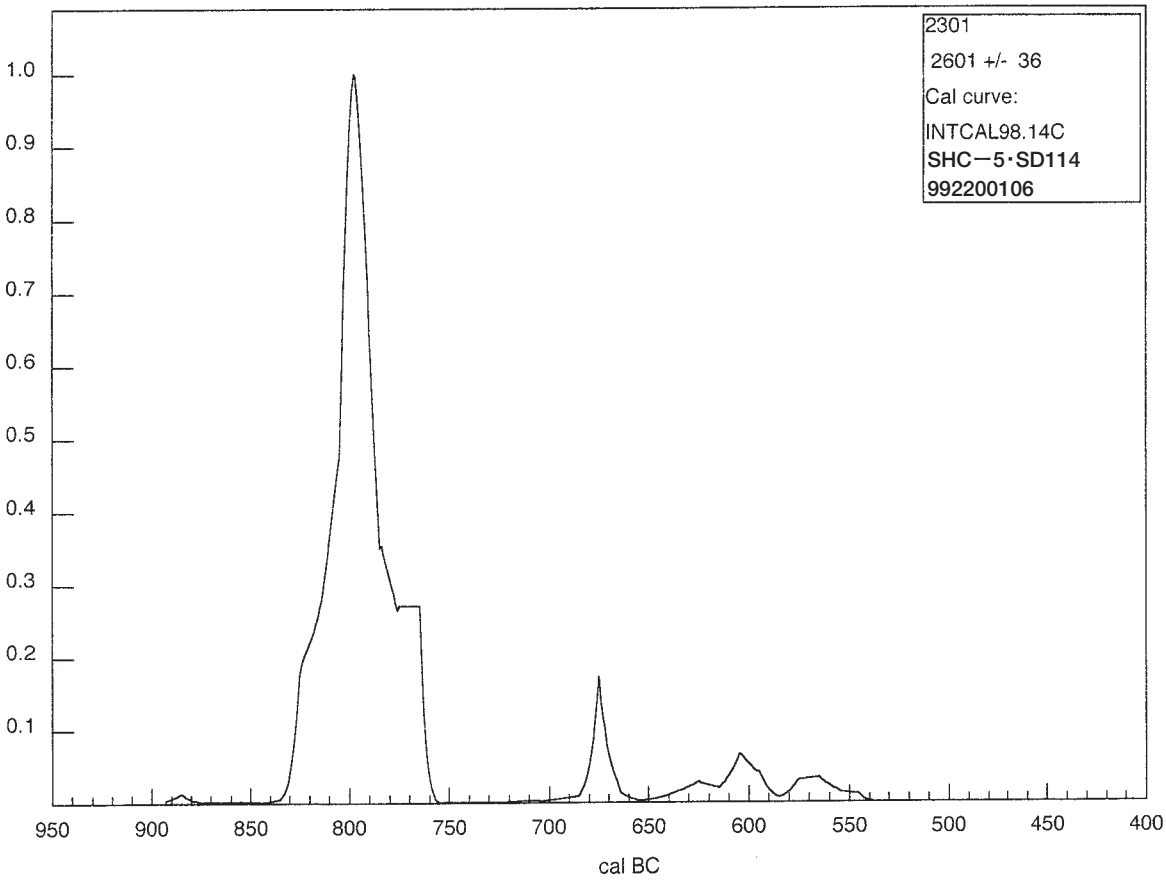




下月隈C遺跡第5次・SD114出土土器（992200099）実測図（縮尺：1/4）

放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

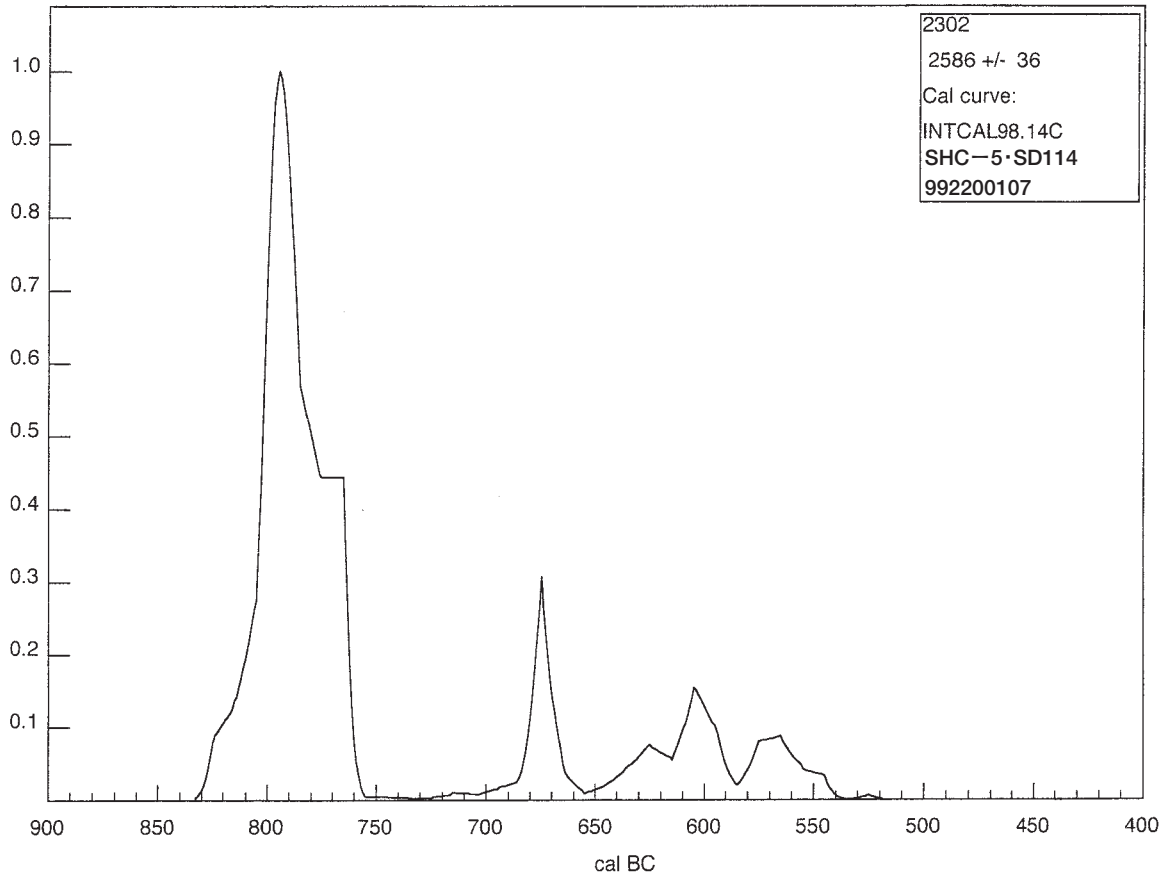
測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ ^{13}C PDB (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-2301 (AMS)	土器付着物 SHC-5・溝ＳＤ114 甕 992200106	-26.5	2,600±35	cal BC 800	cal BC 815 - 775 (100%)



下月隈C遺跡第5次・SD114出土土器（992200106）実測図（縮尺：1/4）

放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

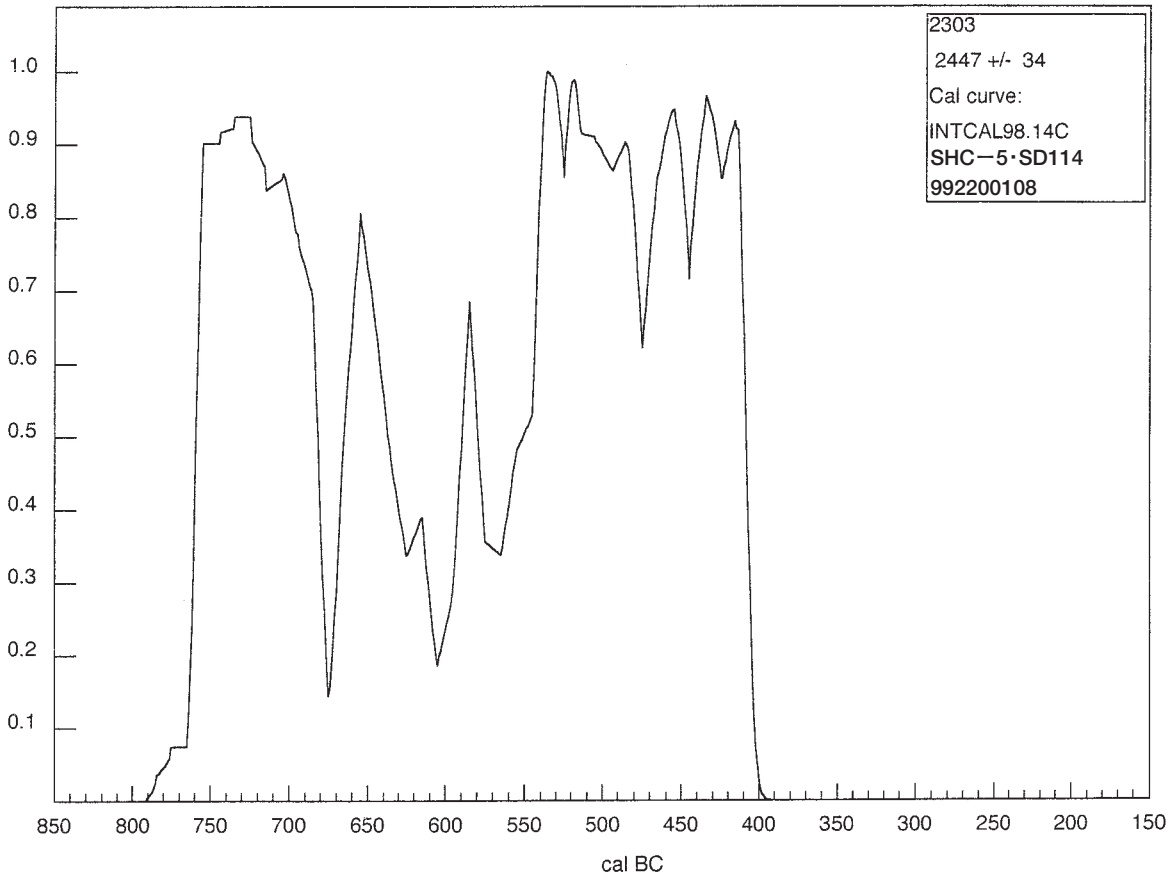
測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ13C PDB (‰)	14C年代 (yrBP±1σ)	14C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-2302 (AMS)	土器付着物 SHC-5・溝ＳＤ114 甕 992200107	-28.7	2,585±35	cal BC 795	cal BC 810 - 765 (97.0%)



下月隈C遺跡第5次・SD114出土土器（992200107）実測図（縮尺：1/4）

放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

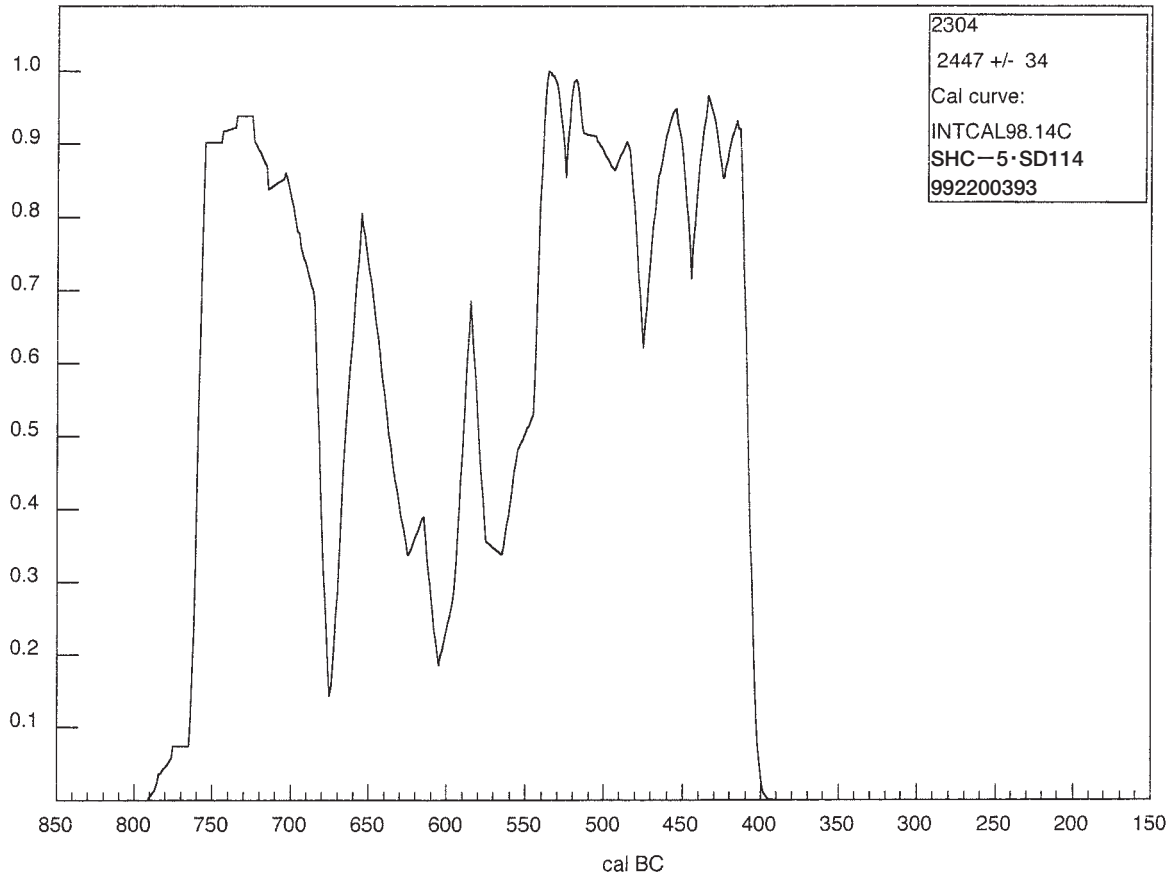
測定番号（測定法）	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ^{13}C PDB (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-2303 (AMS)	土器付着物 SHC-5・溝ＳＤ114 甕 992200108	-26.6	2,445±35	cal BC 535 cal BC 520	cal BC 755 - 695 (33.7%) cal BC 540 - 480 (33.8%) cal BC 470 - 410 (30.3%)



下月隈C遺跡第5次・SD114出土土器（992200108）実測図（縮尺：1/4）

放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

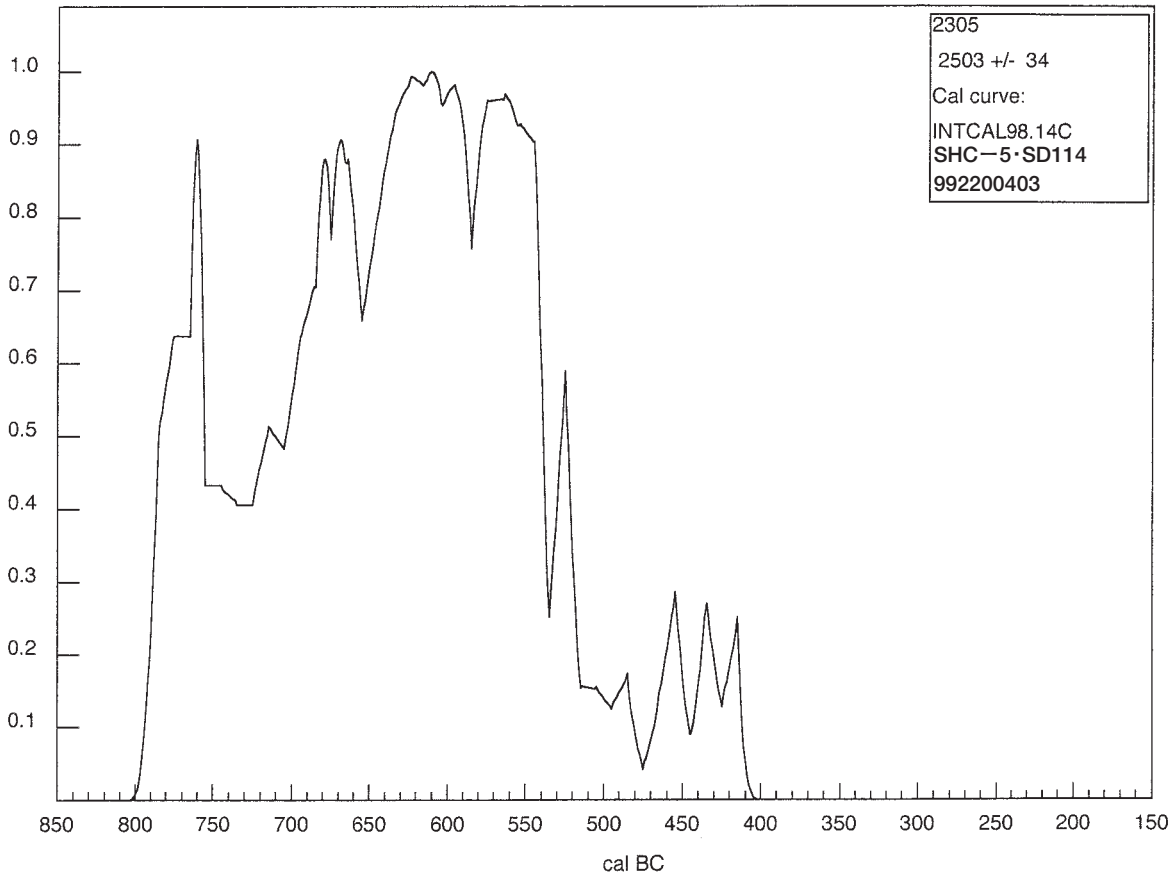
測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ^{13}C PDB (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-2304 (AMS)	土器付着物 SHC-5・溝ＳＤ114 甕 992200393	-26.8	2,445±35	cal BC 535 cal BC 520	cal BC 755 - 695 (33.7%) cal BC 540 - 480 (33.8%) cal BC 470 - 410 (30.3%)

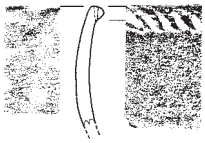


下月隈C遺跡第5次・SD114出土土器（992200393）実測図（縮尺：1/4）

放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ 13C PDB (‰)	14C年代 (yrBP±1σ)	14C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-2305 (AMS)	土器付着物 SHC-5・溝ＳＤ114 甕 992200403	-27.3	2,505±35	cal BC 760 cal BC 680 cal BC 670 cal BC 610 cal BC 595	cal BC 695 - 540 (91.0%)

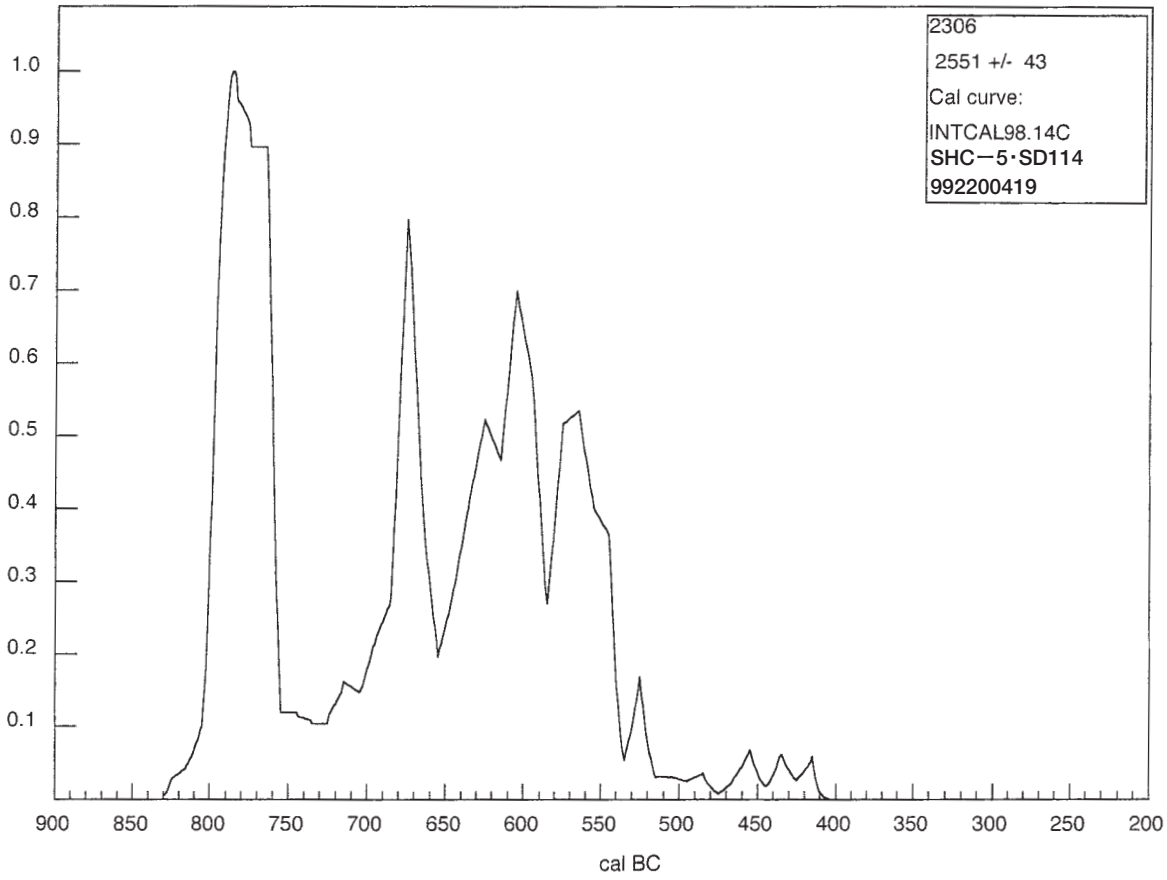


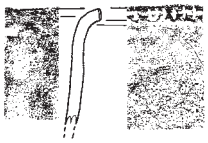


下月隈C遺跡第5次・SD114出土土器（992200403）実測図（縮尺：1/4）

放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ13C PDB (‰)	14C年代 (yrBP±1σ)	14C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-2306 (AMS)	土器付着物 SHC-5・溝ＳＤ114 甕 992200419	-27.0	2,550±45	cal BC 785	cal BC 800 - 760 (42.1%) cal BC 680 - 665 (12.8%) cal BC 635 - 590 (30.6%) cal BC 580 - 555 (14.5%)

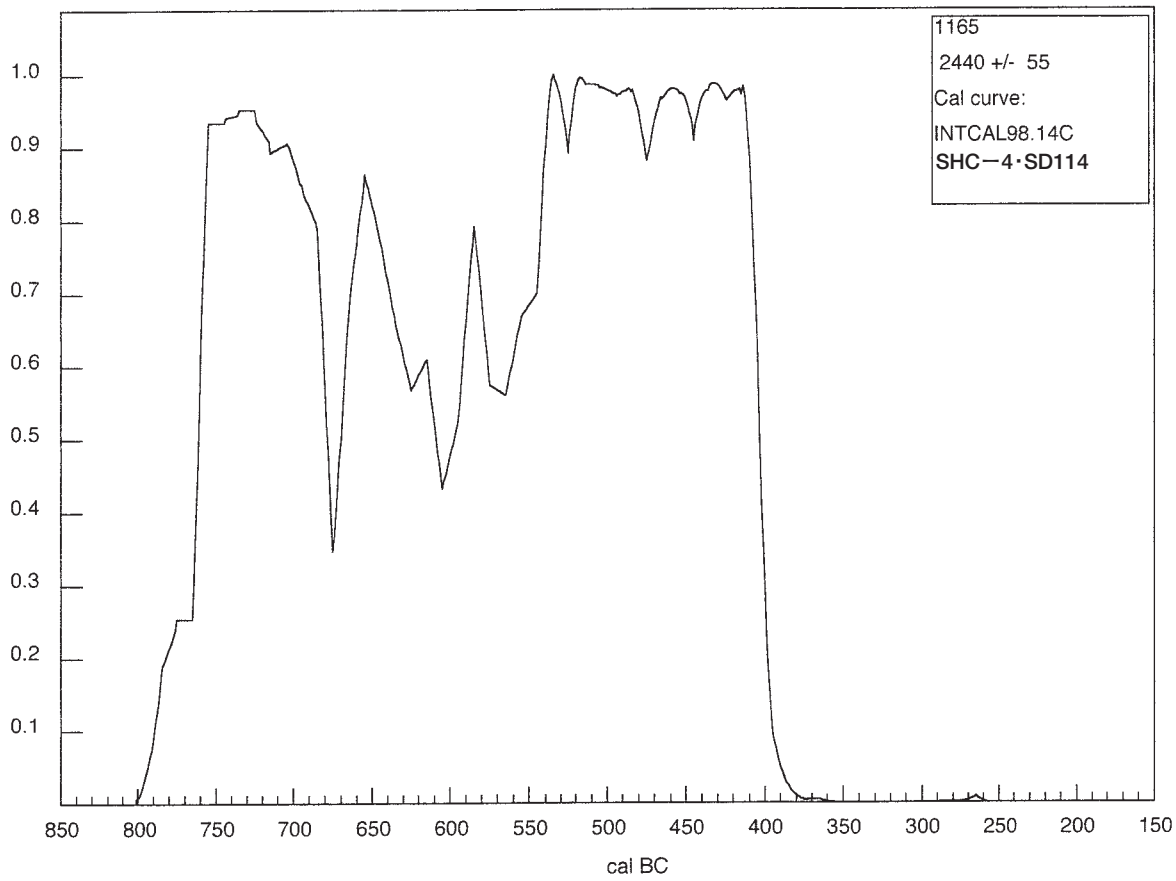




下月隈C遺跡第5次・SD114出土土器（992200419）実測図（縮尺：1/4）

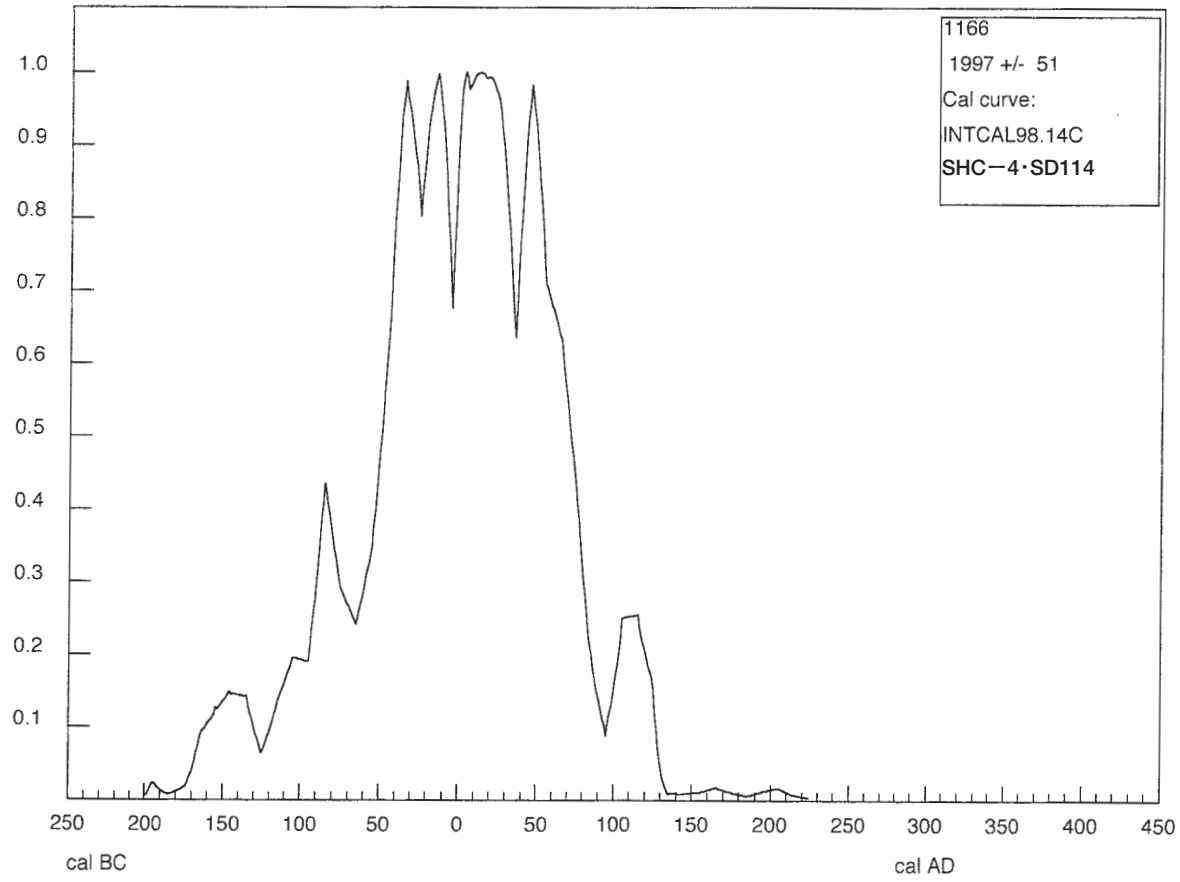
放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ^{13}C PDB (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-1165 (AMS)	炭化材 SHC-4・溝ＳＤ114	-26.9	2,440±60	cal BC 515 cal BC 460 cal BC 455 cal BC 435 cal BC 430 cal BC 415	cal BC 760 - 685 (31.9%) cal BC 545 - 410 (62.9%)



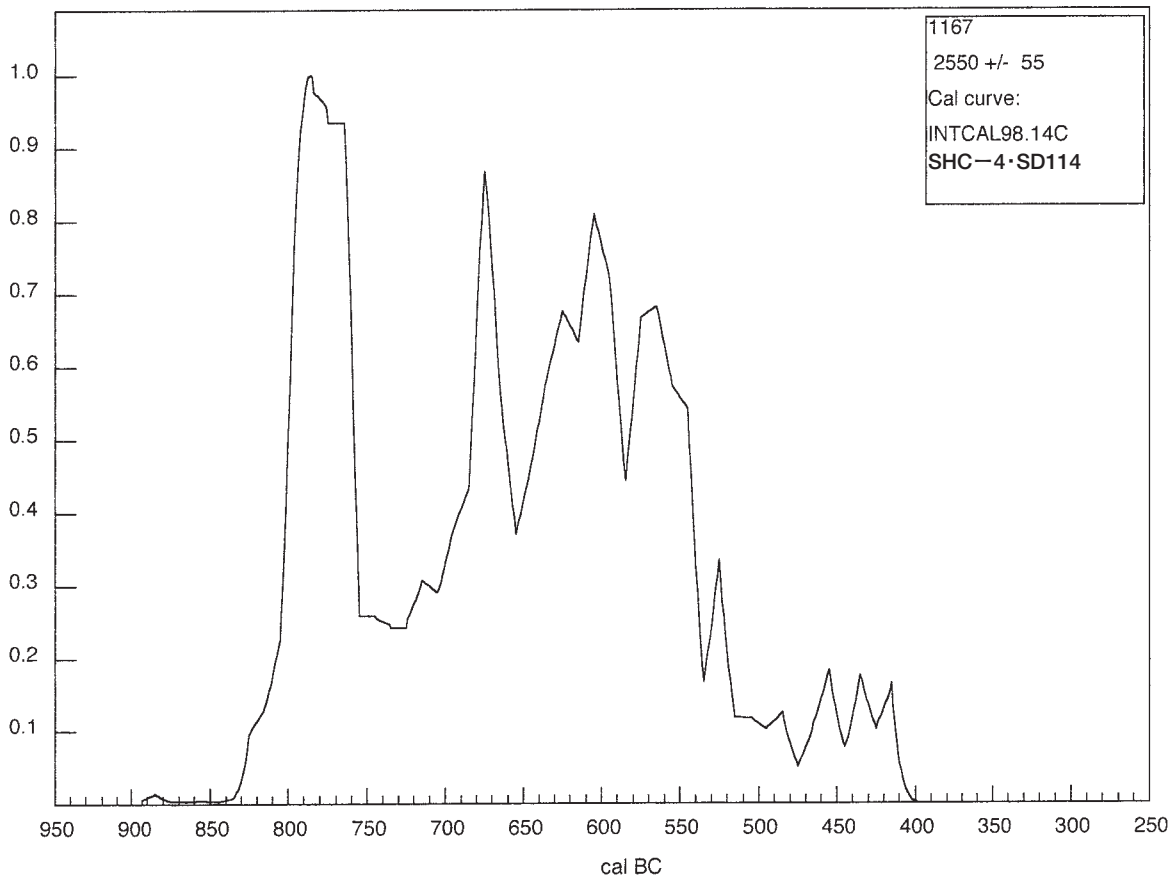
放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ 13C PDB (‰)	14C年代 (yrBP±1σ)	14C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-1166 (AMS)	炭化材 SHC-4・溝ＳＤ114	-25.6	2,000±50	cal AD 5 cal AD 10 cal AD 15	cal BC 45 - cal AD 65 (100%)



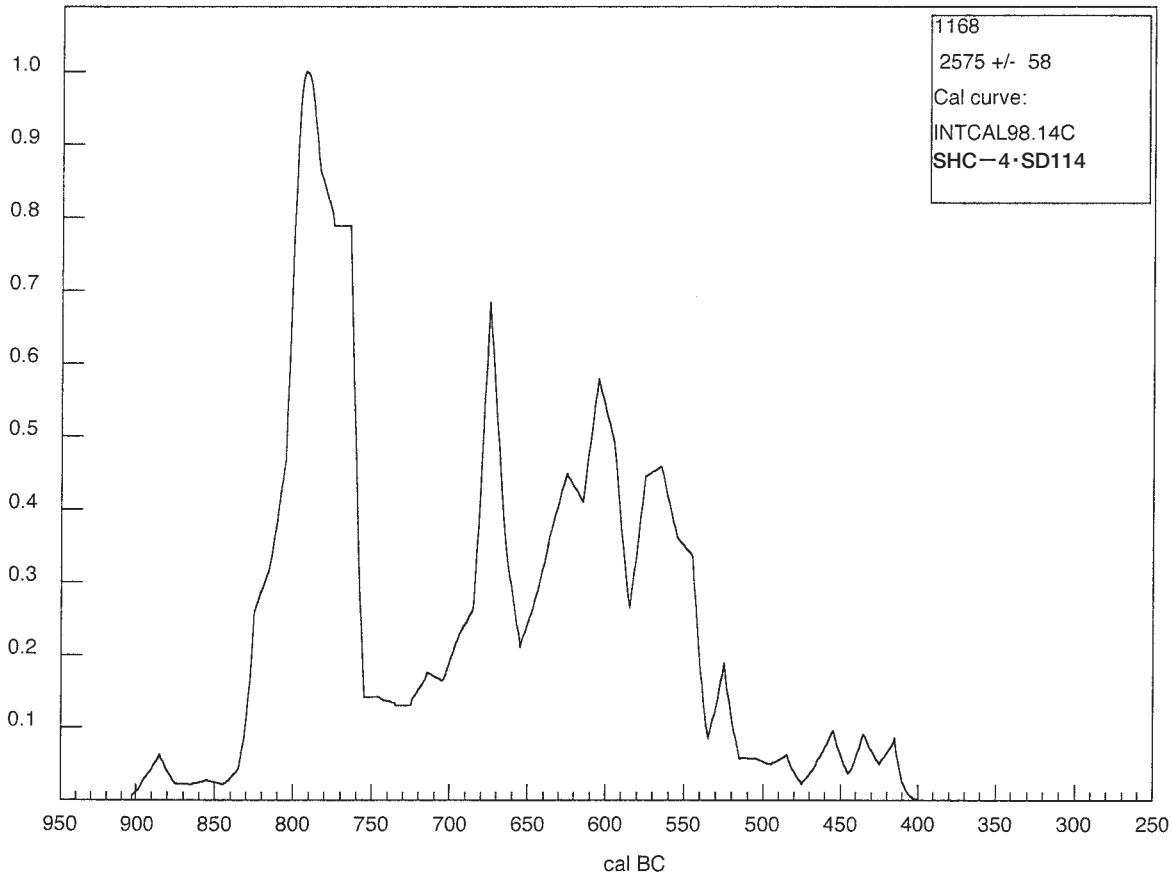
放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ^{13}C PDB (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-1167 (AMS)	炭化材 SHC-4・溝ＳＤ114	-25.7	2,550±60	cal BC 785	cal BC 800 - 760 (32.3%) cal BC 685 - 660 (13.8%) cal BC 645 - 545 (53.9%)



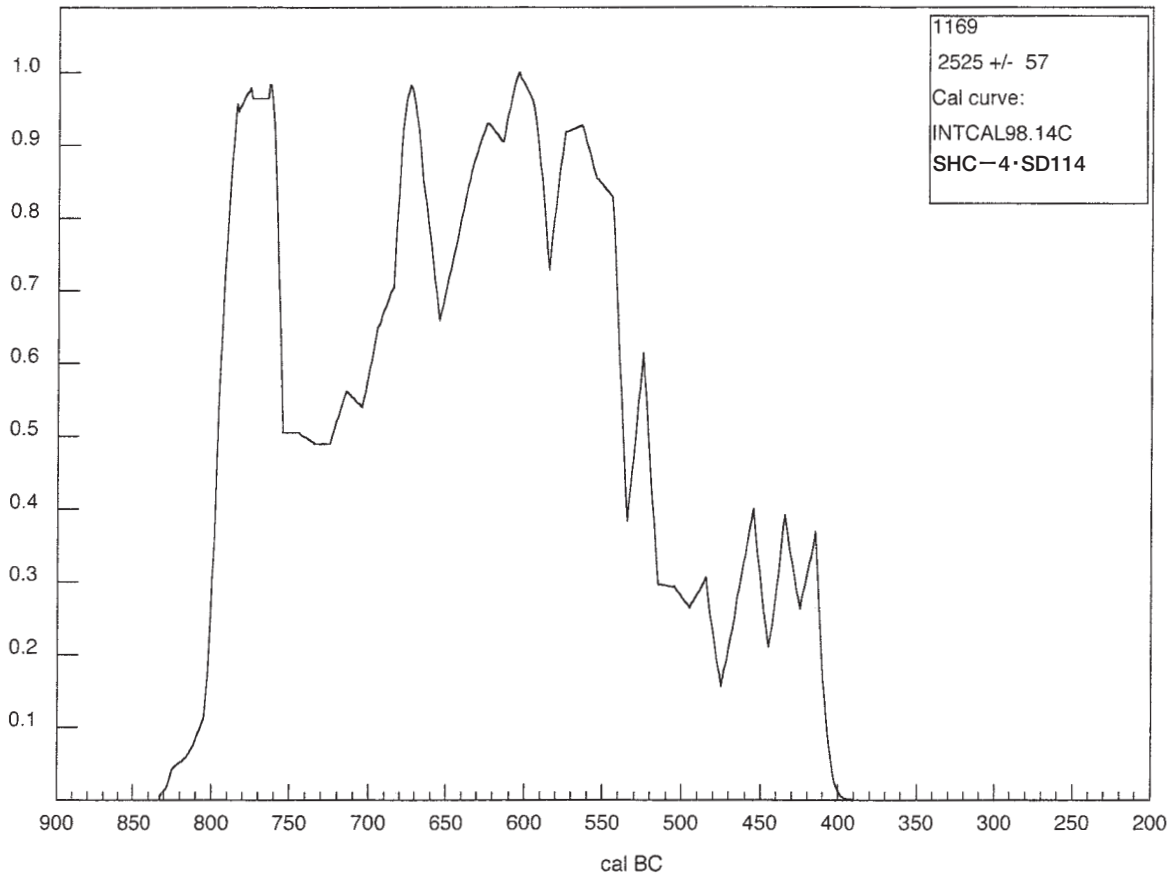
放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	$\delta^{13}C$ PDB (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-1168 (AMS)	木片 SHC-4・溝ＳＤ114	-27.1	2,580±60	cal BC 795	cal BC 815 - 760 (47.1%) cal BC 685 - 665 (10.8%) cal BC 640 - 590 (26.2%) cal BC 580 - 545 (15.9%)



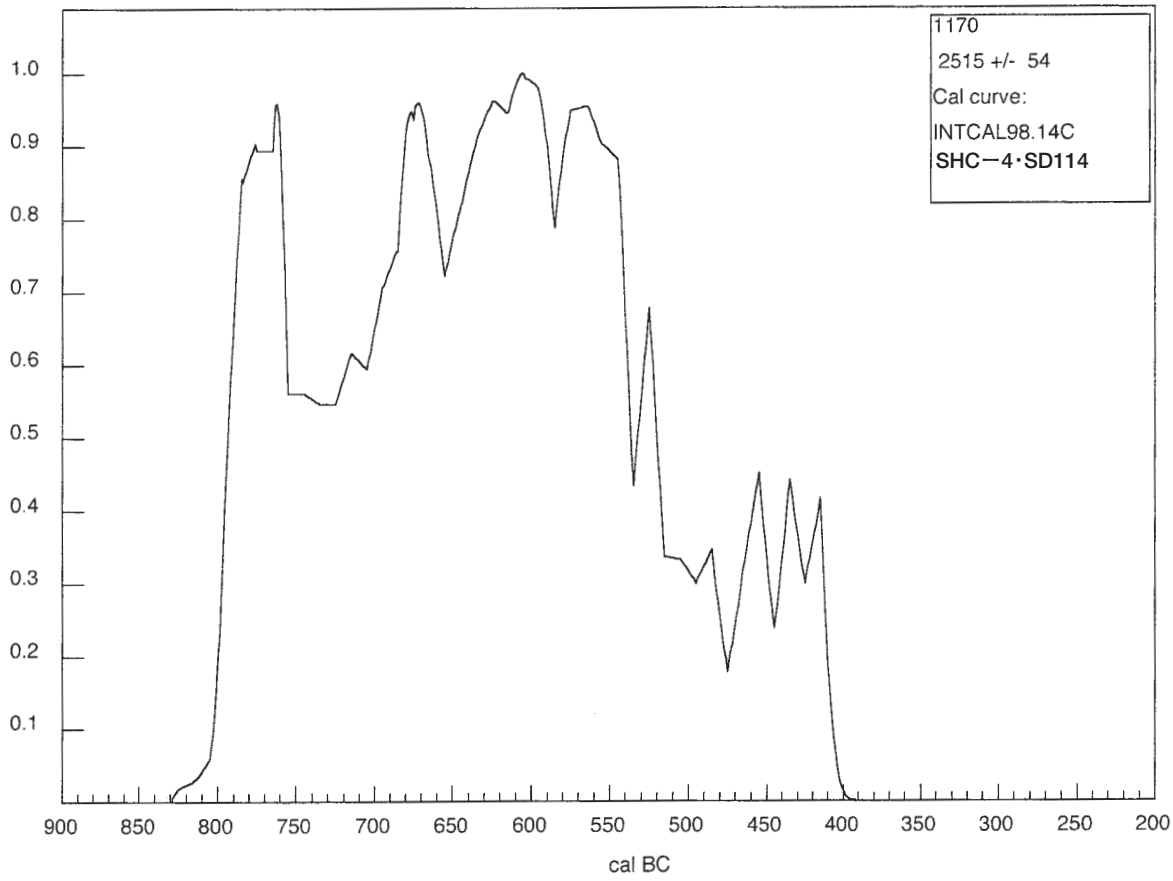
放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ13C PDB (‰)	14C年代 (yrBP±1σ)	14C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-1169 (AMS)	木片 SHC-4・溝ＳＤ114	-26.6	2,530±60	cal BC 765	cal BC 795 - 755 (20.4%) cal BC 700 - 540 (79.6%)



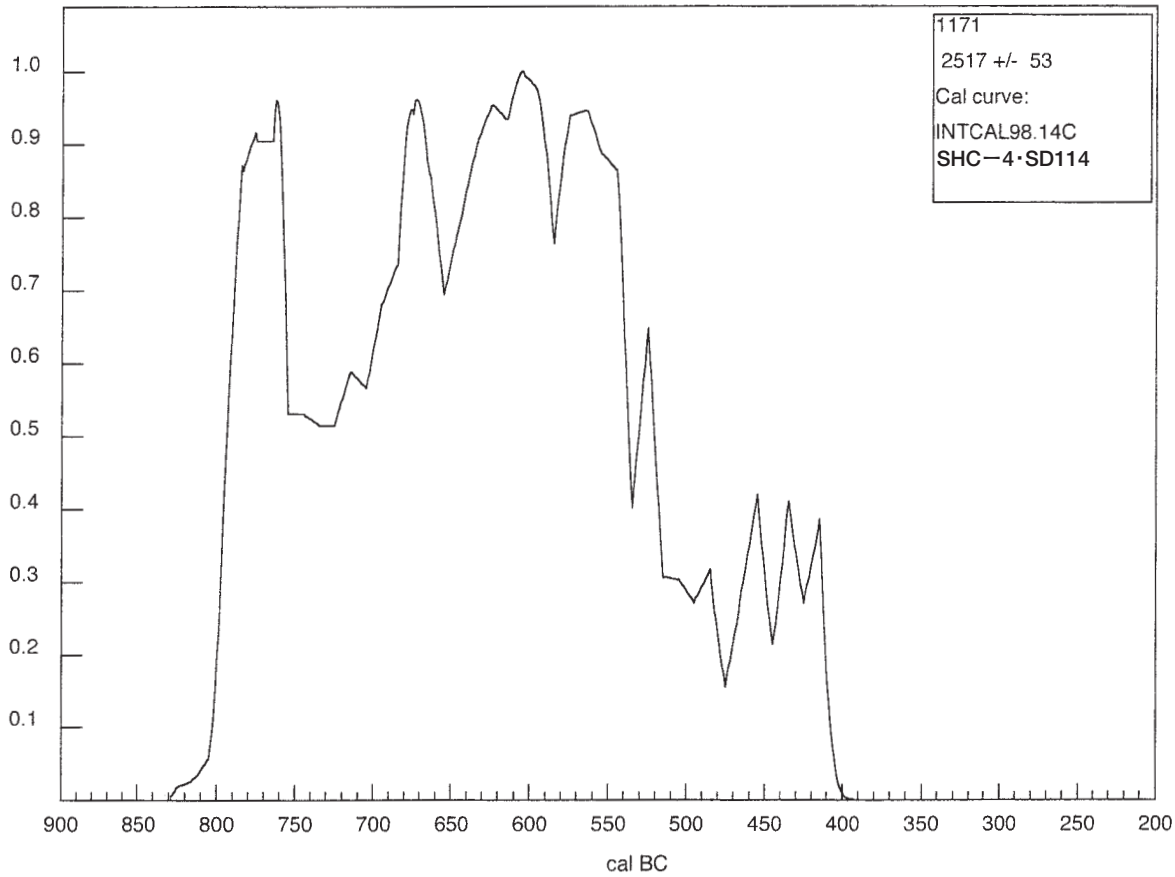
放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ^{13}C PDB (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-1170 (AMS)	木片 SHC-4・溝ＳＤ114	-26.1	2,520±50	cal BC 760 cal BC 675 cal BC 670	cal BC 790 - 755 (17.2%) cal BC 700 - 540 (81.7%)



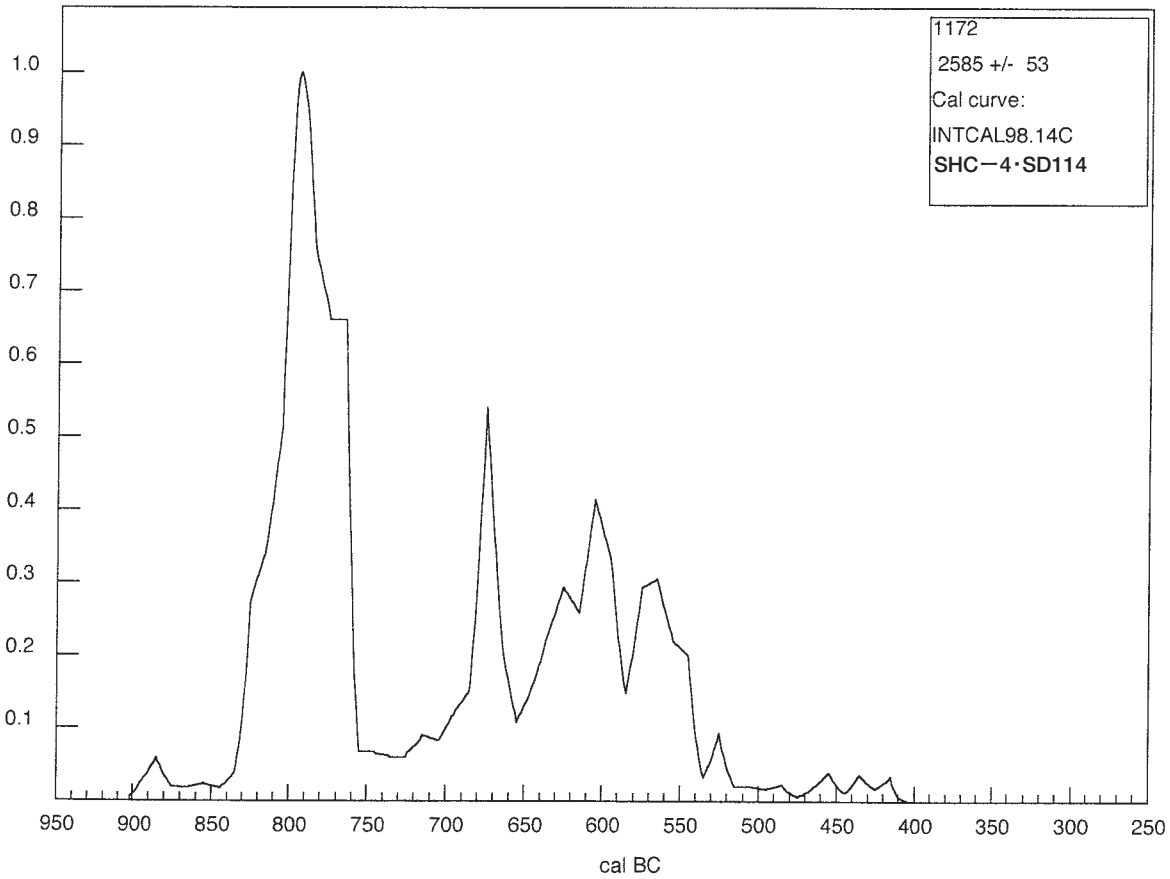
放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ13C PDB (‰)	14C年代 (yrBP±1σ)	14C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-1171 (AMS)	木片 SHC-4・溝ＳＤ114	-27.7	2,520±50	cal BC 765 cal BC 675	cal BC 790 - 755 (17.8%) cal BC 700 - 540 (81.8%)



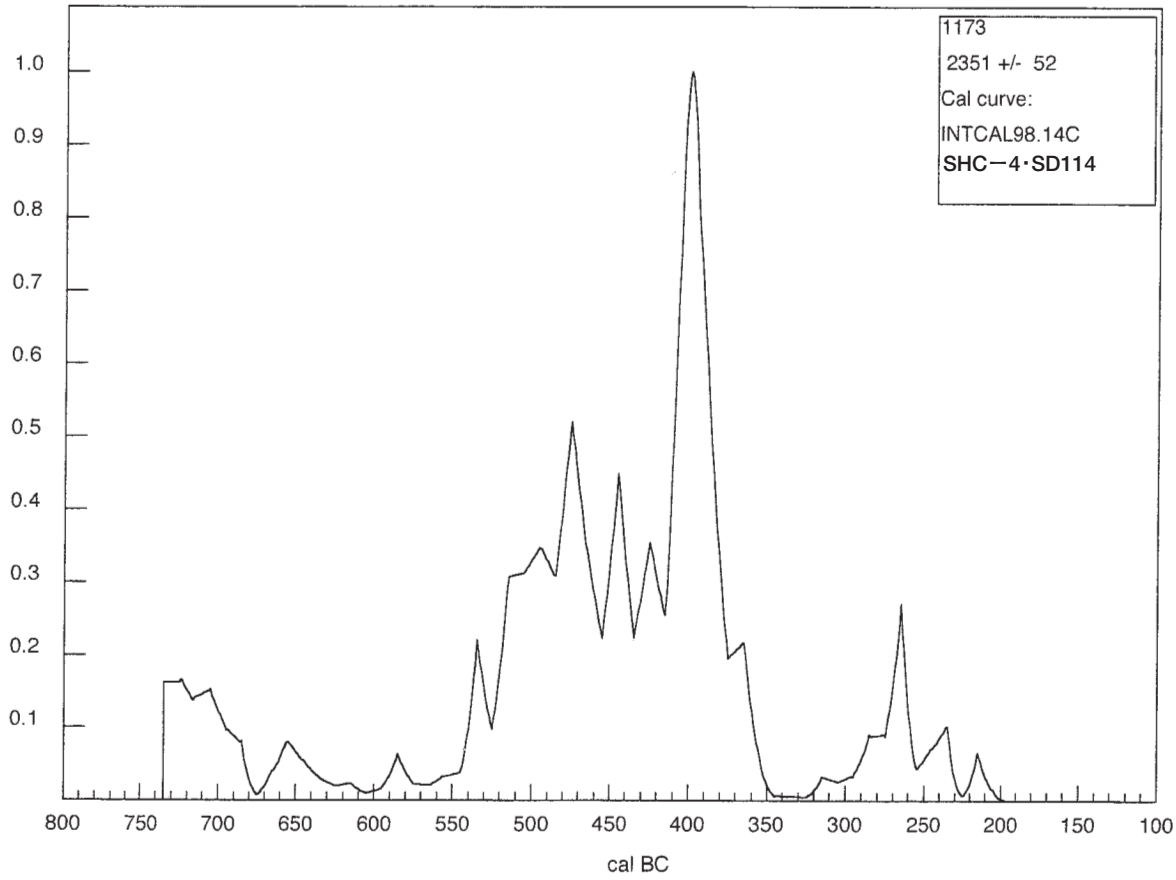
放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ^{13}C PDB (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-1172 (AMS)	炭化材 SHC-4・溝ＳＤ114	-27.7	2,590±50	cal BC 795	cal BC 825 - 760 (65.9%) cal BC 615 - 590 (12.4%)



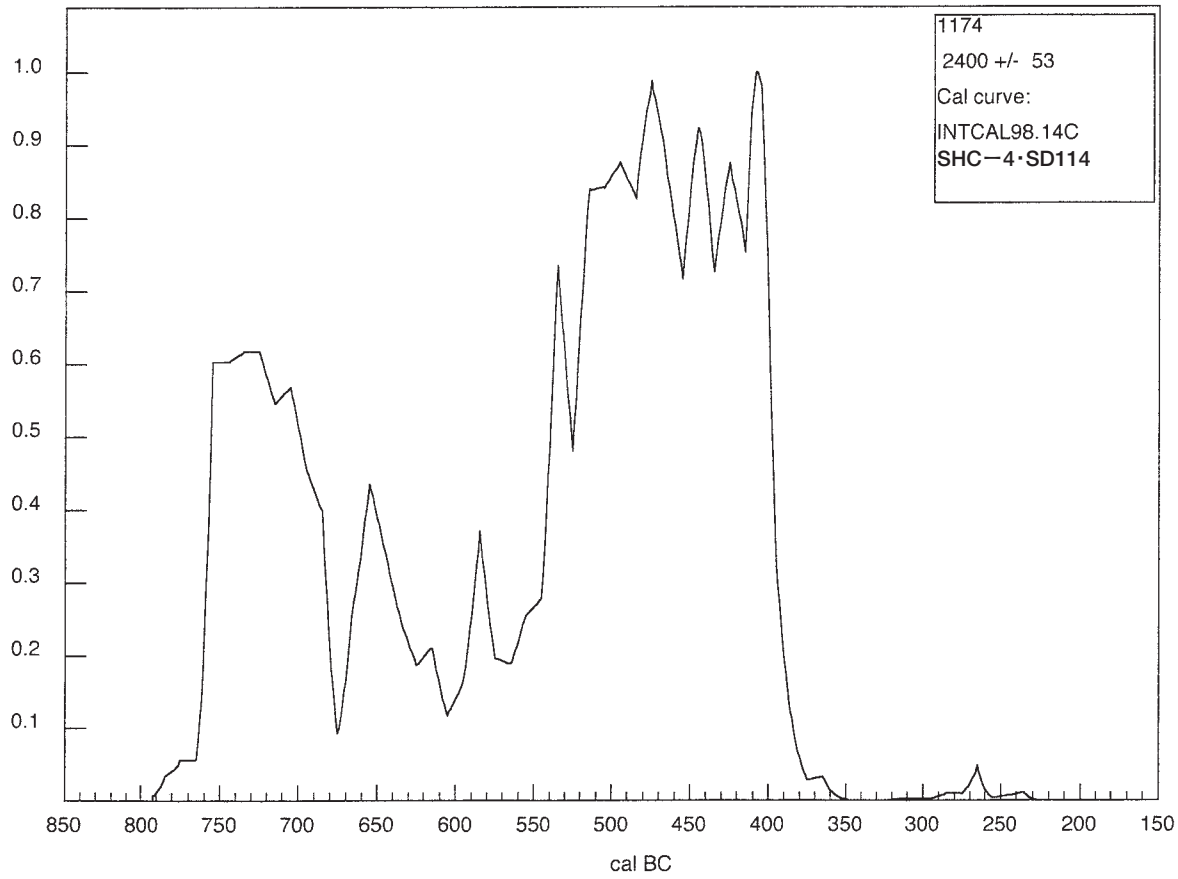
放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ13C PDB (‰)	14C年代 (yrBP±1σ)	14C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-1173 (AMS)	炭化材 SHC-4・溝ＳＤ114	-25.0	2,350±50	cal BC 400	cal BC 520 - 375 (98.7%)



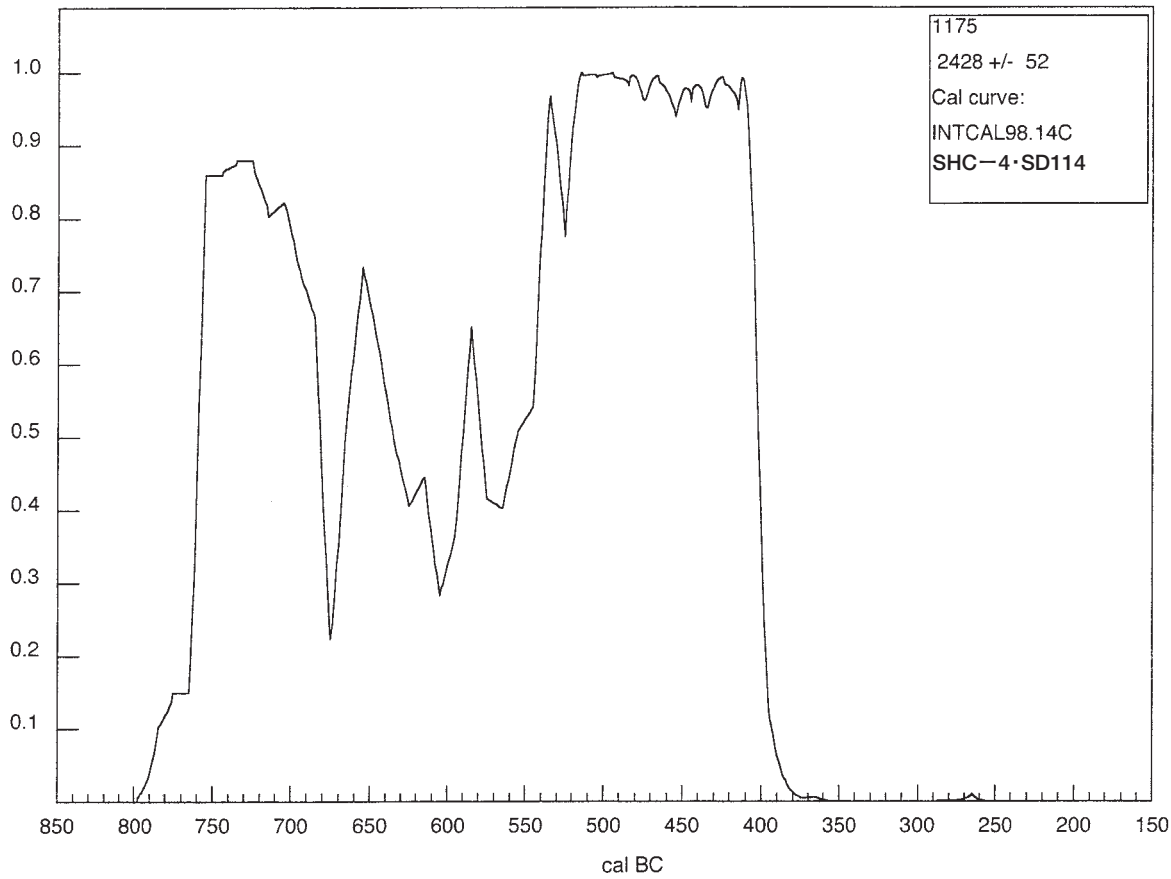
放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ^{13}C PDB (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-1174 (AMS)	炭化材 SHC-4・溝ＳＤ114	-28.2	2,400±50	cal BC 410	cal BC 755 - 720 (17.0%) cal BC 525 - 400 (77.3%)



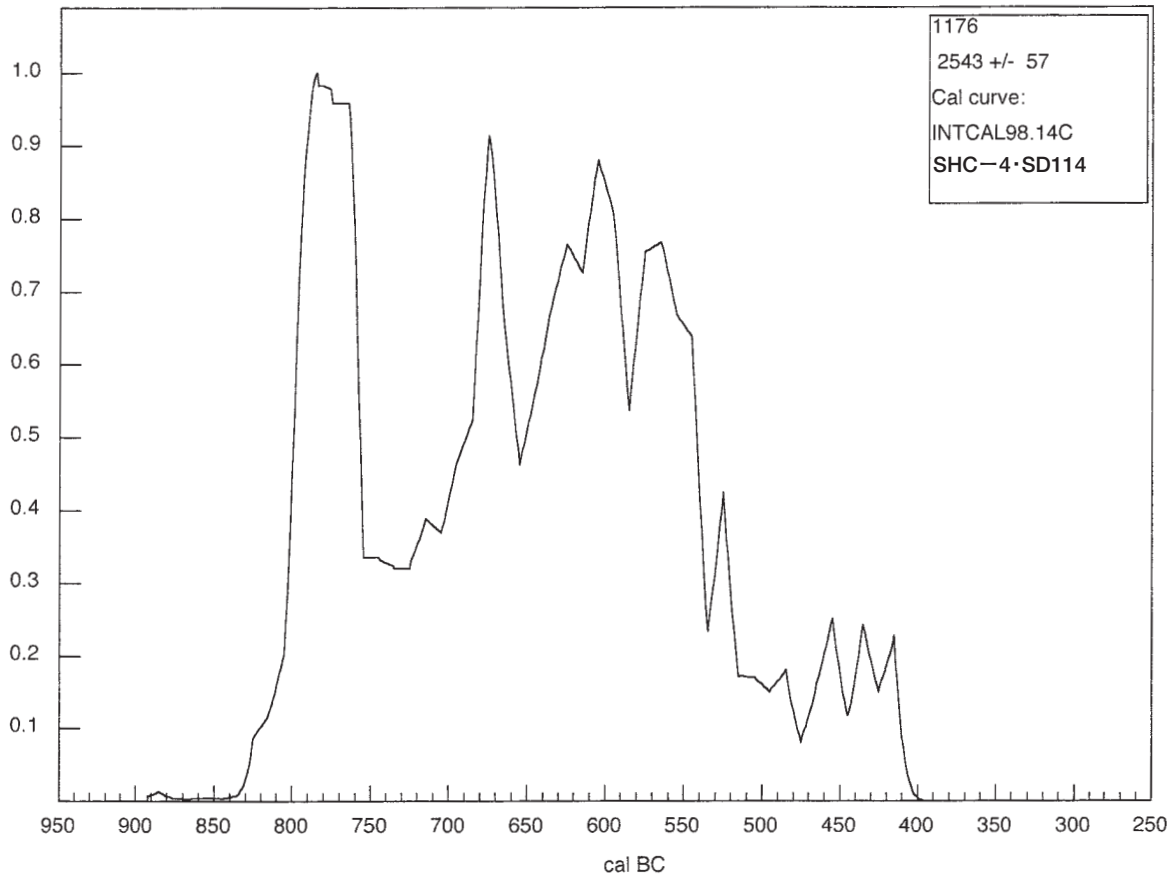
放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ^{13}C PDB (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-1175 (AMS)	炭化材 SHC-4・溝ＳＤ114	-28.4	2,430±50	cal BC 480 cal BC 465 cal BC 450 cal BC 440 cal BC 415	cal BC 755 - 695 (28.3%) cal BC 540 - 405 (71.3%)



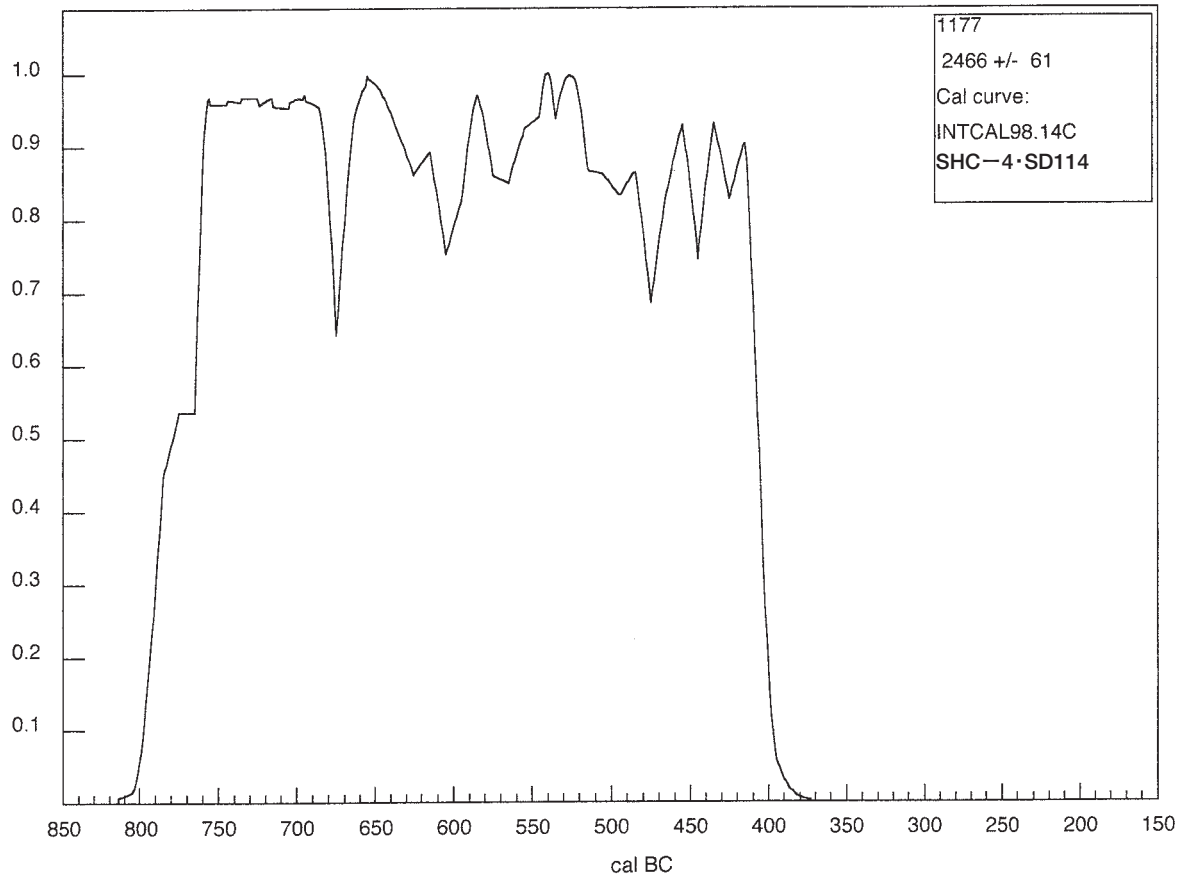
放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ ^{13}C PDB (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-1176 (AMS)	木片 SHC-4・溝ＳＤ114	-26.2	2,540±60	cal BC 785	cal BC 800 - 755 (27.9%) cal BC 685 - 660 (15.4%) cal BC 650 - 540 (56.7%)



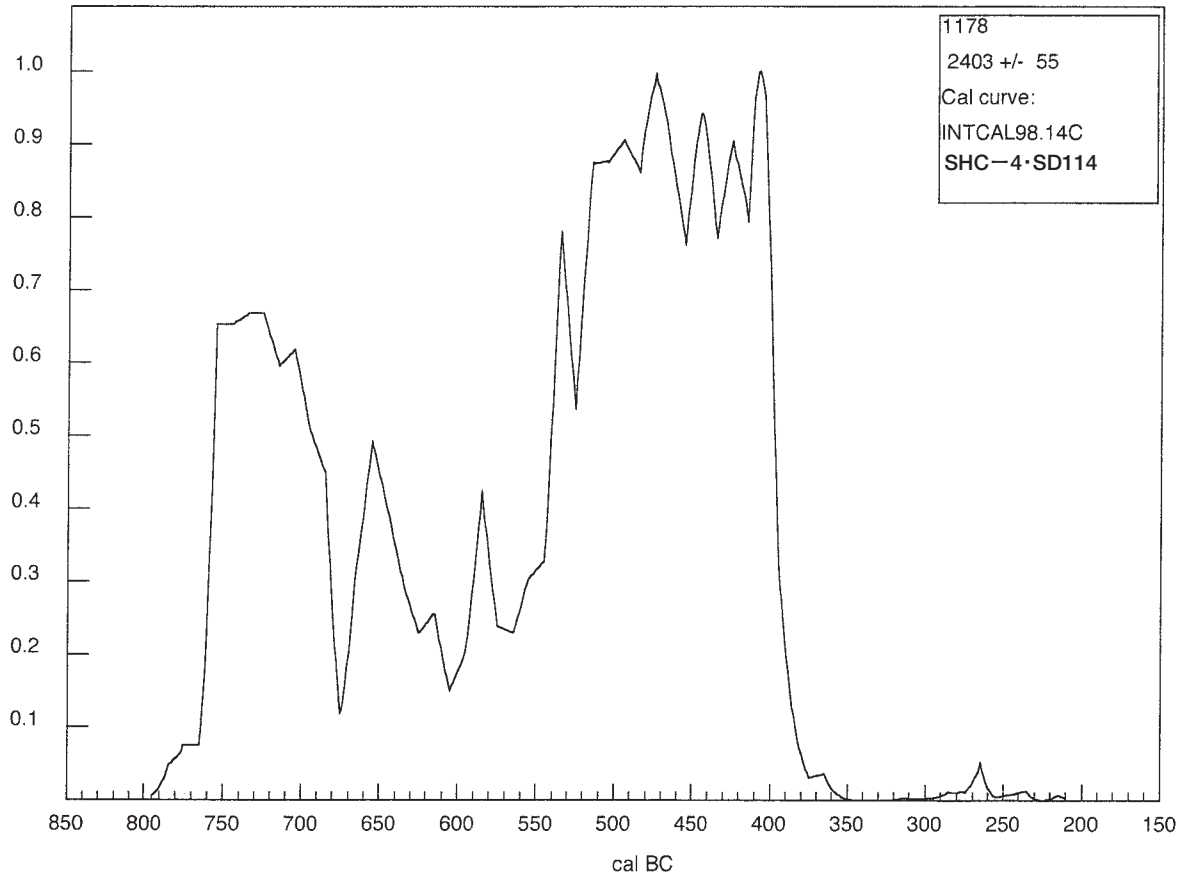
放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ^{13}C PDB (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-1177 (AMS)	木片 SHC-4・溝ＳＤ114	-26.1	2,470±60	cal BC 755 cal BC 700 cal BC 540 cal BC 525	cal BC 760 - 680 (33.3%) cal BC 665 - 610 (22.2%) cal BC 565 - 505 (24.0%)



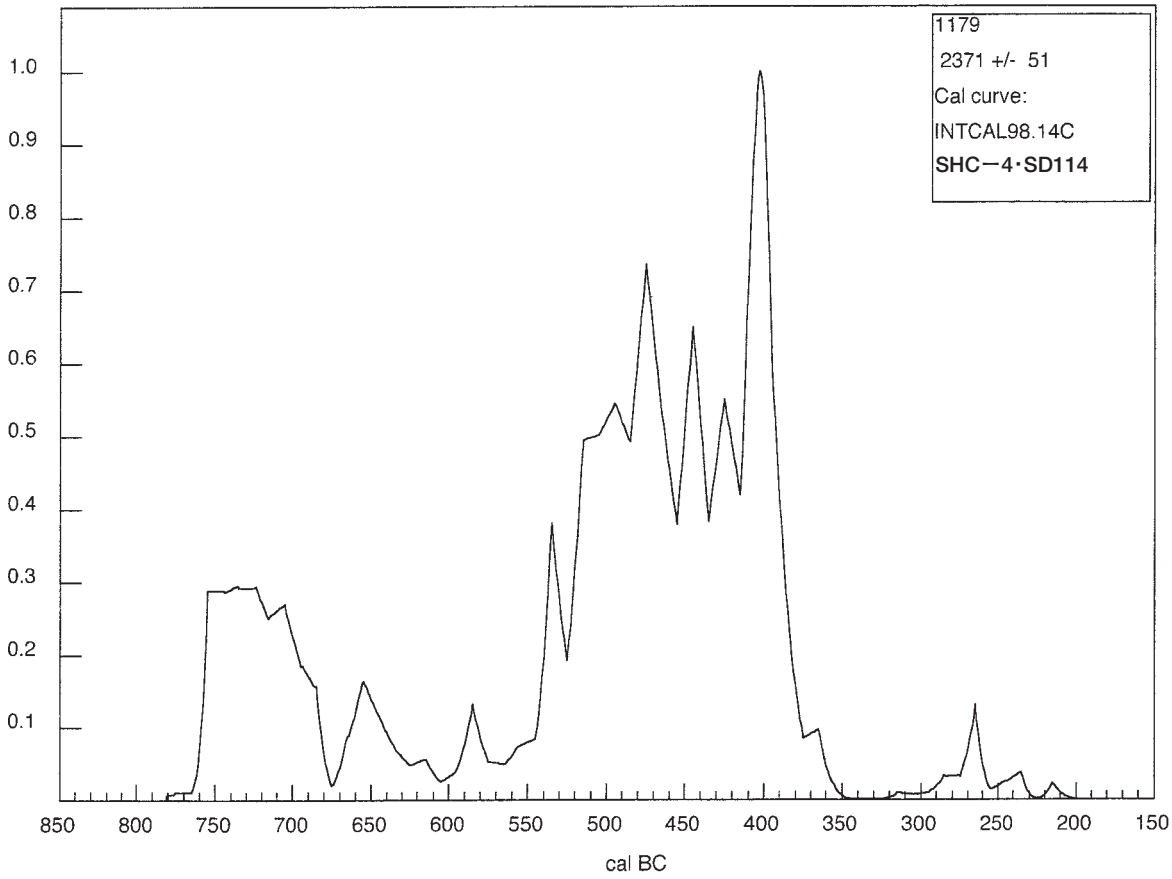
放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	$\delta^{13}C$ PDB (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-1178 (AMS)	木片 SHC-4・溝ＳＤ114	-27.2	2,400±60	cal BC 410	cal BC 755 - 715 (17.5%) cal BC 525 - 400 (74.0%)



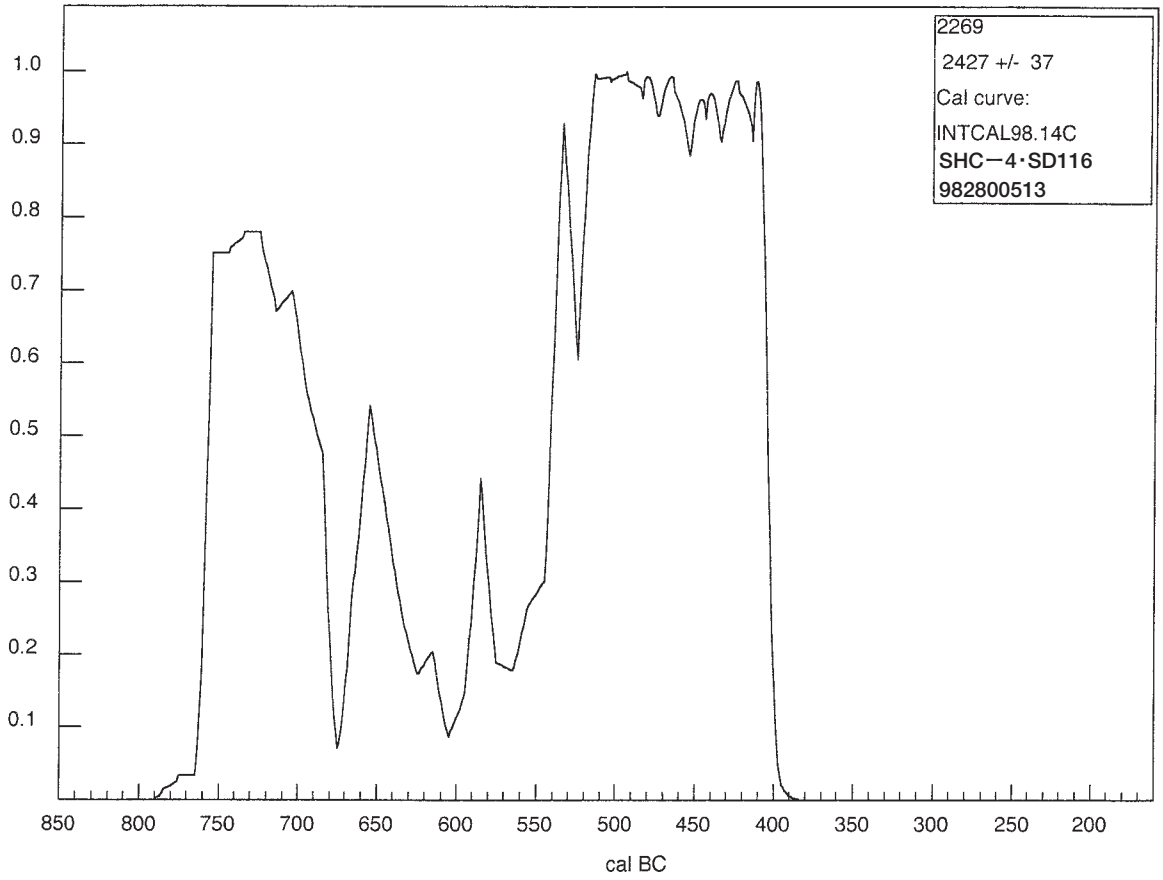
放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

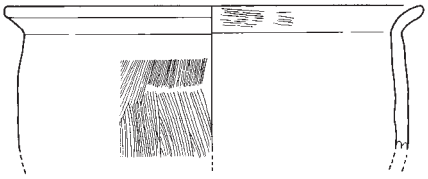
測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ^{13}C PDB (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-1179 (AMS)	木片 SHC-4・溝ＳＤ114	-26.0	2,370±50	cal BC 405	cal BC 520 - 385 (95.6%)



放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ^{13}C PDB (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-2269 (AMS)	土器付着物 SHC-4・溝ＳＤ116 甕 982800513	-28.9	2,425±35	cal BC 480 cal BC 465 cal BC 450 cal BC 440 cal BC 410	cal BC 755 - 720 (19.0%) cal BC 525 - 405 (74.9%)

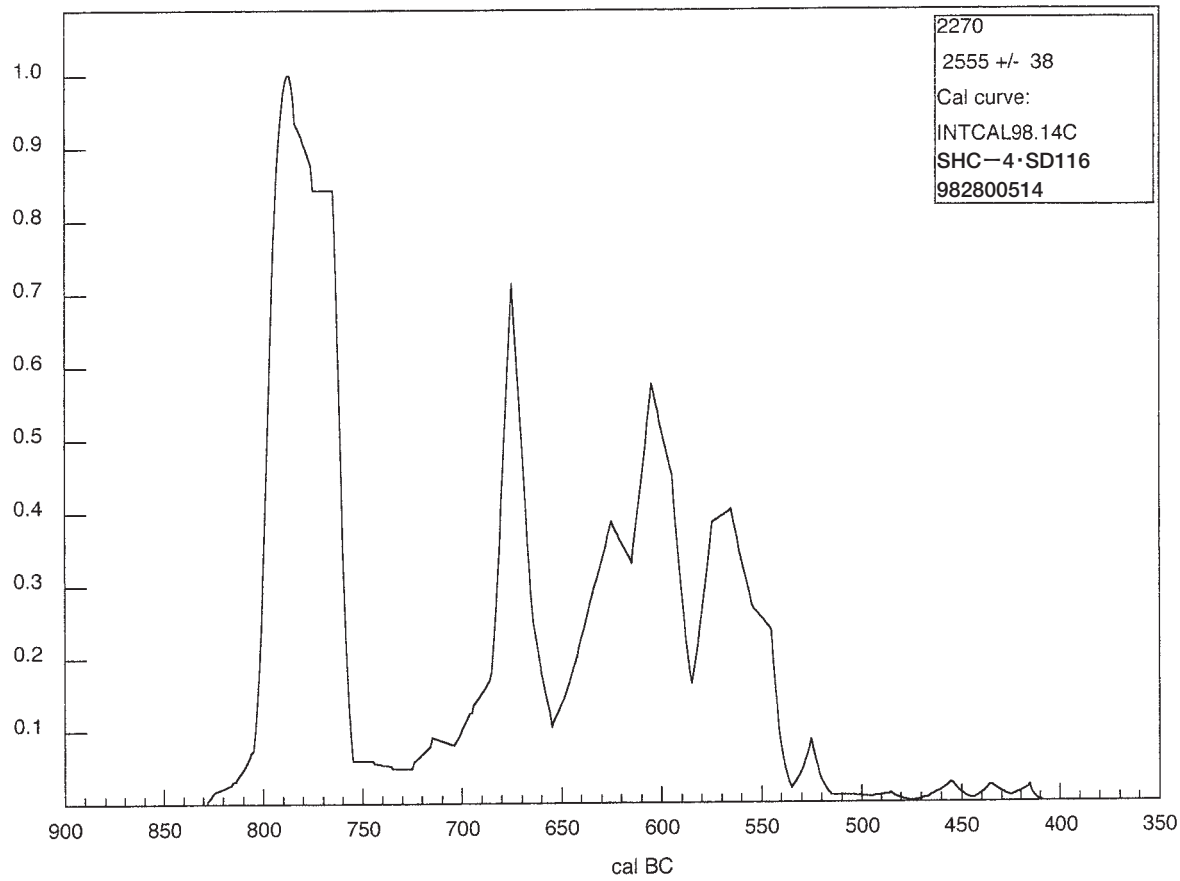


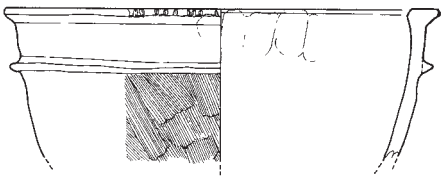


下月隈C遺跡第4次・SD116出土土器（982800513）実測図（縮尺：1/4）

放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ13C PDB (‰)	14C年代 (yrBP±1σ)	14C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-2270 (AMS)	土器付着物 SHC-4・溝ＳＤ116 甕 982800514	-27.6	2,555±40	cal BC 785	cal BC 800 - 760 (53.0%) cal BC 680 - 665 (12.9%) cal BC 615 - 590 (17.6%)

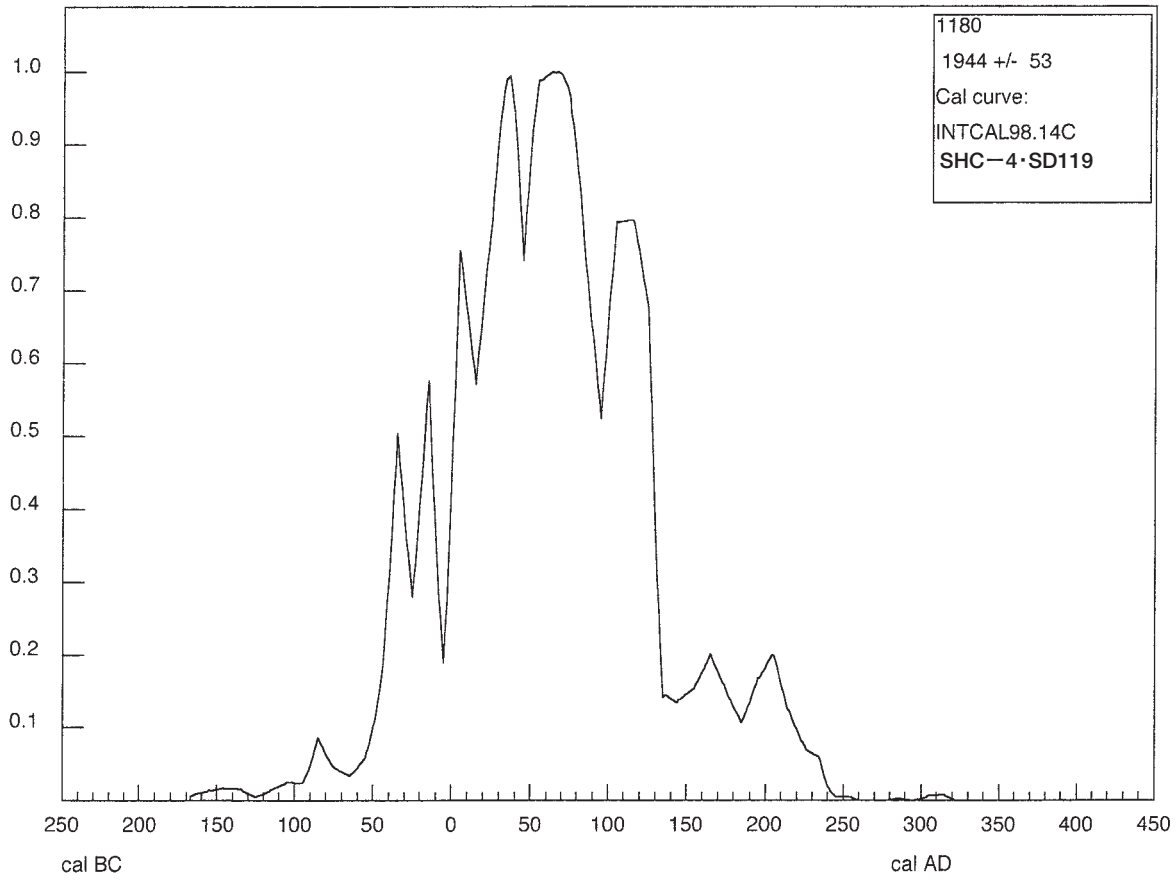




下月隈C遺跡第4次・SD116出土土器（982800514）実測図（縮尺：1/4）

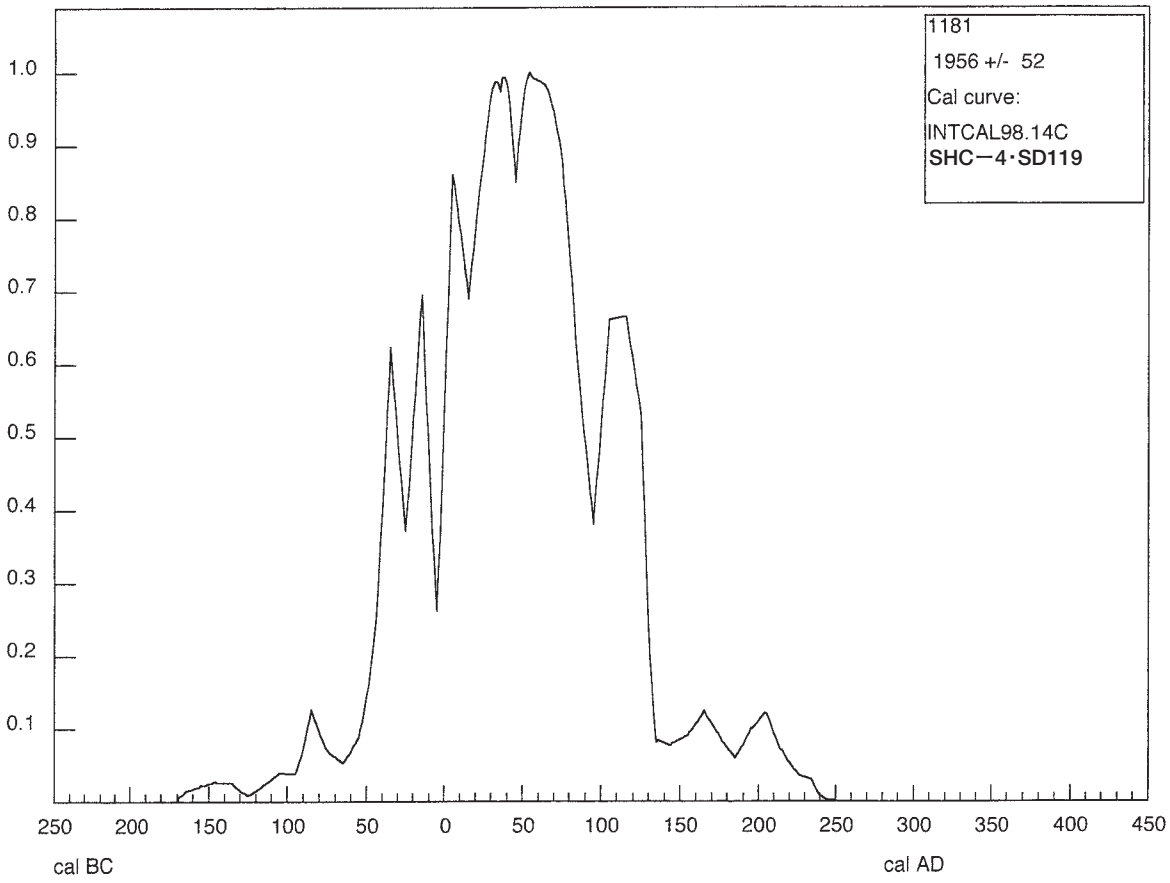
放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ^{13}C PDB (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-1180 (AMS)	木片 SHC-4・溝ＳＤ119	-28.3	1,940±50	cal AD 65	cal AD 15 - 90 (69.4%) cal AD 100 - 125 (22.7%)



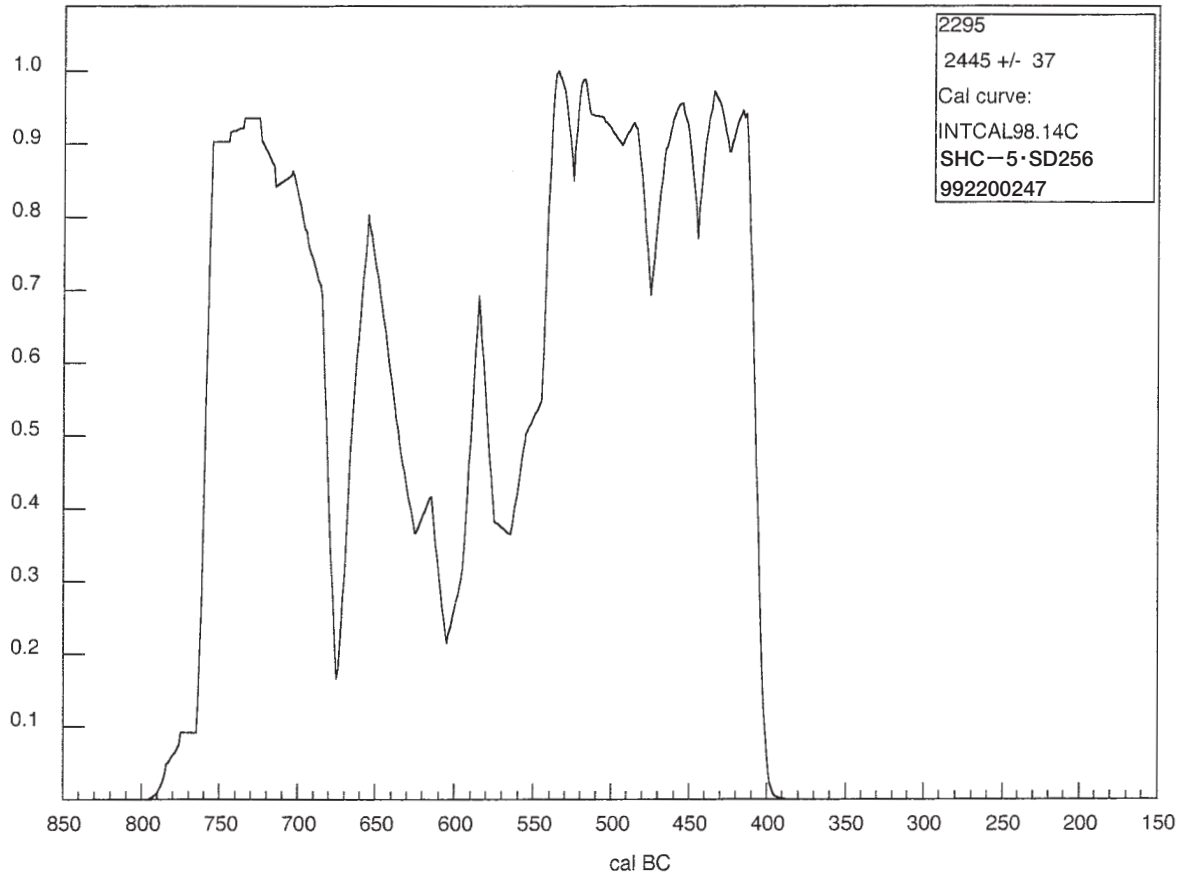
放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

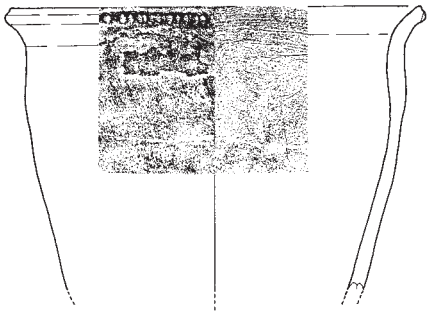
測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ^{13}C PDB (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-1181 (AMS)	木片 SHC-4・溝ＳＤ119	-28.4	1,960±50	cal AD 30 cal AD 35 cal AD 55	cal AD 0 - 85 (80.7%) cal AD 100 - 120 (13.9%)



放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号（測定法）	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺物No.	δ13C PDB (‰)	14C年代 (yrBP±1σ)	14C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-2295 (AMS)	土器付着物 SHC-5・溝SD256 甕 992200247	-28.3	2,445±35	cal BC 535 cal BC 520	cal BC 755 - 695 (31.9%) cal BC 540 - 475 (33.9%) cal BC 470 - 410 (32.0%)

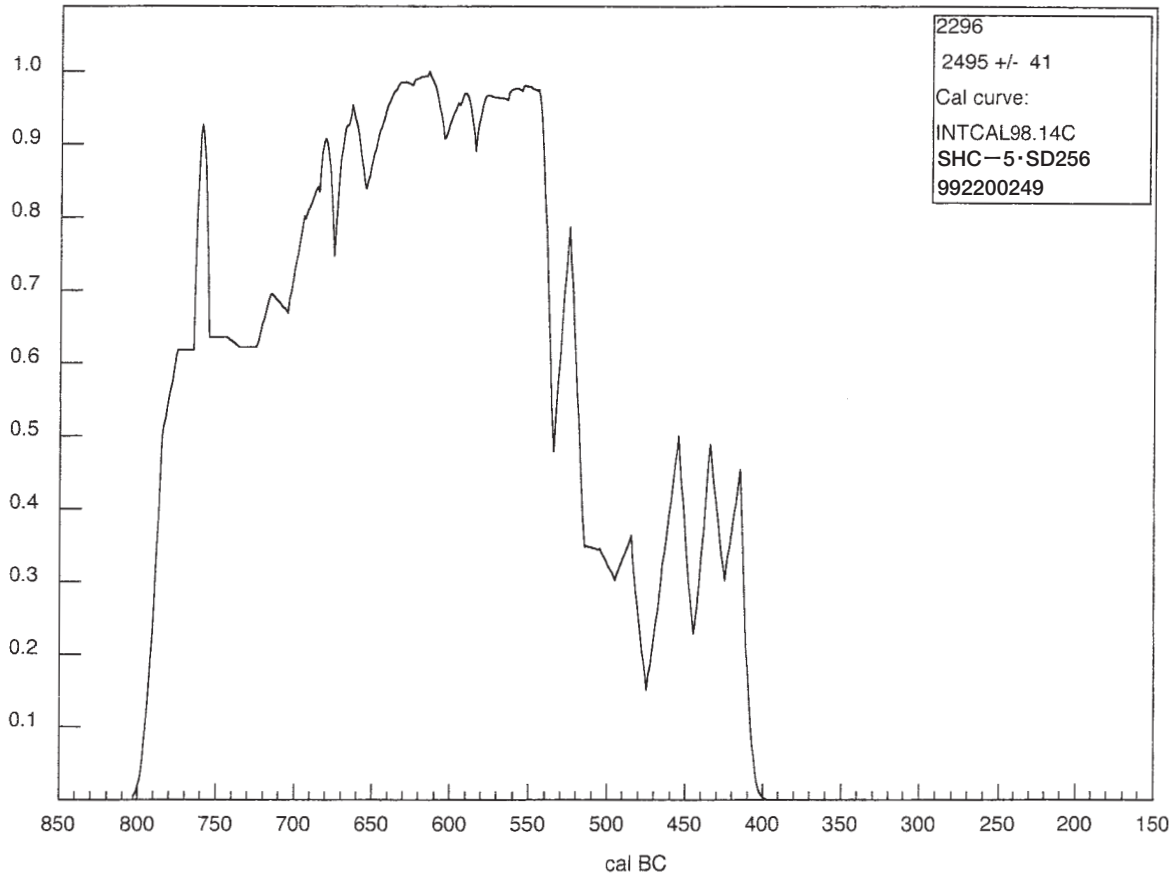


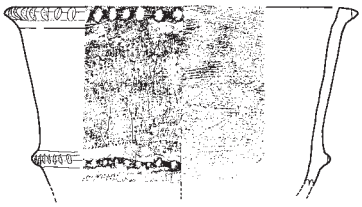


下月隈C遺跡第5次・SD256出土土器（992200247）実測図（縮尺：1/4）

放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ13C PDB (‰)	14C年代 (yrBP±1σ)	14C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-2296 (AMS)	土器付着物 SHC-5・溝ＳＤ256 甕 992200249	-26.4	2,495±40	cal BC 760 cal BC 680 cal BC 665 cal BC 630 cal BC 590 cal BC 575 cal BC 560	cal BC 720 - 540 (92.8%)

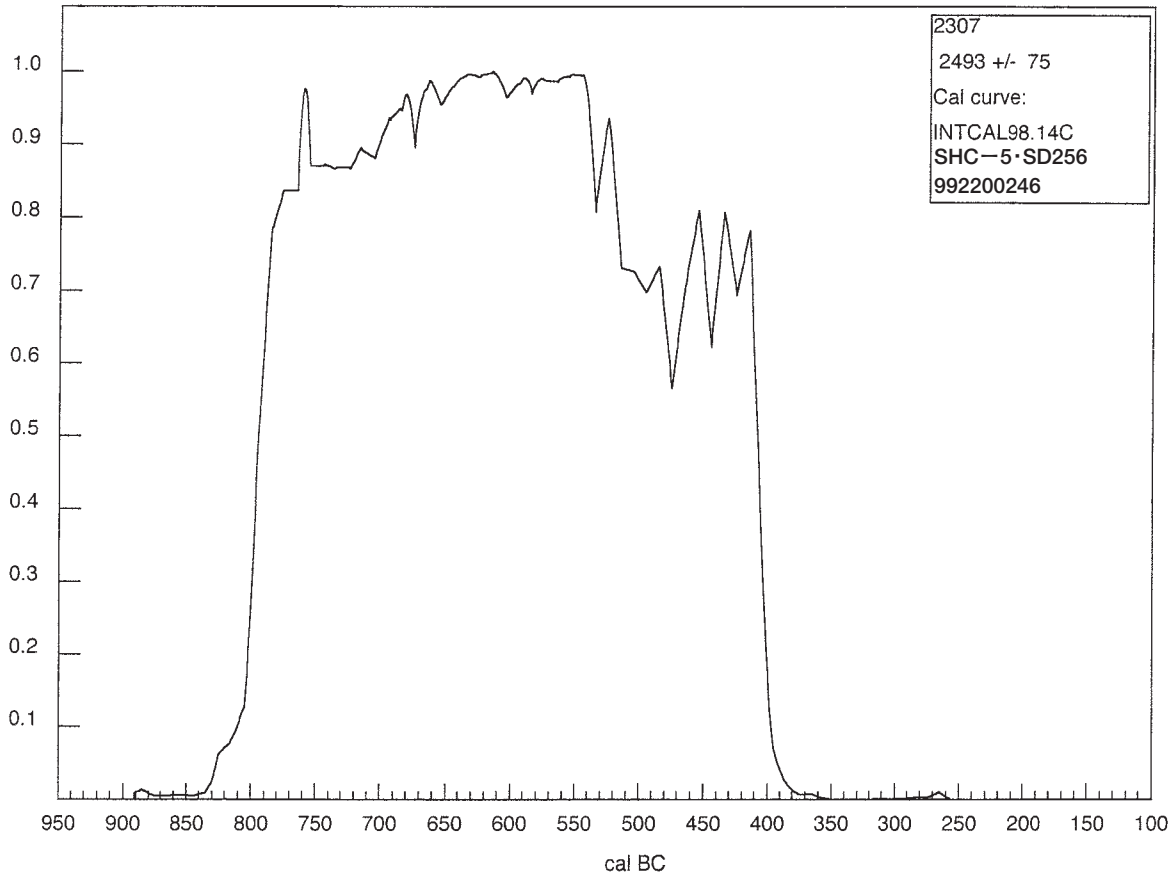


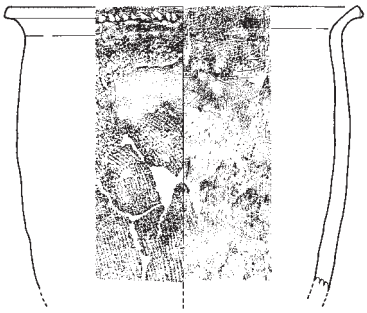


下月隈C遺跡第5次・SD256出土土器（992200249）実測図（縮尺：1/4）

放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ ^{13}C PDB (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-2307 (AMS)	土器付着物 SHC-5・溝ＳＤ256 甕 992200246	-27.7	2,495±75	cal BC 760 cal BC 680 cal BC 665 cal BC 635 cal BC 590 cal BC 580 cal BC 560	cal BC 775 - 535 (100%)

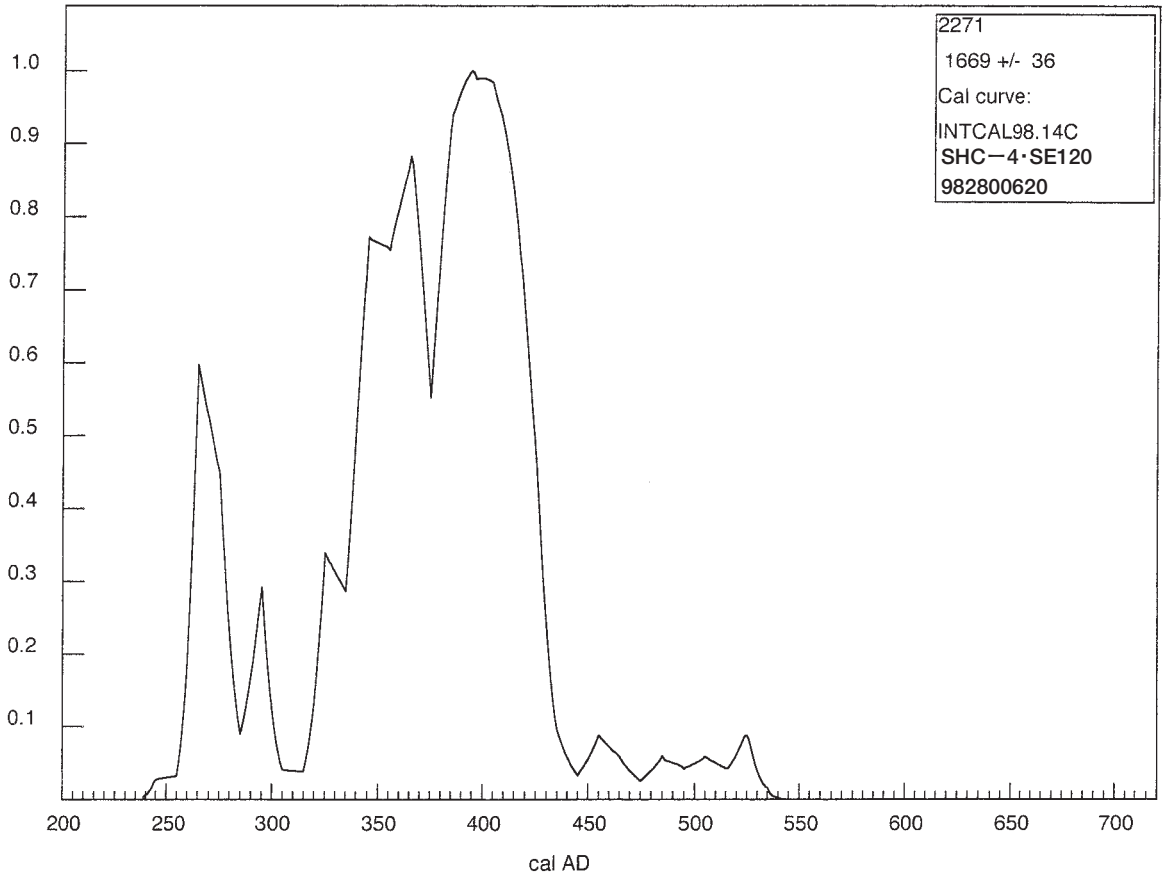


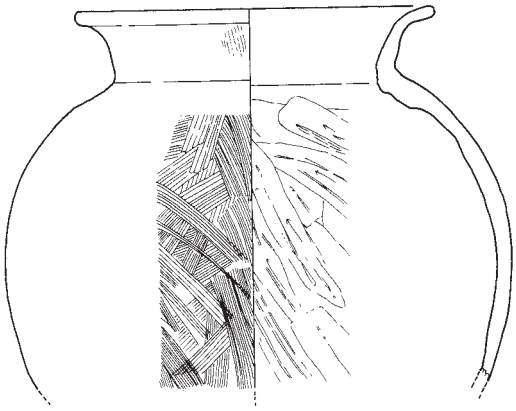


下月隈C遺跡第5次・SD256出土土器（992200246）実測図（縮尺：1/4）

放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ^{13}C PDB (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-2271 (AMS)	土器付着物 SHC-4・井戸ＳＥ120 甕 982800620	-27.4	1,670±35	cal AD 400	cal AD 340 - 420 (99.1%)

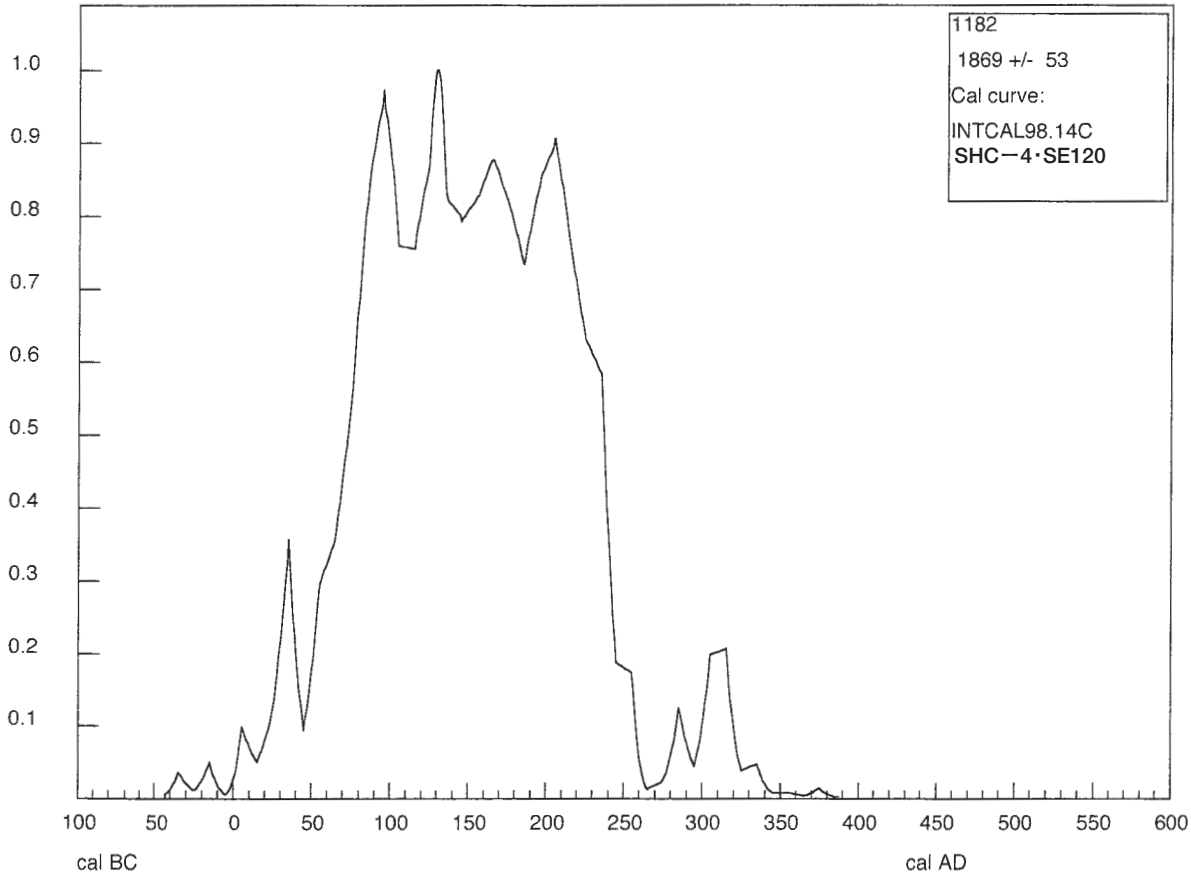




下月隈C遺跡第4次・SE120出土土器（982800620）実測図（縮尺：1/4）

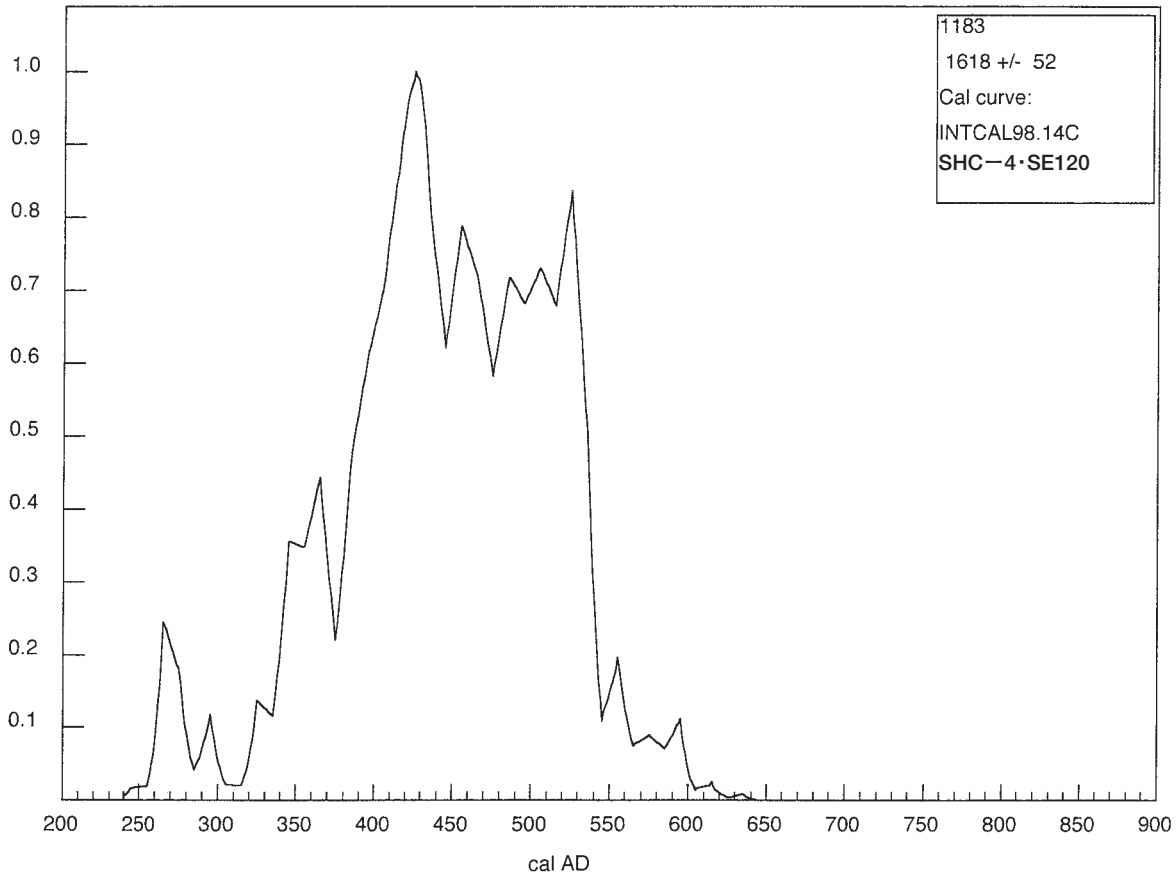
放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ^{13}C PDB (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-1182 (AMS)	炭化材 SHC-4・井戸ＳＥ120	-29.6	1,870±50	cal AD 130	cal AD 80 - 215 (100%)



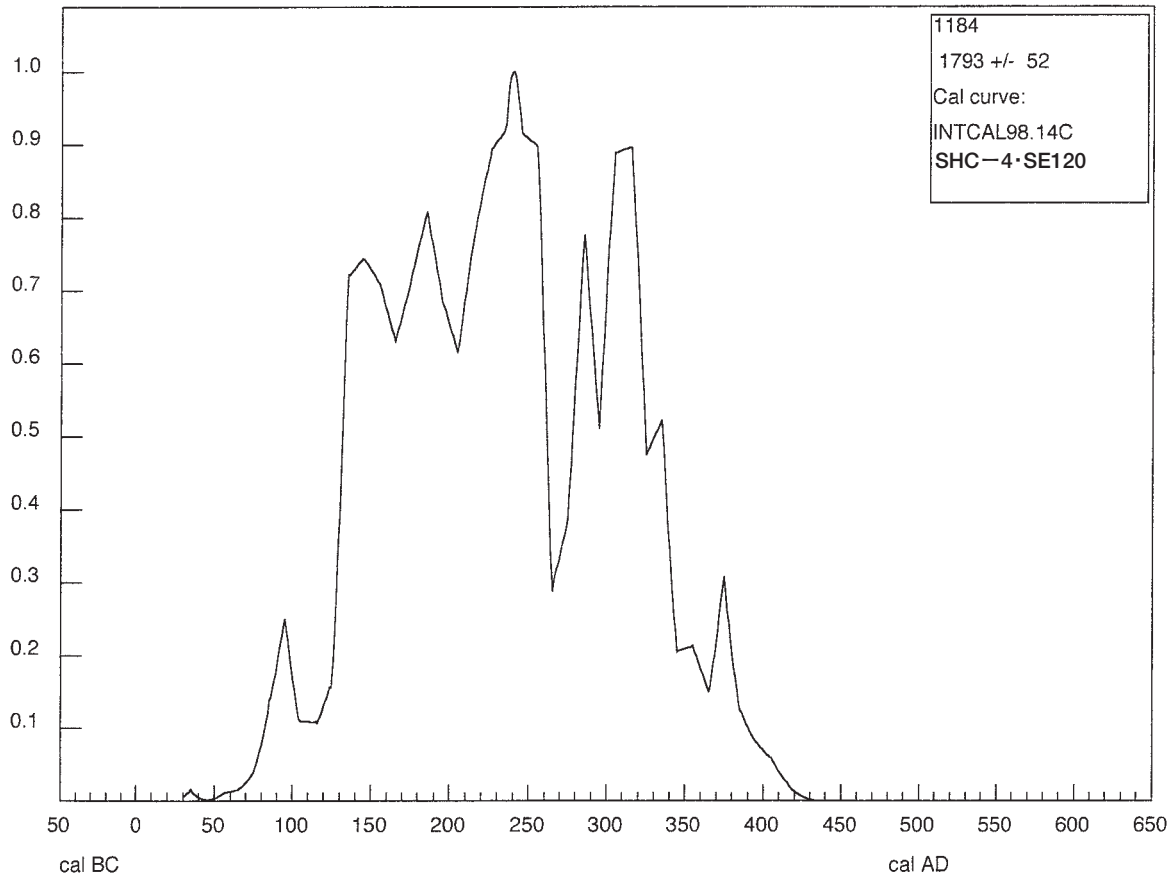
放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ^{13}C PDB (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-1183 (AMS)	炭化材 SHC-4・井戸ＳＥ120	-29.5	1,620±50	cal AD 425	cal AD 395 - 470 (60.3%) cal AD 480 - 530 (39.7%)



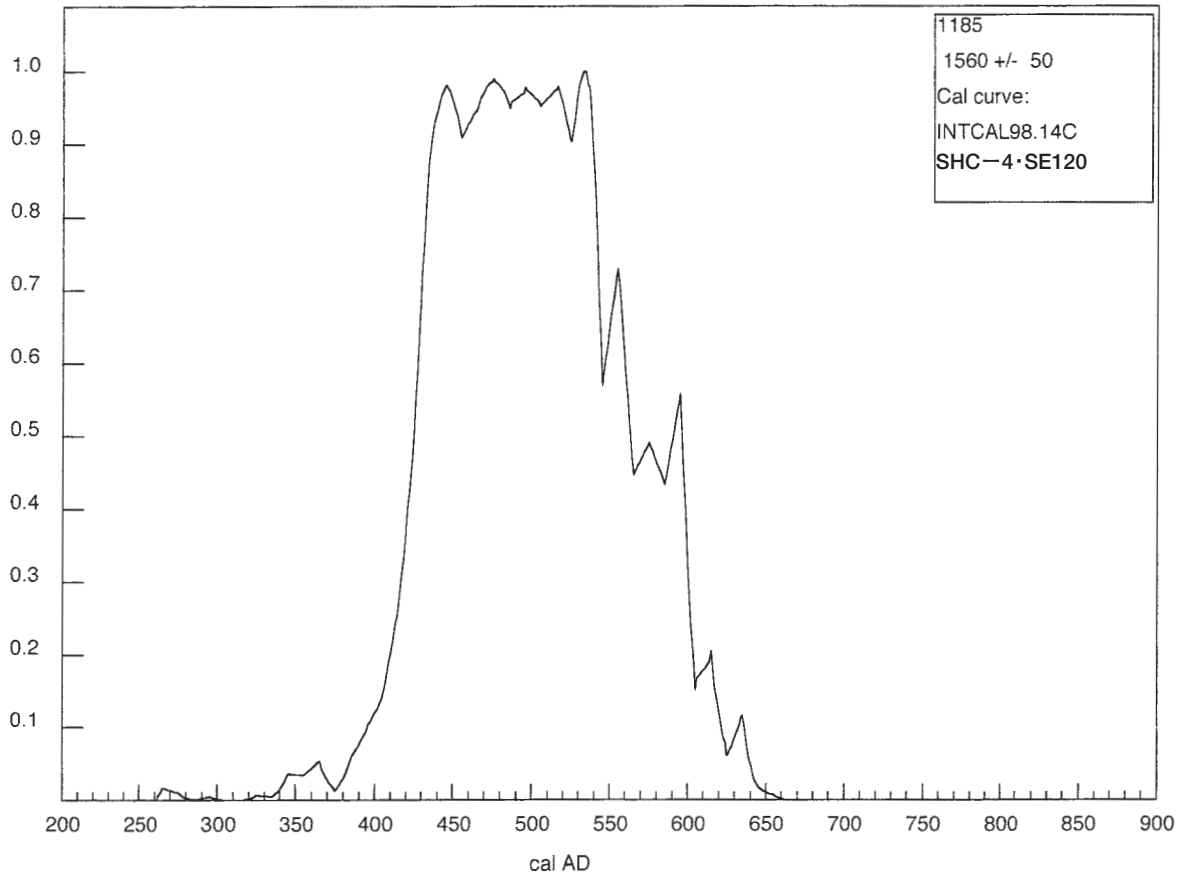
放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ^{13}C PDB (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-1184 (AMS)	炭化材 SHC-4・井戸ＳＥ120	-26.4	1,790±50	cal AD 240	cal AD 135 - 160 (18.1%) cal AD 165 - 200 (20.9%) cal AD 205 - 260 (39.4%) cal AD 300 - 320 (16.7%)



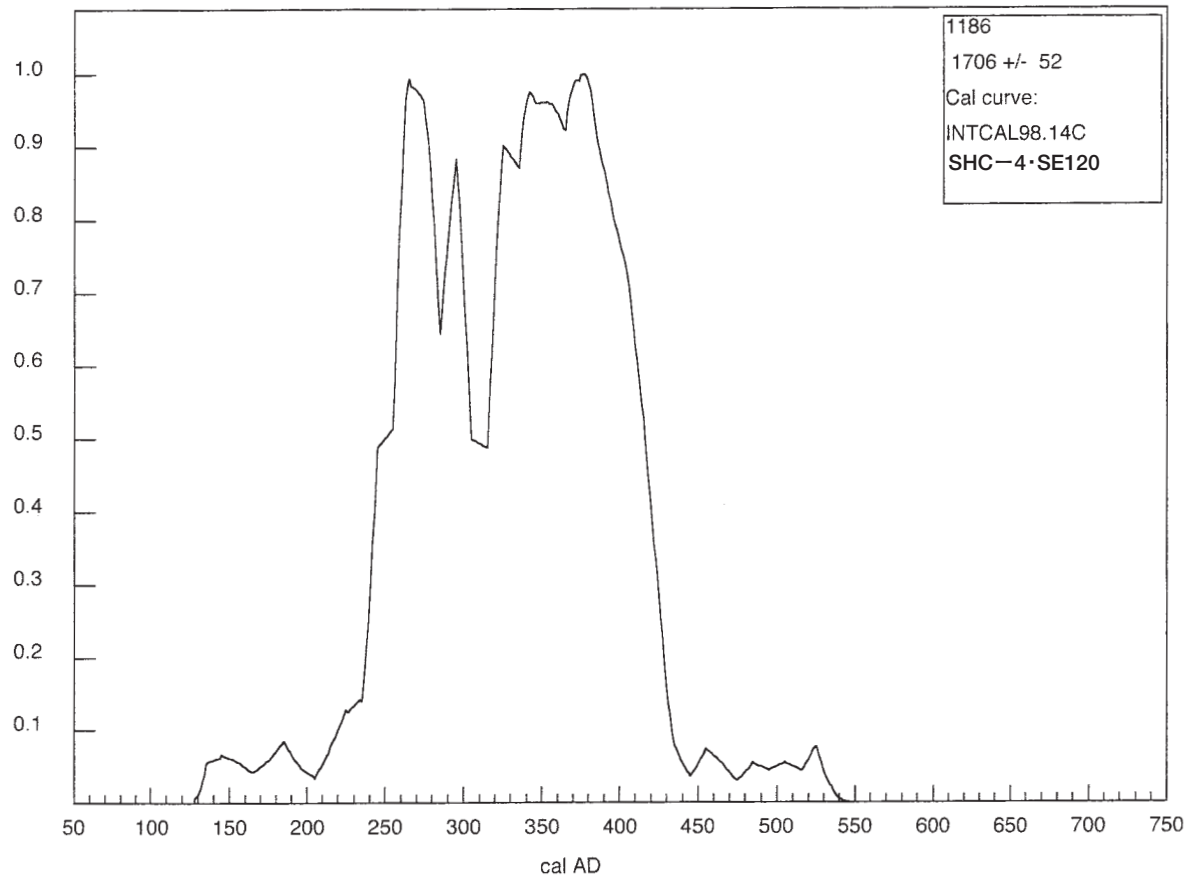
放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ^{13}C PDB (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-1185 (AMS)	木片 SHC-4・井戸ＳＥ120	-29.8	1,560±50	cal AD 535	cal AD 430 - 540 (100%)



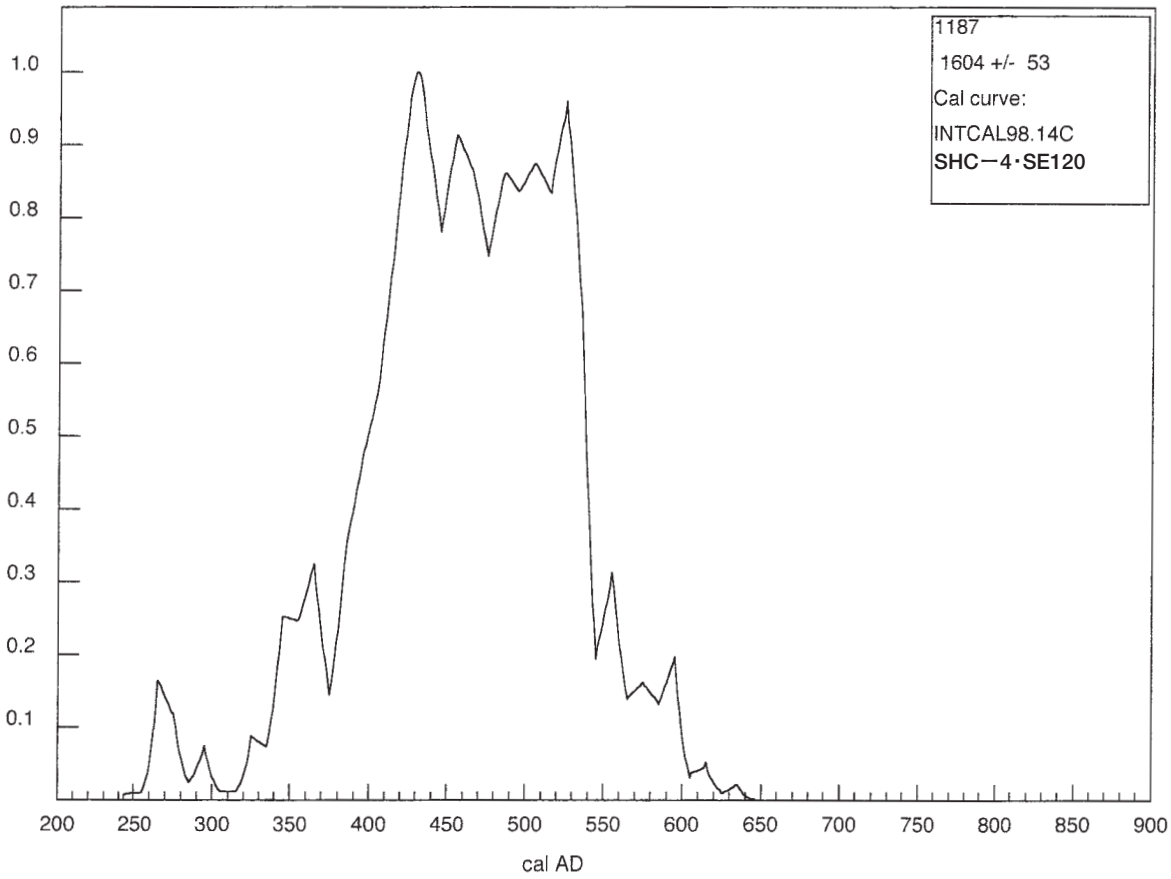
放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ^{13}C PDB (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1 σ 暦年代範囲
PLD-1186 (AMS)	木片 SHC-4・井戸ＳＥ120	-29.3	1,710±50	cal AD 340 cal AD 375	cal AD 260 - 285 (20.5%) cal AD 320 - 405 (71.2%)



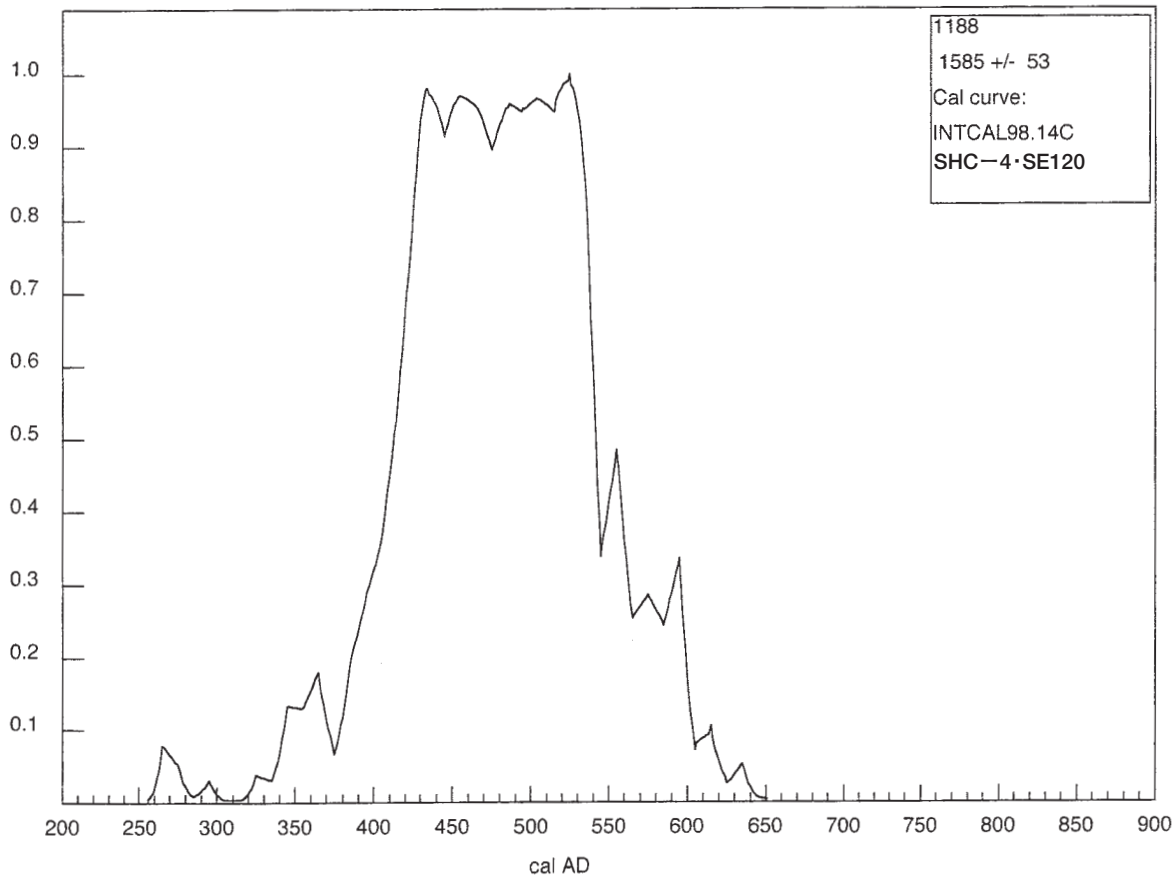
放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ 13C PDB (‰)	14C年代 (yrBP±1σ)	14C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-1187 (AMS)	炭化材 SHC-4・井戸ＳＥ120	-28.5	1,600±50	cal AD 430	cal AD 415 - 535 (100%)



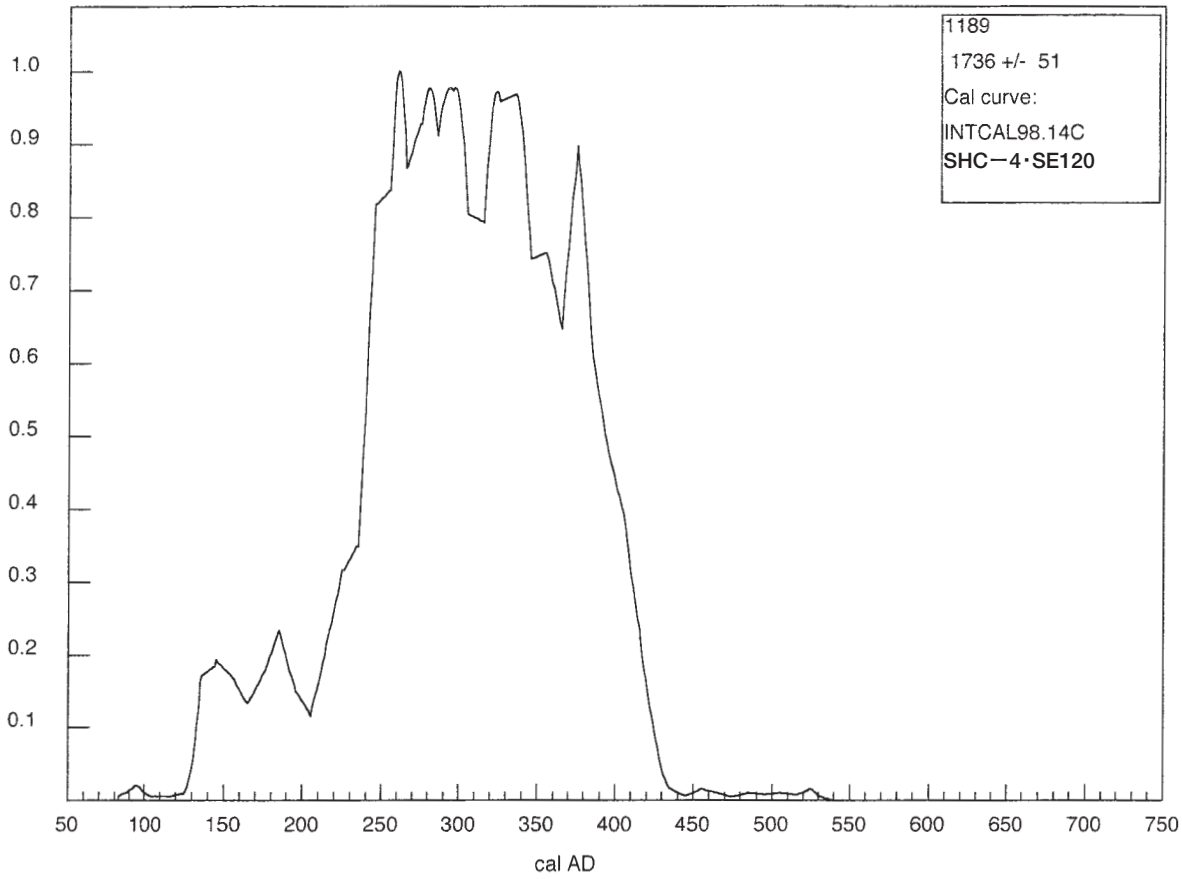
放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ^{13}C PDB (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-1188 (AMS)	木片 SHC-4・井戸ＳＥ120	-26.4	1,590±50	cal AD 435 cal AD 525	cal AD 425 - 535 (100%)



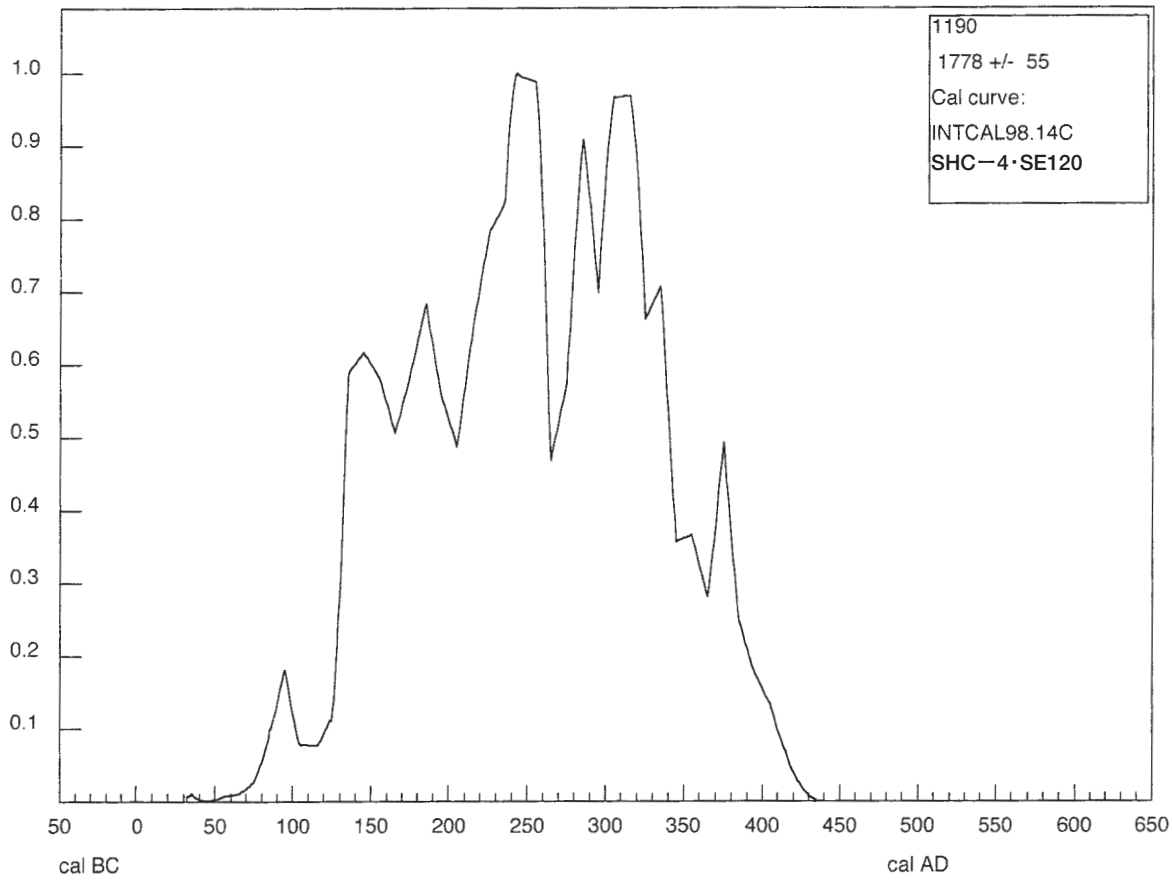
放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ13C PDB (‰)	14C年代 (yrBP±1σ)	14C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-1189 (AMS)	木片 SHC-4・井戸ＳＥ120	-28.3	1,740±50	cal AD 260 cal AD 280 cal AD 295 cal AD 325	cal AD 245 - 355 (90.5%)



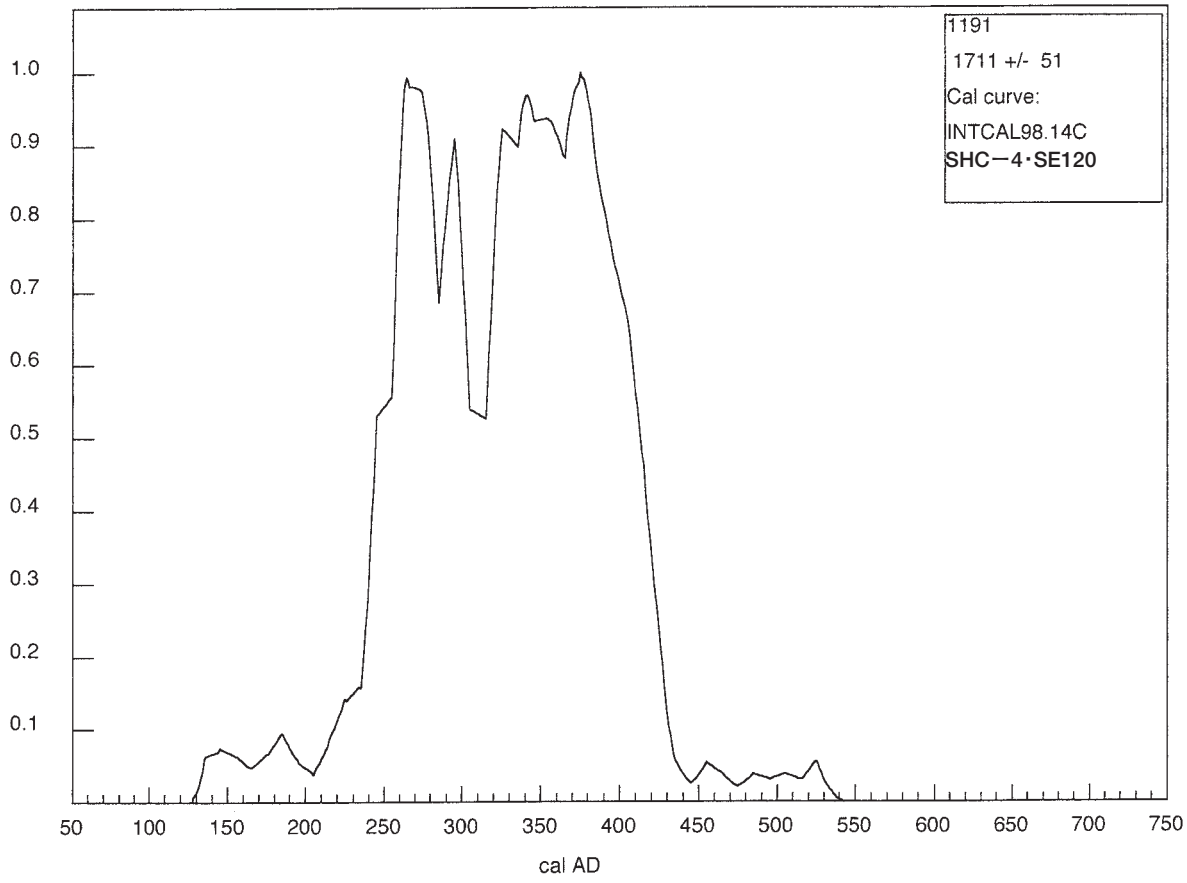
放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ^{13}C PDB (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-1190 (AMS)	木片 SHC-4・井戸ＳＥ120	-27.3	1,780±60	cal AD 245	cal AD 135 - 155 (10.5%) cal AD 175 - 195 (10.0%) cal AD 210 - 265 (36.8%) cal AD 275 - 340 (42.7%)



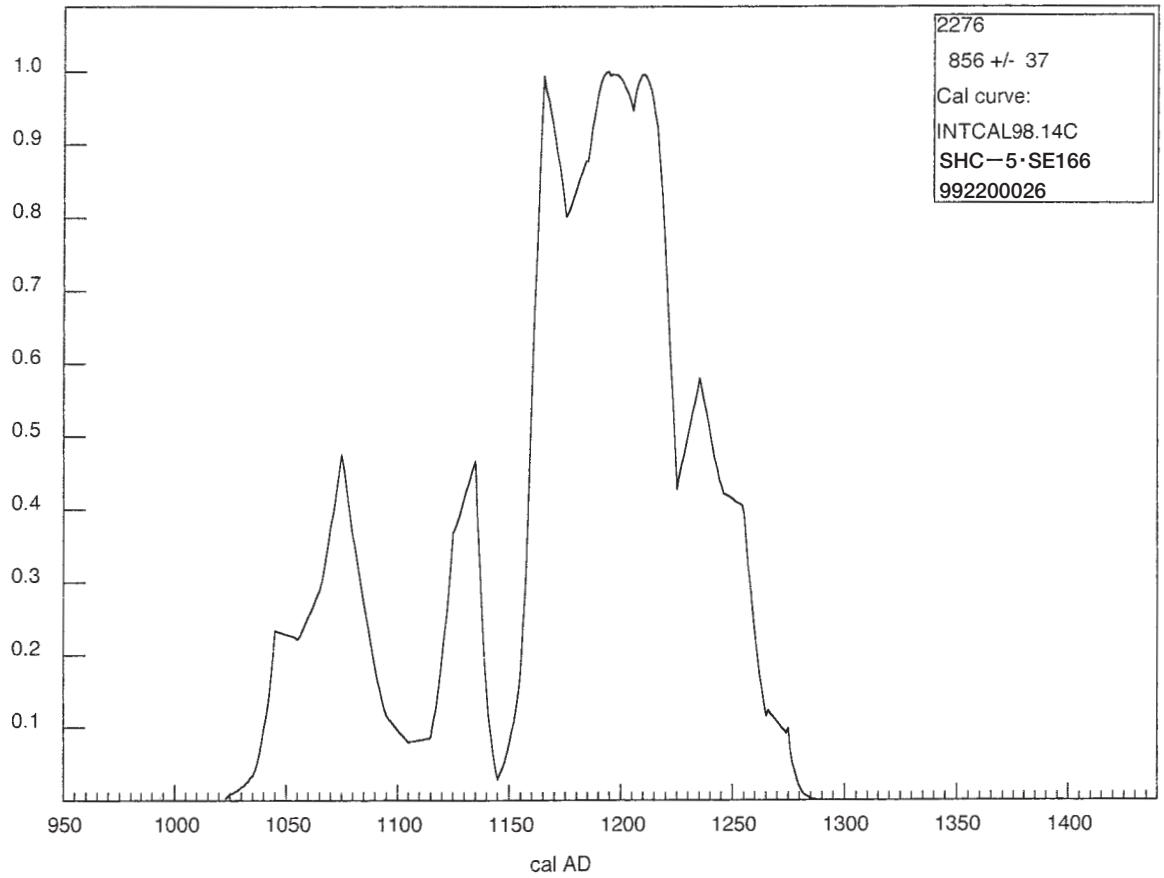
放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

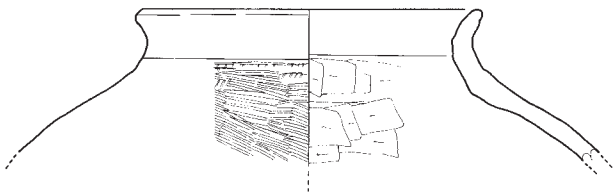
測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ^{13}C PDB (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-1191 (AMS)	木片 SHC-4・井戸ＳＥ120	-27.4	1,710±50	cal AD 265 cal AD 270 cal AD 340 cal AD 375	cal AD 260 - 300 (33.5%) cal AD 320 - 400 (66.5%)



放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ13C PDB (‰)	14C年代 (yrBP±1σ)	14C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-2276 (AMS)	土器付着物 SHC-5・井戸ＳＥ166 甕 992200026	-22.0	855±35	cal AD 1,195 cal AD 1,210	cal AD 1,160 - 1,245 (96.1%)

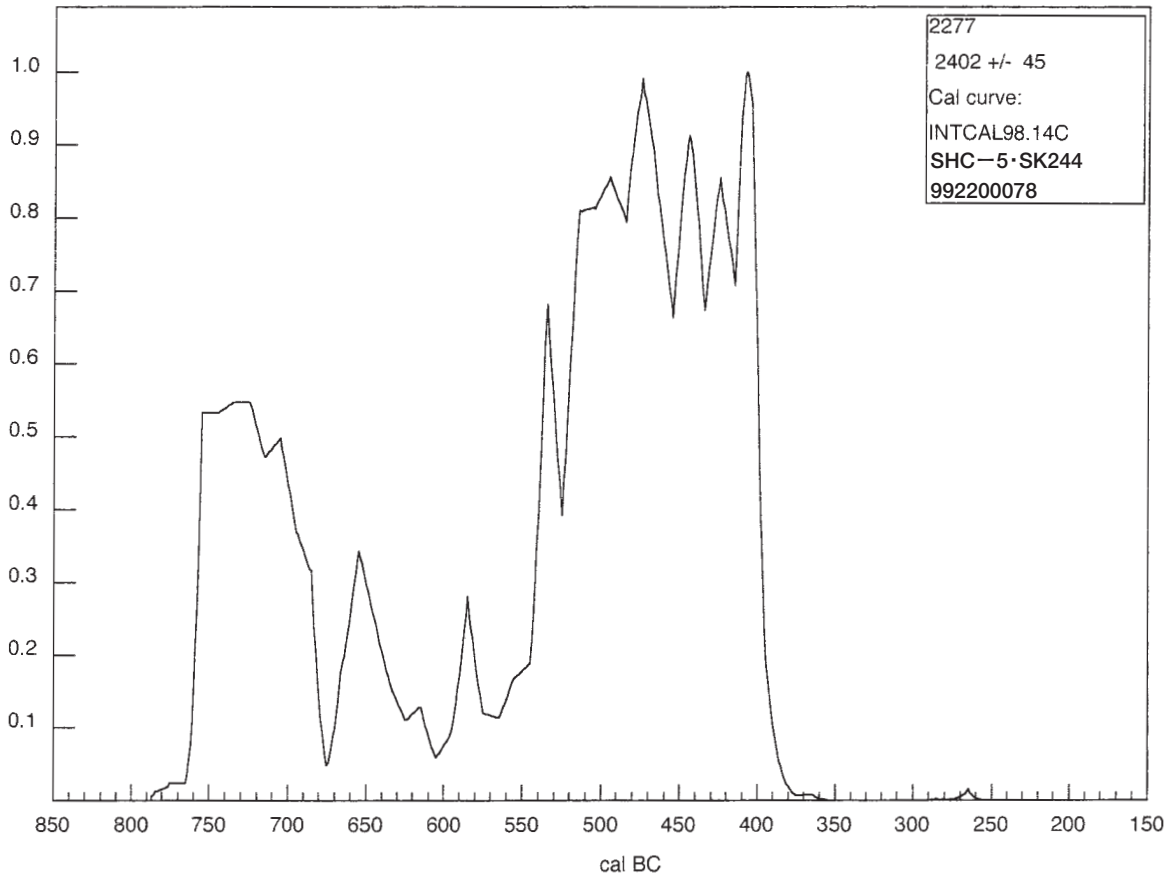


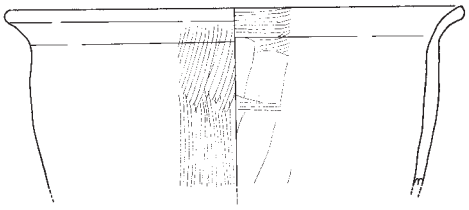


下月隈C遺跡第5次・SE166出土土器（992200026）実測図（縮尺：1/4）

放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ^{13}C PDB (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-2277 (AMS)	土器付着物 SHC-5・土壙ＳＫ244 甕 992200078	-29.0	2,400±45	cal BC 410	cal BC 755 - 725 (14.2%) cal BC 520 - 400 (82.2%)

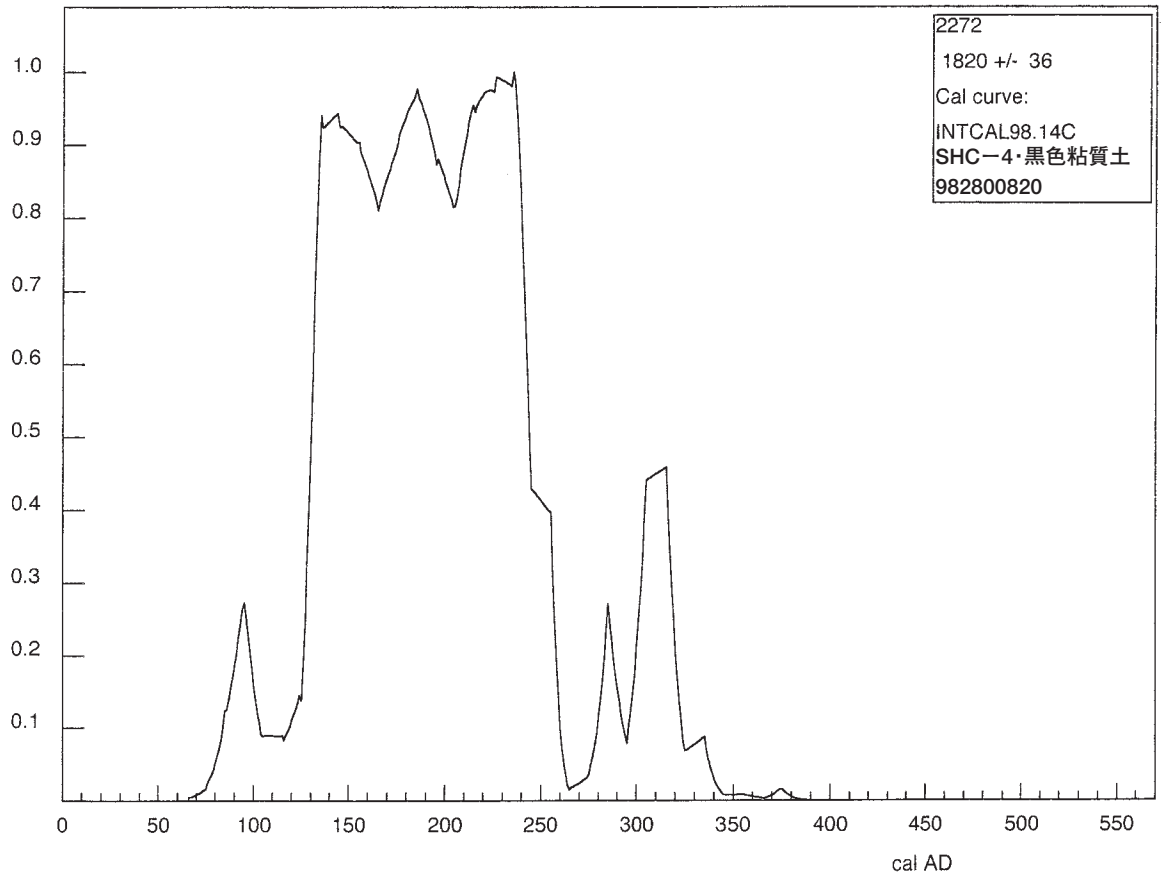


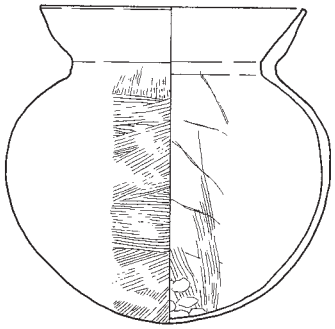


下月隈C遺跡第5次・SK244出土土器（992200078）実測図（縮尺：1/4）

放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ^{13}C PDB (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-2272 (AMS)	土器付着物 SHC-4・黒色粘質土 壺 982800820	-27.1	1,820±35	cal AD 225	cal AD 135 - 160 (30.0%) cal AD 170 - 200 (35.1%) cal AD 205 - 240 (34.8%)

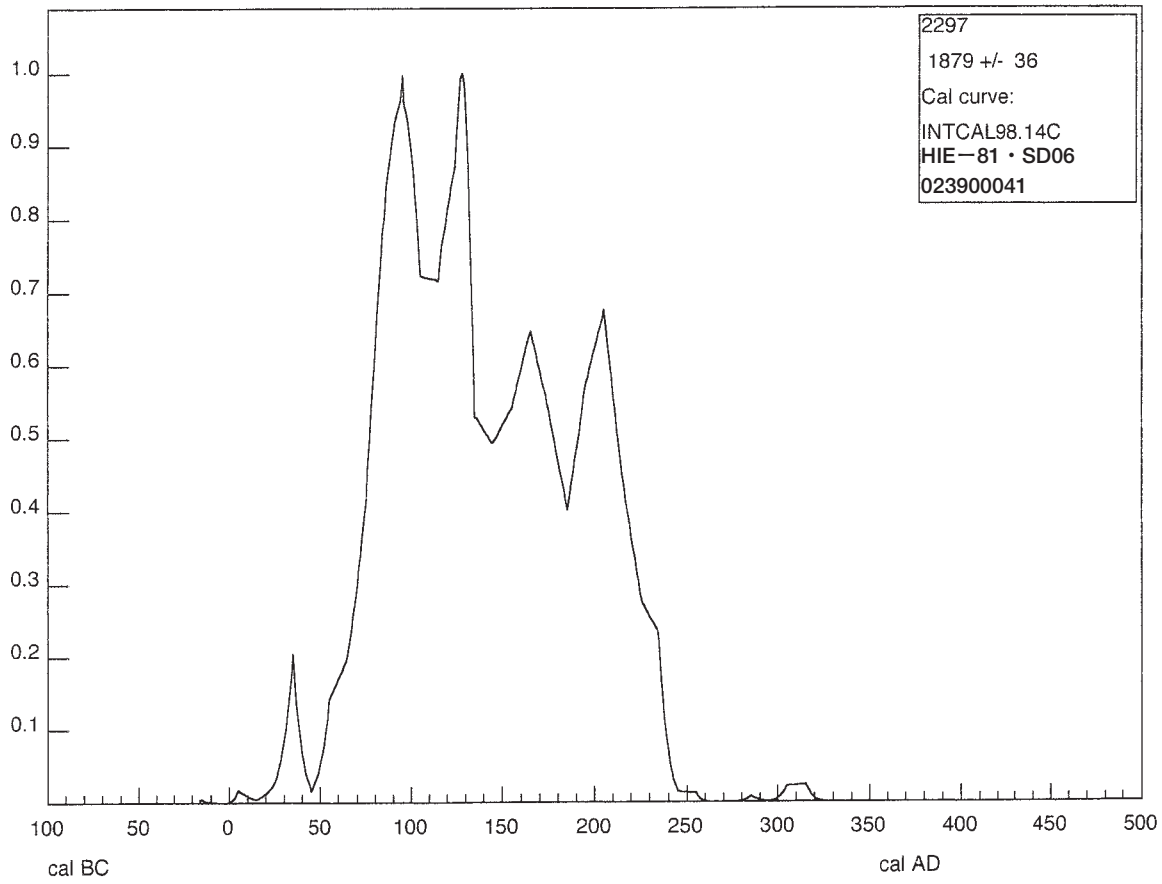


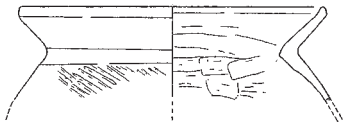


下月隈C遺跡第4次・黒色粘質土層出土土器（982800820）実測図（縮尺：1/4）

放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号（測定法）	分析試料 遺跡名・出土遺構 器種 遺物No.	δ13C PDB（‰）	14C年代（yrBP±1σ）	14C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-2297（AMS）	土器付着物 HIE-81・溝ＳＤ06 甕 023900041	-27.8	1,880±35	cal AD 130	cal AD 80 - 135 (64.9%) cal AD 150 - 175 (19.3%) cal AD 190 - 210 (15.9%)

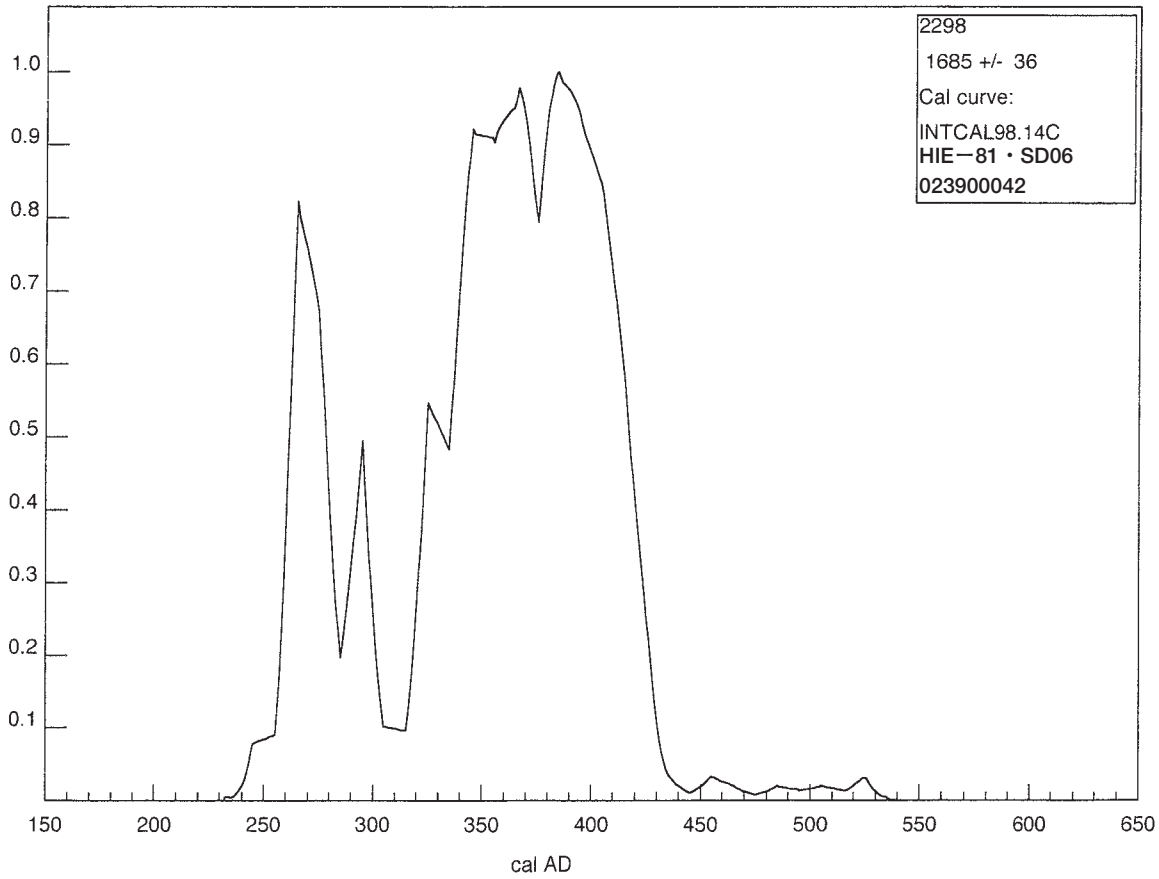




比恵遺跡第81次・SD06出土土器（023900041）実測図（縮尺：1/4）

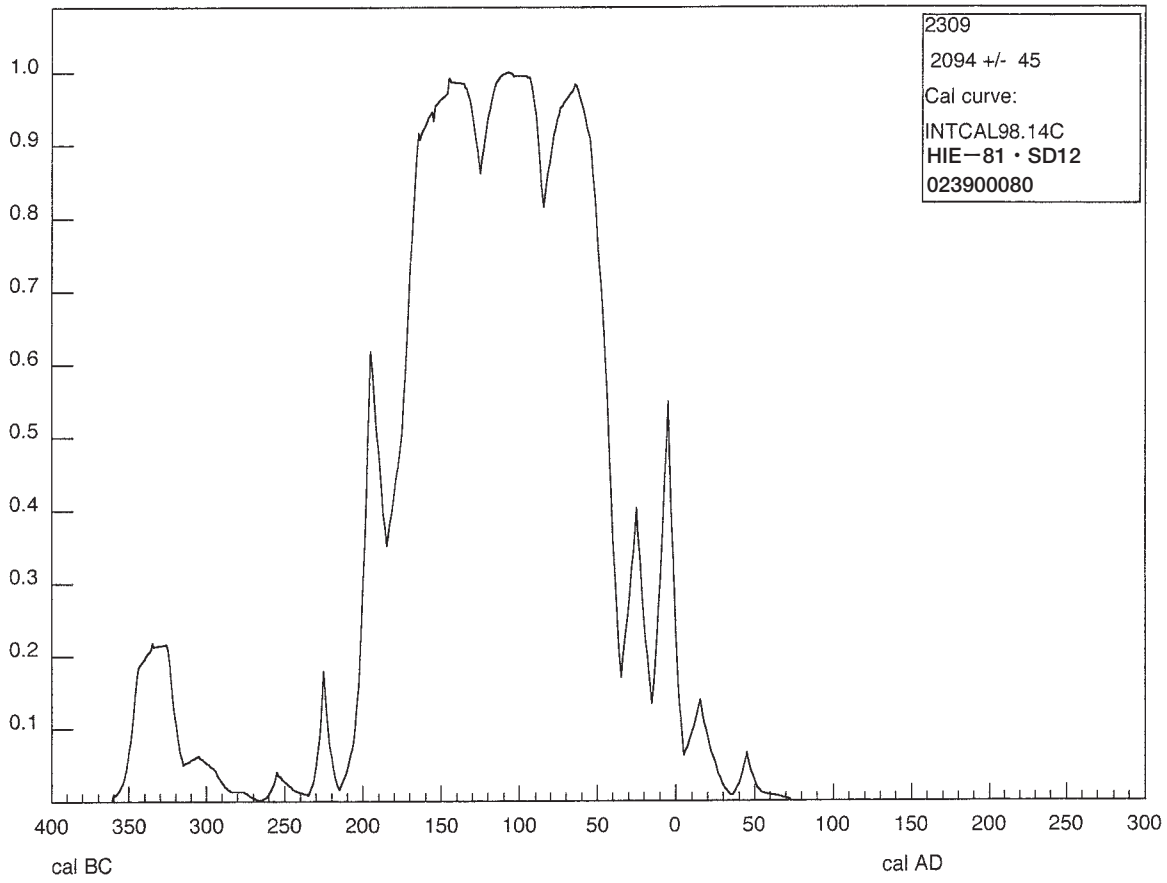
放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

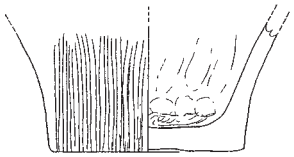
測定番号 (測定法)	分析試料 遺跡名・出土遺構 器　種 遺 物 No.	δ^{13}C PDB (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-2298 (AMS)	土器付着物 HIE-81・溝ＳＤ06 甕 023900042	-27.4	1,685±35	cal AD 385	cal AD 265 - 275 (11.2%) cal AD 340 - 410 (88.8%)



放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号（測定法）	分析試料 遺跡名・出土遺構 器種 遺物No.	δ^{13}C PDB (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-2309 (AMS)	土器付着物 HIE-81・溝SD12 甕 023900080	-14.4	2,095±45	cal BC 105	cal BC 165 - 50 (100%)





比恵遺跡第81次・SD12出土土器（023900080）実測図（縮尺：1/4）

図1.　放射性炭素年代測定試料暦年代較正値と18暦年代範囲

試料No. （遺物No.）	種　類	機　種 採取部位	出土遺構
2273 992200001	土器 付着物	壷 頸部外面	SD104
2274 992200002	土器 付着物	甕 胴央部外面	SD104
2275 992200003	土器 付着物	甕 胴央部外面	SD104
1156 9828	炭化材		SD104
1157 9828	炭化材		SD104
1158 9828	木　片		SD104
1159 9828	木　片		SD104
1160 9828	木　片		SD106
1161 9828	木　片		SD106
1162 9828	木　片		SD106
1163 9828	木　片		SD106
1164 9828	木　片		SD106
2261 982800861	土器 付着物	甕 口縁部外面	SD112
2262 982800466	土器 付着物	甕 胴部下外面	SD112
2263 982800470	土器 付着物	甕 口縁下外面	SD114
2264 982800487	土器 付着物	甕 口縁下外面	SD114
2265 982800488	土器 付着物	甕 口縁下外面	SD114
2266 982800605	土器 付着物	甕 口縁下･胴上半外面	SD114
2267 982800840	土器 付着物	甕 口縁下･胴上半外面	SD114
2268 982800841	土器 付着物	甕 口縁下外面	SD114
2278 992200086	土器 付着物	甕 口縁下･胴上半外面	SD114

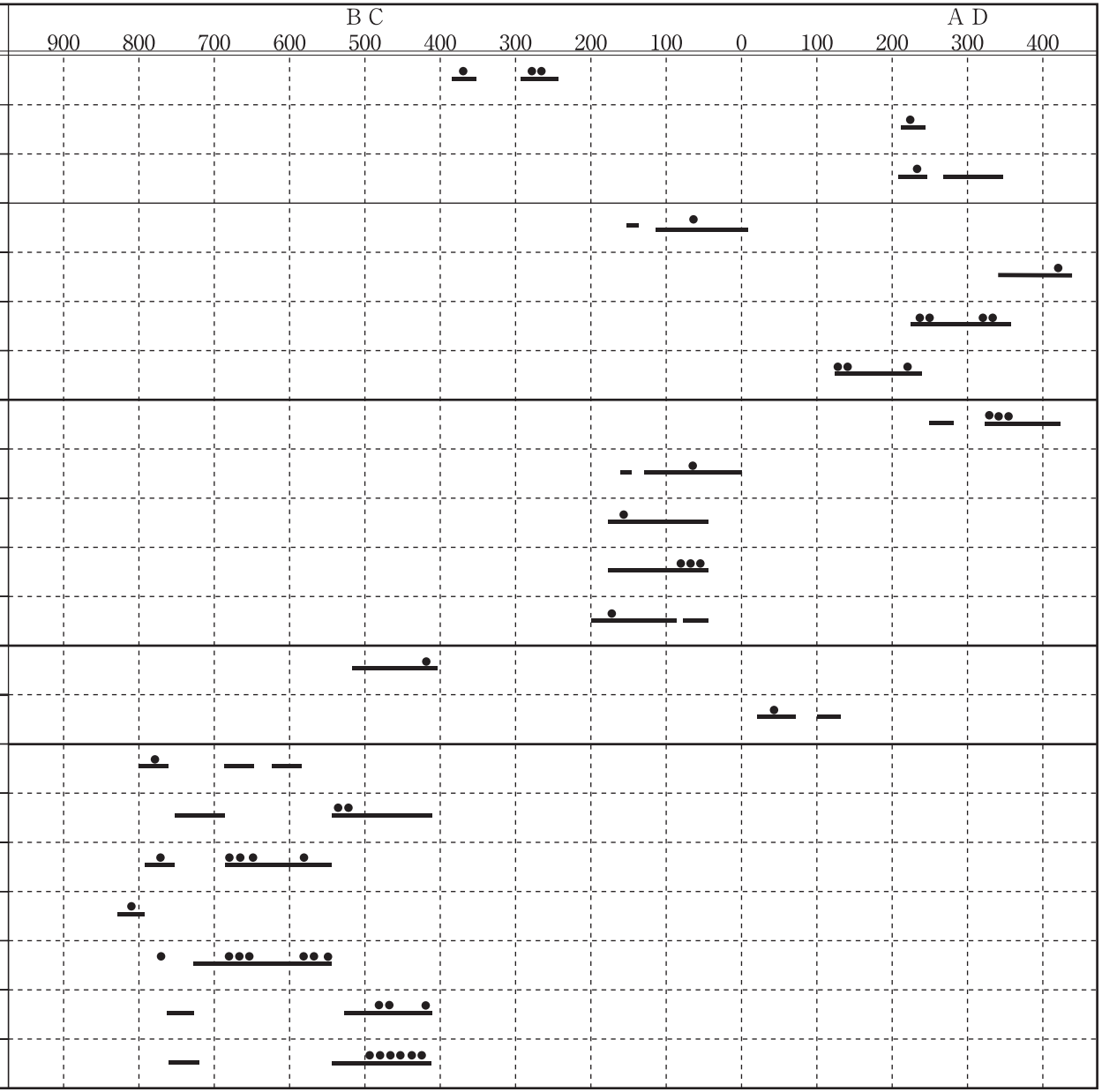


図2.　放射性炭素年代測定試料暦年代較正値と18暦年代範囲

試料No. （遺物No.）	種　類	機　種 採取部位	出土遺構
2279 992200087	土器 付着物	甕 口縁下･胴上半部外面	SD114
2280 992200089	土器 付着物	甕 口縁下･胴上半部外面	SD114
2281 992200097	土器 付着物	甕 口縁下･胴上半部外面	SD114
2282 992200102	土器 付着物	甕 口縁下外面	SD114
2283 992200113	土器 付着物	甕 口縁下･胴上半部外面	SD114
2284 992200114	土器 付着物	甕 口縁下･胴上半部外面	SD114
2285 992200118	土器 付着物	甕 口縁下･胴上半部外面	SD114
2286 992200119	土器 付着物	甕 口縁下･胴上半部外面	SD114
2287 992200120	土器 付着物	甕 口縁下･胴上半部外面	SD114
2288 992200123	土器 付着物	甕 口縁下･胴上半部外面	SD114
2289 992200124	土器 付着物	甕 口縁下外面	SD114
2290 992200133	土器 付着物	甕 口縁下外面	SD114
2291 992200135	土器 付着物	甕 口縁下外面	SD114
2292 992200152	土器 付着物	甕 口縁下･胴上半部外面	SD114
2293 992200204	土器 付着物	甕 胴部下半外面	SD114
2294 992200210	土器 付着物	甕 胴部下半外面	SD114
2300 982800099	土器 付着物	甕 口縁下外面	SD114
2301 992200106	土器 付着物	甕 口縁下外面	SD114
2302 992200107	土器 付着物	甕 口縁下外面	SD114
2303 992200108	土器 付着物	甕 口縁下外面	SD114
2304 992200393	土器 付着物	甕 口縁下外面	SD114

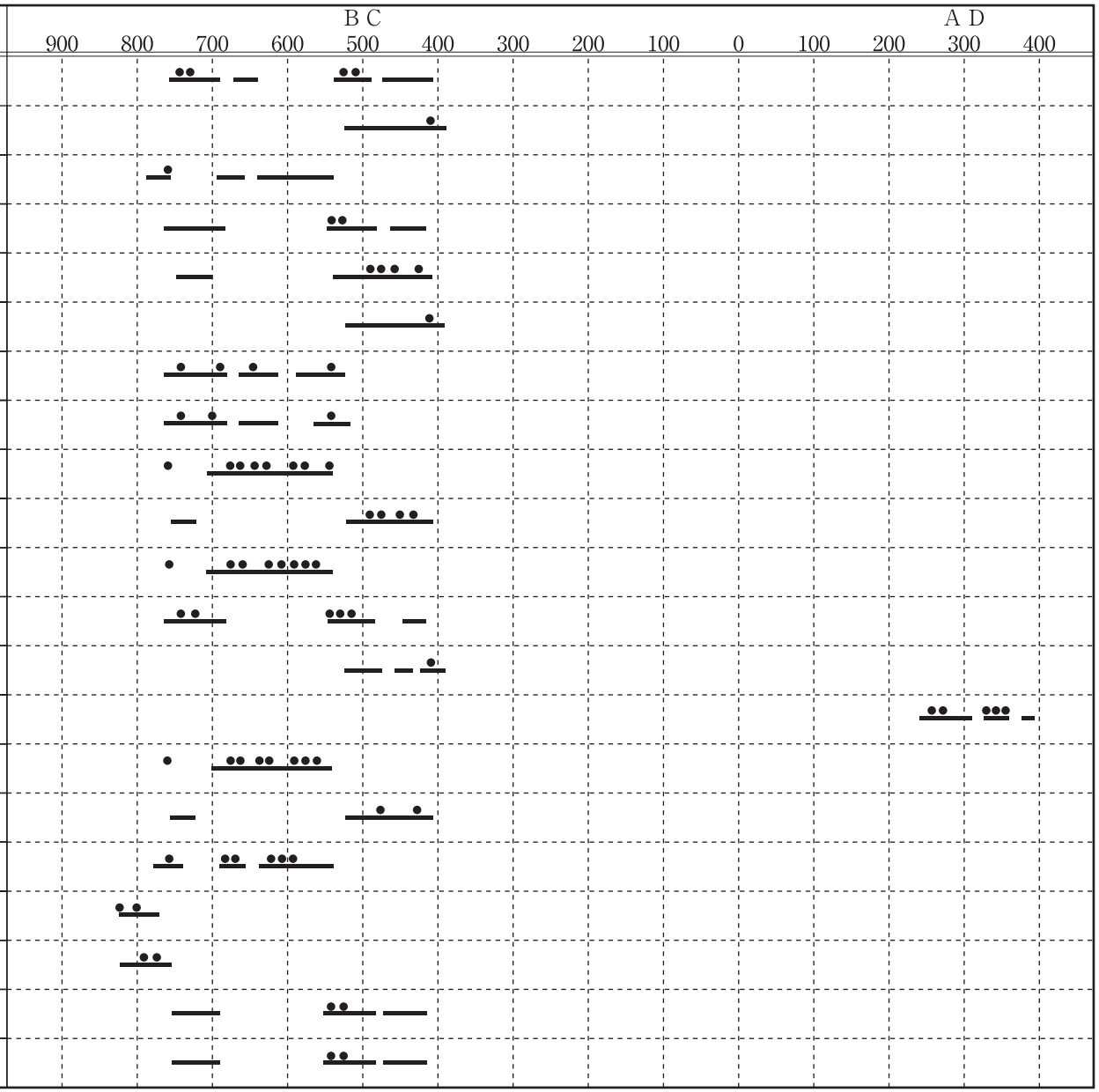


図3.　放射性炭素年代測定試料暦年代較正値と18暦年代範囲

試料No. （遺物No.）	種　類	機　種 採取部位	出土遺構
2305 992200403	土器 付着物	甕 口縁下外面	SD114
2306 992200419	土器 付着物	甕 口縁下外面	SD114
1165 9828	炭化材		SD114
1166 9828	炭化材		SD114
1167 9828	木　片		SD114
1168 9828	木　片		SD114
1169 9828	木　片		SD114
1170 9828	木　片		SD114
1171 9828	木　片		SD114
1172 9828	炭化材		SD114
1173 9828	炭化材		SD114
1174 9828	炭化材		SD114
1175 9828	炭化材		SD114
1176 9828	木　片		SD114
1177 9828	木片		SD114
1178 9828	木　片		SD114
1179 9828	木　片		SD114
2269 982800513	土器 付着物	甕 口縁下･胴上半部外面	SD116
2270 982800514	土器 付着物	甕 口縁下･胴上半部外面	SD116
1180 9922	木　片		SD119
1181 9922	木　片		SD119

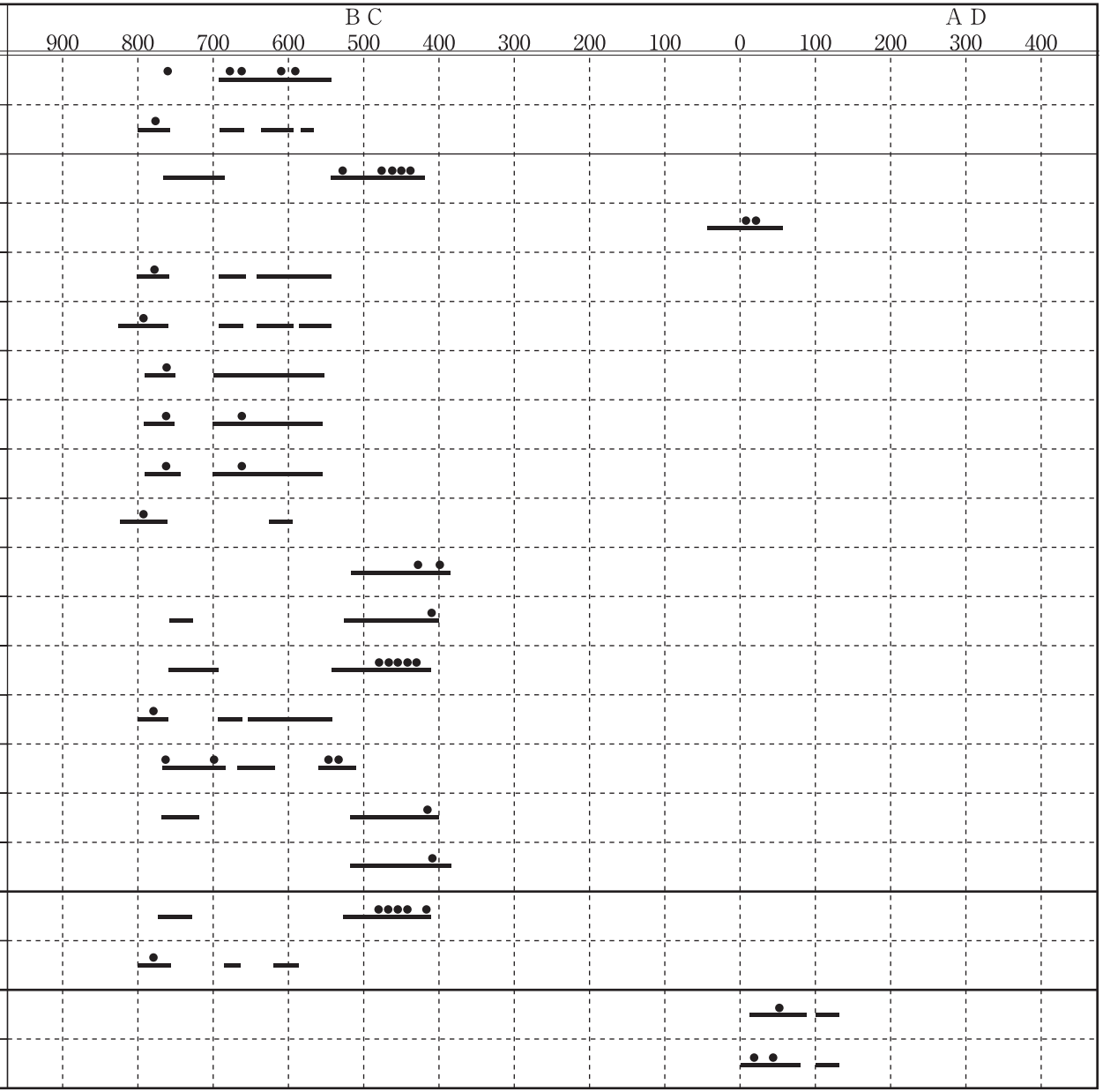
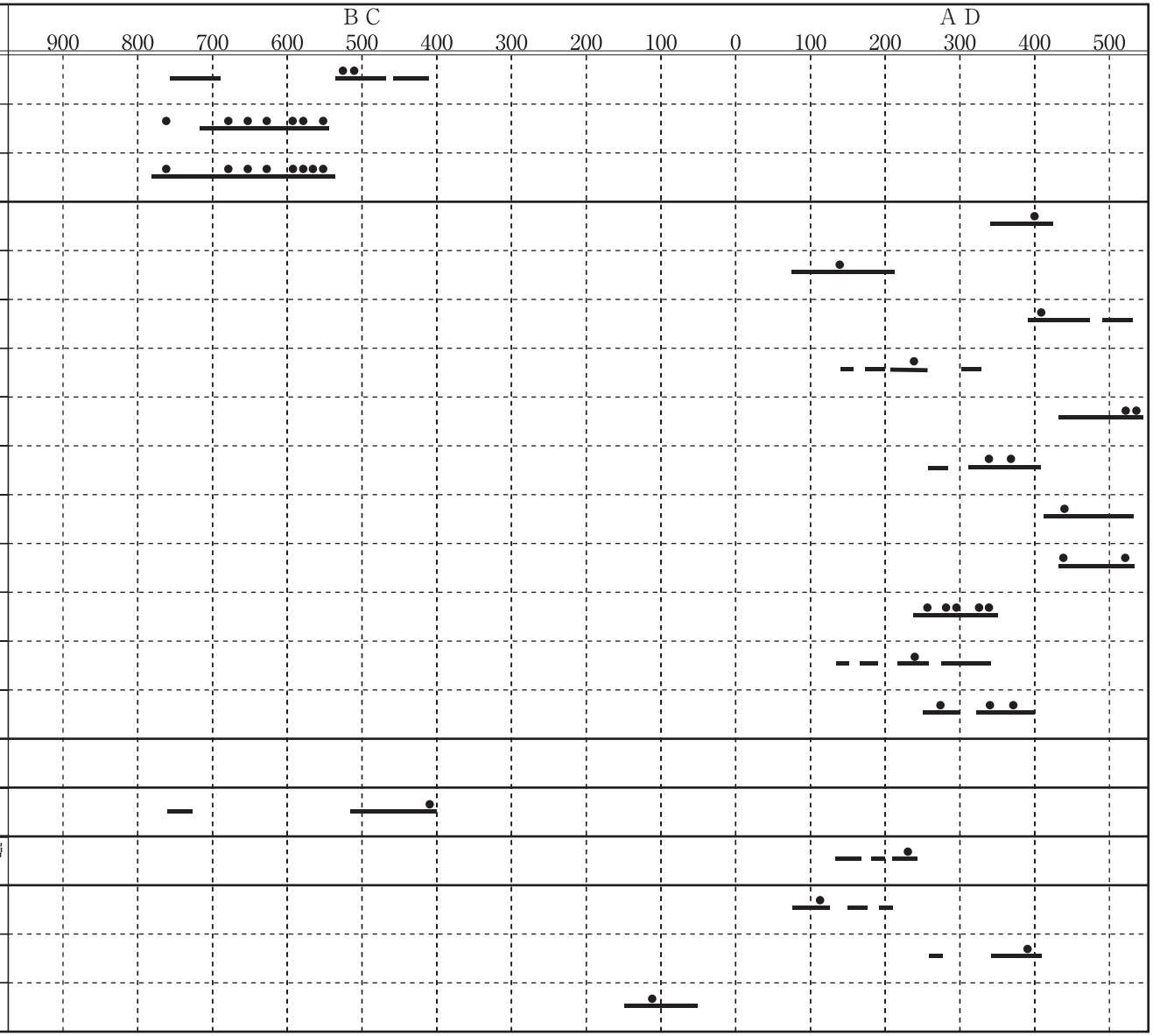


図4.　放射性炭素年代測定試料暦年代較正値と18暦年代範囲

試料No.（遺物No.）	種　類	機　種 採取部位	出土遺構
2295 992200247	土器付着物	甕 口縁下･胴上半部外面	SD256
2296 992200249	土器付着物	甕 口縁下･胴上半部外面	SD256
2307 992200246	土器付着物	甕 口縁下･胴上半部外面	SD256
2271 982800620	土器付着物	甕 胴央部外面	SE120
1182 9828	炭化材		SE120
1183 9828	炭化材		SE120
1184 9828	炭化材		SE120
1185 9828	木片		SE120
1186 9828	木片		SE120
1187 9828	木片		SE120
1188 9828	木片		SE120
1189 9828	木片		SE120
1190 9828	木片		SE120
1191 9828	木片		SE120
2276 992200026	土器付着物	甕 口縁下外面	SD166
2277 9922000278	土器付着物	甕 口縁下･胴上半部外面	SD244
2272 982800820	土器付着物	壷 胴央部外面	黒色粘質土層
※ 2297 023900041	土器付着物	甕 口縁下外面	SD06
※ 2298 023900042	土器付着物	甕 口縁下外面	SD06
※ 2309 023900080	土器付着物	甕 胴部下半外面	SD12



※試料番号2297・2298・2309は比恵遺跡第81次調査出土試料。その他は全て下月隈C遺跡第4・5次調査出土試料。

第Ⅳ章　付　論

1．下月隈Ｃ遺跡出土鼠返材の建築

2．下月隈Ｃ遺跡出土建築材

1．下月隈Ｃ遺跡出土鼠返材の建築

東北芸術工科大学　　宮本長二郎

下月隈Ｃ遺跡の出土材は、鼠返盤と横架材を一木で造り出した形状を持ち、一端部が折損している。鼠返盤は方形の薄い板の上面中央部を厚くして中央に貫通孔のある弥生時代の鼠返盤の特徴を持つが、弥生時代の他の出土例と異なる点は、中央突起部が長方形でほぼ垂直に近い形に造り出し、中央貫通孔が正方形で大きいことである。しかも、この長方形突起部の一方の短辺側から突起上面と鼠返盤下面に揃えて鼠返盤角材と連結する形に一木で造り出している。

この材の一端部は打損しているが、左右同形材であるとすれば、弥生時代に一般的な鼠返盤付き梁間一間型高床建築の二つの鼠返盤を梁行方向に繋ぐ、鼠返盤付き横架材が新たに付加された形式となる。

鼠返盤中央に長方形孔のある形式は、静岡県登呂遺跡に復元されているように、鼠返盤上に重ねて、桁行方向の台輪を下材に、梁間の台輪を上材にして相欠に組合わせ、鼠返盤と台輪を造出柱で貫き通して井籠組板倉とする。いわゆる造出柱式高床建築である。

この登呂型の造出柱式高床建築は、台輪が薄いために梁間の広い高床建築には不適格で、梁間２ｍ前後の小型倉庫に利用された形式であり、大形倉庫には吉野ヶ里遺跡で復元された大引貫式や際東式を採用したと考えられる。

本例の場合は、現存長さ273cmであり、復元梁間は図のように3m程と考えられることから、在来形式の造出柱式では穀倉としての重い荷重を支えるために、台輪の下面に材を補足して補強する必要があり、この点が新形式を生じた一つの理由である。

次に弥生時代後期後葉から古墳時代にかけての鼠返材の中央孔は、造出柱式の長方形孔は衰退して、正方形孔となる傾向が認められる。この変化は、高床建築の床下部柱を円柱、床上部柱を面取角柱として、角柱下端に角 枘を造り出して台輪・鼠返盤を貫通して円柱の角枘穴に固定する新形式に変ったことが、同時代の出土台輪材等から実証することができ、この新形式を採用していることが認められる。

弥生時代後期には総柱型と称する新形式の高床建築が拠点集落を中心に普及しはじめ、古墳時代には主流となる。この総柱型高床建築には側柱を通し柱とする形式と、束柱上に台輪を組み、台輪上に校木を組む校倉式と角柱を立てて土壁または板壁とする角柱式がある。

総柱型高床建築の鼠返しは、現存する奈良時代の校倉や家形埴輪にみられるように断面へ字型の台輪がその役割をもち、盤状のものはなかったと考えられる。したがって、上記のような弥生時代後期以後の鼠返盤付き高床建築の変化は角柱式総柱型高床建築の出現期と一致し、その影響を受けて在来形式の高床建築を改良したものとすることができる。

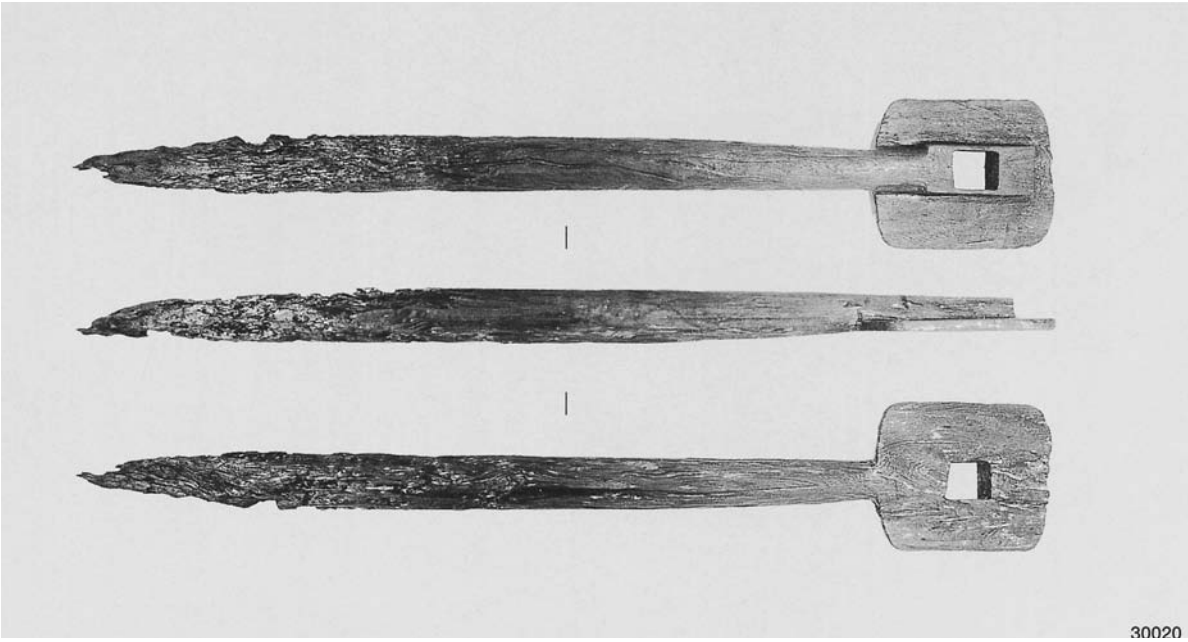
鼠返盤の厚さ（突起部含む）は9cm、繋材中央部の高さ12cmで、その差4cmは鼠返し突起部から繋材中央部にかけて繋材上面を盛り上げている。この盛上高を台輪相欠部分の喰違高さとすると、３分の１相欠きの場合は台輪厚さは12cmとなる。台輪巾は鼠返突起部の長辺と同寸の30cmとして復元すると図のようになる。

梁間１間型高床建築の柱間は梁間が広く、桁行が狭いのが通例であり、鼠返間の繋材は梁間に架け渡して中央部で梁行台輪と接し、台輪とともに加重を受ける補強材となっている。

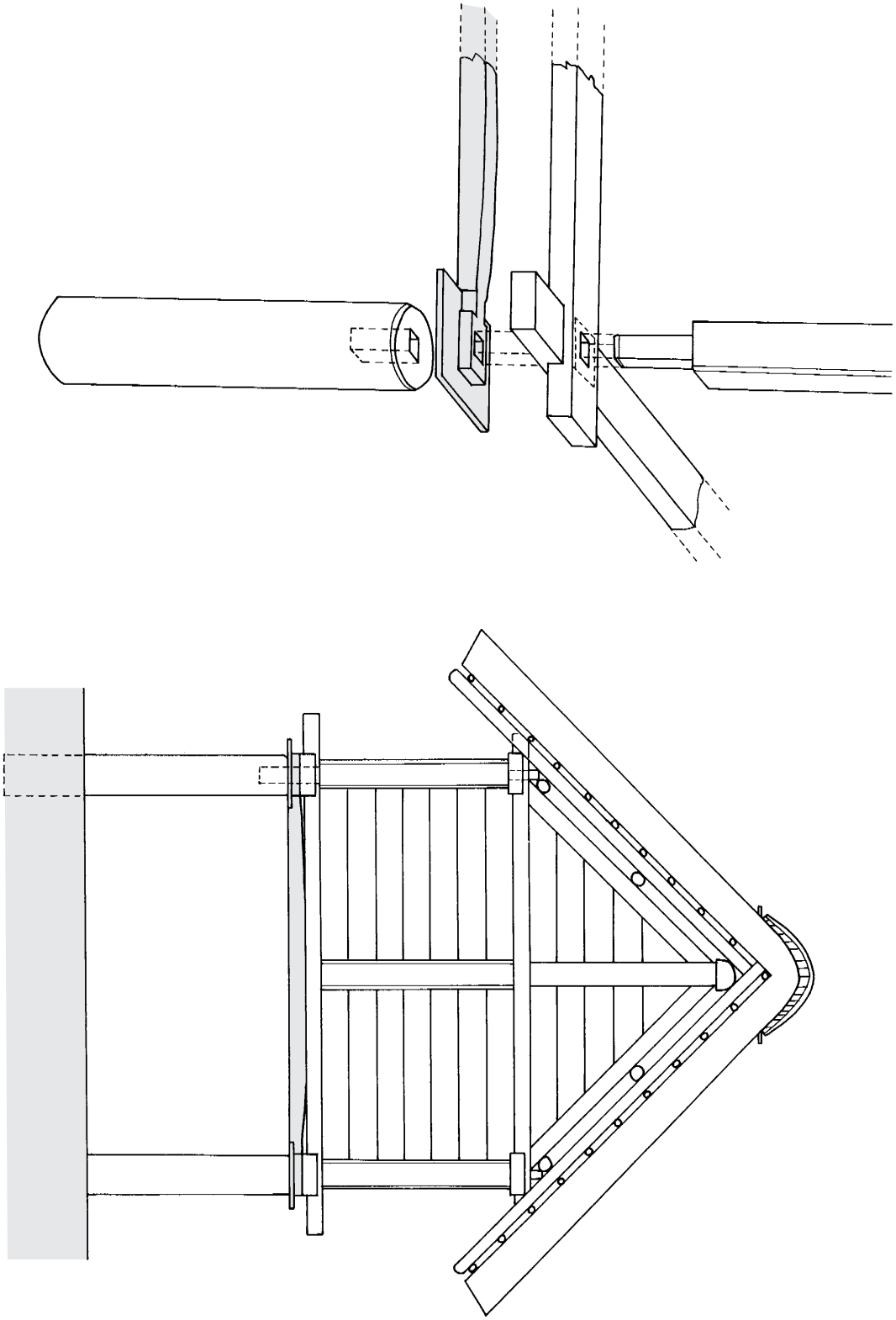
このように台輪を補強する方法としては、在来形式では側柱よりも細い束を中央に立てる形式が発掘遺構で確認されているが、床下に束を立てるのを嫌って本例のような形式が発生したものと思われる。

しかし、この方法では加工に手間がかかること、木材のロスが多すぎることなどから普及したとは考え難いが、アイデアとしては合理的で、丁寧な仕上がりからみて、高度な技術的な背景が読みとれる。

鼠返盤付建築材出土状況（下月隈C遺跡第4次調査）



鼠返盤付建築材（下月隈C遺跡）



鼠返盤付繋材使用高床建築復元図

2．下月隈C遺跡出土建築材

東北芸術工科大学　　宮本長二郎

下月隈C遺跡から出土した繋材付き鼠返盤（A材）と柱材（B材）は、ともに弥生時代後期で同時期の2種類の高床建築が想定される。両形式とも弥生時代に普及する梁間1間型高床建築であるが、これまで明らかになっている形式とは異なる新しい試みがみられる点で共通する。

A　材

弥生時代の高床倉庫に多く使用される造出柱式高床建築の鼠返盤は上面に突起部があり、その中央に床下部円柱から造り出したごひら五平柱（断面長方形）を貫き通す長方形孔を穿っているのが特徴である。その構造は静岡県登呂遺跡で復原されているように、五平柱に鼠返盤と梁行台輪・桁行台輪を順次柱頭部から落し込んで床を受ける形式である。

弥生時代後期後半には鼠返盤中央孔は五平形長方形から方形に変化したものと、突起部がなく方形孔や円形孔をもつ形式の鼠返盤が出現し、後者が古墳時代に引継がれる。この方形孔は静岡県瀬名遺跡出土の鼠返盤の突起部に残る痕跡から床上部の柱は角柱であることが分かり、したがって方形孔は造出柱ではなく、角柱下端部に造出された角枘を受けるための孔で、角枘は鼠返盤を貫いて下方の円柱頭部の孔に挿入して固定する形式が推定される。

法隆寺綱封蔵（平安前期）は礎石建て総柱型高床建築の双倉で、束柱（円柱）上に台輪を組み、台輪上に面取角柱を立てる形式である。角柱下端は台輪上面に浅く枘差しとして、台輪を貫通す形式ではないが、これは礎石建ての柔構造に適応し、束柱が掘立柱の場合には上層の角柱は下層の円束柱と長枘で連結して固定する剛構造に適応した形式として、弥生時代後期に発生したと考えられる。

弥生時代後期の環濠集落遺跡である佐賀県吉野ヶ里遺跡、福岡県平塚川添遺跡、鳥取県妻木晩田遺跡、滋賀県伊勢遺跡には総柱型高床建築が従来の梁間1間型に代って祭殿に採用され、古墳時代以後には総柱型高床建築は全国的に普及する。したがって、弥生時代後期後半の時期は梁間1間型高床建築が主流ではあるが、新様式の総柱型高床建築の出現期に当り、A材の角枘穴や繋材はこの新様式の影響が梁間1間型高床建築に及んだものとすることができる。

B　材

B材は、いわゆる造出柱とする点で、造出柱式の梁間1間型高床建築の新種とすべきものであるが、造出柱の断面（11×8㎝）は方形に近くなり、長辺側には円柱頭部から4㎝の間隔を置いて14×5㎝の貫穴を穿っている点で登呂型の造出柱式とは異なっている。

この4㎝の間隔は鼠返盤の厚さを示し、その薄いことからみて、突起部のない鼠返盤を造出柱頭部から落し込んで受ける形式であることが明らかである。また、鼠返盤上に接する形で造出柱側面に穿つ長方形孔は梁間方向の大引材との仕口であり、登呂型の台輪形式でなく大引貫で床を受ける形式を示している。

梁間1間型の在来形式の一つに大引貫式があり、この形式は吉野ヶ里遺跡の高床倉庫に復原されているように、側柱の円柱に貫穴を穿って大引を梁行に架け渡し、大引上に根太を配って床を張る形式である。この大引は仕口穴と同じ縦長の長方形断面材とする形式と丸太材の大引両端を枘差しとする形式の2通りが考えられるが、復原図では前者を採用した。

B材の造出柱の断面形は登呂型の五平柱でもなく、またA材で想定される角柱でもなくその中間の

形状を示している。五平柱の断面は長辺の半分を短辺とする形式であるが、大引仕口穴部分の強度を保つために短辺側の幅を拡げ、登呂型の伝統形式に倣って長方形断面としたものと考えられる。また、この造出柱には側面に壁仕口の痕跡が認められないことから、壁体は登呂遺跡と同様の井籠組板壁であったと考えられる。

なお、Ｂ材の類似例に吉野ヶ里遺跡出土円柱材（弥生時代後期）がある。この円柱材も造出柱式であるが、床下部円柱よりも造出部は2㎝細い円柱とし、鼠返盤の間隔をあけて大引仕口穴がある形式である。したがって、Ｂ材とは造出柱の断面形式を異にするのみであるが、造出柱は床下部より側廻りを僅か1㎝細めただけであることから、鼠返盤を柱頭部から落し込みとする以外は大引貫式高床建築そのもであると言える。大引仕口穴から上部は折損しているために壁体形式は分からないが、井籠組板壁でないことは明らかで、横板壁または草壁等の真壁形式が想定される。なお、同遺跡からは突起部がなく、中央に大円孔のある鼠返盤が出土しており、上記柱材とは別建物の鼠返盤であるが、上記の構造を立証している。

以上のように、北九州地方には、弥生時代後期の３種類の異なる新形式の高床建築部材が発見された。

下月隈Ｃ遺跡出土のＡ・Ｂ材から復原される高床建築はいずれも登呂型の造出柱式からの変化形で、Ａ材は当時の新様式である総柱型高床建築の下層円柱上に台輪を組んで上層角柱の枘で台輪と円柱を連結し固定する方法を採用したと考えられるが、問題点は、鼠返盤を台輪の下に組込む造出柱式の方法を継承している点である。総柱型の場合は家形埴輪に表現され、現存する奈良時代の校倉造倉庫の例にみるように台輪が鼠返を兼ねる形式であり、台輪下面の下層円柱間を頭貫で繋いで台輪を補強する構造である。

しかし、束柱の円柱上と台輪間に鼠返盤が挿入されるとこの頭貫は補強材としての役に立たず、頭貫に替わるものとして鼠返盤間を一木で繋ぐＡ材の形式が考案されたものと考えられる。この形式は、木材利用効率の悪さと加工手間からみて普及しなかったと思われるが、静岡県瀬名遺跡出土鼠返盤から想定される形式では、台輪を用いずに上層角柱間に敷居を用いる形式など、種々の試みが弥生時代後期後半期にみられ、当時の新様式である総柱型の影響を受けて在来形式の梁間１間型高床倉庫の構造形式が次代の古墳時代に向かって変化する過渡期を示す形式と言える。

下月隈Ｃ遺跡出土Ｂ材は、Ａ材が新様式の影響を受けているのに対して、在来形式の登呂型造出柱式の形式を引き継ぐ。その欠点である梁間の狭い、小規模な高床倉庫に適した造出柱式に、大形高床建築に採用され大引貫式の構造を採り入れて倉庫大型化の時代的要求に対応した発展形式であると言える。

吉野ヶ里遺跡出土柱材もまた、在来形式の造出柱式と大引貫式の複合形式であるが、形式的には造出柱式であるが、機能的には大引貫式である点がＢ材とは大きく異なる。

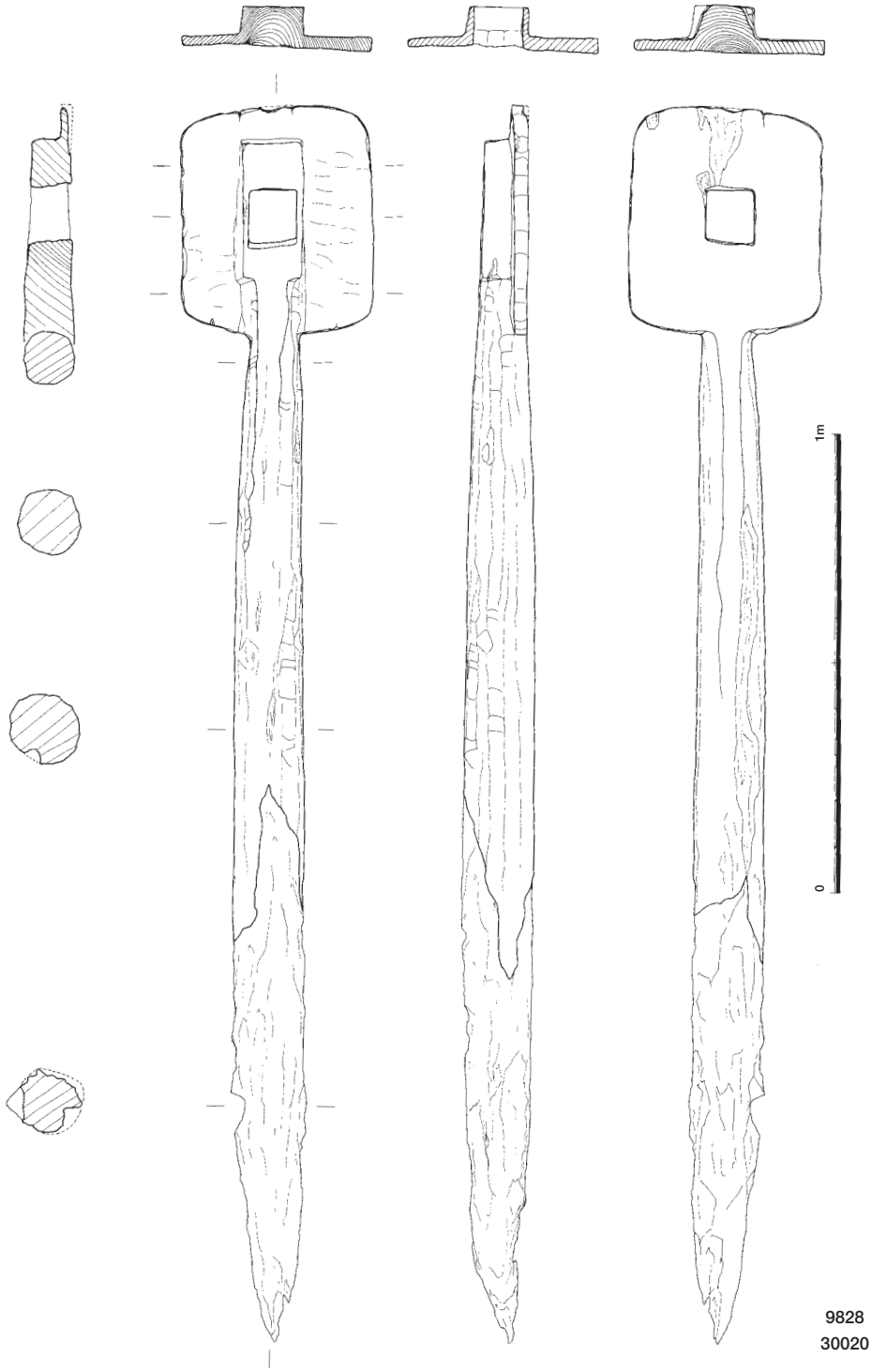
大引貫式梁間１間型高床建築は鼠返盤を付けない形式のため、米倉以外の倉庫や祭殿などに利用され、大量の加重に耐える大形高床建築に適した構造をもっている。

弥生時代後期には水田開拓が進み、多量の米を収納する鼠返し付きの高床倉庫が要求された時代的背景があり、このような要求に適った新様式の総柱型高床建築は、先ず祭殿建築として採用されるが、米倉としては在来形式の梁間１間型高床倉庫に影響を及ぼして下月隈Ｃ遺跡出土Ａ材で復原される新形式が発生し、同遺跡のＢ材や吉野ヶ里遺跡出土柱材のような在来形式の折衷形式を発生させたと考えられる。

このような梁間１間型高床倉庫は古墳時代以後にもさらに改良されて一般集落に存続されたものと

考えられるが、古墳時代中期以後には鼠返盤は衰退して、断面ヘ字形の台輪型鼠返付き総柱型高床倉庫が普及したものと考えられる。

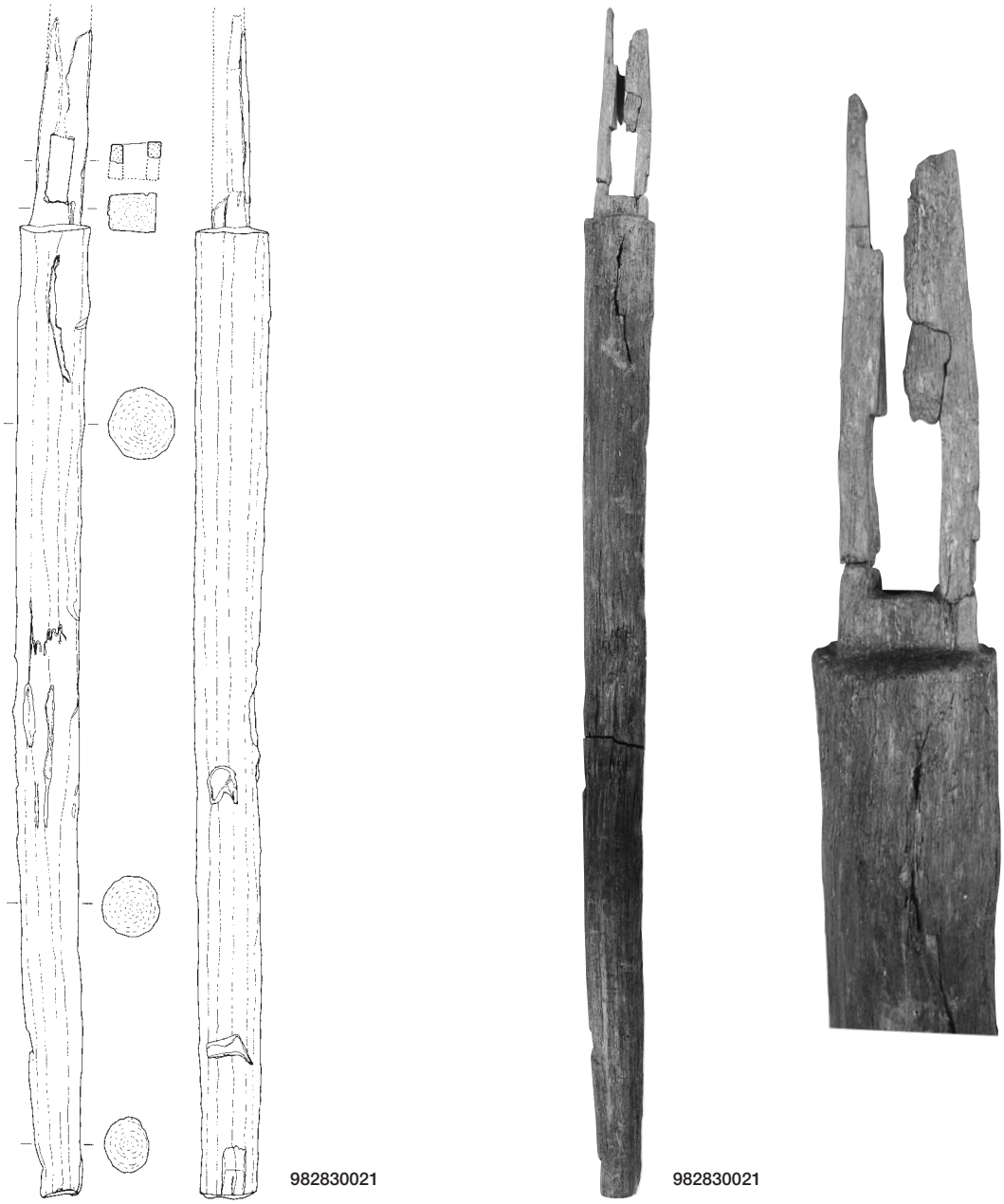
以上のように、北九州地方の弥生時代後期の新形式の高床倉庫建築部材の発見は、弥生時代から古墳時代への高床建築の構造的発展の過渡期、変革期を示す資料であるとともに、当時の国際交流や社会的発展を窺わせる極めて興味深い貴重な資料である。



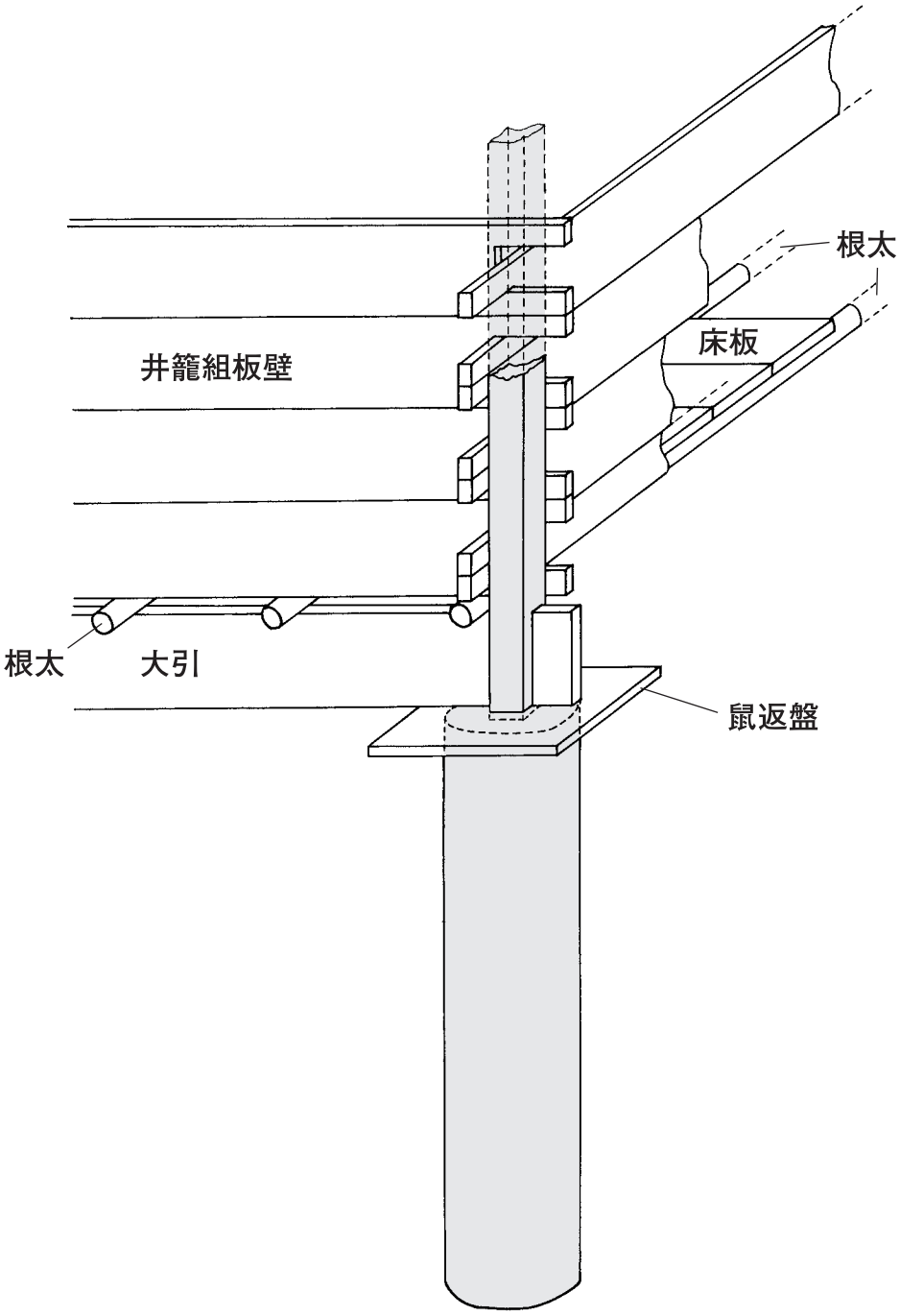
繋材付鼠返盤：A材（下月隈C遺跡第4次調査出土）

982830020

繋材付鼠返盤：A材（下月隈C遺跡第4次調査出土）



造出性：B材（下月隈C遺跡第4次調査出土）



下月隈C遺跡B材軸部復元模式図

第Ⅶ章　小　結

御笠川の沖積作用によって形成された月隈・平尾丘陵と春日丘陵との間の低地、特に本調査地を含む福岡空港および周辺地域における遺跡については、近年の各種開発事業に伴う発掘調査によってその姿が明らかになりつつある。今回の調査においても、この低湿地上に点在する微高地を拠点として弥生時代の早い段階から人々が生活の場をこの低地に築いていたことや、その範囲が広範囲であることが本調査地に南接する第４次調査および本調査地の北に位置する雀居遺跡の調査成果と併せて知ることとなった。しかしながら、本調査は空港南側周辺整備事業に伴う調査計画の２年次で、第４次調査成果の検証の域を出るものではなく、下月隈Ｃ遺跡の全容解明には至っていないのも事実である。このため、本章では調査成果の概要と課題を述べ、今度につづく調査報告の検討資料としたい。

1. 遺跡の変遷

本地における時代的変遷は、第４次調査報告（下月隈Ｃ遺跡Ⅲ 福岡市埋蔵文化財調査報告書第750集）と基本的に変わってはいない。加えるならば、①明確な遺構の検出には至らなかったが、出土遺物などから弥生時代前期の集落が極めて近辺において存在する確証を強めた。②古墳時代後期には大規模な水田が展開している。③調査区北西隅の河川の氾濫によって平安時代前半期には水田が流出した可能性が高い。④12～14世紀の集落の範囲が想定よりもより北側に広がっている。

2. 水田遺構と条理制について

第５次調査では奈良時代～平安時代前期と推定される水田（SX183）を検出した。この水田における大畦畔が条里制における坪を画すものであることは第５・６次調査の結果である、一坪の長さが109mであることや畦畔の方向が真北より35°45′～36°00′西偏（磁北より29°45′～30°00′西偏）し周辺の方向とほぼ合致することなどから明白である。さらにFig.11に示したように10.9m（６歩）単位の線上近くに坪を細分した小畦畔が位置するものの、その大多数はずれていることから土地所有や土地利用における時期を示していると云えよう。

3. 出土遺物と放射性炭素暦年代測定結果について

第４次調査につづき、第５次調査でも土器に付着している煤（スス）を試料主体とした分析を委託した。その結果については第Ⅴ章で報告したとおりである。弥生時代前期のデーターを見るとこれまで言われてきた年代より古い数値を示しているのも事実であり、ひとつの試料において数値に幅があるのも事実である。本データーについては関係者に情報を提供するにとどまり、その手法や結果については将来に託したい。なお、私見ながら年代決定を知る手段において、その確実性から年輪年代の活用も併せて推進するべきと考える。現状として各地域における年輪年代測定の各種基本データーを増やす必要性を認識し、問題意識を持ちながら情報を提供・共有することを提案したい。

奈良時代末～平安時代前半

古墳時代後半期

弥生時代後期～古墳時代初頭

Fig.123　下月隈C遺跡第4・5次調査における遺構の変遷

報告書抄録

書名ふりがな	しもつきぐましいいせき　Ⅳ		
書名	下月隈C遺跡　Ⅳ		
副書名	福岡空港周辺整備工事に伴う下月隈C遺跡第5次発掘調査報告　本文編		
巻次	Ⅳ		
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書		
シリーズ番号	795		
編者名	瀧本正志		
著者名	鈴木茂・瀧本正志・新山雅弘・宮本長二郎・山形秀樹・山口譲治・吉留秀敏・(株)古環境研究所		
編集機関	福岡市教育委員会（埋蔵文化財課）		
発行機関	福岡市教育委員会		
機関所在地	〒810-8621　福岡県福岡市中央区天神1丁目8番1号		
発行年月日	20040331		
遺跡名ふりがな	しもつきぐましいいせき		
遺跡名	下月隈C遺跡	北緯(日本測地系)	333402
所在地ふりがな	ふくおかけんふくおかしはかたくつきぐま	東経(日本測地系)	1302747
遺跡所在地	福岡県福岡市博多区月隈4丁目	北緯(世界測地系)	333413
市町村コード	40135	東経(世界測地系)	1302738
遺跡番号	022625	調査期間	19990405～20000325
調査原因	調整池工事	調査面積	10,000㎡
種別	集落　条里　水田　河川		
主な時代	弥生時代　古墳時代　奈良時代～中世		
主な遺構	井戸・土壙・柵列・杭列・河川・溝・堰・水田		
主な遺物	弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器・貨泉・土製品・石製品・木製品・建築部材		
特記事項	条里坪・弥生時代初頭土器年代測定		

下月隈Ｃ遺跡
Ⅳ
―本文編―
福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書
〈第795集〉

編集・発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8－1
平成16年3月31日
☎092（711）4667

印刷　祥文社印刷株式会社
福岡市博多区博多駅南4－15－17

SHIMOTSUKIGUMA－C　SITE

THE REPORT OF THE 5TH ARCHAEOLOGICAL EXACAVATIONS
OF THE SHIMOTSUKIGUMA-C SITE
IN FUKUOKA, JAPAN

March 2004
THE BOARD OF EDUCATION OF FUKUOKA CITY